

一般国道
10号線 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

上唐原遺跡

I

福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査1

1995

福岡県教育委員会

一般国道
10号線

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

上唐原遺跡

I

福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査1



上唐原遺跡と山国川



遺物出土の状況

序

福岡県教育委員会は、建設省北九州工事事務所の委託を受けて、一般国道10号線豊前バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年度以降実施してまいりました。

豊前バイパス関係の現地での発掘調査は平成6年度に無事完了しましたが、本書での報告は、このうち昭和62年度から63年度にかけて実施し、すでに開通して一般供与されている部分の、築上郡大平村大字上唐原所在の上唐原遺跡の発掘調査についてのものです。

発掘調査の記録としては、すべてを網羅できるものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた建設省北九州工事事務所、大平村教育委員会、地元の方々をはじめ関係各位に、深く感謝いたします。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省北九州国道事務所から委託を受けて、昭和62年度から63年度に発掘調査を行った、築上郡大平村に所在する上唐原遺跡についての調査結果の一部を「一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第2集として取りまとめたものである。
2. 出土遺物は、県教育庁文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
3. 出土灰の灰像法分析は東京大学総合資料館の松谷暁子研究員に、出土植物種子は名古屋大学文学部の渡辺誠教授にそれぞれ分析を依頼し、分析結果を得た。
4. 掲載写真のうち、遺構写真は小池史哲が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋および北岡伸二の協力を得た。なお、空中写真は高所作業車上より小池が撮影したものと、(有)空中写真企画に撮影委託したのものがある。
5. 挿図のうち、遺構実測図は調査担当の副島邦弘と小池、中美浩、有島聖一、植田由美、西田大輔が実測し、遺物実測図は、小池と、平田・若松美枝子・岡由美子・田中典子・堀江圭子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子が実測した。また図面の浄書には豊福・原カヨ子の助力を得た。
6. 挿図で使用する方位は、座標北に統一している。
7. 本書の執筆分担は、IVを渡辺誠が執筆した以外は、執筆・編集を小池史哲が担当した。

本文目次

かみとうばる 上唐原遺跡の調査 I

I	調査の経過	1
II	遺跡の位置と環境	9
III	遺構と遺物	16
1.	住居跡	16
2.	掘立柱建物跡	153
3.	土 壙	161
4.	甕棺墓	177
5.	溝状遺構	179
6.	その他の遺構と遺物	204
7.	包含層出土の遺物	219
IV	福岡県大平村上唐原遺跡出土の植物遺体	239
V	おわりに	245

図 版 目 次

巻頭図版 1 上唐原遺跡と山国川

2 遺物出土の状況

本文対照頁

図版 1	上唐原遺跡周辺航空写真 (国土地理院提供、KU-92-2XC5-11)	1
2	上唐原遺跡全景空中写真 (東上空から)	9
3	上唐原遺跡全景空中写真 (西上空から)	9
4-1	上唐原遺跡東半部全景空中写真 (西上空から)	15
-2	東半部全景 (南上空から)	15
5-1	1~4・8号住居跡 (上空から)	16
-2	1号住居跡 (上空から)	17
6-1	1号住居跡 (北西から)	17
-2	1号住居跡遺物出土状況	17
7-1	2号住居跡 (上空から)	20
-2	2号住居跡遺物出土状況	21
8-1	完掘後の2号住居跡 (北東から)	21
-2	3号住居跡 (北東から)	23
9-1	4号住居跡 (北から)	26
-2	4号住居跡遺物出土状況	26
-3	4号住居跡鉄製品出土状況	26
10-1	5号住居跡 (南東から)	29
-2	5号住居跡遺物出土状況	29
11-1	6号住居跡 (南から)	34
-2	6号住居跡遺物出土状況	34
-3	6号住居跡遺物出土状況	34
12-1	7号住居跡 (南から)	37
-2	8号住居跡 (東から)	40
13-1	8号住居跡 (北西から)	40
-2	8号住居跡遺物出土状況	40
13-3	8号住居跡遺物出土状況	40
14-1	9~12・19~22号住居跡 (上空から)	45

14-2	10号住居跡ピット内遺物出土状況	48
-3	22号住居跡ピット内遺物出土状況	77
-4	22号住居跡遺物出土状況	77
-5	22号住居跡遺物出土状況	77
15-1	13号住居跡(北西から)	53
-2	13号住居跡遺物出土状況	53
-3	14号住居跡(南東から)	55
16-1	16号住居跡(東から)	58
-2	18号住居跡(南東から)	59
-3	19号住居跡(北東から)	61
17-1	20~23号住居跡(上空から)	64
-2	21号住居跡(北西から)	65
18-1	21号住居跡遺物出土状況	65
-2	21号住居跡遺物出土状況	65
-3	21号住居跡遺物出土状況	65
-4	21号住居跡遺物出土状況	65
19-1	21号住居跡遺物出土状況	65
-2	21号住居跡遺物出土状況	65
-3	21号住居跡遺物出土状況	65
-4	21号住居跡遺物出土状況	65
20-1	23号住居跡(北東から)	83
-2	24号住居跡(北から)	84
21-1	25号住居跡(北東から)	89
-2	25号住居跡遺物出土状況	89
-3	25号住居跡遺物出土状況	89
-4	25号住居跡遺物出土状況	89
22-1	25~28号住居跡(上空から)	89
-2	26号住居跡(北東から)	91
-3	26号住居跡カマド(南西から)	91
23-1	27号住居跡(北東から)	93
-2	28号住居跡(北から)	95
-3	28号住居跡遺物出土状況	95
24-1	29号住居跡(南から)	100

24-2	29号住居跡遺物出土状況	100
-3	31号住居跡 (南東から)	105
25-1	33~44号住居跡 (上空から)	108
-2	33号住居跡 (北東から)	108
26-1	34号住居跡 (南から)	112
-2	35号住居跡 (南西から)	116
27-1	36号住居跡遺物出土状況	116
-2	34号住居跡遺物出土状況	112
-3	34号住居跡遺物出土状況	112
-4	34号住居跡遺物出土状況	112
-5	40号住居跡 (南西から)	129
28-1	41号住居跡 (北東から)	129
-2	41号住居跡カマド (北東から)	132
-3	42号住居跡 (北東から)	133
29-1	43号住居跡 (北東から)	136
-2	43号住居跡カマド (北東から)	136
30-1	44号住居跡 (南南東から)	138
-2	44号住居跡カマド (南南東から)	138
31-1	45号住居跡 (南南東から)	141
-2	45号住居跡カマド (南南東から)	141
32-1	46~48号住居跡 (東から)	143
-2	46号住居跡 (東から)	143
33-1	46号住居跡カマド (南から)	143
-2	47号住居跡 (東から)	144
-3	48号住居跡 (東から)	145
34-1	51号住居跡 (東北東から)	147
-2	51号住居跡 (北から)	147
-3	51号住居跡カマド (南から)	148
35-1	52号住居跡 (北東から)	148
-2	53号住居跡 (南から)	150
-3	54号住居跡 (南から)	150
36-1	55号住居跡 (南から)	152
-2	55号住居跡カマド部遺物出土状況	153

37	住居跡出土土器1	17
38	住居跡出土土器2	30
39	住居跡出土土器3	37
40	住居跡出土土器4	51
41	住居跡出土土器5	66
42	住居跡出土土器6	66
43	住居跡出土土器7	67
44	住居跡出土土器8	84
45	住居跡出土土器9	96
46	住居跡出土土器10	109
47	住居跡出土土器11	113
48	住居跡出土土器12	122
49	住居跡出土土器13・土製品・玉類	132
50	住居跡出土石器・石製品	23
51	住居跡出土鉄製品・土製品	23
52-1	1号建物跡(上空から)	153
-2	9号建物跡(上空から)	159
-3	8号建物跡(上空から)	158
53-1	11号土壙(東から)	165
-2	13号土壙(北から)	171
54-1	18号土壙(北西から)	173
-2	18号土壙遺物出土状況	173
-3	15号土壙(北東から)	173
55-1	19号土壙(西から)	175
-2	完掘後の19号土壙(北東から)	175
-3	19号土壙堅果類種子出土状況	175
56	土壙出土土器1	163
57	土壙出土土器2	165
58-1	甕棺墓(北から)	177
-2	甕棺墓(東から)	177
-3	甕棺使用土器	178
59-1	0区全景(西から)	179
-2	0区全景と1号溝(南から)	179

60-1	Ⅵ区全景と5～9号溝(南から)	195
-2	3・13・17号溝(上空から)	189
61-1	5号溝(北西から)	195
-2	6号溝(西から)	197
-3	10号溝(北から)	200
62	溝出土土器1	181
63	溝出土土器2	181
64	溝出土土器3	189
65-1	溝出土石器・鉄製品・土製品、土器溜り出土鉄製品	180
-2	柱穴状ピット出土土器	204
66-1	1号土器溜り	206
-2	2号土器溜り	210
-3	3号土器溜り	215
-4	3号土器溜り遺物出土状況	215
67	土器溜り出土土器1	206
68	土器溜り出土土器2	206
69	土器溜り出土土器3	215
70	包含層出土土器1	219
71	包含層出土土器2	219
72	包含層出土土製品・石器・鉄製品	234

挿 図 目 次

第1図	豊前バイパス路線図(1:500000、道路施設協会「九州自動車道」1993.10を改変)	1
第2図	豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡(1/20000)	3
第3図	上唐原遺跡地形図(1/2000)	折り込み
第4図	周辺の遺跡分布図(1/50000)	10
第5図	地区割図(1/1500)	14
第6図	遺構配置概略図(1/1200)	14
第7図	基本土層図(1/40)	15
第8図	1号住居跡実測図(1/60)	16
第9図	1号住居跡カマド実測図(1/30)	17

第10図	1号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	18
第11図	1号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	19
第12図	2号住居跡実測図 (1/60)	20
第13図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	21
第14図	2・3号住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第15図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	23
第16図	3・4号住居跡実測図 (1/60)	24
第17図	住居跡出土土製品実測図 (1/2・1/1)	25
第18図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第19図	住居跡出土鉄製品 (1/2)	28
第20図	5号住居跡実測図 (1/60)	30
第21図	5号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	31
第22図	5号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	32
第23図	6号住居跡実測図 (1/60)	33
第24図	6号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	35
第25図	6号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	36
第26図	7号住居跡実測図 (1/60)	37
第27図	7号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	38
第28図	7号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	39
第29図	8号住居跡実測図 (1/60)	41
第30図	8号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	42
第31図	8号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	43
第32図	住居跡出土石器実測図1 (1/2)	44
第33図	9号住居跡実測図 (1/60)	46
第34図	9・10号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	47
第35図	10・11号住居跡実測図 (1/60)	49
第36図	10号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	50
第37図	11・12号住居跡出土土器実測図 (1/3)	51
第38図	12号住居跡実測図 (1/60)	52
第39図	13号住居跡実測図 (1/60)	53
第40図	13・14・18号住居跡出土土器実測図 (1/3)	54
第41図	14号住居跡実測図 (1/60)	56
第42図	15号住居跡実測図 (1/60)	57

第43図	16・17号住居跡実測図 (1/60)	58
第44図	18号住居跡実測図 (1/60)	60
第45図	19号住居跡実測図 (1/60)	61
第46図	19号住居跡出土土器実測図 (1/3)	62
第47図	20号住居跡実測図 (1/60)	64
第48図	20号住居跡出土土器実測図 (1/3)	65
第49図	21号住居跡実測図 (1/60)	66
第50図	21号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	67
第51図	21号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	68
第52図	21号住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	69
第53図	21号住居跡出土土器実測図 4 (1/3)	71
第54図	21号住居跡出土土器実測図 5 (1/3)	72
第55図	21号住居跡出土土器実測図 6 (1/3)	73
第56図	21号住居跡出土土器実測図 7 (1/3)	76
第57図	22号住居跡実測図 (1/60)	78
第58図	22号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	80
第59図	22号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	81
第60図	23号住居跡実測図 (1/60)	82
第61図	23号住居跡出土土器実測図 (1/3)	83
第62図	24号住居跡実測図 (1/60)	85
第63図	24号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	86
第64図	24号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	87
第65図	25号住居跡実測図 (1/60)	88
第66図	25号住居跡出土土器実測図 (1/3)	89
第67図	26号住居跡実測図 (1/60)	90
第68図	26号住居跡カマド実測図 (1/30)	91
第69図	26号住居跡出土土器実測図 (1/3)	92
第70図	27号住居跡実測図 (1/60)	94
第71図	27号住居跡出土土器実測図 (1/3)	95
第72図	28号住居跡実測図 (1/60)	96
第73図	28号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	97
第74図	28号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	98
第75図	29号住居跡実測図 (1/60)	100

第76図	29・30号住居跡出土土器実測図 (1/3)	101
第77図	住居跡出土石器実測図2 (1/3・1/4)	102
第78図	30号住居跡実測図 (1/60)	103
第79図	31号住居跡実測図 (1/60)	104
第80図	31号住居跡出土土器実測図 (1/3)	106
第81図	32号住居跡実測図 (1/60)	106
第82図	住居跡出土石器実測図3 (1/3・1/4)	107
第83図	33号住居跡実測図 (1/60)	108
第84図	33号住居跡カマド実測図 (1/30)	109
第85図	33号住居跡出土土器実測図 (1/3)	110
第86図	住居跡出土玉類実測図 (1/1)	111
第87図	34号住居跡実測図 (1/60)	112
第88図	34号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	114
第89図	34号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	115
第90図	35・37号住居跡実測図 (1/60)	117
第91図	36号住居跡実測図 (1/60)	118
第92図	36～38号住居跡出土土器実測図 (1/3)	120
第93図	39・40号住居跡実測図 (1/60)	123
第94図	39号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	124
第95図	39号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	125
第96図	39号住居跡出土土器実測図3 (1/3)	127
第97図	40・41号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	130
第98図	41・42号住居跡実測図 (1/60)	131
第99図	41号住居跡カマド実測図 (1/30)	132
第100図	41号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	133
第101図	42・43号住居跡出土土器実測図 (1/3)	134
第102図	43号住居跡実測図 (1/60)	135
第103図	43号住居跡カマド実測図 (1/30)	136
第104図	44号住居跡実測図 (1/60)	137
第105図	44号住居跡カマド実測図 (1/30)	138
第106図	44・45号住居跡出土土器実測図 (1/3)	139
第107図	45号住居跡実測図 (1/60)	140
第108図	45号住居跡カマド実測図 (1/30)	141

第109図	46~48号住居跡実測図 (1/60)	142
第110図	46号住居跡カマド実測図 (1/30)	144
第111図	47号住居跡カマド実測図 (1/30)	145
第112図	46~48・51・52号住居跡出土土器実測図 (1/3)	146
第113図	51号住居跡実測図 (1/60)	147
第114図	51号住居跡カマド実測図 (1/30)	148
第115図	52号住居跡実測図 (1/60)	149
第116図	53・54号住居跡実測図 (1/60)	150
第117図	53~55号住居跡出土土器実測図 (1/3)	151
第118図	55号住居跡実測図 (1/60)	152
第119図	55号住居跡カマド実測図 (1/30)	152
第120図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	154
第121図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	154
第122図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	155
第123図	4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	156
第124図	5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	157
第125図	6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	158
第126図	7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	159
第127図	8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	160
第128図	9号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	折り込み
第129図	1~7号土壙実測図 (1/40)	162
第130図	6号土壙出土土器実測図 (1/3)	163
第131図	8・9号土壙実測図 (1/60)	164
第132図	10号土壙実測図 (1/60)	164
第133図	11・13号土壙実測図 (1/30)	166
第134図	11号土壙出土土器実測図 1 (1/4)	167
第135図	11号土壙出土土器実測図 2 (1/4)	168
第136図	12・14~17号土壙実測図 (1/40)	170
第137図	13号土壙出土土器実測図 (1/3)	172
第138図	18号土壙実測図 (1/30)	173
第139図	18号土壙出土土器実測図 (1/3)	174
第140図	19~21号土壙実測図 (1/30)	176
第141図	22号土壙出土土器実測図 (1/3)	177

第142図	甕棺墓実測図 (1/20)	177
第143図	甕棺使用土器実測図 (1/4)	178
第144図	溝状遺構断面実測図 (1/60)	179
第145図	1号溝出土土器実測図 (1/3)	180
第146図	溝出土石器・石製品実測図 (1/2)	181
第147図	2号溝出土土器実測図 1 (1/3)	182
第148図	2号溝出土土器実測図 2 (1/5)	183
第149図	2号溝出土土器実測図 3 (1/3)	184
第150図	2号溝出土土器実測図 4 (1/3)	186
第151図	2号溝出土土器実測図 5 (1/3)	187
第152図	溝出土土製品実測図 (1/2)	188
第153図	溝出土鉄製品実測図 (1/2)	188
第154図	3号溝出土土器実測図 1 (1/3)	190
第155図	3号溝出土土器実測図 2 (1/3)	192
第156図	3号溝出土土器実測図 3 (1/3)	193
第157図	3号溝出土土器実測図 4 (1/3)	194
第158図	5・6号溝出土土器実測図 (1/3)	196
第159図	6・7号溝出土土器実測図 (1/3)	199
第160図	10・12・14号溝出土土器実測図 (1/3)	201
第161図	柱穴状ピット出土土器実測図 (1/3)	205
第162図	1号土器溜り出土土器実測図 1 (1/3)	207
第163図	1号土器溜り出土土器実測図 2 (1/3)	208
第164図	1号土器溜り出土土器実測図 3 (1/3)	209
第165図	土器溜り出土鉄製品実測図 (1/2)	210
第166図	2号土器溜り出土土器実測図 1 (1/3)	211
第167図	2号土器溜り出土土器実測図 2 (1/3)	212
第168図	2号土器溜り出土土器実測図 3 (1/3)	214
第169図	3号土器溜り出土土器実測図 1 (1/4)	216
第170図	3号土器溜り出土土器実測図 2 (1/4)	217
第171図	3号土器溜り出土土器実測図 3 (1/4)	218
第172図	包含層出土土器実測図 1 (1/4)	220
第173図	包含層出土土器実測図 2 (1/3)	222
第174図	包含層出土土器実測図 3 (1/3)	223

第175図	包含層出土土器実測図 4 (1/3)	225
第176図	包含層出土土器実測図 5 (1/3)	226
第177図	包含層出土土器実測図 6 (1/3)	229
第178図	包含層出土土器実測図 7 (1/3)	230
第179図	包含層出土土器実測図 8 (1/3)	232
第180図	包含層出土土器実測図 9 (1/3)	233
第181図	包含層出土土製品実測図 (1/2)	234
第182図	包含層出土石器実測図 1 (1/2)	235
第183図	包含層出土石器実測図 2 (1/3)	236
第184図	包含層出土鉄製品実測図 (1/2)	237
写真 1	植物遺体 (実大)	238

表 目 次

表 1	一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表	4
第 1 表	ドングリ類の分類	240
第 2 表	ドングリ類計測値一覧表	241

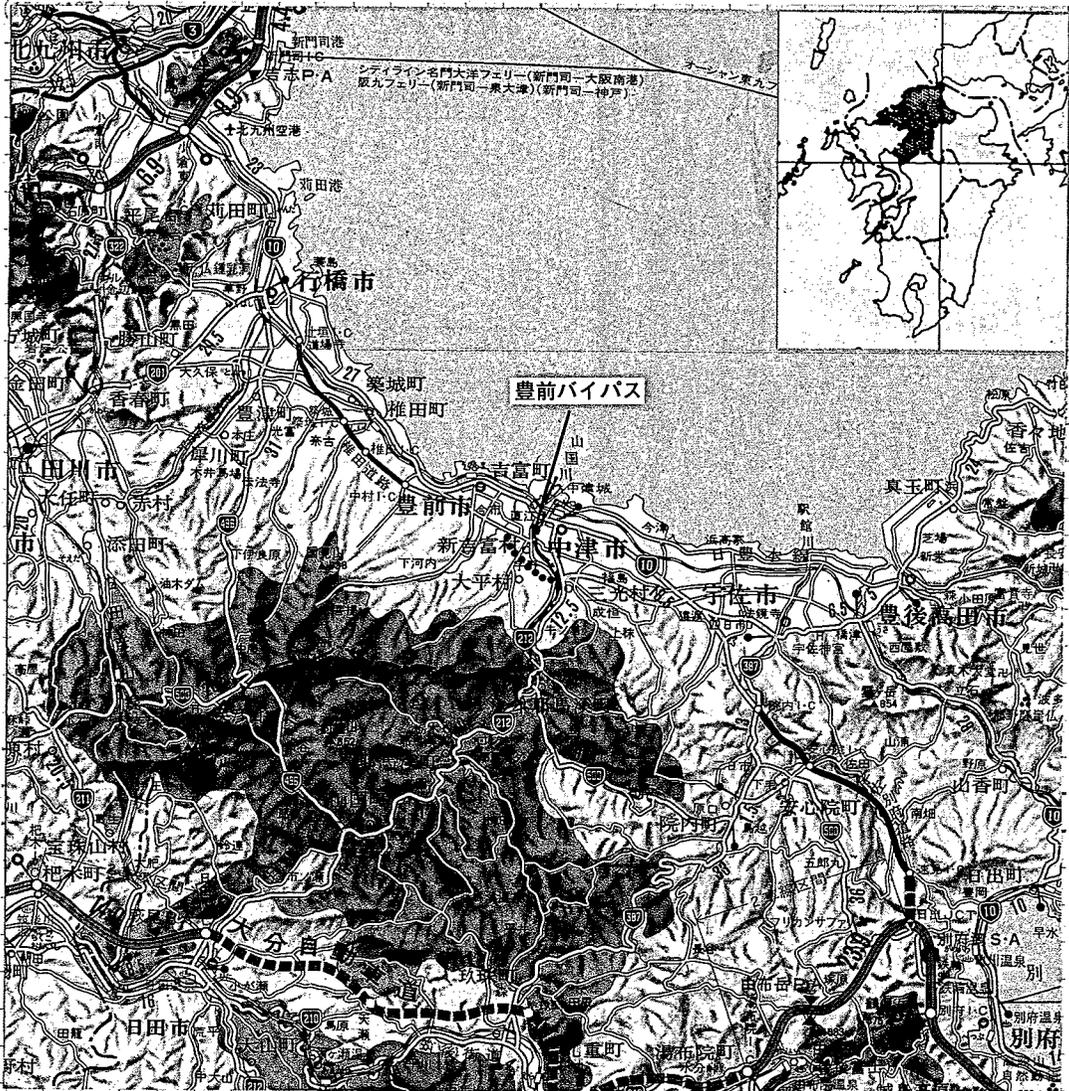
付 図 目 次

付 図	上唐原遺跡遺構配置図 (1/300)
-----	--------------------

I 調査組織と調査経過

調査の経過

福岡県教育委員会は、建設省北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道10号線豊前バイパス（新吉富村大字大瀬～大平村大字上唐原、4.44km、平均復員25m）建設地内の埋蔵文化財



第1図 豊前バイパス路線図（1：500000、道路施設協会「九州自動車道」1993.10を改変）

調査を、昭和62年度から平成6年度に実施した。

東北九州の重要な幹線道路である、国道10号線は北九州市中心部～大分市中心部間約136kmの走行所要時間が従来約4時間丁度という状態であり、約125kmで約2時間余りに短縮して繋ぐ「北大道路」として整備されることとなり、県道1号線（豊前万田線）は昭和60年度末に開通供与された。

10号線バイパスについては、昭和47年1月31日に文化課と協議がもたれ、ルート選定時に分布調査することとなり、48年3月26日に予備調査、50年6月6日にバイパス建設計画にそってさらに精密な分布調査がなされた。55年11月10日には豊前バイパスルートの変更が必要か文化財所在地の記入漏れはないかの問い合わせがあり、11月18日に記入漏れなし、ルート選定に問題なしの回答を出した。さらに59年9月7日に文化財調査についての協議をもっている。なお、公団椎田バイパスは63年末までに発掘を終了してほしい旨もあった。

昭和62年度の調査は、試掘調査を11月2～5日と13～17日に実施し県道西側で削平を受けた部分が多いものの、県道と旧県道の間は遺構・遺物が広く分布することが明らかとなった。このため引き続き表土剥ぎを実施したが、水路については現状のまま残さざるを得ないため、先ず水路の南側を中心に表土剥ぎを実施して北側に排土を積み上げることにした。

12月1日からは、作業員を投入し、器材などを搬入する。駐車スペースや、テントなど諸々の整備をしたのち、県道・農道・畦道や水路などで区画されるⅠ～Ⅵ区に一応区分して、テントに近いⅤ区の遺構検出から本格的に始める。カマド付きの住居跡や溝などの遺構が確認されたが、水田開削で削平を受けた部分が多い。

12月11日から、表土剥ぎの終わったⅠ区の遺構検出を始める。このあたりは「水当たりが悪かったので、30数年前に地下げをした」ということで、水田床土に続く粘土質の再堆積土の混ざった攪乱穴や落ち込みがあったり、凹凸が多い。試掘時のトレンチも砂地のためやや深めに入っていて、攪乱土を除去するのに結構手間がかかった。

12月14日からⅡ区の遺構検出も開始する。

12月16日 韓国文化財研究所の南時鎮氏が来訪、1月上旬まで発掘調査や周辺遺跡の調査。

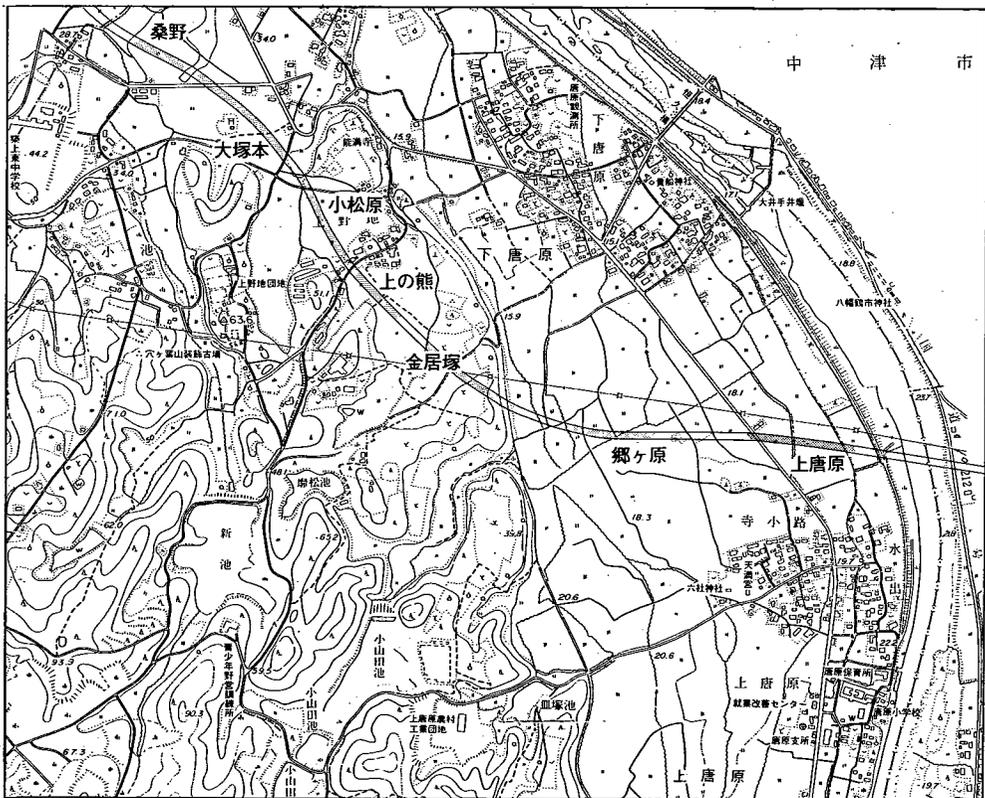
12月19日 午前中に大平村文化財協議会の視察がある。また福岡県文化財保護指導委員の宮本工氏と大平村文化財専門委員の中園富夫氏が、大平村原井での圃場整備工事中出土土器を持参され、両氏の東道で工事現場を昼休みに踏査する。

12月22日 中津市文化財協議会・新吉富村文化財協議会の視察があった。

12月23日 Ⅴ区は写真撮影・遺構実測作業がほぼ終了する。

12月24日 Ⅰ区の住居跡群の掘り下げが続くが、年内の現地発掘作業を終えて、遺物を文化課椎田事務所に運搬する。

1月6日 昭和63年の現地発掘作業を開始する。Ⅲ区の遺構検出を実施し、検出した住居



第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20000)

跡から掘り下げる。

1月16日 IV区は遺構検出を繰り返すが、乾燥していることもあり難航する。このため重機を用いて全体に上部を薄く剥ぎ直して、遺構検出を実施する。

1月20日～23日 原井三ツ江遺跡の工事が迫り、急遽住居跡を発掘する。

1月27日 I区・III区の住居跡を掘り下げる。IV区西端の4号溝はほぼ掘り下げが終了する。

2月1日 冷え込みが厳しく、砂地に厚く霜柱の立つ日が続く。住居跡の周壁を露呈させようと試みるが堅くて思うようにいかない。凍っていない部分で崩落を生じて、本来の壁部分よりも外側に広がってしまうことも度々ある。IV区の遺構検出のために散水すると凍ってしまい、かえって悪い。III区東寄りの21号住居跡では古式土師器がまとまって出土する。

2月17日 南半部分の全景写真撮影の準備で清掃作業を始める。

2月18日 風雪が強く、気球を上げられず、全景写真撮影を見送る。

2月20日 気球による全景写真撮影。

2月24日 前日の降雨で遺構検出が順調になる。各住居跡などに重複している遺構を掘り下

一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積(m ²)	調査面積(m ²)						報告書	
					62年度	平成元	2	3	4	5		6
1-A	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生~古墳 集落	40,000								
1-B		新吉富村垂水	弥生~古墳 集落						4,000	3,500	2,000	
1-C		新吉富村垂水	弥生~古墳 集落							3,200	1,800	
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳~平安 集落					3,500				
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落									
1-F	宇野垂水遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落									
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落									
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文~平安 集落・墓地他						2,000	5,000		1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生~古墳 集落・墓地	4,000						700	9,000	
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600						1,600		
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800						4,800		
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文~江戸 集落・墓地他	16,000						18,000		
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文~近世	11,200						10,000		
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器~古墳? 集落他	4,500						4,500		
7	金居塚遺跡 (旧カネツキ)	大平村下唐原	縄文~江戸 集落・墓地他	14,000						13,000		
8-A	上唐原遺跡	大平村上唐原	縄文・弥生~奈良 集落	18,000	10,000	2,000						2
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生~古墳 集落	6,500						6,500		
計				120,600	10,000	2,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900

げ始める。Ⅵ区の畑に植わっていた野菜類の収穫がほぼ終了し、立ち入れるようになる。

2月25日 排土の山をⅠ・Ⅱ区の東半部に移動させ始め、Ⅱ・Ⅳ区の発掘区を拡張する。

2月27日 午後、中津市文化財保存協議会で、上唐原遺跡発掘状況を説明する。

3月9日～11日 8B地点の試掘調査を実施。

3月14日 Ⅵ区の遺構検出を開始する。

3月24日 Ⅵ区的全景写真を高所作業車から撮影する。

3月29日 東側の旧県道と山国川堤防との間の部分は、土地収容法の対象地になっていたが、立ち入れる状況になり、旧県道を挟んだⅠ・Ⅱ区の遺構分布の状況からして調査の必要があるので追加部分の0区として調査することになる。大平村郷土史研究会にて「上唐原遺跡について」発表する。

3月30日 Ⅴ区の埋め戻し作業を実施し、62年度の調査を終了。調査担当のうち小池は63年度は記念物係に移動することとなり、また5月15日から3月間大韓民国へ出張することになったため、残された部分の調査工程を検討する。昭和63年度は福岡東バイパス関係の調査が2地点あり、急を要していた。このため東バイパス分の調査には副島があたり、豊前バイパスは4月末をめどに小池が引き続き担当することとなった。

4月6日 Ⅵ区の調査を終了する。

4月18日 0区の調査を終了する。Ⅱ区の縄文時代2号住居跡の調査にかかる。

4月24日 気球による全景写真撮影。

4月27日～30日 京築教育事務所の高橋章技術主査の来援を受ける。縄文時代住居跡の床面精査を実施し、写真撮影、実測作業も終わる。

5月2日 8B地点の3月段階で用地未解決で、解決した部分の試掘調査を実施するとともに、上唐原遺跡の遺物と発掘調査器材を椎田事務所に移動する。

5月6日 破損した溝の補修作業、ユニットハウス・トイレなどの器材も撤収する。

調査を終了した部分については、工事が着手され、平成2年には0.3km間ではあるが一般供与された。



調査風景

昭和62・63年度の調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	62年度	63年度
所長	北之園 宏	高橋 松男
副所長	中溝 文之	竹中 幸生
建設専門官	古賀 秀登	古賀 秀登
建設監督官		辛島 秀治
工務課長	浜田 誠	衛藤 恒利
工務係長	諏訪 憲二	諏訪 憲二
調査課長	久良木 裕	久良木 裕
調査係長	犬束 昌生	田中 敏則
建設技官	池田 稔浩	池田 稔浩

福岡県教育委員会

総括	教育長	竹井 宏	竹井 宏
	教育次長	大鶴 英雄	大鶴 英雄
	指導第二部長	大平 岩男	大平 岩男
	文化課長	窪田 康德	葉石 勲
	参事		森本 精造
	課長補佐	平 聖峰	平 聖峰
	技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏
庶務	管理係長	加藤 俊一	池原 脩二
	事務主査	竹内 洋征	和田 健作
調査	調査班総括	柳田 康雄	柳田 康雄
	総括補佐		井上 裕弘
	技術主査	副島 邦弘 (調査担当)	副島 邦弘
	主任技師	小池 史哲 (調査担当)	
	技師	緒方 泉	飛野 博文
			緒方 泉
	記念物係技術主査		小池 史哲 (調査担当)

調査補助

西田大輔 (奈良大学卒)
有島聖一・植田由美・中美浩 (別府大学)

発掘調査では、地元在住の次の方々の協力を得た。

青佐シズ子 榎垣静子 榎垣弥生 大森エミ子 金山定子 金山幸子
金山尚美 苅野玲子 川原垣明子 川原垣勝子 岸本八重子 久保一子
噌西操 田城アヤ子 豊永スズ子 豊永スマ子 豊永初子 中尾順子
中里公子 中里ツヤ子 別府ヨシノ 堀立ヒサエ 松山幸子 宮崎千恵子
宮野美代子 宮野ヨシ子 村上君子 村上照子 村上トミ子 吉村レイ子
今瀬年夫 川原垣善幸 新開寅雄 田城 光 中里喜義 中里文雄 宮吉攻太郎

調査期間中には、南時鎮（韓国文化財研究所）、宮小路賀宏（福岡県文化課）野中五郎・百留隆男・森重高岑・高橋章（京築教育事務所）、宮本工（福岡県文化財保護指導委員）、堀三好（大平村教育委員会）、島田一三・中園富夫・藤井較一（大平村文化財保護委員会）、賀川光夫（大分県文化財保護審議会）、小田富士雄（福岡県文化財保護審議会）、真野和夫（宇佐風土記の丘資料館）、武末純一（北九州市考古博物館）、清水宗昭・坂本嘉弘・高橋徹・村上久和・宮内克己・高橋信武・後藤一重・綿貫俊一・吉田寛（大分県文化課）、栗焼憲児（中津市教育委員会）、小柳和宏（宇佐市教育委員会）、尾座本雅光・丹羽博（豊前市教育委員会）、松本洋明（天理市教育委員会）、などの方々の来訪があり、現地で有益な指導・助言を得ることができた。

報告書作成の経過

上唐原遺跡からの出土遺物は、パンコンテナ210箱と多量であり、平成4年度から水洗い・接合復原作業を九州歴史資料館において実施したが、諸般の事情で遺物実測作業・報告書作成作業は平成6・7年度に実施することとなった。平成6年度は、主に昭和62年度に発掘調査した、上層の弥生時代から中世にわたる遺構・遺物について報告する。また平成7年度は、下層の縄文時代の遺構・遺物について報告書を作成する予定である。

本書作成にかかわる、平成6年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所長	大内 英吉郎
副所長	平川 輝義
建設専門官	安部 純弘
建設監督官	田中 敏則
工務課長	中川 博勝
工務係長	徳重 栄紀
調査課長	田中 光助
調査係長	柴田 智
建設技官	田辺 稔

用地課長	桑田 優二
用地係長	川崎 政義

福岡県教育委員会

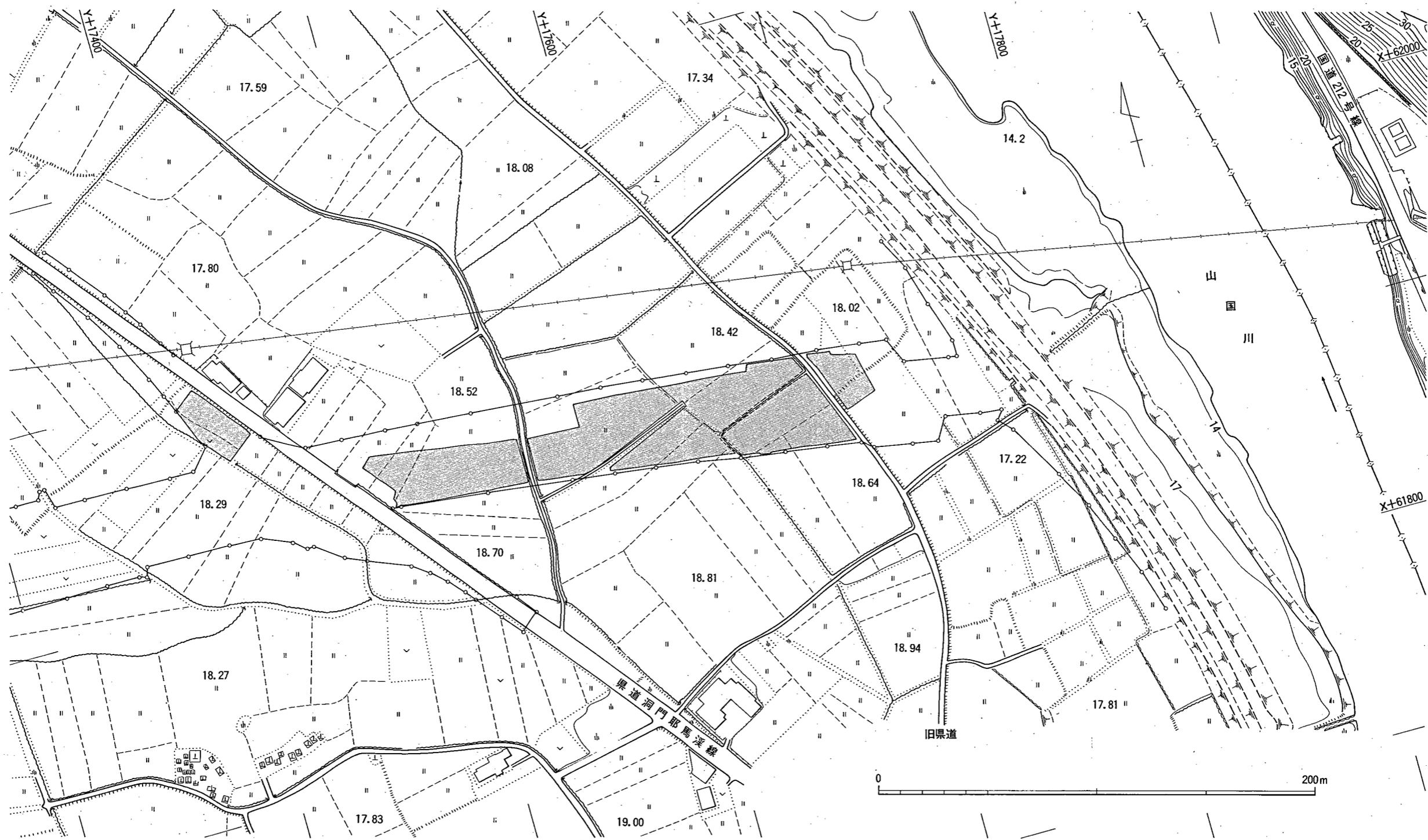
総括 教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	丸林 茂夫
文化課長	松尾 正俊
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
課長補佐	清水 圭輔
文化財保護室長補佐	井上 裕弘
調査班総括	橋口 達也
庶務 文化課管理係長	杉光 誠
同 事務主査	安丸 重喜
整理 調査班技術主査	小池 史哲 (整理・執筆担当)
整理指導員	岩瀬 正信 (接合復原) 平田 春美 (土器実測)
同	北岡 伸一 (写真撮影) 豊福 弥生 (製図)
整理補助	若松美枝子 原カヨ子 関 久江 土山真弓美 岡由美子 田中典子 堀江圭子 棚町陽子 久富美智子 坂田順子 藤原さとみ 江口幸子 堀之内久美子 穴見裕子 寺町恭代 小国みどり 高島妙子 坂本恵美子 安永啓子 近藤京子 古賀八重子

報告書作成にあたっては、この他にも福岡県教育庁文化課池辺元明・水ノ江和同、京築教育事務所飛野博文、大平村役場野間口和平・堀三好、大平村教育委員会末永浩一などの諸氏の協力を得た。

なお、カマド内土壌などの灰像分析を東京大学総合資料館の松谷暁子先生、出土炭化種子の分析を名古屋大学文学部の渡辺誠教授に依頼し、分析結果の報告をいただいた。



調査風景



第3図 上唐原遺跡地形図 (1/2000)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

地理的環境

上唐原遺跡は、福岡県築上郡大平村大字上唐原字塚畑・田法寺・小石原・下川原にまたがり、旧地番の1782～1784・1868・1869・1872～1877・1880～1883・1901・1904・1906～1908・2101～2106・2113～2120番地に所在する。またこの位置は、東経131°11'22"、北緯33°33'30"付近に相当する。豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した範囲は、S T A No199～S T A No215の間で、路線幅のうち、用地境に0.5～2.0mの余裕と、既設道路と水路部分を除いて発掘調査した、約12000㎡である。標高は18.60m前後である。

上唐原遺跡の所在する築上郡大平村は、福岡県の東端にあって、山国川を境に東は大分県中津市・下毛郡三光村・本耶馬溪町、南は耶馬溪町と接して、また西は豊前市、北は築上郡新吉富村と接し、面積は48.68km²である。

大平村の南境をなす、雁又山(807.1m)・瓦岳・大平山(597.4m)などは、耶馬日田英彦山国定公園の一角をなし、地質学的には^(註1)第三紀末から第四紀はじめに噴出した火山活動によって形成された角閃石輝石安山岩や両輝石安山岩の溶岩からなる。またその基盤をなす耶馬溪層(輝石安山岩系質の凝灰角礫岩)とよばれる安山岩質成層集塊岩の台地はいくつかの谷によって浸食されているが、耶馬溪周辺は奇岩・崖面が群集する独特の風景をみせ、谷底平野が多くみられる。英彦山山塊に源を発する山国川は、このような谷の水系を集めて流下し、周防灘に注ぐ。山国川は耶馬溪の溪谷部から、三光村野路付近で周防灘に面した平野部に抜け、東側には犬丸川沿いにかけて広い扇状地が形成されている。また犬ヶ岳(1130.8m)・雁又山などに源を発する佐井川・岩岳川流域にも扇状地が広がる。中津平野の扇状地堆積面には、約7～9万年前に噴出した阿蘇4火砕流が珍珠・耶馬溪を通じて流入して上に堆積することや、先端部で海成砂が確認されていて、7～9万年前以前の海進期に形成されたと考えられている。一方、山国川本流沿いの沖積地には自然堤防が発達していて、山国川左岸の自然堤防上には、百留・梶屋・重吉・水出・寺小路・下唐原などの集落が形成されている。

上唐原遺跡は、水出集落と下唐原集落の間に位置する自然堤防上に立地する。

歴史的環境

山国川下流域周辺の旧上毛郡・下毛郡地域での遺跡・遺物に対しては、古くから注目されてきたが、明治42年には岡為造が求菩提山の経筒を『考古界』に紹介している^(註2)。大正2年に弘津史文・吉村鉄臣によって調査された^(註3)大平村友枝瓦窯跡は柴田常恵の調査などを経て内

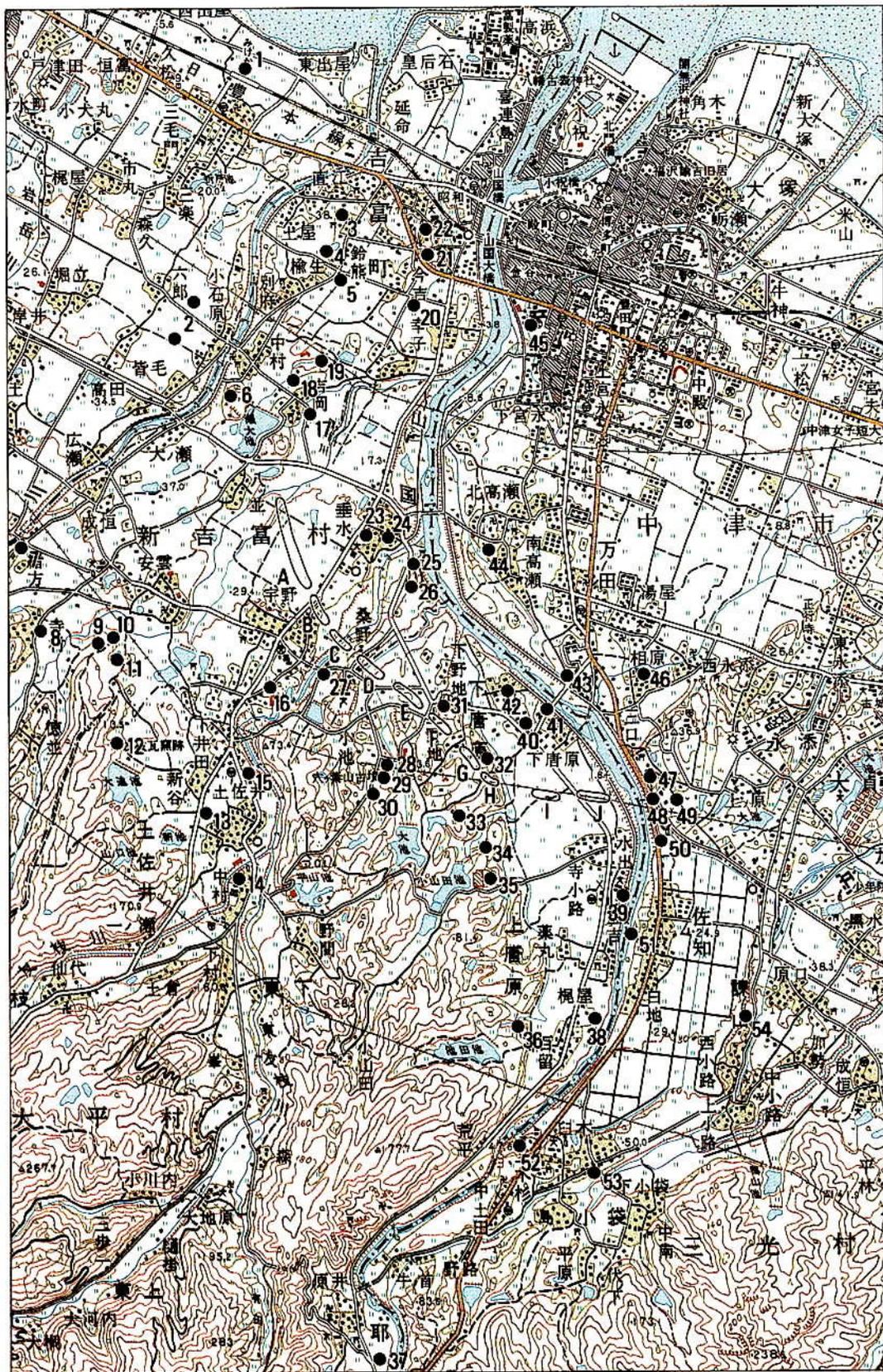


図4 周辺の遺跡分布図 (1/50000 中津)

1. 三毛門遺跡 2. 小石原泉遺跡 3. 鈴熊山古墳 4. 楡生山古墳 5. 今吉遺跡 6. 越熊山古墳群 7. 碓方古墳群 8. 尻高畑田遺跡 9. 山田瓦竃跡 10. 山田原跡群 11. 山田1号墳 12. 友枝瓦竃跡 13. 土佐井ミツツテ遺跡 14. 今高遺跡 15. 土佐井遺跡群 16. 宇野台古墳群 17. 古河遺跡 18. 巨石塚古墳 19. 大塚古墳 20. 矢頭田遺跡 21. 天神寺古墳 22. 広運寺古墳 23. 垂水庵寺 24. 垂水遺跡 25. 牛頭天王遺跡 26. 中桑野遺跡 27. 桑野代古墳群 28. 穴ヶ藪山南古墳群 29. 穴ヶ藪山南古墳群 30. 穴ヶ藪山遺跡 31. 能興寺古墳 32. 金居塚前方後円墳 33. 上ノ原古墳群 34. 小山田古墳群 35. 血山古墳群 36. 百留横穴群 37. 原井三ツ江遺跡 38. 百留居層敷遺跡 39. 上原原稲本屋敷遺跡 40. 下原原居層敷跡 41. 下原原宮園遺跡 42. 川下遺跡 43. 上万田遺跡 44. 高瀬遺跡 45. 高畑遺跡 46. 相原庵寺 47. 弊飯邸古墳群 48. 上ノ原横穴群 49. 勸助野地遺跡 50. 佐知久保遺跡 51. 佐知遺跡 52. 城横穴群 53. 臼木古墳群 54. 隼山遺跡群 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上の粕遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 那ヶ原遺跡 J. 上原原遺跡

務省の史跡指定を受けている。第二次大戦までは弘津史文・森貞次郎・森本六爾ら中央での考古学雑誌所収文献がみられ、地元では岡為造や久持恒雄らによって収集された資料がある。また、中津市相原古墳が広瀬幸吉によって報告されている^(註4)。戦後の昭和20年代には鏡山猛・渡辺正気によって新吉富村垂水遺跡^(註5)、賀川光夫によって中津市相原廃寺^(註6)・植野貝塚^(註7)など考古学的な発掘調査が実施されるようになった。40年代後半には全国的に遺跡分布地図作成が進められ、遺跡・遺物の新発見・再確認が進められたが、近年は国道10号線の北大道路整備や、圃場整備事業などの大規模開発などに伴う発掘調査が増加し、先史・古代・中近世などの遺構・遺物が急激に増加している状況にある。

旧石器時代の遺跡としては、宇佐市に小倉池遺跡が知られ、中津市大坪遺跡、大平村上の熊遺跡・桑野遺跡・金居塚遺跡・豊前市青畑向原遺跡などの発掘調査でナイフ形石器や細石刃核などの旧石器が出土している。この他、大平村にぎり池畔・池田池畔や椎田町原池畔・後谷池畔からも細石刃核やナイフ形石器などが採集されている^(註8)。

縄文時代では、垂水遺跡・植野貝塚は後期前半から中頃の遺跡で、中津高等学校校庭から工事中に出土した土偶^(註9)とともに代表的な遺跡として著名であった。昭和49年から9年間8次にわたって別府大学・長崎大学で合同学術調査された上流域の本耶馬溪町粉洞穴遺跡は、早期から後期にかけての包含層と多数の埋葬人骨出土などで注目された^(註10)。人骨からみた形質では、華奢な四肢骨が特徴で、平均身長で前期例が早期・後期よりも高いとされている。早期の遺跡では豊前市吉木遺跡で押型文土器がまとめて出土した^(註11)が、垂水遺跡など数点出土する例もみられ、今後発見例が増加するであろう。昭和55年に調査された中津市ボウガキ遺跡も後期の住居跡と埋葬人骨の発見で話題になった^(註12)。60年代には椎田町山崎・石町遺跡で後期の住居跡群が発見され、土器埋設の複式炉が存在するなど注目される調査であったが^(註13)、引き続き大平村の上唐原遺跡・原井三ッ江遺跡^(註14)・土佐井遺跡^(註15)、豊前市中村石丸遺跡^(註16)・小石原泉遺跡^(註17)、三光村佐知遺跡^(註18)・佐知久保畑遺跡^(註19)などで後期住居跡の発見例が急増した。住居形態では、方形プランで石囲炉をもつものから、円形プラン化し、炉に土器埋設複式炉・地床炉などが出現し、石囲炉が消滅するなどの傾向が窺える^(註20)。上唐原遺跡・佐知遺跡・佐知久保畑遺跡はいずれも山国川自然堤防上に立地しているが、中津市上万田遺跡・高瀬遺跡・高畑遺跡、大平村川下遺跡^(註21)などは後・晩期の遺物を出土させる自然堤防上の遺跡である。

弥生時代では、昭和52年に新吉富村中桑野遺跡で前期末から中期末の集落跡が発掘調査されたが^(註22)、隣接する牛頭天王遺跡で平成4年に中期の大型建物跡などが発見された^(註23)。山国川に面する崖上に竈え、中津平野・周防灘を眺望する建物が想像されよう。このほか新吉富村尻高畑遺跡^(註24)・大平村土佐井ミソソデ遺跡^(註25)・桑野遺跡^(註26)・下唐原宮園遺跡^(註27)・郷ヶ原遺跡^(註28)などで住居跡や建物跡が発見されている。墓地としては、中期の方形墳丘墓が調査された大塚本遺跡^(註29)、終末頃の石蓋土壇墓群の穴ヶ葉山遺跡^(註30)などがある。山国川右岸自然堤

防上の中津市上万田遺跡・高瀬遺跡、三光村佐知遺跡などでも弥生時代中・後期の集落がみられる。

古墳時代の集落も引き続き山国川自然堤防上の各遺跡や、扇状地上の平坦部にみられ、5世紀頃からカマド付きの住居が出現するようである。墳墓では古式の前方後円墳である大平村能満寺古墳^(註31)や、中津市勸助野地遺跡の小型方形墳と土壙墓群^(註32)などとともに山国川を挟んで河岸段丘状に延びる丘陵先端部に位置する。後期の群集墳は、大平村上の熊古墳群^(註33)・穴ヶ葉山古墳群^(註34)・金居塚古墳群^(註35)、新吉富村桑野題古墳群^(註36)・宇野台古墳群^(註37)・宇野代遺跡・大塚本遺跡、中津市相原古墳群^(註38)など多数知られており、横穴墓でも三光村上ノ原横穴群^(註39)・城の百穴横穴群、大平村百留横穴群・金居塚横穴群などが知られる。須恵器生産地としての窯跡が新吉富村山田窯跡群や中津市伊藤田窯跡群^(註40)などにみられ、最近山田窯跡群の一角を占める照日窯跡群が発掘調査されたが^(註41)、大平村友枝瓦窯跡^(註42)などを合せて6世紀から9世紀までの操業が確認される。

律令期では新吉富村の垂水廃寺^(註43)・中津市相原廃寺^(註44)が古くから注目されてきたが、近年相原廃寺周辺の確認調査が相次いで実施され、三光村塔ノ熊廃寺も調査された^(註45)。また垂水地区遺跡では古代官道跡らしい遺構も確認され^(註46)、古代官道は垂水廃寺推定地北側・牛頭天王遺跡北側を経て相原廃寺北側を走ると推定されている^(註47)。また正倉院文書にある「豊前國上三毛郡塔里」戸籍の塔里は大平村上唐原・下唐原に比定され、渡来系の姓が多いと指摘されている^(註48)。

平安後期以降は田部氏・宇佐氏一族の支配地であったが、末期頃には宇佐八幡宮・弥勒寺の荘園で占められていたようである。また鎌倉時代元寇前後に宇都宮氏が地頭として豊前国に下向してきて、宇都宮一族が勢力を振るうようになるが、この地域でも名主・御家人の居城とみられる中世城跡などが多数知られている。

註1 地質については、福岡県1971 土地分類基本調査「中津」周防灘周辺開発区域によるところが多い。

2 岡為造 1909 豊前求菩提山国魂神社蔵経筒 考古界第8篇第2号 東京

3 弘津史文 1924 豊前国友枝村瓦窯より発見の古瓦 考古学雑誌第14巻第13号 東京

4 広瀬幸吉 1924 相原古墳 大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第16輯

5 渡辺正気 1983 福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告 古文化談叢第11集 北九州

6 賀川光夫 1955 豊前中津市相原廃寺調査報告 中津市教育委員会

7 賀川光夫 1957 大分縣(豊前)中津市相原廃寺調査報告 中津市教育委員会

8 小池史哲 1991 豊前地方の旧石器 豊前市史 上巻 豊前市

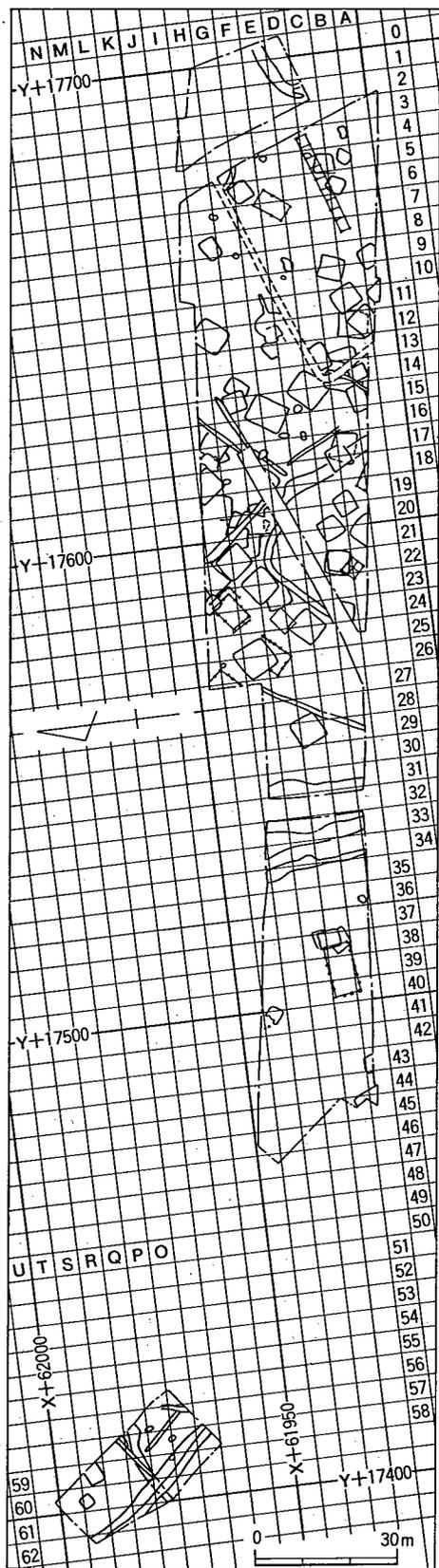
小池史哲 1993 豊前地方の旧石器時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市

9 九州考古学会 1950 北九州古文化圖鑑第1輯 福岡県高等学校教職員組合

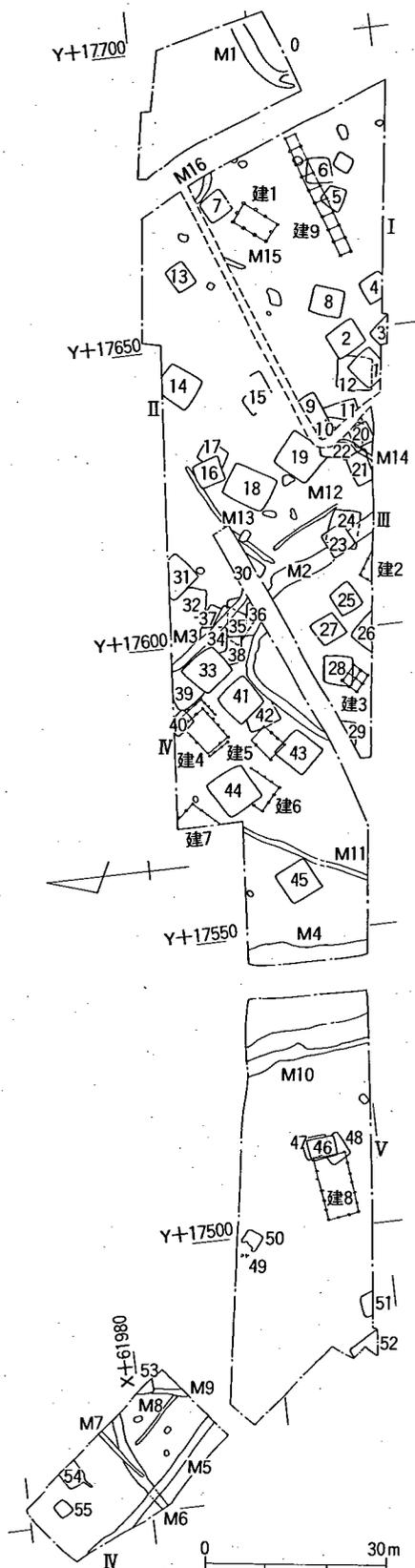
10 賀川光夫 1987 原史 本耶馬溪町史 本耶馬溪町

賀川光夫・内藤芳篤他 1977 大分県粉洞穴発掘調査概要一第1・2次調査一 考古学論叢4 別府

- 11 高橋章編 1989 吉木遺跡 福岡県文化財調査報告書第84集
- 12 村上久和編 1992 ボウガキ遺跡 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会
- 13 小池史哲編 1992 山崎遺跡(I)・石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-7- 福岡県教育委員会
- 14 小池史哲 1989 原井三ツ江遺跡 大平村文化財調査報告書 第5集
- 15 高橋章編 1990 土佐井地区遺跡 大平村文化財調査報告書 第6集
- 16 福岡県教育委員会が1988年度に椎田道路建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 17 小池史哲 1993 豊前地方の縄文時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市
- 18 坂本嘉弘編 1989 佐知遺跡 大分県文化財調査報告書 第81輯
- 19 三光村教育委員会が1992年度に大型店舗建設に先立ち発掘調査。調査を担当した植田由美氏よりご教示を得た。
- 20 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集(下) 北九州
- 21 宮本工他 1984 山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡 九州考古学59 福岡
- 22 馬田弘稔編 1978 中桑野遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第3集
- 23 飛野博文編 1994 牛頭天王遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第8集
- 24 緒方泉 1992 尻高畑田遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第7集
- 25 伊崎俊秋 1991 土佐井ミソソデ遺跡 大平村文化財調査報告書 第7集
- 26 福岡県教育委員会が1991年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 27 福岡県教育委員会が1993年度に山国川恒久橋架替に伴い発掘調査を実施した。現在整理中。
- 28 福岡県教育委員会が1989年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 29 福岡県教育委員会が1991年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 30 飛野博文 1993 穴ヶ葉山遺跡 大平村文化財調査報告書 第8集
- 31 飛野博文 1994 能満寺古墳 大平村文化財調査報告書 第9集
- 32 渋谷忠章編 1988 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 33 上野精志・小池史哲 1978 上ノ熊古墳群 大平村文化財調査報告書 第1集
- 34 酒井仁夫 1985 穴ヶ葉山古墳群 大平村文化財調査報告書 第3集
- 35 高橋章 1989 桑野題古墳 新吉富村文化財調査報告書 第4集
- 36 高橋章 1990 宇野台古墳 新吉富村文化財調査報告書 第5集
- 37 小川泰樹編 1995 宇野代遺跡 一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 1 福岡県教育委員会
- 38 註4前掲書に同じ。
- 39 村上久和編 1989・1991 上ノ原横穴墓群I・II 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告
- 40 栗焼憲児編 1985 伊藤田城山窯跡群 中津市文化財調査報告 第5集
- 41 新吉富村教育委員会が採土工事に伴い1994年に発掘調査を実施。現在整理中。
- 42 高橋章編 1976 友枝瓦窯跡 大平村教育委員会
- 43 森田勉編 1976 垂水廃寺 新吉富村文化財調査報告書 第2集
- 44 註6前掲書。栗焼憲児 1989~91 相原廃寺I~III 中津市文化財調査報告 第7・8・10集
- 45 村上久和・吉田寛 1989 三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書 第1集
- 46 福岡県教育委員会が1994年度に豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。
- 47 秋吉心良編 1991 宇佐大路一宇佐への道調査 大分県文化財調査報告書 第87集
- 48 小田富士雄 1991 秦氏の入豊と大宝の戸籍 豊前市史 上巻 豊前市
- 小田富士雄 1993 秦氏の入豊と大宝の戸籍 豊前市史 考古資料 豊前市



第5图 地区割图 (1/1500)



第6图 遺構配置概略图 (1/1200)

Ⅲ 遺構と遺物

地区割りの設定 (第5図)

上唐原遺跡の調査区域内には、県道・旧県道・農道・水路などがあるが、これらを保全したまま発掘調査を実施したが、これらによって区切られた範囲を調査時には便宜上Ⅰ～Ⅵ区と区別した。また、新平面直角座標系ⅡのX=61900～62000、Y=17415～17705の範囲内で、25～40m幅にN85°W方向の調査区域を設定したことになるが、5m刻みの小地区割りも行った。すなわち調査区東南隅部のX=61900、Y=17700を基点として、北へA・B・C～Tとアルファベットで、西へ1・2・3～61と数で区分してA3区・B4区のように呼ぶことにした。

プランで確認した遺構は、1号住居跡や、2号土壙などの名称を付したが、遺構プランの不明瞭なものは地区名で扱い、遺物収納にもこれを用いている。

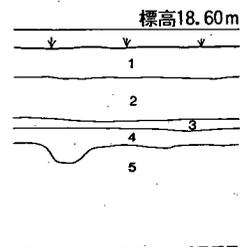
層序 (第7図)

上唐原遺跡の基本的な層序は次のようであった。

第1層は、厚さ15～20cmの水田耕作土。第2層は黄色粘土で厚さ20cm前後の水田床土。第3層は厚さ5～10cmの暗灰褐色砂質粘性土で、Ⅲ・Ⅳ区を中心とした部分とⅥ区の西半部にみられる。第4層は暗茶褐色砂で厚さ10cm前後。弥生時代から古墳時代の遺物包含層である部分が多い。住居跡内などの堆積土はこの層に近いが、若干色調が濃く粘性が強めである。第5層は淡茶褐色砂で、部分的には淡灰色砂になる。70cm以上の厚さにこの層が堆積しているようだが、縞模様には色調の濃い部分と淡い部分があり、全体的には漸次的に下層の色調が淡くなる傾向はある。大半の部分ではこの層が地山に相当するが、色調が若干濃いめの淡茶褐色砂の部分に縄文時代の遺物包含層がみられた。またⅥ区の東半部などでは、地山になる黄褐色粘土がみられた。なおⅠ・Ⅱ区の東半分やⅤ区では第2層の下は直ぐ第5層であった。

遺構の概要 (第6図)

上唐原遺跡では、縄文時代の住居跡2軒と、弥生時代後期～古墳時代の住居跡(一部古代に含まれるものもある)55軒、古墳時代～中世の掘立柱建物跡9軒、土壙22基、甕棺墓1基、溝状遺構17条などの遺構と、縄文時代・古墳時代の遺物包含層を発見した。このうち、本稿では弥生時代以降の遺構・包含層と出土遺物について報告する。なお、縄文時代の遺構・包含層と出土遺物については、次年度報告の「上唐原遺跡

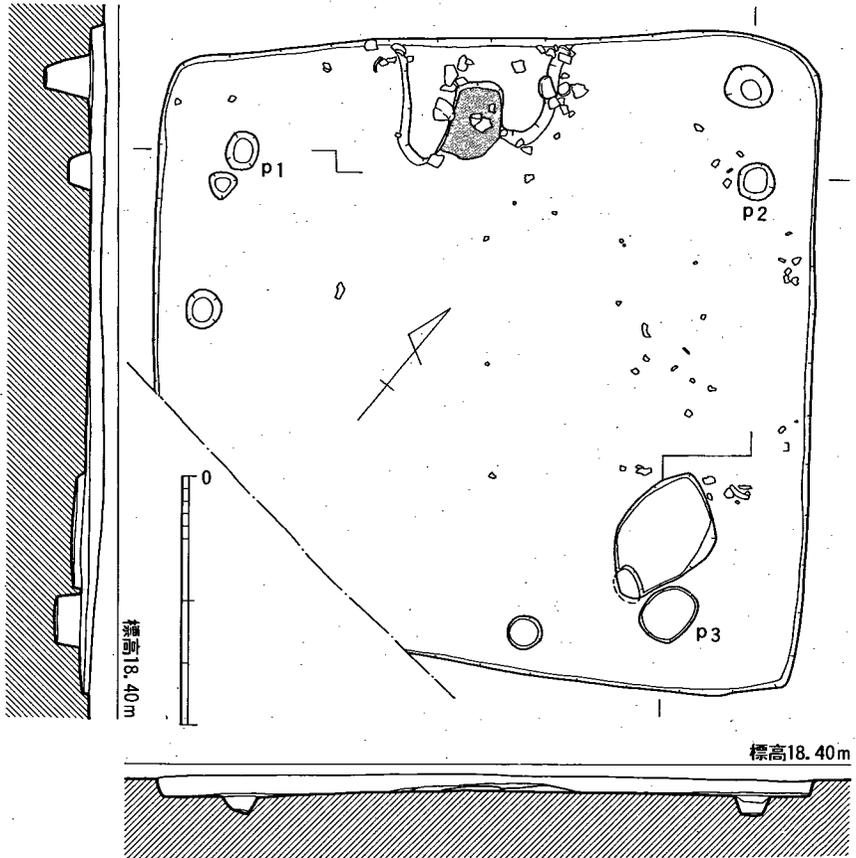
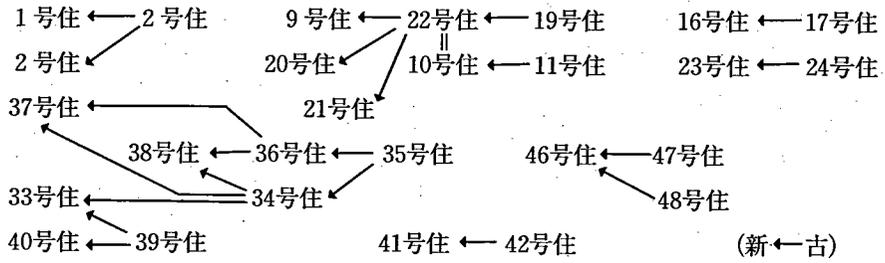


第7図 基本土層図 (1/40)

Ⅱ」にて取り扱う予定である。

1. 住居跡

住居跡55軒のうち、重複関係にある例は、次のとおりである。



第8図 1号住居跡実測図 (1/60)

1号住居跡 (図版6-1・2、第8図)

B12区を中心に発見された住居跡で、南側隅が調査区域外に続く。12号住居跡と重複するが、12号住居跡の埋没後に造られている。一辺5.2mの不整形の平面プランで、主軸方向をN39°Wにとり、深さ10cmほど残る。北西壁の中央部にはカマドが設けられている。床面は中央部とカマドの前面でやや堅めの面を確認できるが、周囲はさほど堅くない。床面を掘り込む柱穴状ピットのうち、四隅に相当するP1~3が柱穴と推定され、直径25~40cm、深さ15~20cmほどの規模だが、P2北側のピットがより深いことを考慮すればやや確実さに欠ける。カマドの周辺と北半分に土器片などが散乱した状況で出土した。

カマド (第9図)

床面を少し掘り込んで、縁に厚み30cm程の壁を築き、長さ50cm、幅35cmほどの広さの燃焼室を造っている。燃焼室床面には堅く焼けた焼土があるものの、支脚や煙道は確認できなかった。天井などの壁体の崩落土とともに土師器甕片などが出土し、カマドに被るような状態で須恵器杯蓋や土師器甕・甑片などが出土した。

出土遺物 (図版37、第10・11図)

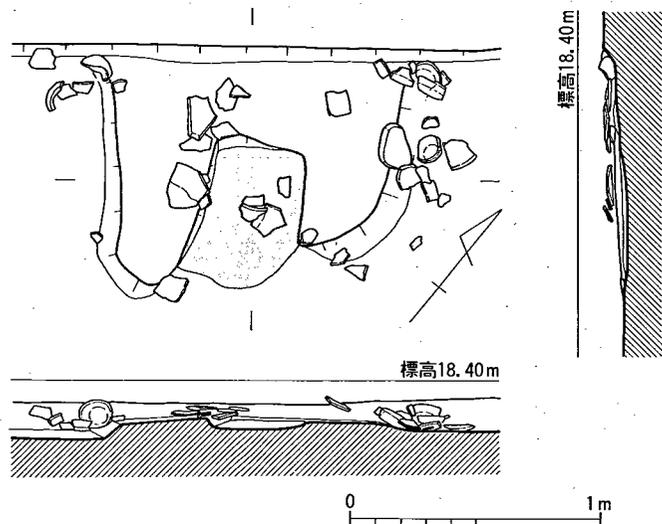
須恵器杯蓋(1) 身受けのかえりをもたない杯蓋で、ヘラ切り離しの後にナデの加わる外天井は平坦である。復原口径14.6cm、器高4.4cmの大きさで、茶灰色に焼成されている。

土師器壺(2・3) 2は口縁部が短く開き、胴は丸く膨らんで丸底の底部に続く。むしろ埴と呼ぶべきかもしれない。内外面共にナデ調整されるが指圧痕が残り、手捏ね風である。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色の色調に焼成されているが、二次的な火熱を受けて赤変する。

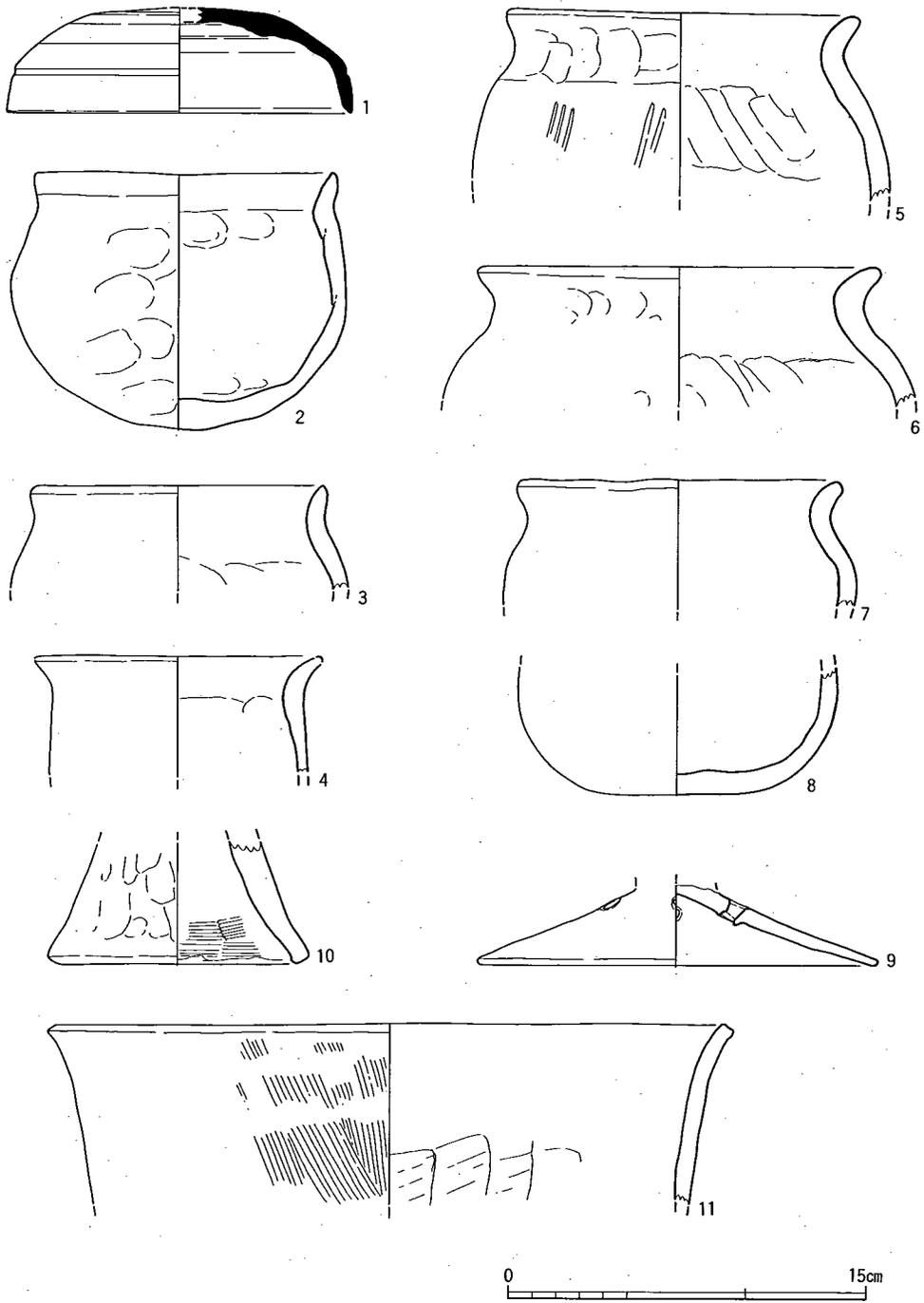
口径12.7cm、器高11.0cm、胴最大径14.0cmの大きさ。

3は2よりも口縁部の屈曲がやや緩やかな破片で、胴部内面にヘラ削りの痕跡がみられる。胎土に角閃石を含み、淡褐色に焼成されている。

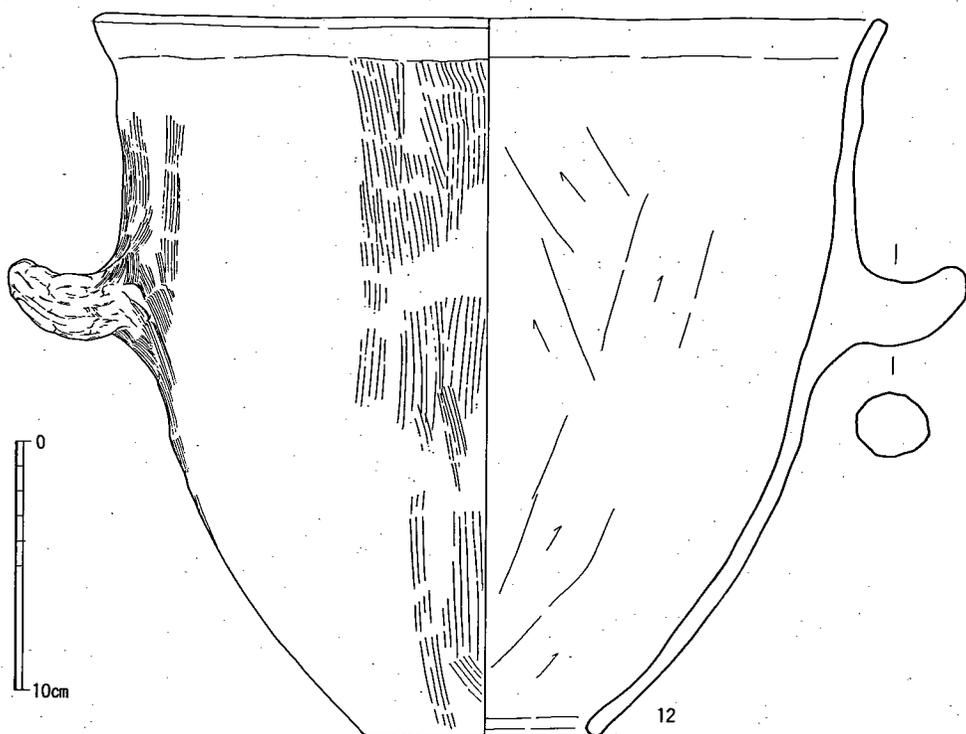
土師器甕(4~8) 4は口縁が肥厚して如意状に短く外反する、復原口径11.2cmの小形の甕。胴部内面はヘラ削りされるが、胴は膨らまない。胎土に角閃



第9図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)



第10图 1号住居跡出土土器実測图1 (1/3)



第11図 1号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

石・赤褐色粒を含み、淡赤褐色の色調に焼成されている。5～8は口縁部があまり肥厚しないが如意状にやや強く外反して、胴部が膨らむ器形の甕である。5・6は復原口径15.0cm・17.0cmの甕。胴部内面はヘラ削りされるが、5の外面に叩き目のような粗いハケ目がみられ、6の外表面は器面の剥落がみられる。いずれも胎土に角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。7・8はうまく接合しないが同一個体の可能性の高い甕で、器外面が磨滅して調整手法は不明。復原口径13.6cmの大きさで、器高10cm余りであろうか。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、赤みのある橙色に焼成されている。

高杯(9) 裾部のみで、柱状部より上側を欠く。柱状部との境目での径は3.6cmだが、復原裾部径は16.8cmの大きさに開いて、上部に4孔が穿たれる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

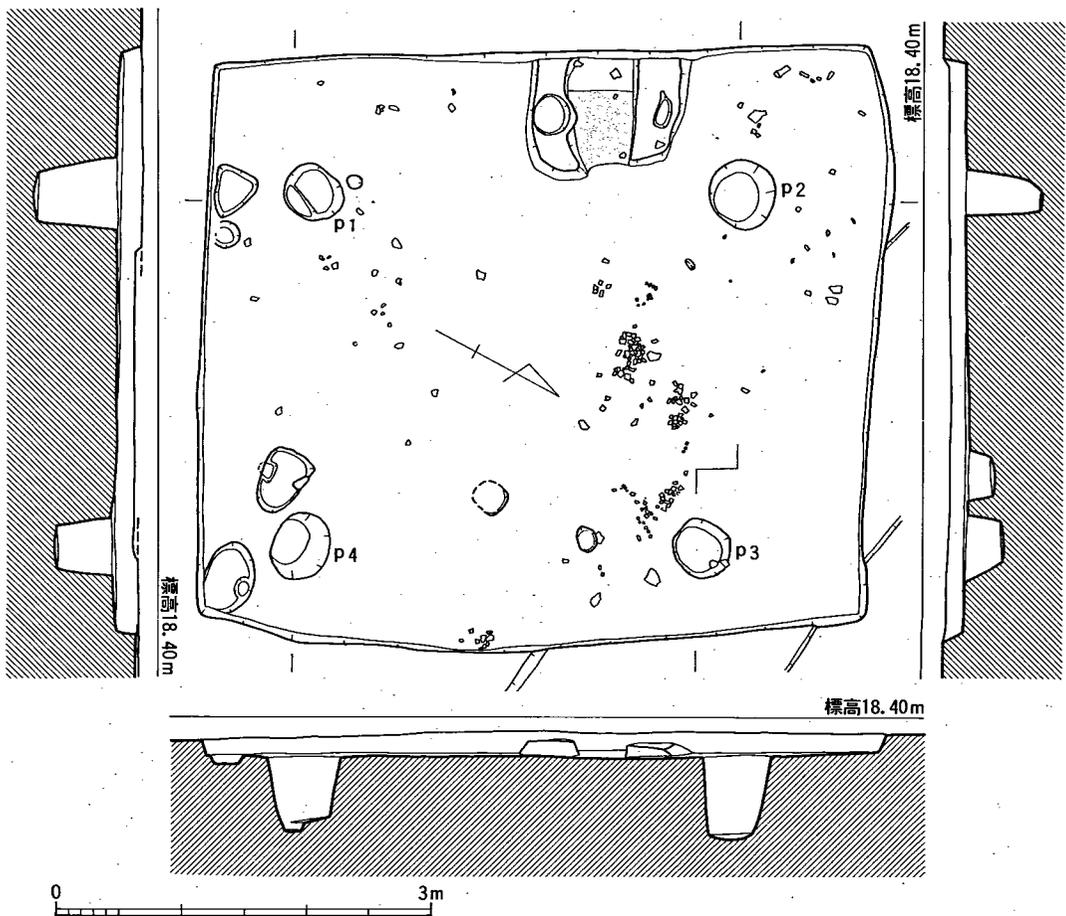
支脚(10) 器台の可能性もなくはないが、緩やかに反りながら開く支脚裾部の破片とみている。外面は指頭圧痕が顕著に残るナデ調整で、内面裾付近はハケ目調整される。胎土に角閃石・砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

土師器甕(11・12) 11は口縁部が肥厚せずに緩く外反する、復原口径29.0cmの大きさの口

縁部破片で、把手の状況などは不明。外面は斜方向のハケ目、内面には横方向のヘラ削り痕がみられる。胎土に赤褐色粒・砂粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。12は口径30.8cm、器高29.0cmの大きさの甑で、底外径は9.2cm。体部は丸みをもって膨らみ、口縁部は肥厚せずに外反するが11に比して屈曲がやや強い。把手は牛角状のもので、体部中程の少し上に一对付されるが、彎曲度は低く外方に突出する感じである。外面はハケ目調整、内面は斜方向のヘラ削りで調整される。胎土に赤褐色粒を含み、淡黄灰茶色に焼成されている。カマド部分から出土した。

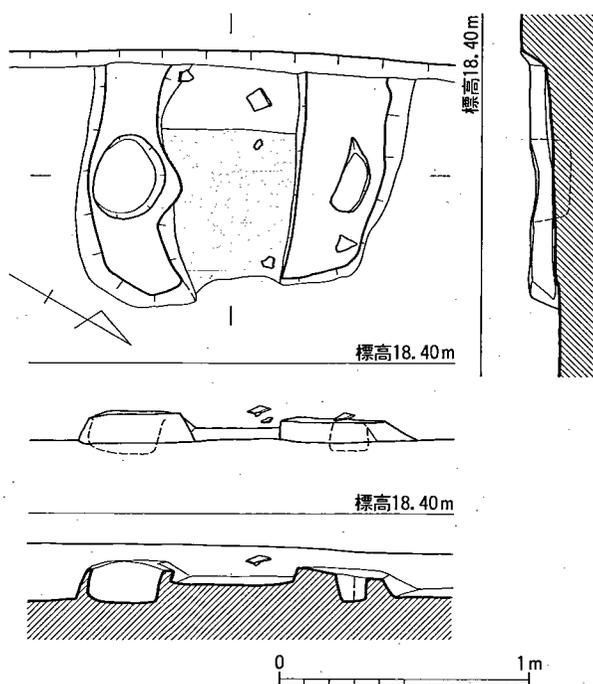
出土土器では、高杯や支脚片に古墳時代初頭前後の時期をみれるが、須恵器杯蓋や、土師器壺・甕・甑の特徴は6世紀後半頃の時期である。

2号住居跡 (図版7・8-1、第12図)



第12図 2号住居跡実測図 (1/60)

1号住居跡の東北東側に近接して発見された竪穴住居跡で、カマドは西側壁中央部に施設されている。西側隅の一部は12号住居跡と重複するが、12号住居跡の埋没後に造られている。北辺・南辺4.5mと東辺・西辺5.2mの不整長方形の平面プランで、長軸方向をN29°30'Wにとり、深さ15cm程残る。西壁の中央部にはカマドが設けられている。床面は中央部とカマドの前面でやや堅めの面を確認できるが、周囲はさほど堅くない。床面を掘り込む柱穴状ピットのうち、四隅に相当するP1~4が柱穴と推定され、直径40~50cm、深さ30~65cmほどの規模である。



第13図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド周辺と中央部で土器片などが散乱した状況に出土した。

カマド (第13図)

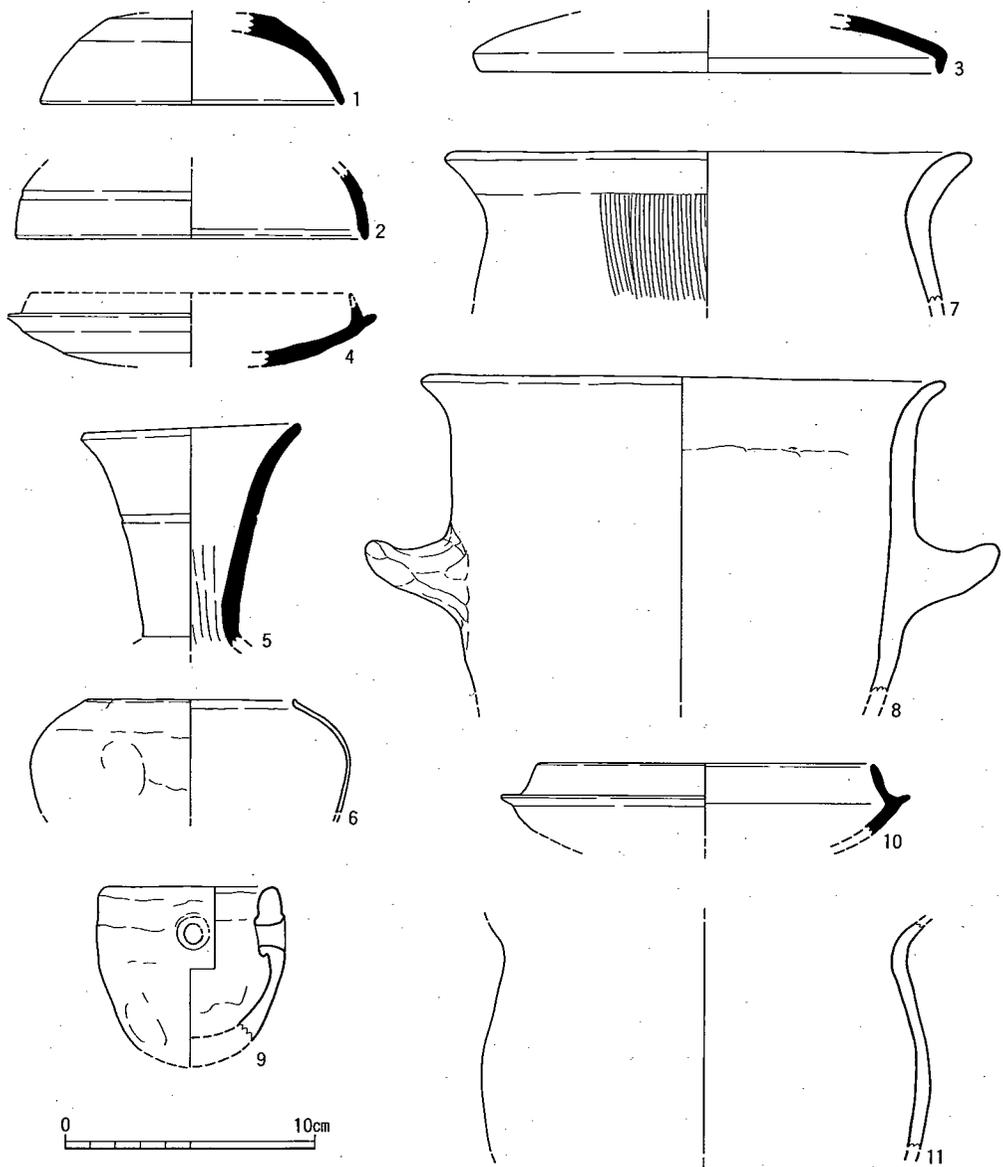
床面を少し掘り込んで、縁に厚み30cm~40cmの壁を築き、長さ80cm、幅50cmほどの広さの燃烧室を造っている。燃烧室床面には堅く焼けた焼土があるものの、支脚や煙道は確認できなかった。袖部分に一对の穴が検出され、河原石のような石が据えられていた可能性が高い。水田開削時などに石が抜き取られたのであろう。天井などの壁体の崩落土とともに土師器甕片などが出土し、カマドに被るような状態で須恵器杯蓋片や土師器片が出土した。

出土遺物 (図版50・51、第14・17・77図)

須恵器杯蓋 (1~3) 1・2は身受けのかえりを有さない杯蓋。復原口径12.2cmで口唇端部が外反気味の1と、同じく14.2cmだが内面側に段をもつ2の差異があり、1では外天井が回転ヘラ削りされている。また、3は高杯の口縁部の可能性もあるが、復原口径19.0cmの大きさで、口縁端部はやや丸みをもって屈曲する。

須恵器杯身 (4) 蓋受けのかえりをもつ杯身で、復原外径12.9cmの大きさ。外底部は回転ヘラ削りされている。

須恵器長頸壺 (5) 口頸部破片で、体部側を失う。復原口径8.8cm、残存器高8.5cmの大きさで、径3.8cmの頸部から直線的に開いて端部で外反するが、中途に1条の沈線が巡る。堅い焼



第14図 2・3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

成で暗灰色を呈している。

土師器無頸壺(6) 薄い器壁で、内彎する体部をもち、外反気味に極く短く立ち上がる口縁部が付く。復原口径8.3cm、胴最大径12.9cmの大きさで、器面は風化するがナデ調整される。精良な胎土を使用し、淡黄褐色に焼成されている。製塩土器であろう。

土師器甕(7) 口縁部がやや肥厚して、如意状に外反するが、胴部の膨らみの少ない甕で、

胴部内面は器面が風化するものの、胴部外面には縦方向のハケ目がみられる。復原口径21.0cmの大きさ。胎土に砂粒を含み、明褐色ないし橙色に焼成されている。

土師器甑(8) 体部下半を失う。胴部が膨らむもののほぼ直線的で、口縁部が肥厚せずに如意状に外反する器形で、復原口径は21.0cm。胴部中程に飛び出すような牛角状把手が一对に付く。器面は風化が進み調整手法は不明。胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、灰黄褐色ないし明褐色に焼成されている。

土師器蛸壺(9) 半欠資料だが、復原口径7.0cm、推定器高7.3cmほどの無頸壺で、口縁部下に円孔が1つ外側から穿たれる。細砂粒・石英を胎土に含み、全体にナデ調整されて、淡褐色に焼成されている。

砥石(第77図18) 粘板岩製の肌理の細かな砥石で、側面は敲打整形されていて、使用された砥面は一面だが、裏面に若干砥がれた部分がみられる。完形で長さ9.7cm、幅4.7cm、厚さ2.8cm、重量220gを測る。

管状土錘(第17図1) 埋土上層で出土したが、長さ4.2cm、外径1.6cm、孔径0.5cm、重量10gを測る、ほぼ完形の土錘。胎土に細砂粒・角閃石を含み、明褐色に焼成されている。

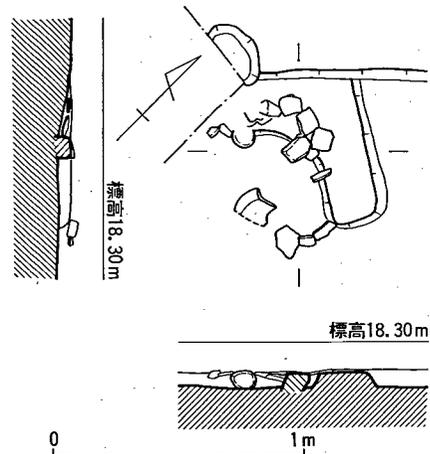
出土土器では、須恵器杯蓋1・2や、杯身の特徴などから6世紀後半頃にみるのが妥当であろう。

3号住居跡(図版8-2、第16図)

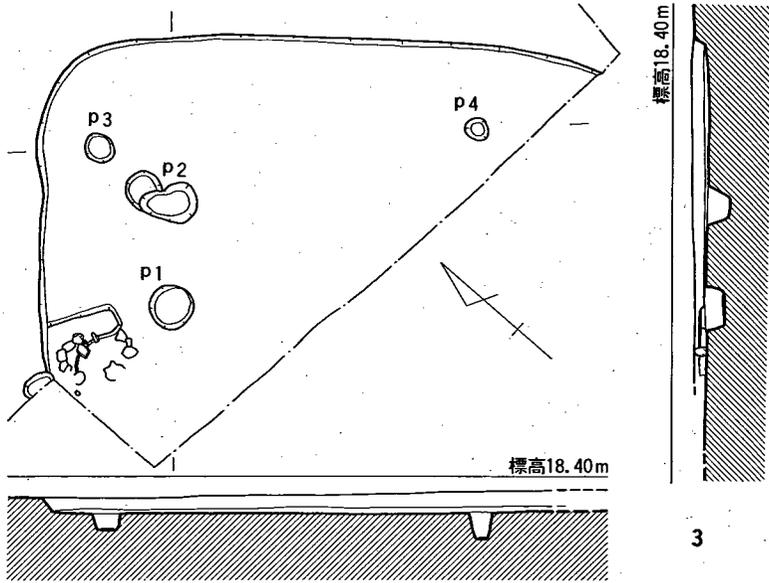
2号住居跡の南側に位置し、南半分は調査区域外に続く。北側隅以外の隅部が検出されていないので、北西辺 $2.7m + \alpha$ 、北東辺 $4.3m + \alpha$ の規模の、四隅に丸みのある正方形ないし長方形のプランであろうとしか分からない。北西辺にはカマドが付設されており、もし辺の中央に付設されていると仮定すれば、辺は約5.0mの長さとして推定される。また北東辺の南側端がやや弧を描いていることから隅部に近いことが予想されるので、一辺5.0m前後の隅丸方形に近いプランを考えておきたい。周壁の高さは約10cmに残り、床面はやや堅い。床面を掘り込む柱状ピットは4穴あるが、直径20cm～40cm、深さ10cm～20cmの規模である。深さと直径の大きなP2が主柱穴で、対応する主柱穴は調査区域外にあるとみたい。主軸方位は $N 41^\circ W$ をとる。

カマド(第15図)

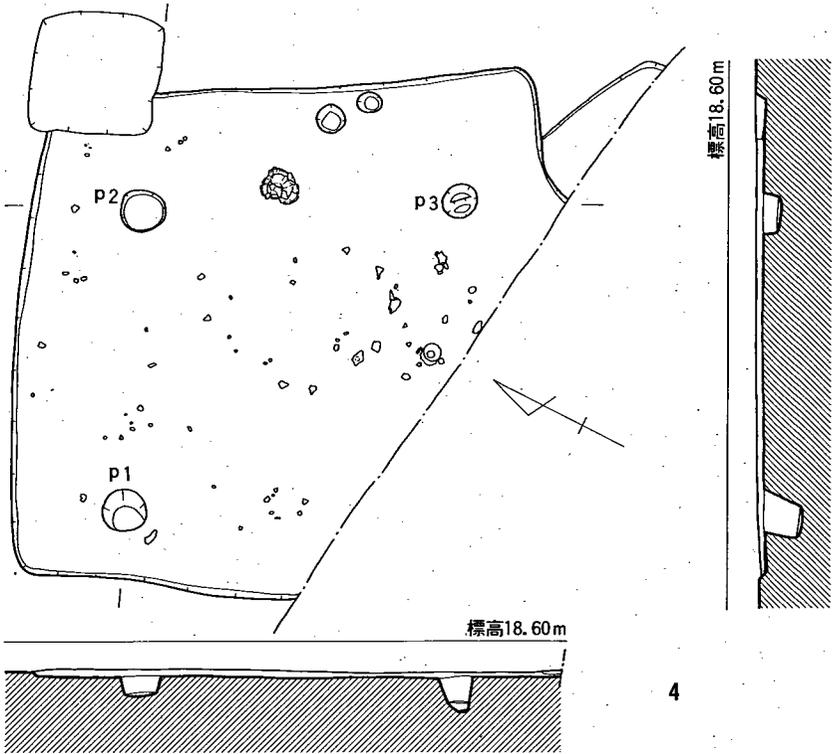
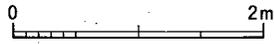
調査区域端部の、住居跡北西壁に接する位置



第15図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)

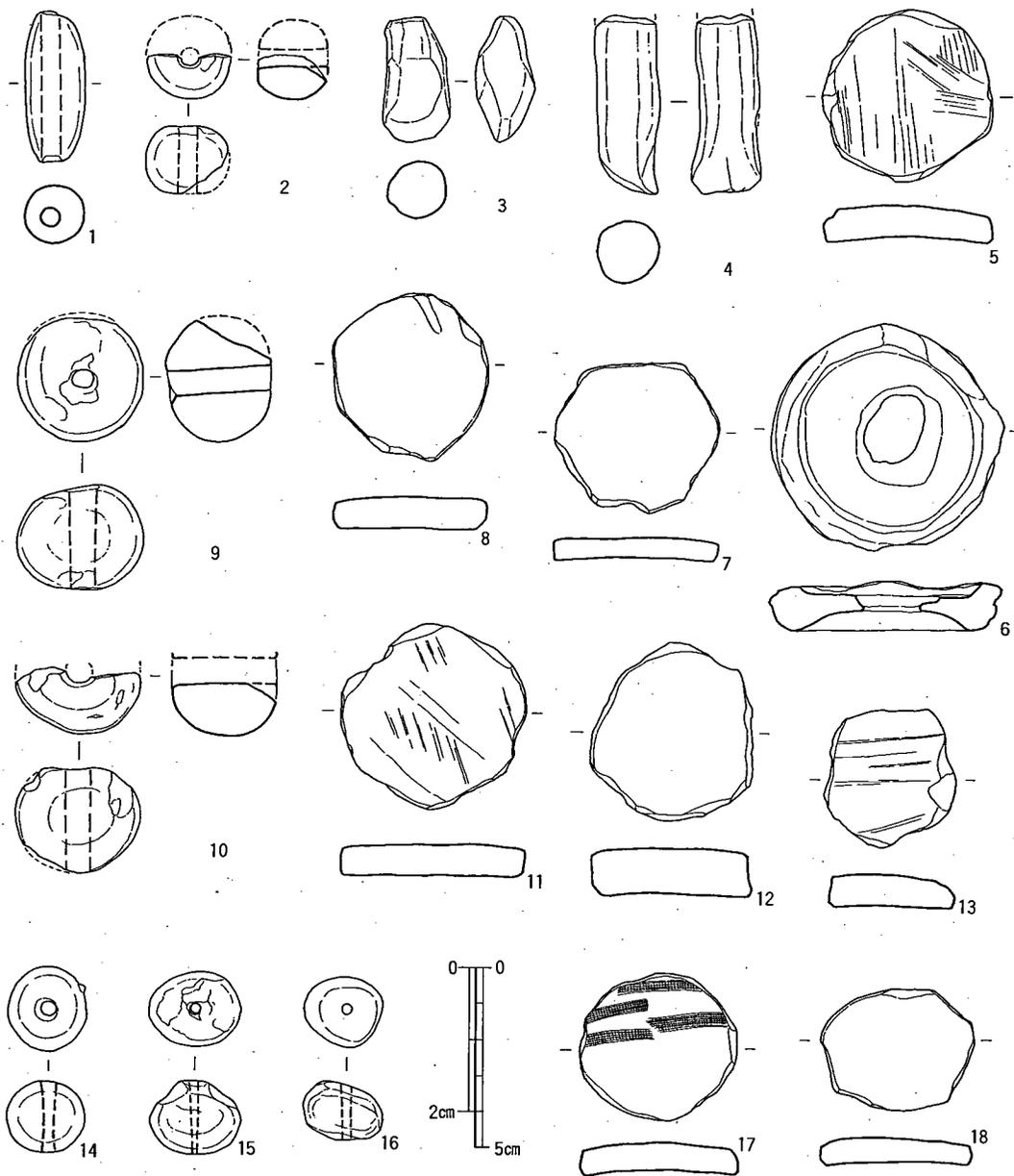


3



4

第16図 3・4号住居跡実測図 (1/60)



第17図 住居跡出土土製品実測図 (1/2・1/1)

で発見された。検出面の直上に再堆積土と攪乱土があり、調査区拡張時に深く削り過ぎて、左側袖部は分からない。浅い穴を掘って、約20cm厚さの壁を築いてカマドを構築していた模様で、火床面は長さ・幅ともに約40cmの広さにみられ、僅かに堅いが焼土は顕著でない。煙道

は検出できず、住居跡壁に焼けた部分もない。なお、支脚を構成していたと思われる角礫があるものの主軸から若干ずれていて、さらに支脚の可能性のある円礫や角礫片が少し離れた位置にもあって、特定し難い。火床面より若干浮いて脆弱な土師器甑ないし甕片が出土した。

出土遺物 (図版51、第14図)

須恵器杯身(10) 蓋受けのかえりをもつ杯身で、復原口径13.4cm、外径16.3cmの大きさ。胎土に砂粒を若干含み、灰褐色に焼成されている。

土師器甕(11) 口縁部を欠くが如意状に外反し、胴部がやや膨らむ甕で、器壁はやや薄い。外面は器面が風化して調整不明だが、内面はナデ調整されている。胎土に砂粒・石英・角閃石を含み、淡赤褐色ないし褐色に焼成されている。

鉄 鏝(第19図1) 基部片であろう。残存長3.2cm、幅・厚さ0.5cmの大きさで、下端は丸みをもって鈍く尖り、上部は角棒状になっている。

土製丸玉(第17図2) 半欠資料で、外径2.3cm、厚さ1.9cm、孔径0.5cm、重量4.5gを測る。ナデ調整で仕上げられ、表面は平滑。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡めの暗黄褐色に焼成されている。

不明土製品(第17図3) 短い丸棒の両端を押し潰したような形状で用途は不明。長さ3.5cm、幅1.9cm、厚さ1.8cmの大きさ。砂粒を若干含む胎土で、淡い明褐色ないし暗黄褐色に焼成されている。

出土土器で、須恵器杯身の特徴は6世紀後半頃に考えられよう。

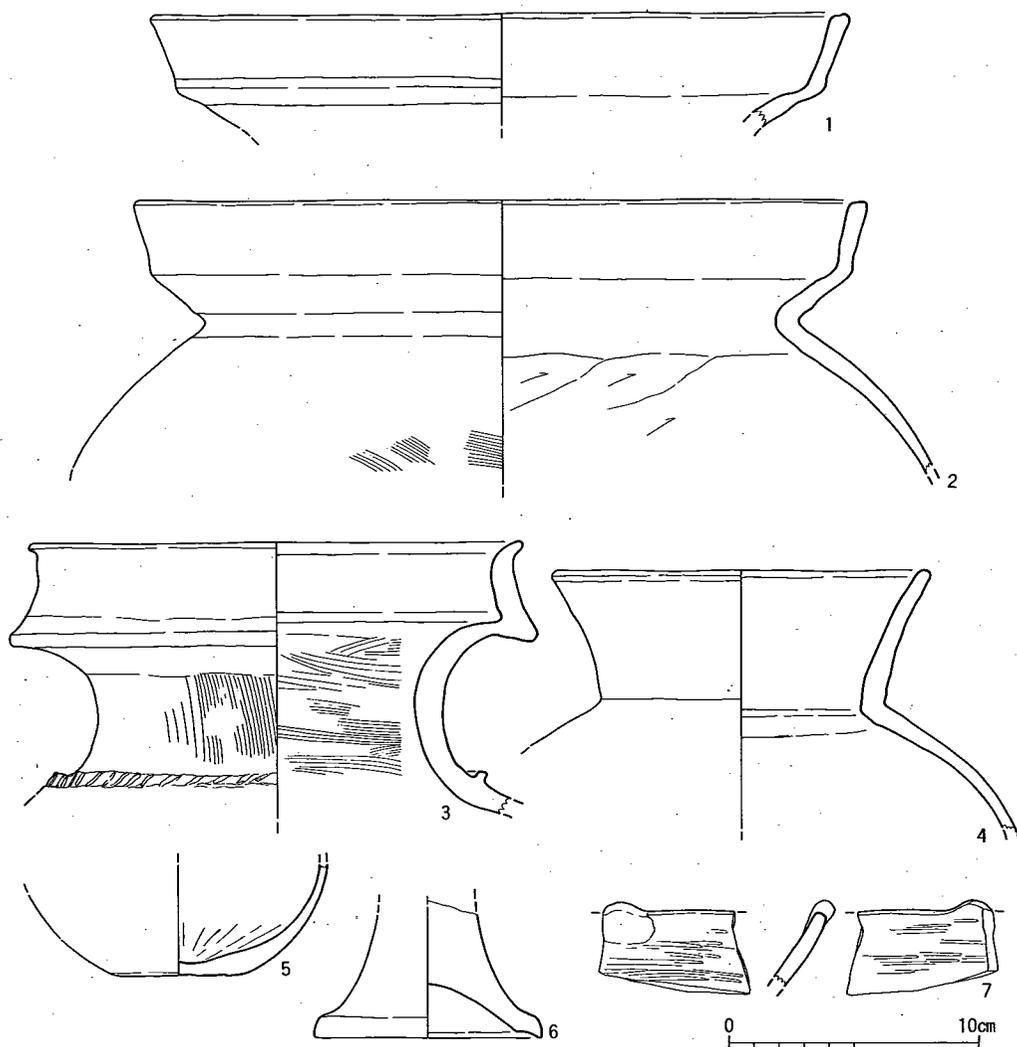
4号住居跡 (図版9、第16図)

A9区を中心に発見された住居跡で、3号住居跡の東側に位置するが、南半分は調査区域外に続く。四隅のうち南隅は分からないが、一辺4.0m前後の不整形プランで、主軸方位をN28°Wにとる。かなり削平を被り深さ5cm程しか残らない。床面は中央部でやや堅いが周囲はそれほどでなく、炉跡やカマドは検出できなかった。床面を掘り込む柱穴状ピットのうち、直径25cm～35cm、深さ15cm～30cmの規模であるP1～P3が主柱穴とみられる。

出土遺物 (図版37・51、第17～19図)

土師器複合口縁甕(1・2) 口縁部が外開きに立ち上がり端部上面が平坦気味になるもので、復原口径は28.0cmと29.4cm。胴部の破片もあるが器壁が薄いこともあり接合・復原しえない。2では胴部が張り、外面はハケ目調整、内面は頸部のやや下までヘラ削りされている。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み淡茶褐色に焼成されているが、1の胎土には角閃石もみられる。

土師器複合口縁壺(3) 口縁部は、大きく反る頸部から開いて、垂れ気味に突出しながら屈折して反転するように内傾して立ち上がりつつ端部で外反する。頸部下に刻み目凸帯が巡るが、口縁部に刻み目はみられない。口縁部はヨコナデ調整、頸部は内外面ともにハケ目調整されナ

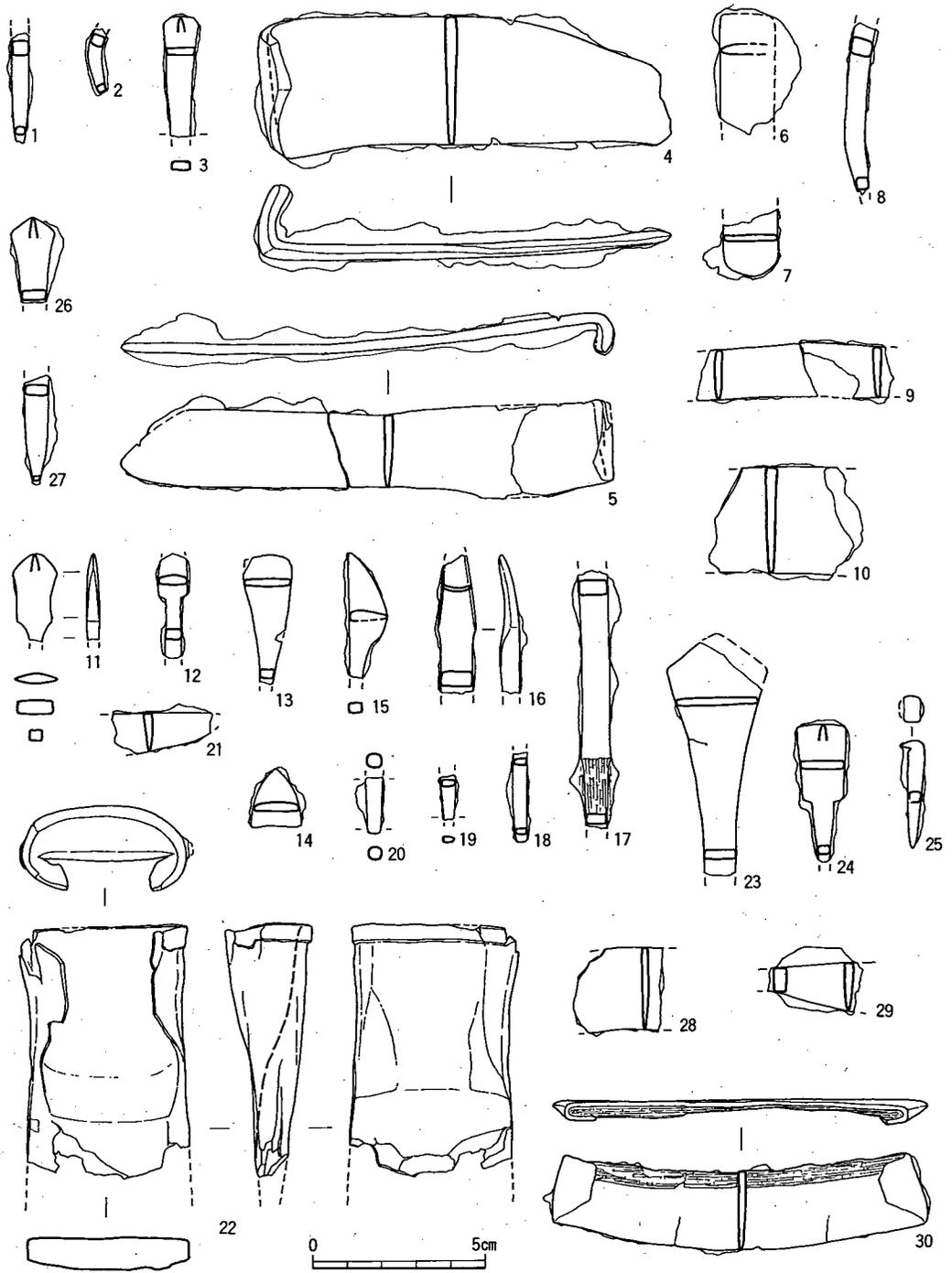


第18図 4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

デが加わる。復原口径19.8cmの大きさで、胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄茶に焼成されている。

土師器壺(4) 復原口径15.0cmの大きさの広口壺で、口縁部は直線的に開く。肩部より下の胴部破片も若干あるが、接合・復原しえない。全体にヨコナデ・ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明茶褐色に焼成されている。

土師器台付椀(5) 平坦な外底部に刻み目があり、剝離したような面が見られるので台ないし脚が付いていたものとみられる。口縁部を欠くが胴下半は丸く膨らみ、内外面ともに板状工



第19圖 住居跡出土鉄製品 (1/2)

具でナデられたような痕跡がみられる。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗黄茶色に焼成されている。

土師器脚部(6) 中実の脚部破片で、脚裾は踏ん張るような形状をなす。裾径9.2cm、残存器高5.0cmの大きさ。ナデ調整され、裾部内面は半球形に凹む。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み暗茶褐色に焼成されている。前述の5椀とともに住居跡中央部で近接して出土しているので同一個体の可能性もあろう。

土師器鉢(7) 直線的に開くとみられる口縁部破片で、口縁端部に貼り付けの突起をもつ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、内外面ともヘラ磨きされて、淡茶褐色に焼成されている。

鉄 鏃(第19図2・3) いずれも破片で2は基部、3は先端部だが接合はしない。先端部は方頭細根の鏃で、長さ3.5cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmに残る。基部は0.4cm角の棒状で下端側に尖っていくが、曲がっている。

鉄 鎌(第19図4) 西隅部近くのP1ピット脇で出土した。先端側は欠損しているようだが、長さ12.0cm、幅4.1cm、厚さ0.1~0.4cmの大きさで、基部側は折れ曲がる。刃部は僅かに内反りで、背は基部側で直線的だが中程から先端側へは緩やかに窄まる。木質はみられない。

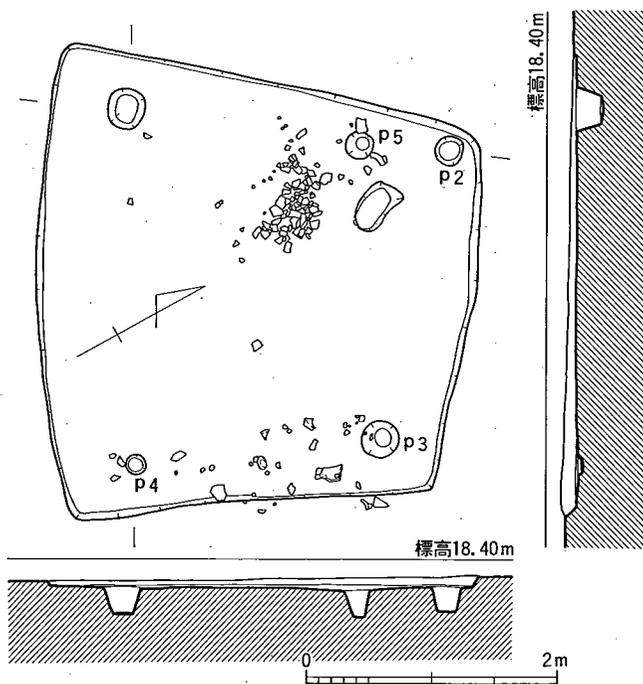
不明土製品(第17図4) 一方の端が折損していて、全体の形は不明。土偶の手のようにも見える。長さ5.0cm、幅・厚さ1.8~1.9cmの大きさでナデ調整された丸棒状だが、下端は指先でつまんだように平たく伸びる。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

土器片円盤(第17図5) 外面にハケ目、内面に板状工具の小口痕の残る土器片を打ち欠き整形した円盤で、一部擦れた痕跡がある。最大径4.8cm、厚さ0.9cmの大きさ。土器片は、胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、茶褐色を呈している。

出土土器では2・4の壺・甕などの特徴から古式土師器の範疇に入り、4世紀に考えられる。

5号住居跡(図版10、第20図)

B・C6区で発見された住居跡で、検出時には北から東側にかけての部分のプランがやや不明瞭であった。南西辺が他の辺より長い不整形プランを呈し、深さ3~10cmしか残らず削平が著しい。北東辺と南東辺は2.9m、北西辺は3.4m、南西辺は3.8mを測る。床面はあまり堅く締まっていないが、四隅に柱穴が検出された。柱穴は直径15cm~30cm、深さ20cm前後だが、南隅部のP4は浅い。なお柱穴間の距離ではP3-P4が2.0m、P1-P2が2.6m、P2-P3が2.4m、P1-P4が2.8mで、P1とP2の間にあるP5とP1間が2.0mであることからP5が支柱穴の可能性もある。なおP5とP2に近接したピットは重複する9号建物に伴う柱穴で後出して切り込まれたものである。床面には炉跡・カマドなどの焼土をとまなう部分は検出されなかった。住居跡内ではP5の南側とP3とP4の間で土器片がやや集中して出土した。



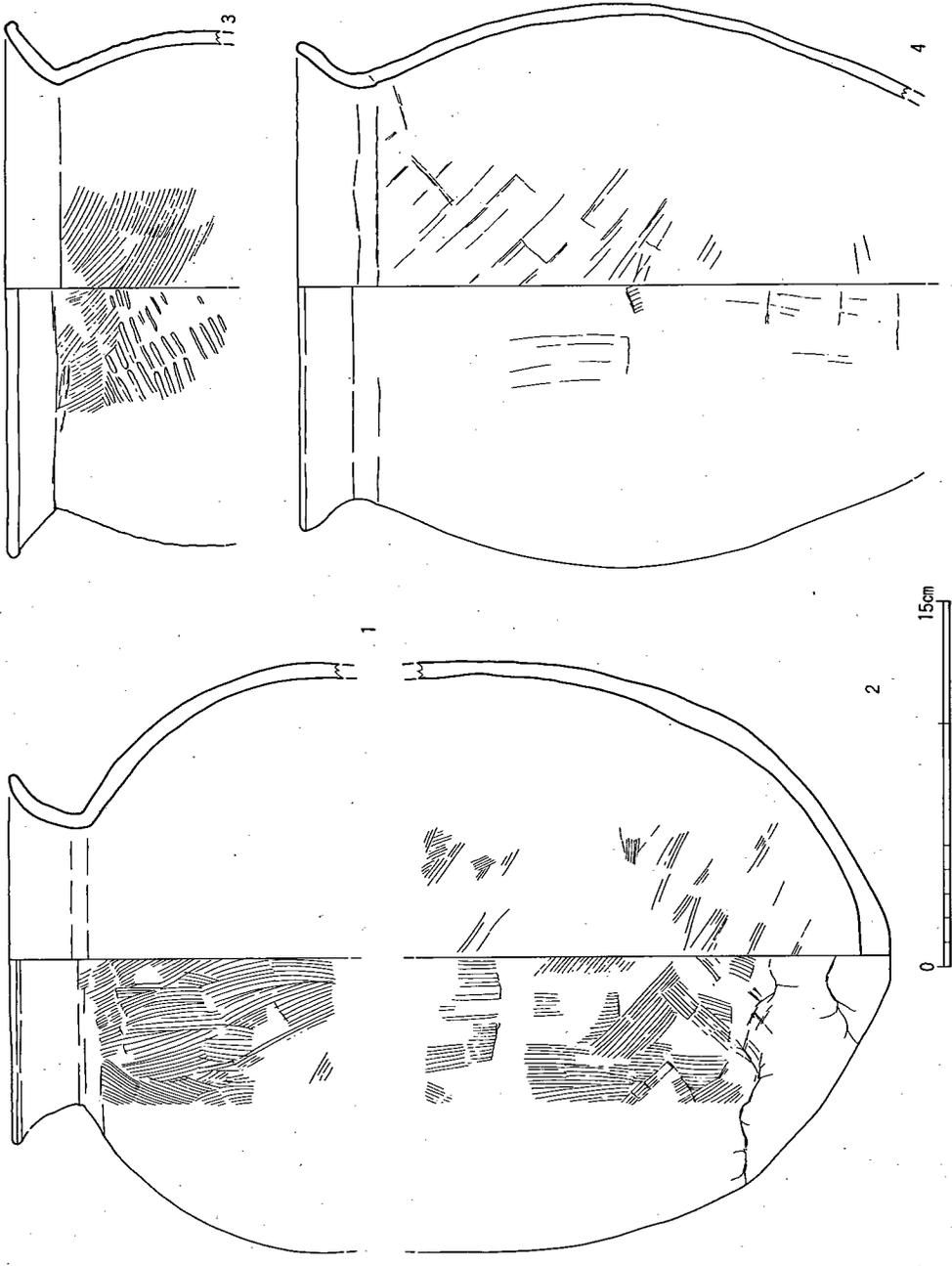
第20図 5号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版37・38、第17・21・22図)

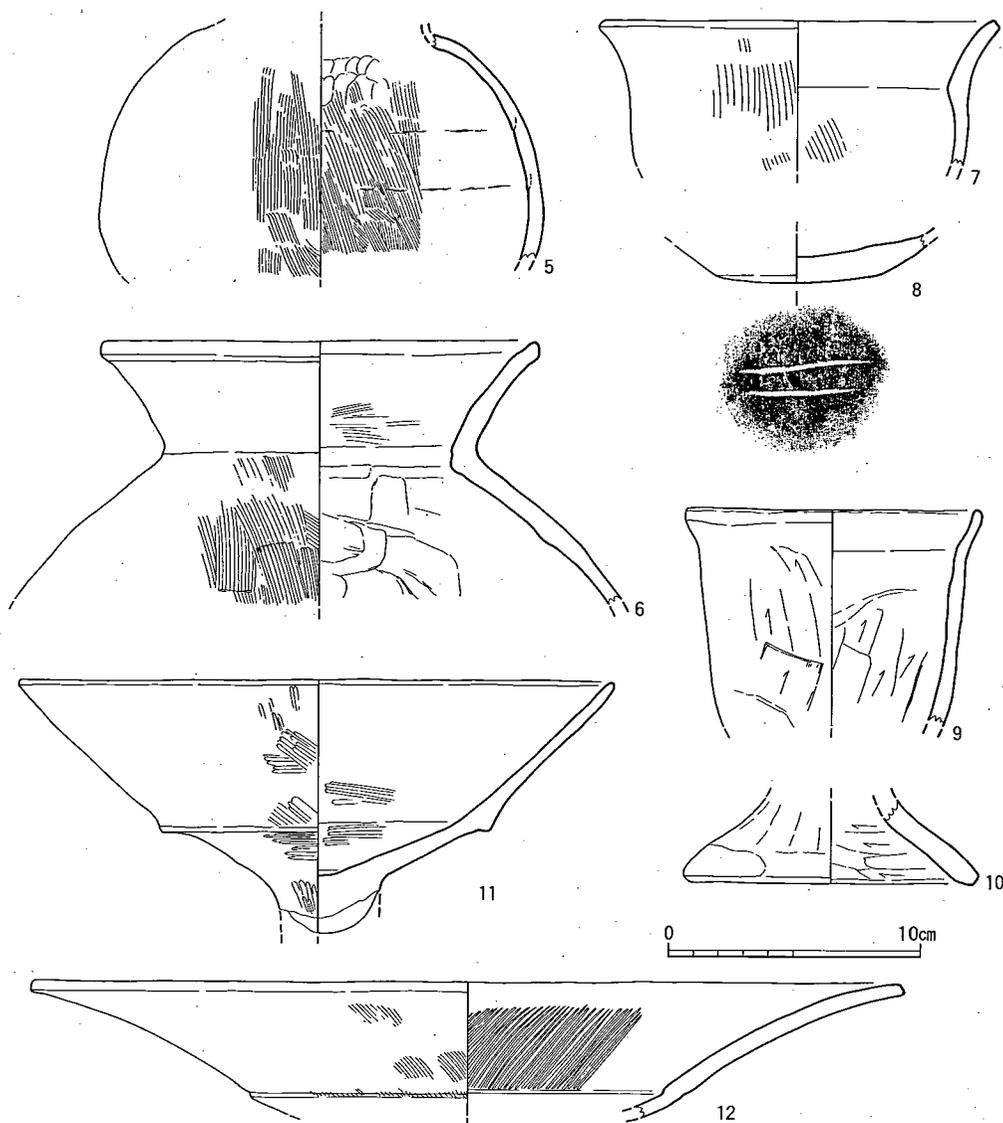
甕(1~4・8) 1・2は同一個体らしいが上手く接合しない。復原口径15.0cmの大きさで、口縁部は緩やかに外反する。窄まった頸から肩部へは丸く膨らみつつ胴部に移るが長胴で、直径2.5cm程の小さな底部へも緩やかに丸みをもってすぼまる。器高は32cm前後であろうか。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はハケ目調整され、底部外面はヘラ削りに近い板状工具によるナデで調整される。胎土に角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶灰褐色に焼成されている。3は口頸部がく字形に屈折して、直線的に開いた口縁部は端部で面をなす。復原口径は22.0cm。胴部内外面ともにハケ目調整されるが、肩部外面には叩き目がみられる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。4も長胴の甕で、底部を欠くが残存器高25.2cm、復原口径20.0cmの大きさ。口頸部はやや緩やかだが、く字形に屈折し、口縁端部はやや内彎気味。口縁部はヨコナデ調整される。胴部外面は磨滅するが部分的に工具ナデやハケ目の痕跡がみられ、内面は板状工具によるナデで調整される。胎土に角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、明茶灰褐色に焼成されている。8は底部破片で、凸レンズ状に膨らんだ外底面に、2条の直線がほぼ平行にヘラで描かれる。胎土に角閃石・石英を含み、赤茶褐色に焼成されている。

壺(5・6) 5は口縁部と胴下半を失うが、球形に膨らんだ胴部は内外面ともにハケ目調整され、内面の頸部付近に指頭圧痕のあるナデ痕がみられる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、橙茶褐色に焼成されているが、外面に煤が付着している。6は広口壺で、直線的に開く口縁部をもち、復原口径17.6cmの大きさ。胴部は丸みをもって膨らみ、外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されているが、外面に煤、内面にお焦げが付着するので甕として使用されたい。

鉢(7) 復原口径16.0cmの大きさで、胴下半を欠く。口頸部は外面で緩い如意状をなすが、



第21图 5号住居跡出土土器美測図1 (1/3)



第22図 5号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

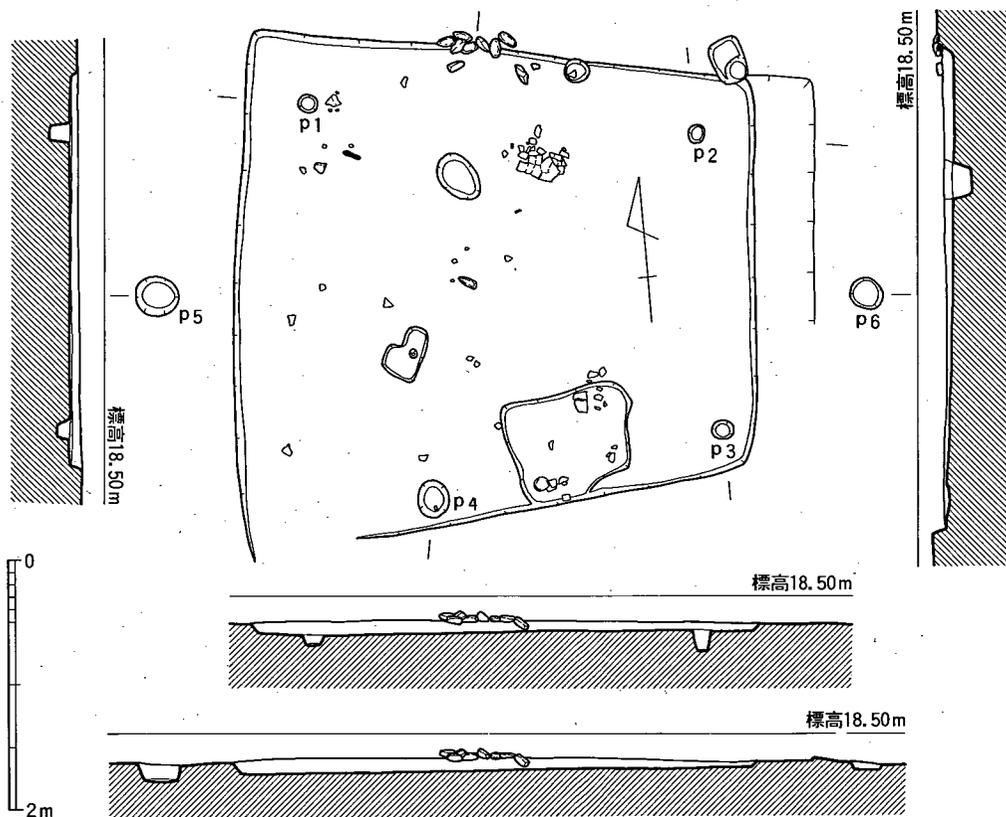
内面では稜をもって屈折していて、口唇部は面をなす。外面には縦方向の粗いハケ目が、内面にはやや細かなハケ目がみられる。胎土に角閃石・石英を含み、淡褐色に焼成されている。

製塩土器？(9) 底部を欠くが、復原口径11.6cm、残存器高8.6cmの大きさ。口頸部は如意状に外反するが、口縁端部はやや内彎する。胴部は膨らまずに底部に向かって窄まる。胴部内外面ともにヘラ削り状に調整される。胎土に角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、堅く焼成されているが、二次的に火熱を受けて灰黄褐色を呈している。

高杯(10~12) 10は脚裾部破片で復原裾径11.6cmの大きさ。外面はナデ調整、内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、茶褐色に焼成されている。11は杯部のみだが、復原口径23.9cm、残存器高9.5cmの大きさで、杯底から柱状部へソケット状に挿入・接合されるタイプである。短めの杯底部から凸帯状の段をなして口縁部が開き、内面は円錐状の器形をなす。杯部内外面ともにヘラ磨きの痕跡がみられる。胎土に砂粒・角閃石・石英・赤褐色粒を含み、灰茶褐色ないし赤褐色に焼成されている。12は杯口縁部破片で、大きく外反して開く口縁部は復原口径35.0cmの大きさである。杯部内面はヘラ磨きされるが、外面はハケ目の残るナデ調整で、屈折部にはハケ目原体の小口圧痕がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。

土器片円盤(第17図6) 砂粒・角閃石・石英を含み茶褐色に焼成された、沈線が巡り凹レンズ状上げ底の縄文土器底部を打ち欠き整形した円盤で、中央部は外底面側から穿孔されている。

出土土器では、弥生時代後期後半ないし末頃の甕や高杯をみるが、10の高杯裾部片・11の高杯杯部や6の甕らしい口縁部の端部の特徴などは古式土師器の範疇に入る。



第23図 6号住居跡実測図 (1/60)

6号住居跡(図版11、第23図)

B・C5区で発見された住居跡で、5号住居跡の東側に近接する。この住居跡も検出時に南から東側にかけてのプランがやや不明瞭であった。西辺が東辺より長く台形に近い不整形プランを呈すが、かなり削平されて、深さは3~10cm余りである。東辺は当初検出したラインよりも0.5m内側にやや明瞭なラインが検出された。北辺と南辺は4.0m、東辺は3.1m、西辺は4.3mを測る。床面はあまり堅く締まっていないが、四隅のうち南西隅を除く3ヶ所で柱穴が検出された。柱穴は直径10cm~15cm、深さ10cm~15cmだが、南西隅より東に寄ったP4は径は広いが浅い。また住居跡プランの外側ではほぼ長軸線(N85°W)に相当する位置に一对の柱穴状ピットP5・P6がある。柱穴間の距離ではP1-P2が3.1m、P2-P3が2.4m、P3-P4が2.4m、P4-P1が3.3m、P5-P6が5.7mである。しかしP5と、P1・P2間のピットは重複する9号建物に伴う柱穴で後出して切り込まれた位置にあり、P5が完全に重複したと仮定しないかぎり住居跡に伴うとはいえない。床面には炉跡・カマドなどの焼土を伴う部分は検出されなかったが、北辺のほぼ中央で河原石の集まった部分がみられた。

住居跡内ではP1とP2の間などに土器片が出土し、P1の南東側で鉄鎌が出土した。

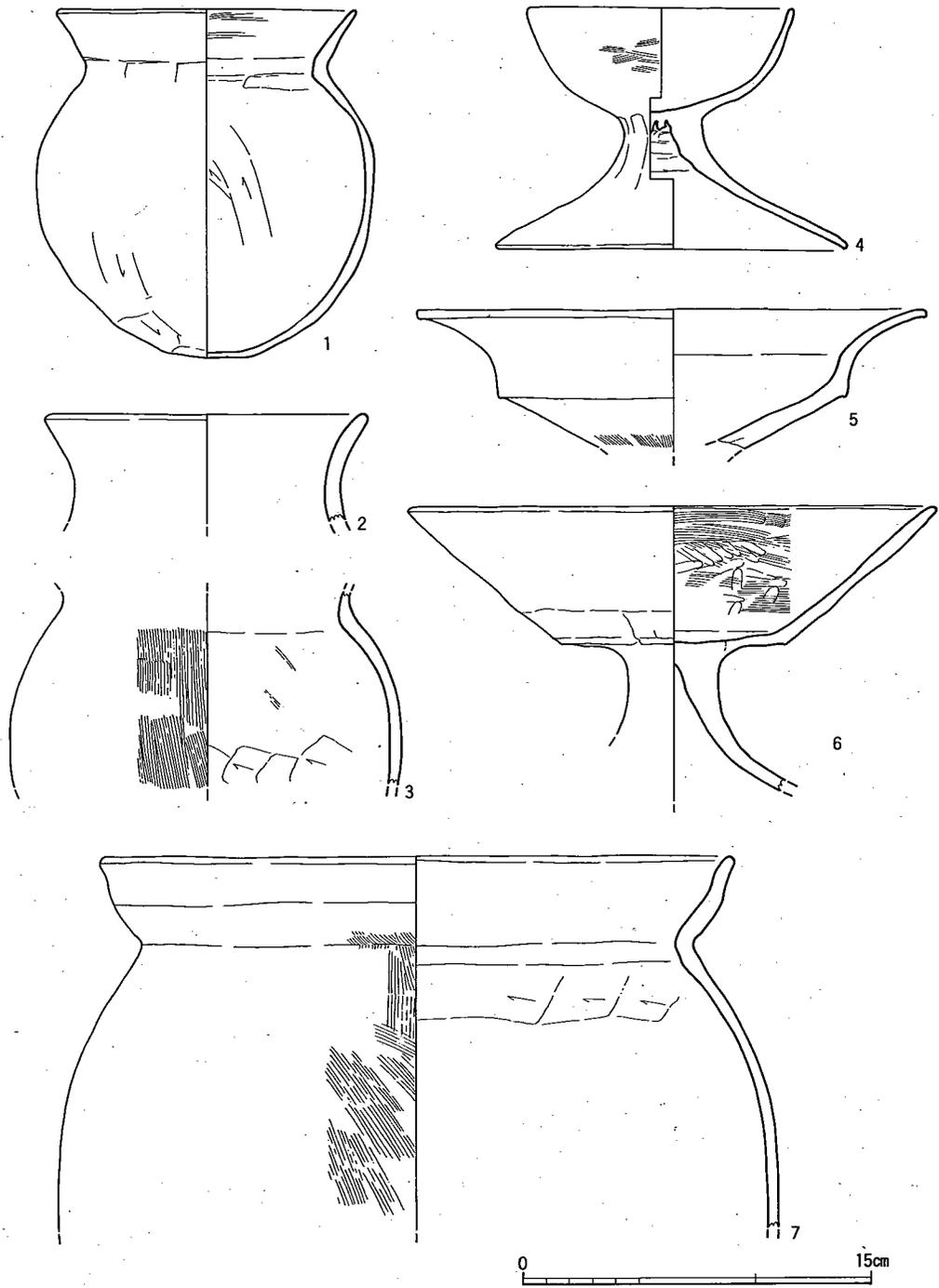
出土遺物(図版38、第24・25図)

土師器甕(1~3・7・8) 1は復原口径13.0cm、器高15.0cmの大きさの丸底の甕で、口縁部は直線的に開いて、口唇端部は丸味をもつ。二次的な火熱を受けていて、赤褐色ないし黒色を呈する外面の調整手法はよく分からないが、底部付近にはヘラ削りのような痕跡がある。内面は橙褐色でヘラ削りされているが、口縁部などに一部ハケ目がみられる。胎土には細砂粒を多く含み、角閃石・赤褐色粒・雲母も含まれている。2・3は胎土に砂粒・角閃石を含み、褐色ないし橙褐色に焼成された、復原口径14.0cmの口縁部破片と、胴最大径16.8cmの胴部破片である。口縁部は緩やかに外反し、ヨコナデないしナデ調整されている。胴部は外面をハケ目調整、内面をヘラ削りした後上半分にナデを加えている。

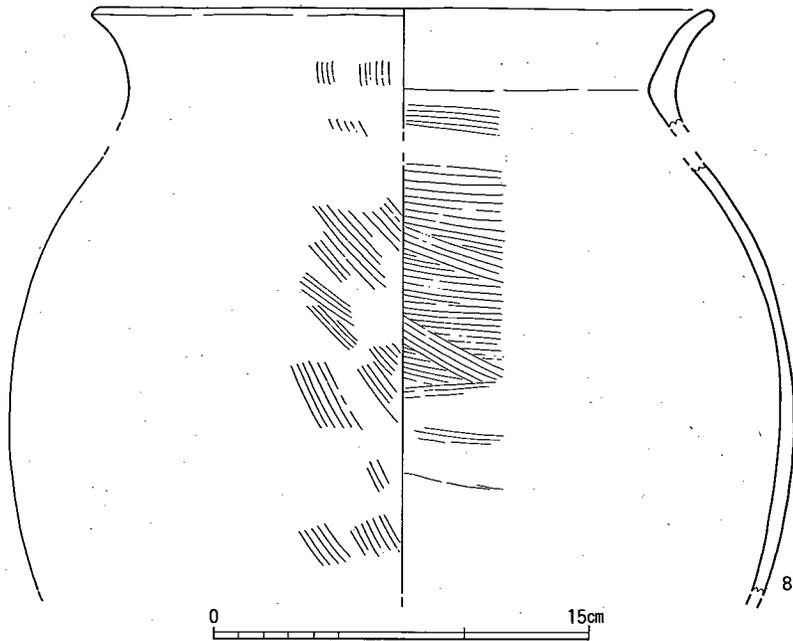
7は胴下半を欠くが丸みのある胴部に、内彎気味に開いて端部でやや外反する複合口縁の退化形態のような口縁部が付く。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部の少し下までヘラ削りされる。胎土に細砂粒を多くと角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されているが、内外面に煤・お焦げが付着する。

8は復原口径25.0cm、残存器高23.2cm、胴最大径31.8cmの大きさの甕。胴部は丸く、口頸部は緩やかに外反するが、頸部内面に稜をもち、口唇端部は丸い。胴部内外面はハケ目調整されてナデが加わる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし暗黄褐色に焼成されている。

高杯(4~6) 4は杯部が碗形の高杯で、脚部は大きく開く。内彎して立ち上がる口縁の杯部は口径11.6cm、杯内部高4.2cmで、緩やかに開いて端が内彎気味の裾部は径15.2cm。全体



第24图 6号住居迹出土土器实测图1 (1/3)



第25図 6号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

の器高は10.4cmの大きさ。杯部外面にハケ目が若干みられる他はナデ調整らしい。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。5は杯部破片で、斜めに開いた杯底部から、凸帯状の段をなして屈曲した口縁部が外反する。復原口径21.8cmの大きさで、柱状部に近い杯外底部にハケ目が残るものの、板状工具を用いたナデないしヨコナデで調整される。胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、淡明褐色に焼成されている。6は平らな杯底部から段をなして屈曲した口縁部が直線的に開く杯部をもつ。柱状部は中空で外反して裾に開くが、裾端部は残らない。復原口径22.8cm、残存器高12.2cmの大きさで、杯部高は6.0cm。杯部内面にはハケ目の後にヘラ磨きが加わり、その他の部分の調整は板状工具によるナデで一部ヘラ磨き加わる。胎土に細砂粒・石英・角閃石を含み、橙茶褐色に焼成されている。

鉄 鎌(第19図5) ほぼ完形の鉄鎌で、基部端は折れ曲がる。長さ14.2cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmの大きさで、刃部は長さ10.5cmで僅かに内反する。基部は長さ3.8cm、幅2.3cm～2.8cmで、端部は約1.0cmの長さに曲がるが、木質などはみられない。

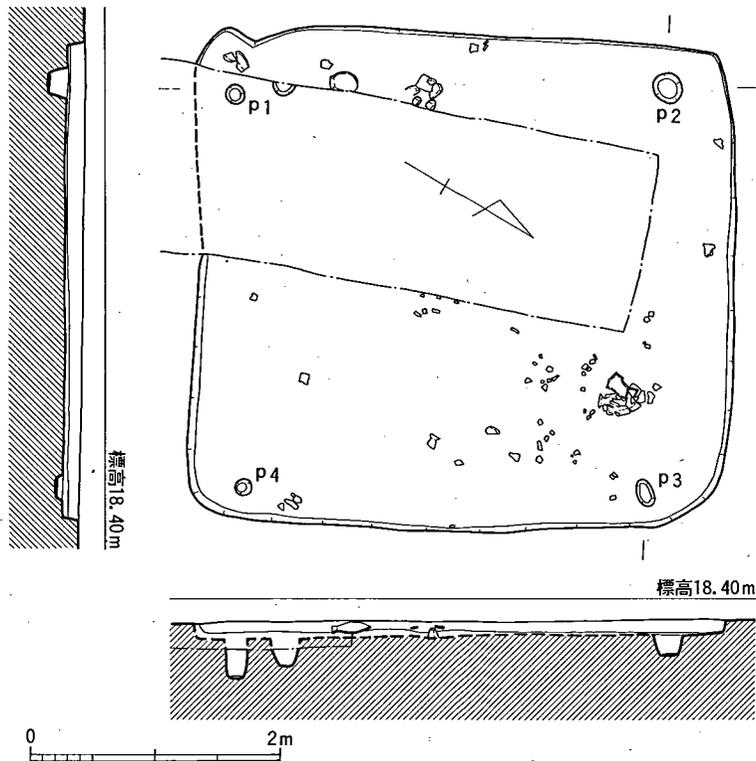
出土土器では、高杯などに若干時期を遡らせる要素はあるものの、丸底の甕1や、内彎する口縁部をもつ甕7が頸部下の胴部内面までヘラ削りされていることから4世紀後半頃の時期を考えた。

7号住居跡 (図版12-1、第26図)

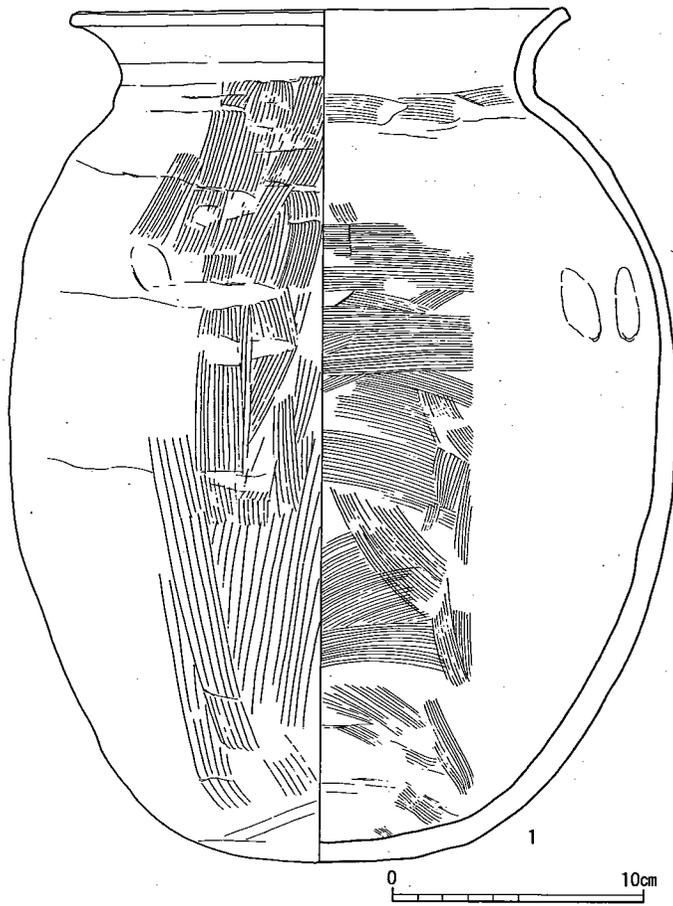
F・G 6区で発見された住居跡で、試掘トレンチによって西寄りの部分を失う。東西3.8m、南北4.3mの広さで、南北が若干長めの不整形プランを呈し、深さは約10cm残る。長軸方向はN31°30'Wをとり、長辺の西壁中央にカマドが付設されていたようである。床面は中央部の一部を除き、あまり堅く締まらないが、四隅に柱穴が検出された。柱穴は直径15cm~20cm、深さ5cm~30cmだが、南東隅部のP4は浅い。なお柱穴間の距離ではP1-P2が3.4m、P2-P3が3.3m、P3-P4が3.2m、P1-P4が3.2mである。カマドは、不用意に掘り下げて、壁および袖部分を確認出来なかったが、P1とP2の間で試掘トレンチの脇に支脚石とみられる長さ13cm、直径7cm程の長卵形の石が床面に一部埋め込まれた状態で発見され、石を囲むようにして小さな河原石や土器片が出土した。火床になる部分は試掘トレンチによって失われた可能性が高いもののあまり顕著な焼け方でなく、やや堅い面を確認するにとどまった。この石から周壁までは約50cmの距離があるものの、カマドの規模などについては分からない。

出土遺物 (図版38・39、第27図)

土師器甕(1~3・5・6) 1はP3の西側で出土した、復原口径19.6cm、器高34.5cm、胴最



第26図 7号住居跡実測図 (1/60)



第27図 7号住居跡出土土器実測図1 (1/3)

大径26.5cmの大きさの、長胴の甕。底部は平らに近い丸底で、口縁部は緩やかに外反する。胴部外面は粗い縦方向のハケ目、内面は細かな横・斜方向ハケ目で調整され、内面にはナデが加わっている。胎土に細砂粒・雲母を含み、淡い橙茶褐色に焼成されている。3も復原口径16.0cmの、緩やかに外反する口縁部をもつ甕の口頸部破片。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は指頭圧痕の残るナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

2は複合口縁の甕口頸部破片で、直線的に開いた口縁は端部に面をもつ。胴部外面はハケ目調整、内面は

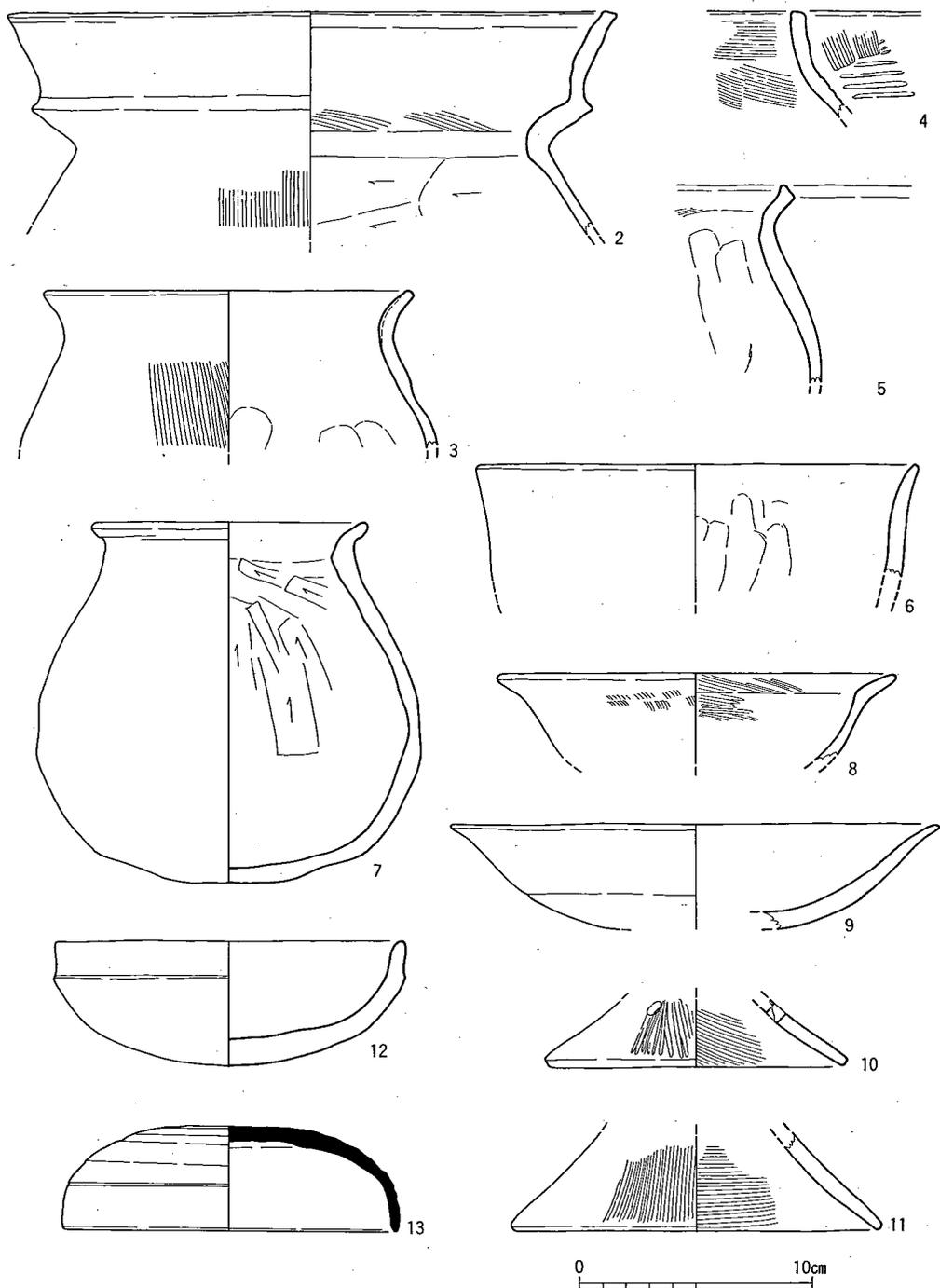
頸部の下までヘラ削りされる。復原口径26.2cmの大きさで、胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、明褐色に焼成されている。

5はなで肩の胴部をもち、緩やかに外反する口縁部は端部で上につまみ上げたような面をなす。内外面ともにナデないし板ナデ調整され、砂粒・角閃石・石英を含む胎土で褐色に焼成されている。

6は直線的に開いた胴部から口縁部が緩く僅かに外反する。内外面ともにナデ・ヨコナデ調整されるが、復原口径19.0cmの大きさ。砂粒・角閃石・石英を含む胎土で茶褐色に焼成されている。

土師器壺(4・7) 4は内傾気味の直口壺らしい口縁部破片で、内外面ともにハケ目調整され、肩部外面には平行の叩き目が残る。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成されている。

7はP1とカマドの間で出土した、復原口径12.0cm、器高15.5cm、胴最大径16.5cmの大き



第28图 7号住居跡出土土器实测图2 (1/3)

さの短頸壺。口縁部は短く外反する。胴部は最大径の位置が下位にあり、なで肩で下膨れの感じが強い。胴部外面はナデ調整、内面は頸部までヘラ削りで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、暗橙色に焼成されているが、二次的な火熱を受けて赤褐色の色調に変化した部分も多く、煤・お焦げの付着もみられる。

土師器高杯(8-11) 8・9は杯部破片、10・11は脚裾部破片である。8は復原口径17.2cmの大きさで、丸みのある体部をもち、口縁部は短く外へ開く。外面はハケ目の後にナデが加わり、内面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、橙黄褐色に焼成されている。9も体部に丸みをもつが、杯底部と口縁部の境に僅かな段を有して、口縁部は緩やかに外反しながら開く。器面は風化が進み調整手法はよく分からないが、外面をナデ、内面をヘラ磨き調整している感じである。胎土に細砂粒・角閃石を含み、黄灰茶褐色に焼成されている。

10・11は復原裾径13.0cmと16.0cmの、ラップ状に開く脚裾部である。10では円孔が3ヶ所穿たれて、外面がヘラ磨き、内面をハケ目調整される。11は孔が不明で、内外面ともハケ目調整される。いずれも胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色ないし暗黄褐色に焼成されている。

土師器杯(12) 須恵器杯蓋を模倣したような杯で、復原口径15.0cm、器高5.4cmの大きさ。丸底の体部に僅かな段をつくって、口縁部が外反気味に立ち上がる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、にぶい橙色に焼成されている。

須恵器杯蓋(13) P1の西側で出土した、身受けのかえりを有さない杯蓋で、口径14.4cm、器高4.5cmの大きさ。外天井にはヘラ切り離しの痕跡が残る。やや堅めの焼成で茶灰色に焼成されている。

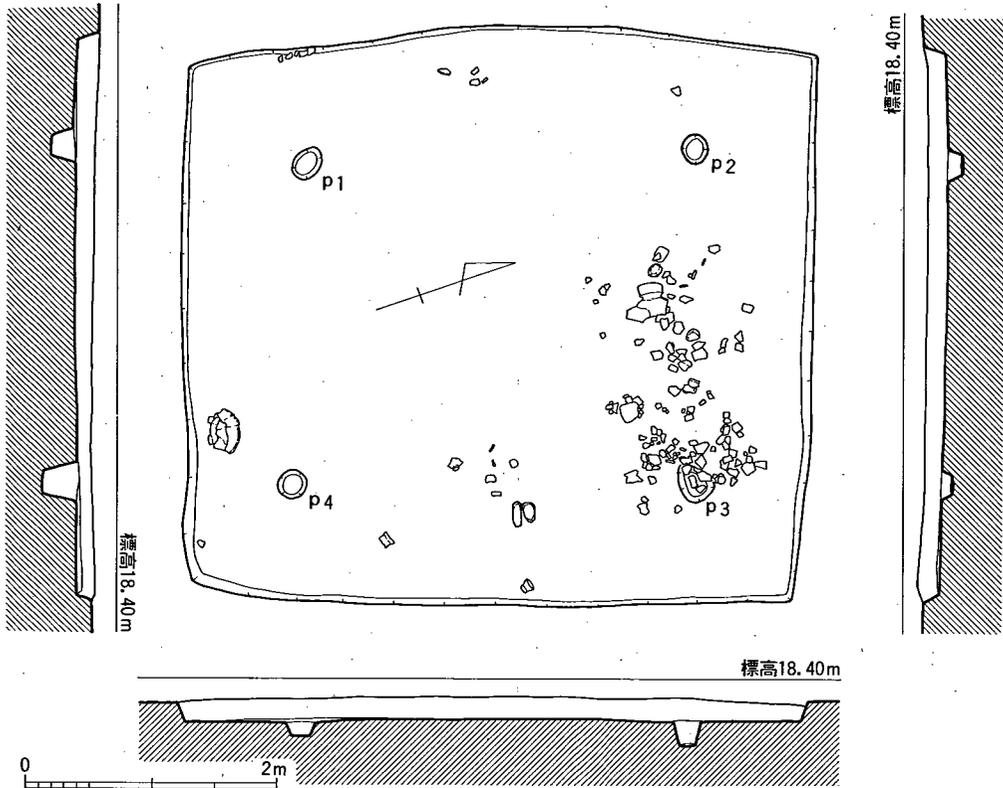
砥石(第77図19) 一部欠損する部分があるものの、花崗岩質の棒状の石材を用いていて、長さ19.0cm、幅8.7cm、厚さ6.5cmの大きさ、1662gの重量を測る。図示した平滑な面と左側側面が砥面として使用されているが、下端面には敲打痕が顕著にみられる。

用途不明鉄製品(第17図6・7・8) 6・7は、ともに部分の破片で、全体の形状は不明。6は幅1.6cm、厚さ0.3cm程の薄い蒲鉾状断面の板のようなものだが、錆化が激しく先端側は分からない。7は幅1.6cm、厚さ0.2cm弱の扁平な板で、端部は丸いようである。長さ2.0cm分残る。8は検出面で出土した、先端・基部端を欠くものの鉄鍍鍔被部の可能性がある破片。やや反るが、長さ5.1cm、幅・厚さ0.3~0.6cmの大きさ。木質は付着していない。

出土土器では、複合口縁をもつ甕など4世紀に入るものもあるが、長胴丸底甕や下膨れの短頸壺や須恵器杯蓋の特徴などからみて、6世紀中頃以降の時期であろう。

8号住居跡(図版12-2・13、第29図)

C9・10区で発見された竪穴住居跡で、2号住居跡の東側にある。東西4.5m、南北5.0mの広さで、南北が若干長めの不整形プランを呈し、周壁は10cm~20cmの高さに残る。長軸方



第29図 8号住居跡実測図 (1/60)

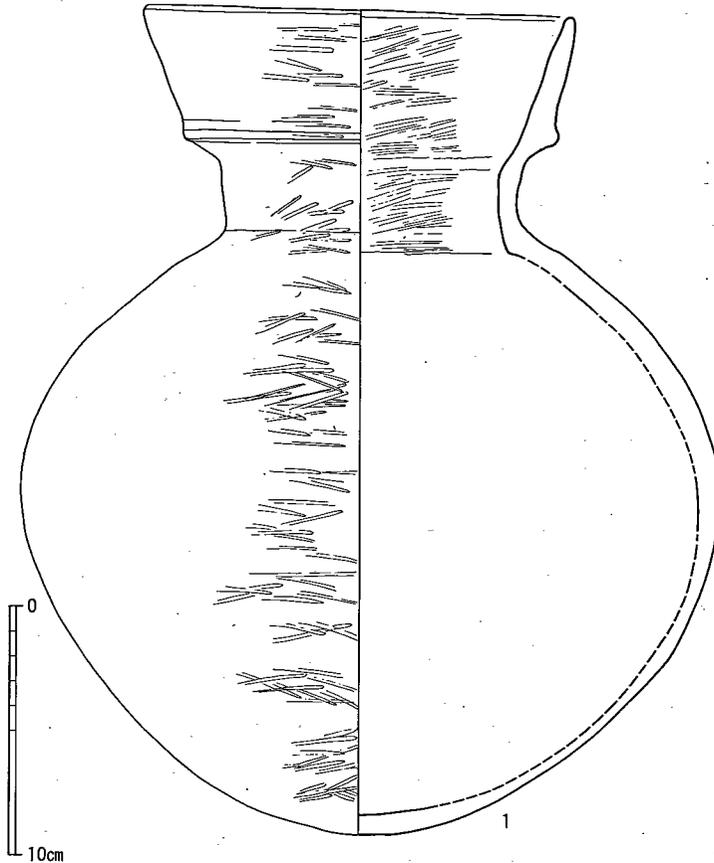
向はN19°20'Eをとる。床面は中央部を除き、あまり堅く締まっていないが、四隅に柱穴が検出された。柱穴は直径20cm前後、深さ10cm～30cmだが、南側のP1とP4は浅い。なお柱穴間の距離ではP1-P2が3.1m、P2-P3が2.7m、P3-P4が3.2m、P1-P4が2.6mである。炉跡あるいはカマドなどの、焼土を伴う施設は検出できなかった。住居跡内では、P3を中心とした部分で土器片などがまとまって出土した。

出土遺物 (図版39、第30・31図)

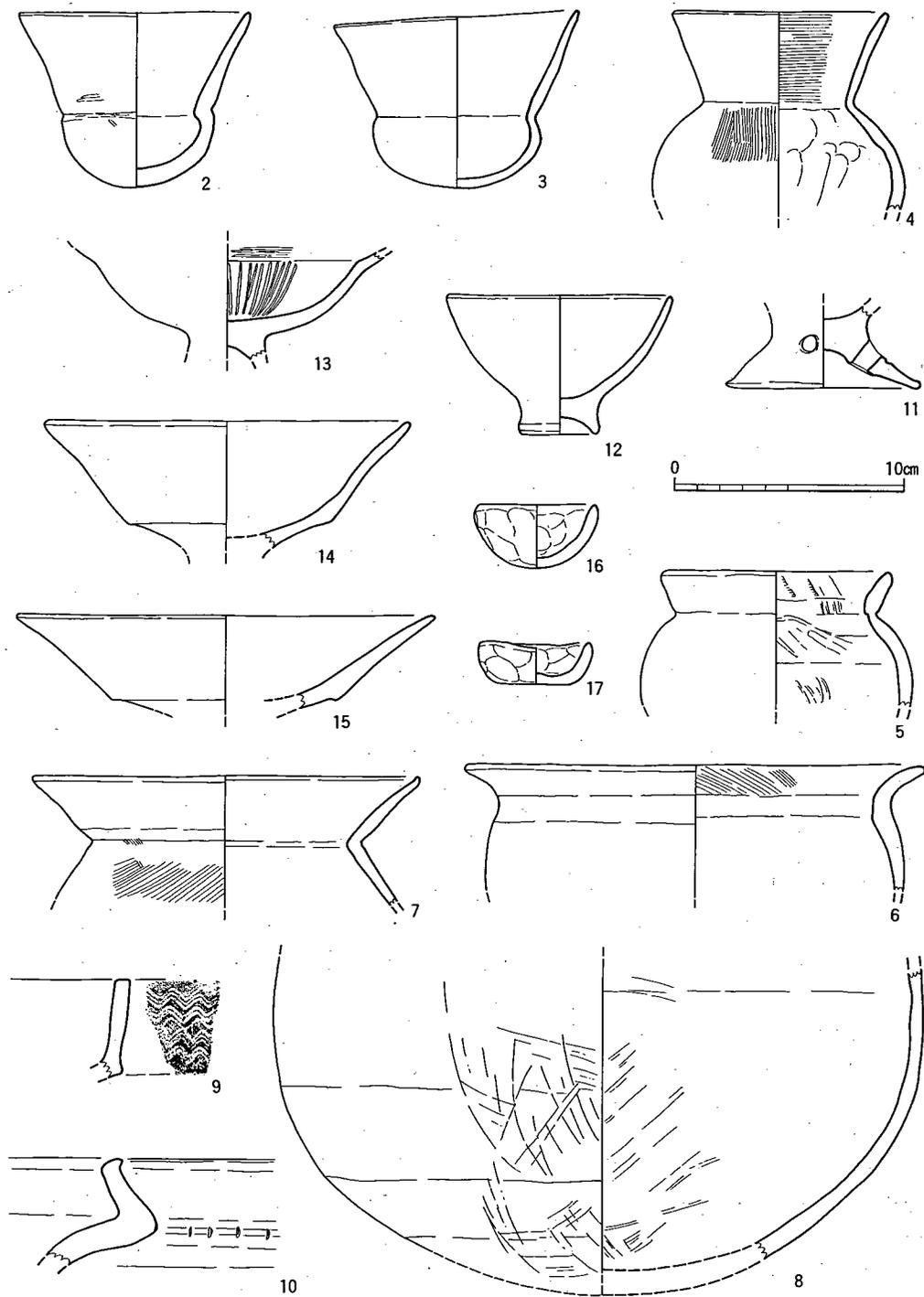
土師器複合口縁壺(1・9・10) 1は口径17.1cm、器高33.2cm、胴最大径27.8cmの大きさ。底部は僅かに尖る丸底で、口縁部は低い凸帯状の段を介して直線的に開き気味に立ち上がる。胴部内面の調整はよく分からないがナデ調整であろうか。胴部内面以外の全面がヘラ磨き調整され、細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、明橙色に焼成されている。9は直に立ち上がる口縁部破片で、外面に波状文が描かれる。10は屈曲部に刻み目が付される口縁部破片で、端部は反り気味に内傾する。9・10ともに細砂粒・角閃石を含む胎土で暗黄褐色に焼成されている。

土師器小形丸底壺(2~4) 2・3は、口縁部が径・高さともに体部を凌駕する小形丸底壺で、扁球形の体部に直線的に開く口縁部が付く。口径10.2cm・10.8cm、器高8.1cm・7.5cmを測る。板状工具によるナデないしナデ調整され、一部ヘラ磨きの痕跡もみられる。胎土に角閃石・石英・赤褐色粒を含み、暗茶褐色・淡灰褐色に焼成されている。4は復原口径9.7cm、胴最大径11.0cmの大きさで、胴部が口縁部より大きな丸底壺。肩部外面と口縁部内面がハケ目調整、他はヨコナデないしナデ調整される。胎土に砂粒・石英を含み、橙褐色に焼成されている。

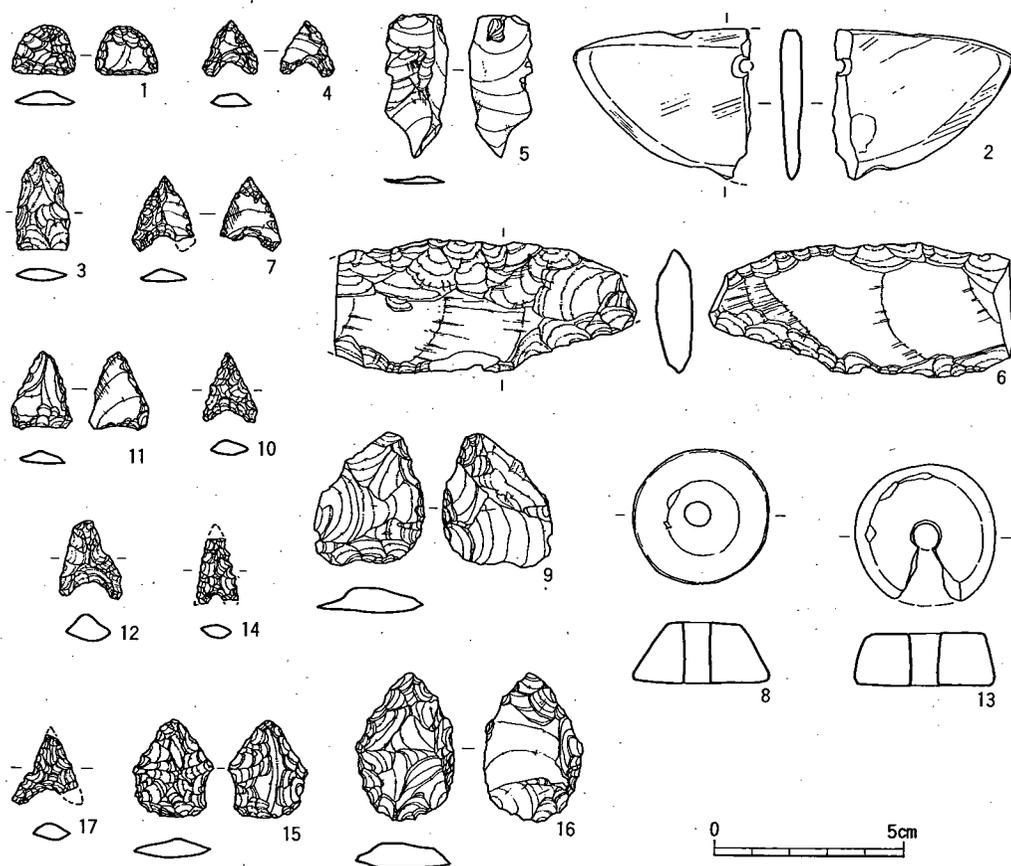
土師器甕(5~8・11) 5は復原口径10.2cm、胴最大径12.0cmの大きさの小形甕で、口縁部はやや肥厚して、外反する。外面はやや磨滅が進むものの、内外面ともに板状工具でナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成されている。6は口縁部が強めに外反する甕で、復原口径20.0cmの大きさ。口縁部内面にハケ目が残るものの、他はヨコナデないしナデ調整される。胎土には角閃石・石英・赤褐色粒を含み、淡黄茶褐色に焼成されている。7は口縁部が直線的に開くが端部は僅かに内彎する。復原口径17.1cmの大きさで、胴部外面に



第30図 8号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第31图 8号住居跡出土土器实测图2 (1/3)



第32図 住居跡出土石器実測図1 (1/2)

ハケ目がみられるものの、他はヨコナデないしナデ調整される。胎土には砂粒・石英・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。9は甕か否かの区別をし難いが、丸底の胴下半とみられる破片で胴最大径28.4cmの大きさ。内外面ともに板状工具でナデられる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されている。

11は脚台部破片で、外反する径8.4cmの裾部をもち、裾部上に円孔が4穴穿たれる。内外面ともにナデ調整されるが、内底部の凹み具合から台付き甕の可能性があろう。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、暗褐色に焼成されている。

台付き鉢(12) 復原口径9.8cm、器高6.1cmの大きさで、鉢部は内彎気味に開く。脚台部も内彎気味で低い。器面が磨滅・風化して調整手法は分からないが、脚台内面などにナデ痕がみられる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、橙茶褐色に焼成されている。

高杯(13~15) 13は脚裾部と杯口縁部を欠くが、杯底部は内彎して開く椀形で口縁部は外

反して端部は内彎気味である。外面は風化が進み調整手法は不明。杯部内面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、褐色に焼成されている。

14・15は小さめの杯底部から屈曲して口縁部が長めに開く杯部。口縁部は緩やかに外反するが、14に比して15はやや浅い。復原口径は14が16.0cm、15が18.4cm、杯口縁の高さは14が3.7cm、15が5.5cmを測る。いずれも器面が風化して調整手法は不明。胎土に細砂粒・角閃石を含み、橙褐色・淡黄褐色に焼成されている。

手捏土器(16・17) 16は口径5.4cm、器高2.8cmの大きさの碗形の土器。17は口径4.9cm、器高1.8の大きさの杯形の土器。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、灰黄褐色に焼成されている。

打製石鏃(第32図1) 姫島産黒曜石を用いた灰色の石鏃で、基部が凹まない平基の類だが先端部も尖らない。主要剥離面の一部を残すが、周縁全体に調整剥離を加えている。長さ1.3cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量0.9gを測る。

砥石(第82図37) 乳白灰色を呈する凝灰質砂岩製の砥石で、肌理は細かい。長さ8.1cm、幅4.4cm、厚さ1.1cm、重量42.8gを測る。

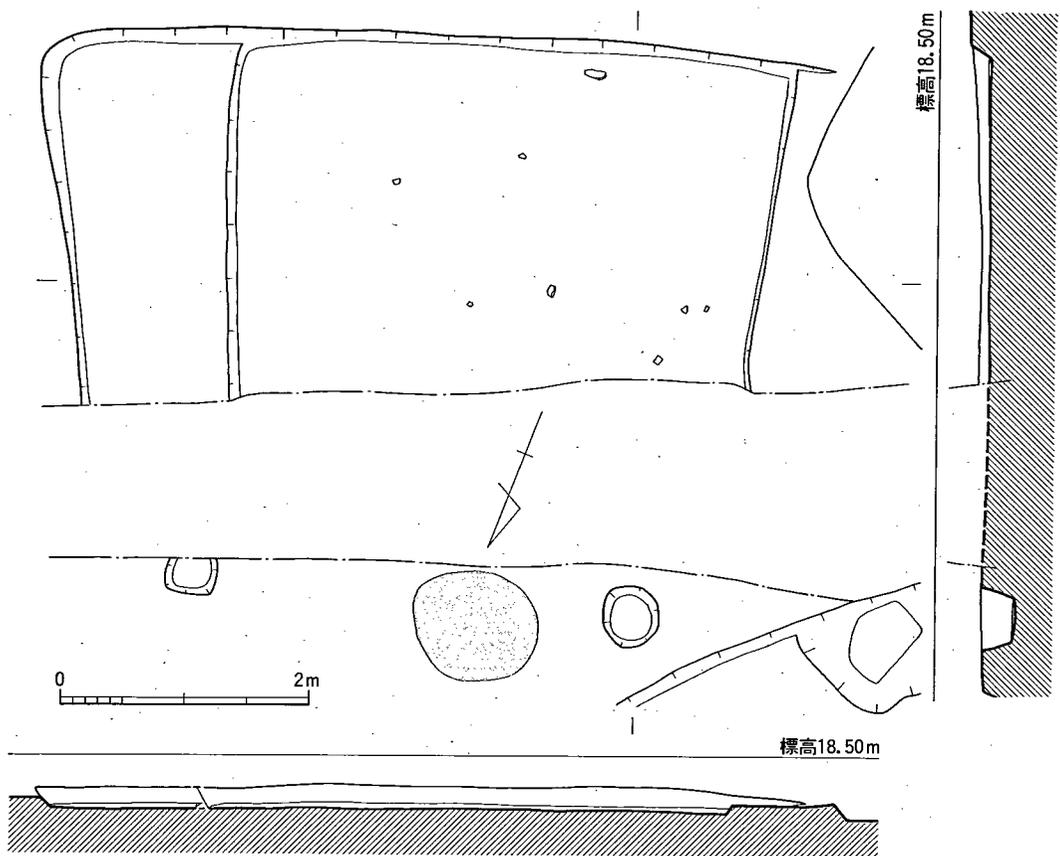
出土土器は、壺・甕・小形丸底壺などの特徴からみて、3世紀末から4世紀前半頃の年代であろう。

9号住居跡(図版14-1、第33図)

D13区で発見された住居跡で、水路保全のための非調査区域にかかる。北西側で19号住居跡、西側で22号住居跡などと重複する。Ⅱ区側では攪乱を受けているなどで、プランを上手く検出できなかったのと、Ⅰ区西端部で少し深めに表土を除去したため、全体の規模は不明確である。現状では、東西6.2m以上、南北5.0m以上の広さで、東西両側にベッド状遺構を伴うようにみえて、深さは15cm以下に残る。これらからは長軸方向がN69°E前後で、東西7m余り、南北6m程の不整長方形プランに想定される。床面は全体にやや堅く締まるが、砂と粘土質の土が交じったような状態で分かりにくい。床面を掘り込む柱穴は、水路部分の北側で一つ検出されたが、他の柱穴は検出しえなかった。この柱穴は直径50cm、深さ25cmの規模である。また、柱穴の東側に木炭・灰と淡く焼けた焼土が確認されたものの、炉は、通常住居跡の中央に位置することが多く、本来この住居の炉か否かの確認は難しい。出土土器では弥生土器は小破片が若干みられるのみで、むしろ須恵器片・土師器片の方が目立つことからすれば、焼土部分をカマドの痕跡とみて、南辺6.0m、南北5.0m、北辺5.0m前後の台形様の不整形プランに想定するのが妥当かもしれない。

出土遺物(第34図)

須恵器杯蓋(1) 復原口径14.5cm、残存器高4.2cmの大きさの杯蓋で、身受けのかえりを有



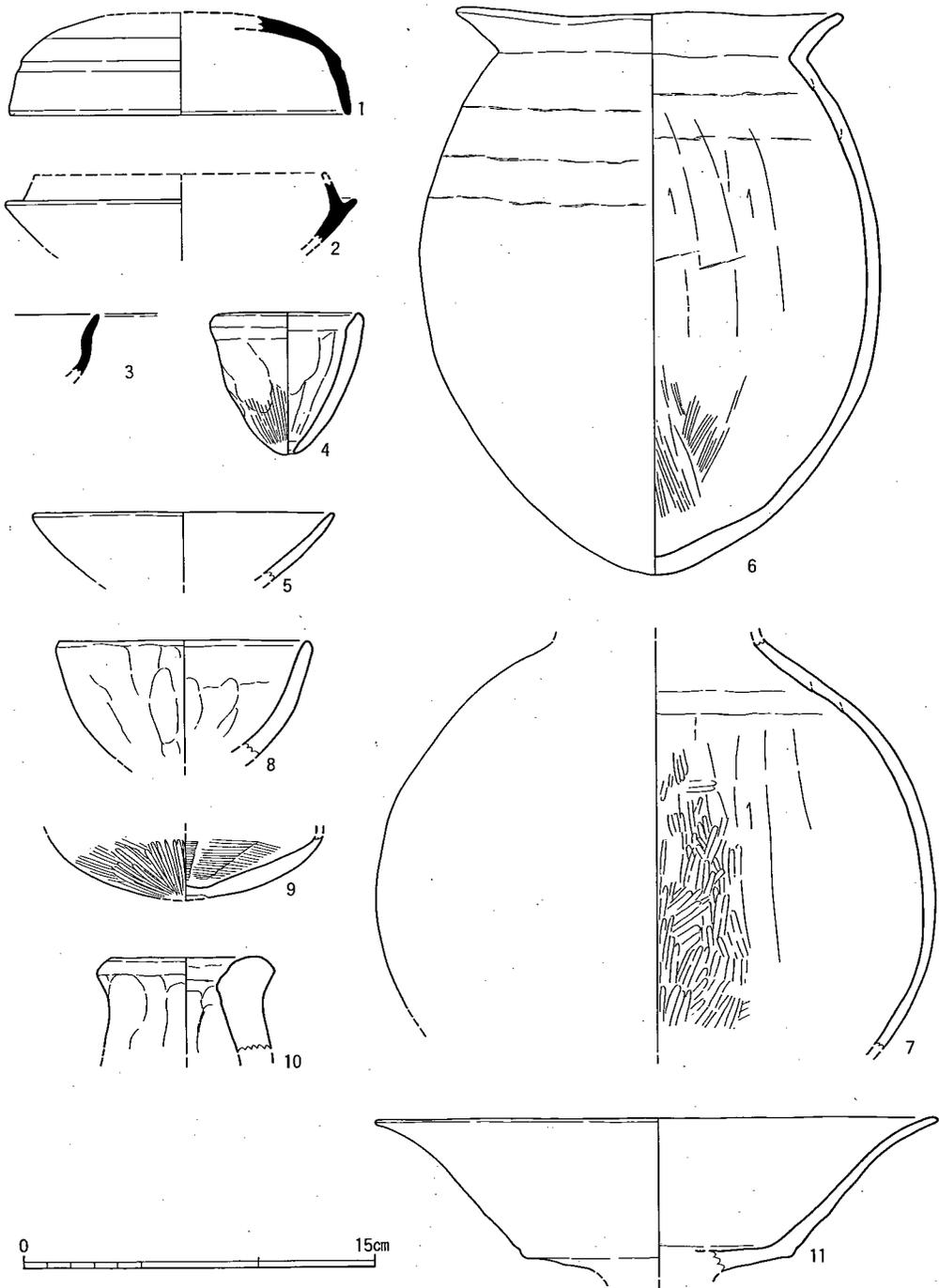
第33図 9号住居跡実測図 (1/60)

さないタイプである。外面に低い段があり、外天井は回転ヘラ削りされる。堅い焼成で、色調は暗灰色を呈する。

須恵器杯身(2・3) 2は復原外径15.1cmの大きさの杯身で、蓋受けのかえりがある。口縁部は直線的に内傾するが、端部を欠く。堅い焼成で、淡茶灰色を呈している。3は口縁部が緩やかに外反する杯の小破片で、暗灰色に堅く焼成されている。

土師器蛸壺?(4) 復原口径6.6cm、器高6.1cmの大きさの、砲弾形の器形で、尖った底に穿孔がある。器壁は口縁部に向かって厚めになるが、端部は摘んだように薄い。底部付近の外面はハケ目調整されるが、他は全体にナデられる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。甑のミニチュアともみえるが、蛸壺の可能性も考えたい。

土師器椀(5) 内彎気味ながらも直線的に口縁部が開く椀で、復原口径13.0cmの大きさ。器面は風化するが、胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、淡橙褐色に焼成される。



第34图 9·10号住居跡出土土器実測图1 (1/3)

砥石(第77図20・21) 20は頁岩質の石材を用いた、淡黄褐色を呈する砥石で、肌理は細かい。現存長4.2cm、最大幅4.7cm、厚さ1.7cm、重量27.2gの大きさで、4面ともによく使用されている。21は乳白色を呈する凝灰質砂岩製の砥石で、やはり肌理は細かい。長さ5.7cm、幅3.1cm、厚さ3.0cm、重量49gの大きさで、4ともによく使用されている。

出土土器では、須恵器杯蓋・杯身の特徴から、6世紀後半頃に考えられる。

10号住居跡(図版14-1、第35図)

C14区で発見された竪穴住居跡で、9号住居跡の西側にあり、9号住居跡に切られるが、11号住居跡よりは後出する。水路保全の非発掘区域があるために、プランの確定に手間取って、後述する22号住居跡との関係はよく分からなかったが、同一住居の可能性が極めて高い。I区では北辺3.9m、東辺3.3mを確認したが、北辺の途中で南側に曲がるコーナーが発見され、別住居の可能性も考えられた。III区側ではI区で確認された辺に対応する辺を検討したが、14号溝と20・21号住居跡とが重複していて、にわかにプランの確定ができないまま、22号住居跡として独立させて調査を進めていたため区別している。ここではI区で発見された外側の辺をもって、10号住居跡としておくことにする。

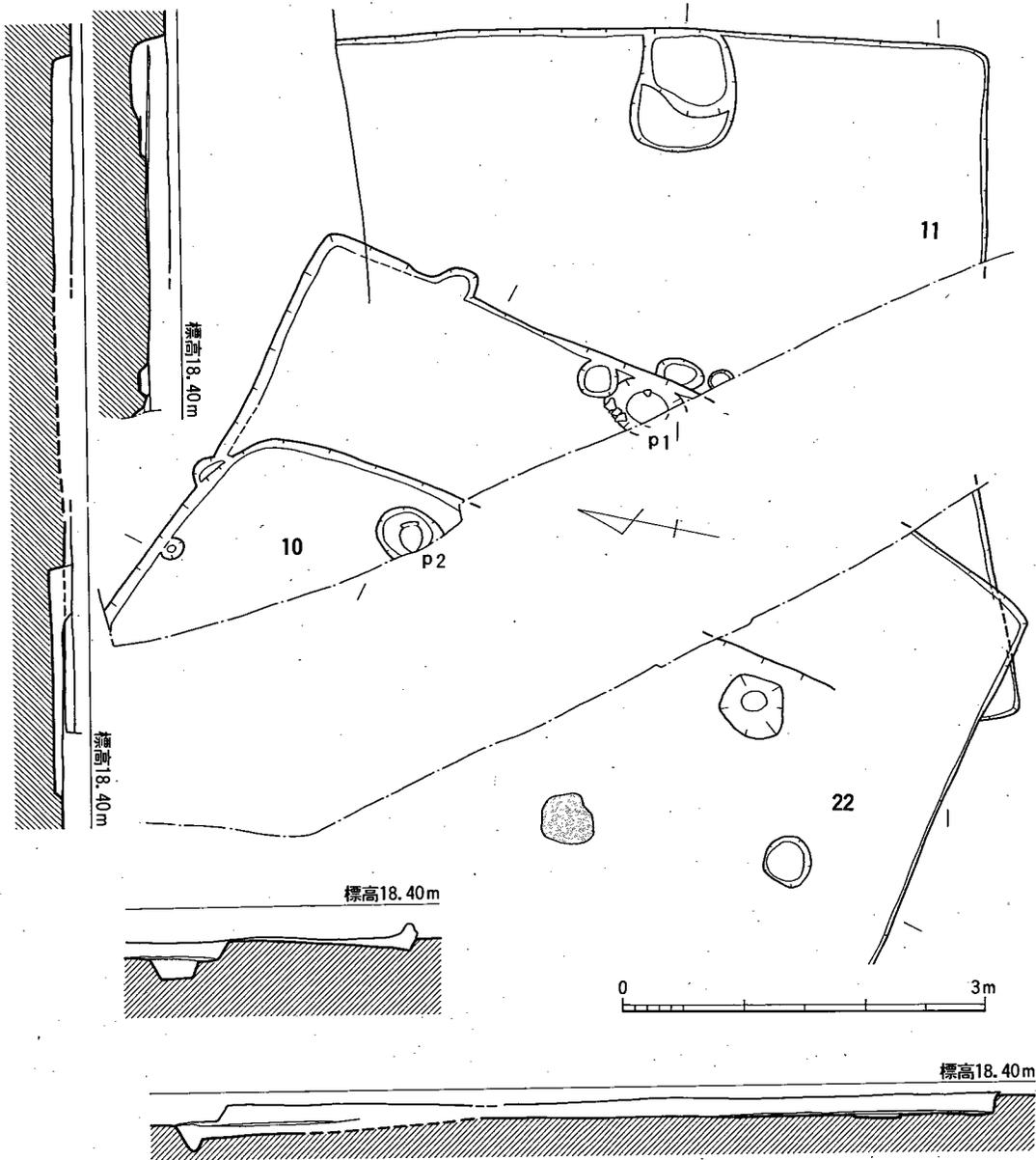
不整形プランで、周壁は東端の辺で5cm～15cmの高さに残り、内側の壁は高さ10cm余りに残る。床面は内側の低い部分はやや堅めに締まるが、東側の1.5m幅部分はさほど堅く締まっていない。柱穴は調査区域端の周壁横に各1ヶ所検出された。柱穴は直径40cm～50cm、深さ20cm～30cmだが、西側のP2には甕が埋置されていた。炉跡あるいはカマドなどの、焼土を伴う部分はI区の範囲内ではみられない。

出土遺物(図版39、第34・36図)

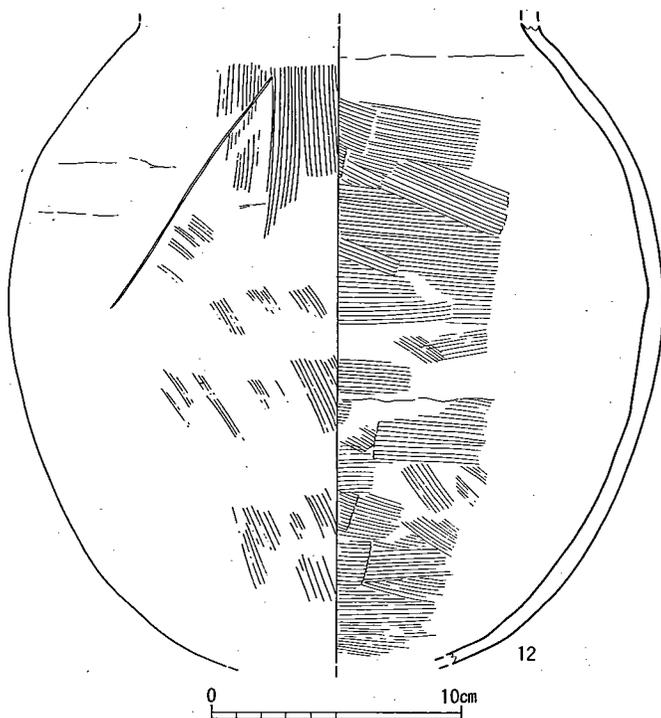
土師器甕(6・12) 6は口径16.2cm、器高25.0cm、胴最大径19.3cmの大きさ。口縁部は短く直線的に開くが端部はやや外反する。頸部の屈折は内面に稜をもち、長胴の胴部へは緩やかに膨れて、底部は丸みをもって尖る。胴部外面は磨滅して調整手法は分からない。内面はヘラ削りされるが、胴下半にハケ目がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成されて、胴部外面に煤が付着する。P2から出土した。

12は6の甕の下から出土した甕の胴部破片で約半分残る。胴最大径26.2cmの大きさで、口頸部と底部を欠くが、底部は丸底であろう。内外面ともにハケ目調整され、外面はハケ目の後にナデが加わる調整であろう。頸部外面はヨコナデ、内面はナデられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

土師器壺(7) この壺破片も6の甕と一緒に出土したが、口縁部と胴下部を欠く。球形の胴部は最大径23.9cmの大きさで、頸部径約9.0cmにすぼまる。外面は磨滅するが、内面にはヘラ削りした後にヘラ磨きを加えた痕跡がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含



第35図 10・11号住居跡実測図 (1/60)



第36図 10号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

み、淡橙褐色に焼成されている。

土師器椀(8・9) 8は底部を欠くが、復原口径11.0cm、残存器高5.0cmの大きさの椀。口縁部は内彎気味に立ち上がり、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、灰黄褐色に焼成されている。9は内彎して立ち上がる口縁部側を欠くので器形は不明。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、灰黒褐色に焼成されている。

土師器支脚(10) 復原径

7.6cmの口縁部破片で、内外面ともにナデられる。

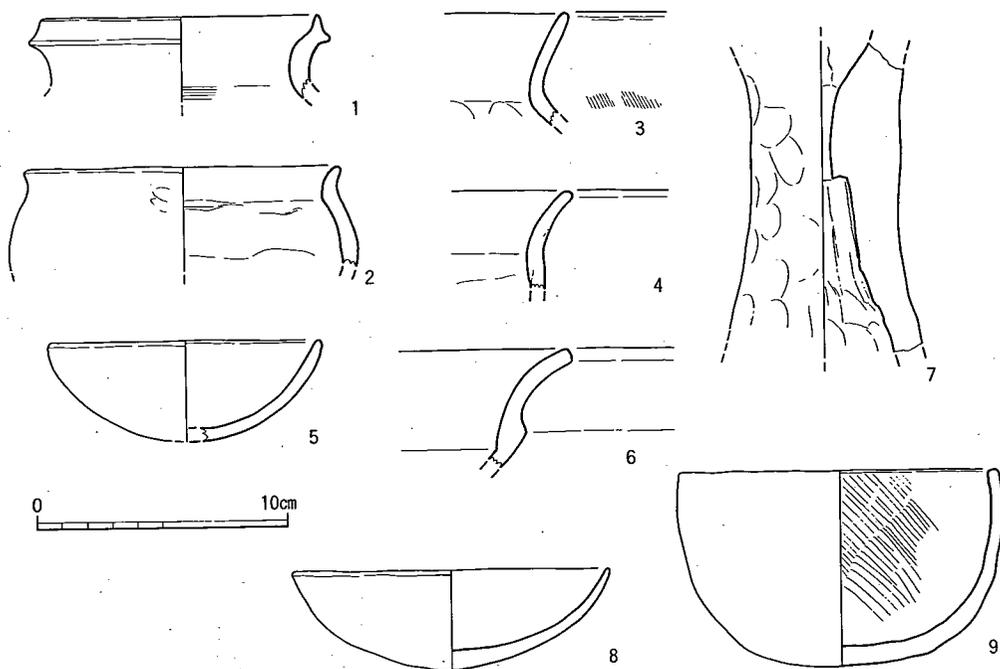
土師器高杯(11) P1内から出土した杯部破片で、平らな杯底部から口縁部が長めに外反して開く。復原口径23.6cm、杯部器高6.5cmの大きさで、脚裾部を欠く。胎土に細砂粒・角閃石・石英・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし橙褐色に焼成されている。

これらの土器では、P2出土甕の特徴から3世紀代に含めるべきであろう。

11号住居跡 (図版14-1、第35図)

C13区で発見された住居跡で、水路保全の為の非調査区域にかかり、北側を9号住居跡、西側を10号住居跡に切られる。I区内では、東辺は5.4m以上の長さ、南辺は1.8m以上の長さに検出され、主軸方向はN11°30'W前後である。非調査部分を挟んだ西側のⅢ区では辛うじて南西隅らしいコーナーが検出されて、これに従えば南辺5.5mの規模になる。周壁は15cm前後の高さに残るが、床面は周辺より少し堅い程度で西側の床が僅かに高めである。床面を掘り込むピットは、東辺に接した浅めの穴と、10号住居跡の壁に近い2ヶ所のみである。焼土や灰は検出されなかった。

出土遺物 (図版51、第37図)



第37図 11・12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

甕(1・3・4) 1は復原口径12.0cmの口縁部破片で、口縁上端を摘み上げたような形状をなす。頸部下の内面にハケ目がみられる。3・4は外反する口縁部破片で内面がナデられるものの3の胴部はハケ目がみられる。いずれも細砂粒・角閃石・石英を胎土に含み、淡灰黄褐色・淡茶褐色・茶褐色に焼成されている。

鉢(2) 復原口径12.5cm、残存器高4.2cmの大きさの口頸部破片で、口縁部は短く外反する。風化が進むもののナデ調整痕がみられ、砂粒・角閃石・石英を含む胎土で、赤褐色に焼成されている。

椀(5) 復原口径11.0cm、器高4.0cmの大きさの、口縁部が内彎気味に開いて立ち上がる椀。丁寧なナデないしヘラ磨き調整される。細砂粒・角閃石を胎土に含み、淡茶褐色に焼成されている。

高杯(6) 杯底部から反転して口縁が短く外反する口縁部破片である。内外面ともに丁寧にヨコナデされる。胎土に細砂粒・角閃石・石英・赤褐色粒を含み、淡明褐色に焼成されている。

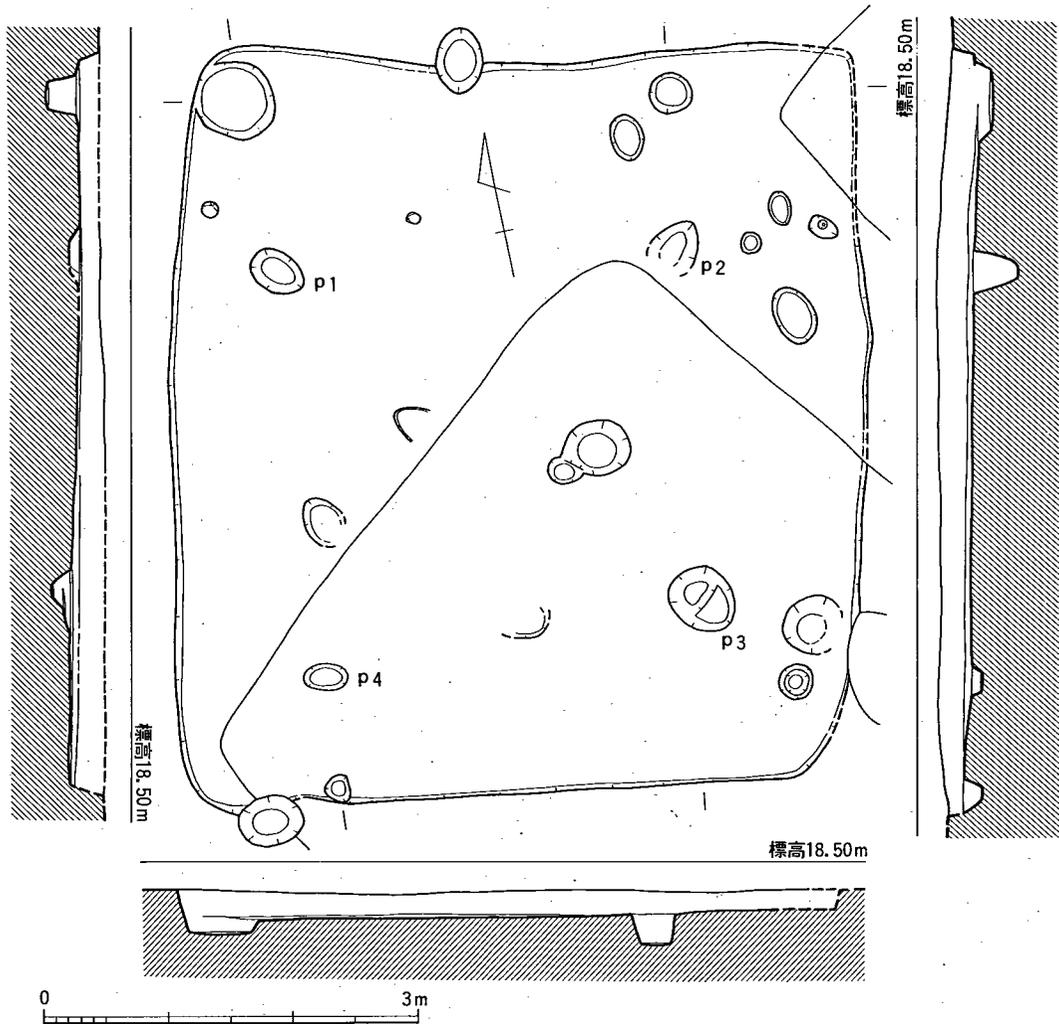
器台(7) 口縁部・裾部を欠いた柱状部破片で、外面は指頭圧痕のめだつナデ調整で仕上げられる。体部の内側は上部がナデられ、上から穿孔した円孔は、絞り痕の残る中空部分に続く。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、淡橙褐色に焼成されている。

土器片円盤(第17図7) 内外面ナデ調整の土器片を打ち欠き整形した円盤で、周縁は研磨されていない。径4.2~4.5cm、厚さ0.7cmの大きさ。土器片は明褐色に焼成され、胎土に細砂粒・角閃石を含んでいる。

出土土器では、甕・高杯の特徴から、弥生後期に属すると思われる。

12号住居跡(図版14-1, 第38図)

B・C12区で発見された住居跡で、南側を1号住居跡、東側を2号住居跡に切られる。東西5.5m、南北5.9m~6.1mの不整形プランで、周壁は20cm前後に残る。主軸方向はN11°10'



第38図 12号住居跡実測図 (1/60)

E前後である。床面は全体にやや堅めで、床面を掘り込むピットは大小18ヶ所検出された。P1とP3は主柱穴と思われる位置で深さを有するが、他のピットは浅い穴や、配置としては偏った位置にある。焼土や灰は検出されなかった。

出土遺物 (図版40、第37図)

椀 (8・9) 8は口縁部が内彎して開きながら立ち上がる、口径12.8cm、器高4.0cmの大きさの椀というよりは杯に近い器形である。器面は磨滅して調整手法は不明。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、黄褐色に焼成されている。9は口縁部が内彎して立ち上がる、口径12.7cm、器高7.8cmの大きさの椀。外面は磨滅するがナデ調整、内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・石英を含み、淡茶褐色に焼成されている

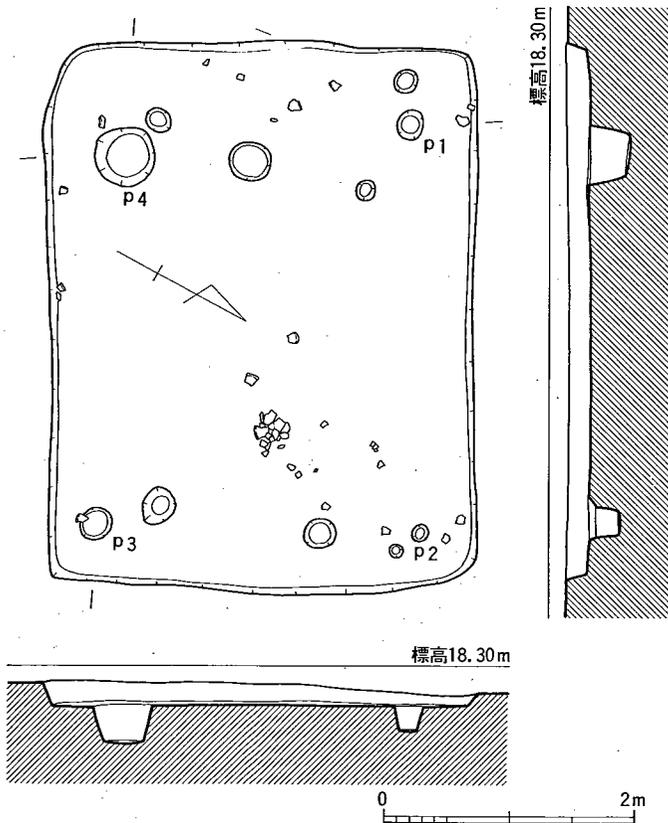
この土器のみでは明確な時期を決し難いが、弥生時代後期から古墳時代初頭前後の頃であろうか。

13号住居跡 (図版15-1・2、第39図、旧II-1住)

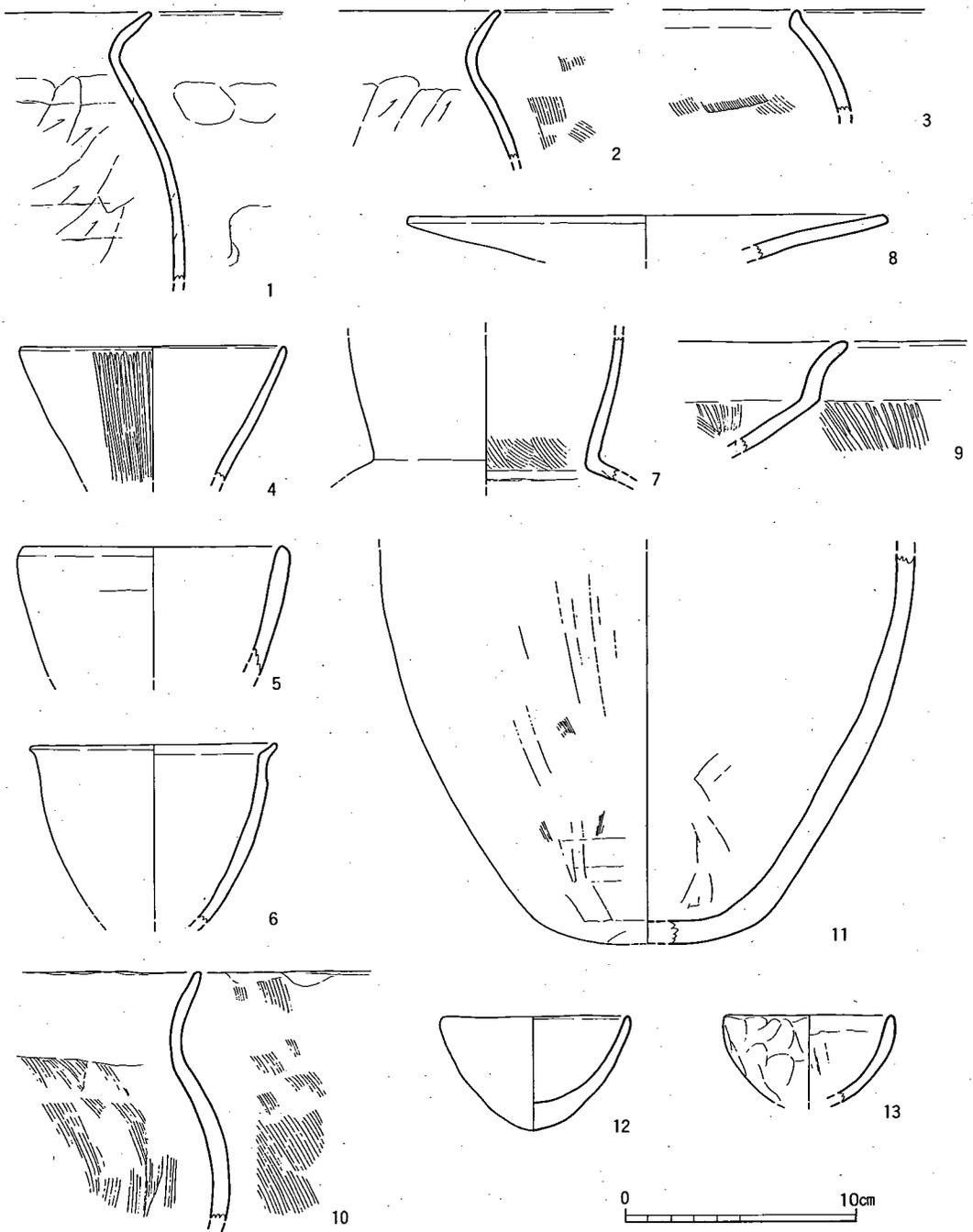
II区のG・H8で発見された住居跡で、長さ4.4m、幅3.4mの不整長方形プランを呈し、周壁の高さは10cm～20cmに残る。主軸方向はN62°E前後である。床面は中央部がやや堅めに締まるが、周囲はそれほどではない。床面を掘り込むピットは、主柱穴と目されるP1～P4以外にも5ヶ所程検出されたが、主柱穴は直径15cm～50cm、深さ20cm～35cmの規模である。炉跡らしい焼土や灰の集積は検出されなかった。

出土遺物 (図版40・50・51、第40図)

甕 (1・2・6) 1・2は口縁部が外反して、なで肩の



第39図 13号住居跡実測図 (1/60)



第40图 13·14·18号住居跡出土土器実測図 (1/3)

胴部をもつ破片で、口縁端は内彎気味。胴部内面は頸部下までヘラ削りされるが、外面は1がナデ調整、2はハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、茶褐色・暗褐色に焼成されている。

6は口径10.8cm、残存器高7.8cmの小形の甕で、口縁部は短く外反するが、胴部は殆ど膨らまずに底部に移る。内外面ともに縦方向にナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されるが、外面に煤、内面にお焦げが付着する。

壺(3・4・7) 3は内彎した胴部から口縁部が短く立ち上がる破片で、短頸壺であろう。外面は板ナデ、内面はハケ目調整され、口縁付近はヨコナデされる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡灰茶褐色に焼成されている。4は小形丸底壺の口縁部であろう。復原口径11.8cmの大きさで、頸部から長めに開く。外面は縦方向のヘラ磨き、内面はナデられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、赤褐色に焼成されている。7は頸部破片だが、口縁部は長めで、内彎気味に立ち上がる。頸部内面にはハケ目がみられ、他はヨコナデ・ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

椀(5) 口縁部が内彎気味ながらも直に立ち上がる椀で、復原口径12.0cmの大きさ。内外面ともナデ調整されるが、内面の方が丁寧である。胎土に砂粒・石英を含み、淡黄褐色に焼成される。

高杯(8・9) 8は復原口径20.8cmの大きさの、直線的に外開きする杯口縁部。内外面ともに丁寧なナデ調整らしい。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。9は口縁部が短く外反する杯部破片で、杯底部の内外面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、橙褐色に焼成されている。

石包丁(第32図2) 粘板岩質の石材を用いた、やや細めの石包丁片。現存長4.7cm、幅4.0cm、厚さ0.6cmの大きさで、重量は11.8gの現存値である。暗灰緑色を呈する。

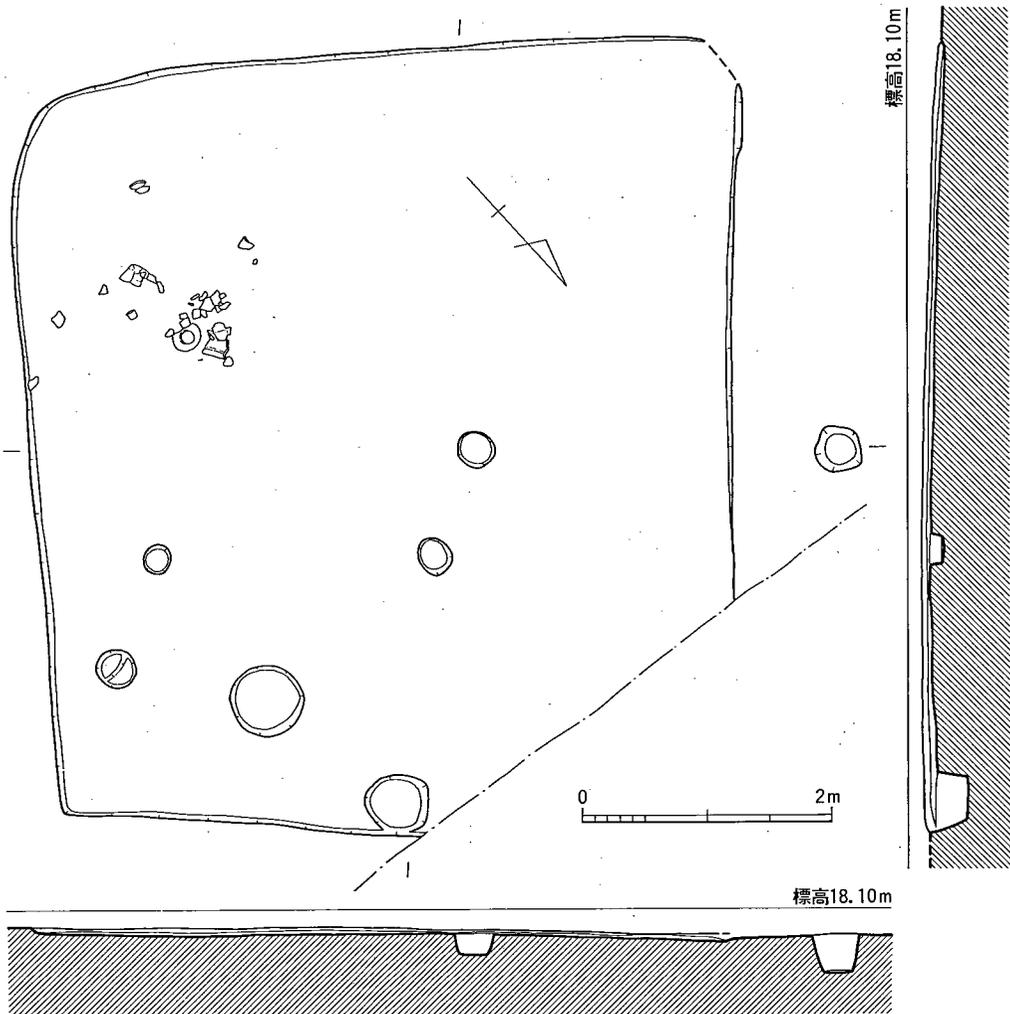
鉄刀子(第19図9) 両端を欠き全体の形状は不明だが、刀子片であろうか。現存長5.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmの大きさ。

出土土器では、小形甕や高杯にやや古い要素をみれるが、1・2の甕や小形丸底壺などからみて4世紀代に相当するであろう。

14号住居跡(図版15-3、第41図、旧Ⅱ-5住)

H11・12区で発見された住居跡で、北側が調査区域外に出る。長さ6.2m、幅5.5~5.7mの不整長方形プランで、周壁は5cm前後に残る。主軸方向はN42°E前後である。床面は全体にやや堅めで、床面を掘り込むピットは大小6ヶ所検出されたが、支柱穴を構成する配置には検出できなかった。また焼土や灰のまとまった部分も検出されなかった。

出土遺物(図版50、第40図)



第41図 14号住居跡実測図 (1/60)

甕(10・11) 10は緩やかに外反する口縁部で、端部は僅かに内彎気味になる。胴部は膨らみ、内外面ともにハケ目調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗黄茶褐色に焼成される。11は凸レンズ状の丸底をもつ、長胴甕の胴下半で、内外面ともに僅かにハケ目がみられる。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶灰色に焼成される。

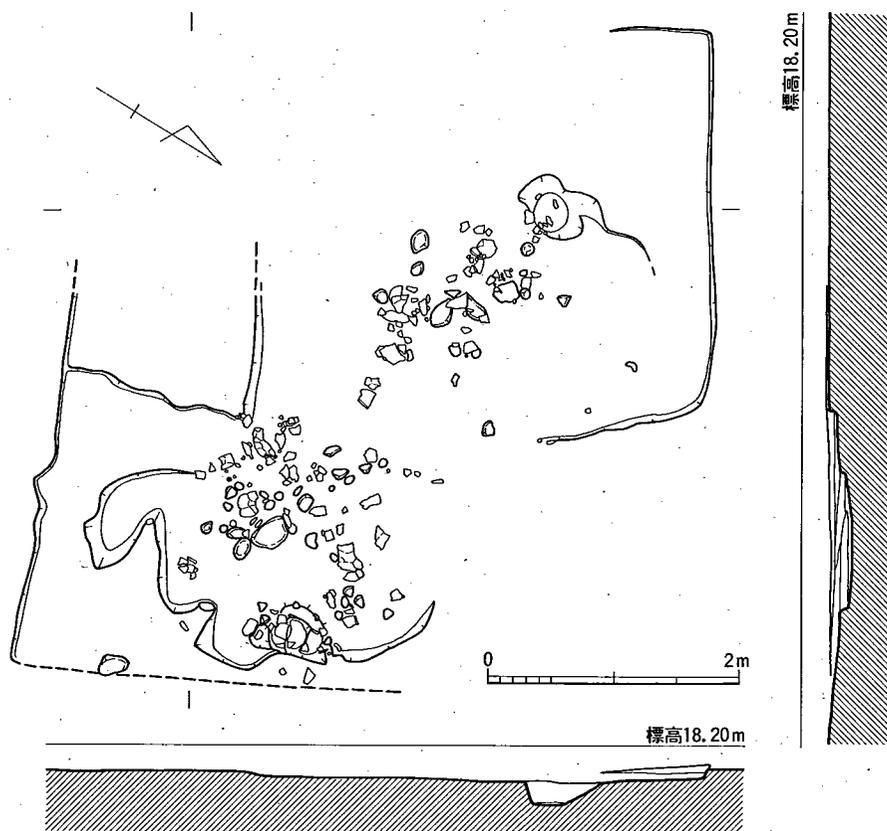
砥石(第77図22) 安山岩質凝結岩らしい石材を用いた砥石の破片で、現存値で、長さ5.6cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm、重量53.2gの大きさ。表裏2面が砥面として使用されている。

出土土器の甕は、弥生時代後期後半に含まれるものであろう。

15号住居跡 (第42図、旧Ⅱ-7住)

Ⅱ区のE・F-12・13で発見された住居跡で、西隅と南東辺を確認したが、北隅・南隅は分からない。東隅を南東辺の東北端付近に想定すれば、長さ約5.5m、幅5.0m程の不整形プランで、主軸方向はN32°W前後である。周壁の高さは0cm~5cmと殆ど残らないが、南東辺の約1.5m内側と北側に段があり、ベット状遺構の存在していた可能性が高い。床面は中央部でやや堅いが、周囲はそれほどではない。床面を掘り込むピットは、西隅から1.5m程中央寄りに主柱穴らしい直径50cm、深さ20cm規模のピットを確認したが、他は分からない。床面の東半部には不整形な掘り込みがあり、土器片や円礫が散在する。中央部にも土器片や円礫が散在する部分が見られるものの炉跡らしい焼土や灰の集積は検出されなかった。

出土遺物では、弥生時代後期ないしは古墳時代初頭頃とみられる土器片があるものの、図示しえる資料はない。

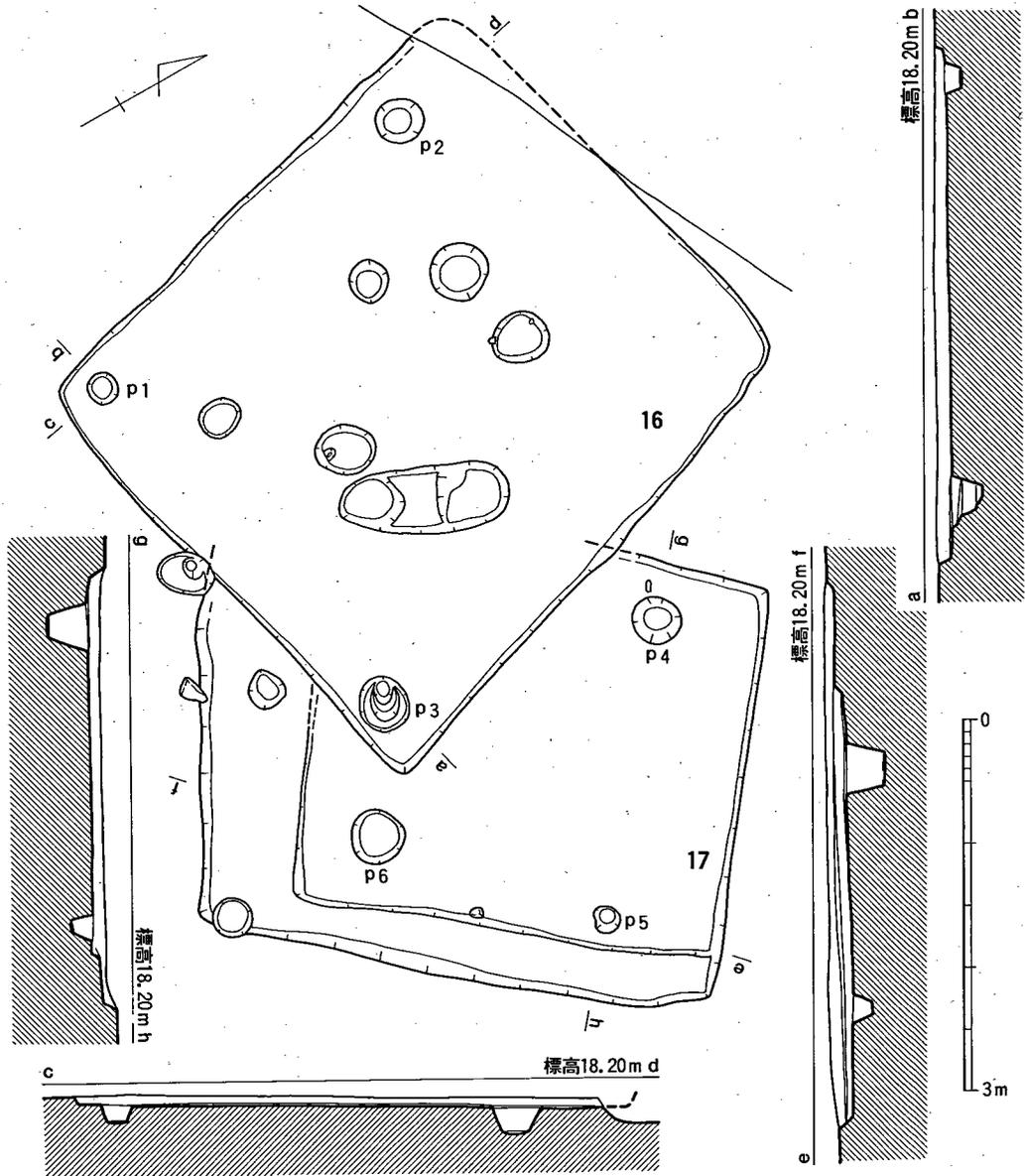


第42図 15号住居跡実測図 (1/60)

16号住居跡 (図版16-1、第43図、旧Ⅱ-3住)

G・H-14・15区で発見された住居跡で、北西隅部を13号溝に切られるが、南東隅部は17号住居跡を切っている。長さ4.6m、幅3.9~4.2mの不整形プランで、周壁は10cm前後に残る。

主軸方向はN13°W前後である。床面は全体にやや堅めで、床面を掘り込むピットは大小10ヶ所検出されたが、支柱穴を構成するとみられるのはP1~P3で、隅部にそれぞれ3ヶ所検



第43図 16・17号住居跡実測図 (1/60)

出されたが、北東隅付近では検出できなかった。また床面に木炭ないし灰が散在するものの特
にまとまった部分や焼土は検出されなかった。

出土遺物では、調査中に弥生時代後期ないし古墳時代初頭頃の土器片などが出土したものの、
後述する17号住居跡の出土遺物とともに紛失して図示しえない。

17号住居跡 (第43図、旧Ⅱ-6住)

G・H-14区で発見された住居跡で、西隅部を16号住居跡によって切られる。長さ4.2～
4.5m、幅3.6mの不整長方形プランで、周壁は5～10cmに残る。主軸方向はN39°E前後であ
る。床面は二段で、南東辺に沿って0.3m幅と南西辺に沿って0.7m幅で5～10cm高さのテラス
ないしベット状遺構がある。低い方の床面は全体にやや堅めだが、テラス・ベット状部分はあ
まり堅くはない。低い方の床面は3.2m×3.5mの広さになるが、床面を掘り込むピットは低い
床に3ヶ所、ベット部分に1ヶ所検出された。このうち主柱穴を構成するとみられるのはP4
～P6で、四隅に近接して3ヶ所検出されたが、重複部分では検出できなかった。柱穴は直径
20cm～45cm、深さ15cm～30cmの規模である。また床面では灰・木炭や焼土のまとまりは確認
できなかった。

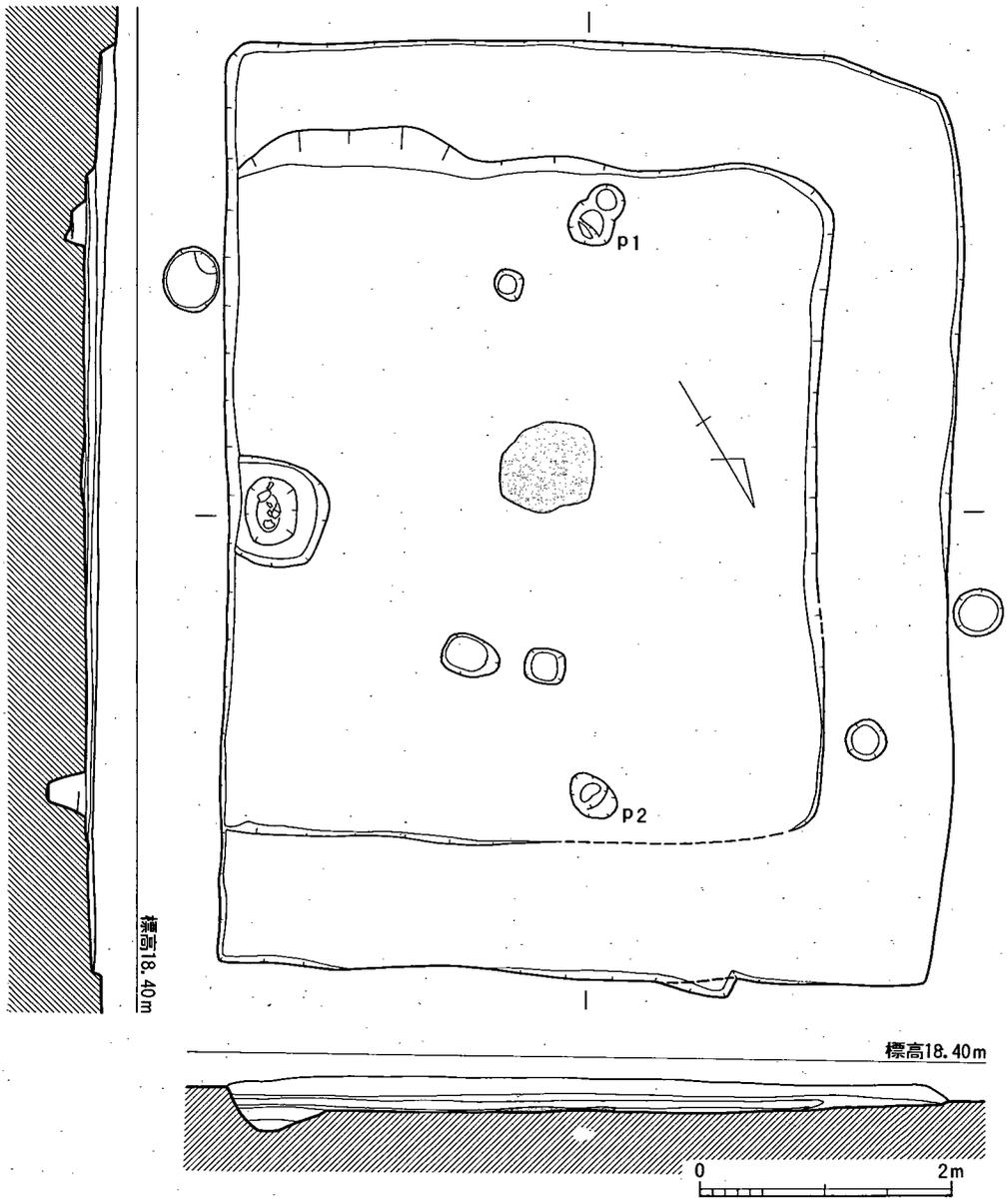
出土遺物では、調査中に弥生時代後期ないし古墳時代初頭頃の土器片などが出土したものの、
前述した16号住居跡の出土遺物とともに紛失して図示しえない。

18号住居跡 (図版16-2、第44図、旧Ⅱ-2住)

F・G-15・16区で発見された住居跡で、16号・17号住居跡の南西側に近接する。長さ7.4m、
幅5.8m程の長方形プランで、主軸方向はN30°E前後である。周壁の高さは南側では10cm～
20cm高さに残るものの、北側ではやや残りが悪い。南東辺以外の各辺に沿った内側に約1.0m
幅のベット状遺構が付き、南東辺の中央の位置に屋内貯蔵穴らしいピットが接する。床面は中
央部で堅く締まるが、周囲はそれほどではない。床面を掘り込むピットは5ヶ所に検出された
が、主柱穴はベット状遺構の北東側と南西側の内縁の中央付近にあり、住居跡主軸線上で相対
する位置にあるピットであろう。直径35cm、深さ15cm・30cm規模である。床面には中央部に
多く木炭・灰が散在し、住居跡のほぼ中央に焼土の集中した炉跡が検出された。浅く中凹みに
なる地床炉で、凹みの中には木炭・灰が堆積する。

出土遺物 (図版40、第40図)

椀 (12・13) 12は屋内貯蔵穴とみられるピット内出土の、砲弾形底部をもつ椀。復原口径
8.4cm、器高5.0cmの大きさで、口縁部は直線的ながら内彎気味に立ち上がる。内外面ともに
ナデ調整され、胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明茶褐色ないし灰茶褐色に焼成され
ている。13は復原口径7.4cm、残存器高3.8cmの大きさの、口縁部が内彎気味に立ち上がる椀。



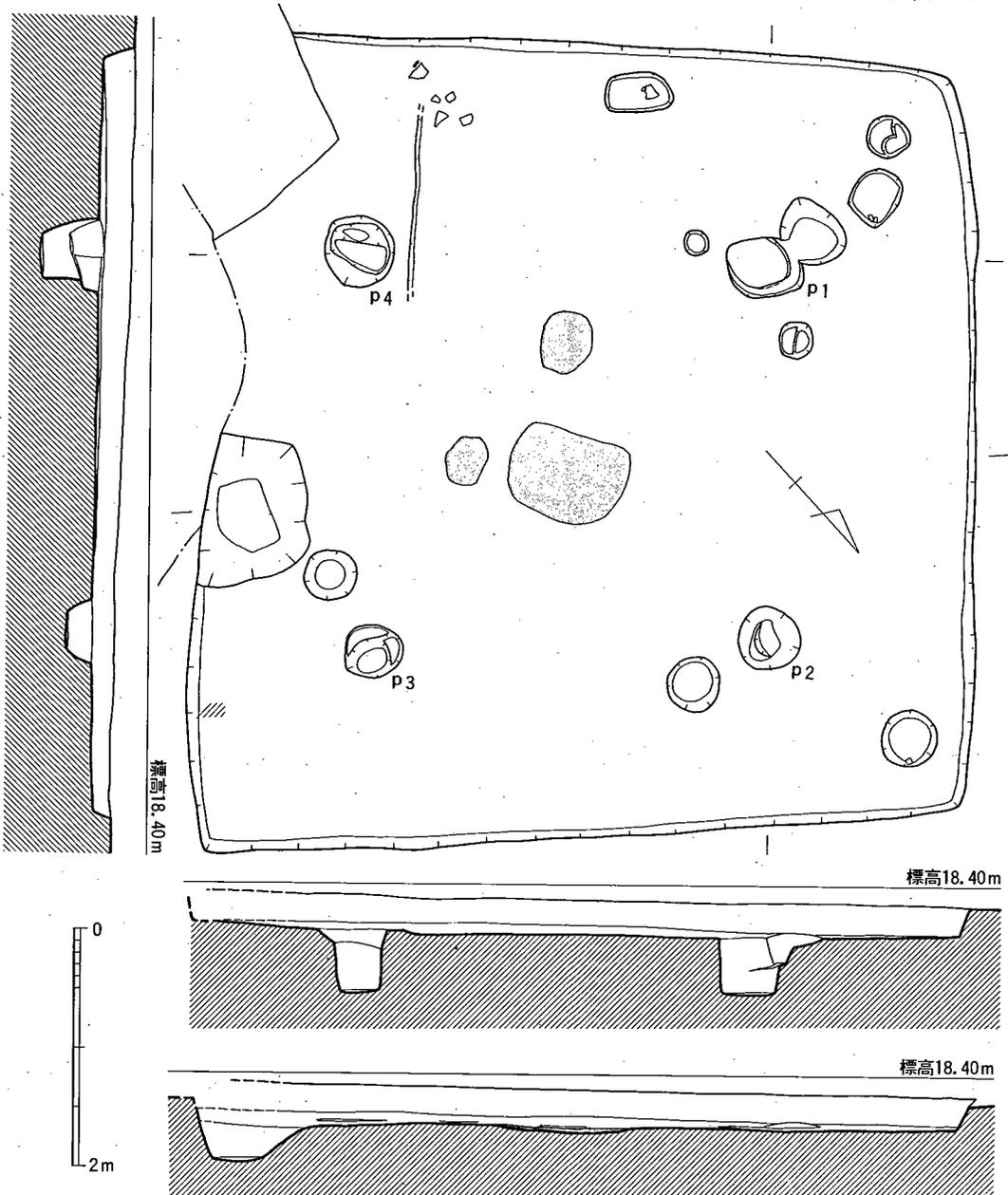
第44図 18号住居跡実測図 (1/60)

外面には指頭圧痕の残るナデ調整、内面は板状工具の圧痕の残る板ナデで調整される。胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、淡茶褐色に焼成される。

住居跡内からは小破片のため図示しないが、古式土師器に含まれる内面ヘラ削りの薄い器壁の甕胴部片などが出土している。これらから、3世紀代に入る可能性がある。

19号住居跡 (図版16-3、第45図、旧Ⅱ・Ⅲ-4住)

C・D-14・15区で発見された住居跡で、南隅部を22号住居跡によって切られる。長さ6.2~6.9m、幅6.6mの不整形プランで、周壁は15~25cmに残る。主軸方向はN42°E前後であ

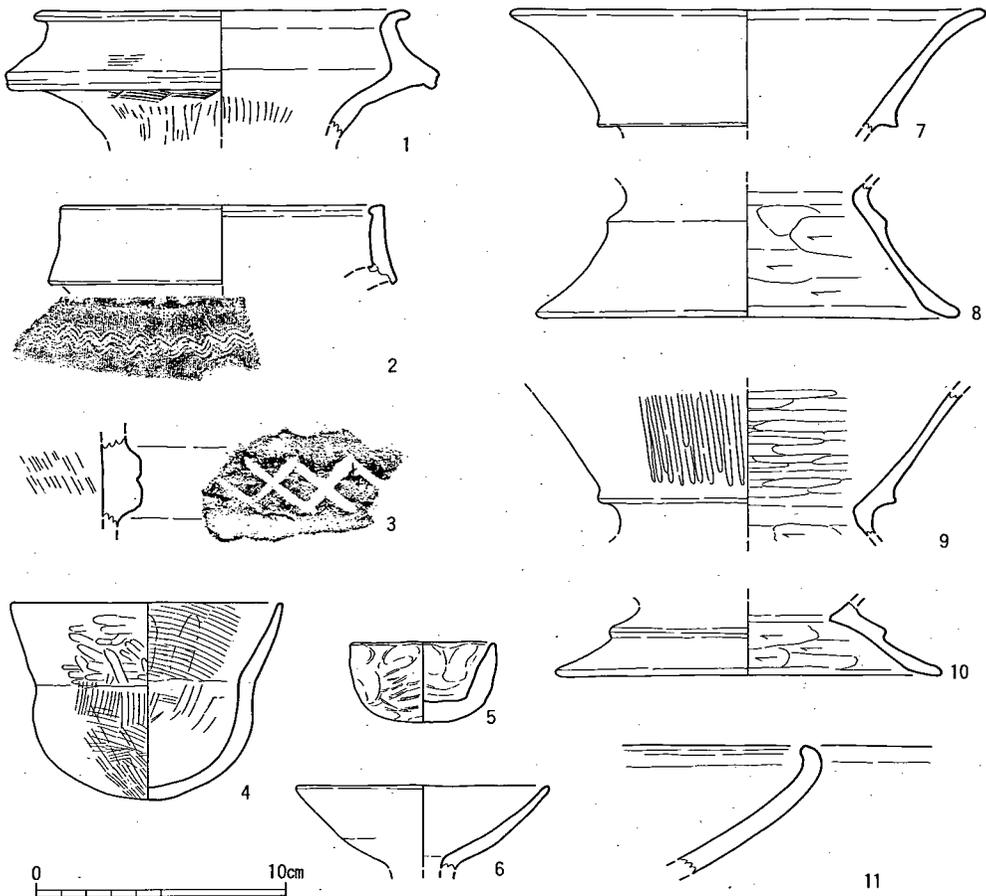


第45図 19号住居跡実測図 (1/60)

る。床面は全体にやや堅めだが、周辺部はあまり堅くない。床面を掘り込むピットは10余ヶ所あるが、浅いピットも多い。主柱穴は配置状況からしてもP1~P4と判断されるが、P2は比較的浅い。直径45cm~60cm、深さ20cm~50cmの規模である。屋内貯蔵穴と目されるピットは南東壁に接してあり、長径約120cm、短径約80m、深さ30m程の規模である。南隅部の床面は他の部分より若干高めで、P4の脇に低い段があるものの、ベット状遺構か否かの区別はし難い。床面では中央部に灰・木炭が散在する。中央に長径100cm、短径75cmの範囲に焼土があり、凹みに灰・木炭も堆積するが、近接して2ヶ所焼土部分が検出された。

出土遺物 (図版40・50・51、第46図)

複合口縁壺(1・2) 1の口縁部破片は、屈折が凸帯状をなし口縁端部もめくれるように外反する。頸部内外面にはハケ目があり、口縁部外面はハケ目の後にヨコナデ調整が加わる。胎土



第46図 19号住居跡出土土器実測図 (1/3)

に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、赤茶褐色に焼成されている。2の口縁部破片は僅かに内傾するが、端部は内側に拡張して面をなし、外面には波状文が描かれる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、黄褐色に焼成されている。

甕凸帯片(3) 甕の胴部に巡らされていた凸帯が剥がれたのであろう。扁平な台形断面の凸帯で、外面に格子目の刻み目が付き、剥落面にはハケ目圧痕がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、褐色に焼成されている。

小形丸底壺(4) 口縁端部が欠けるものの完形で、口径11.0cm、器高7.9cmの大きさ。半球形の胴部から内彎気味に開く口縁部が立ち上がる。胴部外面と口縁部内面にハケ目が、胴部内面に板ナデ痕、口縁部外面にヘラ磨き痕がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙褐色に焼成されているが、二次的な火熱を受けて一部赤変する。

手捏土器(5) 復原口径5.6cm、器高3.2cmの大きさのミニチュア碗で、ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、暗灰褐色ないし黒褐色に焼成されている。

器台(6~10) 6は復原口径10.2cmの大きさの、受け部破片で、口縁は僅かに内彎するが直線的に開く。受け部底から裾部側の間は筒抜けである。器面が風化して調整手法は不明だが、胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、淡明褐色に焼成されている。

7~10は鼓形の器台であり、7・8は胎土・色調などからみて同一個体の可能性が極めて高いが上手く接合しない。受け部の7は口径19.0cmの大きさで、直線的に開いた口縁部は端部で緩く外反し、下端側は凸帯状の段をもつ。裾部の8はくびれの下に凸帯状の段をもち、直線的に開いて、復原裾径16.8cmの裾端は緩く外反する。外面は風化・磨滅するが、内面は横方向にヘラ削りされる。いずれも胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙赤褐色の色調に焼成されている。

9は受け部側の破片で、凸帯状の段をもち、直線的に開く。外面は縦方向ヘラ磨き、内面は横方向ヘラ磨きが施され、裾部側内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。10は裾部破片で復原裾径15.4cmの大きさ。くびれの下に巡る凸帯状の段は垂れ気味で、裾への開きが短く、裾端部は外反する。外面はヨコナデ、内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

杯?(11) 端部が内彎する口縁部破片で、直線的に開くが全体の形は不明。高杯であろうか。器面は風化するが内面はナデ調整のようにみえる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。

砥石(第77図23) 雲母片岩に似た珪化木製の砥石で、半欠程度の残り具合であろうか。長さ13.9cm、幅12.4cm、厚さ5.7cmの大きさで、4面を砥面にされるが、図の裏面の使用頻度は低い。

土器片円盤(第17図8) 外径4.3~4.6cm、厚さ0.9cmの大きさの不整形円形。胎土に砂粒・石

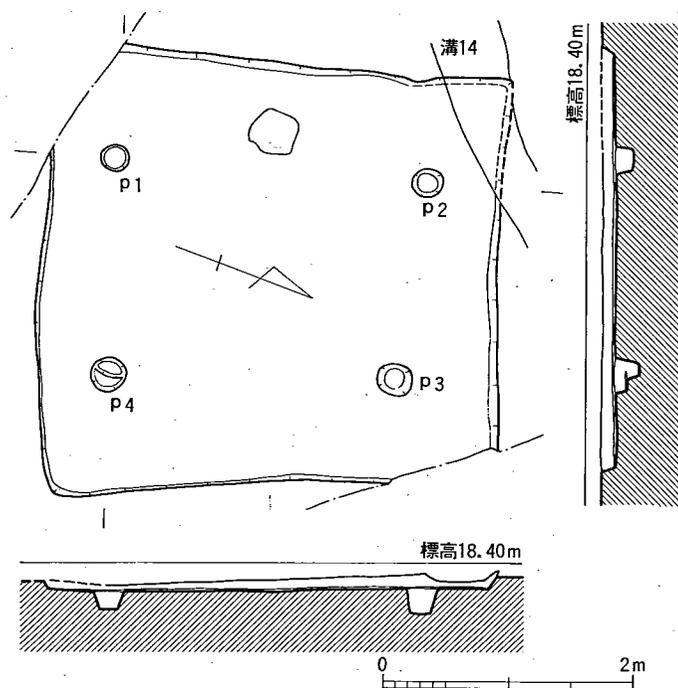
英・角閃石を含み淡明褐色に焼成された、内外面ともにナデ調整の土器片を打ち欠き整形したもので、周縁は研磨されていない。

土製丸玉(第17図9・10) いずれも細砂粒・角閃石を胎土に含み、黒色に焼成された球形の玉で、器面はナデ調整され、円孔が穿たれる。9は完形、10は半欠資料だが、いずれも外径3.5cm、厚さ2.9cm、孔径0.7cmの大きさ。

出土土器では、小形丸底壺と鼓形器台の特徴からして、3世紀代に入る可能性があるろう。

20号住居跡 (図版17-1、第47図、旧Ⅲ-1住)

B・C-14区で発見された住居跡で、14号溝によって北西隅を削られ、南西隅・北東隅は調査区域外に出るが、一方では東半部で11号・22号住居跡を切っている。長さ3.6m、幅3.3～3.5mの不整形プランで、主軸方向はN20°W前後である。周壁の高さは5cm～10cm高さに残る。床面は中央部で強く締まるが、周囲はそれほどではない。床面を掘り込むピットは4ヶ所に検出され配置からみてP1～P4は主柱穴であろう。直径20～30cm、深さ15cm～30cm規模である。床面ではP1とP2のほぼ中間の西壁寄りに焼土が検出された。焼土の周囲の堆積土には顕著な差異がみられず、支脚石の抜け痕も検出できなかったが、位置からは炉とするよりはカマドであった可能性が高い。

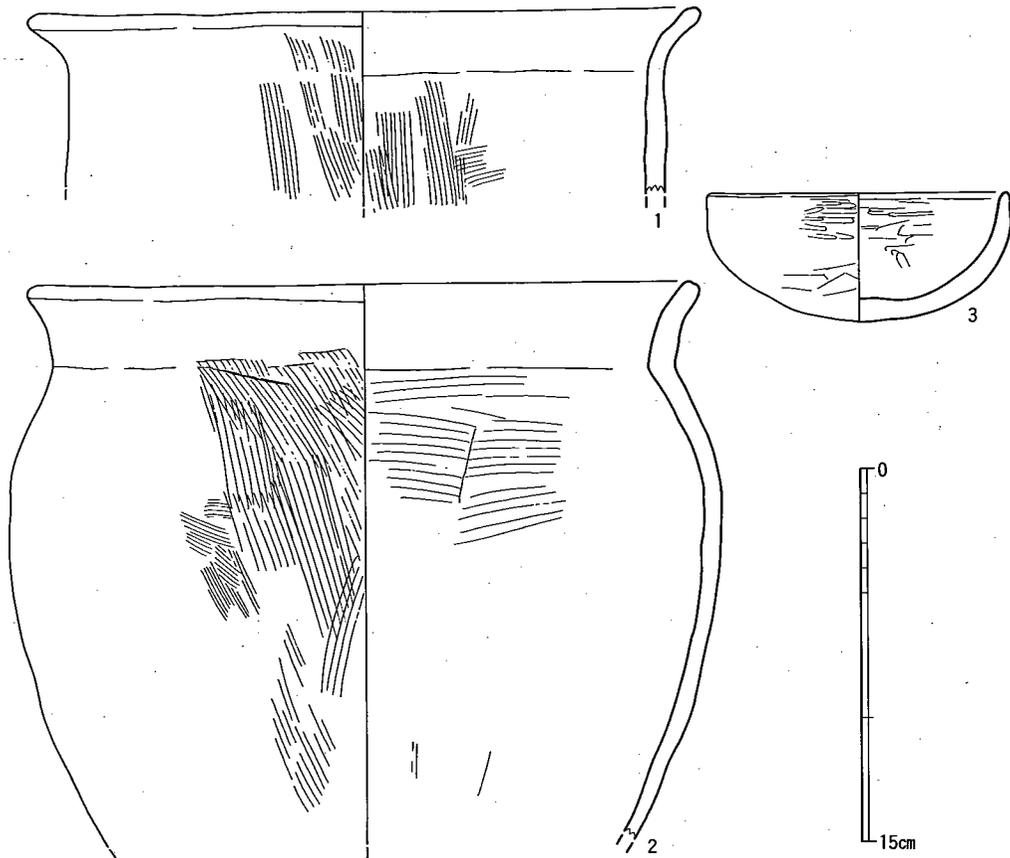


第47図 20号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版40、第47図)

甕(1・2) 1は復原口径27.0cmの大きさの甕で、口縁部は肥厚せず如意状に外反する。内外面ともにハケ目調整され、細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、淡茶褐色に焼成されている。2は、復原口径27.0cmの大きさで、口縁部はやや肥厚して外反する。

胴部は膨らみ内外面ともにハケ目調整され、下半部はナデ消される。胎土に細砂粒・雲母・角閃



第48図 20号住居跡出土土器実測図 (1/3)

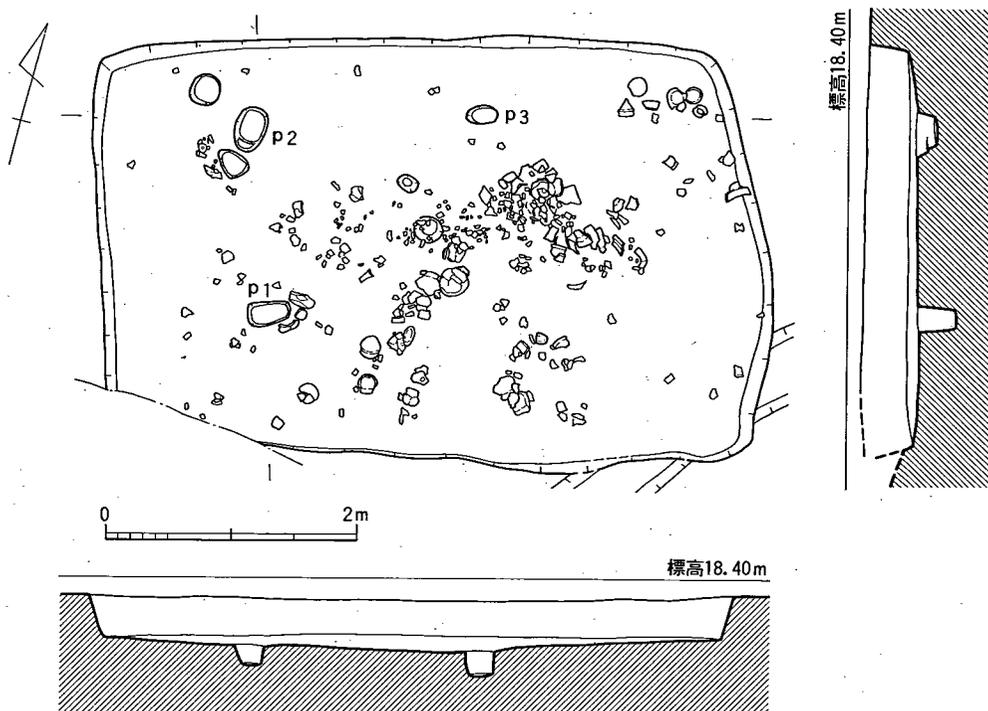
石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

椀(3) 口径11.9cm、器高5.2cmの大きさの口縁部が内彎気味に立ち上がる椀。内外面ともにヘラ磨きされるが、外底部はヘラ削りされる。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成されている。

なお、この他に住居跡内からは小破片のため図示しないが、土師器片が出土している。図示した甕は内外面をハケ目調整していて古い様相をみるが、椀の特徴などから古墳時代以降の可能性が高く、甕は重複する下層の住居跡に伴う可能性もあろう。

21号住居跡 (図版17-2・18・19、第49図、旧Ⅲ-2住)

B・C-15区で発見された住居跡で、南西隅部は調査区域外に出る。南東隅部の上部を14号



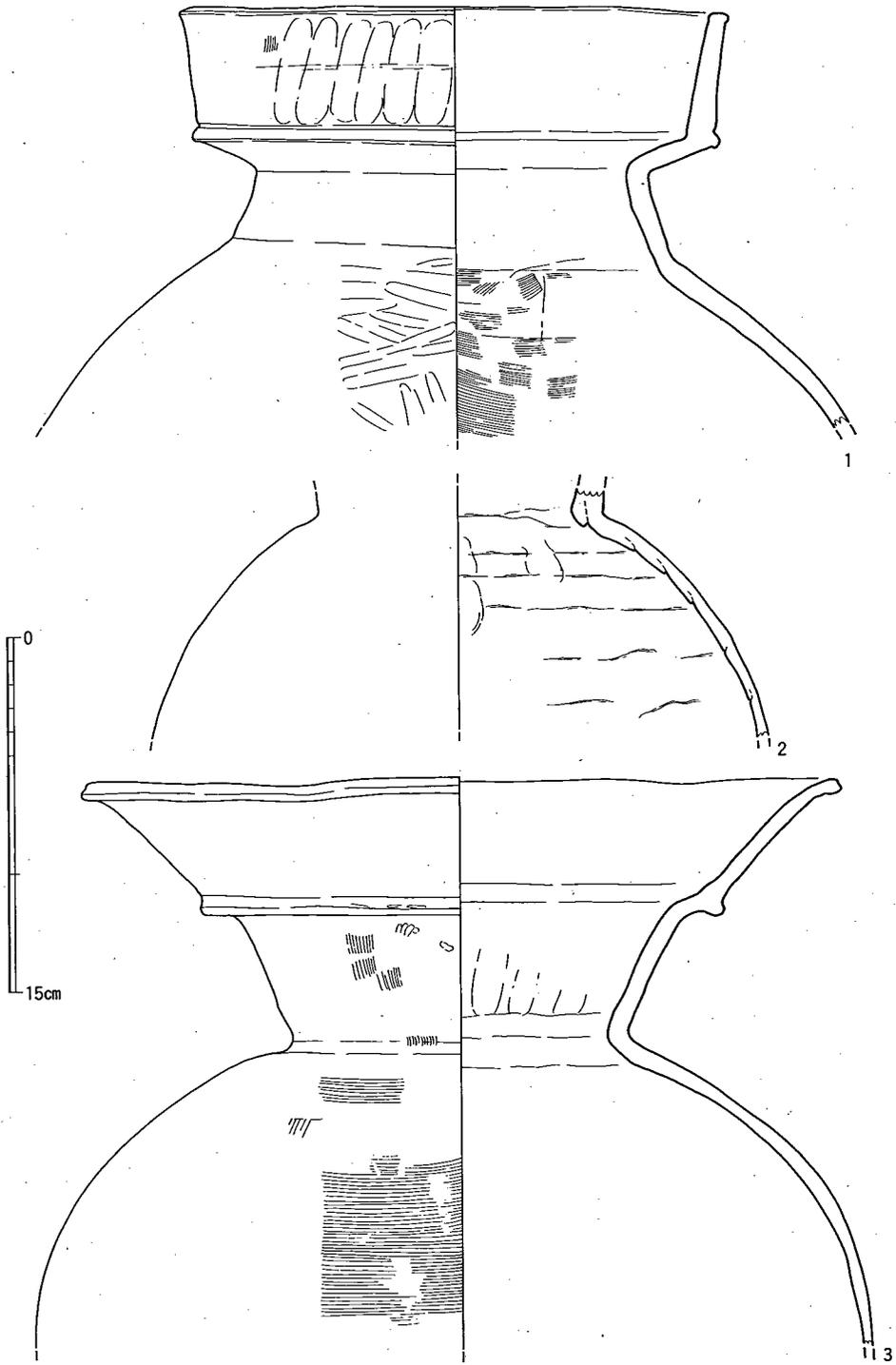
第49図 21号住居跡実測図 (1/60)

溝で削られ、東辺部分で22号住居跡を切っている。長さ5.1~5.3m、幅3.3~3.5mの不整長方形プランで、周壁は30cm前後に残るが、南側は上部に須恵器片を含む攪乱坑か別遺構の一部に削られて低い。主軸方向はN47°E前後である。床面は全体にやや堅めだが、周辺部はあまり堅くない。床面を掘り込むピットは5ヶ所検出したが、主柱穴と思われるのはP1~P3で、直径20cm~30cm、深さ15cm~30cmの規模である。他のピットはやや浅めで、主柱穴に対応する穴は確認できなかった。床面では木炭片なども散在するが、焼土を伴う炉跡などの施設は確認できなかった。住居跡内からは、河原石や木炭も混じるものの、土器が多数出土した。床面に密着したものでなくやや浮いていて、投げ込まれて堆積したようにもみえる。

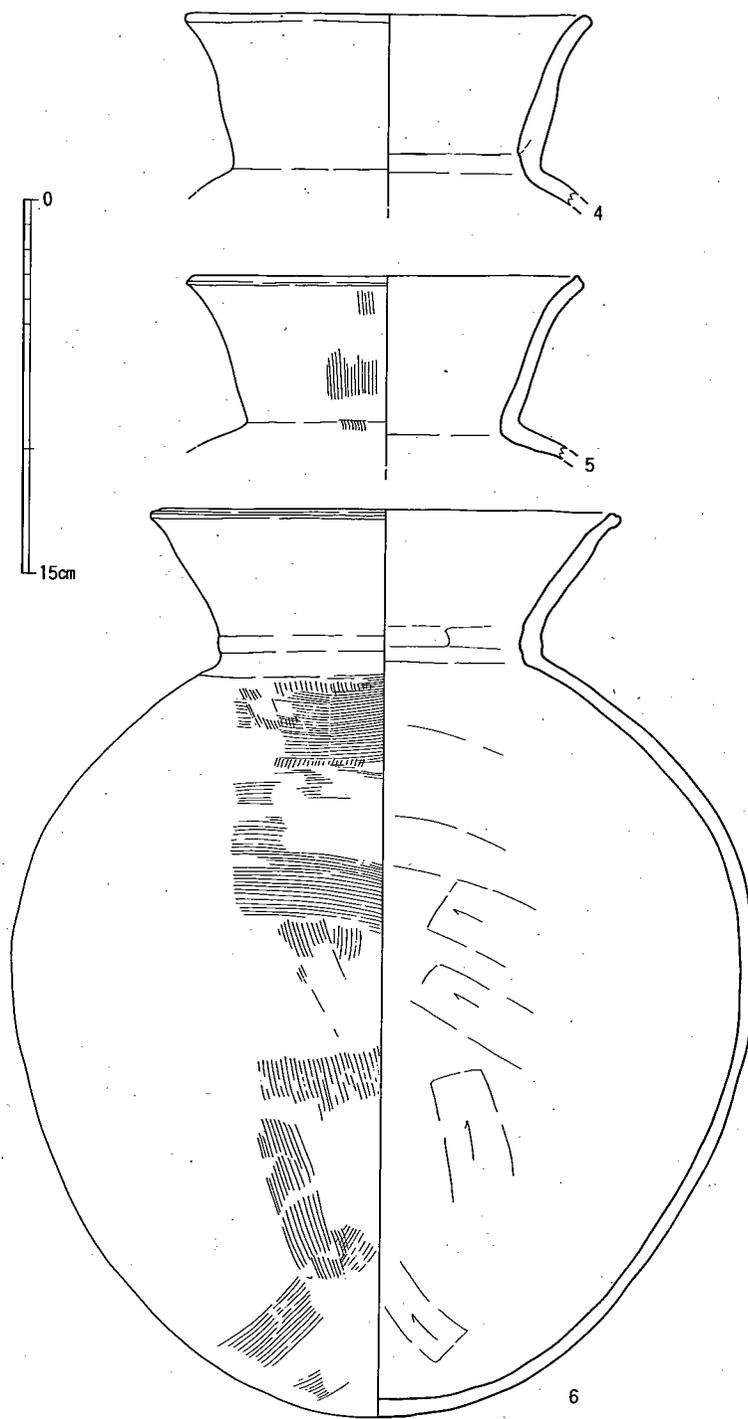
出土遺物 (図版40-42・49~51、第50~56図)

複合口縁壺(1~3・45) 1は内傾した頸部が口縁部へ外反して、端部に円筒を乗せたような複合口縁である。口縁部は直立気味で、口唇部は面取りされ、下端の外面には沈線が巡り、外面は板状工具でナデられる。頸から胴部は緩やかに屈曲して膨れるが、外面は横方向のヘラ磨き、内面の胴部はハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、灰茶橙褐色に焼成されている。口径23.0cm、頸部径16.4cmの大きさ。

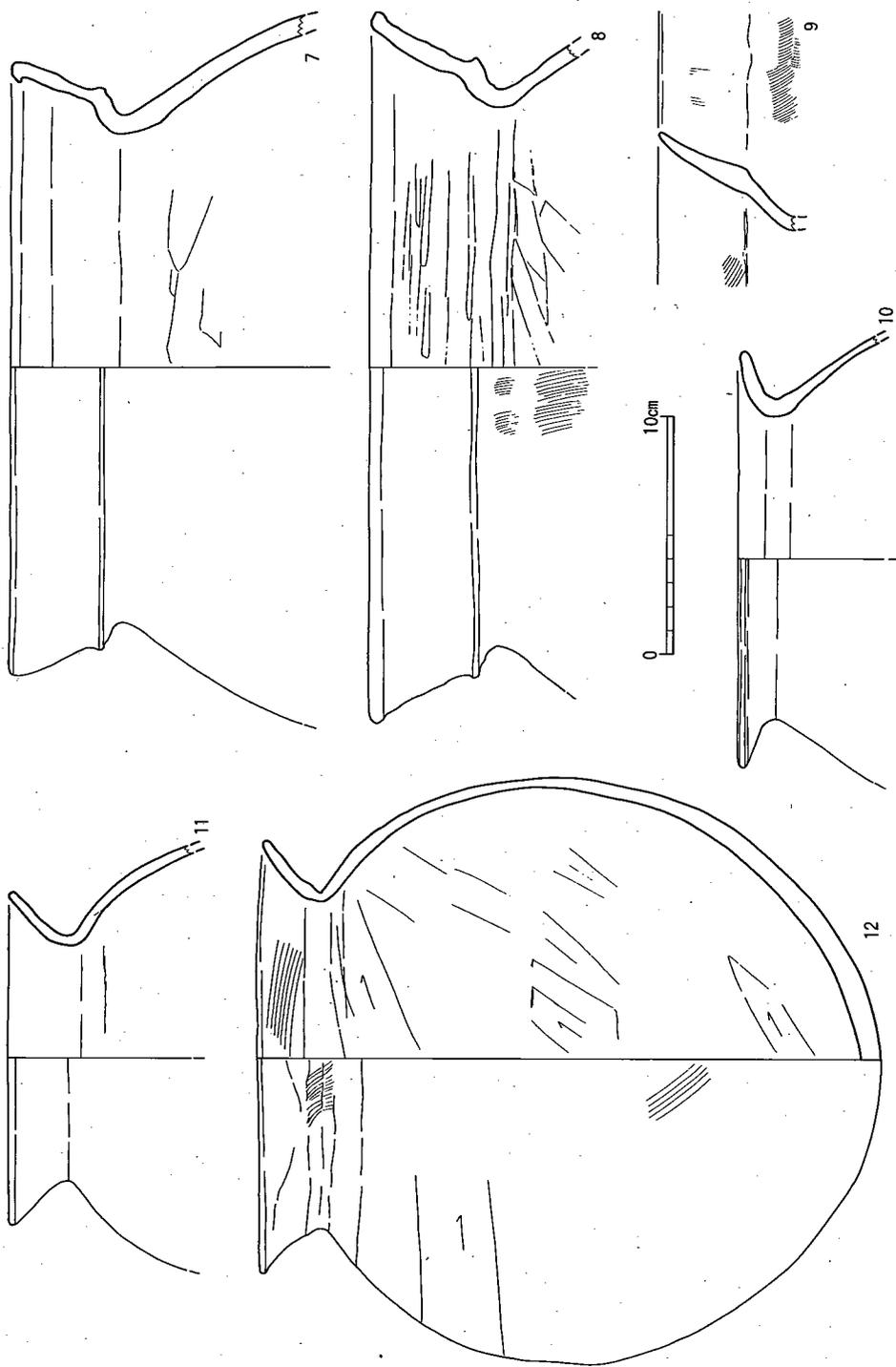
3は頸部から口縁部へ直線的に開き屈曲部はやや段をなし、さらに上端部が外反する口縁部



第50图 21号住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第51图 21号住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第52图 21号居住迹出土土器实测图 3 (1/3)

を乗せたような複合口縁で、所謂朝顔形口縁である。口径32.0cm、頸部径14.1cmの大きさ。頸部は外面がハケ目の後にナデ調整、内面は横方向のナデで調整される。胴部は丸く膨らみ、外面にハケ目が残るもの、内面は風化して不明である。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、灰橙茶褐色に焼成されている。45も朝顔形の複合口縁であろう。口縁部外面にヘラ磨きの痕跡がみられる。2も頸部から口縁へ開くとみられる肩部破片。外面は磨滅するが、内面は粘土帯接合痕が明瞭に残る。

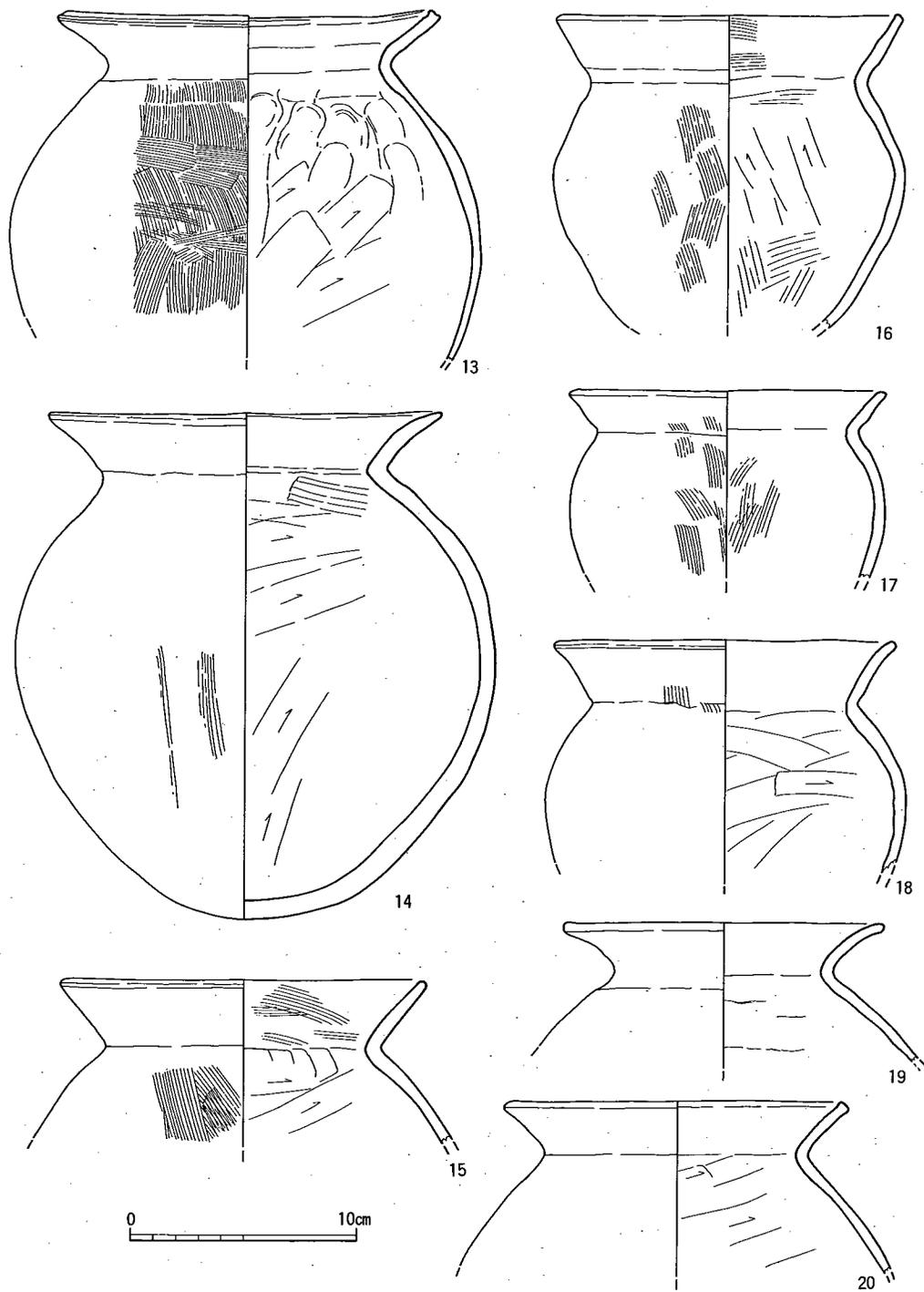
広口壺(4~6) 口縁部が直線的に開く壺で、4・5では口縁部の断面形は内彎と外反で緩やかなS字状に波打つ。復原口径16.3cm・15.8cmの大きさで、4は器面調整が不明で、5の外面はハケ目の後にヨコナデ調整が加わり、胴部内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、淡黄褐色・淡茶褐色に焼成されている。6は口径18.9cm、器高36.5cm、胴最大径29.5cmの大きさの壺。卵形の胴部から直線的に口縁部が開き、口唇部は上方へ摘んだような形状をなす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、黄橙灰褐色に焼成されているが、二次火熱を受けて赤変した部分が一部にある。

複合口縁甕(7~9) 7・8は短く外反する頸部の上に外開きの口縁部が乗るような複合口縁で、屈曲部は凸帯状に突出する。口唇部は7が内側に拡張気味、8は外反気味になる。また9は口縁の屈曲部が肉厚で緩やかに外反する。7の胴部外面はヨコナデ、8・9の胴部外面はハケ目がみられ、7・8の胴部内面はヘラ削りされる。なお8の口縁部内面にはヘラ磨きのような痕跡がある。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙色・黄茶褐色・茶褐色の色調に焼成されている。

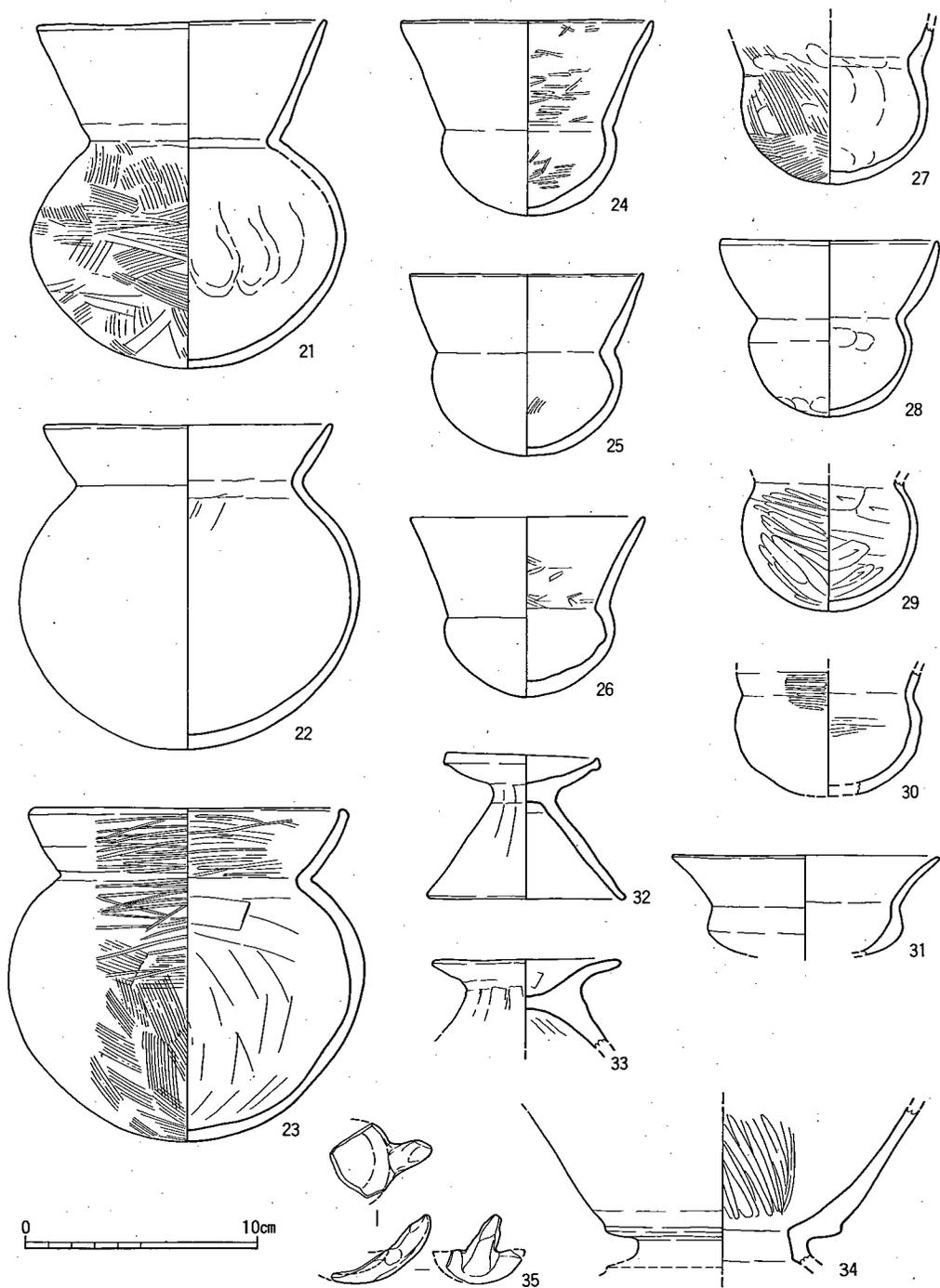
土師器甕(10~20・22・23) 薄い器壁で、球形ないし扁球形の胴部をもち、口縁部が外反する甕と、やや厚い器壁の甕がある。大半は球形胴部のようなのだが、胴下半を接合・復原できない例も多く、あるいは卵形で薄い器壁の例があるかも知れない。

12は口径18.3cm、器高25.9cm、胴最大径24.7cmの大きさで、口縁部はやや強く外反し、端部は丸味をもつ。口縁部と胴部外面にハケ目を残すがナデ消され、胴部内面は頸部の少し下までヘラ削りとナデで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されているが、外面には煤が付着する。10・11・19もほぼ同様の特徴をもつが、11は口縁部の反りが緩く、19の内面はナデ調整が勝る。

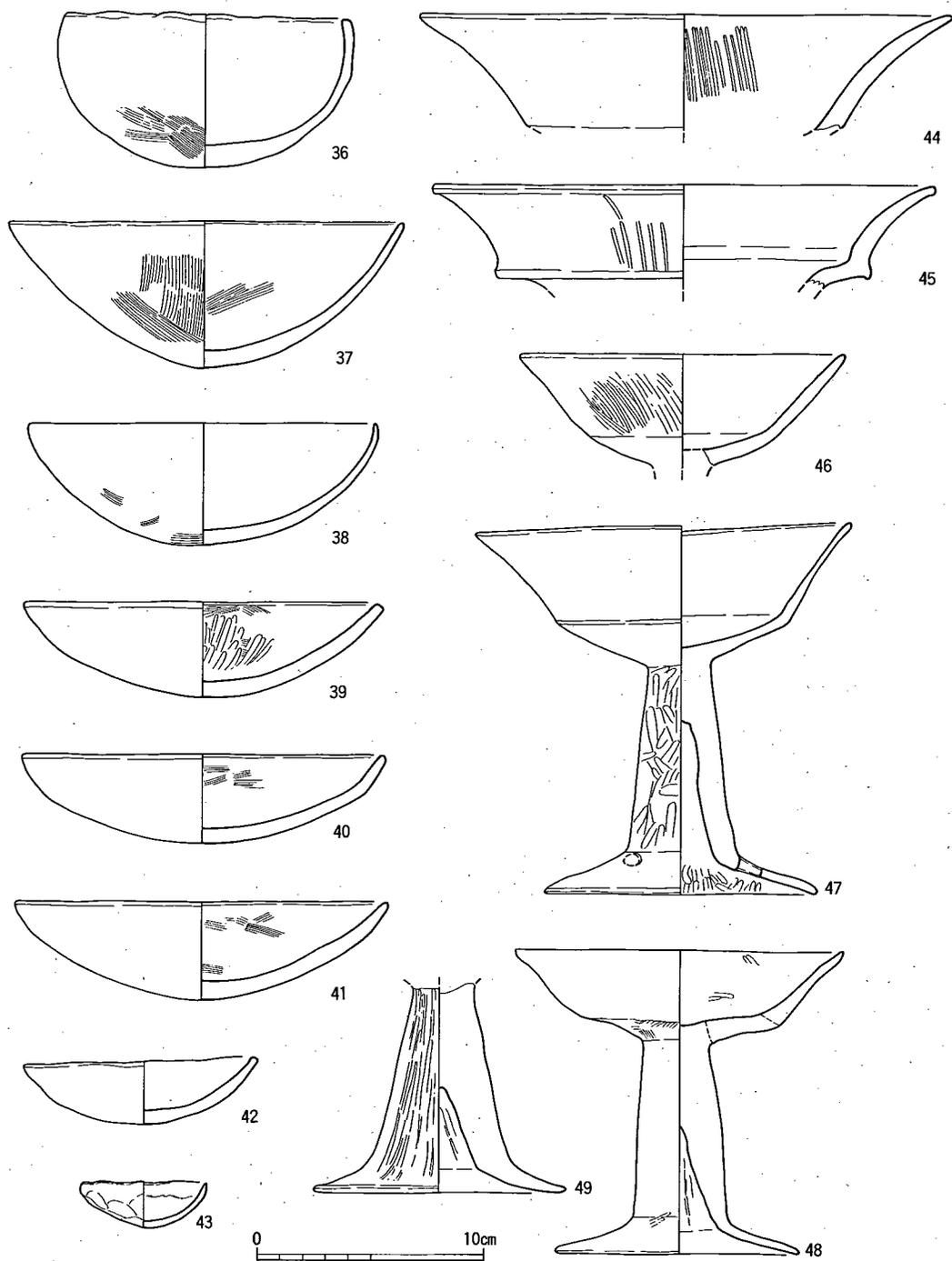
13は口径16.6cm、胴最大径20.6cmの大きさで、口縁部はやや強めに外反して端部が上方に摘まれたように突出する。胴部外面は縦方向にハケ目調整され、肩部は横方向のハケ目が加わる。胴部内面は頸部の少し下までヘラ削りされ、ナデが加わる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙色に焼成されているが、外面には煤が付着している。20も似たような特徴をもつが、口唇部の突出は鈍い。16ではこの突出が鈍く、口縁部・胴部内面にハケ目が残



第53图 21号住居跡出土土器実測图4 (1/3)



第54图 21号住居跡出土土器実測图 5 (1/3)



第55图 21号住居跡出土土器実測図6 (1/3)

り、プロポーシヨンにシャープさを欠く。

14は口径17.1cm、器高22.4cm、胴最大径20.9cmの大きさで、口縁部はやや強く外反し、端部は丸味をもつ。胴部の器壁がやや厚めで、卵形を呈する。胴部外面はハケ目を残すがナデ消され、胴部内面は頸部の少し下までヘラ削りとナデで調整され、頸部内面にはハケ目が残る。胎土に角閃石・雲母を含み、黄茶褐色に焼成されているが、外面に煤、内面にお焦げが付着している。17も似たような特徴をもつが、胴部内外面にはハケ目が残る。また15は口縁部内面にハケ目が残り、18は胴部内面のヘラ削りが頸部まで及ぶ。

22は復原口径12.3cm、器高14.1cm、胴最大径14.6cmの大きさの小形甕で、胴部は扁球形。直線的に外反した口縁部は端部が丸味をもつ。器面が風化して調整手法は不明だが、胴部内面のヘラ削りは頸部まで及ぶ。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成されているが、外面に煤が付着している。

23は口径13.8cm、器高14.3cm、胴最大径15.6cmの大きさの小形甕で、胴部は扁球形。口縁部は内彎しながら開き端部は内側に鈍く摘まれる。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部までヘラ削りされ、口縁部内外面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、暗褐色に焼成されている

小形丸底壺(21・24~30) 21は口径12.3cm、器高15.0cm、胴最大径13.6cmの大きさで、やや扁球形の胴部に直線的に開く口縁部が付くものの、口径は胴最大径を上回らない。胴部外面にはハケ目がみられるが、他はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、明茶褐色に焼成されている。

24~30は半球形の胴部に直線的に開く口縁部が付き、口径が胴最大径を上回る。このうち24・26は口径10.8cm・9.9cm、器高8.4cm・7.7cmの大きさで、このうち胴部径と胴部高はそれぞれ7.5cm・7.4cm、3.6cm・3.6cmである。24の外面はナデ調整、内面はヘラ磨きされる。25の外面はヘラ磨き、内面はハケ目とナデ調整である。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

25と28は、復原口径10.0cm・9.4cm、器高7.9cm・7.6cmの大きさで、このうち胴部径と胴部高はそれぞれ8.2cm・6.9cm、4.5cm・4.2cmである。いずれも内外面ともにヘラ磨き調整と一部ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色・茶褐色に焼成されている。27・29・30は口縁部を欠くが胴部の法量と特徴からすると、25に近い。27は外面がハケ目調整、内面はナデ調整されている。29・30は内外面ともにヘラ磨きされる。

土師器鉢(31) 扁球形体部にやや長く外反する口縁部が付く。復原口径11.5cm、胴最大径8.3cmの大きさで、器面は風化する。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、灰黄橙色に焼成されている。

高杯(32・44・46~52) 32は器台の可能性もある。杯底部と脚裾部の間に穿孔のみられる

同じ器形の場合は器台に分類している。杯部口径6.7cm、器高6.2cm、裾部径8.6cmの大きさ。杯部は直線的に開き、端部は上に摘んだように面取りされる。脚裾部は僅かに内彎気味ながら直線的に開き、裾端は反り気味になる。胎土に細砂粒を若干含み、黄橙色に焼成されている。

44は復原口径23.4cmの大きさで、口縁部が長く緩やかに外反する。外面は風化するが、内面にヘラ磨きの痕跡がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

46・47の杯部は、短く内彎する杯底部から、緩やかに屈曲した口縁部が外に開く。46は口径14.2cm、杯部高4.9cmの大きさで、器面が風化するが外面にハケ目が残る。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。47は復原口径16.5cm、器高16.2cmの大きさで、杯部高は6.1cmを占めていて、46の口縁部の反りよりも強めで長い。柱状部はエンタシスに細く伸びて、裾部は内彎気味に開き、裾部と柱状部の屈曲部に円孔が3ヶ所穿たれる。杯部の器面は磨滅するが、柱状部・裾部にはヘラ磨き痕が残り、柱状部内面はナデられる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。48も47に似た器形だが、杯部が低平である。口径14.5cm、器高13.3cmの大きさで、杯部高は4.0cmを占める。柱状部と裾部の形状は似るが、穿孔がなく、柱状部の中実部分がやや長い。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成されている。49もエンタシスに細く伸びる柱状部だが、裾部は外反する。柱状部の中実の割合が高く、穿孔はない。内外面とも板ナデされるが、胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡明褐色に焼成されている。

50は杯部の比率の大きな高杯で、口径18.2cm、器高9.3cmのうち杯部高は4.8cmを占める。杯底部は平らで口縁部は緩やかに長く外反し、柱状部は短く、裾部は内彎気味に開き、柱状部との境に円孔が3ヶ所穿たれる。杯部・裾部とも内外面はハケ目とナデで調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成されている。

51・52は高杯の脚裾部であろう。51は柱状部が膨らみ気味に開くが、裾部は更に開いて、屈曲部に4ヶ所穿孔がみられる。器面が風化して調整手法は不明。52は柱状部がなく、底部からそのまま裾に向かって外反するものである。外面は風化するが内面にはヘラ削りの痕がみられる。いずれも胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色ないし橙色に焼成されている。

器台(34) 鼓形器台の受け部側破片である。受け部下端に凸帯状の段をもち、口縁部には直線的に開く。くびれ部内面はヨコナデ調整で面をなし、口縁部内面はヘラ磨きされる。外面は風化するが、おそらくヘラ磨きとヨコナデ調整であろう。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡黄茶褐色に焼成されている。

脚台(33・53) 台付甕の破片であろうか。33は強く外反する脚裾部をもち、裾径は8.2cmを測る。内外面ともに板ナデ調整がみられる。53はさほど外反しない脚台で、裾径5.0cmの大

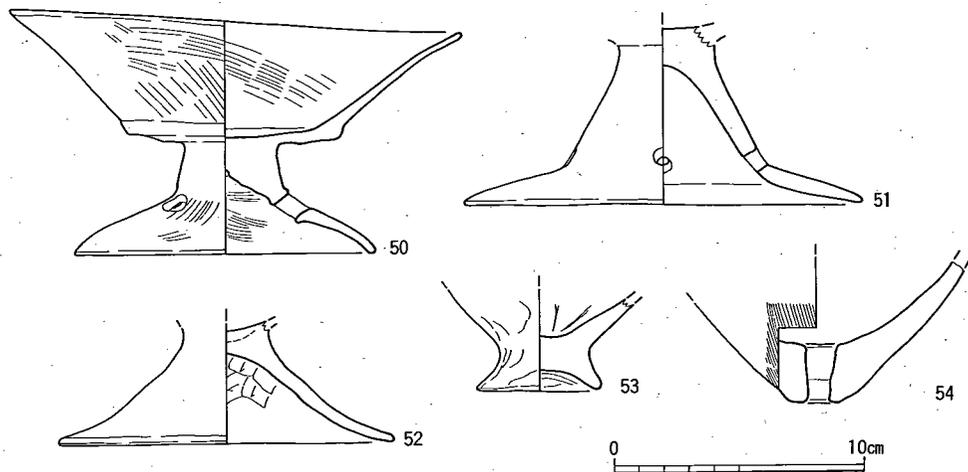
きさ。内底部は板ナデ、外面はナデ調整される。いずれも細砂粒・雲母・赤褐色粒を胎土に含み、淡黄褐色・淡明褐色に焼成されている。

手捏土器(35・43) 35は先端部を欠くが杓子である。口径4.0cm前後、高さ1.0cm程の碗形の体部に斜め方向の柄が付く。細砂粒・角閃石を胎土に含み、やや丁寧な作りで、淡明褐色に焼成されている。43は口径5.6cm、高さ2.1cmの大きさの碗形で、器壁は薄めである。細砂粒を含む胎土だが、指頭痕の残るナデで調整され、暗黄褐色に焼成されている。

碗(36~42) 36~38は深めの体部をもつ碗、39~42は体部が浅い碗である。36は鉢に近い器形で、口縁部は内彎して、口唇部は面をなす。口径12.6cm、器高6.8cmの大きさで、外底部はハケ目、他はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄茶褐色に焼成されている。

37・38は口径と器高の比率がほぼ3:1の碗である。37では口径17.3cm、器高6.5cmの大きさで、口縁部は内彎気味ながらも直線的に開き、内外面にハケ目がみられる。38は口径13.2cm、器高5.4cmの大きさで、口縁部は内彎しながら開き、外面にハケ目がみられる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色・暗橙色に焼成されている。

39~42は口径と器高の比率がほぼ4:1の碗で、内彎気味に開く器形は杯に近い。39は口径15.7cm、器高4.2cmで、内面にはハケ目の後にヘラ磨きの加わる調整がみられる。40・41は口径16.0cm・16.3cm、器高3.9cm・3.4cmで、内面にはハケ目がみられる。42は口径10.2cm、器高2.8cmで、内外面ともナデられる。いずれも胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄灰褐色・黄褐色に焼成されている。



第56図 21号住居跡出土土器実測図7 (1/3)

甌(54) 口縁部側を欠失するが、砲弾形を呈する底部で、底面に直径0.8~1.2cm大の穿孔がある。外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に角閃石を含み、暗橙色に焼成されている。

砥石(第77図24) 凝灰岩製の肌理の細かな砥石で、よく使用されている。現存長5.3cm、幅3.1cm、厚さ2.2cmの大きさで、重量は29.2gを測る。

鉄鎌(第19図10~14) 11は基部を欠失するが現存長2.6cm、身部幅1.3cm、厚さ0.4cmの大きさの圭頭の鎌である。側縁が内反りで、形態的には銅鎌に似ている。12は先端・基部側を欠くが先端が砲弾形に丸味をもつ三角鎌であろうか。現存長3.1cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmの大きさ。13は基部側を欠くが、現存長3.8cm、身部幅1.3cm、厚さ0.2cmの大きさの方頭鎌。14は長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmの大きさの無茎三角鎌である。

鉄刀子(第19図15・21) 15は不明確だが刀子であろうか。刃部は半月形で、背は反らない。細めの基部端を失い、現存長3.7cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmの大きさ。21は先端・基部側を欠くが、現存長2.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの大きさの破片である。

鉄鉤(第19図16) 先端と茎部を欠くが、現存長4.1cm、幅1.1cm、浅いU字形断面を呈する刃部の厚み0.1cmでやや反る。断面長方形の茎部は、幅0.9cm、厚さ0.5cmの太さである。

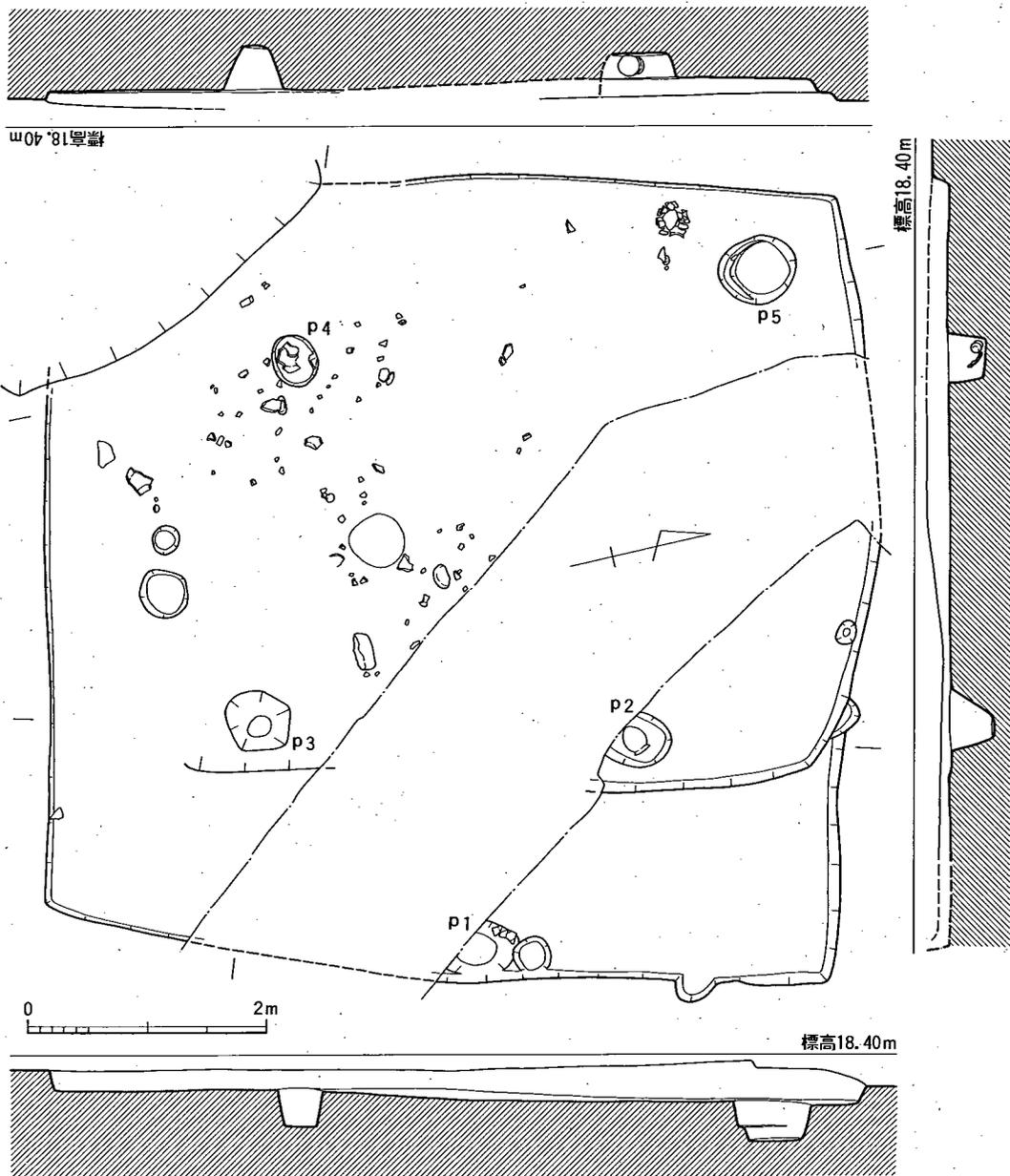
不明鉄製品(第19図17~20) 17は下部に木質が付着していて、鉄鎌の篋被部の可能性があるものの、茎部の形態は先述の鉤にみられる特徴と似るので、これの茎部の可能性もあろう。現存長7.6cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmの大きさ。18と19は幅0.4cm、厚さ0.2cmの断面二等辺三角形の棒状である。接合しないが同一個体かも知れない。刀子の茎部としては細長い。20は直径0.4cmの丸棒状をなすが本来の形は分からない。

この住居跡からまとまって出土した土器では、土師器壺・甕や高杯など各器種で豊富な量を見るが、その形態・特徴からは、3世紀代とみれる複合口縁壺もあれば、甕では口縁部がやや古い様相を有するものの底部などでは丸底化していて、4世紀後半のような特徴をみることができる。ここでは古い要素を持続させていた可能性を考慮して、時期的に新しい要素の時期に考えておきたい。

22号住居跡(図版14-1・3~5・17-1、第57図、旧Ⅲ-3住)

20号・21号住居跡と19号住居跡の間で発見された住居跡で、19号住居跡を切るが、20号・21号住居跡に切られる。また農業用水路保全のための非調査部分がかかなりの部分を占める。水路の東側で発見された10号住居跡と同一住居の可能性が極めて高いが、10号住居跡の項で前述したように、調査時にプランを明確にし得ず、一応区別している。南西隅部は21号住居跡に切られているが、推定では西壁が6.4m前後、南壁は6.0m程になる。また、北壁では東端の隅までの距離が4.3mと6.6mの両方に考えうるが、段をベット状遺構と考えると、外側のプランをとれ

ば、長さ・幅ともに最大で6.7~6.8mの不整形プランになり、主軸方向はN12°W前後になろう。周壁の高さは15cm前後の部分が多いものの西側壁などでは30cmの高さに残っている。床面はやや堅めに締まり、ベット状遺構部分は軟らかい。中央部には木炭・灰が散乱し、直径40cmほどの焼土部分があり、地床炉であろう。柱穴としてはP2~P4が配置から想定される。



第57図 22号住居跡実測図 (1/60)

いずれも直径40cm～50cm、深さ30cmほどの規模で、P3は前述の20号住居跡の主柱穴と重複している。また、P2に完形の甕が、P4には完形小形壺と複合口縁甕が埋置されていた。

出土遺物（図版43・50、第58・59図）

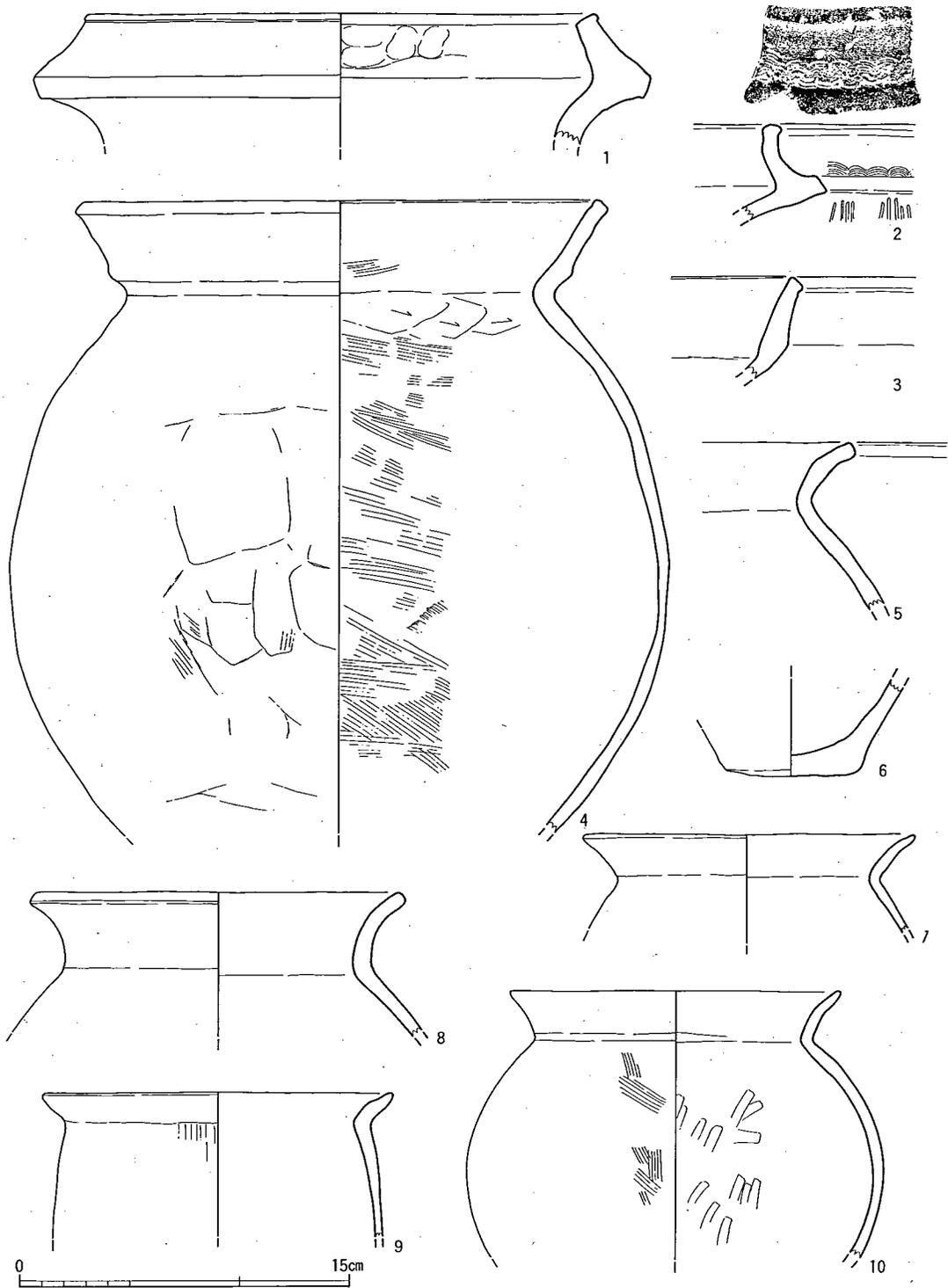
複合口縁壺（1～3） いずれも口縁部破片であり、全体の形は不明。1は復原口径23.0cmの大きさと、く字形に屈曲し、口唇部は面取りされる。2は屈曲部が外側に突出し反転して内傾しながら反り、外面に波状文が描かれ、頸部には暗文状のヘラ磨きが見られる。3は屈曲が緩やかな口縁部で、僅かに外反して口唇部は面取りされるが、甕かも知れない。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・石英などを含み、黄褐色・暗茶褐色・黄橙褐色に焼成されている。

複合口縁甕（4） P4から出土した。底部を欠くが、復原口径23.0cm、残存器高29.0cmの大きさ。口縁部は外方に開くが僅かに屈曲して凸帯状の段をもつ。胴部は丸く、外面は板ナデ、内面はハケ目の後にナデが加わり、頸部下はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、灰黄橙色ないし赤褐色に焼成されている。

甕（5～11） 5・8は外反する口縁部破片で、端部で更にやや反る。器面は磨滅するが、5の胴部外面は板ナデ調整らしい。8は復原口径17.2cmの大きさ。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、橙茶褐色ないし黄橙色に焼成されている。6は平底の底部破片で、ナデ調整されるが、細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。9は復原口径16.0cmの大きさの甕で、口縁部は外反し、胴部はあまり膨らまない。胴部外面にはハケ目が残し、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、黄橙褐色に焼成されている。

7・10・11は卵形の胴部に直線的に開く口縁部が付き、口縁端部は摘まれてやや薄めになる。7では磨滅するが、復原口径15.0cmの大きさ。10・11の胴部外面はハケ目調整される。復原口径15.0cm、胴最大径19.0cmの10では胴部内面が板ナデないしヘラ削りで、頸部内面に稜がある。11の内面は口縁部とともにハケ目調整され胴部では後にナデが加わるが、頸部下に板ナデないしヘラ削りの痕跡がある。口径16.0cm、器高23.4cm、胴最大径20.3cmの大きさ。いずれも胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、暗橙色・黄橙褐色ないし橙褐色に焼成されているが、11の外面に煤、内面にお焦げが付着している。

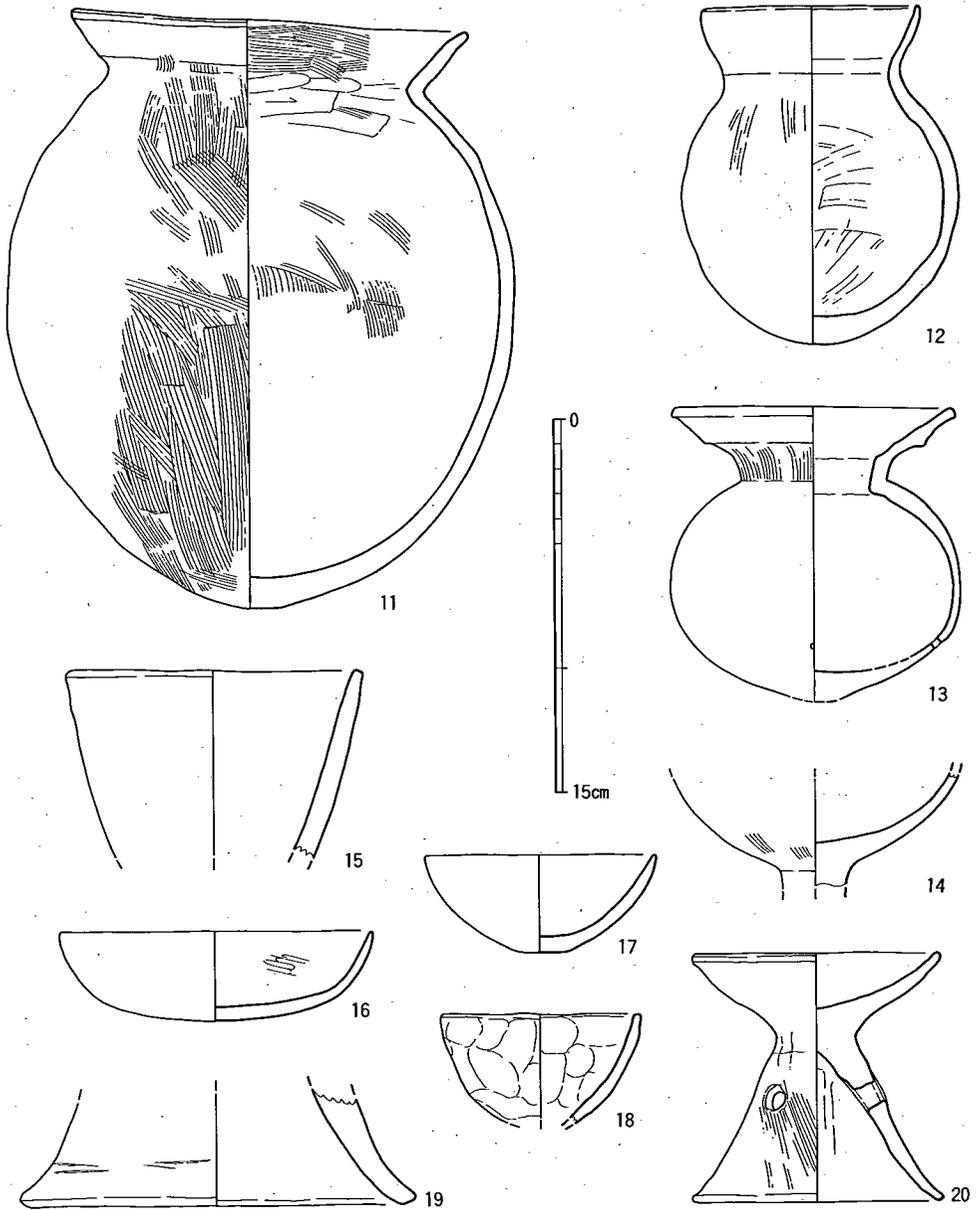
小形壺（12・13・15） 12はP4から出土した口径8.8cm、器高13.5cm、胴最大径11.1cmの大きさの丸底壺。やや長胴で、内彎気味の口縁部を有する。胴部外面は板ナデ、内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、淡茶褐色ないし黒色に焼成されている。13は複合口縁の小形壺で、口径11.2cm、器高12.8cm、胴最大径11.6cmの大きさ。口縁部は直立気味の頸部から直線的に開くが、外面で段をなし、頸部外面にはハケ目が暗文状に付される。胴部は蕪のような形で、小さな底部をもつが、内外面ともにナデ調整され、胴部下半に小さな穿孔が見られる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡橙色に焼成されている。15は小形丸底壺か、鉢のような器形の口縁部であろうか。復原口径12.0cmの大きさと、直線的にやや開き、ナデ調



第58图 22号住居跡出土土器実測図1 (1/3)

整される。胎土には雲母・角閃石を含み、暗橙色に焼成されている。

高 杯(14・20) 14は口縁部と柱状部以下を失う杯底部破片で、杯部は碗形を呈する。外面にハケ目が一部残るものの内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、黄橙

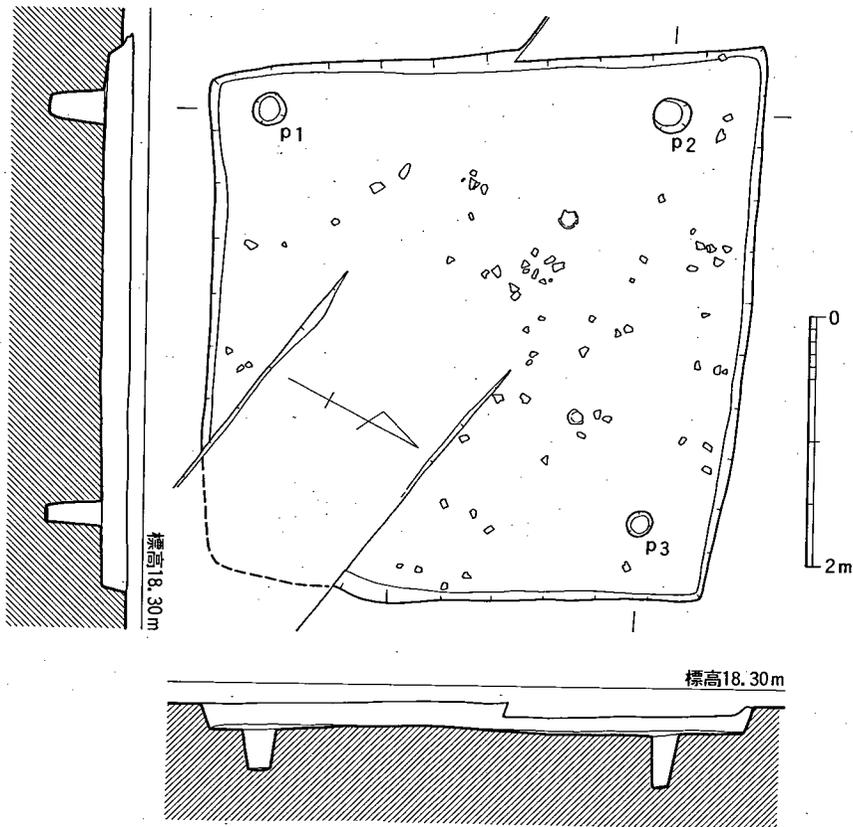


第59図 22号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

褐色に焼成されている。20は復原口径9.8cm、器高10.0cm、裾部径10.0cmの大きさの高杯で、杯部は椀形である。内彎しながら開く口縁部はヨコナデ調整される。裾部は杯底からラッパ状に開き端部でやや外反する。外面にハケ目、内面はナデられて、やや高い位置に3ヶ所の穿孔がある。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡灰橙色に焼成されている。

椀 (15~18) 15は浅い椀で杯に近いが、復原口径12.6cm、器高3.6cmの大きさ。口縁部は内彎しながら立ち上がり、内面はヘラ磨きされる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。17は復原口径9.0cm、器高3.9cmの深めの椀で、小さな底部がある。ナデ調整され、角閃石・赤褐色粒を含む胎土を明茶褐色に焼成している。18は手捏の深い椀で、復原口径8.0cm、残存器高4.4cmの大きさ。指圧痕の残るナデ調整で、細砂粒を含む胎土を暗黄橙色に焼成している。

器台? (19) 端部がやや外反する裾部破片であり、支脚や高杯の可能性もあるが、器台の裾とみたい。器面は磨滅するが、外面の一部に板状原体の小口痕がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙色に焼成されるが、二次的な火熱を受けて赤変する。



第60図 23号住居跡実測図 (1/60)

石 鏃(第31図3) 安山岩製の打製石鏃で、前面に調整剝離が加わる。平基鏃で長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.3gを測る。

砥 石(第77図25) 玄武岩質の石材を用いた砥石で、幅5.6cm、厚さ4.7cm程の方柱状だが、両端部を失い現存長は5.8cm。3面はよく使用されるが、他の1面はやや剝落が進む。

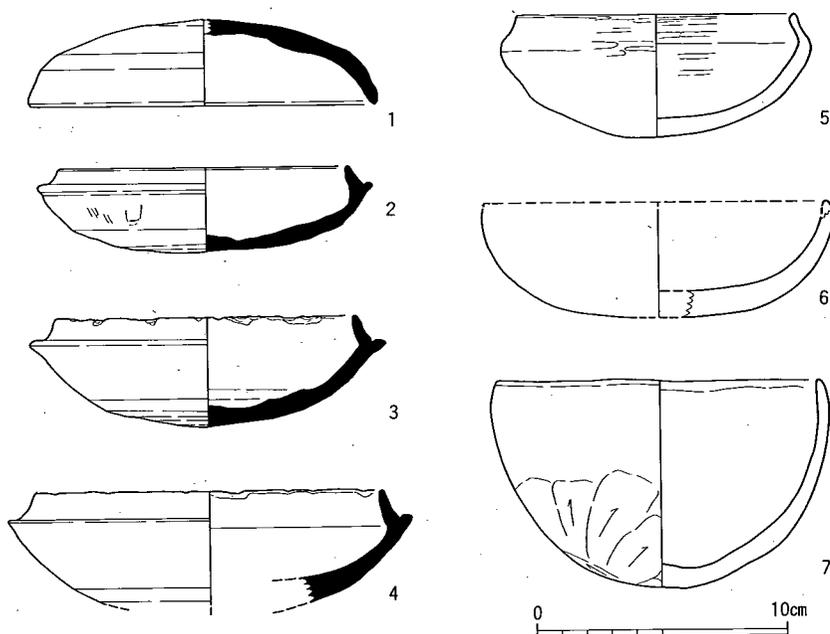
22号住居跡出土土器では、甕に3世紀代ないし4世紀前半頃の特徴をみることが可能である。また複合口縁壺なども3世紀に置いて問題ないであろう。

23号住居跡(図版20-1、第60図、旧Ⅲ-5住)

C・D-17・18区に発見された住居跡で、2号溝・24号住居跡と重複するが、これらより後出する。試掘トレンチによって東隅を失うが、一辺4.2m~4.4mの不整形プランを呈していて、約20cmの高さに周壁が残る。主軸はN27°30'W前後に向き、試掘トレンチで失った部分以外の3隅に柱穴が配置される。柱穴は直径20cm~25cm、深さ30cm~45cmの規模で3.2m・3.3mの柱間距離である。床面はさほど堅緻でなく、土器片などが散在するものの、カマドや炉跡の痕跡はみあたらなかった。

出土遺物(図版43、第61図)

須恵器杯蓋(1) 身受けのかえりをもたない杯蓋で、外天井は回転ヘラ削りされる。復原口径14.0cm、器高3.5cmの大きさで、暗青灰色に焼成されている。



第61図 23号住居跡出土土器実測図(1/3)

須恵器杯身(2~4) いずれも蓋受けのかえりをもつ杯身で、外底部は回転ヘラ削りされる。2は口径11.7cm、器高3.4cm、外径13.4cmの大きさで、焼成はあまく灰紫褐色を呈する。3は口径11.8cm、器高4.4cm、外径14.1cmの大きさ、4は底部を失うが復原口径13.3cm、外径16.1cmの大きさ。3・4はともに灰茶色にやや堅く焼成されていて、口縁端部に焼成後の打ち欠きと研磨痕がみられる。

土師器杯(5・6) 5は口縁部が内傾する杯で、端部へ反り気味に立ち上がる。復原口径11.0cm、外径12.3cm、器高5.0cmの大きさで、底部は内外面ともに磨滅するが口縁部付近はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡茶色ないし黒茶褐色に焼成されている。6は口縁部が内彎する杯で、端部を欠くが復原口径14.0cm前後、器高4.5cm程の大きさで、内外面ともに丁寧なナデ調整かヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡明褐色に焼成されている。

土師器椀(7) 口径13.5cm、器高8.4cmの大きさの深い椀で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデで、外面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、暗黄褐色に焼成されている。

これらの土器では、土師器椀にやや古い様相をみるものの、須恵器杯蓋・杯身や土師器杯の特徴は6世紀後半に属するものである。

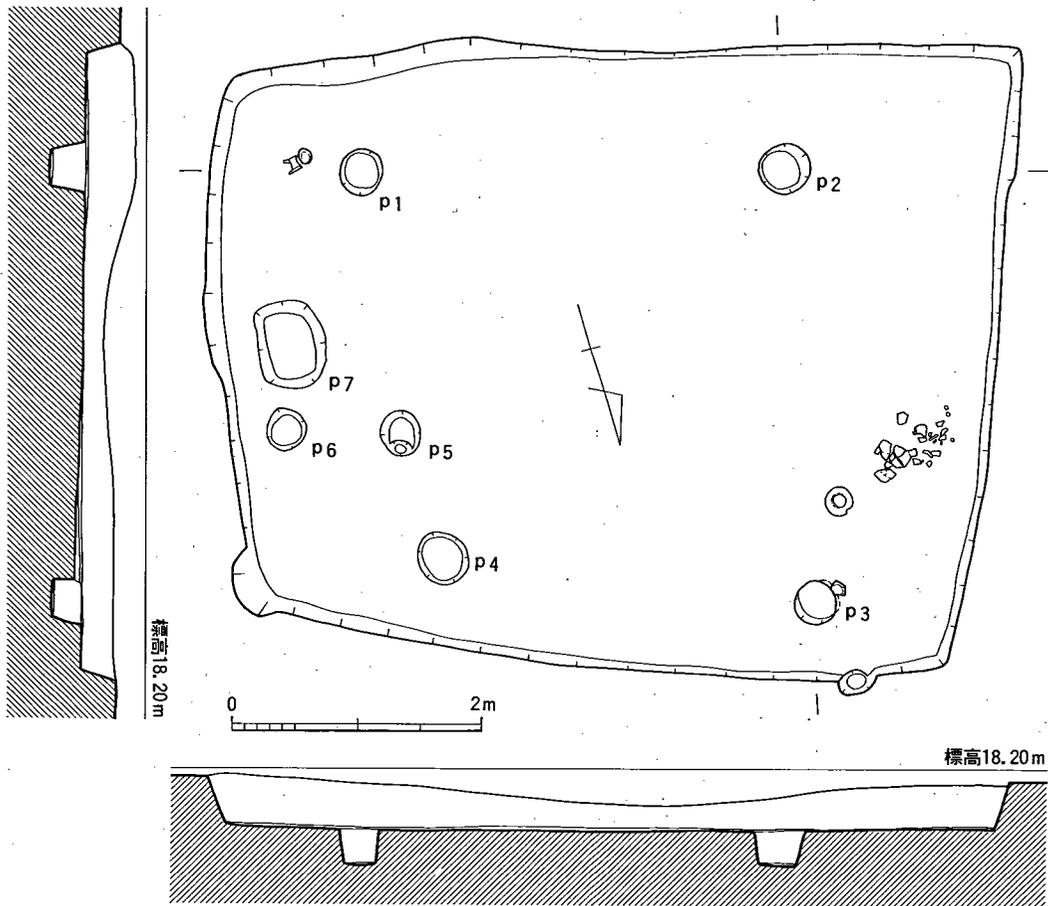
24号住居跡(図版20-2、第62図、旧Ⅲ-12住)

C・D-17区に発見された住居跡で、2号溝・23号住居跡と重複するが、これらより先行する。北辺5.5m、南辺6.3m、東辺4.2m、西辺5.0mで、長軸6.3m、短軸5.1mの台形に近い不整形プランを呈していて、15cm~40cmの高さに周壁が残る。主軸はN74°W前後に向く。中央部の床面はやや堅緻で、床面を掘り込む柱穴状ピットは7ヶ所あり、配置からはP1~P4が主柱穴であろうと目されるが、P1は他の3つよりはやや浅く10cm余りの深さである。P1~P3の規模は直径35cm~40cm、深さ25cm~40cmで、P5・P6・P7の深さは35cm・15cm・18cmである。床面には木炭や灰らしい炭化物が散在したものの、炉跡の痕跡は確認できなかった。

出土遺物(図版43・44・51、第63・64図)

土師器甕(1~4) 1は口径14.4cm、器高36.3cm、胴最大径26.0cmの大きさの長胴甕で、底部は凸レンズ状に膨れる。なで肩で、窄んだ頸部から口縁部は緩やかに外反する。内外面ともハケ目調整されるが、外面のハケ目は磨滅してかなり消えている。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、黄褐色ないし茶褐色に焼成されて、外面には煤が付着する。2も口縁部が緩やかに外反する甕の口頸部破片である。内外面にハケ目がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡黄褐色に焼成されている。

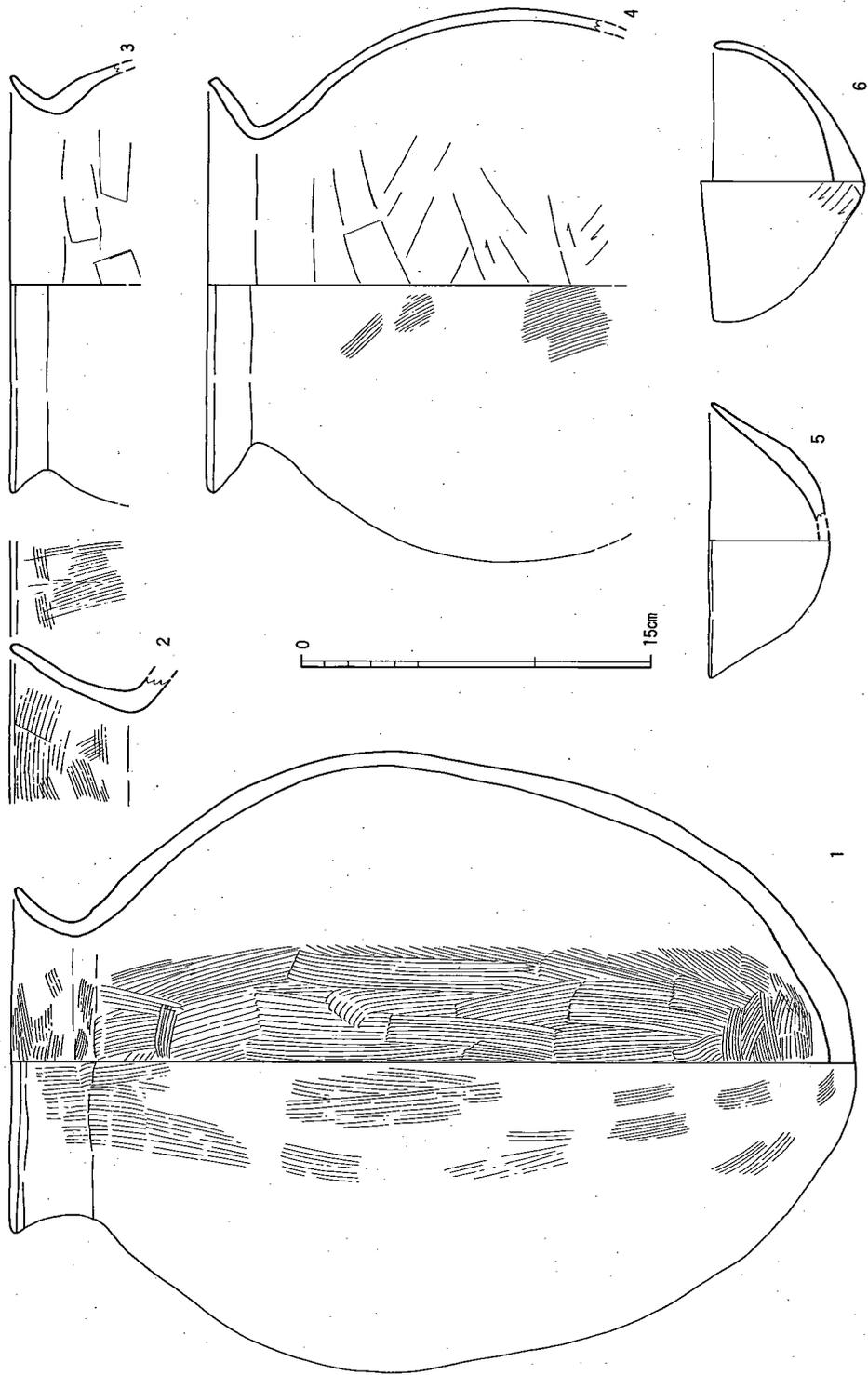
3は復原口径18.0cmの大きさの甕で、口縁部は外反するが、外面は磨滅し、頸部下の内面



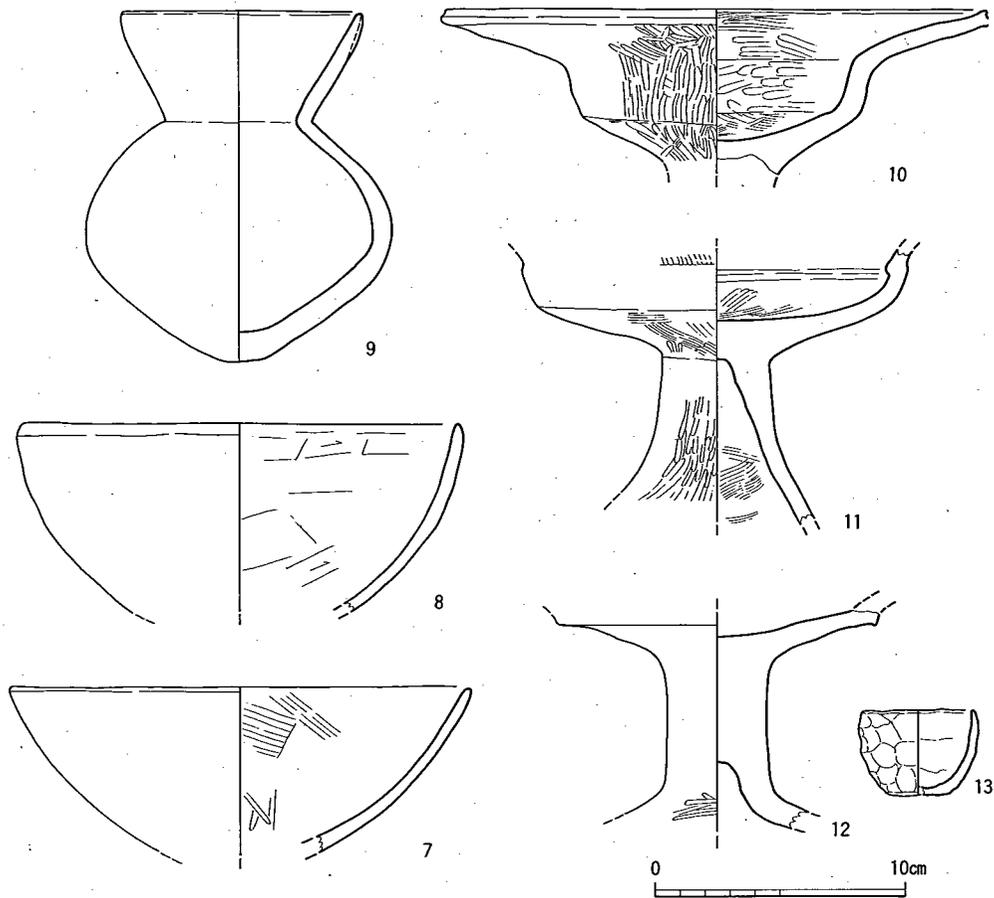
第62図 24号住居跡実測図 (1/60)

須恵器杯身(2~4) いずれも蓋受けのかえりをもつ杯身で、外底部は回転ヘラ削りされる。2は口径11.7cm、器高3.4cm、外径13.4cmの大きさで、焼成はあまく灰紫褐色を呈する。3は口径11.8cm、器高4.4cm、外径14.1cmの大きさ、4は底部を失うが復原口径13.3cm、外径部はなで肩を介して頸部にすぼまり、口縁部は直線的に強めに外反する。口縁端部は上方に摘まれたように跳ねる。胴部外面はハケ目調整されるが磨滅が進み、内面は頸部のやや下までヘラ削りされて、器壁は薄い。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙色ないし橙褐色に焼成されている。

土師器椀(5~8) 5は復原口径10.0cm、器高5.0cmの大きさの椀で、口縁部は僅かに外反する。内外面とも磨滅して調整手法は不明。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。6は尖り底の椀で、口縁部は内彎しながら立ち上がる。口径12.0cm、器高6.9cmの大きさ。内外面ともにナデ調整されるが、底部外面にヘラ削りの痕跡がみられる。



第63图 24号住居跡出土土器美測図1 (1/3)



第64図 24号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

胎土には細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、灰橙褐色に焼成されている。

7・8は口径の大きな椀で、口縁部は内彎気味に立ち上がるが、底部をともに欠く。7は復原口径18.4cm、残存器高6.6cmの大きさで、8は復原口径18.0cm、残存器高7.5cmの大きさで、器壁は7に比して8はやや厚い。ともに細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含む胎土で、外面は磨滅するが、内面は板ナデないしヘラ削りされ、淡黄褐色・淡橙色に焼成されている。8はP7から出土した資料である。

土師器小形壺(9) 口径9.7cm、器高14.0cm、胴最大径12.2cmの大きさの壺で、蕪のような形の胴部に内彎気味ながら直線的に開く口縁部が付く。外面は全体に磨滅するが、内面はナデられる。胎土に赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

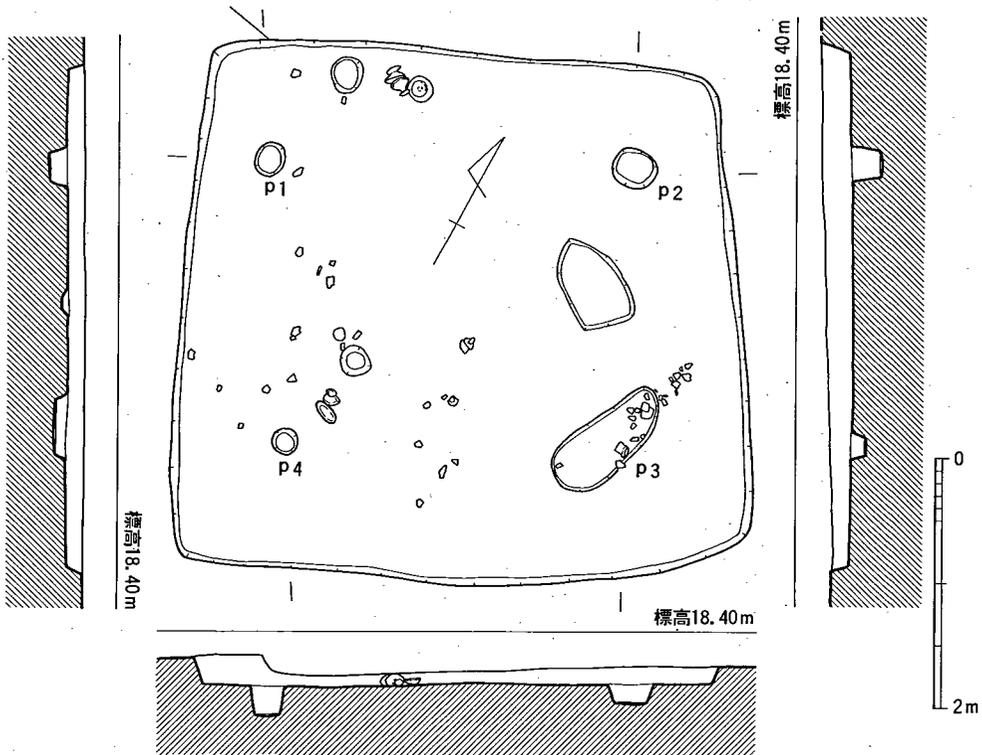
土師器高杯(10~12) 10の杯部は杯底部から直立気味に立ち上がり、口縁部が反転して外方に開き、端部は摘んだように面取りされる。口径22.0cm、杯部高6.0cmの大きさ。11も10に似

たような杯部だが、杯底部に稜をもつ10に比して丸味があり、口縁部を欠く。柱状部は中空で、脚裾に反るが裾部も欠く。ともに内外面ともにハケ目とハケ目後にヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、橙褐色・茶褐色に焼成されている。12は中実の柱状部で、杯部底から明瞭な稜をもって口縁部側に移るようで、裾部へも強めに屈曲するが上下ともに欠失する。外面は磨滅するがヘラ磨きらしい痕跡が少し残り、裾部内面には板ナデの痕跡がある。胎土には細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙色に焼成されている。

手捏土器(13) 椀形のミニチュアで、口縁部は内彎気味、底部は平らである。指圧痕が残り、細砂粒・赤褐色粒を含む胎土を、淡茶褐色に焼成している。

土器片円盤(第17図11~13) 縄文土器片を円盤状に打ち欠き整形したもので、11・12は打ち欠き後の周縁が磨滅ないし磨耗している。土器片自体では11・13が外面に条痕をもち内面はナデ、10は内外面ともにナデ調整されている。いずれも胎土に砂粒・角閃石を含み、茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されている。外径は5.2cm・4.9cm・3.8cm、厚さは0.9cm・1.3cm・0.9cmをそれぞれ測る。

出土土器では、4の甕は4世紀後半頃で新しい要素をもつが、他の甕や椀・高杯・壺はそれ



第65図 25号住居跡実測図 (1/60)

より遡るものばかりで、3世紀代にみても問題ないであろう。P7部分が住居跡埋没後に掘り込まれた可能性もあろう。

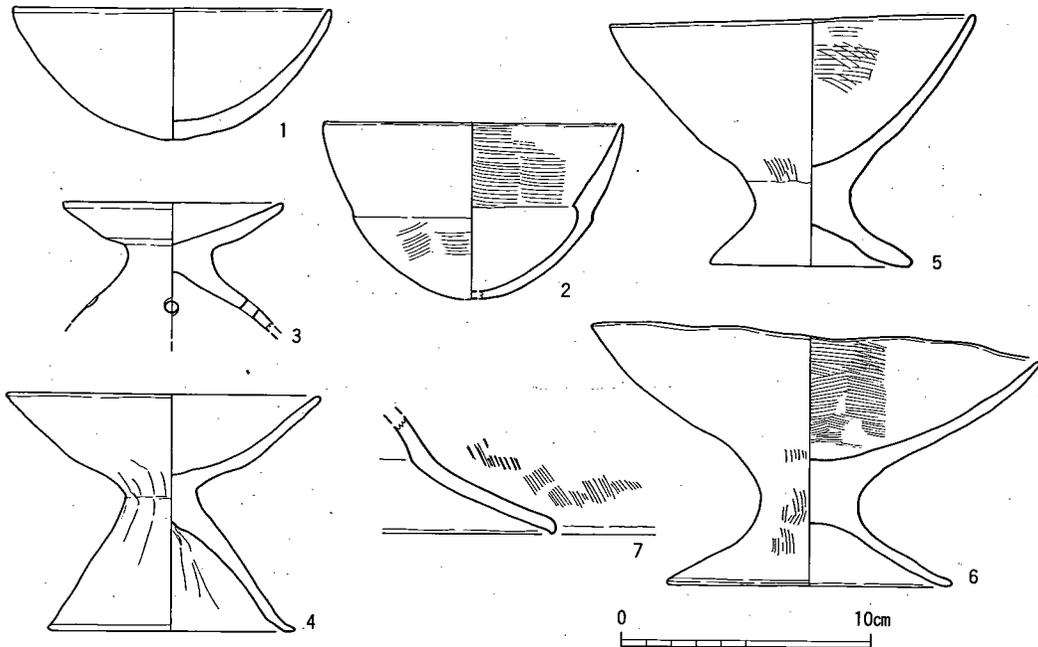
25号住居跡 (図版21・22-1、第65図、旧Ⅲ-6住)

C・D-19・20区に発見された住居跡で、23号住居跡の約5m西側にある。一辺4.0m～4.6mの台形に近い不整形プランを呈していて、周壁は15cm～25cmの高さに残るが、北側壁は試掘トレンチによって削られて低い。主軸はN61°30'W前後に向き、4隅に柱穴が配置される。柱穴は直径20cm～35cm、深さ10cm～25cmの規模で、P3のみ100cm余りの長さの長楕円形ピットである。2.9m・2.2m・2.7m・2.3mの柱間距離を測る。床面はさほど堅緻でなく、土器片などが散在するものの、カマドや炉跡の痕跡はみあたらなかった。

出土遺物 (図版44・50、第66図)

土師器椀(1) 口縁部が内彎気味に開く椀で、口径12.7cm、器高5.3cmの大きさで、内外面ともにナデ調整されるが、やや磨滅する。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡黄茶褐色に焼成されている。

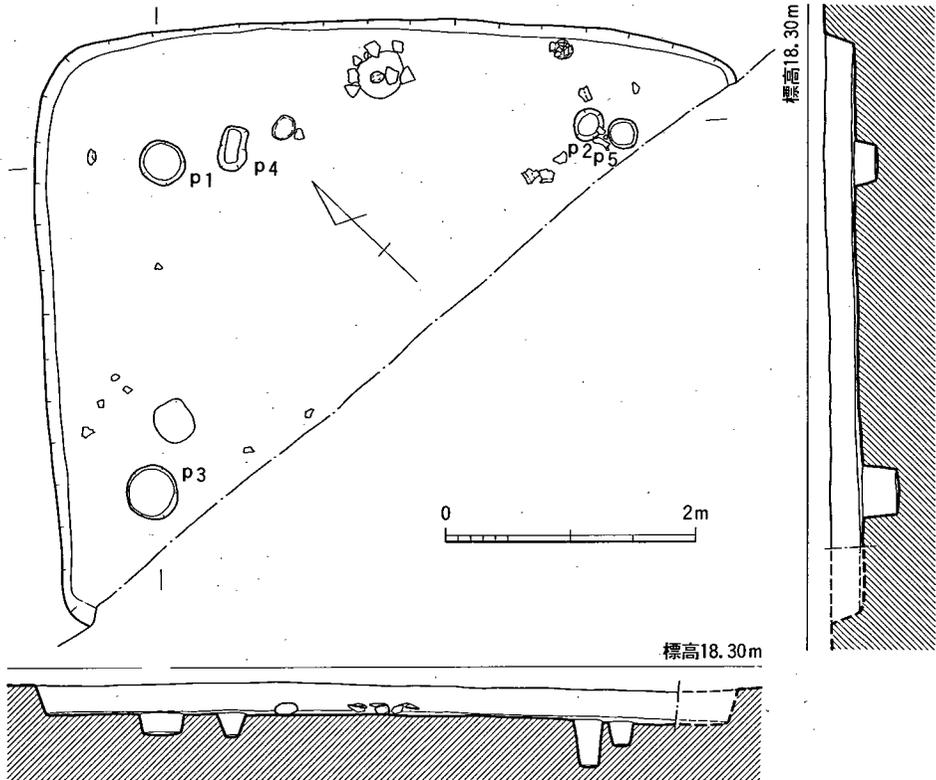
土師器小形丸底壺(2) 半球形の体部をもち、口縁部が内彎気味に開いて、椀に似た器形だが、体部と口縁部の間に屈曲の段をもつ丸底壺である。復原口径12.0cm、器高7.1cmの大きさ



第66図 25号住居跡出土土器実測図 (1/3)

で、内外面ともハケ目調整の後ナデられるが、体部外面と口縁部内面にハケ目が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、黄橙褐色に焼成されている。

土師器高杯(3~7) 3は裾部を欠くが、口径8.8cm、杯部高1.8cmの大きさの、口縁が直線的に開く小皿状の杯部をもつ。脚裾部はラッパ状に開き、4ヶ所の穿孔がある。器面は内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙色に焼成されている。4~7は、杯底部と杯口縁部の屈曲が明確でない高杯で、特に5・6は相対して完形のまま出土したが、それぞれ微妙な差異がある。4は口径12.5cm、器高9.5cm、裾径9.8cmの大きさ。杯部高は4.0cmを占め、杯底部と口縁部の境は僅かに屈曲する。脚裾部はラッパ状に開き裾端部は外反する。器面はヨコナデないしナデ調整されるが、柱状部には絞り痕が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙褐色に焼成されている。5は口径14.6cm、器高10.0cm、裾径7.8cmの大きさで、杯部高は約7.0cmを占める。口縁部は内彎気味に直線的に開き、内外面ともにハケ目の後にナデられる。脚裾部は短めの柱状部を介して低く開くが、口縁部の器壁に比して厚い。6は口径17.7cm、器高10.0cm、裾径11.0cmの大きさで、杯部は約5.5cmの高さを占め、内彎気味ながらも直線的に開く。裾部は短めの柱状部を介して低く開くが、器壁は

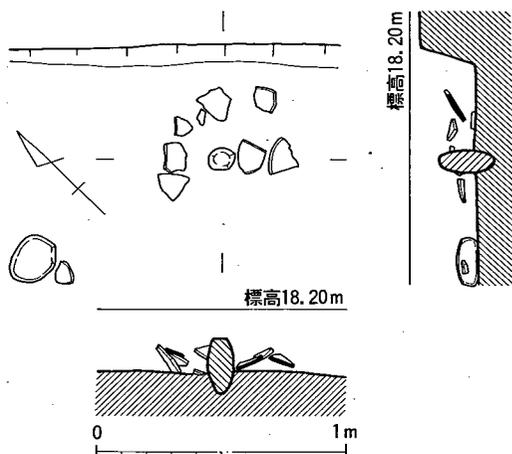


第67図 26号住居跡実測図 (1/60)

薄い。器面は内外面ともにハケ目の後にナデられるが、口縁部内面と柱状部の一部にハケ目が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙褐色ないし黄褐色に焼成されている7は脚裾部の破片で、開いた裾端がやや下方へ折れる。

砥石 (第77図26) 灰褐色を呈する砂岩製砥石で、長さ7.4cm、幅6.3cm、厚さ2.9cmの大きさ。砥石に使用される面は4面あるが、1面は剝離が進んでいる。重量は167gを測る。

これらの土器では、3の高杯に代表されるように3世紀代に入る可能性が高い。



第68図 26号住居跡カマド実測図 (1/30)

26号住居跡 (図版22-1、第67図、旧Ⅲ-7住)

C-20・21区に発見された住居跡で、25号住居跡の南西側に近接するが、南半分は調査区域外に続く。北東辺は5.6m、北西辺は4.6mを測るが、不整長方形プランであろう。周壁は20cm前後の高さに残る。主軸はN43°W前後に向き、隅に柱穴が配置され、P1～P3が支柱穴であろう。柱穴は直径25cm～45cm、深さ15cm～35cmの規模で3.4m・2.7mの柱間距離を測る。P4・P5はP1・P2に近接して20cm程の深さをもつ。床面はやや堅く、土器片などが散在している。床面ではP3の北東側に焼土と炭化物の散乱がみられた。一方北東壁際のP1～P2間に卵形の河原石が据えられて、僅かに赤化した焼土が確認された。

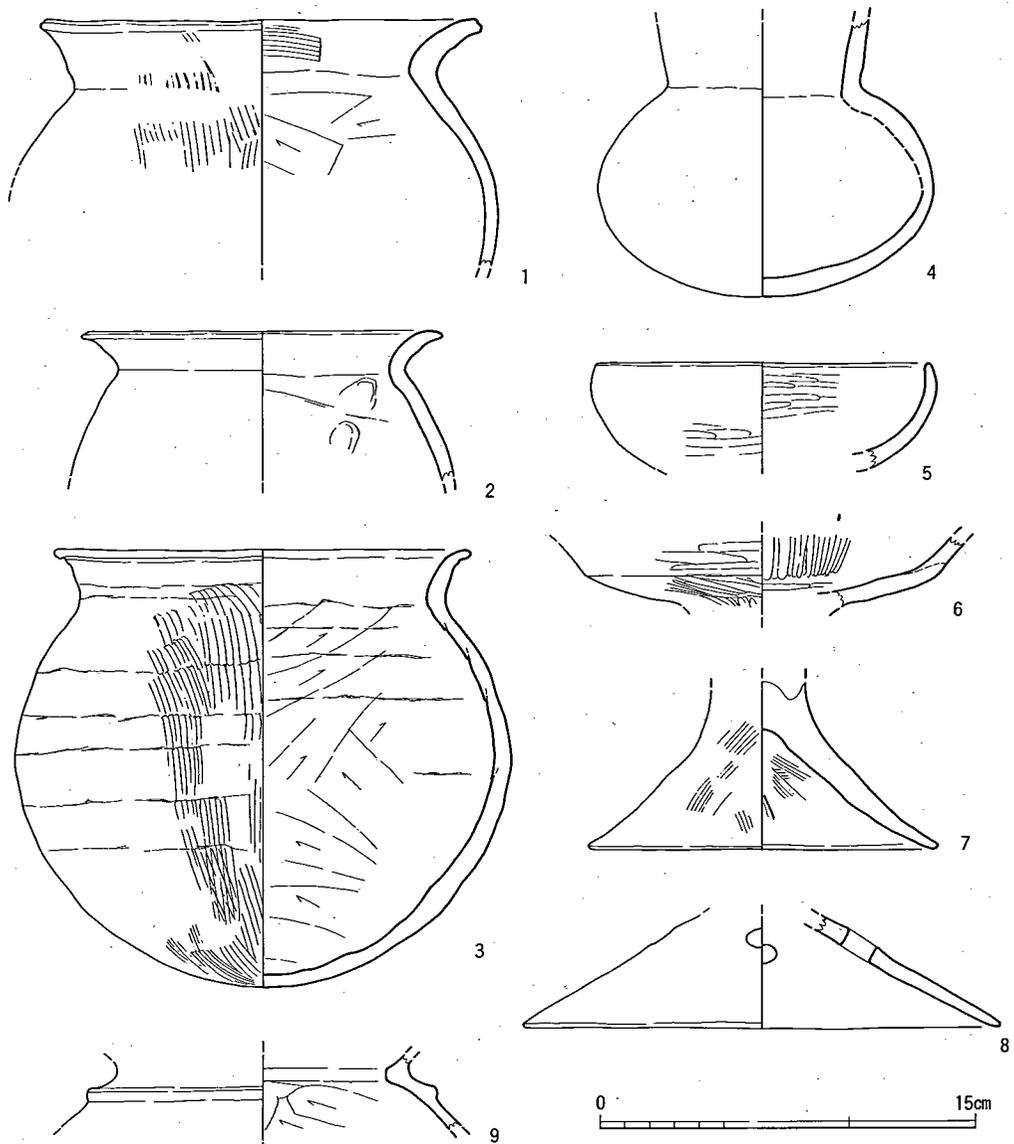
カマド (図版22-3、第68図)

北東側壁のほぼ中央に施設されている。発掘時には、北東壁・北西壁の両側ともにカマドの可能性を考慮しながら、遺構検出を行いながら掘り下げたが、P3付近に炭化物が床面近くから散乱していて、北西壁側の床面に焼土が発見されたためにカマドを西側に想定した。しかし、北東壁側では粘土や、木炭などの炭化物を確認しないまま床面近くに達した。床面を露呈させる作業中に高さ10cmほど突き出た河原石が床に食い込むように据え付けられ、周囲に角礫片や土器片がこれを囲むように発見された。この状態でも据えられた石の周囲に、焼土部分はみられなかったが、2～3cm下げると、周囲の石に囲まれた内側が僅かに焼けて赤変していた。従ってカマドと判断したが、袖や壁体を構成していた粘土や焼土は不明である。また壁際にも焼けた部分は確認できなかった。周囲の石を壁体に含めたことも考えられるが、焼土の範囲が石や土器片の内側ぎりぎりまでみられることから、火床部分に落ち込んだとみるのが妥当であろう。火床部分は長さ・幅ともに35cmほどの広さである。この範囲内から土製丸玉が1点出土した。なお、P3脇の焼土部分からも土製丸玉が1点出土した。

出土遺物 (図版44・49、第69図)

土師器甕(1~3) 1は復原口径16.9cm、胴最大径18.9cmの大きさの甕で、口縁部は肥厚して外反する。外面と口縁部内面はハケ目調整されるが、外面のハケ目は磨滅してかなり消えている。胴部内面はヘラ削りされる。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。

2も口縁部が外反する甕の口頸部破片で、復原口径13.6cmの大きさ。器面は磨滅して調整



第69図 26号住居跡出土土器実測図 (1/3)

手法は不明だが、胴部内面に指頭圧痕らしい凹みとヘラ削りの痕跡がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、黄褐色に焼成されている。

3は復原口径16.4cm、器高17.5cm、胴最大径20.0cmの大きさの甕で、丸く膨らんだ胴部をもち、口縁部は外反する。胴部外面はハケ目調整され、内面はヘラ削りされるが粘土帯接合の痕跡が明瞭に残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、やや器壁は厚めで、淡黄茶色ないし淡茶褐色に焼成されているが、二次的な火熱を受けて赤変と器面剝離もみられ、煤も付着している。P2付近から出土した。

土師器小形丸底壺(4) 口縁部を失うが、P2の北側で出土した丸底壺である。胴最大径が13.4cmの大きさの扁球形の体部に、内彎気味に立ち上がる口縁部が付く。器面は内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されているが、煤が付着している。

土師器椀(5) 復原口径13.1cmの大きさの椀で、口縁部は内彎し、内外面ともヘラ磨きされる。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、黄褐色に焼成されている。

土師器高杯(6~8) 6は杯底部から口縁部に屈曲する部分の破片で、口縁部は外反する模様である。砂粒・角閃石・石英を含む胎土で、内外面ともヘラ磨きされて、淡茶褐色に焼成されている。7は脚裾部で、裾径13.5cmの大きさ。柱状部から大きく開き、僅かに外反するが、内外面ともにハケ目調整される。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、黄茶褐色に焼成されている。8は直線的に開く脚裾部破片で、復原裾径19.0cmの大きさ。ヘラ磨きされるようだが、磨滅して不明。円形の穿孔は4ヶ所だろう。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、淡明褐色に焼成されている。

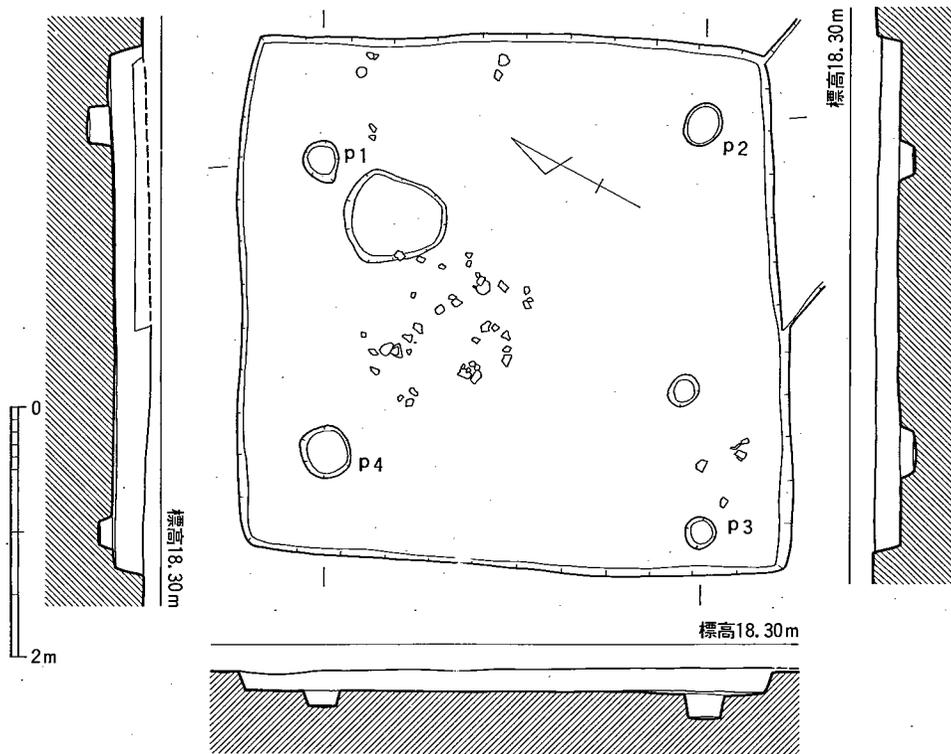
土師器器台(9) 鼓形の器台のくびれ部破片である。凸帯状の段をもつが、裾部側内面はヘラ削りされる。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、黄灰褐色に焼成されている。

土製丸玉(第17図14・15) 14はP3脇の焼土部分から出土した小玉で、外径11.0mm、厚み10.0mm、孔径1.3mmを測る。15はカマド部分から出土した小玉で上面は少し歪む。外径10.3~12.0mm、厚み11.2mm、孔径1.0mmの大きさ。ともに胎土には細砂粒を含み、淡赤褐色に焼成されている。

出土土器では、高杯や鼓形器台は古い様相だが、甕の特徴からは4世紀後半以降の年代とみられる。

27号住居跡(図版23-1、第70図、旧Ⅲ-8住)

D・E-20・21区に発見された住居跡で、25号住居跡の北西側、26号住居跡の北側に近接する。一辺4.0m~4.4mの不整形プランを呈していて、15cm~27cmの高さに周壁が残る。主軸はN29°W前後に向き、柱穴は4隅に配置されて、直径25cm~40cm、深さ10cm~20cmの規模



第70図 27号住居跡実測図 (1/60)

である。3.1m・3.2m・3.1m・2.3mの柱間距離を測る。床面はさほど堅緻でなく、カマドや炉跡の痕跡はみあたらないが、P1の脇にある径70~80cm、深さ約10cmのピットには木炭片の混じった堆積土がみられた。

出土遺物 (図版44・51、第71図)

複合口縁壺? (1) 直に立ち上がる口縁部破片で、屈曲部は凸帯状に飛び出す。口縁部外面には波状文が描かれる。復原口径17.0cm大ききで、胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、茶色に焼成されている。

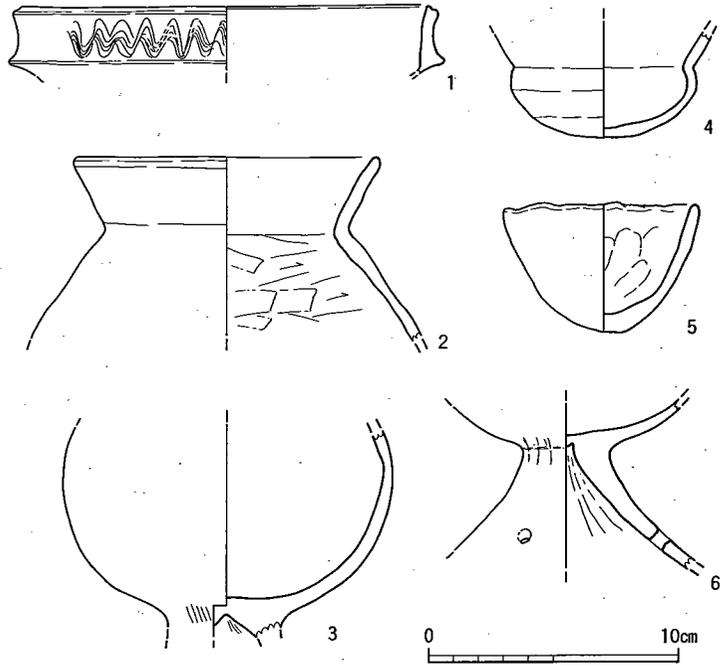
土師器甕 (2) なで肩で、口縁部が直線的に開いて、端部が僅かに内彎する。復原口径12.2cmの大ききで、外面はハケ目調整の後ナデられて、内面の頸部以下はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成されている。

土師器台付壺 (3) 口縁部と脚裾部を失うが、最大径13.0cmの大ききの丸く膨れた胴部に脚台が付く。外面は僅かにハケ目がみられるものの磨滅している。胴部内面はヘラ削りされるがナデ痕がみられ、脚部内面はヘラ状工具の傷が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙色に焼成されている。

・土師器小形丸底壺

(4) 口縁端部を失うが、胴最大径7.6cmの大きさの扁球形の胴部に、外開きの口縁部が付く。外面はヘラ削りないしヘラ磨きされ、内面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、明黄橙色に焼成されている。

手捏土器(5) 復原口径7.8cm、器高4.2cmの大きさで、深い碗形の土器である。指頭圧痕の残るナデ調整



第71図 27号住居跡出土土器実測図 (1/3)

で、口縁端部はやや波うつ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡い茶色に焼成されている。

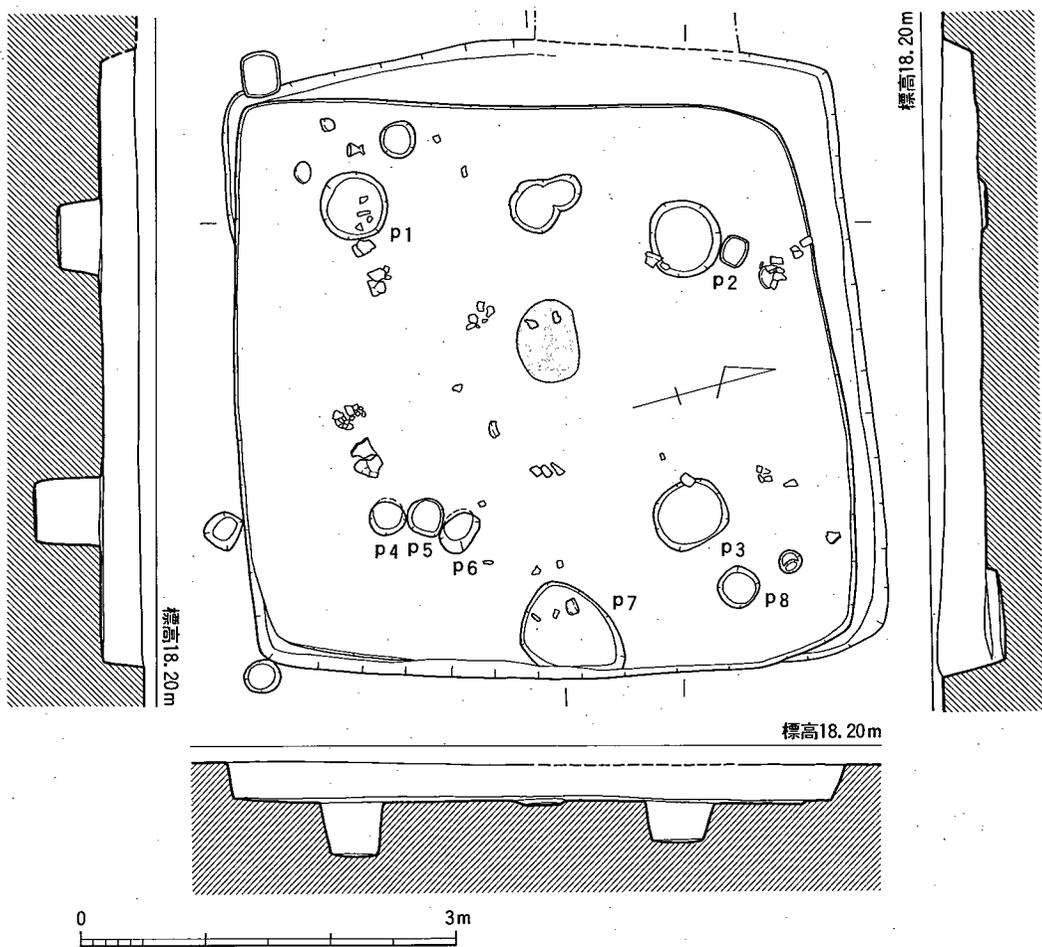
土師器高杯(6) 口縁部と脚裾部を欠くが、杯部底は丸味をもち、脚部は緩やかに広がる。内面にヘラ状工具圧痕の残る脚部には3ヶ所の穿孔がある。外面は磨滅するが、板ナデ調整の痕跡がある。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されている。

鉄斧(第19図22) 刃部を欠失するが、現存長7.5cm、幅4.8cm、刃部の厚さ1.0cm、袋部の長径4.8cm、短径2.5cmの大きさの鉄斧である。袋部の端は0.6cm幅の带状に折り重ねられている。重量は75.6gの現存値を測る。

土器では、2の甕からみて4世紀代に入る可能性が高い。

28号住居跡 (図版23-2・3、第72図、旧Ⅲ-9住)

D-22区を中心に発見された住居跡で、27号住居跡の西側に位置するが、3号建物跡と重複して、先行する。一辺4.5m～5.0mで、東辺が長めの不整形プランに発見された。周壁は15cm～38cmの高さに残るが、西壁の一部は試掘トレンチで削られている。主軸はN14°E前後に向き、四方に柱穴が配置されるが、P1～P4が主柱穴であろう。柱穴は直径30cm～55cm、深さ25cm～55cmの規模で2.3m～2.7mの柱間距離を測る。P5・P6やP8などは浅い。またP7は深さ10cm余りだが、屋内貯蔵穴の可能性もある。床面はやや堅く、中央部には焼土のまと

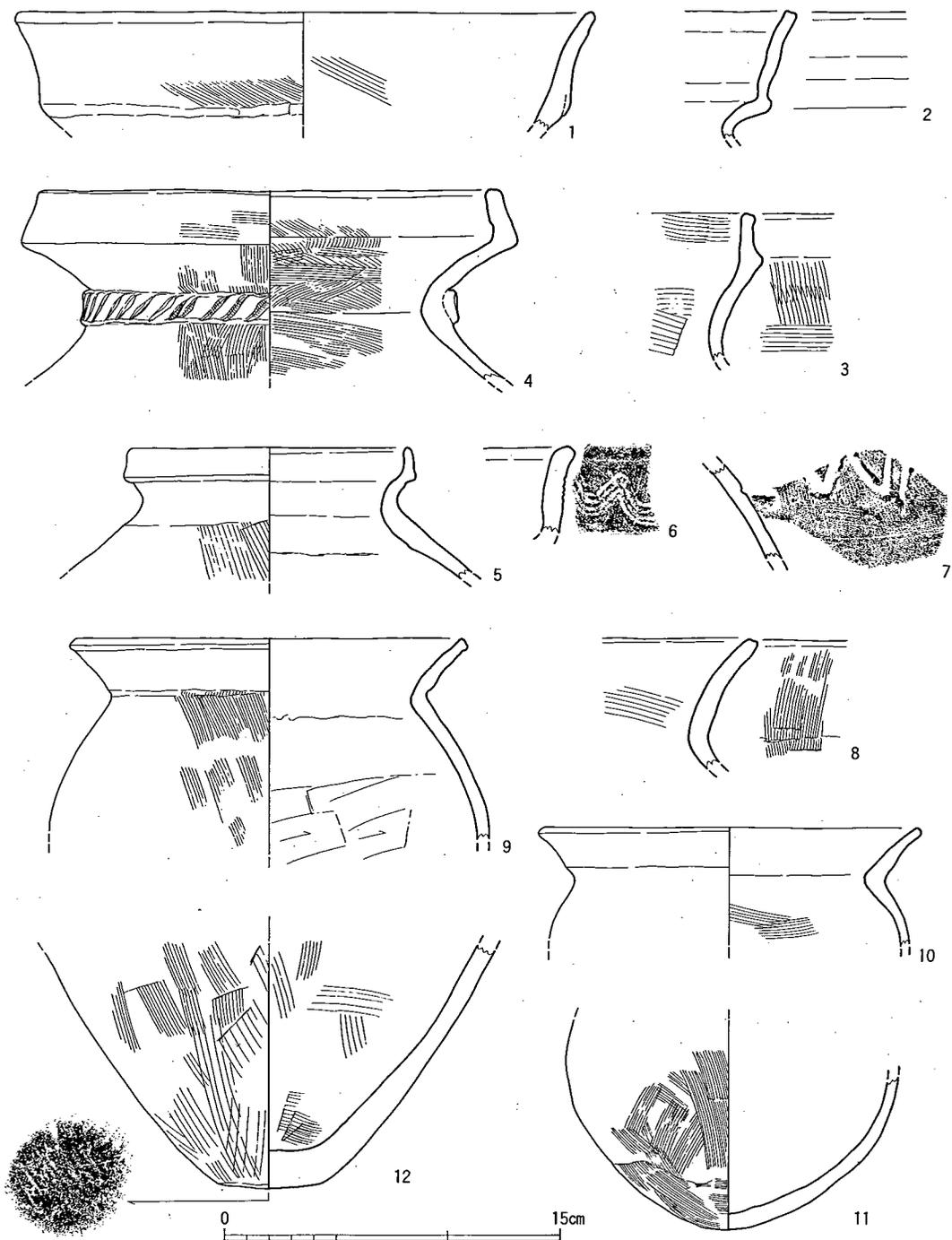


第72図 28号住居跡実測図 (1/60)

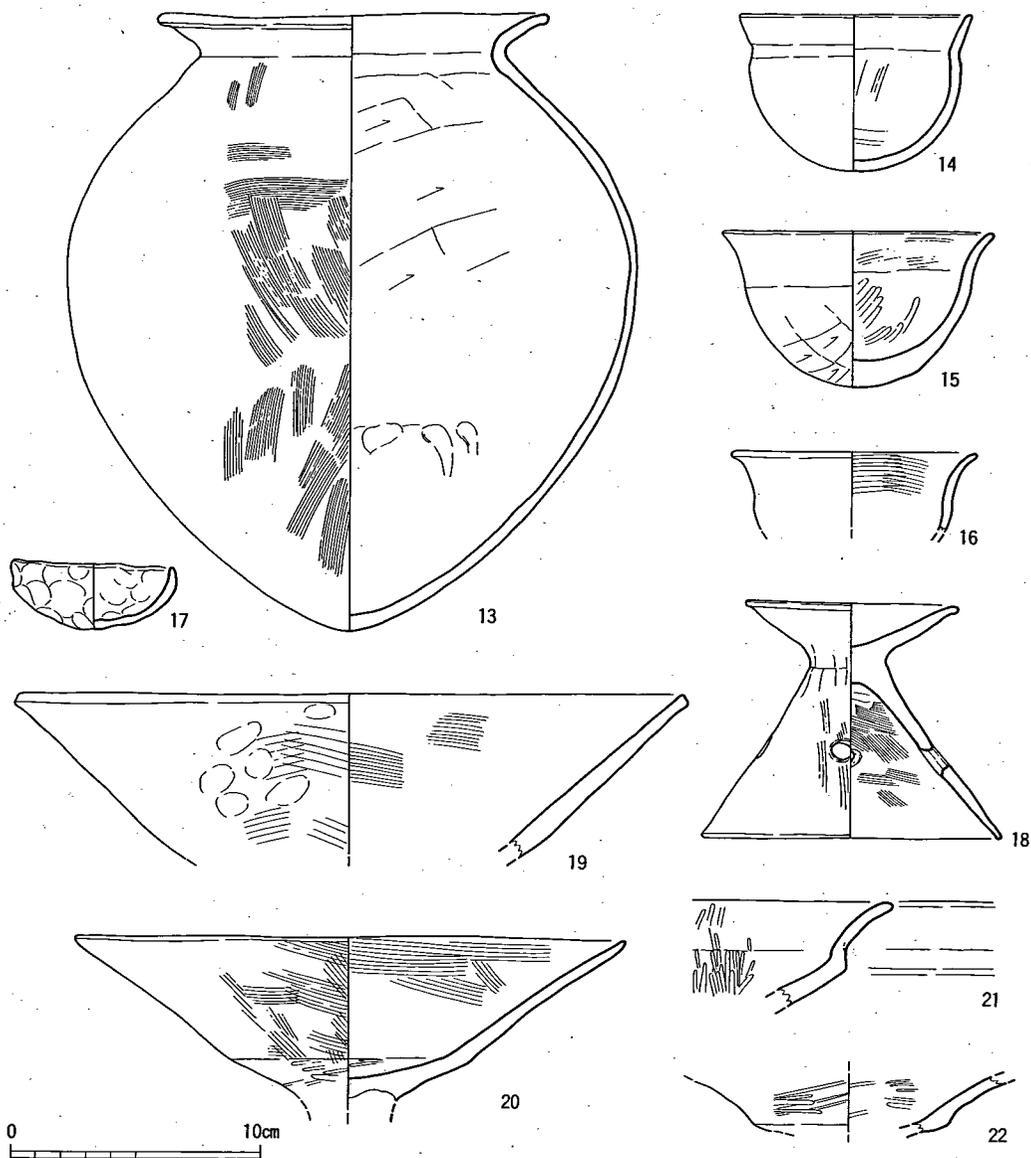
まった地床炉があり、木炭などの炭化物も散乱する。また北側・西側床面で一辺4.2mの低い段があり、本来の住居跡周壁の下端をなすのかも知れない。地床炉は長径65cm、短径50cmの大きさで、浅く凹む。

出土遺物(図版44・45、第73・74図)

複合口縁(1~6) 口縁部破片ばかりだが、壺あるいは甕の口縁部であろう。1は復原口径26.0cmの大きさで、口縁部は外反する。内外面はハケ目の後にヨコナデされる。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されている。2は口縁端部が僅かに外反して上面を整えた甕の口縁部で、暗黄褐色に焼成されている。3は口縁部が短く立ち上がり、屈折部は凸帯状をなす。内外面ともハケ目の後にヨコナデ調整され、淡黄褐色に焼成されている。4は口縁部が内傾し、頸部に刻み目凸帯を貼り付けた壺で、内外面ともにハケ目調整される。復原



第73图 28号住居迹出土土器实测图1 (1/3)



第74図 28号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

口径20.8cmの大きさと、胎土に角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。5は口縁部が短く立ち上がる壺の口縁部で、肩部外面はハケ目、内面はナデ調整される。復原口径12.3cmの大きさと、胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されている。6は僅かに外反気味に立ち上がる口縁部の外面はハケ目調整の後に波状文が描かれる。7の胴部破片はハケ目調整の後にヘラ書きの波状文があり、6と共に、胎土には雲母・角閃石・石英を含み、

橙褐色に焼成されているので同一個体の可能性がある。

土師器甕(8~13) 8は緩やかに外反する口縁部をもち、内外面ともにハケ目調整される。胎土には雲母・角閃石・石英を含み、黄褐色に焼成されている。9は口縁部が直線的に外反して、端部は摘んだような面をなす。復原口径18.0cmの大きさで、胴部は膨らみ、外面をハケ目、内面の頸部直下までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、黄橙色に焼成されている。13も同様な特徴をもつが、口径15.4cm、器高24.7cm、胴最大径22.6cmの大きさで、底部が尖る卵形の器形。器壁は薄めである。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、黄橙色に焼成されているが、外面には煤が付着する。11の底部も卵形だがやや丸味をもって尖るもので、外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成されているが、外面には煤が付着する。10も口縁部が直線的に開くが、器壁はやや厚めで、胴部へは短く膨らむ。磨滅が進むものの胴部内面にハケ目がみられる。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡黄褐色に焼成されている。12は底面が凸レンズ状に膨らむ、器壁の厚い胴下半部破片。内外面ともにハケ目調整されて、底面にも粗いハケ目がみられる。砂粒・角閃石を多めに含む胎土で、暗黄褐色に焼成されている。

土師器椀(14~17) 14~16は半球形の体部に外反する口縁部の付くもので、鉢に近い器形である。14は口径9.2cm、器高6.2cmの大きさで、口縁部は短く直線的に立ち上がる。器壁は全体に薄めで、内外面ともに風化・磨滅が進むものの、胴部内面に板ナデ痕がみられる。15は口径10.7cm、器高6.2cmの大きさで、半球形の体部で、口縁部は緩やかに外反する。内面はヘラ磨きおよび板ナデ調整、外面の胴下半部はヘラ削りされるが、底部側の器壁は厚めである。16は胴下半部を失うが、復原口径9.7cmの大きさで、口縁部は緩やかに外反する。口縁部内面にハケ目がみられる他はヨコナデないしナデ調整される。いずれも、胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡黄橙色ないし橙色に焼成されている。

17は手捏の椀で、ナデ調整されるが、指頭圧痕が明瞭に残る。平面形は口径6.5cm内外の楕円形で、器高2.8cmの大きさ。口縁部は内彎する。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土師器高杯(18~22) 18は杯部が小さく裾部が大きい器形で、杯部と脚裾部の間に穿孔はみられないが、器台かも知れない。口径8.4cm、裾外径11.8cm、器高9.5cmで、器高のうち、脚裾部が約7.0cmと2/3を占める。口縁部は直線的に開き、端部で僅かに外反する。脚裾部も直線的に開いて、中途に4つの円孔が穿孔される。脚部の一部にハケ目らしい痕跡をみるが、外面はナデ調整され、脚部内面はハケ目調整される。砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、淡橙褐色に焼成されている。

19は復原口径27.0cm、残存器高6.6cmの大きさの口縁部破片で、杯底部以下を失う。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。内外面ともにハケ目の後にナデ調整されるが、外面に指頭

圧痕がめだつ。胎土に雲母・赤褐色粒を若干含み、橙色に焼成されている。20も口縁部が直線的に開くが、19に比べるとやや外反して、端部は丸味をもつ。杯底部との屈曲は鈍く、底部は狭い。脚部を欠くが、復原口径22.0cm、残存器高6.3cmの大きさで、内外面とも口縁部はハケ目、底部はヘラ磨きで調整される。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、淡橙色に焼成されている。

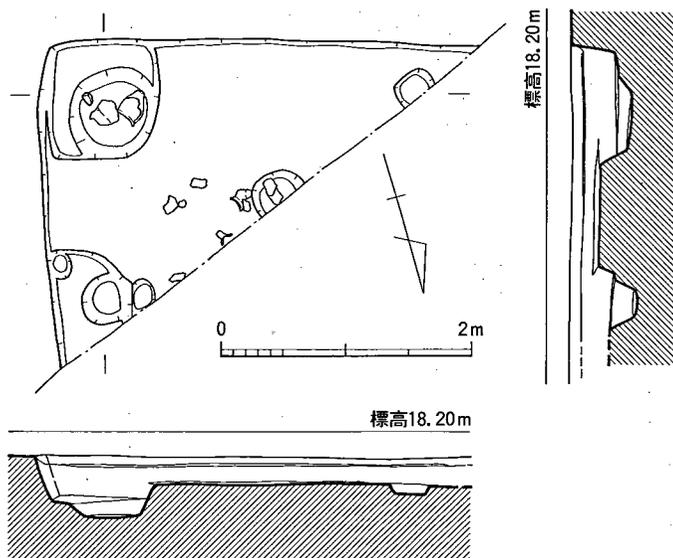
21・22は口縁部が外反する口縁部破片で、内外面にヘラ磨きの痕跡がある。いずれも細砂粒と、角閃石・雲母を若干含み、暗橙色・淡黄褐色に焼成されている。

出土土器では、複合口縁の土器や甕底部などに古い様相をみるが、9～11・13の甕や、高杯の特徴からは3世紀代であろう。

29号住居跡 (図版24-1・2、第75図、旧Ⅲ-10住)

D24区に発見された住居跡で、28号住居跡の西側、Ⅲ区の西端部に位置する。北側にある水路保全の非調査区域に続き、全体の形は不明だが、Ⅳ区との距離からして南北には4.0mを越さない規模であろう。Ⅲ区の調査区域内では南辺3.4m、東辺2.6m分が発見されて、隅部の角度からして方形ないし長方形プランに近い。約20cmの高さに周壁が残り、主軸はN16°E前後に向く。床面を掘り込む柱穴状ピットは4ヶ所に検出されたが、西側のピットがやや浅い。直径35cm～70cm、深さ10cm～30cmの規模である。床面はさほど堅緻でなく、カマドや炉跡の痕跡はみあたらないが、土器片の散らばる面が僅かに堅く、床面から10cm程上に相当するので、

貼り床の可能性もあろう。



出土遺物 (図版45・50、第76図)

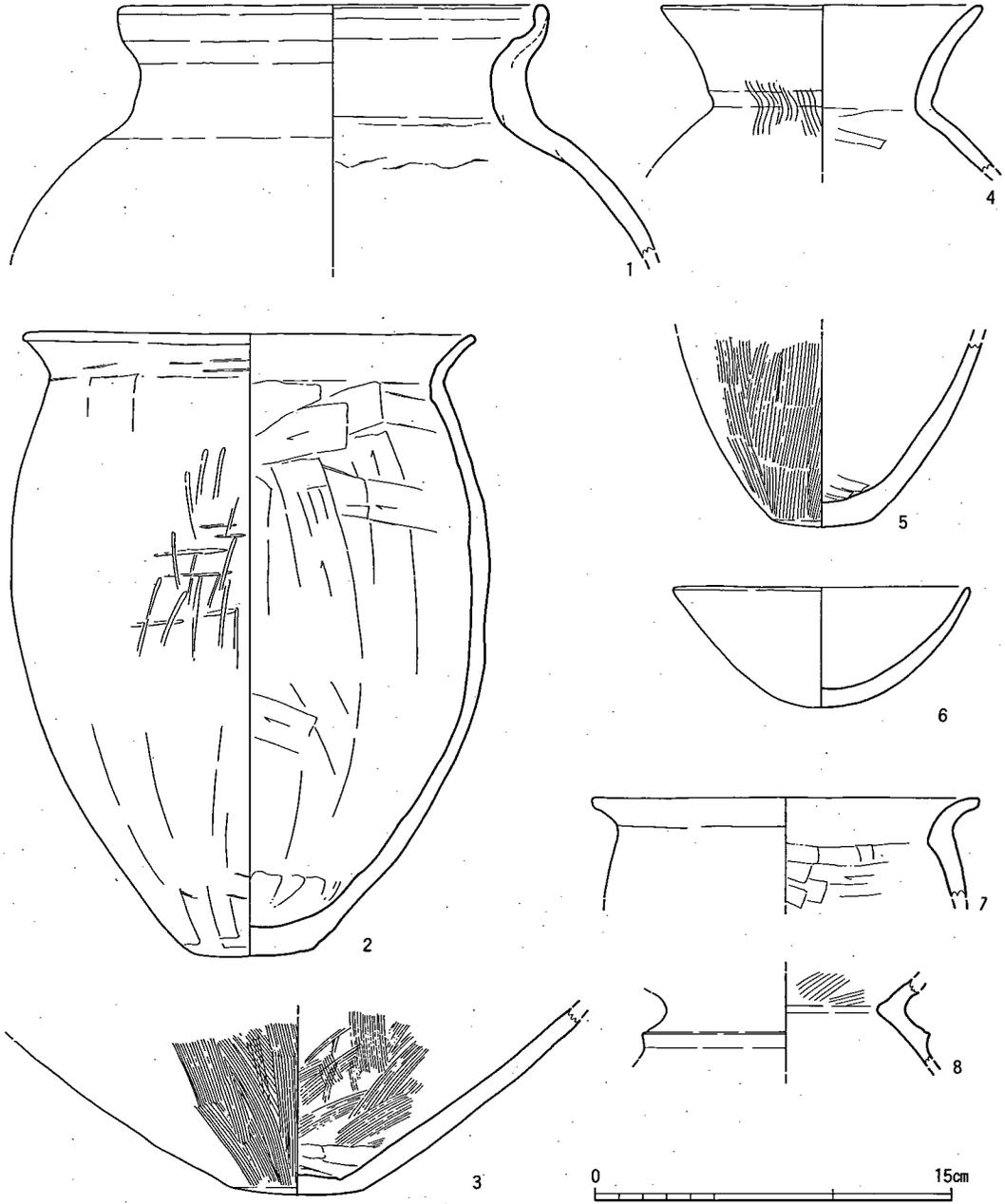
複合口縁壺(1) 復原口径18.2cmの大きさで、頸部は肥厚し、口縁部は内彎して立ち上がるが、内面に段をもつ。全体に風化・磨滅するがナデ調整であろう。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み淡黄褐色に焼成されている。

甕(2・5) 2は口径19.0cm、器高26.4cmの大きさ。長胴で、口縁部は外反し、

第75図 29号住居跡実測図 (1/60)

底部は凸レンズ状に膨らむ。

胴部外面は叩き目の後にハケ目調整され、下半部を中心にナデ消される。内面の胴部は縦方向、



第76図 29・30号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第77图 住居跡出土石器实测图2 (1/3·1/4)

頸部付近はヨコ方向にヘラ削りされる。胎土に角閃石・細砂粒と雲母・赤褐色粒を若干含み橙褐色に焼成されているが、外面に煤、内面にお焦げが付着する。南東隅のピットから出土した。

5は凸レンズ状に膨らむ底部をもつ長胴タイプ甕の胴下半部である。外面はハケ目、内面は板ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石と雲母・赤褐色粒を若干含み淡茶褐色に焼成されている。

壺(3・4) 3は凸レンズ状に膨らむ底部をもつ胴下半部で、大きく膨らむので壺であろう。内外面ともにハケ目の後にナデが加わり、内底面は板ナデ痕がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み淡黄褐色に焼成されている。

4は復原口径13.6cmの大きさで、口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部は丸味をもつ。内外面とも磨滅するが、外面にハケ目、内面の頸部下にヘラ削りらしい痕跡がみられる。胎土に細砂粒をやや多く、角閃石・赤褐色粒なども含み、暗橙色に焼成されている。

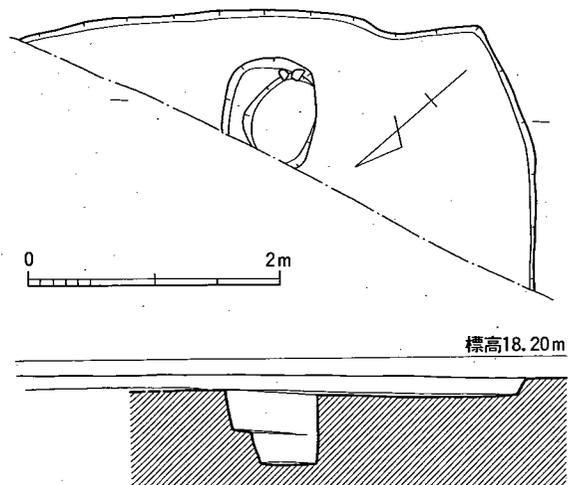
椀(6) 口径12.5cm、器高5.1cmの大きさで、口縁部は内彎気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒・石英を含み、淡茶褐色に焼成されている。

砥石(第77図27・28) 27は淡緑灰色の色調を呈する、粘板岩質の石材を用いた砥石片で、長さ5.5cm、幅3.5cm、厚み3.0cm、重量71.1gの現存値を測る。3面とも砥面に使用されて平滑である。28は現存値で長さ19.3cm、幅12.2cm、厚さ7.0cmの大きさの、凝灰岩質安山岩の石材を用いた砥石である。上下両面を砥面にされているが、本来は石皿に使用されていたのを母岩として横長な剝片を剝離させた石核でもあろう。南西隅のピットから出土した。

出土土器では、凸レンズ状の底部をもつ甕・壺の存在から弥生時代末頃の様相が強い。しかし、内面ヘラ削りなどの特徴などを考慮すれば、3世紀に含まれる可能性が高いと言えよう。

30号住居跡(第78図、旧Ⅲ-11住)

F-18区を中心に発見された住居跡で、18号住居跡の西側に位置するが、Ⅲ区調査区の北端に位置する。東南辺3.7m、南西辺2.2mの長さに発見されて、北側は水路保全の非調査区域に続く。不整形プランと推定され、周壁は10cm～15cmの高さに残り、主軸はN40°W前後に向く。支柱穴らしいピットは、直径70cm×90cm、深さ60cmの規模である。床面はやや堅く、木炭などの炭化物も散在するが、炉やカマ

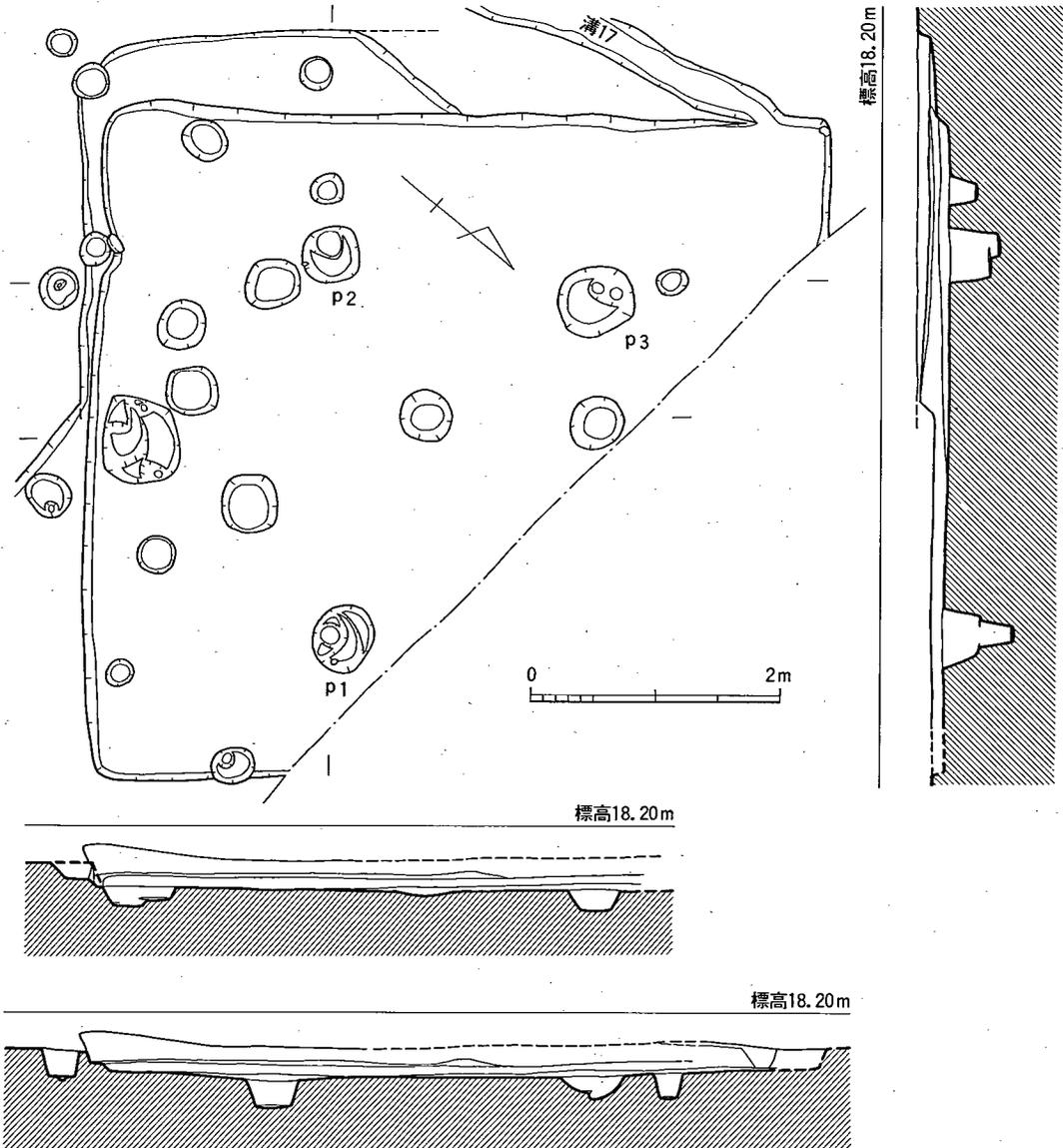


第78図 30号住居跡実測図(1/60)

ドは不明。

出土遺物 (図版50・51、第76図)

土師器甕(7) 復原口径16.4cmの大きさの、強めに外反する口縁部をもち、胴部がさほど膨らまない甕。外面は磨滅するが、ナデ調整、胴部内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されているが、外面の一部に煤が付着する。



第79図 31号住居跡実測図 (1/60)

・土師器器台(8) 口縁部と裾部を失うが、鼓形器台のくびれ部である。凸帯状の段があり、器面は磨滅するものの口縁部側内面にハケ目らしい痕跡がある。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。

すり石(第77図29・30) 掌に握れる大きさの緻密な材質の円礫を用いた、すり石と敲石を兼ねた石器である。29は長径11.0cm、短径10.2cm、厚み8.3cmの大きさ、重量1170gを測る。30は長さ8.2cm、幅8.6cm、厚み7.3cmで、重量790gを測る。

鉄 鏃(第19図23・24) 23は先端の一部と基部を欠くが、現存長6.8cm、身部幅2.7cm、厚み0.2cmで、基部側は幅1.0cm、厚み0.3cmの大きさで、圭頭広根の鏃である。24は基部を欠くが、現存長4.0cm、身部幅1.2cm、厚み0.3cm、基部径0.3cmの大きさ、方頭の広根鏃であろう。

鉄 釘(第19図25) 頭が平らな角釘で、長さ3.2cm、幅・厚さ0.4cm強で、頭の幅は0.7cm程の径である。木質は遺存しない。

出土土器では、土師器器台や甕の特徴だけでは時期を決定し難いが、4世紀代の可能性もある。なお、鉄釘は後世の混入かも知れない。

31号住居跡(図版24-3、第79図、旧IV-9住)

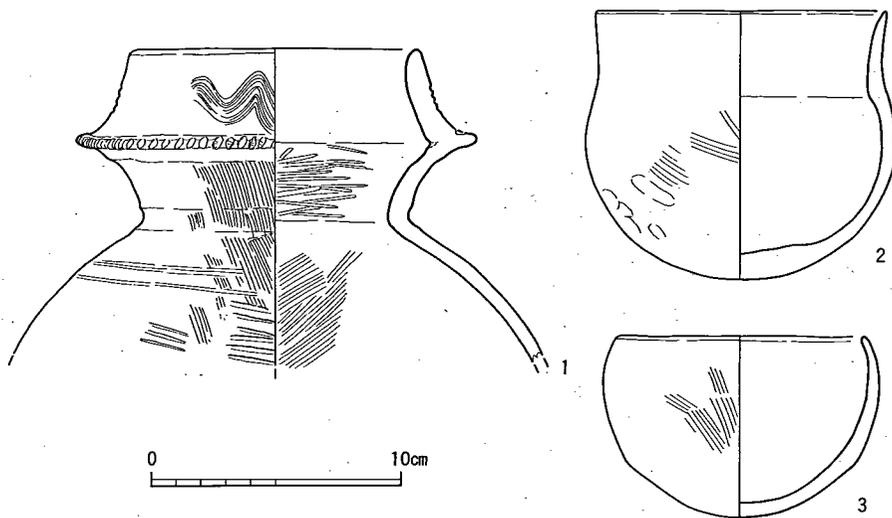
I 18区を中心に発見された住居跡で、30号住居跡の北側、IV区の東部に位置する。北側は調査区域外に続き、北隅は隠れる。南西辺6.0m、南東辺5.8m規模の不整形プランで、西隅部は17号溝に削られて乱れ、南西辺の内側には約10cmの深さに、幅50cm前後のテラスがある。テラスの内側での南東辺は5.5mで、この内側では床面までの深さは約20cmである。住居の主軸はN40°30'W前後に向く。床面はやや堅緻で、ほぼ中央に直径40cmほどの地床炉がある。床面を掘り込むピットは多数あり、直接住居跡に伴わず後世に掘り込まれたピットを区別しえなかったが、P1~P3が配置や深さからみて主柱穴と推定される。直径50cm前後、深さ20cm~55cmの規模で、P3がやや浅い。

出土遺物(図版45・50、第32・80図)

複合口縁壺(1~3) 1はく字形の口縁屈曲部に刻み目凸帯が付き、内傾する口縁部外面に波状文が描かれる。復原口径11.6cm、凸帯外径16.2cmの大きさで、これより膨らむ胴部外面は叩き目の残るハケ目調整、胴部内面はハケ目、口径に近い径の頸部内面はヘラ磨きで調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色ないし淡黄褐色に焼成されている。

壺(2) 復原口径11.7cm、器高10.7cm、胴最大径12.4cmの大きさの直口壺で、胴部外面の一部にハケ目が残るものの全体にナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶橙色に焼成されている。

椀(3) 復原口径10.0cm、器高7.3cm、胴最大径10.9cmの大きさの椀で、球形の体部をもち、



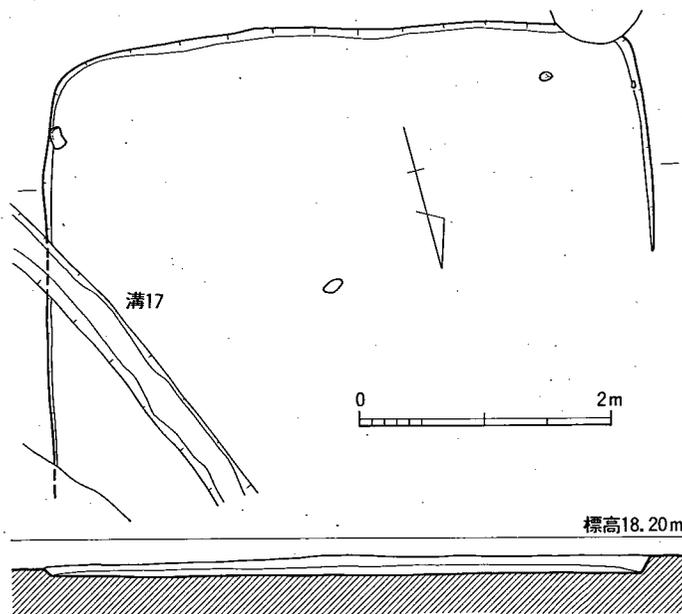
第80図 31号住居跡出土土器実測図 (1/3)

口縁部も内彎する。外面の一部にハケ目が残るものの全体にナデ調整されているようである。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、橙褐色に焼成されている。

石 鏃(第32図4) 姫島産黒曜石の剥片の周縁を若干調整剥離した凹基式の石鏃である。長さ1.5cm、幅1.5cm、厚み0.3cm、重量0.5gを測る。

削 器(第32図5・6) 5は黒色を呈する黒曜石の縦長剥片で、長さ3.8cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重量1.5gを測る。側縁の一部に使用痕がみられる。6は安山岩の縦長な剥片を素材にした削器である。先端・基部端を欠くが現存長8.1cm、幅3.6cm、厚さ1.0cmを測る。両側縁を両面側に調整している。

出土土器は、複合口縁壺にやや古い要素をみれるが、丸底の壺や椀の特徴から、

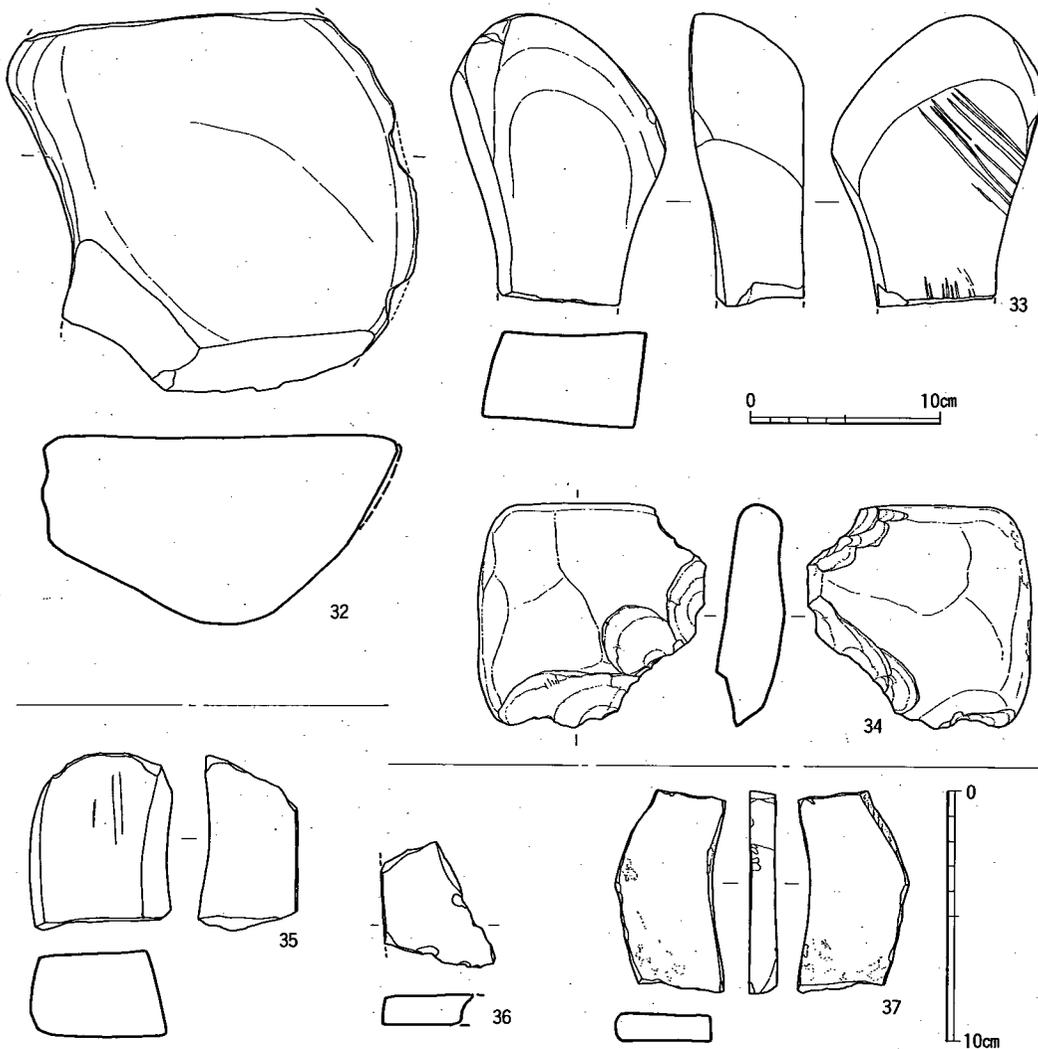


第81図 32号住居跡実測図 (1/60)

4世紀以降の時期に考えたい。

32号住居跡（第81図、旧IV-10住）

H・I-19区を中心に発見された住居跡で、31号住居跡の西側に位置するが、17号住居跡などに削られて北西側の輪郭は不明瞭である。31号住居跡とも重複するが、先に31号住居跡を掘りさげた為に前後関係を確認していない。確認したプランは東西4.8m、南北3.5m以上の不整形方形である。周壁は10cmまでの高さに残るが、主軸はN14°E前後に向く。床面はやや堅く木炭なども散らばるが、柱穴やカマドなどは確認できなかった。また出土遺物は、土師器甕胴部



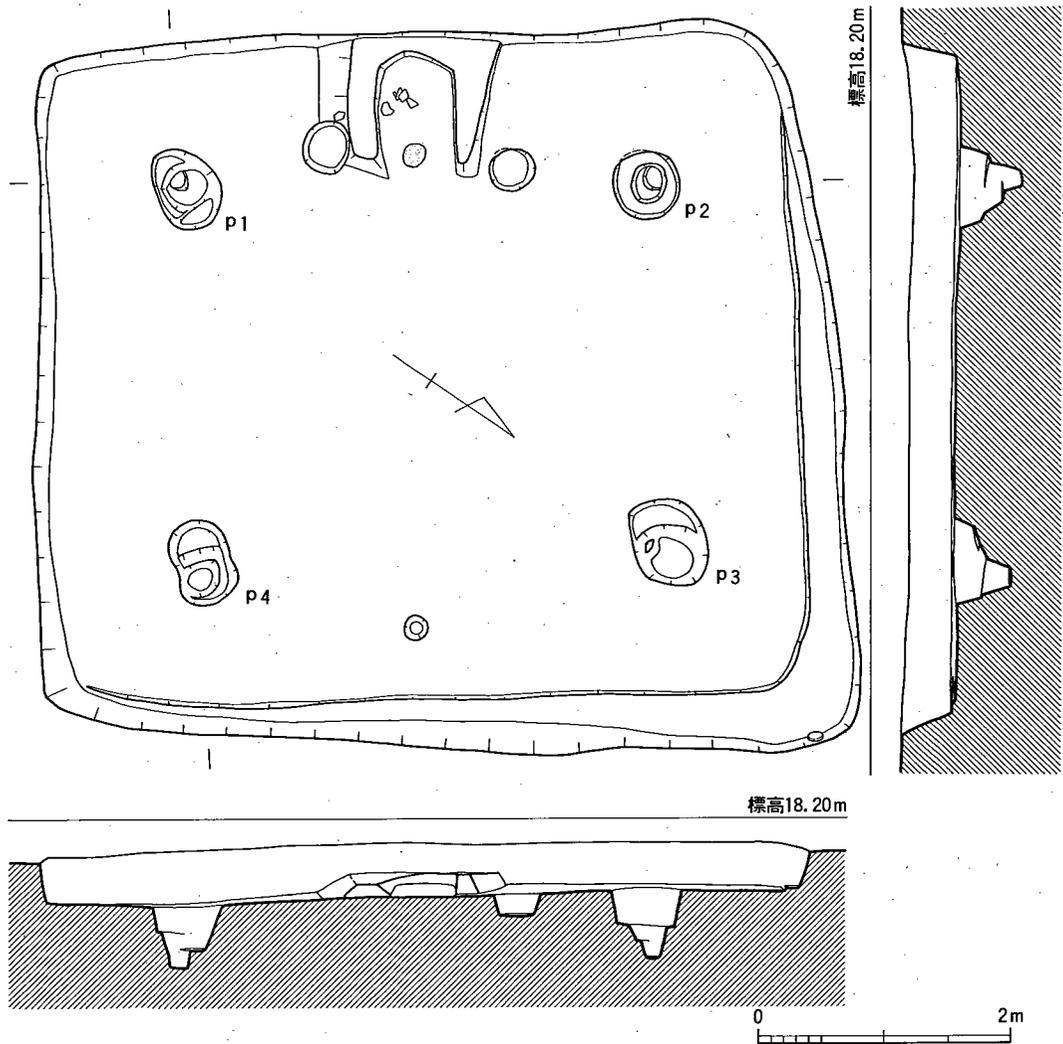
第82図 住居跡出土石器実測図3 (1/3・1/4)

小破片などで、石鏃と砥石以外には、図示しうる例はない。

出土遺物(図版50、第32図)

石 鏃(第32図7) 黒色を呈する黒曜石の縦長剥片を素材にした広義の剥片鏃で、片脚部を欠くが、長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重量0.6gを測る。

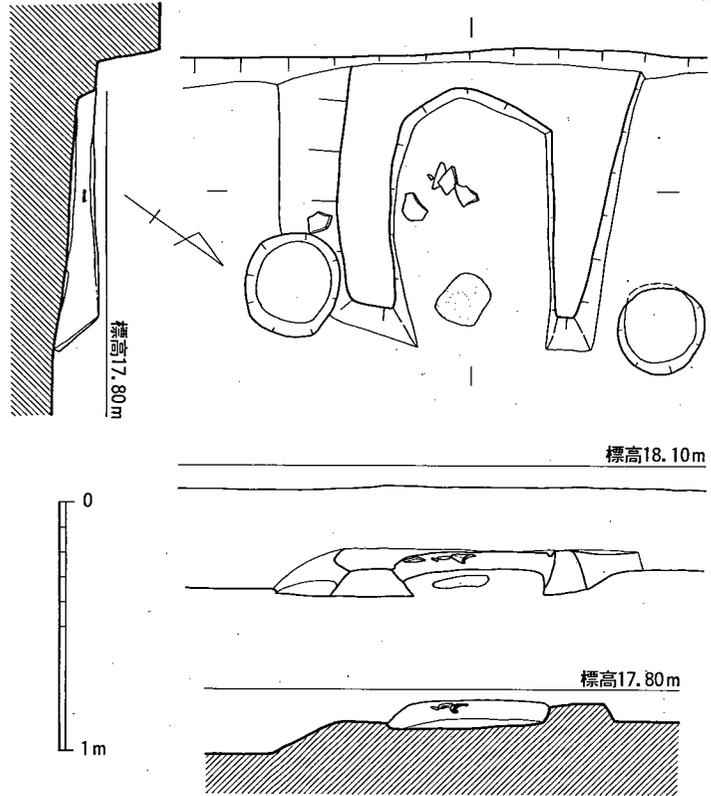
砥 石(第82図32) 凝灰質安山岩の砥石である。本来は石皿に用いられていたものと推定されるが、現存値で長さ20.5cm、幅22.0cm、厚さ10.3cmの大きさと、平らな面のみ使用される。石皿としての役割以後に、剥片を得るために意図的に側面が剥離されている。



第83図 33号住居跡実測図 (1/60)

33号住居跡 (図版25、
第83図、旧IV-6住)

H・I-21・22区に発見された住居跡で、32号住居跡の西側に位置する。34号住居跡・39号住居跡と一部重複し、これより後出する。遺構検出面でのプランは北東辺6.7m、南西辺5.7m、南東辺5.2m、北西辺5.8mの台形に近い不整形形であったが、30cm～40cmの深さにある床面に近い高さで、北西・北東辺の内側に周壁の下部が発見された。やや堅く締まった床面では5.2m×5.9mの規模で不整形形を呈しているが、住居の主軸はN



第84図 33号住居跡カマド実測図 (1/30)

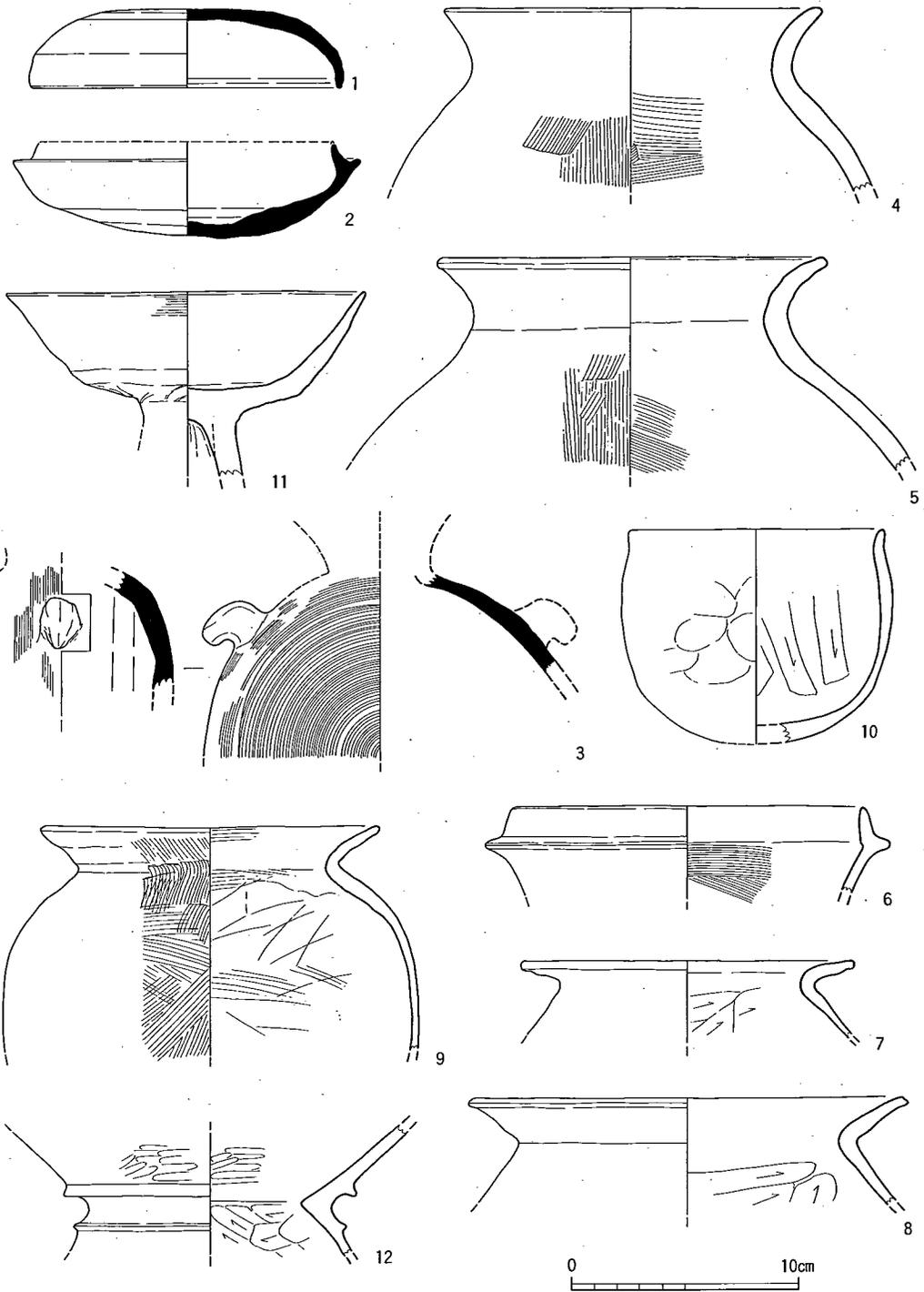
55°30'E前後に向く。南西辺のほぼ中央にカマドが施設され、カマドを挟んで一对の柱穴状ピット (P5・P6) がある。主柱穴はP1～P4で、直径50cm～60cm、深さ50cm～55cmの規模である。またカマドの正面に位置する小さなピットは約20cmほどの深さである。

カマド (第84図)

粘土質の土と砂を用いて、幅20～30cmの壁で築かれたカマドで、60cm×80cm程の広さの空間を燃焼室にしている。燃焼室内には、焚き口側によく焼けた火床が確認されたものの、支脚石などは不明で、土師器甕片が中央部の床から浮いた位置で出土した。周囲の壁はさほど焼け方は顕著でなく、燃焼室内に堆積した木炭・灰混じりの堆積土と区別できる程度であった。カマド前面の左右にある一對と思えるピットは、直径30cm～40cmで、深さ20cm前後。堆積土は他の柱穴状ピットと土と区別しえなかった。

出土遺物 (図版45・46・49、第85・86図)

須恵器杯蓋 (1) 受けのかえりを有さない杯蓋で、復原口径13.6cm、器高3.5cmの大きさ。外天井はヘラ切り離しの後をナデている。堅く焼成され、茶灰色に焼成されている。



第85图 33号住居跡出土土器実測图 (1/3)

・須恵器杯身(2) 蓋受けのかえりを有する杯身で、復原口径13.2cm、器高4.0cmの大きさ。外底部はヘラ切り離しの後をナデている。やや堅めに焼成され、淡茶灰色を呈する。

須恵器提瓶(3) 体部の破片で、口頸部もなく、全体の形状や量量は分からない。カキ目調整され、肩部に鈎形の釣り手が付けられている。砂礫を若干含む胎土で、淡茶灰色の色調に焼成されている。

土師器甕(4~10) 4・5は膨れた胴部から頸部がすぼまり、肥厚しない口縁部が外反する甕である。復原口径16.4cm・17.0cmの大きさで、胴部は内外面ともにハケ目調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒などを含み、明茶褐色ないし黄茶褐色に焼成されている。5はカマド内から出土し、二次火熱を受けて赤変している。6は複合口縁の甕口縁部破片であろう。屈曲は凸帯状に突出し、口縁端部は内傾気味に立ち上がる。屈曲部以下の頸部内面はハケ目調整されている。胎土に角閃石・石英を含み、明茶褐色に焼成されている。7~9は、なで肩だが胴部が丸く膨らみ、口縁部は直線的に外側に開く甕。胴部内面は頸の下までヘラ削りされて器壁が薄い。復原口径はそれぞれ、14.6cm、18.6cm、15.0cmの大きさで、胴最大径は9で18.3cmのように、口径を上回る。なお9では内外面ともにハケ目調整がみられる。いずれも胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色ないし黄茶褐色に焼成されている。

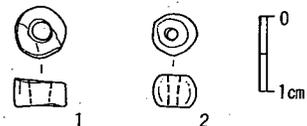
10はカマド内から出土した、復原口径11.0cm、器高9.5cmの大きさの小形甕である。口縁部はほとんど肥厚せず、胴部の膨らみも顕著ではなく、丸底の底部に続く胴部外面はナデ調整、内面はヘラ削りされる。胎土に角閃石・赤褐色粒・石英を含み、淡橙色ないし明茶色に焼成されている。

土師器高杯(11) カマドの左側外で出土した、口径15.8cmの大きさの高杯杯部である。杯底部は平坦で、口縁部はやや内彎しながらも直線的に開き、端部で僅かに反る。柱状部は中空で、裾部側を欠くが、杯外底部にかけて絞り痕がみられる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

土師器器台(12) 口縁部・裾部を欠くが、凸帯状の段を上下にもつ鼓形器台である。口縁部は内外面ともにヘラ磨き、裾部内面はヘラ削りされる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、にぶ黄橙褐色に焼成されている。

滑石製白玉(第86図1) 北東壁に近い床面から出土した。外径6.7mm、厚さ3.8mm、孔径3.0mmの大きさの灰青色を呈する白玉で、平滑に成形されている。

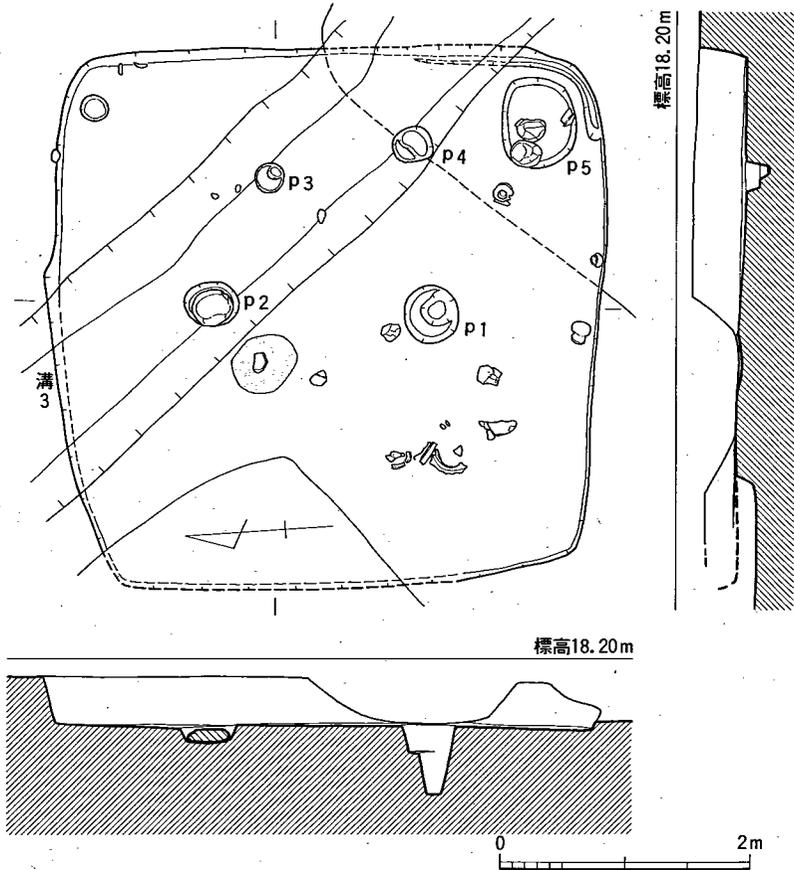
出土土器では、一部土師器甕や鼓形器台などは4世紀代に入るが、須恵器杯蓋・身、小形甕などの特徴から6世紀後半頃が妥当であろう。古い段階の遺物は住居跡の重複に起因するものと解しておきたい。



第86図 住居跡出土玉類実測図 (1/1)

34号住居跡 (図版26-1・27-2~4、第87図、旧IV-8b住)

H-20・21区に発見された住居跡で、33号住居跡の南東側に位置するが、33号住居跡・35号住居跡・37号住居跡・38号住居跡と3号溝と重複して、35号住居跡を切るが、その他の遺構からは切られている。遺構検出面では、北側の輪郭以外のプランが不明確であった。35~38号住居跡部分の前後関係も不明なまま、38号住居跡部分と同一の住居跡として掘りさげたが、南辺の壁が10cm弱の高さに発見され西側辺に曲がったために、結果的には当初想定した順の逆に重複していたことになる。南北には3.7~4.3m、東西4.1~4.3mの規模の不整形プランで、主軸はN⁴E前後に向く。周壁は北辺・東辺で40cm前後に残るが、3号溝の攪乱を受けていた部分を除去した際に、やや深く掘り下がっているのが本来は35cm前後であろう。中央部の床面は堅く締まっているが、周囲はそれほどでもない。床面を掘り込むピットは6ヶ所にみられるが、P1・P2が主柱穴と想定できる位置にある。直径40cm前後で、P1の深さは55cmあ



第87図 34号住居跡実測図 (1/60)

るが、P2は浅く且つ敷石がある。他のピットも浅い。中央部に相当するP2の南西側に地床炉があり、直径50cm程の広さで浅く凹む。この炉跡よりも南側の床面に接して完形土器などが発見された。

出土遺物 (図版46・47・50、第88・89図)

複合口縁(1) 復原口径22.0cmの大きさと、口縁部は凸帯状に飛び出す屈曲から、ほぼ直に立ち上がる。器壁は薄く、淡茶褐色に焼成されているが、外面に煤が付着する。

土師器壺(2) P5から出土した完形の壺で、口径12.5cm、器高22.3cm、胴最大径19.6cmの大きさ。体部は下膨れで、なで肩、小さく飛び出し気味に膨れる底部をもち、口縁部は直立気味に立ち上がるが端部は外反する。内外面ともにハケ目調整されるが、胴部内面はナデ消される。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されていて、胴部外面には煤が付着する。

土師器甕(3~8・14) 3~7・14は、いずれも口縁部が外反して、端部内面側が僅かに凹む。復原口径は3が14.0cm、4が15.0cm、6が15.8cm、14が17.0cm。5の口径は15.5cm、7は口径16.1cm、胴最大径19.0cmの大きさ。器壁は薄めで、胴部外面をハケ目調整し、内面の頸部下までヘラ削りするが、5は内面にハケ目、6は内面にナデ痕がみられる。いずれも細砂粒を多く、角閃石・雲母などを胎土に含み、黄褐色・橙褐色の色調に焼成されているが、6・7・14の外面には煤が付着している。

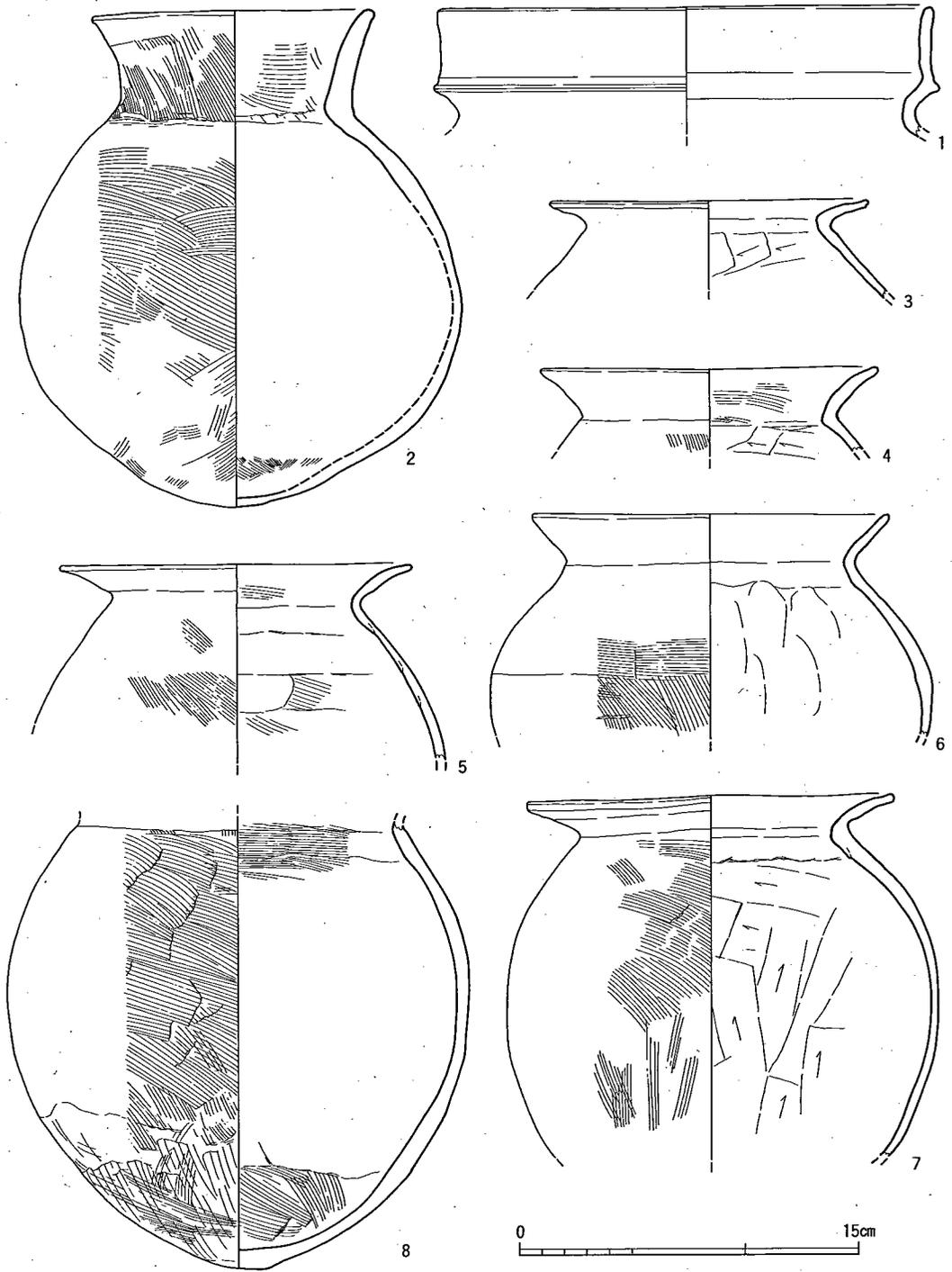
また8は口縁部を欠くが、体部は卵形で底部は丸味をもって尖るものの、ナデ調整される小さな底部をもつ。内外面ともにハケ目調整されて、内面の胴部はナデ消され、外面の胴下部は板ナデのような痕跡でナデ消される。器壁は7などに比して厚い。胎土に細砂粒を多く、角閃石・雲母なども含み、暗橙色の色調に焼成されているが、外面に煤が付着する。

土師器小形丸底壺(9) 南壁際から出土したほぼ完形の丸底壺で、扁球形の体部に直線的に長く伸びる口縁部が付く。器壁は全体に薄く、口縁端部は内側で僅かに凹む。胴部外面はハケ目調整されて、肩部のみ横方向のハケ目がみられる。内面は頸部下までヘラ削りされて、口縁部は内外面ともナデられる。口径12.2cm、器高16.6cm、胴最大径14.3cmの大きさ。胎土に細砂粒を多く、角閃石・赤褐色粒・雲母なども含み、淡茶褐色の色調に焼成されている。

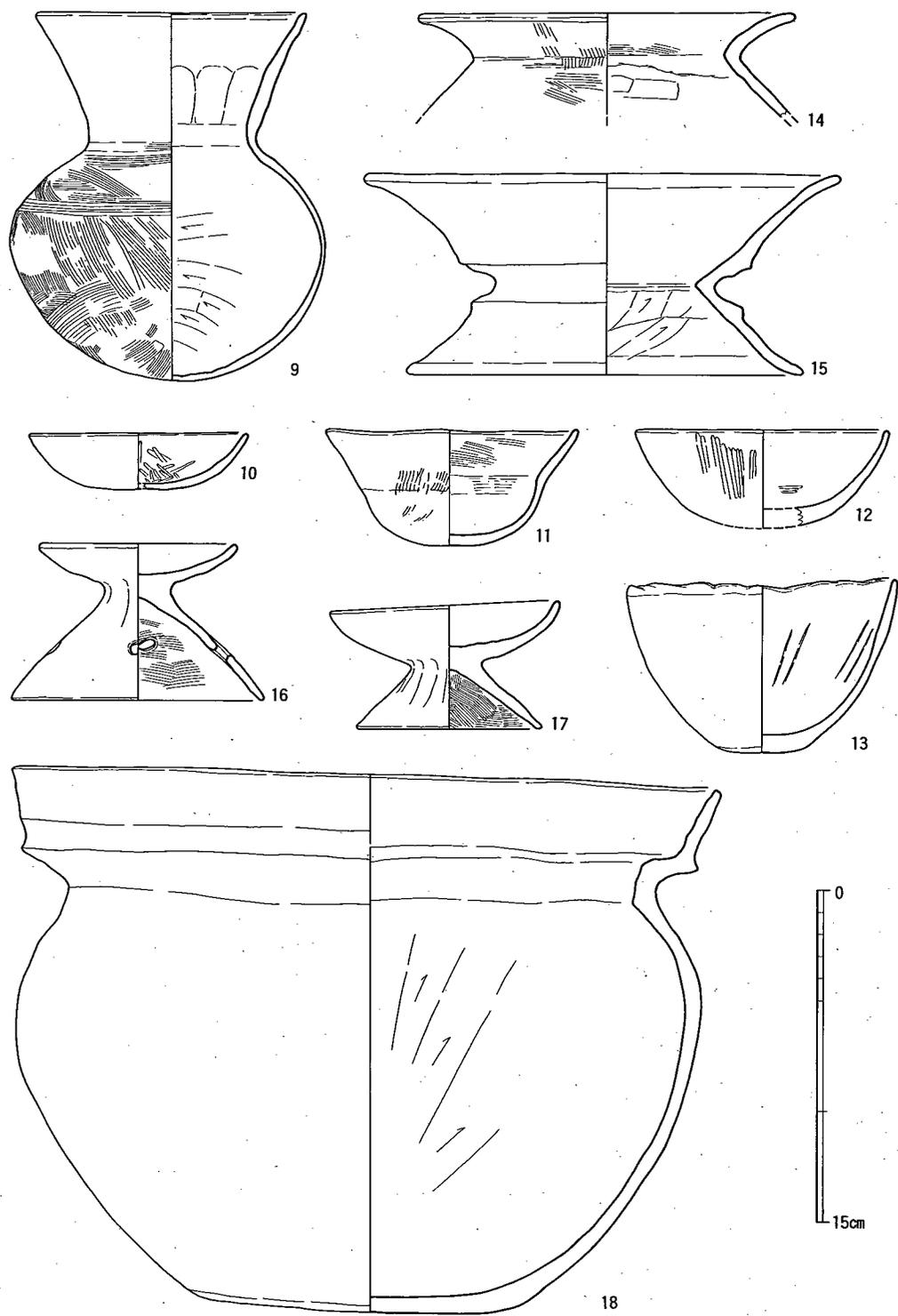
土師器椀(10~13) 10は椀よりは杯とすべき器形で、復原口径10.0cm、器高2.5cmの大きさ。口縁部は内彎気味に立ち上がり、内面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗橙色に焼成されている。

11は丸底の椀に直線的に開く口縁部が付き、丸底壺を上下に圧縮したような器形である。口径11.4cm、器高5.2cmの大きさと、内外面ともハケ目調整された後にナデが加わる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。北東隅部で出土した。

12は口縁部が内彎しながら立ち上がる椀で、復原口径11.4cm、残存器高4.2cmの大きさ。内



第88图 34号住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第89图 34号住居跡出土土器实测图2 (1/3)

外面ともにヘラ磨きされる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

13は手捏風の深い椀で、口径12.1cm、器高5.5cm、底径4.0cmの大きさ。器壁は薄めで、平らな底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部は波打つ。内面には板ナデの痕跡がある。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡黄褐色に焼成されている。炉の脇から出土した。

土師器器台(15) P5から出土した鼓形の器台である。口径21.2cm、器高9.1cm、裾部径17.7cmの大きさ。くびれた頸部の上下に凸帯状の段があり、口縁部は緩やかに外反して開く。脚裾部は直線的に開き僅かに外反する。脚裾部はヘラ削りされるが、他はナデないしヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明橙色ないし黄褐色に焼成されている。

土師器高杯(16・17) 内彎した浅い椀形の杯部をもつ高杯で、脚部は柱状部を介せずにそのまま開く。16はP1の西側から出土した、復原口径9.0cm、器高7.0cm、裾部径11.4cmの大きさの高杯。脚部は内彎気味に開き5.2cmの高さを占め、中途に4ヶ所円孔を穿孔している。脚部内面はハケ目調整される。17は南壁際で出土した、口径10.3cm、器高5.5cm、脚部径8.3cmの大きさの高杯で、脚部は3.0cmの高さを占める。脚部内面はハケ目調整される。両者とも、胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡灰橙色に焼成されている。

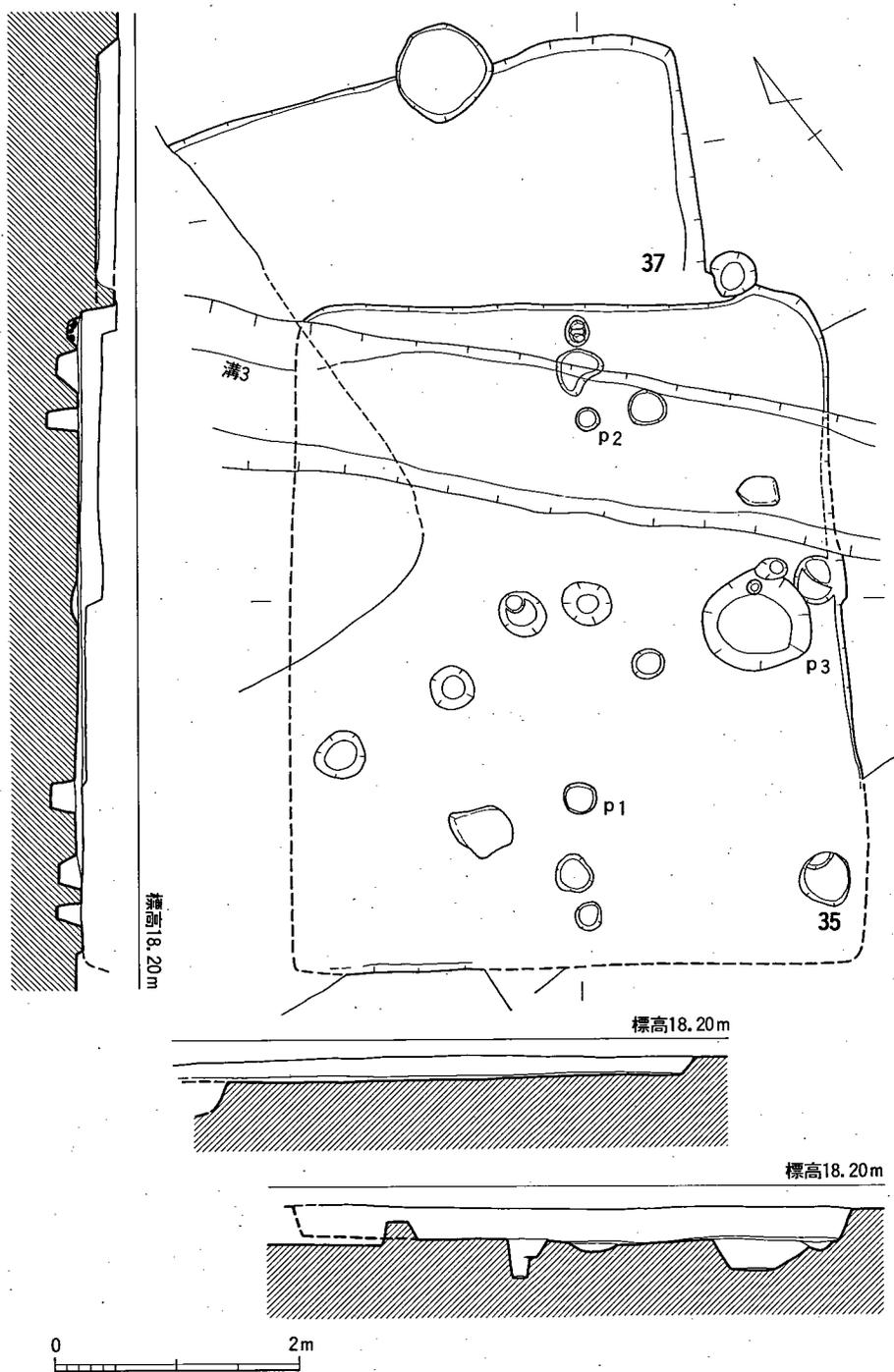
土師器鉢(18) P1の西側から出土した、口径36.6cm、器高23.6cm、胴最大径30.9cmの大きさの鉢で、口縁部は複合口縁。底部は丸味をもった平底で、膨らむ胴部の内面はヘラ削り調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されるが、器面は風化・磨滅する。

砥石(第82図33・34) 33は炉跡内から出土した、凝灰質砂岩製の砥石である。長さ15.5cm、幅10.3cm、厚さ6.2cmの大きさで、4面ともよく使用されて彎曲する。1面には先端を尖らせる際の溝状の傷が残る。34は北東隅部から出土した、凝灰質安山岩の石材を用いた砥石である。長さ・幅ともに12.0cm、厚み3.5cmの大きさで、重量は645g。2側縁を残して交互に剝離されて尖るが、掌に握りやすい礫器が本来の用途であつたらしい。片面の一部を砥石に転用している。

出土土器では、甕や器台・高杯などの特徴からみて、3世紀代に含まれるであろう。

35号住居跡(図版26-2、第90図、旧IV-7b住)

G20区を中心に発見された住居跡で、34号住居跡の南側に位置する。34号住居跡・36号住居跡～38号住居跡・3号溝と重複し、これらに切られる。遺構検出面では北東辺と東隅以外にはプランが不明瞭で、掘り下げてから、床面付近で輪郭を想定しうる壁の一部を確認した。結果的には北東辺4.2m、南西辺4.6m前後、南東辺・北西辺5.4m前後の不整長方形に想定されるが、北東壁で床面までの深さ25cm前後を残すものの殆ど周壁は残らない。住居の主軸はN37°30°E前後に向く。やや堅く締まった床面には、中央部に地床炉があり、炉を挟む位置に支柱穴らしいピットがある。直径20cm～30cm、深さ20cm～25cmの規模である。この他にも床面を



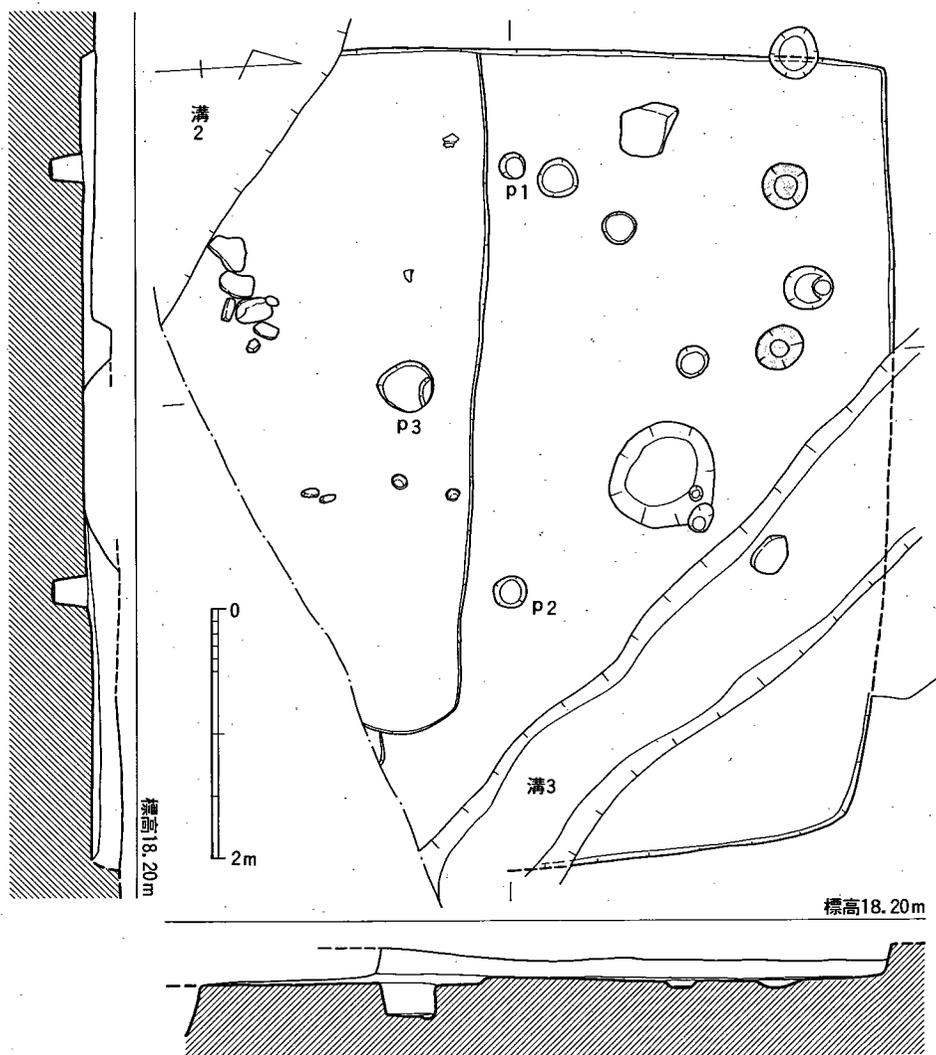
第90図 35・37号住居跡実測図 (1/60)

掘り込むピットは10ヶ所余りあるが、南東辺の中央近くにある広いピットは屋内貯蔵穴と呼ばれるものであろうか。

住居跡内に出土した土器片は小破片ばかりで、図示しうる資料はない。

36号住居跡 (図版25-1・27-1、第91図、旧IV-7住)

G-19・20区に発見された住居跡で、35号住居跡の南側に位置するが、Ⅲ区との境の水路保全のための非調査区域が南側にあつて、南部はこれに潜る。35号住居跡・38号住居跡・2号



第91図 36号住居跡実測図 (1/60)

溝・3号溝と重複し、35号住居跡より後出するが、38号住居跡・2号溝・3号溝に切られる。北辺は6.0mで、西辺は4.2m分を検出したが、南西側にある2号溝に切られて全長は不明である。北辺から調査区域端までの距離は5.7mで、主軸方向はN3°30'Eに向く。周壁は5cm~20cmに残り、床面はやや堅く締まっているが、南部はそれほどでもない。北壁から3.0m南側の床面に5cm程の段があり、N84°W前後の方向に5.0mの長さをもって東側で曲がる。この段が別の住居跡の周壁であった可能性もなくはないが、西壁に乱れがなかったこともあり、調査時には一括して取り扱った。なお、南部には床面より若干浮いた位置に河原石が並んで発見されたが、その性格については不明である。床面を掘り込むピットは10ヶ所程みられるが、35号住居跡に伴うものとの区別が難しく、P1・P2が規模と位置で支柱穴の可能性があろう。直径25cm前後、深さ30cm程である。地床炉は35号住居跡に伴う可能性が高い。

出土遺物 (図版47・51、第92図)

複合口縁(1) 口縁部は垂れ気味に飛び出す屈曲から、内傾して立ち上がる。器壁は厚めで、口縁部外面に入り組みの波状文が描かれ、頸部外面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、明橙色に焼成されている。

土師器甕(2) 復原口径13.7cmの大きさで、口縁部は緩やかに外反して、胴部は膨らむ。器面は風化して調整手法は不明。胎土に細砂粒を多くと角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

土師器椀(3) 丸底の椀に内彎して開く口縁部が付く。口径14.1cm、器高7.4cmの大きさで、内外面ともハケ目調整された後にナデが加わっていて、内面のハケ目は殆ど消え、外面の頸部には指頭圧痕が残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されているが、外面の一部に煤が付着する。P3の東側で出土した。

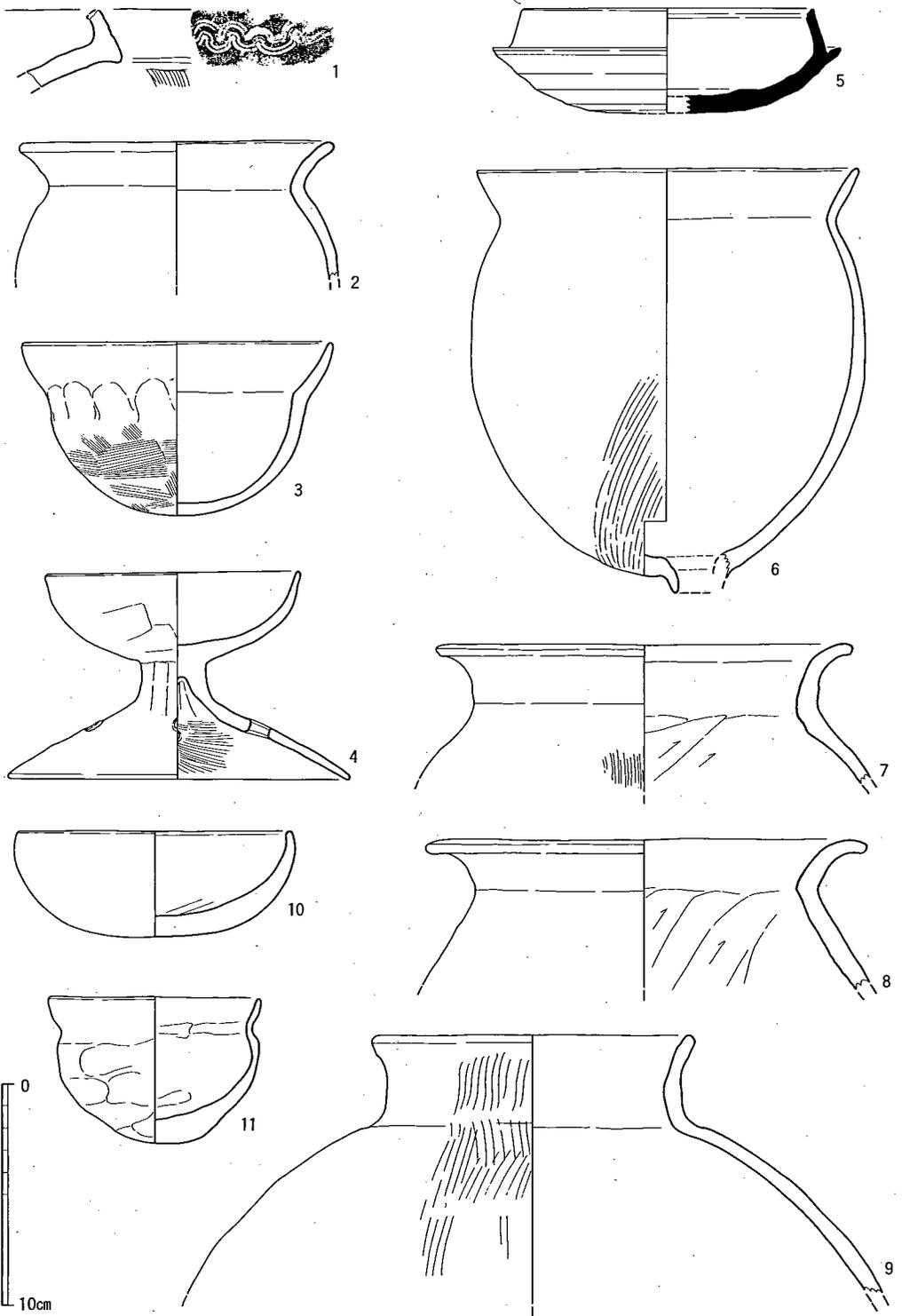
土師器高杯(4) 内彎する椀形の杯部をもつ高杯で、脚部は短い柱状部を介して大きく開く。復原口径11.0cm、器高9.4cm、裾部径15.5cmの大きさの高杯。柱状部と脚部は5.3cmの高さを占め、内彎気味に開くが、中途に4ヶ所円孔を穿孔している。脚部内面はハケ目調整される。杯部は板ナデ調整とナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、橙褐色に焼成されている。P2に近い段の南側で出土した。

鉄 鎌(第19図28) 先端・基部側ともに欠損する破片で、内反りの刃部と背が分かる。刃部の幅2.5cm、厚さ0.2cmで、2.6cmの現存長である。

床面に接して出土した土器は、高杯・椀や甕の特徴から、34号住居跡出土土器に近い。時期的には3世紀におさまるものと考えたい。

37号住居跡 (図版25-1、第90図、旧IV-7c住)

H20区に発見された住居跡で、32号住居跡と34号住居跡の間にあり、34号住居跡・35号住居



第92图 36~38号住居跡出土土器実測图 (1/3)

跡・3号溝と重複して、両住居跡より後出するが、溝には切られる。ただし調査時には不用意に34号・35号住居跡部分を先に掘り下げてしまったために全体の規模や形状は不明である。北東辺がN65°Wの方向に4.2mの長さに検出されて、東南辺はほぼ直角に曲がって1.9mの長さに残る。周壁は約15cmの高さに残り、床面はやや堅いが、床面を掘り込むピットや焼土は確認できなかった。

出土遺物（図版47、第92図）

須恵器杯身(5) 蓋受けのかえりを有する杯身で、口縁部は直線的に内傾して、端部内面に浅い沈線状の段をもつ。復原口径13.0cm、外径15.6cm、器高4.7cmの大きさ。外底部は回転ヘラ削りされ、砂粒を若干含む胎土で、灰色に焼成されている。東隅から出土した。

土師器甑(6) 復原口径17.0cm、器高19.3cm、胴最大径17.7cmの大きさ。口縁部は頸部から、く字形に外反して、胴部は丸味をもって膨らむ。底部は丸底だが、中央を少しずれた処に内面側から突いて穿孔した穴があり、穴の縁は出臍のように飛び出す。器面は磨滅するが、胴部下半に粗いハケ目がみられる。内面は板ナデないしはヘラ削りされていると思われるが分からない。胎土に細砂粒・角閃石・石英・赤褐色粒などを含み、黄橙色に焼成されるが、外面下半に煤が付着している。東隅部から出土した。

出土土器では、須恵器杯身は6世紀中頃から後半頃の特徴を有していて、土師器甑は4世紀ないし5世紀頃とみられる。

38号住居跡（図版25-1、旧IV-8住）

G・H-21区に発見された住居跡で、33号住居跡の南側、35号住居跡の西側に位置する。遺構検出時に南西隅とそれに続く南辺と西辺、および33号住居跡との重複関係は分かったが、東側の重複部分の輪郭は分からずに、34号住居跡を先に掘り下げたために全体の規模は分からない。西辺2.0m以上、南辺4.5m以上の不整形プランであろう。周壁は15cm前後の高さに残るが、南壁は途中で少し曲がる。床面はやや堅く木炭なども散らばるが、柱穴状ピットは2ヶ所確認したものの焼土は確認できなかった。カマドが有ったとすれば、33号住居跡によって削りとられた可能性もある。

出土遺物（図版47・50・51、第92図）

土師器甕(7・8) やや肥厚する口縁部が強めに外反する甕で、胴部へは膨らむが胴部以下を失う。7では胴部外面にハケ目がみられるが、8では磨滅して不明。胴部内面は頸部までヘラ削りされるが、器壁は厚めである。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、明茶褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

土師器壺(9) 口径14.6cmで、胴最大径が30cm以上になる直口壺である。口縁部は直に立ち上がり、端部で僅かに外反する。肩部は丸く膨らむ。外面は粗いハケ目調整、内面はナデ調整

される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、赤褐色に焼成されている。

土師器椀(10・11) 10は内彎して口縁部が立ち上がる椀で、復原口径12.5cm、器高4.8cmの大きさ。器壁がやや厚めで、器面はヘラ磨きされるが殆ど磨滅している。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡明褐色に焼成されている。11は短く内彎気味に立ち上がる口縁部のつく椀と言うよりは小形丸底壺のミニチュアらしい手捏土器である。内外面ともに指頭圧痕の残るナデ調整。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

土器片円盤(第17図17・18) 土器片を円盤状に打ち欠き整形したもので、周縁はやや磨滅する。17は縄文土器片らしく外面にヘナタリ疑似縄文がみられる。18は外面が磨滅し、内面にハケ目がみられる。外径と厚みは、4.2cm～4.3cm、0.7cmの大きさである。

石製紡錘車(第32図8) 濃緑色を呈する滑石質の雲母片岩を用いた紡錘車で、外径3.7cm、厚さ1.6cm、孔径0.7cm、重量29.9gを測る。截頭円錐状で傾斜のある側面は縦方向に細かく削って調整される。

砥石(第77図31) 乳灰白色を呈する泥岩質の石材を用いた砥石である一部欠損がみられるが、現存長7.0cm、幅8.6cm、厚さ2.3cm、重量92.5gを測る。側面を含めた各面ともに、よく使用されて、主要面では内凹みになっている。

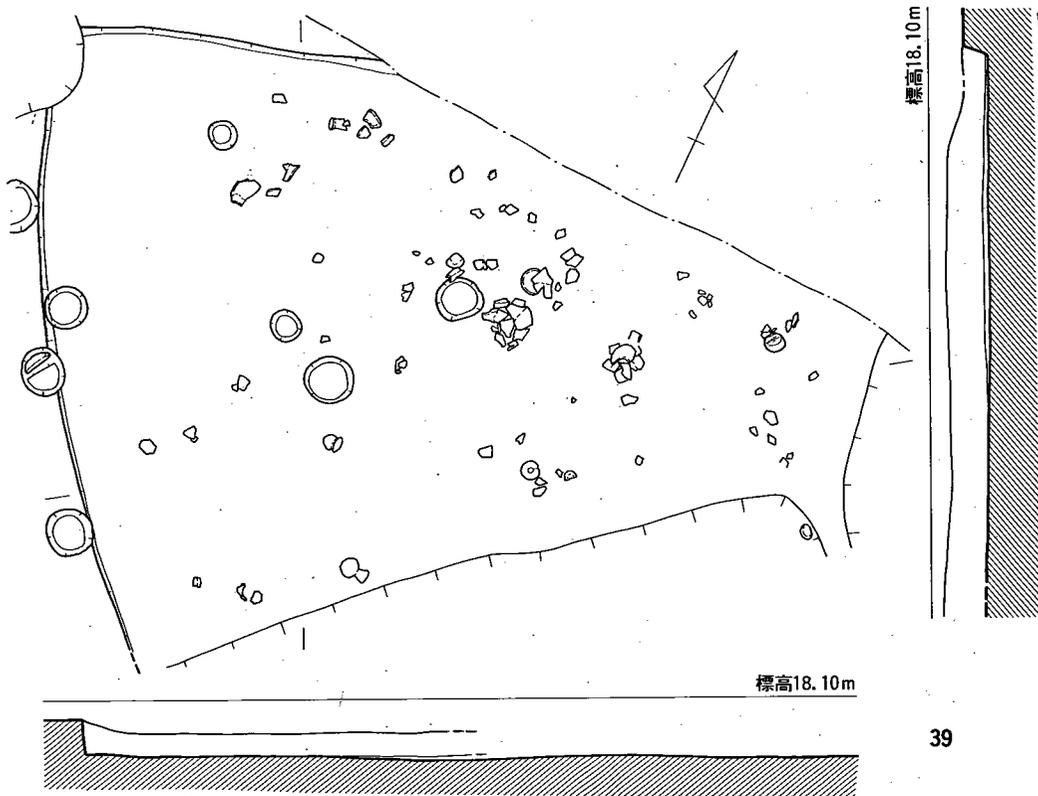
出土土器では、11の椀形土器に古い要素を窺えるものの、土師器甕などは5世紀以降に含まれる器形で、6世紀に含まれる可能性も高い。

39号住居跡(図版25-1、第93図、旧IV-11住)

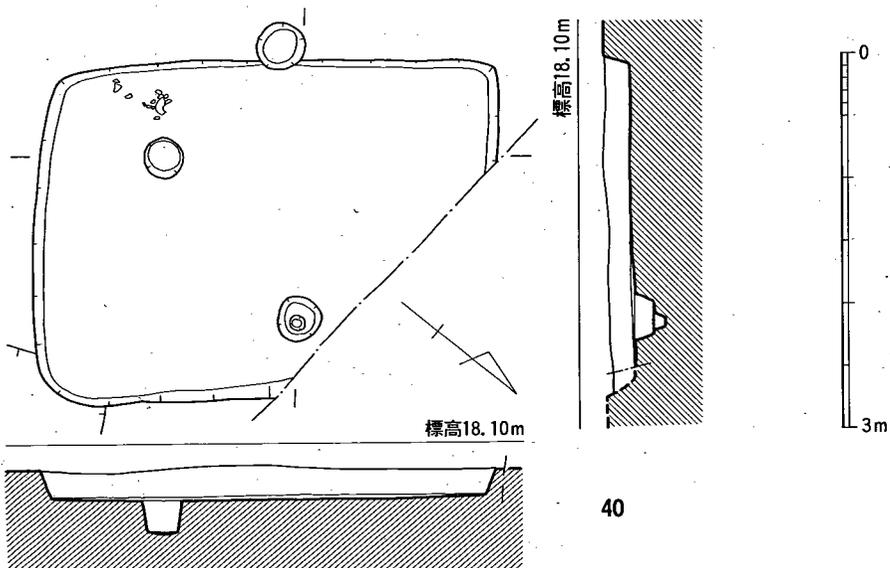
I 22区を中心に発見された住居跡で、北側は調査区域外に続く。3号溝に東側を、33号住居跡に南側を、40号住居跡に西隅を切られて、全体の形は不明だが、南西壁は5.2m長さに発見されて、25cm前後の高さに残る。北西壁との関係から不整形ないし長方形のプランであったと推定される。床面はやや堅緻だが、炉はカマドは確認されなかった。床面を掘り込むピットは4ヶ所にみられるが、堆積土のやや上位から検出されたので、住居跡に伴わず後世に掘り込まれたピットであろう。

出土遺物(図版47・48・50・51、第94図)

複合口縁壺(1～3・6) 1はく字形の口縁屈曲部に刻み目凸帯が付き、内傾する口縁部外面に波状文が描かれる。復原口径11.6cm、凸帯外径16.2cmの大きさで、これより膨らむ胴部外面は叩き目の残るハケ目調整、胴部内面はハケ目、口径に近い径の頸部内面はヘラ磨きで調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色ないし淡黄褐色に焼成されている。2は口径18.0cm、残存器高34.0cmで、胴最大径31.5cmが下位にある下膨れの壺。口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色ないし黄褐色に焼成されている。3は復原口径27.2cmの大きさの

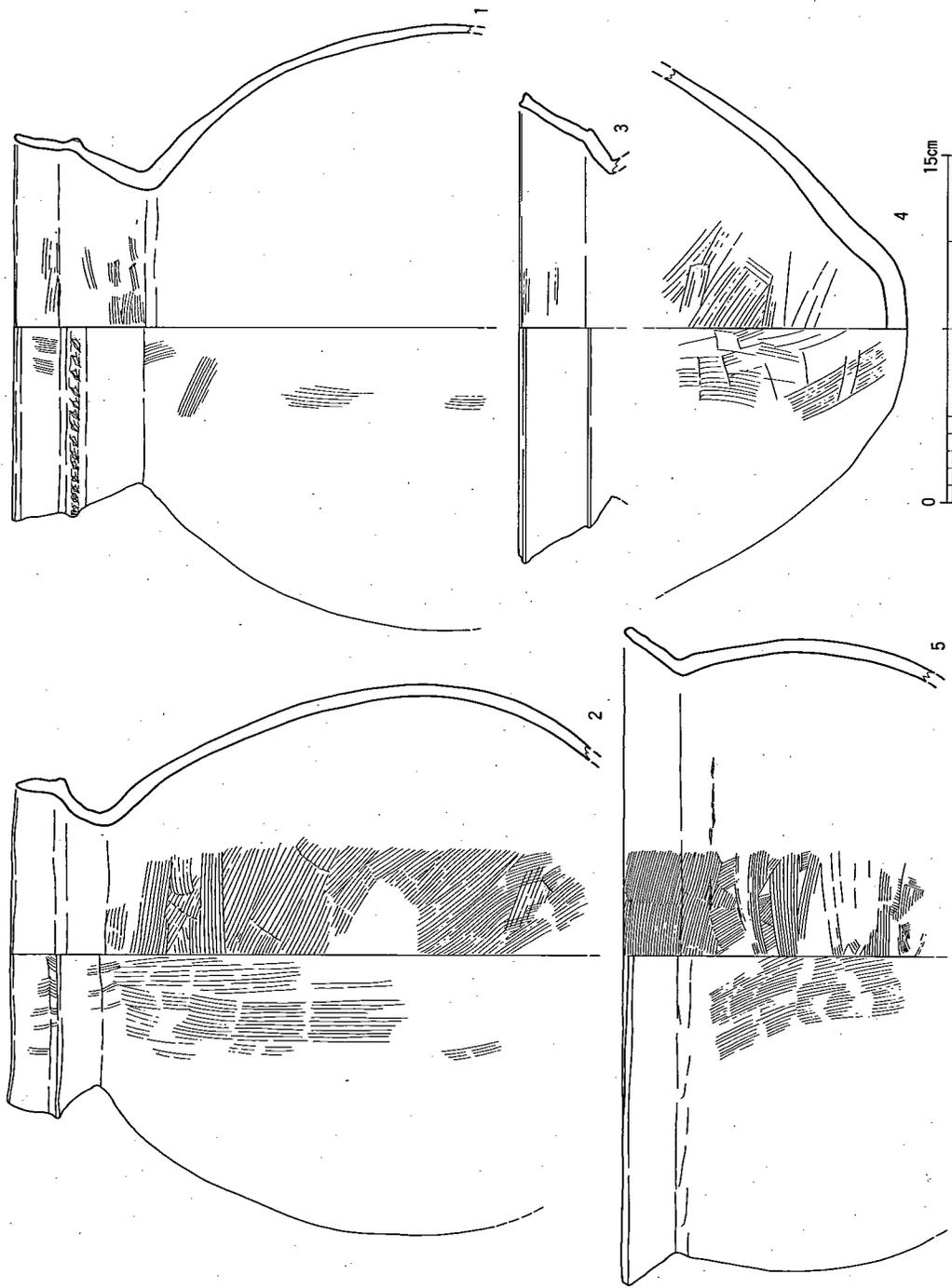


39

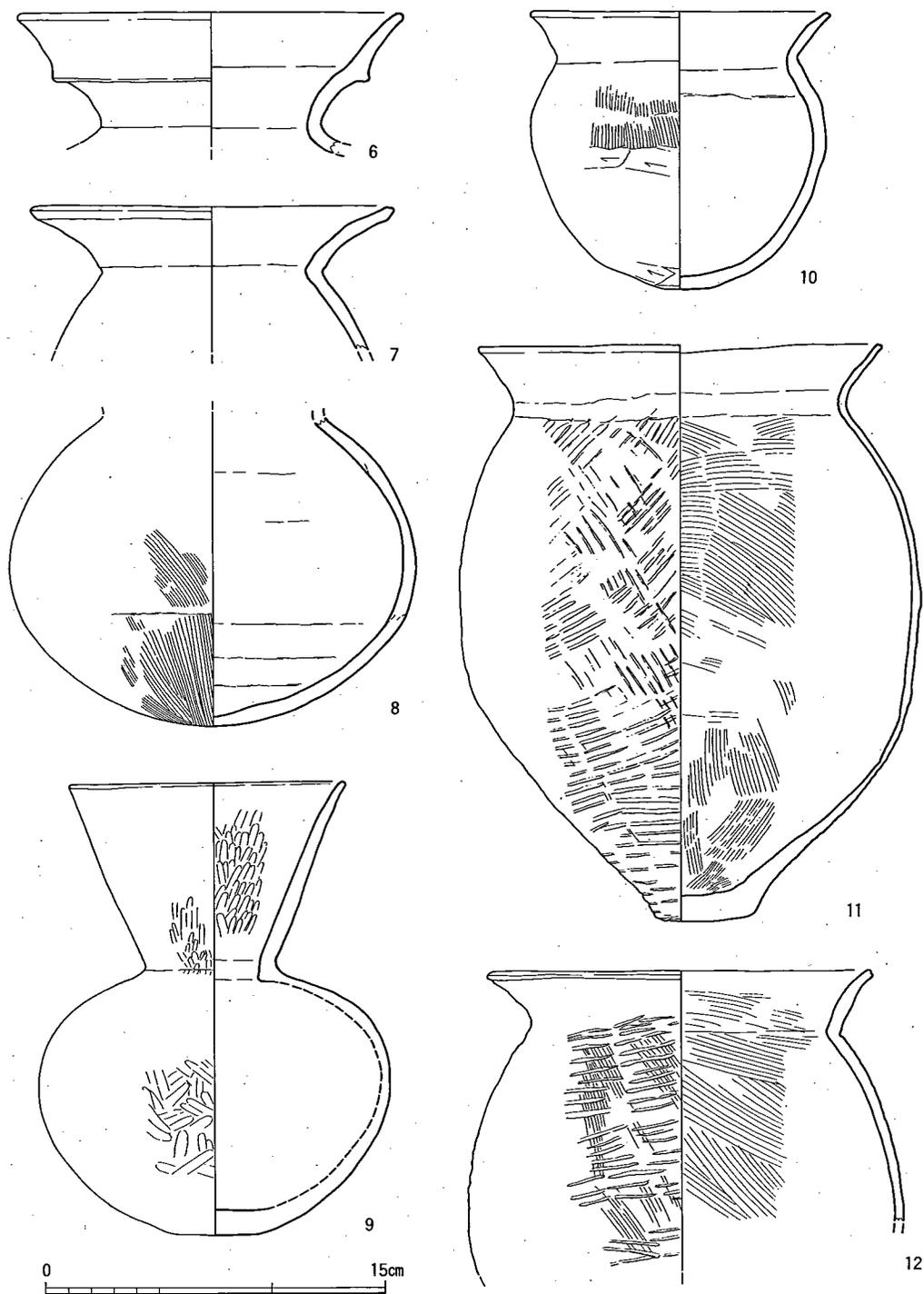


40

第93図 39・40号住居跡実測図 (1/60)



第94图 39号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第95图 39号住居跡出土土器实测图2 (1/3)

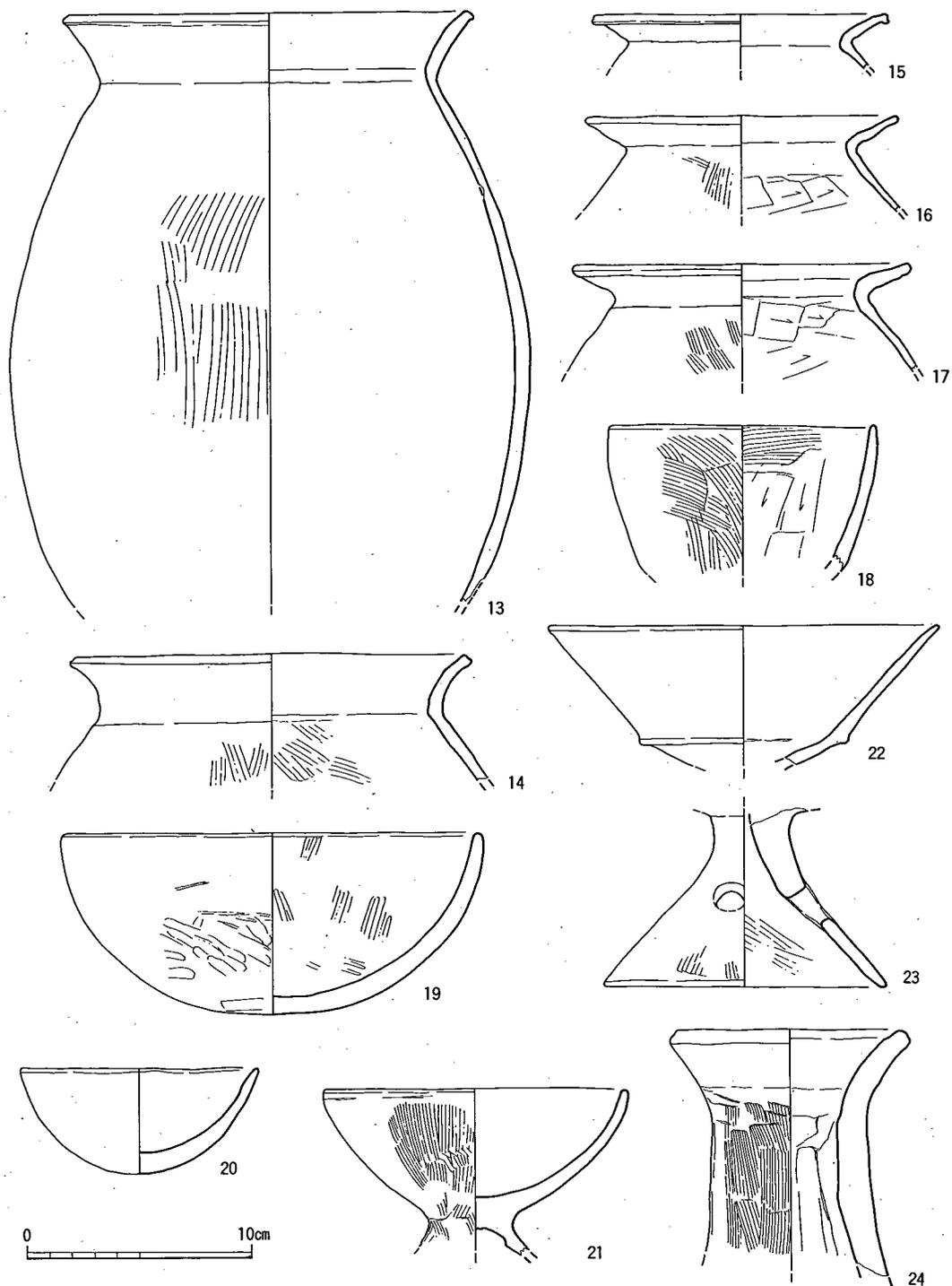
外開きの口縁部破片で、端部は面をなす。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。6は復原口径17.0cmの大きさの口縁部破片で、頸部から外反して開き、凸帯状の段を介してさらに口縁部が外反気味に開く。器面は風化・磨滅するが、胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。

壺(4・7~9) 4は凸レンズ状に膨らむ底部破片で、胴部はかなり膨れる。内外面ともにハケ目調整されてナデが加わる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。7は復原口径16.0cmの大きさで、長めに外反する口縁部が端部で僅かに内彎気味になる。器面は磨滅するが、胴部内面はナデられる。胎土に砂粒・角閃石・石英などを含み、黄橙色に焼成されるが、外面に煤が付着している。甕の可能性もあるが、うまく接合しない8ともし接合すれば壺の器形であろう。8は口縁部を欠くが、胴最大径17.8cm、残存器高13.6cmの扁球形体部をもつ。底部は丸く、外面にハケ目、内面と肩部外面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・石英などを含み、暗茶褐色に焼成されている。9は扁球形の胴部に直線的に開く口縁部が付く壺で、底部は小さな平底である。口径12.3cm、器高20.0cm、胴最大径15.5cm、底径3.8cmの大きさで、口縁部の高さは器高の2/5を占める。器面は磨滅が進むもののヘラ磨きの痕跡を多くとどめる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、淡橙灰褐色に焼成されている。

甕(5・10~17) 5はく字形に外反する口縁部をもつ甕で、復原口径38.0cmと大きい。胴部はやや丸みをもって膨らむが径は口径を上回らない。胴部内外面と、口縁部内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶灰色に焼成されているが、外面に煤が付着している。器形としては鉢の可能性もあろう。

10は口径13.2cm、器高12.2cm、胴最大径12.9cmの大きさの甕で、外反する口縁部をもち、底部は丸い。胴部の器壁は口縁部よりやや厚めで、外面の肩部がハケ目、胴下半はヘラ削りの後ナデ調整が加わり、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶橙色に焼成されているが、二次的な火熱を受け、外面には煤も付着している。

11はく字形に屈曲する口縁部と、小さな平底の付く甕。復原口径17.6cm、器高25.0cm、胴最大径20.1cmの大きさ。ヨコナデ調整される口縁部は直線的に開き、叩き目の残る胴部は胴下半が急にすぼまる。胴内面は頸部下までハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、淡茶橙色に焼成されているが、二次的な火熱を受け赤変する部分もあり、外面全体に煤が付着している。12~14は、く字形に外反する口縁部をもつ甕で、12・14は胴部内外面をハケ目調整して、12では外面に叩き目が残る。また13は胴部外面にハケ目がみられるものの内面はナデ調整される。復原口径は順に17.0cm・18.2cm・18.0cmの大きさで、13では長胴を呈している。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、暗橙色・橙褐色・明茶色に焼成されているが、12・13の外面全体に煤が、12の内面にはお焦げが付着している。



第96图 39号住居迹出土土器实测图3 (1/3)

15～17は、口縁部が強めに外反する甕で、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りされて、器壁は薄い。口縁端部が面取りされる15と、されない16・17の例がある。復原口径は順に13.0cm・13.8cm・15.0cmの大きさで、胴部は張るが下部の破片を接合・復原しがたい。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒などを含み、淡橙色・暗橙褐色などに焼成されている。

鉢(18) 復原口径12.0cm、残存器高6.3cmの大きさで、口縁部は内彎気味に立ち上がる。外面と内面の口縁部はハケ目調整、内面の胴部はヘラ削り調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、淡橙色に焼成されている。

椀(19・20) 19は復原口径19.0cm、器高8.1cmの大きさの半球形の椀。外面に少し叩き目らしい痕跡が残るものの、全体にヘラ磨きされ、底面はヘラ削りに近い。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、明茶褐色ないし黒色に焼成されている。20は半球形の、復原口径10.6cm、器高4.8cmの大きさの椀。口縁端部はやや外反気味に薄くなる。全体にナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

高杯(21～23) 21は、脚裾部を欠くが半球形椀状の杯部をもつ高杯。口径13.5cm、杯部高6.0cmの大きさで、脚台状の低く広がる脚裾が付くであろう。外面はハケ目調整、内面はナデられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶橙色に焼成されている。

22は、杯底部に比して口縁部が長く外反気味に開く杯部だが、柱状部以下の脚部を欠く。口径17.4cm、残存器高6.0cmの大きさ。内外面とも器面が磨滅して調整手法は不明。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙色に焼成されている。23は22と図上では同一個体にしうるものの、うまく接合しない。脚部がラッパ状に開き、中途に円孔が3ヶ所穿孔されるが、裾径12.6cm、脚部高7.5cmの大きさ。内外面ともにハケ目が一部残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄橙色に焼成されている。

器台(24) 裾部を欠き、残存器高11.0cm、口径10.7cmの大きさで、口縁部は外反し、裾部に向かっても緩やかに外反する。くびれ部の外面はハケ目調整されるが、他はナデられる。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み、淡い赤茶色に焼成されている。

削器(第32図9) 姫島産黒曜石の不定形な剝片を素材にした削器である。長さ3.6cm、幅2.9cm、厚さ0.7cm、重量6.4gを測る。

石鏃(第32図10・11) とともに姫島産黒曜石の剝片を素材にしていて、10は全面に調整剝離の及ぶ凹基式の石鏃、11は剝片の周縁を若干調整剝離した平基式の石鏃である。10は長さ1.8cm、幅1.5cm、重量0.6g、11は長さ2.1cm、幅1.6cm、重量1.2gを測る。

砥石(第82図35) 長軸の端部を欠くが、現存長7.2cm、幅5.4cm、厚さ3.5cmの大きさの砥石で、淡黄灰色の色調を呈する凝灰質の砂岩を素材にしていて、肌理は細かい。4面ともによく使用されて、砥面は中凹みになっている。

鉄鏃(第19図26・27) 圭頭広根の鏃身部分と、篋被部分の基部片で、接合しないが同一個

体の鏝の可能性がある。鏝身部分は現存長2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmで、篋被部側では幅0.7cmからすばまり、現存長3.2cmを測る端部は尖る。端部付近に木質らしい付着はみられるが不明瞭である。

出土土器では、弥生後期後半の特徴をもつ甕もみられるが、胴部内面をヘラ削りする甕や丸底の壺、椀・高杯などの4世紀代に入る土器も混入している。

40号住居跡（図版27-5、第93図、旧IV-H・I 23堅穴）

I-23区を中心に発見された住居跡で、39号住居跡の西側に位置するが、39号住居跡を一部切り、北隅は調査区域外に潜る。確認したプランは長さ3.6m、幅2.7mの不整長方形である。周壁は15~20cmの高さに残るが、主軸はN39°W前後に向く。床面はやや堅く締まるが、柱穴状ピット2ヶ所を確認したものの、焼土などは確認できなかった。

出土遺物（図版48、第97図）

土師器複合口縁甕(1) 復原口径24.0cmの大きさの破片で、屈曲部は凸帯状に飛び出し、口縁端へは外反気味に立ち上がる。胴部内面が頸部下までヘラ削りされる他は、ヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗褐色に焼成されている。

土師器甕(2) 復原口径15.3cm、残存器高14.0cm、胴最大径16.2cmの大きさで、丸い胴部をもち、丸底と推定される。口縁部は内彎気味に開き、端部は丸くおさまる。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

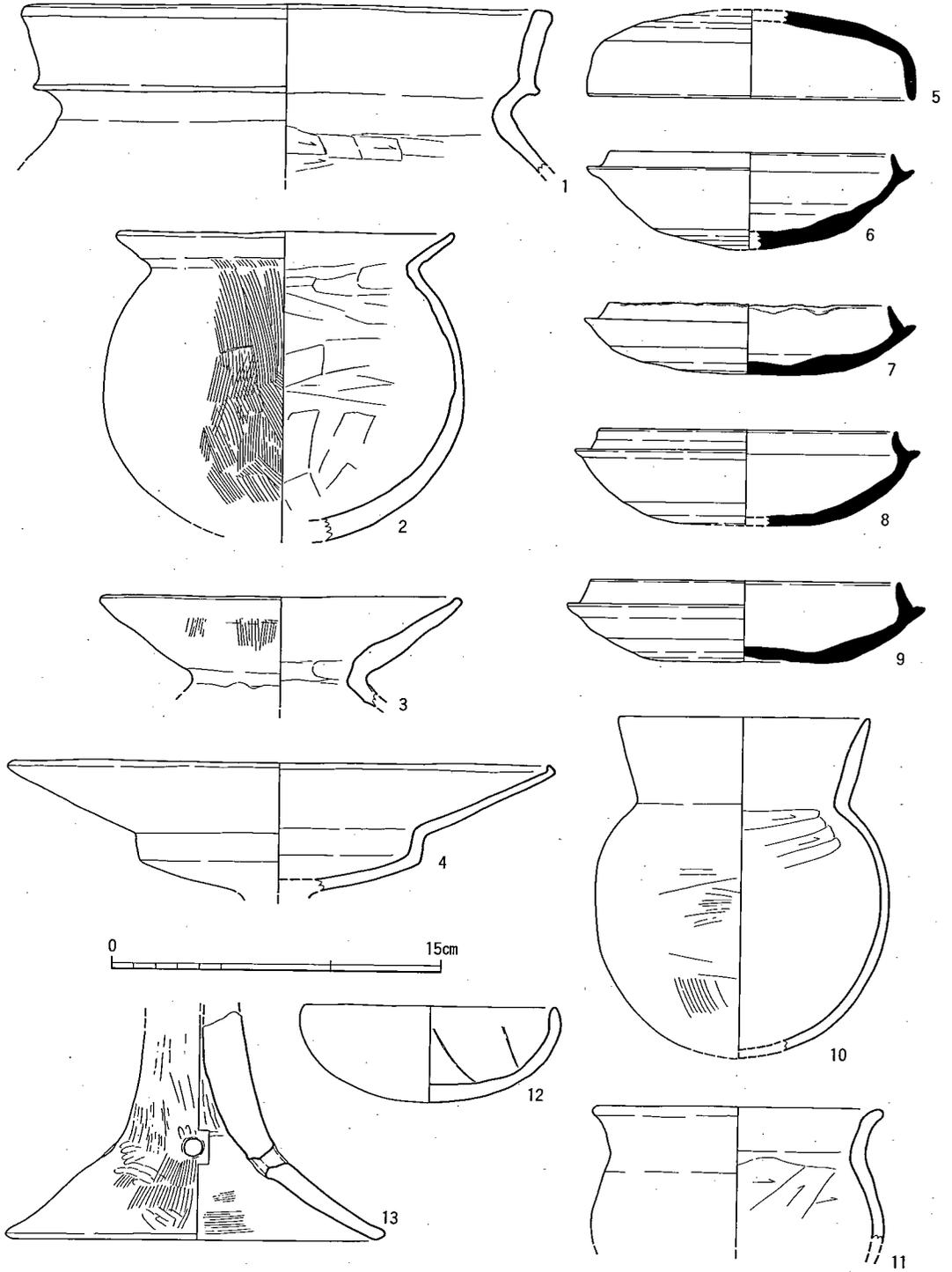
土師器器台(3) 器壁は厚めだが、鼓形器台の受け部片である。径8.0cmのくびれ部からそのまま、復原口径16.6cmの大きさに開き、外面にハケ目が若干残る他はナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・石英を含み、淡黄褐色に焼成される。

土師器高杯(4) 復原口径24.7cmの大きさの杯部で、柱状部以下の脚部を失う。杯底部から口縁部への屈曲に深さをもち、直線的に開いた口縁部は端部で内側につまみ上げられる。器面は風化・磨滅が進み、器面調整は不明。胎土に細砂粒・赤褐色粒・石英を含み、淡赤褐色に焼成されているが、杯底部は二次的な火熱を受けて、桃色がかった色調に変色している。

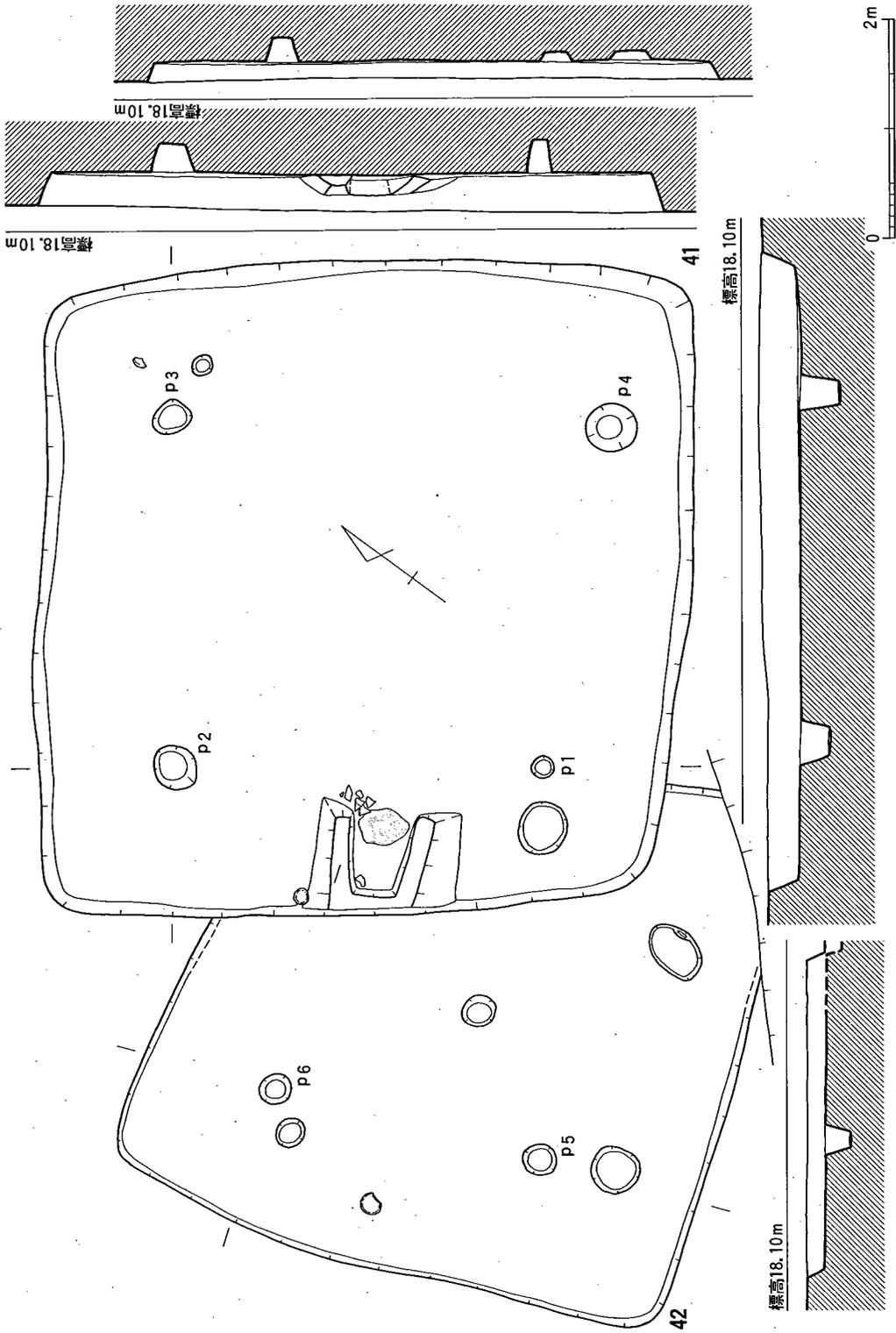
これらの土器では、甕の器形や胴部内面のヘラ削りの特徴などからみて、3世紀末から4世紀代に相当する土器で、鼓形器台は模倣的なつくりであろう。

41号住居跡（図版28-1、第98図、旧IV-4住）

G-22・23区を中心に発見された住居跡で、33号住居跡の南西側に位置する。42号住居跡と南西側で重複し、これを切っている。南西壁は5.5m、北東壁5.8m、北西壁・南東壁5.5mで、中央部では6.0m×6.0m規模の不整形プランに発見され、主軸方向はN53°30'E前後に向



第97图 40·41号住居跡出土土器実測图1 (1/3)



第98图 41·42号住居迹实测图 (1/60)

く。周壁は25cm～35cmの高さに残り、南西壁のほぼ中央にカマドが設置されている。中央部の床面は堅緻だが、周囲の床はさほど堅くはない。床面を掘り込むピットは6ヶ所にみられるが、P1～P4が支柱穴であろう。直径20cm～45cm、深さ25cm～40cmの規模である。

カマド（図版28-2、第99図）

火床面が住居の床面とほぼ同じ高さのカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられ

る。右袖は残存長100cm、基底部幅25～40cm、残高10～15cm、左袖は残存長80cm、基底部幅35～50cm、残高5～15cmを測る。燃烧室は火床は40×75cm程の広さで、火床は焚口側のみ確認された。支脚は確認されなかった。焚口付近に土師器甕片、右袖の外側隅に須恵器杯身が1点出土した。

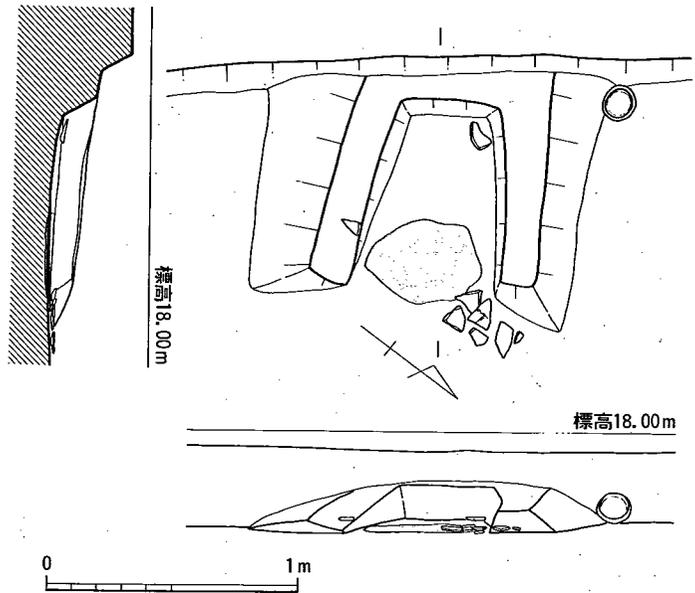
出土遺物（図版48～50、第97・100図）

須恵器杯蓋(5) 身受けのかえりを有さない杯蓋で、復原口径14.8cm、器高4.0cmの大きさ。外天井は回転ヘラ削りされる。砂礫を若干胎土に含み、淡緑灰色に焼成されている。

須恵器杯身(6～9) いずれも蓋受けのかえりを有する杯身で、かえりは短く反り気味ながら内傾して立ち上がる。外底面はヘラ切り離しの後にナデられる。外径と器高は、順に、12.8cm・4.5cm、12.7cm・3.2cm、13.4cm・4.3cm、14.0cm・3.7cmを測る。焼成はいずれも堅く、灰色・暗灰色などの色調を呈している。7はカマド右外脇から出土した。

須恵器壺(14～16) 堆積土上部で出土しているが、14・15は短頸壺で、復原口径8.6cm・8.3cmの大きさ。14は口縁部が肥厚せずに直に立ち上がり、胴部には沈線が巡る。15は口縁部がやや肥厚気味で外面に段をもつ。16は復原口径10.0cmの緩やかに外反する口縁部破片で、長頸壺かも知れない。いずれも堅く焼成され、灰色ないし暗灰色、淡茶灰色を呈している。

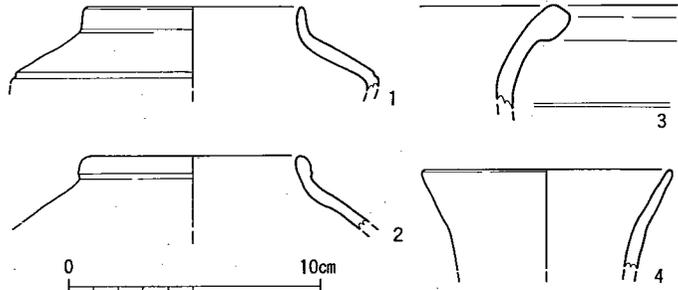
須恵器甕(17) 口縁部は外反して、端部台面に肥厚する破片で、下端に沈線状の段がある。堅めの焼成で、淡緑灰色を呈している。



第99図 41号住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器小形丸底壺(10)

底部を欠くが、復原口径11.2cm、残存器高15.3cm、胴最大径13.2cmの大きさ。球形の体部に直立気味に開く口縁部が付き、胴部外面はハケ目後ナデ、内面は頸部までのヘラ削りとナデで調整される。胎土に角閃



第100図 41号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

石・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。

土師器甕(11) あまり肥厚せず、緩やかに外反する口縁部をもつ甕で、復原口径13.2cm、胴最大径13.4cmの大きさ。胴部外面はナデ、内面は頸部下までヘラ削りされる。胎土に角閃石を多めに含み、淡茶橙色に焼成されている。

土師器椀(12) 復原口径11.9cm、器高4.4cmの大きさで、口縁部は内彎して立ち上がる。外面はナデ、内面は板ナデらしく板状工具の小口圧痕が残る。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄橙色に焼成されている。

土師器高杯(13) 柱状部から外反して開く裾部をもつ脚裾部で、杯部は残らない。裾部径17.2cmの大きさで、柱状部との境付近に円孔が4ヶ所穿孔される。内外面ともにハケ目の後にナデが加わり、柱状部の外面は板ナデ痕、内面には絞り痕がみられる。胎土に角閃石を多めに、赤褐色粒なども含み、黄橙褐色に焼成されている。

砥石(第82図36) 小破片だが、現存長5.2cm、幅4.5cm、厚さ1.2cmの大きさの砥石で、淡青灰色の色調を呈する粘板岩質の石を素材にしている、肌理は細かい。3面ともによく使用されている。

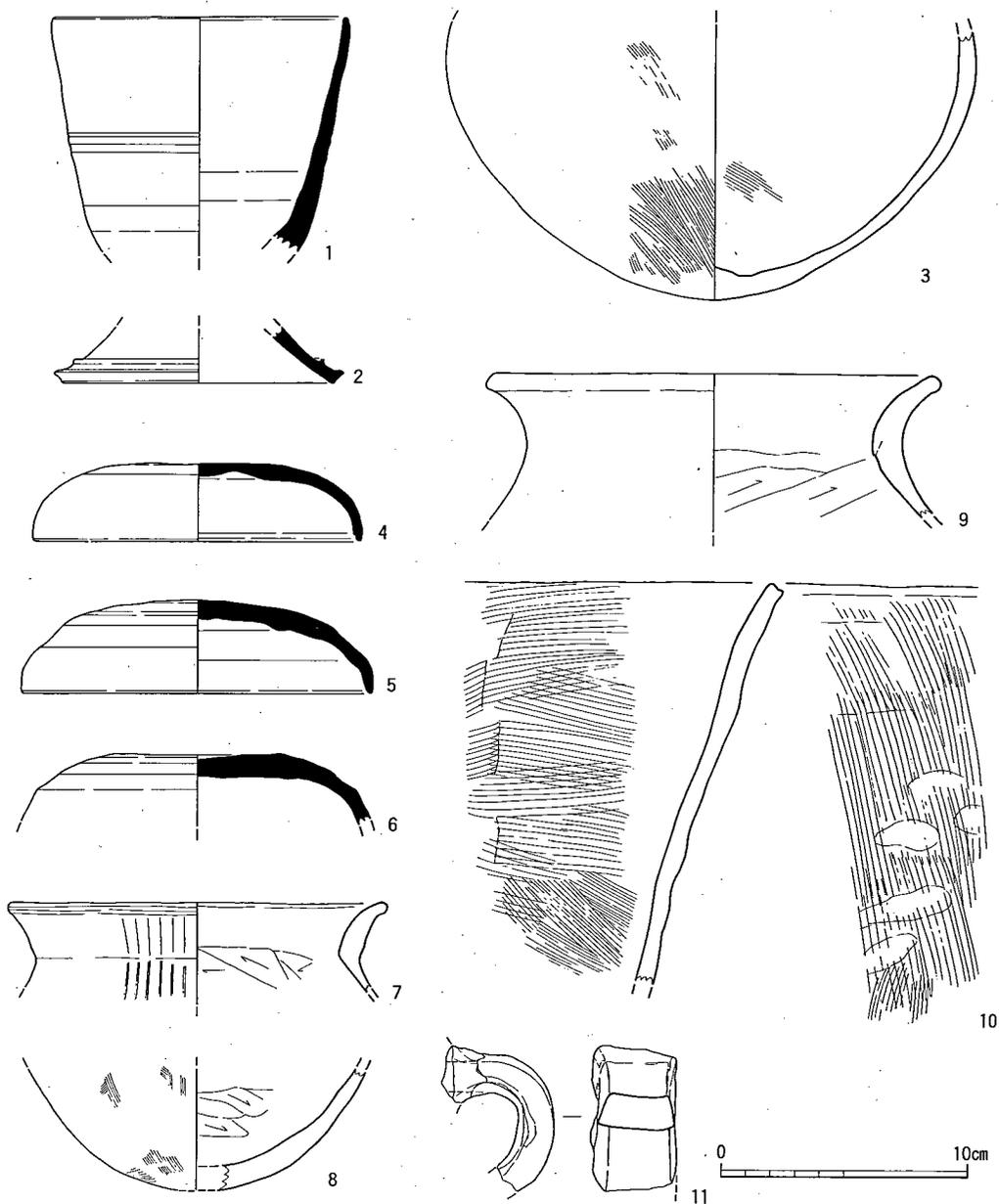
出土土器では、須恵器杯蓋・杯身、短頸壺などの特徴から6世紀後半頃に考えられる。なお、土師器高杯は3世紀ないし4世紀頃まで遡る可能性があり、重複する住居跡などから招来されたものであろう。

42号住居跡 (図版48-3、第98図、旧IV-5住)

F・G-23区に発見された住居跡で、41号住居跡の南西側に位置して、41号住居跡に東側を、2号溝に南東隅部を切られている。確認したプランは西壁で長さ5.2m、南壁で5.0mを有する不整形プランの住居跡である。周壁は10~15cmの高さに残るが、主軸はN21°W前後に向く。床面はやや堅めで、柱穴状ピット7ヶ所を確認したが主柱穴はP5・P6であろう。焼土などは確認できなかった。出土土器も少なく、殆どが堆積土上部で出土した。

出土遺物 (第101図)

須恵器鉢(1) 底部を欠くが、復原口径12.2cm、残存器高9.7cmの大きさの鉢で、底部から口縁部が長く直線的に立ち上がり、端部で僅かに内彎気味になる。ほぼ中程に浅い沈線が巡る

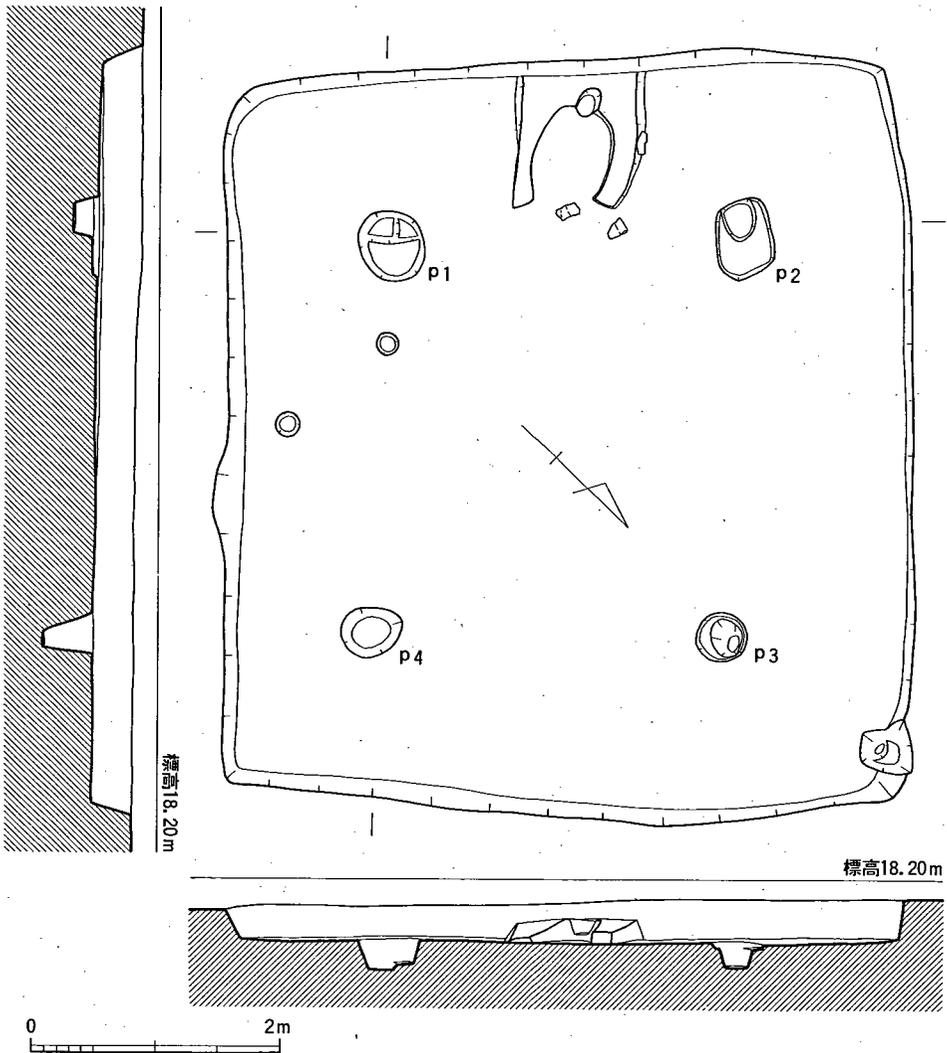


第101図 42・43号住居跡出土土器実測図 (1/3)

他には特に装飾はない。堅めの焼成で暗茶灰色を呈している。

須恵器高杯(2) 復原裾径11.9cmの大きさの脚裾部破片である。外反気味に開いて、端部は外側につまんだような面をもち、直ぐ上側に1条の凸帯が巡る。堅めの焼成で暗茶灰色を呈している。

土師器甕(3) 胴下半部破片で胴最大径21.6cmの大きさ。底部は僅かに尖り加減の丸底で、内外面にハケ目がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されている。



第102図 43号住居跡実測図 (1/60)

出土土器では、須恵器破片は6世紀後半に属するものであろう。土師器胴下半部では口縁部の特徴が分からないものの、尖り気味の底部であるので、3・4世紀に置くことが可能である。住居跡の重複や、カマドの存在しない点などから、この時期の住居跡とみることもできよう。

43号住居跡（図版29-1、第102図、旧IV-2住）

E・F-24・25区に発見された住居跡で、42号住居跡の南西側に位置する。5号建物跡と一部重複し、柱穴が住居跡の堆積土中で検出されたので、住居跡が先行する。南西壁は5.3m、北東壁5.4m、北西壁5.9m、南東壁5.6mで、中央

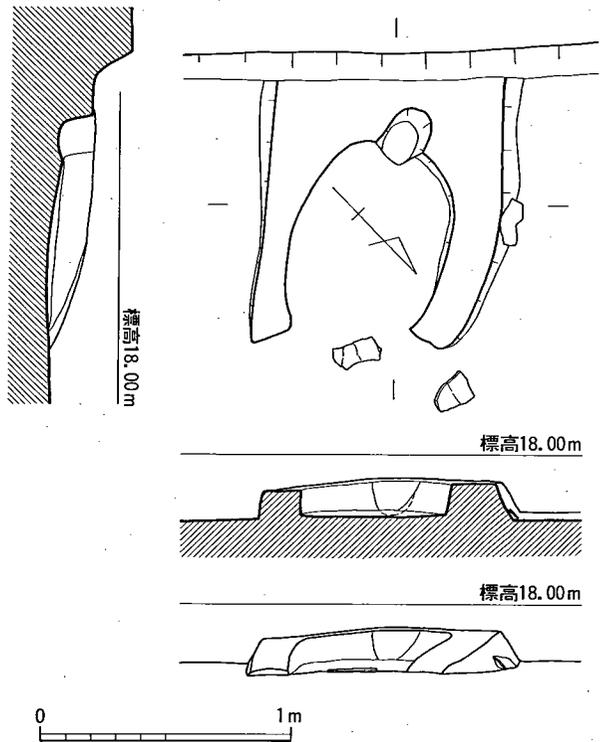
部では6.1m×5.6m規模の不整形プランに発見され、主軸方向はN46°E前後に向く。周壁は25cm～35cmの高さに残り、南西壁のほぼ中央にカマドが設置されている。中央部の床面は堅緻だが、周囲の床はさほど堅くはない。床面を掘り込むピットは6ヶ所にみられるが、P1～P4が支柱穴であろう。直径30cm～50cm、深さ20cm～50cmの規模である。

カマド（図版29-2、第103図）

火床面が住居の床面とほぼ同じ高さのカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられる。右袖は残存長110cm、基底部幅20～30cm、残高5～15cm、左袖は残存長100cm、基底部幅10～30cm、残高5～15cmを測る。燃烧室は60×75cm程の広さで、焼けた面は顕著でなく、支脚も確認されなかった。奥側には煙道に関わるものか、支脚石の抜き跡かなどは不明だが、直径10cm、深さ15cm程の穴がある。焚口前に土師器甕片などが出土した。

出土遺物（図版、第101図）

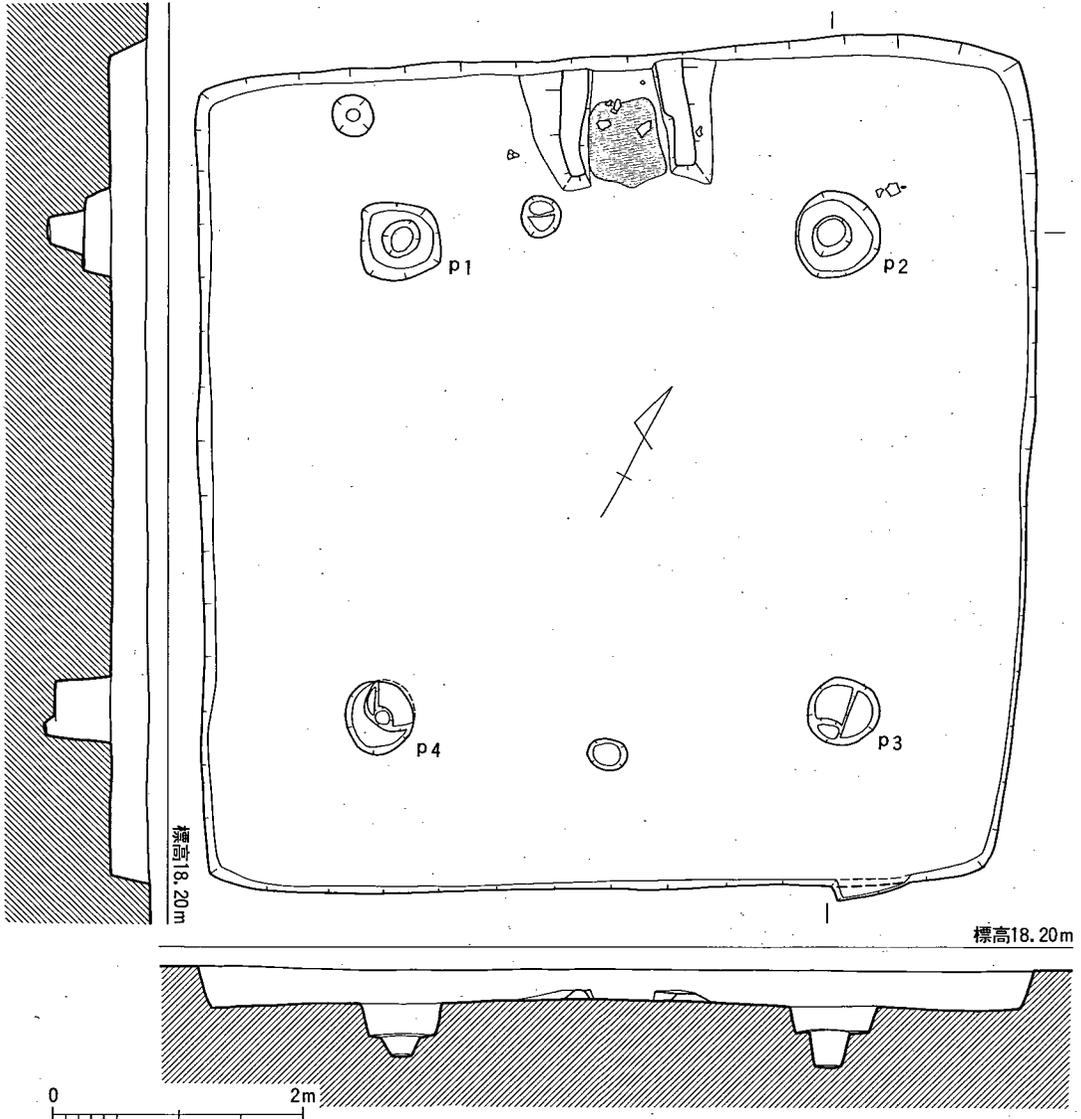
須恵器杯蓋(4～6) 身受けのかえりを有さない杯蓋で、外天井は回転ヘラ削りされる。4・5の復原口径・器高は13.4cm・3.3cmと14.4cm・3.9cmで、6は口縁部を欠く。砂粒を若干胎土に含み、いずれもやや茶色味を帯びた灰色ないし淡灰色に堅く焼成されている。



第103図 43号住居跡カマド実測図 (1/30)

・土師器甕(7~9) いずれも破片資料である。7・9は、やや肥厚して外反する口縁部をもつ甕で、復原口径15.6cm・18.6cmの大きさ。9では磨滅して分からないが、7では胴部外面は粗いハケ目、内面は7・9とも頸部までヘラ削りされる。また8は7と同一個体の可能性が高い底部破片で、丸底。外面はハケ目、内面はヘラ削りされる。いずれも胎土に角閃石・赤褐色粒と砂粒を含み、赤味橙色ないし淡茶橙色に焼成されている。

土師器甕(10) 胴部からそのまま口縁まで直線的に立ち上がり、端部が外反気味で口唇部は



第104図 44号住居跡実測図 (1/60)

面をなす。把手部分は残らないが、甑の口縁部破片であろう。外面は縦方向、内面は横方向にハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、淡黄橙色に焼成されている。

把手(11) 幅3.0cm、厚さ1.5cm程の帯状の粘土を曲げて輪にした把手部の破片である。本体側の器形は分からないが頸部あたりに貼り付けられたものであろう。ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡黄褐色に焼成されている。

出土土器では、須恵器杯蓋・土師器甕などの特徴から6世紀後半頃に考えられる。

44号住居跡 (図版30-1、第104図、旧IV-3住)

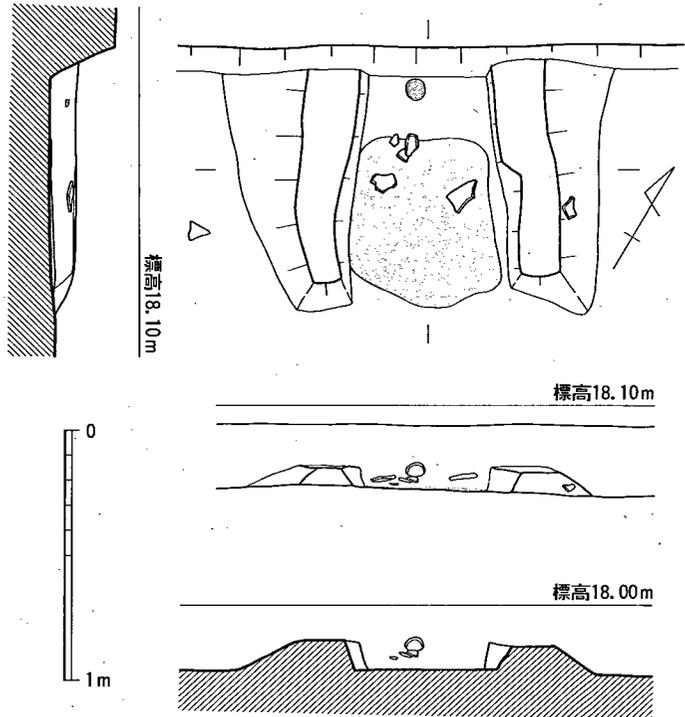
H-25・26区を中心に発見された住居跡で、43号住居跡の北西側に位置している。確認したプランは各辺が長さ6.5mを有し、中央部では6.6m×6.7mの規模になる不整形プランの住居跡である。6号建物跡と重複するが、堆積土の中では前後関係は判別しえなかった。周壁は25～30cmの高さに残り、北西壁のほぼ中央にカマドが施設される。主軸方向はN62°W前後に向く。床面はやや堅めで、柱穴状ピット7ヶ所を確認したが主柱穴はP1～P4であろう。なお、P3近くの周壁にある凹みは、崩落である。

カマド (図版30-2、第105図)

火床面が住居の床面とほぼ同じ高さのカマドで、両側に壁を築いてつくられる。右袖は残存長95cm、基底部幅30～45cm、残高5～10cm、左袖は残存長95cm、基底部幅25～50cm、残高5～10cmを測る。燃烧室は60×90cm程の広さで、火床は焚口側の70cm長さにみられる。支脚は確認されないが、奥壁際に焼土塊がみられる。燃烧室内から土師器甕片などが出土した。

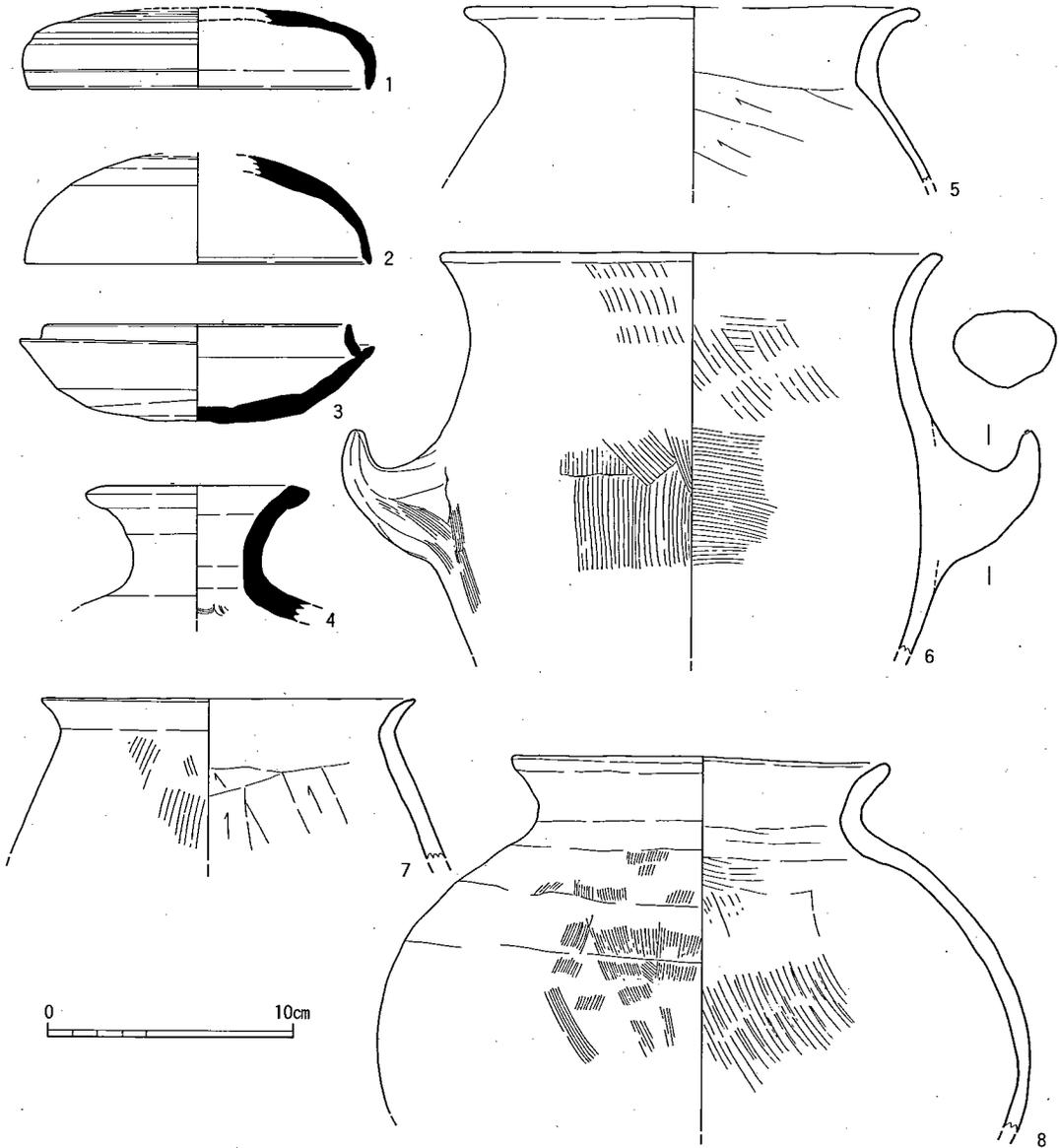
出土遺物 (図版49・50・51、第106図)

須恵器杯蓋(1・2) 身受けのかえりを有さない杯蓋



第105図 44号住居跡カマド実測図 (1/30)

で、外天井は回転ヘラ削りされている。1は低平な器形で口縁部は内彎するが、2は高さのある器形で口縁部はさほど内彎せず口唇部は内面に段をもつ。復原口径と器高は、13.8cm・2.2cm、14.0cm・4.5cmを測る。両者とも胎土に砂粒を含むが、1は堅く焼成され灰色だが、2はややあまい焼成で褐色味のある灰色を呈する。

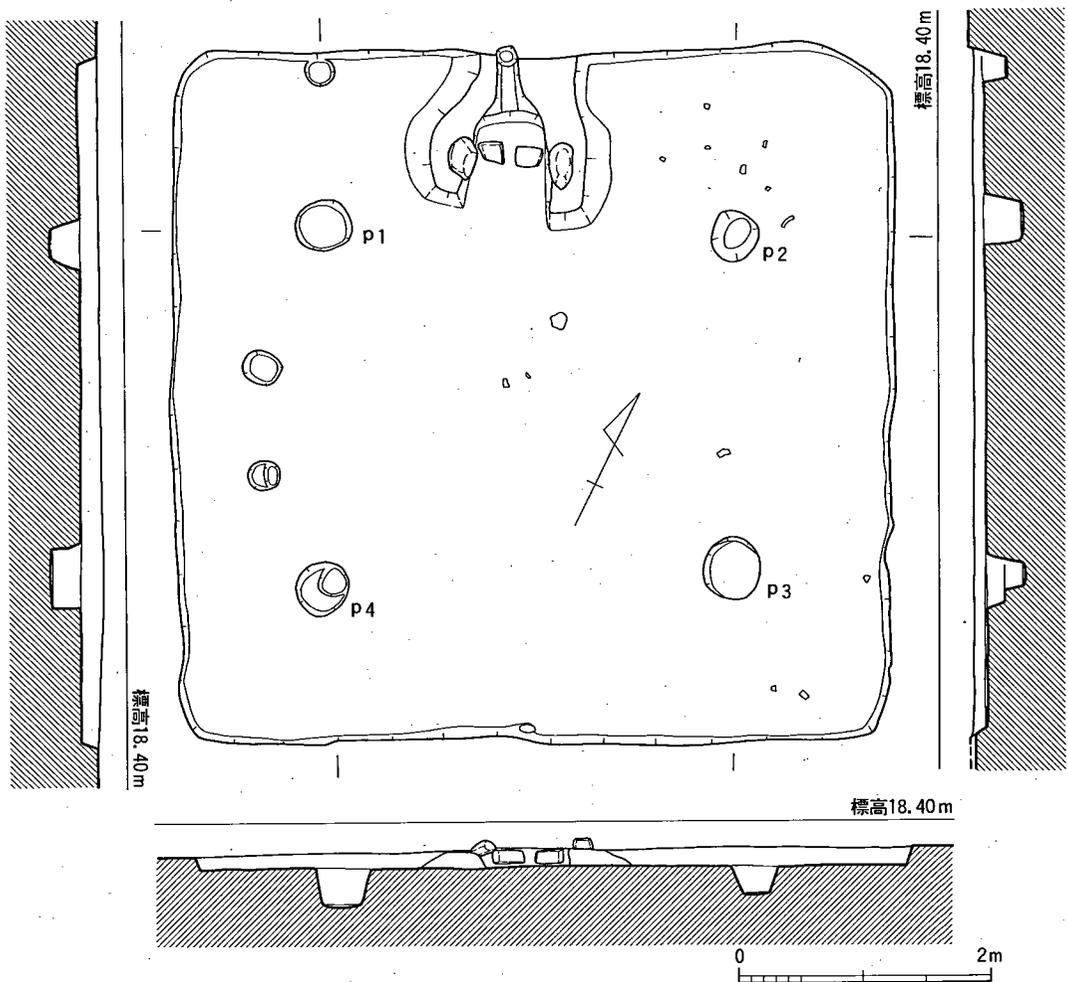


第106図 44・45号住居跡出土土器実測図 (1/3)

須恵器杯身(3) 蓋受けのかえりを有する杯身で、内傾する口縁部は反りながら立ち上がる。口径12.4cm、外径14.4cm、器高4.0cmの大きさで、外底部は回転ヘラ削りされる。胎土に砂粒を若干含み、灰色に焼成されている。

須恵器壺(4) 外反する口縁部破片で、端部は外側に少し肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整されるが、胴部外面は平行叩き、内面は同心円あて具痕がみられる。胎土に砂粒を含み、茶褐色味のある灰色の色調を呈している。瓶の類かも知れない。

土師器甕(5) やや肥厚して外反する口縁部破片で、復原口径18.4cmの大きさ。胴部外面はナデ、内面は頸部までヘラ削りされている。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。カマド付近から出土した。



第107図 45号住居跡実測図 (1/60)

土師器甑(6) 底部を欠くが、口径20.1cm、胴最大径20.5cm、残存器高16.5cmの大きさの甑であろう。口縁部は肥厚せず緩やかに外反して、膨らんだ胴部に一对の牛角状把手が付けられる。内外面ともにハケ目調整されるが、口縁部は粗く、胴部は細かなハケである。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし茶橙色に焼成されている。カマド内から出土した。

石 鏃(第32図12) 姫島産黒曜石の不定形剥片を用いた、全面に調整剥離の及ぶ、凹基式の石鏃。先端を欠くが、残存長2.1cm、幅1.7cm、厚み0.7cm、重量1.6gを測る。

鉄刀子(第19図29) 先端・基部側ともに欠損するが、刀子片であろう。基部側は0.7cm×0.4cm角で、刃側は幅1.4cm、厚み0.3cm。残存長2.7cmを測る。

出土土器は、須恵器杯蓋・杯身や土師器甕などの特徴からして、6世紀後半頃に含まれるであろう。

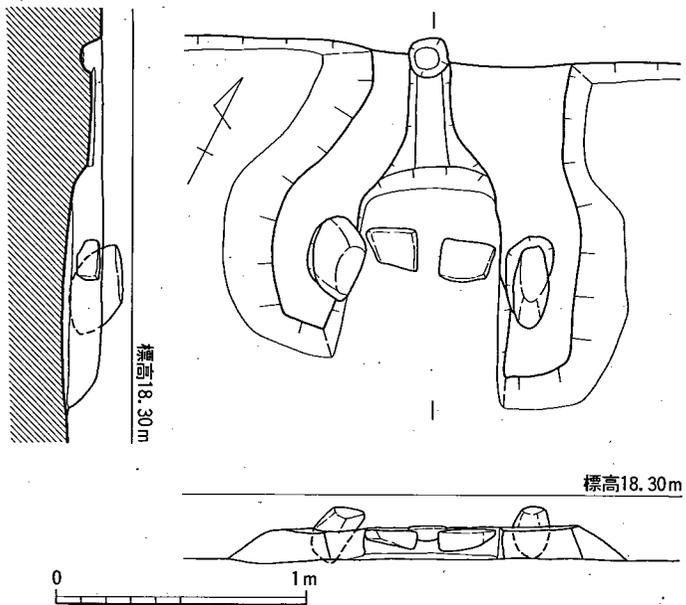
45号住居跡 (図版31-1、第107図、旧IV-1住)

F・G-28・29区に発見された住居跡で、44号住居跡の西南西に位置する。南西壁は5.5m、北東壁5.5m、北西壁5.7m、南東壁5.6m規模の不整形プランに発見され、主軸方向はN26°W前後に向く。周壁は10cm～15cmの高さに残り、北西壁のほぼ中央にカマドが設置されている。中央部の床面は堅緻だが、周囲の床はさほど堅くはない。床面を掘り込むピットは7ヶ所にみられるが、P1～P4が支柱穴であろう。直径30cm～40cm、深さ25cm～40cmの規模である。

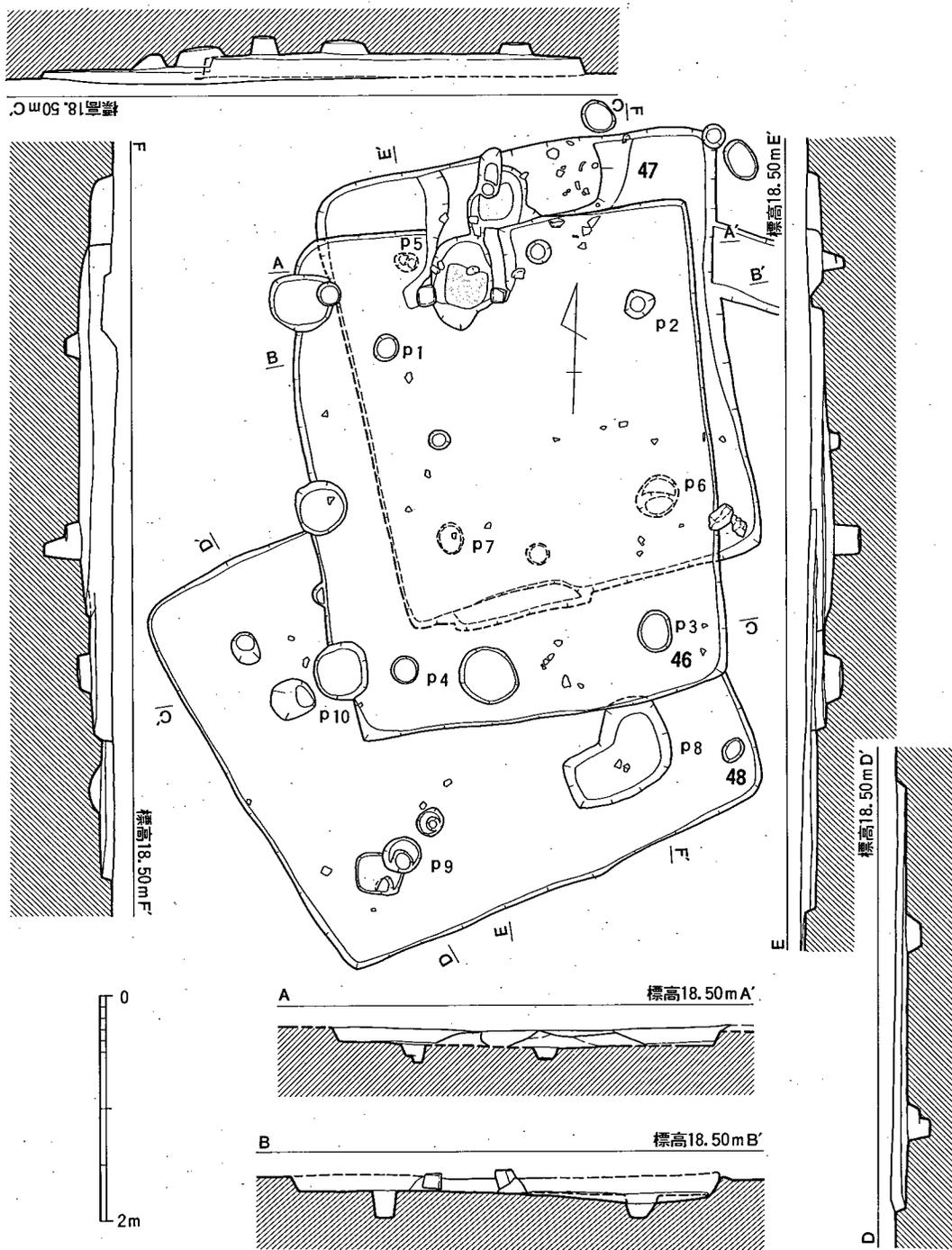
P2付近で石製紡錘車と鉄鏃が出土した。

カマド (図版31-2、第108図)

火床面が住居の床面とほぼ同じ高さのカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられる。右袖は残存長130cm、基底部幅25～45cm、残高10cm、左袖は残存長120cm、基底部幅30～45cm、残高10cmを測る。左右の袖には、長さ・幅25cm前後、厚さ15cm程の河原石が立てて据えられている。また、



第108図 45号住居跡カマド実測図 (1/30)



第109図 46~48号住居跡実測図 (1/60)

両袖の石に挟まれた位置で、燃焼室部分に落ち込んではいないが、凝灰岩質の幅15cm、厚さ7cm程の角礫が横たわる。燃焼室は55×70cm程の広さで、焼けた面は顕著でなく、支脚も確認されなかった。奥側には長さ約50cm、幅約15cmの煙道が付き、先端に直径15cm、深さ10cm程のピットが掘り込まれている。

出土遺物（図版49～51、第106図）

土師器甕(7) 肥厚せずに外反する口縁部をもつ甕で、胴部は膨らむ。復原口径14.2cmの大きさで、胴部外面はハケ目、内面は頸部下までヘラ削りされる。胎土に角閃石を多く含み、明茶橙色に焼成されている。

土師器壺(8) 球形の体部に外反する口縁部が付く壺で、口径15.2cm、胴最大径26.8cmの大きさ。口頸部はやや肥厚し、口縁部は強めに外反する。胴部外面は細かなハケ目が縦方向に、内面はやや粗いハケ目が縦方向に頸部下まで施される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成されている。

石製紡錘車(第32図13) 深緑色を呈する滑石製の紡錘車で、截頭円錐形に削って整形される。一部欠損するが、外径3.8cm、厚さ1.4cm、孔径0.7cmの大きさ。重量の現存値は30.5gを測る。

鉄 鎌(第19図30) 刃部が外反りで両端を折り曲げる鎌で、背側には木質が鏽着している。長さ2.8cm、幅11.0cm、厚さ0.2～0.6cmの大きさ。両端は0.2cm強の空間をおいて、約1.0cm分が折り曲げられている。

出土土器では、土師器甕や壺の特徴から5世紀代に考えられる。

46号住居跡（図版32-1・2、第109図、旧V-4住）

F-38区を中心に発見された住居跡で、V区調査区の中央部に位置する。47号住居跡・48号住居跡と重複して、これらより後出する。発掘当初にはプランが不明瞭で47号住居跡との前後関係を逆に見ていたが、掘り下げに従って46号住居跡が47号住居跡を切っていると確認できた。プランは南北4.4m、東西3.5mの不整長方形で、主軸方位はN10°W前後に向く。なお、西壁と重複する柱穴状ピットは9号建物跡の柱穴で、住居跡より後出する。周壁は5～10cmの高さに残り、北壁の中央部にカマドが施設される。床面は堅く締まるが中央部は少し凹み気味である。柱穴状ピットは9ヶ所確認したが、主柱穴はP1～P4であろう。

カマド（図版33-1、第110図）

火床面は住居の床面より僅かに高いカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられる。右袖は残存長60cm、基底部幅25cm、残高5～10cm、左袖は残存長60cm、基底部幅10～25cm、残高5～10cmを測る。両袖の前面には凝灰岩質の角張った石材を立て据えられる。左袖部は攪乱で少し壊されているが、本来は壁に厚みがあったものと推定される。燃焼室は50×60cm程の広さで、火床は焚口側の35cm長さにみられ、粘土質の床がよく焼けている。支脚は燃焼室中央部

に、長さ17cm、厚さ・幅ともに6～7cmの細長い石を立てて据えられる。支脚石より奥側の床は焼けず、焼土と灰の混じる暗茶褐色土が堆積するのみであった。なお、煙道施設は分からない。

出土遺物 (図版49、第112図)

須恵器杯蓋(1) 身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋で、天井部を欠いて、つまみの有無は分からない。復原口径17.2cm、残存器高2.3cmの大きさで、口縁端部の屈曲は摘んだ程度に緩い。砂粒を含む胎土で、灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身(2) 外開きで踏ん張るような高台の付く杯身で、口縁部は直線的に開き、端部が僅かに外反する。口径14.9cm、器高4.2cmの大きさ。胎土に細砂粒を若干含み、青灰色に堅く焼成されている。

土師器杯(3・4) とともに口縁部は内彎しながら立ち上がり、端部で僅かに外反する器形の杯である。3はカマド右袖の外側から出土したが、口径14.3cm、器高4.0cmの大きさ。外底部は静止ヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、橙色ないし淡い黒色に堅く焼成されている。4は復原口径19.4cmの大きさで、胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、明橙色ないし茶褐色に焼成されている。

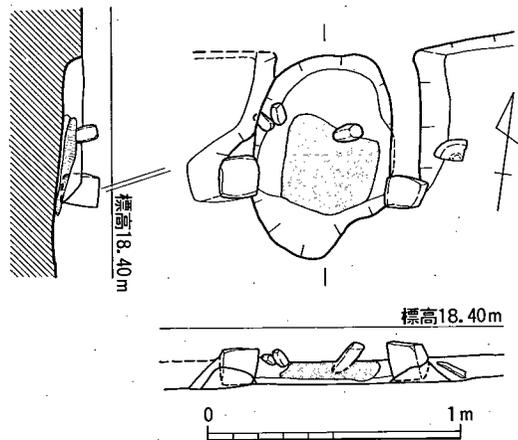
出土土器は、須恵器杯蓋・杯身の特徴からして、7世紀後半ないし末頃であろう。

47号住居跡 (図版33-2、第109図、旧V-3住)

F・G-38区に発見された住居跡で、46号住居跡の北西側に重複して、大半を失う。北壁は3.5m、東壁3.8mであり、調査時当初の不明確な検出プランは誤っていて逆転した。おそらく、南北3.8m、東西3.5m規模の不整長方形プランで、主軸方向はN10°W前後に向くのであろう。周壁は10cm～20cmの高さに残り、北壁の中央部にカマドが設置されている。床面は堅緻だが、46号住居跡の北東部とともに東よりの部分は攪乱を受けている。床面を掘り込むピットのうちP5～P7が支柱穴であろう。直径20cm～35cm、深さ15cm～30cmの規模である。北東側の支柱穴は確認できなかった。

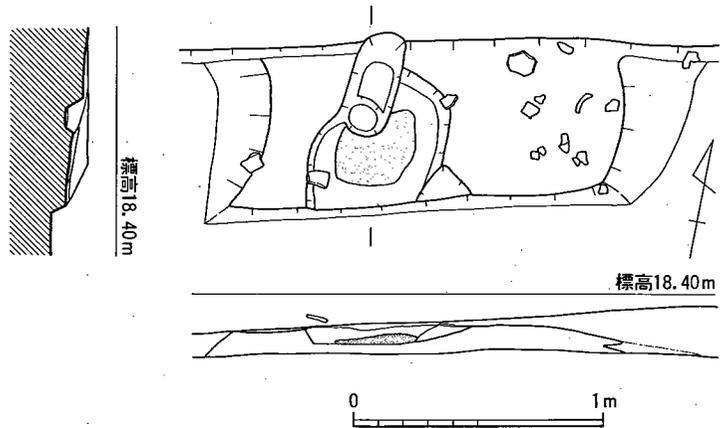
カマド (第111図)

前面を46号住居跡によって削られるが、全体に右袖側は焼土混じりの黄褐色粘土が広がって



第110図 46号住居跡カマド実測図 (1/30)

いて、カマドの壁が崩落したものとみられる。火床面は左右の住居床面と比べるとやや高いカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられる。右袖は残存長65cm、基底部幅30～40cmであろう、残高10cm弱、左袖は残存長65cm、基底部幅30～40cm、残高10cm弱を測る。燃焼室は45×45cm以上であろう。火床面はやや堅く



第111図 47号住居跡カマド実測図 (1/30)

締まるが、奥側に直径15cm、深さ5cm程の穴があって、支脚石の抜き跡と推定される。ただしこれにつながる長楕円形の凹みが煙道か否かはよく分からない。

出土遺物 (図版49、第112図)

須恵器甕(5) 外反する口縁部が端部で断面三角形に肥厚する破片で、復原口径17.2cmの大きさ。内外面ともに回転ナデ調整される。胎土に砂粒を含み、暗灰色に堅く焼成されている。

土師器甕(6) 殆ど肥厚せずに外反する口縁部をもつ甕で、胴部は膨らむ。復原口径11.6cmの大きさで、胴部外面は磨滅するがナデ調整らしい。胴部内面は頸部までヘラ削りされるが、粘土帯の継ぎ目が顕著に残る。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶橙色に焼成されている。

土師器椀(7・8) ともに口縁部は内彎して立ち上がる椀で器面はナデ調整される。7は復原口径17.4cm、器高5.1cm、8は復原口径18.0cm、器高4.6cmの大きさである。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、明茶褐色ないし明橙色に焼成されている。

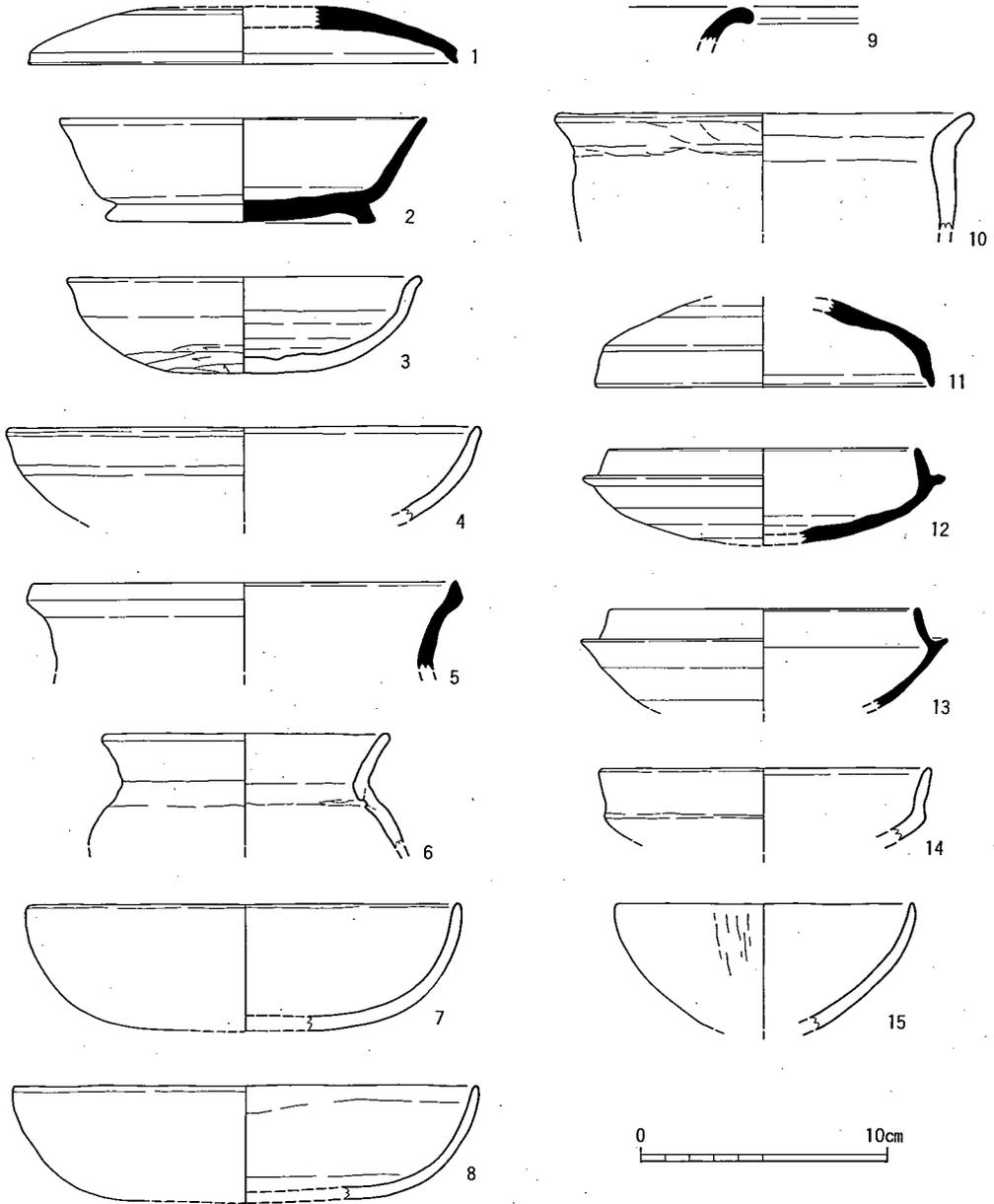
出土土器では、小破片で時期を特定し難いが、須恵器甕・土師器甕の特徴からみて6世紀後半以降であろう。

48号住居跡 (図版33-3、第109図、旧V-5住)

F-38区を中心に発見された住居跡で、46号住居跡と重複して切られる。47号住居跡とも重複するが、その前後関係は分からない。9号建物跡とも重複していて、これより先行する。プランは南北3.8m、東西4.2m程の不整長方形で、長軸方向はN61°E前後に向く。周壁は5cm強程の高さに残るが、北東部を46号住居跡によって削られ、カマドや炉跡の存在は確認できない。床面はやや堅く締まり、柱穴状ピットは7ヶ所確認したが、主柱穴はP8～P11であろう。直径20cm～50cm、深さ15cm～20cmの規模である。

出土遺物 (第112図)

須恵器片(9) 強めに外反する口縁部破片で内外面とも回転ナデ調整されるが、器形はよく分からない。砂粒を含む胎土で、淡灰色に焼成されている。



第112図 46~48・51・52号住居跡出土土器実測図 (1/3)

その他の住居跡内出土須恵器片・土師器片は特に特徴をもたず、この土器片のみでは時期を決め難いが、6世紀後半以降であろう。

49号住居跡 (図版3、付図、旧V-6住)

I-41区に発見された住居跡で、北側が調査区域外に続く。50号住居跡と重複してこれを切るが、水田床土を除去した面が遺構検出面であり、すでにかかなりの削平を受け、攪乱も多い。このため南東壁2.1mと南隅の輪郭は辛うじて分かるが、北側は分からない。不整形プランであろう、主軸方向はN40°E前後に向く。周壁は2cm程の高さに残るが、カマドや炉跡の存在は確認できない。攪乱を受けていない部分の床面はやや堅く、柱穴状ピットは3ヶ所確認したが、支柱穴は分からない。直径20cm~50cm、深さ10cm~25cmの規模である。

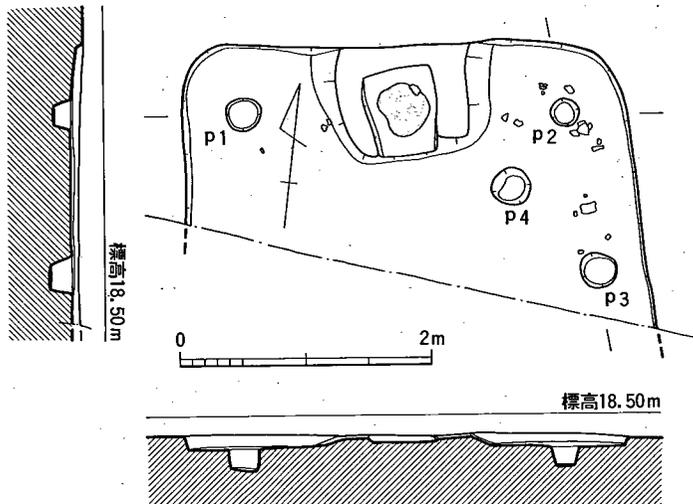
50号住居跡 (図版3、付図、旧V-7住)

I-40・41区に発見された住居跡で、北側を49号住居跡に切られる。水田床土直下の面が遺構検出面であり、既にかかなり削平を受け、攪乱も多い。検出できたプランは一辺2.9mの不整形形で、北側を失うが、主軸方向はN52°W前後に向く。周壁は2・3cmの高さに残り、カマドは、49号住居跡と重複する部分に焼土や黄褐色粘土塊が散乱することから、北西壁側に施設されていた可能性があろう。攪乱を受けていない部分の床面はやや堅いが、柱穴状ピットは確認できなかった。住居跡内の部分からは須恵器片・土師器片とガラス小玉が出土した。

出土遺物 (図版49、第86図)

ガラス小玉(2) コバルトブルーの色調を呈する、上下が平らな丸玉で、外径5.6mm、厚さ4.4mm、孔径1.4×1.7mmの大きさのガラス小玉である。

出土土器片では時期の特定はし難いが、須恵器片の内面に同心円当て具痕がみられるので、6世紀後半以降の可能性が高い。



51号住居跡 (図版34-1

・2、第113図、旧V-2住)

E-43区に発見された住居跡で、南側は調査区域外

第113図 51号住居跡実測図 (1/60)

に潜る。東西3.5m、南北2.3m以上の規模の不整形プランで、主軸方向はN⁹°W前後に向くのであろう。周壁は5cm～7cmの高さに残り、北壁の中央部にカマドが設置されている。床面は堅く締まり、床面を掘り込むピットは4ヶ所あるが、このうちP1とP2が主柱穴であろう。直径25cm、深さ15cm程の規模である。

カマド (図版34-3、第114図)

火床面が住居床面より僅かに高いカマドで、馬蹄形に壁を築いてつくられる。右袖は残存長80cm、基底部幅35～45cm、残

高5cm強、左袖は残存長85cm、基底部幅20～40cm、残高5cm強を測る。燃烧室は40×70cmの広さである。火床面は堅く締まるが、支脚石は確認できず、煙道もみられない。

出土遺物 (第112・161図)

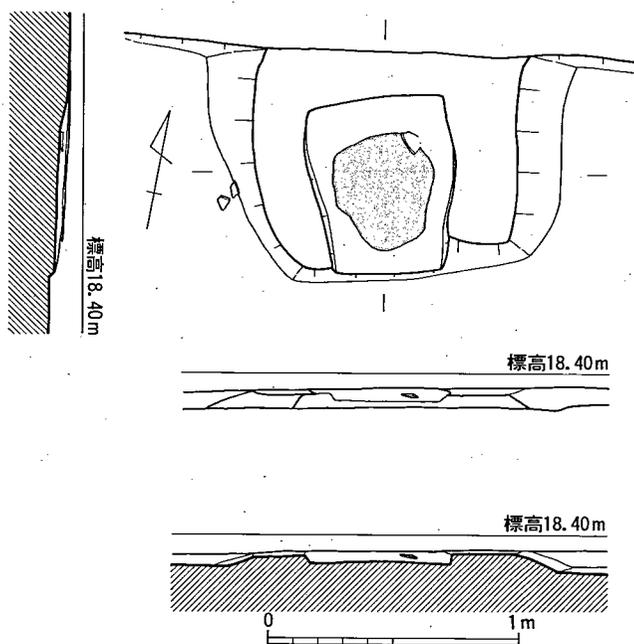
須恵器杯蓋 (第161図7) カマド部分から出土した口縁部破片である。復原口径14.0cm、残存器高2.9cmの大きさで、外面には灰の自然釉がかかる。胎土に細砂粒を含み、青灰色に焼成されている。

土師器甕 (10) 復原口径17.0cmの大きさの甕で、口縁部は肥厚せず外反する。胴部へは殆ど膨らまず、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されるが、口縁部内面に煤が付着している。

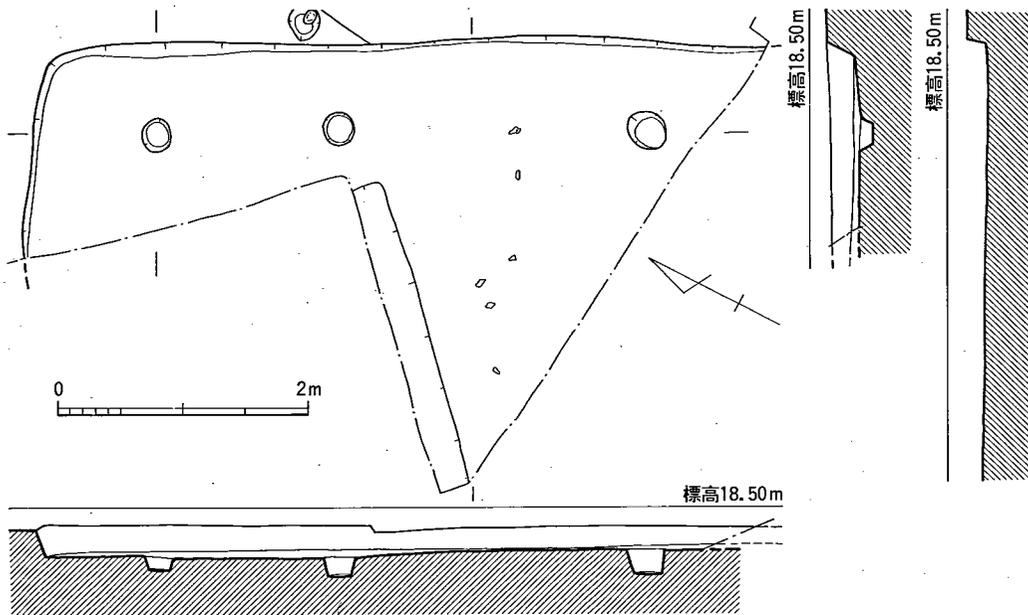
図示した土器では時期を特定し難いが、須恵器杯蓋は6世紀後半ないし末頃に含まれよう。この他に、須恵器の外面に平行叩き目、内面に同心円当て具痕のみられる甕胴部片や、内面にヘラ削り痕のある土師器甕片などがある。これらも6世紀後半以降であろう。

52号住居跡 (図版35-1、第115図、旧V-5住)

E・F-45区を中心に発見された住居跡で、V区調査区の南西端に相当して、大部分は調査区域外に潜る。北側隅部とそれに続く北東辺5.8m以上、北西辺1.7m以上の、不整形ないしは長方形プランであろう。主軸方向はN26°W前後に向く。周壁は10cm～15cmの高さに残るが、



第114図 51号住居跡カマド実測図 (1/30)



第115図 52号住居跡実測図 (1/60)

東部は試掘トレンチでやや削られる。床面はやや堅く締まるが、周辺は軟らかめである。柱状ピットは3ヶ所確認したが、いずれも直径20cm~30cm、深さ10cm~20cmの規模で支柱穴か否かは不明。カマドや炉跡の存在も確認できない。

出土遺物 (図版49、第17・112図)

須恵器杯蓋 (11) 身受けのかえりを有さない杯蓋で、復原口径13.6cmの大きさだが、天井部を欠く。天井部と口縁部の境には稜があり、口唇部内面に浅い段がみられる。胎土に砂粒を含み、灰色に焼成されている。

須恵器杯身 (12・13) 蓋受けのかえりを有する杯身で、12は復原外径14.5cm、器高3.9cm程の大きさで、口縁部は内傾して短めに立ち上がる。13は復原外径14.6cmの大きさで、口縁部はやや反りながら内に傾き、器高が高めである。いずれも胎土に砂粒を含み、灰青色・灰色に焼成されている。

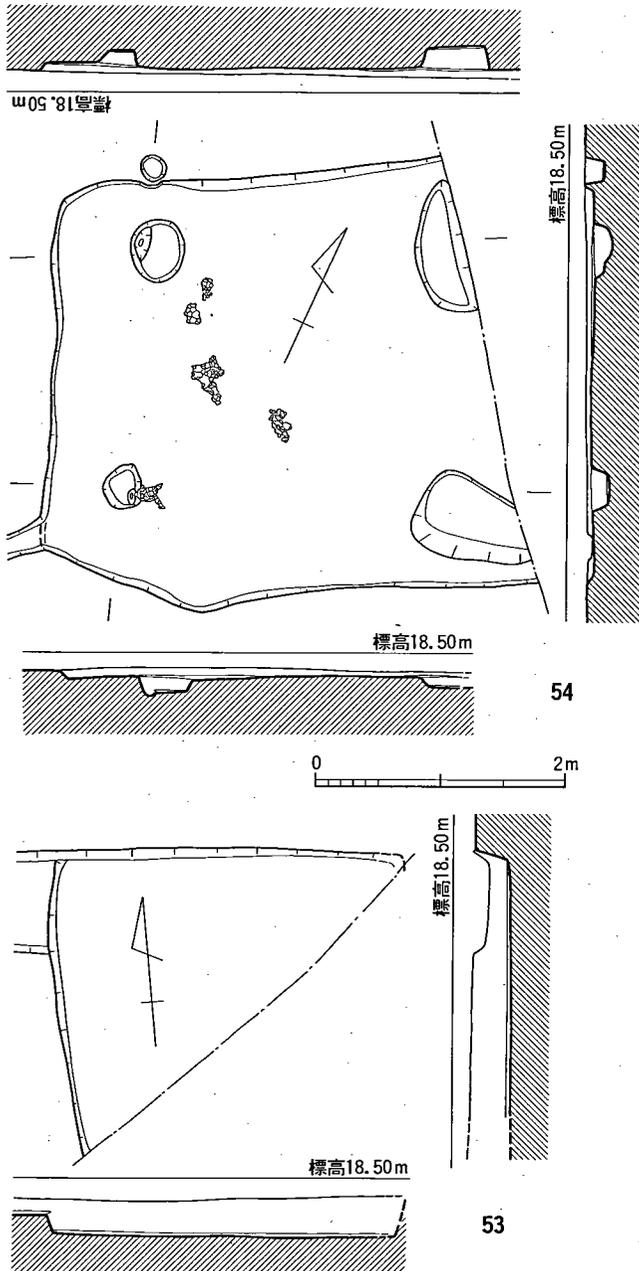
土師器杯 (14) 底部から段状に屈曲して口縁部が立ち上がる杯で、復原口径13.4cmの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗褐色に焼成されている。

土師器碗 (15) 手捏ね風にナデ調整され、内彎気味に開くが深さのある碗である。復原口径12.1cm、残存器高5.1cmの大きさ。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土製丸玉 (第17図16) 外径9.6mm×11.0mm、厚さ8.2mm、孔径1.3mmの大きさで、歪みの

ある丸玉で、細砂粒を含む胎土を用いて、淡明褐色に焼成している。

出土土器では、須恵器杯蓋・杯身の特徴から6世紀後半頃であろう。



第116図 53・54号住居跡実測図 (1/60)

53号住居跡 (図版35-2、第116図)

VI区調査区東端部のP-56区に発見された住居跡で、北東側は調査区域外に潜る。西側で9号溝と重複して削られるが、東西2.8m、南北2.5m以上の規模の不整形プランで、主軸方向はN⁰W前後に向くであろう。周壁は20cm~30cmの高さに残るが、床面の堅い面は不明瞭で、調査時に不用意に中央部を掘りすぎた。床面を掘り込むピットや、カマド・炉跡については分からない。

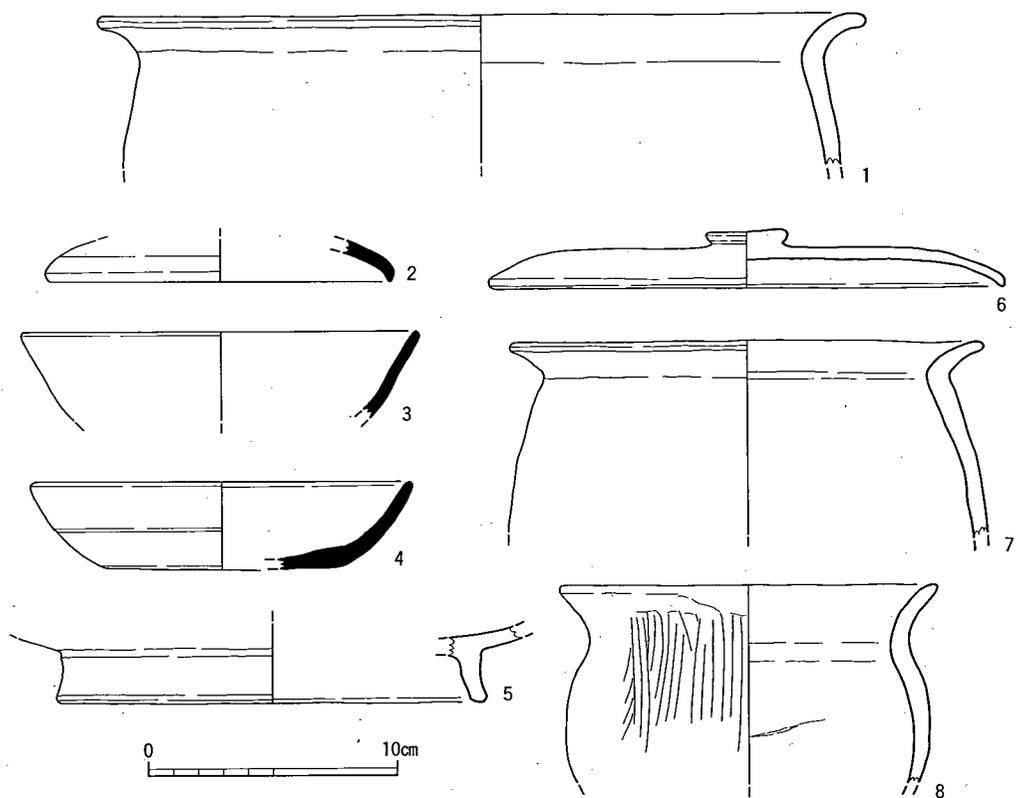
出土遺物 (第117図)

土器器甕(1) 復原口径30.8cmの大きさの甕で、口縁部は肥厚せず外反する。胴部へは殆ど膨らまず、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、淡橙色に焼成されている。

図示した土器では時期を特定し難いが、図示しない資料中には、内面に同心円当て具痕のある須恵器甕片もみられる。おそらく6世紀後半以降であろう。

54号住居跡 (図版35-3、第116図)

VI区調査区北東部のS-59区を



第117図 53～55号住居跡出土土器実測図 (1/3)

中心に発見された住居跡で、北東部は調査区域外に潜る。南北3.4m、東西3.9m以上の、不整長方形プランであろう。主軸方向はN60°E前後に向く。周壁は5cm前後の高さに残る。床面はやや堅く締まるが、攪乱もあり、周辺は軟らかめである。柱穴状ピットは4ヶ所確認したが、いずれも直径30cm～90cm、深さ10cm～20cmの規模で、東側の2ヶ所は主柱穴か否か不明。カマドや炉跡の存在も確認できない。床面に土師器甕片がまとまって出土したが、小破片になったものが多く、図示しえない例が多い。

出土遺物 (第117図)

須恵器杯蓋(2) 鳥嘴状の退化した鈍いかえりを有す杯蓋で、復原口径14.0cm程の大きさだが、天井部を欠く。胎土に砂粒を含み、灰色に焼成されている。

須恵器杯身(3・4) 3は僅かに外反する口縁部をもち、底部を欠くため高台の有無は分からない。細砂粒を胎土に含み、あまい焼成で淡い暗灰色を呈している。4は内彎気味に立ち上がる口縁部をもち、底部に高台をもたないが、器面が風化・磨滅して調整手法は不明。胎土に砂粒を含み、二次的な火熱を受けるが焼成もあまく、灰褐色を呈している。

土師器杯(5) 高さのある高台の付く底部破片で口縁部の形状は不明。復原高台径17.1cmの大きさ。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、暗灰茶褐色に焼成されている。

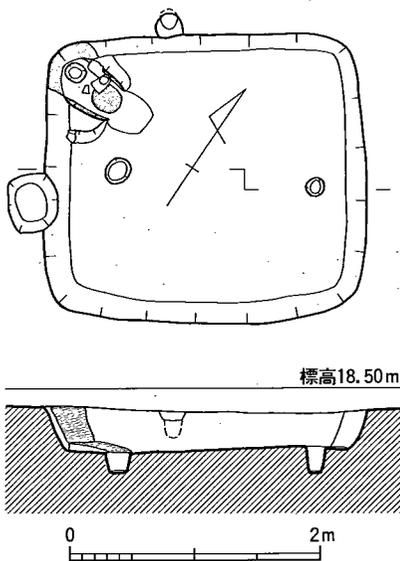
石 鏃(第32図14・15) 姫島産黒曜石製で、14は先端・基部ともに欠損するが、残存値で長さ1.7cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.7gを測る。凹基式で、全面に調整剝離が及び、側縁は鋸歯状をなす。15は長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重量2.3gを測る。五角形の平基式で両面に調整剝離が及ぶものの、一部主要剝離面が残る。

搔 器(第32図16) 姫島産黒曜石製の、尖頭器にもなりそうな形状の搔器で、長さ3.9cm、幅2.6cm、厚さ0.6cm、重量6.9gを測る。主要剝離面を残し、周縁の背面側全体に調整剝離が施される。

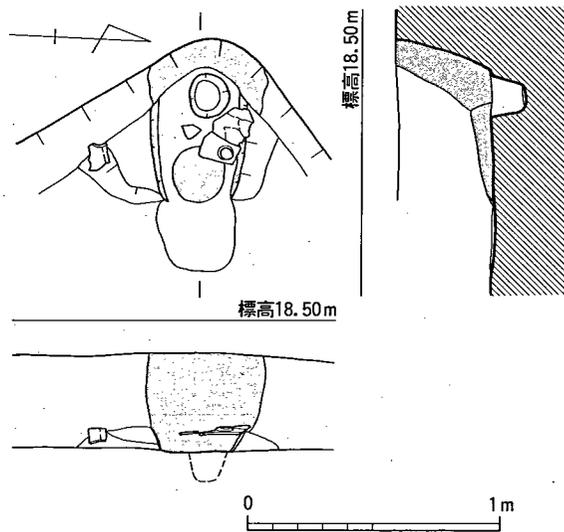
出土土器では、須恵器杯身・土師器杯ともに時期を確実にする特徴に不足するが、7世紀後半以降8世紀代の可能性が高いであろう。

55号住居跡 (図版36-1、第118図、旧VI-堅穴)

VI区調査区北部のS・T-60区に発見された住居跡で、長さ2.6m、幅2.3mの規模の不整形プランで、主軸方向はN56°Eに向く。規模が小さいことから調査当初は堅穴と判断して掘りさげたが、周壁は30cm～35cmの高さに残り、西側隅に付設されたカマドを発見して住居跡であることが分かった。床面は堅く締まり、支柱穴と推定されるピットが短辺壁の中央に近い位置に対峙して掘り込まれている。柱穴は直径10cm強と20cm、深さ20cmと16cmの規模である。



第118図 55号住居跡実測図 (1/60)



第119図 55号住居跡カマド実測図 (1/30)

なお、北西側壁のカマド寄りには直径20cm、深さ25cm程のピットが内側に傾く方向に掘り込まれているが、この住居跡に伴うのかは分からない。遺物は床面直上までの堆積土に全くみられなかったが、床面で破片資料が若干出土した。

カマド (図版36-2、第119図)

不用意に掘りさげた為に、袖部や上部を掘りすぎてしまったかも知れない。左袖部の長さ35cm、基部の幅20~30cm、高さ7cmで、右袖部の長さ37cm、基部の幅5~15cm、高さ8cmに残る。両袖には黄褐色の粘土が用いられ、内側は赤く焼けて、奥壁も焼けて赤化する。燃焼室は30cm×55cm程の広さをもつ。火床は住居の床面と同じ高さで、燃焼室の焚口側20cm程の部分がよく焼けている。支脚石はみられないが、奥壁際に直径15cm、深さ13cmの小ピットがあり、支脚石の抜き跡の可能性もある。焚口前には掻き出した焼土・木炭混じりの灰がみられ、火床と小ピットの間の上部から杯蓋片が出土した。

出土遺物 (図版50、第32・117図)

土師器杯蓋(6) 復原口径20.4cm、器高2.4cmの大きさの杯蓋で、口縁端部のかえりは鈍く僅かに内彎する程度である。外天井はヘラ削りされ、扁平なつまみが付く。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。カマド内から出土した。

土師器甕(7・8) 7は口縁部が殆ど肥厚せず、強めに外反する甕で、復原口径19.0cmの大きさ。なで肩に胴部へ膨らみ、磨滅が進むものナデとヘラ削りらしい痕跡が内外面にみられる。8は復原口径15.0cmの大きさの、口縁部が肥厚せずに緩やかに外反する甕で、胴部は丸く膨らむ。外面に縦方向のハケ目、内面の頸部下までヘラ削り痕がみられる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石などを含み、暗茶褐色・明橙褐色に焼成されている。7は床面直上、8はカマド付近から出土した。

石 鏃(第32図17) 先端と片脚を欠くが、残存値で長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.75gを測る、姫島産黒曜石製の打製石鏃である。凹基式で全面に調整剝離が及ぶ。

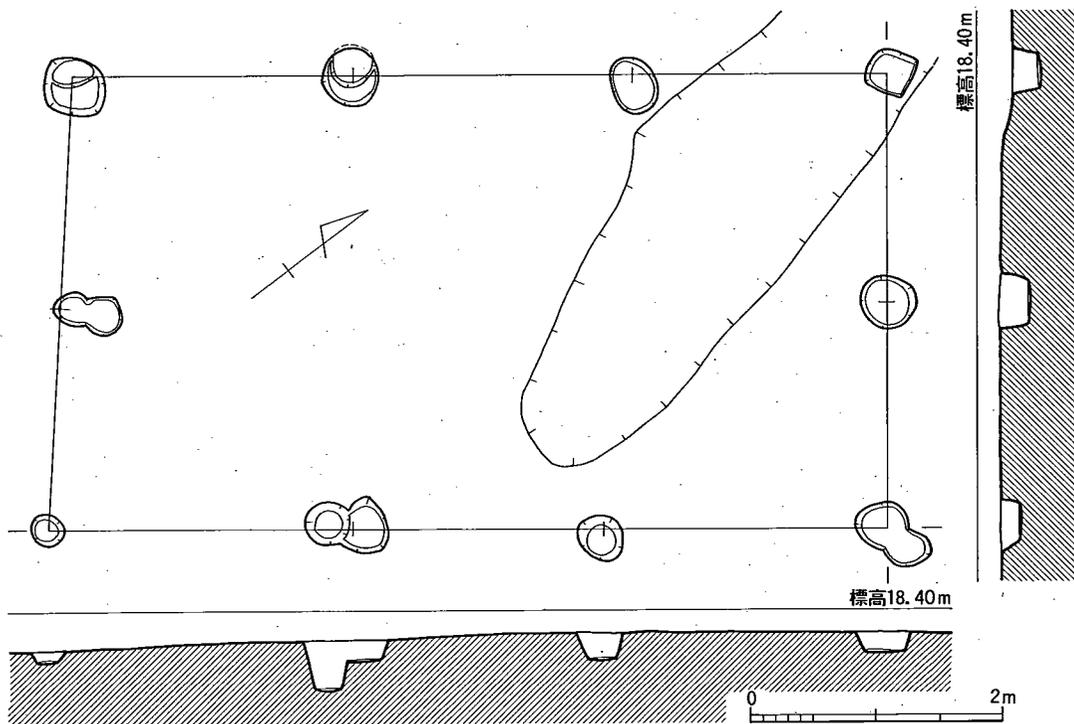
出土土器では、土師器杯蓋の特徴から8世紀中頃を過ぎる時期の可能性が高い。

2. 掘立柱建物跡

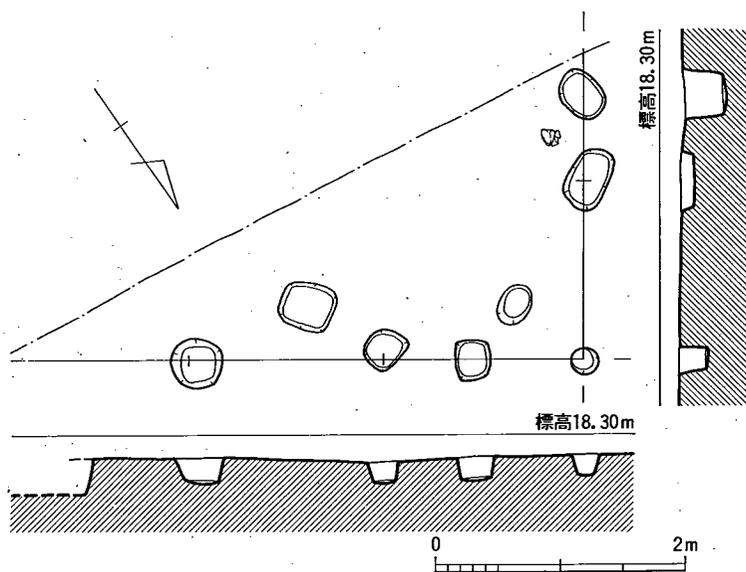
掘立柱建物跡は、9棟発見された。この他にも柱穴状ピットが多数発見されていて、建物を構成する柱穴も存在した可能性は高いが、調査時に見過ごした例もある。特に上層部を剥ぎ直したIV区ではその心配は否めない。

1号建物跡 (図版52-1、第120図)

I区北東部にあり、7号住居跡の南西側に位置して、北端の柱穴は上部を攪乱坑で削られる。



第120图 1号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第121图 2号掘立柱建物跡实测图 (1/60)

主軸をN37°Eに向ける2×3間の建物で、梁間3.60m、桁行6.70mの大きさ。柱穴は直径30cm～50cm、深さ10cm～40cmの規模で、柱痕は確認できなかった。

2号建物跡 (第121図)

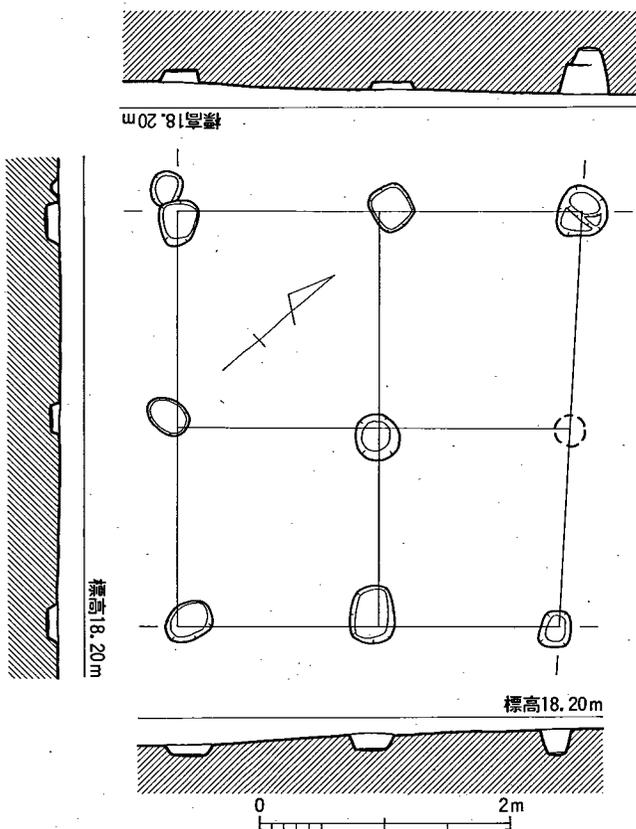
Ⅲ区南端のC-18・19区にあり、25号住居跡の南側に位置して、南半部は調査区域外に潜る。主軸をN55°Eに向ける1+α?×2+α?間の建物で、梁間柱間2.10m×?、桁行柱間1.60m×2+α?間の大きさ。柱穴は直径20cm～40cm、深さ15cm～30cmの規模で、柱痕は確認できなかった。柱穴内から遺物は出土しなかった。

3号建物跡 (第122図)

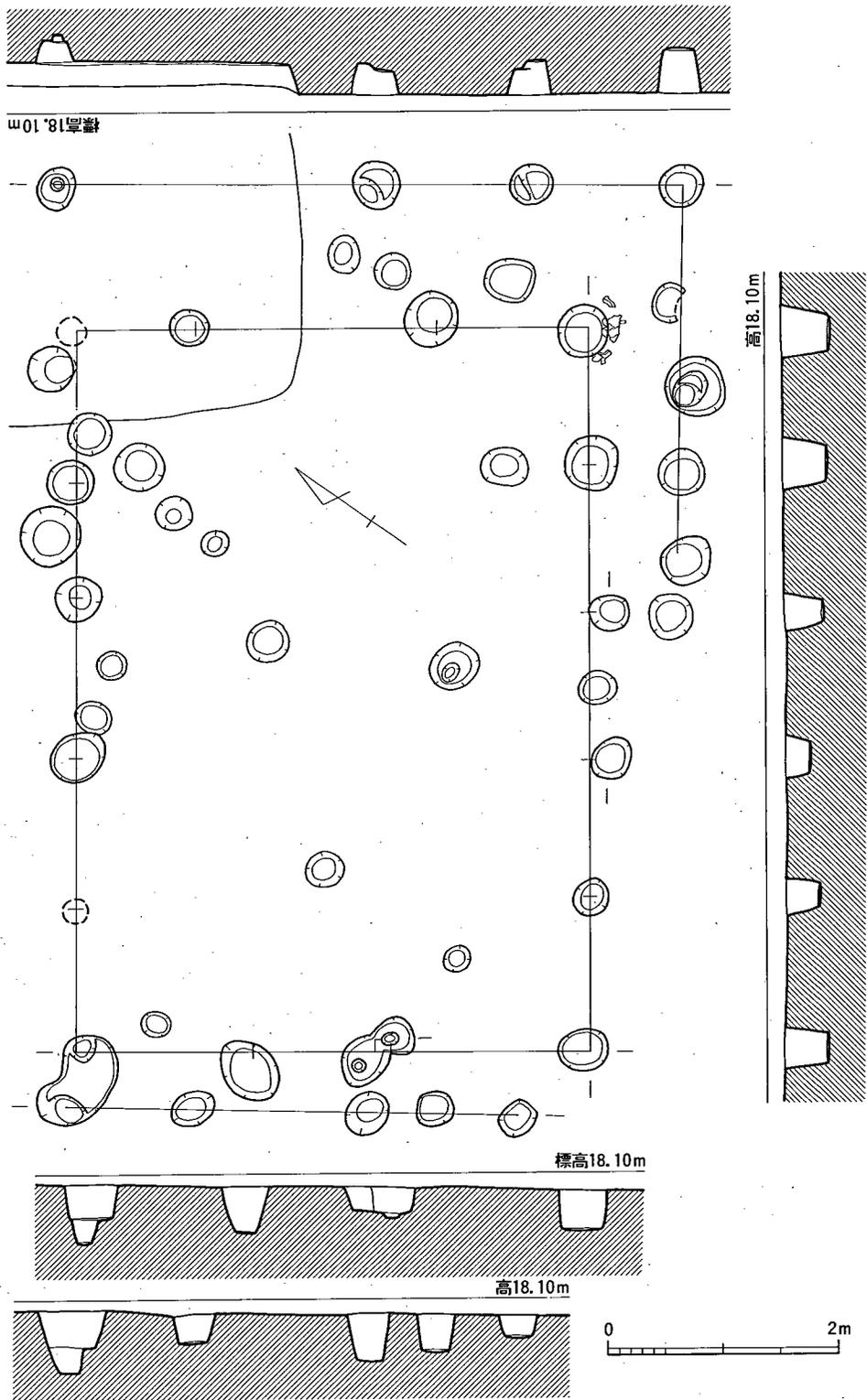
Ⅲ区西部にあり、28号住居跡の南西部に重複して住居跡より後出する。柱穴のうち1ヶ所は確認しえなかったが、主軸をN49°Wに向ける2×2間の総柱建物で、梁間3.25m、桁行3.35mの大きさ。柱穴は直径25cm～35cm、深さ10cm～40cmの規模で、柱痕は確認できなかった。柱穴内からはなんらの遺物も出土しなかった。

4号建物跡 (第123図)

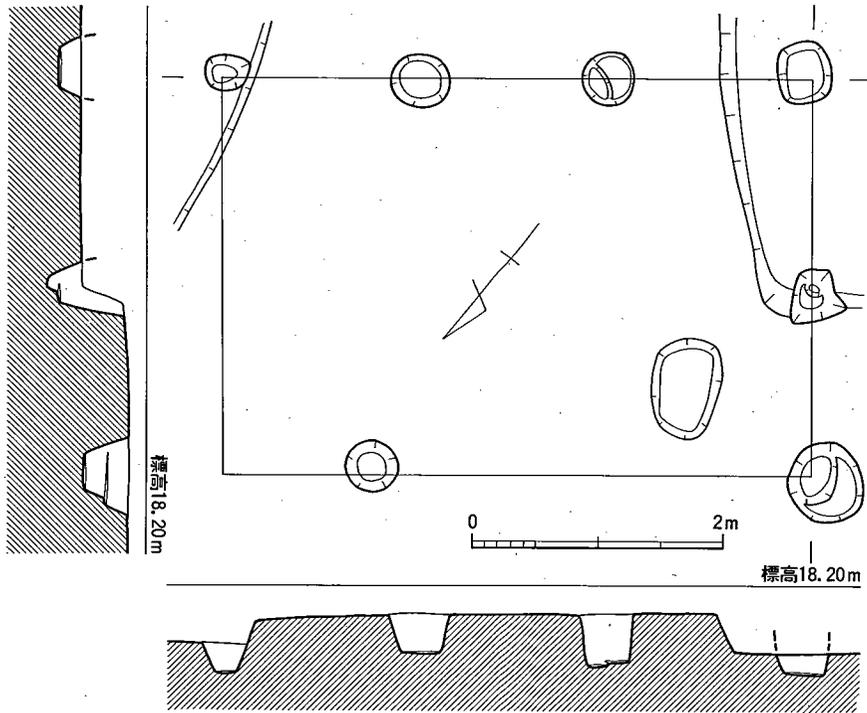
Ⅳ区北部にあり、40号住居跡の南部に重複するが住居跡との先後関係は不明。柱穴のうち2ヶ所は確認しえなかったが、主軸をN55°Eに向ける3×5間の建物で、梁間4.45m、桁行6.35mの大きさ。柱穴は直径30cm～50cm、深さ20cm～50cmの規模で、やや不規則に並び一直線に通らず、柱痕も確認できなかった。また北東辺から南東辺と、



第122図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第123图 4号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第124図 5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

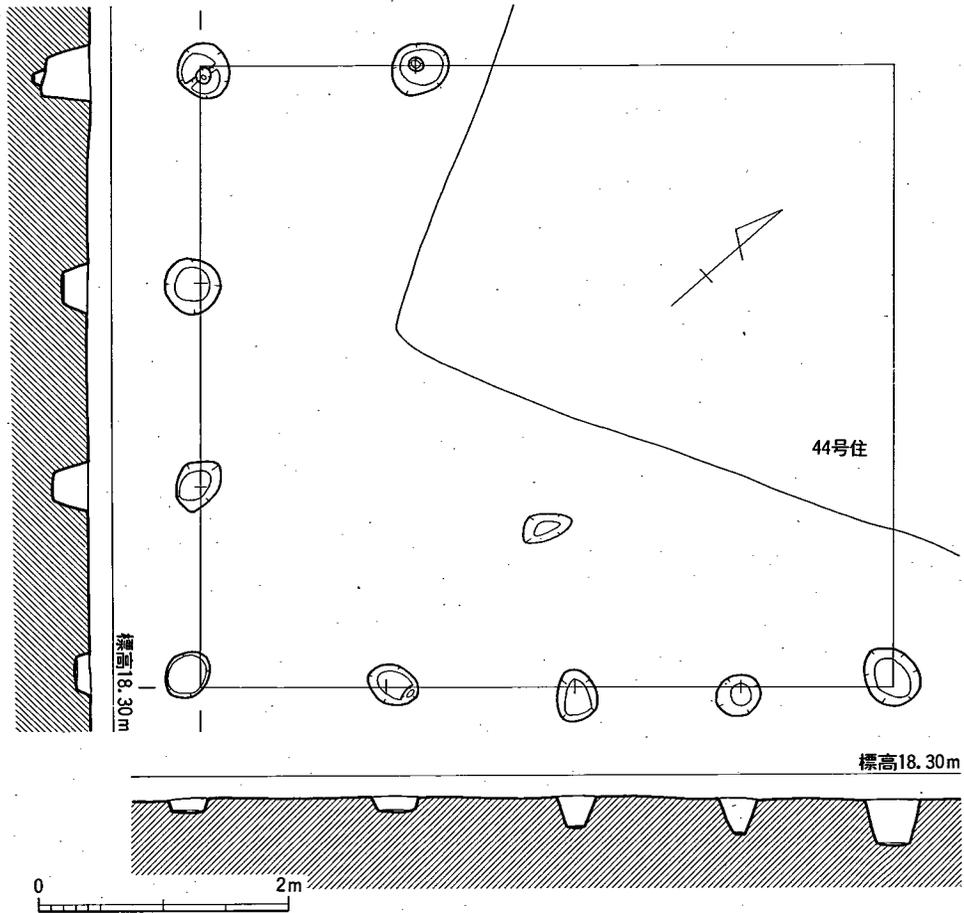
南西辺に沿って別の柱穴列があり、建て替えや重複が予想されるも、配列などはよく分からない。東寄りの柱穴壁には重複する土器溜まり遺構の土器が露呈するものの、それ以外に柱穴内からはなんらの遺物も出土しなかった。

5号建物跡 (図版4、第124図)

Ⅳ区中央部にあり、42号・43号・44号住居跡に挟まれて位置し、42号・43号住居跡と重複するが、住居跡より後出する。柱穴のうち3ヶ所を確認しえなかったが、主軸をN51°Eに向ける2×3間の建物で、梁間3.20m、桁行4.70mの大きさ。柱穴は直径30cm～60cm、深さ30cm～60cmの規模で、柱痕は確認できなかった。柱穴内からはなんらの遺物も出土しなかった。

6号建物跡 (図版4、第125図)

Ⅳ区中央部にあり、44号住居跡と重複し、切られて北側を失う。柱穴のうち5ヶ所を確認しえなかったが、主軸をN41°Eに向ける3×4間の建物で、梁間4.95m、桁行5.60mの大きさ。柱穴は直径30cm～45cm、深さ10cm～40cmの規模で、西側の一部柱穴以外では柱痕は確認できなかった。また柱穴内から遺物は出土しなかった。



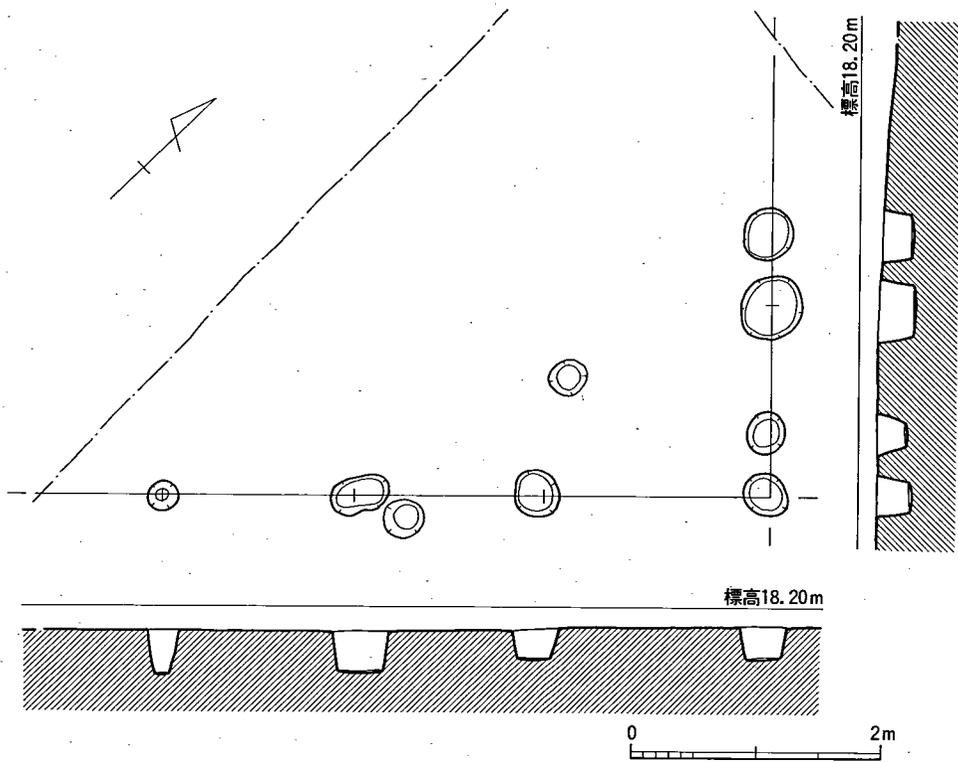
第125図 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

7号建物跡 (図版4、第126図)

IV区北端部にあり、44号住居跡の北側に位置し、北西部は調査区域外に潜る。主軸をN44°Eに向ける $2 + \alpha \times 3 + \alpha$ 間の建物で、梁間 $2.10\text{m} \times 2 + \alpha$ 、桁行 $4.85\text{m} + \alpha$ の大きさ。柱穴は直径25cm~40cm、深さ20cm~35cmの規模で、柱痕は確認できなかった。また柱穴内から遺物は出土しなかった。

8号建物跡 (図版52-3、第127図)

V区中央部にあり、46号・48号住居跡の西側に重複して位置し、住居跡より後出する。主軸をN83°Eに向ける 3×6 間の建物で、梁間5.25m、桁行10.50mの大きさ。柱穴は直径25cm~50cm、深さ20cm~45cmの規模で、柱痕は直径10cm強である。柱穴内からは、土師器甕片・

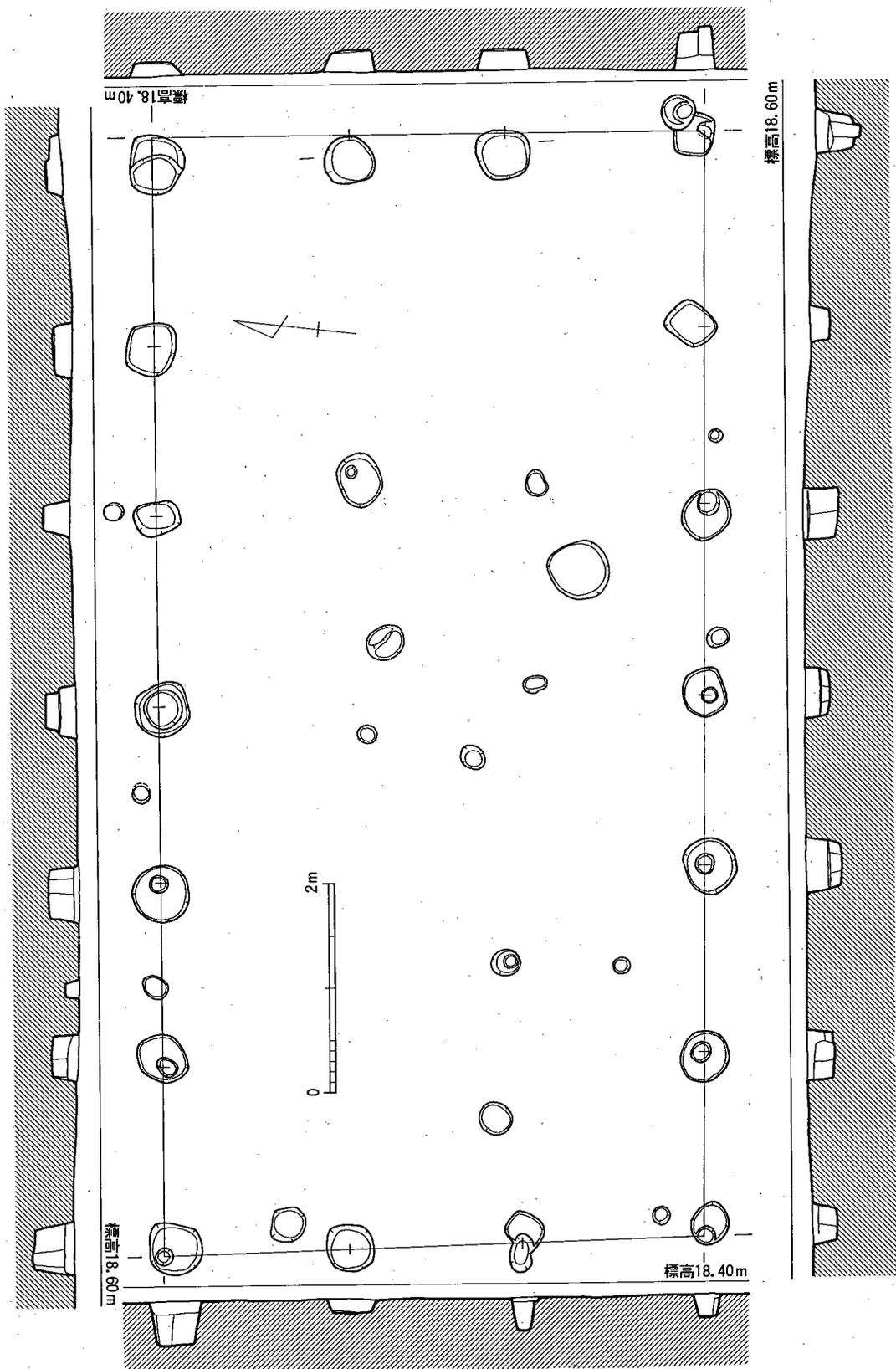


第126図 7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

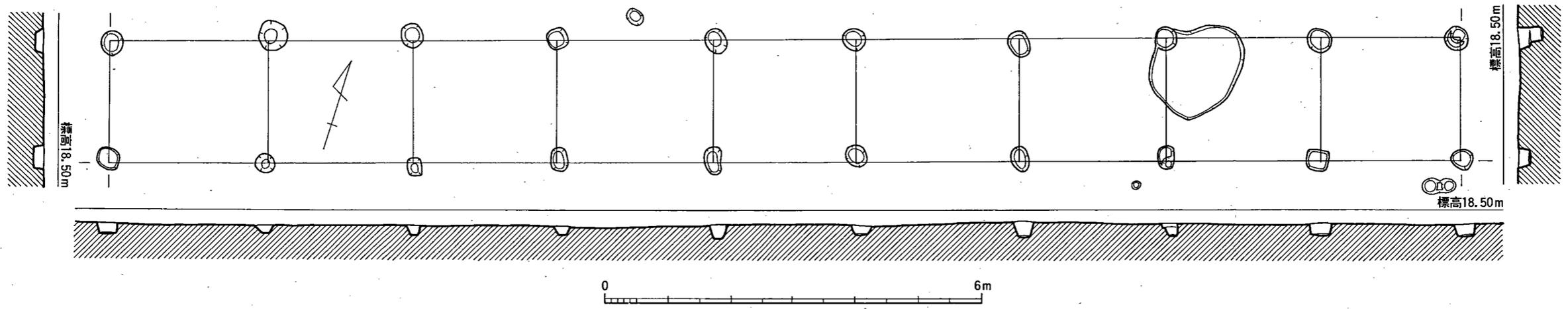
須恵器杯片などが出土しているが、いずれも小破片で図示しえない。破片の特徴からは7世紀後半以降の年代が与えられる。

9号建物跡 (図版52-2、第128図)

I区東半部に位置し、5号・6号住居跡の北側に重複して、住居跡より後出する。主軸をN72°Eに向ける1×9+α間の建物で、東側の旧県道敷下に続く可能性もある。現況では梁間2.00m、桁行21.60mの大きさ。柱穴は直径25cm～45cm、深さ15cm～37cmの規模だが、柱痕は確認できなかった。柱穴の中心部で計測すると、桁行柱間は230cmと250cm前後の2種類がみられる。柱穴内には縄文土器片や古式土師器片が若干出土している。しかし、5号・6号住居跡よりも後出することから、これらの遺物はすべて混入品であり、住居跡より時期的に下る遺物は確認できなかった。



第127図 8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第128図 9号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

3. 土 壙

土壙は21基発見された。この他にも攪乱坑と区別のつかない不整形な土坑も多数みられるが、除外している。

1号土壙 (第129図)

I区南東隅部のA4区で発見された不整円形の土壙である。長径110cm、短径90cm、深さ7cmの大きさで、主軸方向N5°E前後に向く。壙内西側で土師器甕片が出土したが、小破片で図示しえない。5世紀以降であろう。

2号土壙 (第129図)

I区東端部のB4区で発見された不整楕円形の土壙である。長径260cm、短径135cm、深さ9cmの大きさで、主軸方向N60°E前後に向く。壙内中央で扁平石が出土したほか、土師器小破片も出土したが、図示しえない。5世紀以降であろう。

3号土壙 (第129図)

I区東端部のC5区で発見された不整円形の土壙で、9号建物跡の柱穴に西端部を掘り込まれる。長径160cm、短径135cm、深さ5cmの大きさで、主軸方向N26°E前後に向く。壙内からは特に遺物の出土がみられなかった。

4号土壙 (第129図)

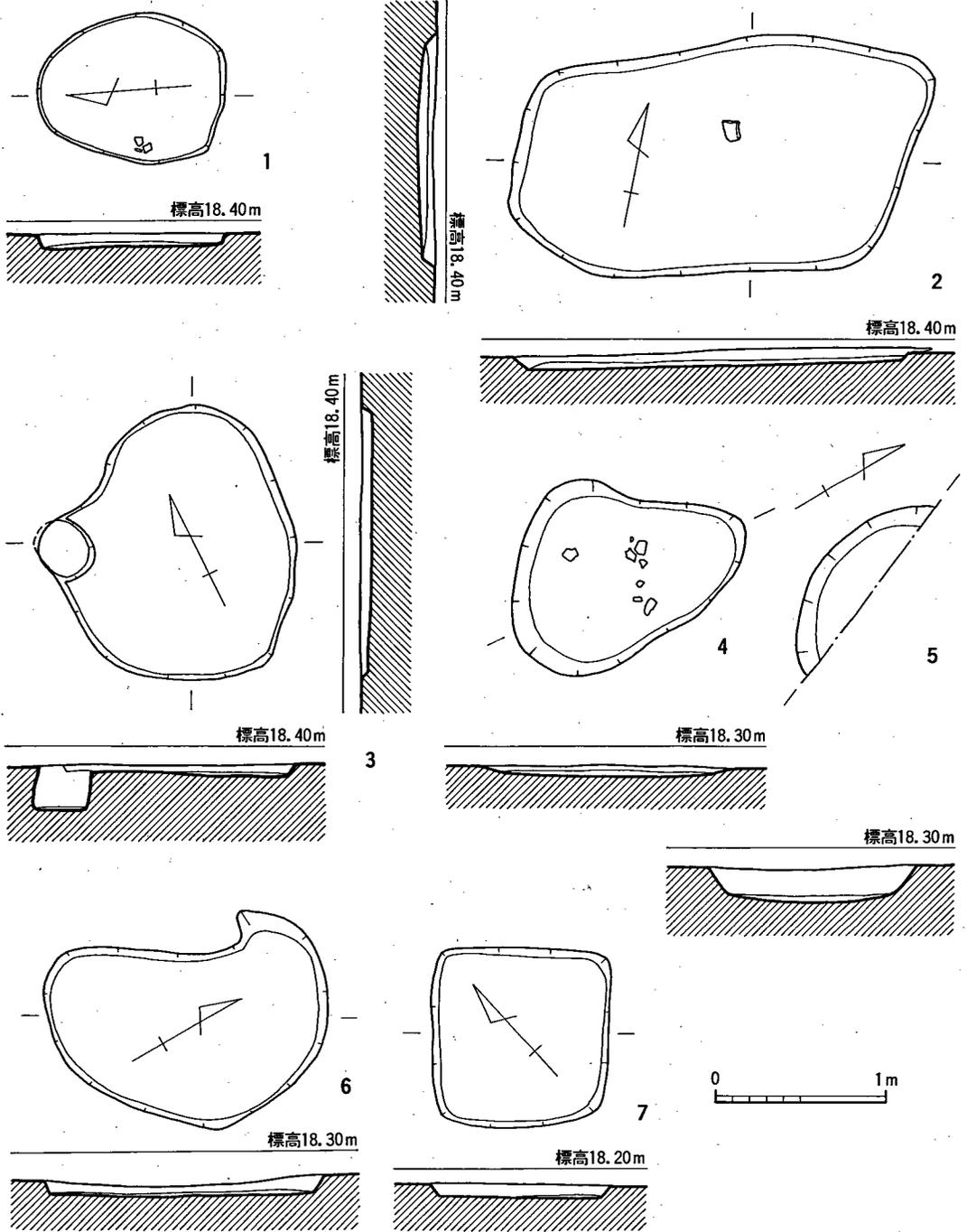
I区東端部のE5区で発見された不整円形の土壙である。長径145cm、短径105cm、深さ6cmの大きさで、主軸方向N5°E前後に向く。壙内からは、土師器片・打製石斧片・安山岩剥片などが出土した。土師器片は6世紀後半頃であろう。

5号土壙 (第129図)

I区東端部のE4区で発見された土壙で、大半は旧県道下の非調査区域に潜る。不整円形プランであろうか、径120cm以上、深さ20cm程が調査区端で確認される。壙内から遺物は出土していない。

6号土壙 (第129図)

II区東端部のG7区で発見された不整楕円形の土壙である。長径165cm、短径110cm、深さ

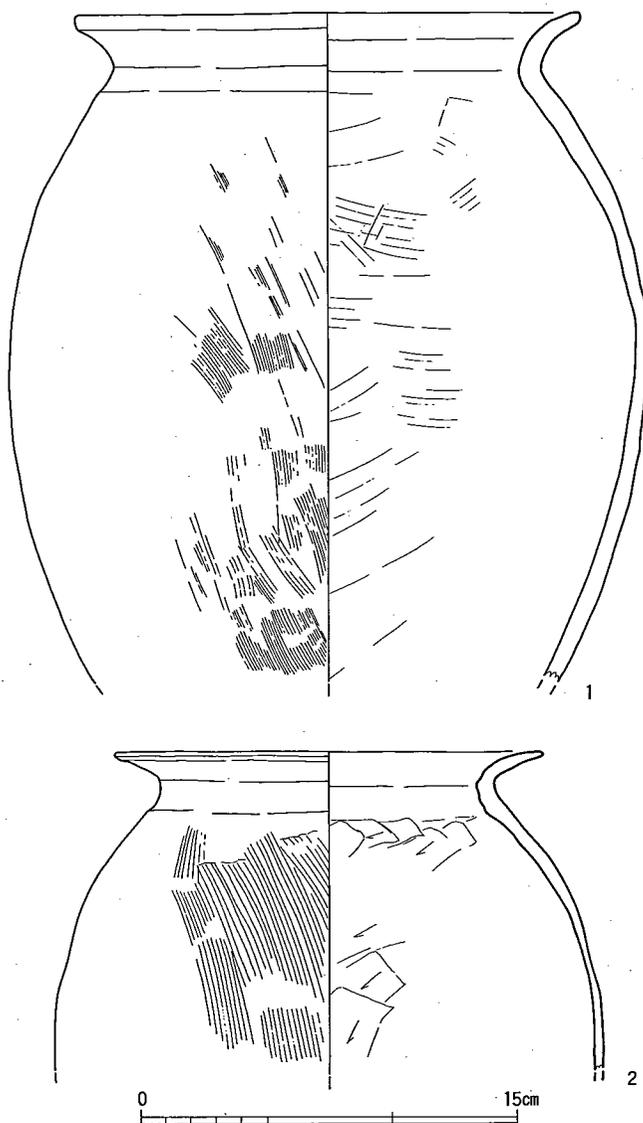


第129図 1～7号土坑実測図 (1/40)

10cmの大きさで、主軸方向N30°E前後に向く。壙内からは、土師器片・縄文土器片などが出土した。

出土遺物（図版56、第130図）

土師器甕(1・2) 1は口径20.0cm、残存器高27.0cm、胴最大径27.4cmの大きさの甕で、口縁部は外反し、端部は丸味をもっておさまる。胴部は長胴で、外面をハケ目、内面の頸部下までハケ目原体でヘラ削りのように板ナデされるがハケ目が残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明茶褐色に焼成されるが、外面の胴下半部に煤が付着する。2は口径17.2cm、残存器高12.8cm、胴最大径22.0cmの大きさの甕で、口縁部は強く外反して、端部は丸くおさまる。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部下までヘラ削りされて器壁は薄い。胎土に細砂粒・



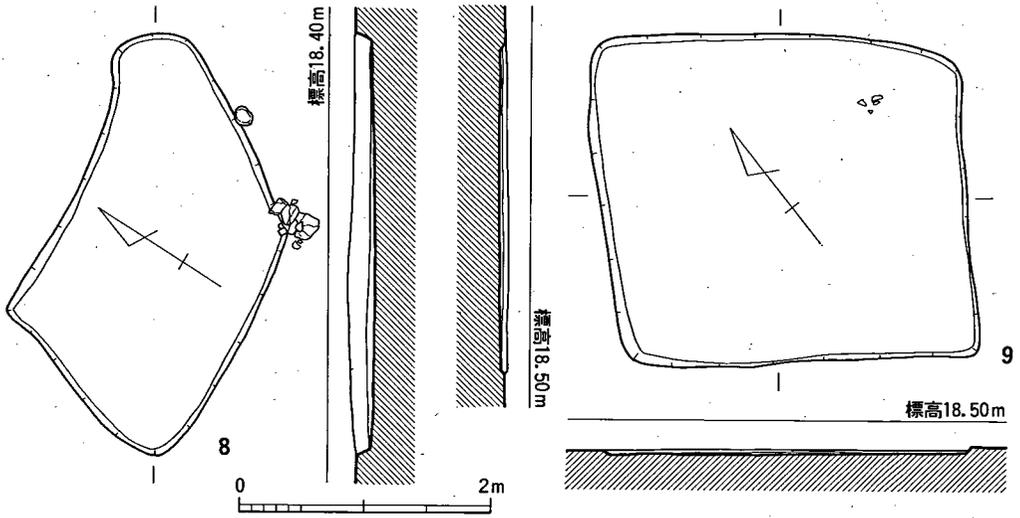
第130図 6号土壙出土土器実測図(1/3)

角閃石・赤褐色粒・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されるが、外面に煤が付着する。

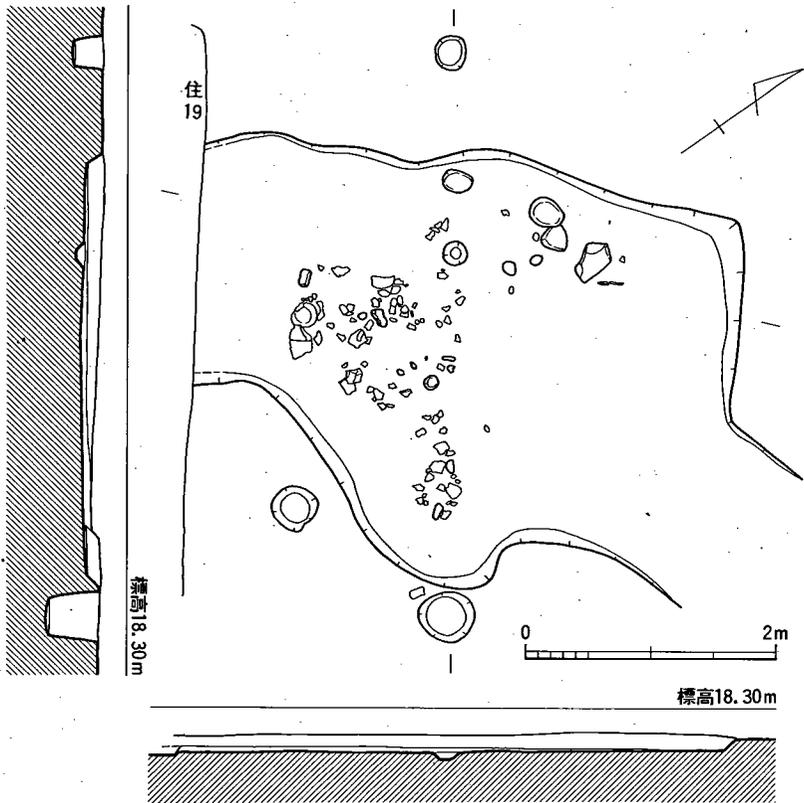
これらの土器は4世紀後半頃に含まれるであろう。

7号土壙(第129図)

Ⅱ区東南部のG8・9区で発見された不整形の土壙である。長さ107cm、幅105cm、深さ5cmの大きさで、主軸方向N42°E前後に向く。壙内からは、4世紀後半頃の土師器片が出土し



第131図 8・9号土塙実測図 (1/60)



第132図 10号土塙実測図 (1/60)

た。

8号土壙 (第131図)

I区北部のE9区で発見された不整形楕円形の土壙である。8号住居跡の北側に位置する。上縁で長さ340cm、幅180cm、深さ20cmの大きさで、主軸方向N57°E前後に向く。壙内からは、縄文土器片のほかに土師器小破片が出土した。土師器片は4世紀後半頃であろう。なお、土壙南壁縁に発見された土器も縄文土器片である。

9号土壙 (第131図)

I区東南部のB5区で発見された不整形の土壙で、6号住居跡の南側に位置する。上縁で長さ295cm、幅265cm、深さ6cmの規模で、主軸方向N52°W前後に向く。壙内からは、縄文土器片のほかに土師器小破片が出土した。土師器片は4世紀代であろう。

10号土壙 (第132図)

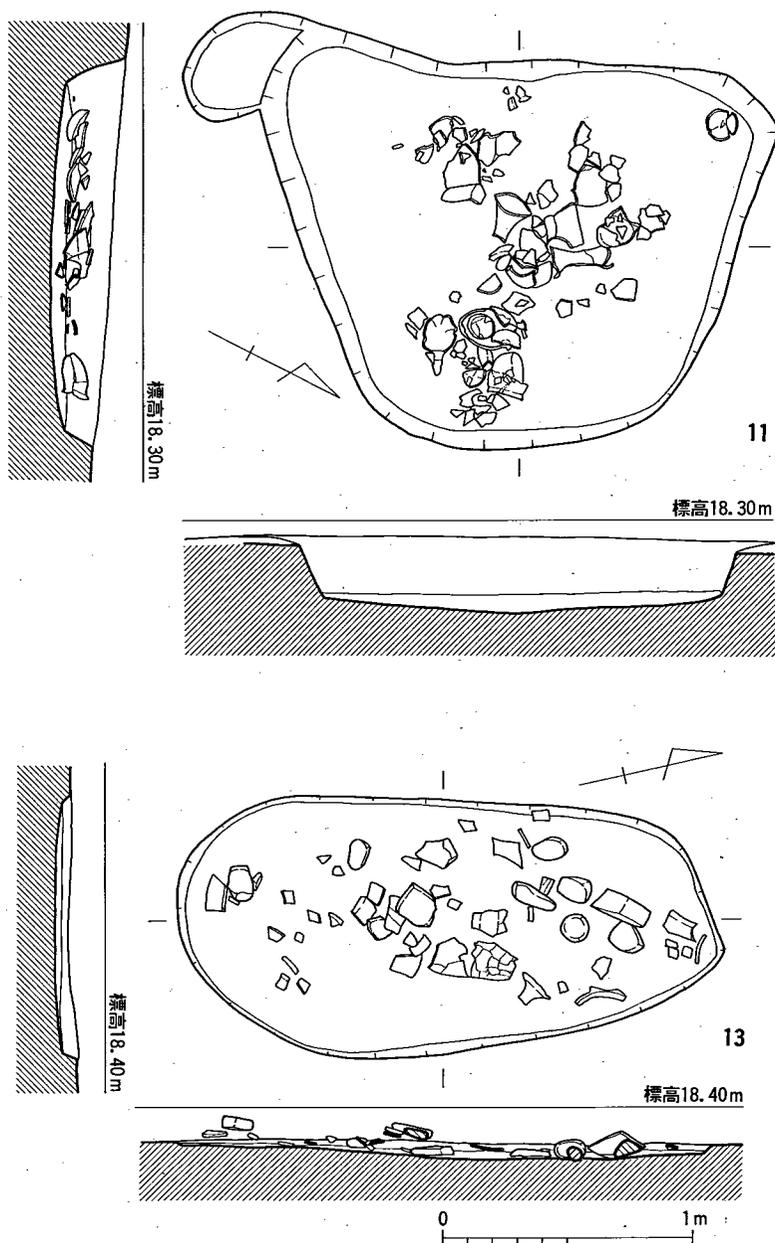
II区南西部のE14区で発見された不整形の土壙で、19号住居跡の北東側に位置して、19号住居跡に西側を切られる。上縁で長さ435cm+ α 、幅350cm、深さ15cmの規模で、主軸方向N45°E前後に向く。土壙の両側には対峙する位置に柱穴状のピットがあり、450cmの間隔がある。ピットは直径と深さがそれぞれ25cmと40cmの大きさである。壙内には、縄文土器片が多数と土師器甕片が含まれていた。この土師器甕片は器壁の薄いもので、外面ハケ目、内面ヘラ削りされるもので、3世紀代の可能性がある。

11号土壙 (図版53-1、第133図)

II区西端部のE15区で発見された不整形の土壙で、19号住居跡の北側に位置する。上縁で長さ205cm、幅155cm、深さ15~30cmの規模で、主軸方向N28°W前後に向く。壙内中央部の床面から少し浮いた位置を中心に投げ込まれたような状態に土器がまとまって発見された。

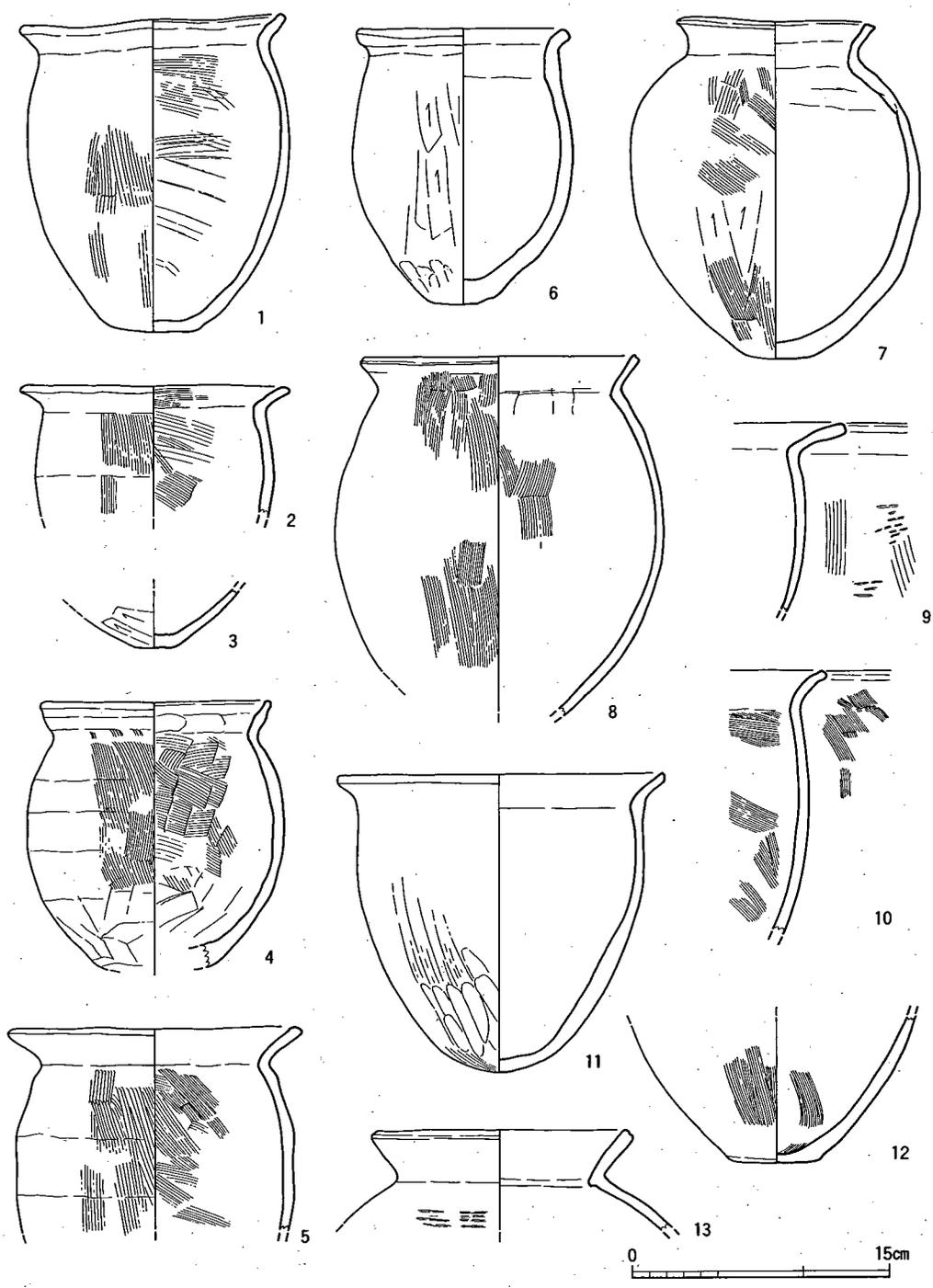
出土遺物 (図版56、第134図)

甕(1~14) 11は口縁部が僅かに肥厚し外反する甕で、胴部は緩やかに膨らみ、凸レンズ状の底部をもつ。復原口径15.5cm、器高18.2cm、胴最大径15.3cmの大きさ。2は口縁部が強めに外反して、胴部があまり膨らまない甕で、復原口径15.6cmの大きさ。胴部は内外面ともにハケ目調整がみられるものの、下半部はむしろ板ナデ調整である。3は2と同一個体だがうまく接合しない。小さな平底をもち、外面にヘラ削りに似た板ナデ調整がみられる。胎土に1は角閃石・赤褐色粒を、2・3は細砂粒・角閃石を含み、黄褐色・暗黄茶色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

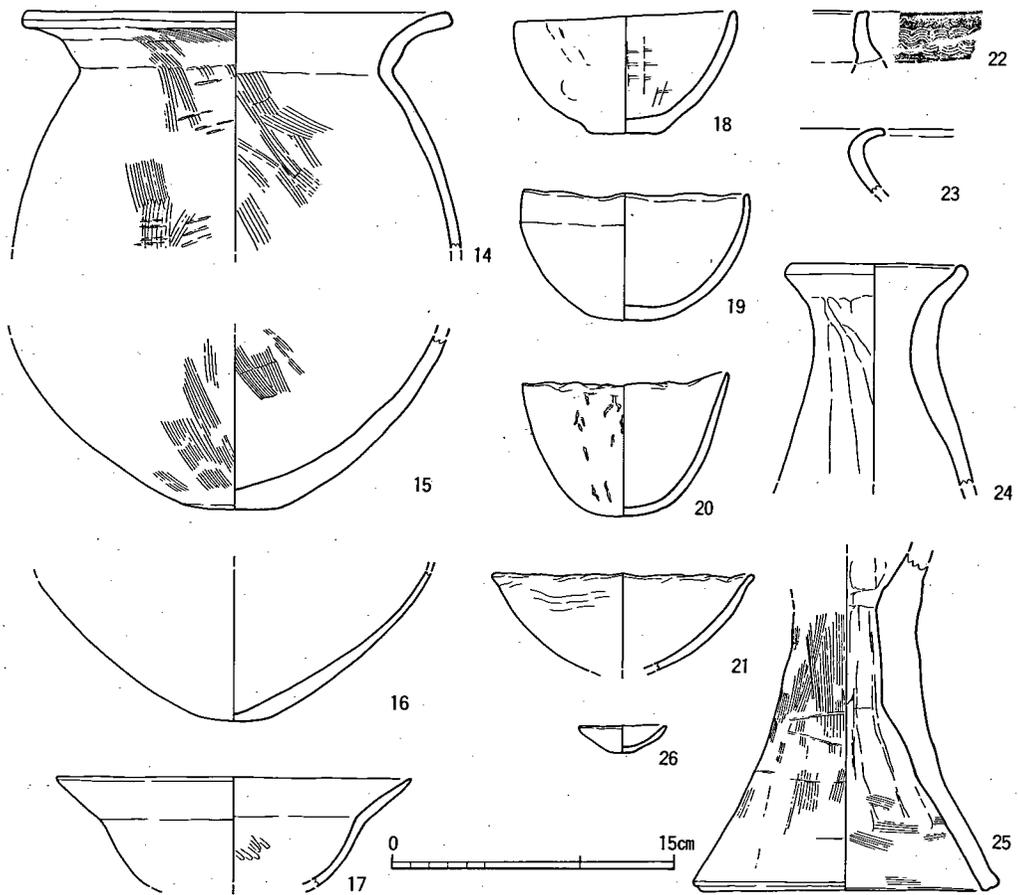


第133図 11・13号土坑実測図 (1/30)

4は胴部が丸味をもって膨らむ甕で、口縁部は外反するが端部でつままれて凹みをもつ。口径13.3cm、残存器高15.7cm、胴最大径14.9cmの大きさで、底部は凸レンズ状に膨らむ。胴部内外面はハケ目調整されるが、下半部は内外ともヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤



第134图 11号土坑出土土器实测图1 (1/4)



第135図 11号土壙出土土器実測図2 (1/4)

褐色粒を含み、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

5・8~10・14は口縁部が外反して、端部は肥厚気味に面をなすもので、胴部は緩やかに膨らむが、10の外反は他の2例よりも緩やかで、9・14はやや強めである。5は復原口径17.0cm、胴最大径16.0cmの大きさ、8は復原口径16.0cm、胴最大径18.9cmの大きさ、14は復原口径23.4cmの大きさである。いずれも、胴部内外面ともハケ目調整され、9・14は肩部に平行叩き目を残している。細砂粒・角閃石を多めに赤褐色粒なども胎土に含んで、茶褐色・橙褐色ないし暗黄褐色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

6は口径11.8cm、器高16.1cm、胴部最大径12.7cmの大きさの甕で、口縁部は短く外反し、胴部は僅かに膨らみ、底面は凸レンズ状を呈する。全体に器壁が厚く、胴部外面は板ナデ調整、内面はナデ調整されて、外底部付近には指頭圧痕が残る。胎土に細砂粒を多く角閃石・赤褐色粒などを含み、淡茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

7は口径10.6cm、器高19.8cm、胴部最大径16.7cmの大きさの甕で、口縁部は外反して端部に面をもつ。胴部が膨らみ、底面は凸レンズ状をなして、全体に器壁は厚い。胴部外面はハケ目と板ナデ、内面はナデ調整され、頸部内面に粘土の継ぎ目が残る。胎土に細砂粒を多く角閃石・赤褐色粒などを含み、黄褐色に焼成される

9は膨らまない胴部をもつ甕で、外反する口縁部が付く。口径18.7cm、器高17.5cm、胴最大径16.5cmの大きさで、胴下半部は砲弾形に近い。胴部外面は板ナデされるが底部付近はヘラ削り状を呈していて、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

12はやや凸レンズ状の底面をもつ胴下半部で、胴部内外面にハケ目がみられ、上部は9・14のような形になるものと思われる。胎土に細砂粒を多く角閃石・赤褐色粒などを含み、明茶褐色に焼成されるが、外面に煤、内面にお焦げが付着する。

13は口径15.0cmの大きさで、口縁部が直線的に短く開き、肩部外面に平行叩き目を残す。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。

壺(15・16・22・23) 15・16は凸レンズ状の底面をもった胴下半部で、16の器面は磨滅も進んでよく分からないが、15は胴部内外面にハケ目がみられる。15の胎土に細砂粒が多くみられるが、どちらも角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。22は複合口縁の、反りながら立ち上がる口縁部破片である。外面に波状文が描かれていたようである。23は小破片で分かりにくい、口縁部が強く外反するもので、やや小形の壺であろうか。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

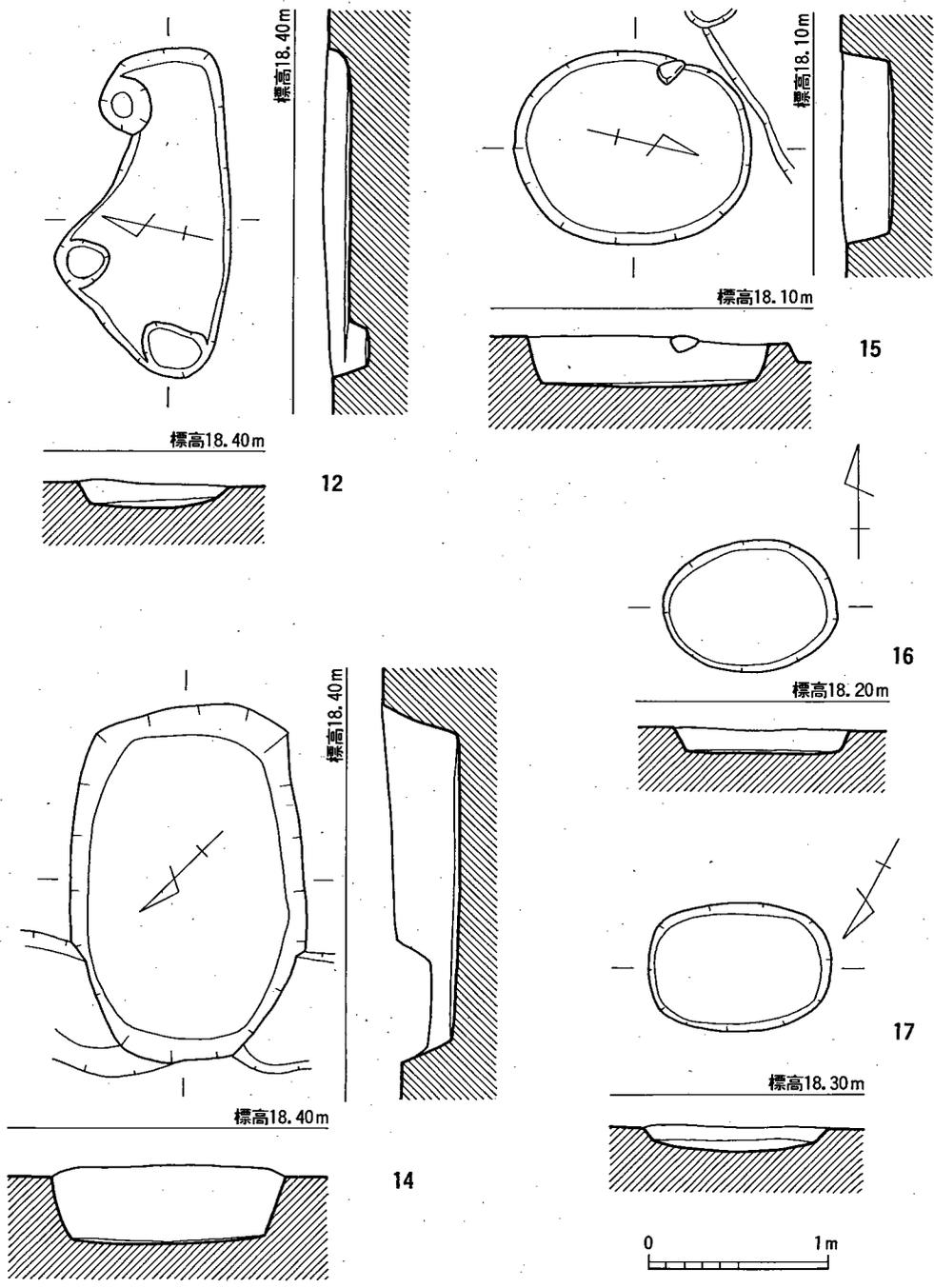
高杯(17) 復原口径19.0cmの大きさの杯部破片で、器壁は薄い。器面は内外とも磨滅が進むもののヘラ磨きの痕跡が残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

椀(18~21) 18は口径11.6cm、器高5.5cm、底径3.9cmの大きさで、平底から内彎気味に口縁部が立ち上がる。外面は亀裂の残るナデ、内面は板ナデ調整される。胎土に角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

19は口径12.3cm、器高6.8cm、底径4.2cmの大きさで半球形に近い器形をなす。20は口径11.0cm、器高7.3cm、底径4.0cmの大きさで口縁部は直線的に立ち上がる。いずれも外面はやや亀裂の残るナデ、内面は丁寧にナデ調整される。胎土に角閃石を含み、暗茶褐色・淡茶褐色に焼成されている。

21は復原口径14.0cm、残存器高5.2cmの大きさで、口径が器高の2倍以上になる浅めの椀で、内彎気味に開いて、口縁端部が僅かに外反する。内外面ともにナデ調整され、角閃石を含む胎土で、淡茶褐色に焼成されている。

器台(24・25) 24は裾部を失うが、復原口径9.4cm、残存器高12.3cmの大きさ。口縁部は



第136図 12・14~17号土坑実測図 (1/40)

外反するが端部は内彎気味で、裾部には緩やかに内彎しながら開く。全体にナデ調整されるが、くびれ部から裾側には指先の凹凸が残る。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成される。25は口縁部を失うが、残存器高18.0cm、裾径16.0cmの大きさと、くびれ部から裾へは緩やかに外反しながら開き、端部は面をなす。外面と裾部内面はハケ目調整され、口縁部からくびれ部の内面はナデられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗橙色ないし赤褐色に焼成されている。

杯(26) 口径4.7cm、器高1.5cm、底径1.3cmの大きさの杯で、口縁部は内彎気味に開く。細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、ナデ調整され、灰黄褐色に焼成されている。

これらの土器のうち、9・14の甕などは弥生後期に含まれる可能性が高いものの、主体を占める凸レンズ状底部をもち、胴下半をヘラ削りないし板ナデ調整する甕の特徴から3世紀代に含める方が妥当であろう。

12号土壙 (第136図)

Ⅲ区北東端部のE16・17区で発見された不整楕円形の土壙で、11号土壙の約4m西側に位置する。上縁で長さ185cm、幅90cm、深さ7～15cmの規模で、主軸方向N78°E前後に向く。壙内床面は平坦で僅かに西側が高めで、床面を掘り込む柱穴状ピットはすべて土壙よりも後出するものである。壙内からは特に遺物は出土していない。

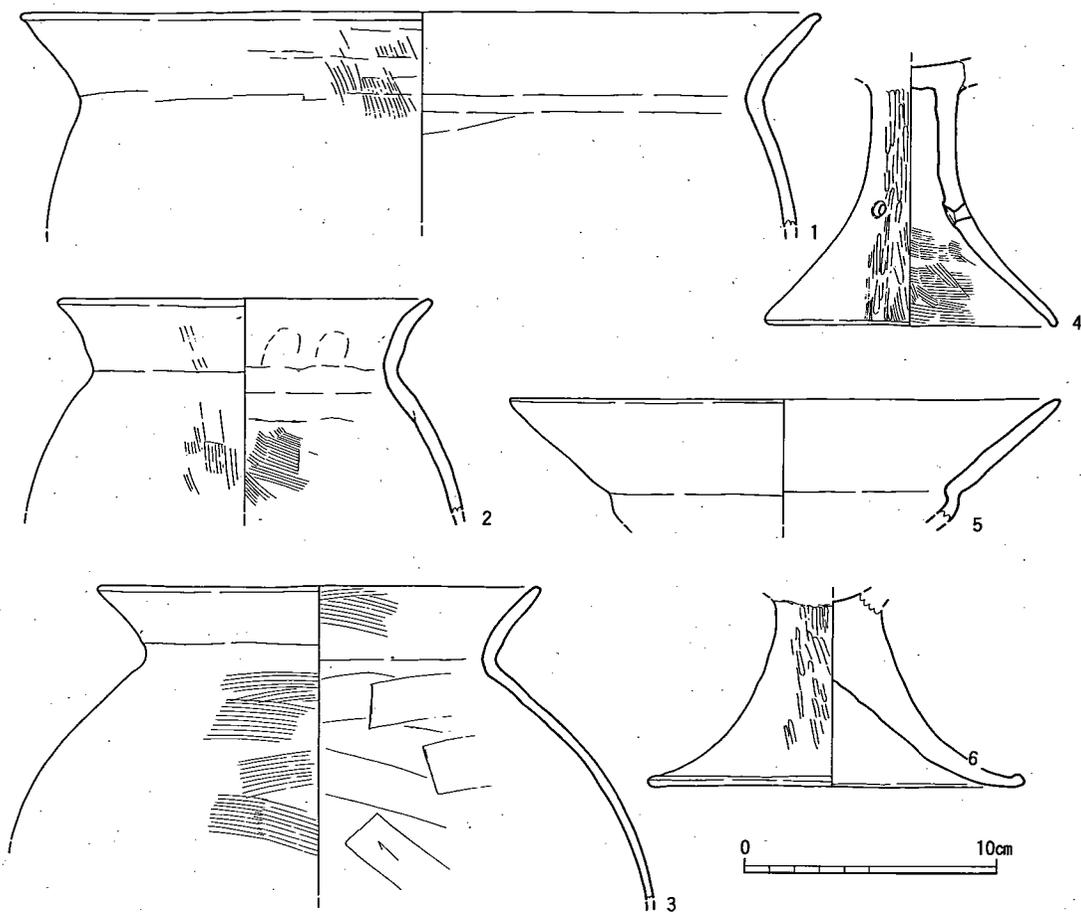
13号土壙 (図版53-2、第133図)

Ⅲ区北東端部のF16区で発見された不整楕円形の土壙で、18号住居跡の西側に位置する。上縁で長さ220cm、幅105cm、深さ4～10cmの規模で、主軸方向N12°E前後に向く。壙内には角礫・円礫などとともに土器片がほぼ床面に接して発見された。床面は中央部がやや凹むもののほぼ平坦で、南側が少し高めである。

出土遺物 (図版56、第137図)

土師器甕(1～3) 口縁部が外反して胴部が膨らむ甕で、器壁は薄い。1は復原口径32.0cmの大きさと口唇端部が僅かに外に折れる。内外面ともに風化・磨滅するが、外面の一部にハケ目がみられる。2は復原口径15.0cmの大きさと、口縁端部は更に外反し、胴部内外面ともにハケ目調整される。3は口径18.0cmの大きさと、胴部は大きく膨らむ。胴部外面と口縁部内面にハケ目、頸部直下までの胴部内面にヘラ削りがみられる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙褐色・黄褐色・暗橙色に焼成され、外面に煤が付着している。

高杯(4～6) 4は杯部を失うが、裾径11.4cm、脚裾部高9.5cmの大きさの高杯脚裾部である。中空の柱状部から緩やかに外反して裾部が開き、裾端部は内彎するが、中途に3ヶ所の円孔が穿たれ、外面はヘラ磨き、裾部内面はハケ目調整される。5は復原口径22.0cmの大きさの



第137図 13号土壙出土土器実測図 (1/3)

杯口縁部破片で、杯底部との境は内彎する段をなす。全体に器面が磨滅するものの、内面にハケ目の痕跡が一部みられる。6は裾径14.3cm、脚裾部高7.0cmの脚裾部で、脚裾へは外反して開くが、柱状部は中実で、裾の内部は円錐状の空間になる。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整される。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒などを含み、淡茶褐色・淡明橙色・黄褐色に焼成されている。

出土土器のうち3の甕や、4の高杯に4世紀前半前後の特徴をみることができる。

14号土壙 (第136図)

Ⅲ区北端部のF・G17区で発見された不整楕円形の土壙で、18号住居跡の北西側に位置する。13号溝と重複して、北西側上部を削られている。上縁で長さ100cm、幅66cm、深さ15~20cm

の規模で、主軸方向N46°W前後に向く。床面は平坦で、北西側が少し高めである。土壌内からは内外面ハケ目調整の甕の小破片などが出土したものの、図示しえる資料はない。

15号土壌 (図版54-3、第136図)

IV区東端部のH18区で発見された不整円形の土壌で、31号住居跡の南側に位置する。上縁で長さ134cm、幅107cm、深さ20~30cmの規模で、主軸方向N13°W前後に向く。床面はほぼ平坦である。土壌内からは縄文土器片と土師器小破片などが出土したものの、土師器片は図示しえない。

16号土壌 (第136図)

IV区北端部のI26区で発見された不整円形の土壌で、7号建物跡の南東側、44号住居跡の北側に位置する。上縁で長さ96cm、幅72cm、深さ13cmの規模で、主軸方向N90°W前後に向く。床面はほぼ平坦で、土壌内からは須恵器片・土師器小破片などが若干出土した。

出土遺物 (第161図)

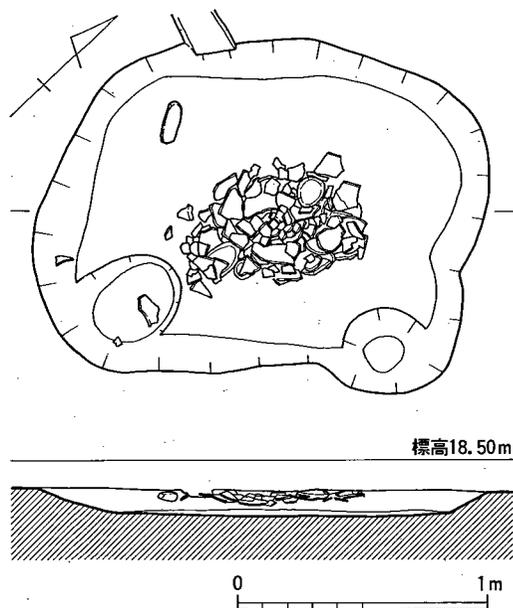
須恵器杯身(8) 蓋受けのかえりをもつ杯身の1/4破片である。復原口径12.0cm、器高4.2cm、外径14.4cmの大きさで、口縁部は内傾して反る。外底面はヘラ切り離しのままである。細砂粒を含み青灰色に焼成されている。6世紀後半頃の所産であろう。

17号土壌 (第136図)

IV区西部のH29区で発見された不整円形の土壌で、45号住居跡の北側に位置する。上縁で長さ102cm、幅71cm、深さ7~15cmの規模で、主軸方向N62°E前後に向く。床面は中央部が凹み、土壌内からは土師器小破片が出土したものの図示しえない。

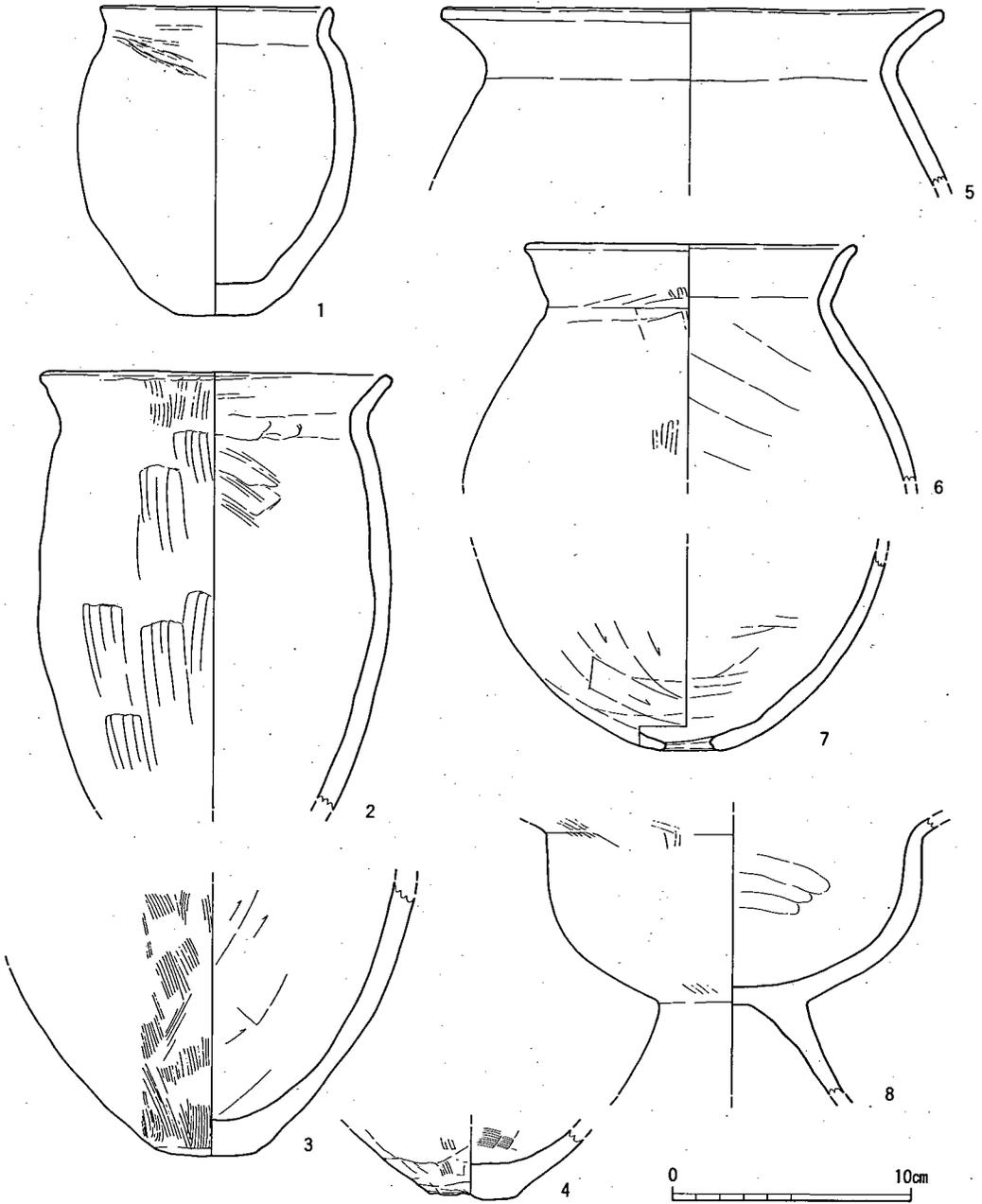
18号土壌 (図版54-1・2、第138図)

V区南東部のE36区で発見された不整楕円形の土壌で、46号~48号住居跡の南東側に位置する。上面を一部畝状の溝で削られるが、上縁で長さ180cm、幅130cm、深さ7~10cmの規模で、主軸方向N44°E前後に向く。床面は舟底状に中央部が凹み、



第138図 18号土壌実測図 (1/30)

長さ145cm、幅107cmの広さをもつが、東側と南側に柱穴状のピットがある。ピットは上面で直径35cm前後、深さ30cmほどの規模である。土壙内の床面からやや浮いた位置に土器片が—



第139図 18号土壙出土土器実測図 (1/3)

括して発見された。

出土遺物 (図版57、第139図)

甕(1~6) 1は口径9.8cm、器高13.1cm、胴最大径11.7cm、底径3.3cmの大きさの甕で、口縁部は短く僅かに外反して立ち上がる。胴部は膨らむが、全体に器壁が厚く、器面はナデ調整される。胎土に角閃石を多めに含み、茶褐色に焼成されている。2は長胴であり膨らまないが、口縁部は外反する。ハケ目の原体で板ナデ調整のような痕跡がみられるが、胴部内面はナデ調整であろう。器壁は厚めである。復原口径15.0cm、残存器高18.5cm、胴最大径15.0cmの大きさである。3は凸レンズ状の底部をもつ胴下半部で、胴部外面はハケ目、内面は板ナデ調整される。器壁は厚めである。また4は底面に凹凸を残す厚い底部で、内外面にハケ目がみられる。2~4は胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗橙色・茶褐色・淡茶褐色に焼成されている。

5・6は口縁部が外反し、胴部が膨れる甕で、5の口縁端部は摘んだように、6は僅かに外反する。5では復原口径21.0cmの大きさで、やや薄い器壁だが器面は風化・磨滅する。6は器壁が薄めで胴部外面にはハケ目が残し、内面は板ナデされる。胎土に角閃石を多めに含み、暗黄褐色・暗茶褐色に焼成されている。

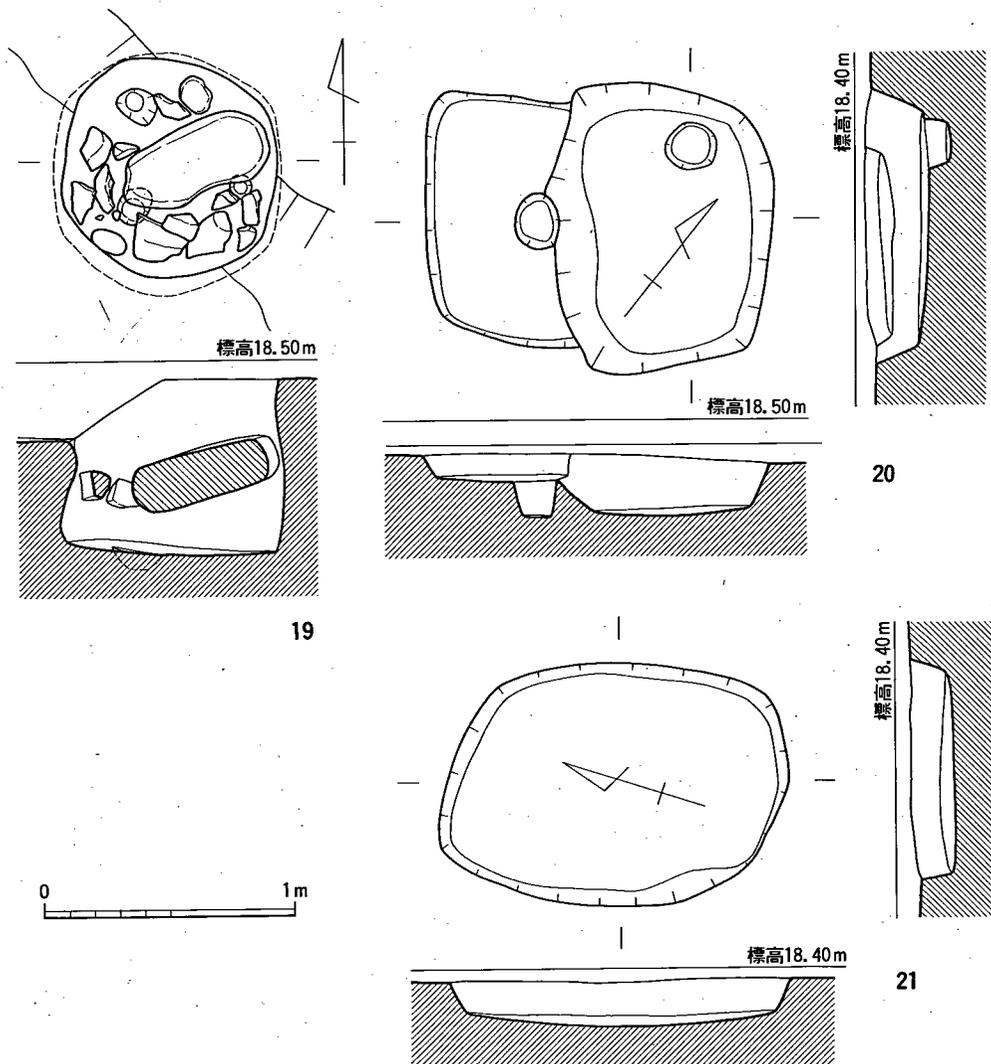
甗(7) 胴下半部のみで口縁部の形態は分からないが、内外面ともヘラ削りないし板ナデ調整され、丸底の底部に直径2.0cm程の円孔が穿孔されている。胎土には角閃石を多く、赤褐色粒・細砂粒を含み、明灰褐色に焼成されている。

台付鉢(8) 口縁端部・裾部を欠失するが、胴最大径15.6cm、残存器高11.8cmの大きさで、体部の高さは8.0cm強程であろう。椀形の胴部に外反する口縁部が付き、脚台部は中空で裾に向かって緩やかに開く。外面にはハケ目が残し、内面はナデ調整される。胎土に角閃石を多めに、赤褐色粒も含み、明茶褐色に焼成されている。

出土土器は、弥生後期末の様相をとどめる。甗の器形で鉢形の例は弥生後期にあるが、丸底の甗形は古墳時代前期以降かも知れない。一応弥生時代の可能性を考えて起きたい。

19号土壙 (図版55、第140図)

Ⅵ区南部のP59区で発見された不整円形の土壙で、5号溝の北東側、6号溝の南側に位置する。上面の南西側を畑地境の段で削られ、上縁で直径85cmの広さだが、深さ70cm、床面の直径95cm程の規模で、フラスコ状を呈する袋状貯蔵穴であろう。床面はほぼ平坦で、相互の間隔が30~40cmの柱穴状ピットが三方に配置される。ピットは直径10cm内外、深さ10cm以下の規模である。土壙内の床面には堅果物種子が散乱し、15~20cm程浮いた位置に河原石の円礫や割石と、長さ50cm、幅・厚み20cm~30cmの河原石が埋没していた。土壙内からは種子以外に、遺物の出土は少なく、弥生後期末頃かと思われる内外面にハケ目をもつ小破片など、若



第140図 19～21号土坑実測図 (1/30)

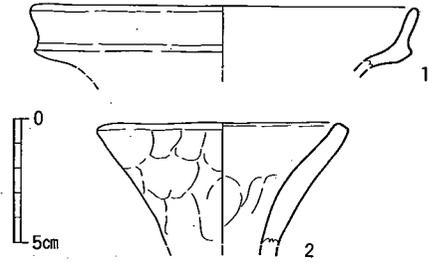
干の土器片のみが出土した。

20号土坑 (第140図)

VI区南部のP58区で発見された不整形の土坑で、5号溝の北東側、6号溝の南側、19号土坑の3m程東側に位置する。南西側に不整形プランの土坑と重複するが、先後関係は分からない。上縁で長さ117cm、幅87cmの広さだが、深さ25cm、床面の長さ95cm、幅65cm程の規模である。床面はほぼ平坦で、北側に直径20cm、深さ10cmの柱穴状ピットがある。土坑内堆積土内には須恵器小破片などが出土したが、図示しえない。

21号土壙 (第140図)

Ⅵ区南東部のP・Q-57区で発見された不整楕円形の土壙で、6号溝の南側、53号住居跡の4m程西側に位置する。上縁で長さ140cm、幅98cmの広さだが、深さは15cm前後。床面は浅い舟底状に凹むが平坦でやや堅い。土壙内堆積土内には土師器小破片などが出土したが、図示しえない。



第141図 22号土壙出土土器実測図 (1/3)

22号土壙 (第16図)

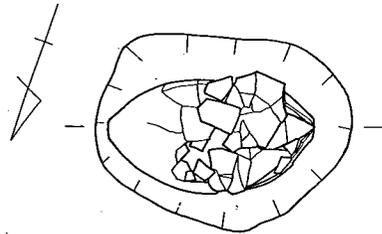
Ⅰ区南部のB-9区で発見された不整形の土壙で、南西側にある4号住居跡を切る。上縁で長さ110cm、幅96cmの広さに確認され、深さは30cm前後。床面は平坦でやや堅い。土壙内堆積土の上には水田床土に使用される黄褐色粘土が混入していて後世の攪乱坑の可能性も高いが、土師器片も出土した。

出土遺物 (第141図)

壺(1) 復原口径15.2cmの大きさの複合口縁の破片である。屈曲部は凸帯状に飛び出し、口褐色粒を含み、明褐色に焼成されている。

縁端部は外反気味に立ち上がる。胎土に角閃石・赤製塩土器? (2) 復原口径10.0cm、残存器高4.8cmの大きさの、やや器壁の厚い土器片で、底部側に窄まるが下半部は残らない。内外面ともにナデ調整されるが、外面は指頭圧痕の凹凸がある。胎土に角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。

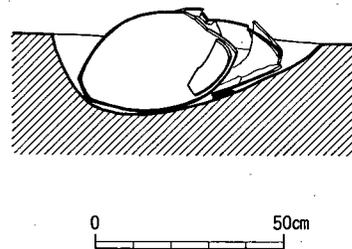
土器で1の壺口縁部からすると古式土師器の範疇に含まれるが、時期は明確にし難い。



標高18.40m

4. 甕棺墓 (図版58-1・2、第142図)

Ⅰ区北部のE10区で発見されたが、8号土壙の北西側に位置する。甕が露出し始めて、甕棺墓の存在が初めて分かったが、遺構検出時には攪乱土もあって、墓壙プランの確定は甕の周辺を少し掘り下げざるをえなかった。プランは不整楕円形で長径68cm、



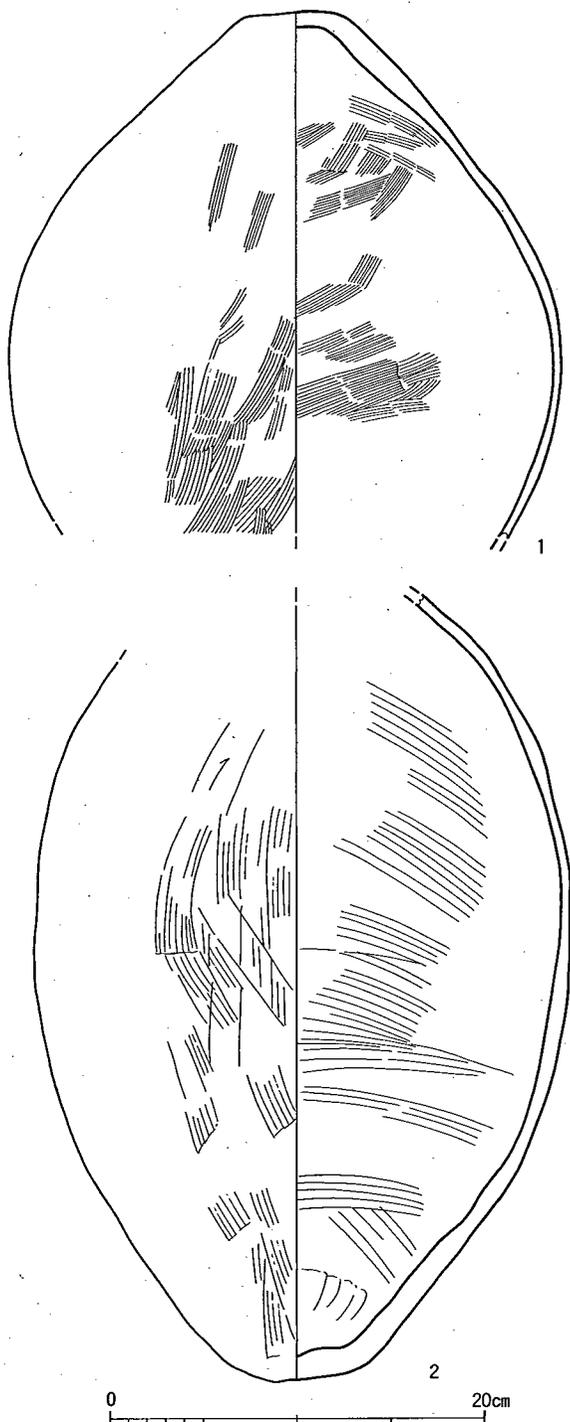
第142図 甕棺墓実測図 (1/20)

短径50cmの大きさである。墓壙内に埋置された甕棺は、合わせ甕で、N71°Eの方向に主軸をおいて、東北東に下甕底部側を向ける。23°前後の傾斜角度に埋置し、上甕を被せているが、上甕は土圧か何らかの重力が掛かり、割れて墓壙内にずれ落ちている。検出状況では長さ55cm、幅30cm程の大きさであった。甕の合わせ方は、上・下甕ともに口縁部を打ち欠いて上甕が被り、粘土で目貼りを施していたようだが粘土は下に落ちている。墓壙内および甕棺内部には副葬品や人骨は検出されなかった。

甕棺使用土器（図版58-3、第143図）

上甕(1) 口頸部と胴部の片側の肩部を欠くが、残存器高28.2cm、胴最大径29.0cm、底径5.6cmの大きさの、平底倒卵形の器形で、内外面ともにハケ目調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。

下甕(2) 口縁部を欠くが、長胴の甕で、残存体部高42.2cm、胴最大径28.5cm、底径7.2cmの大きさ。底部は凸レンズ状で、胴部内外面ともにやや粗いハケ目で調整される。内径12.0cm程の頸部



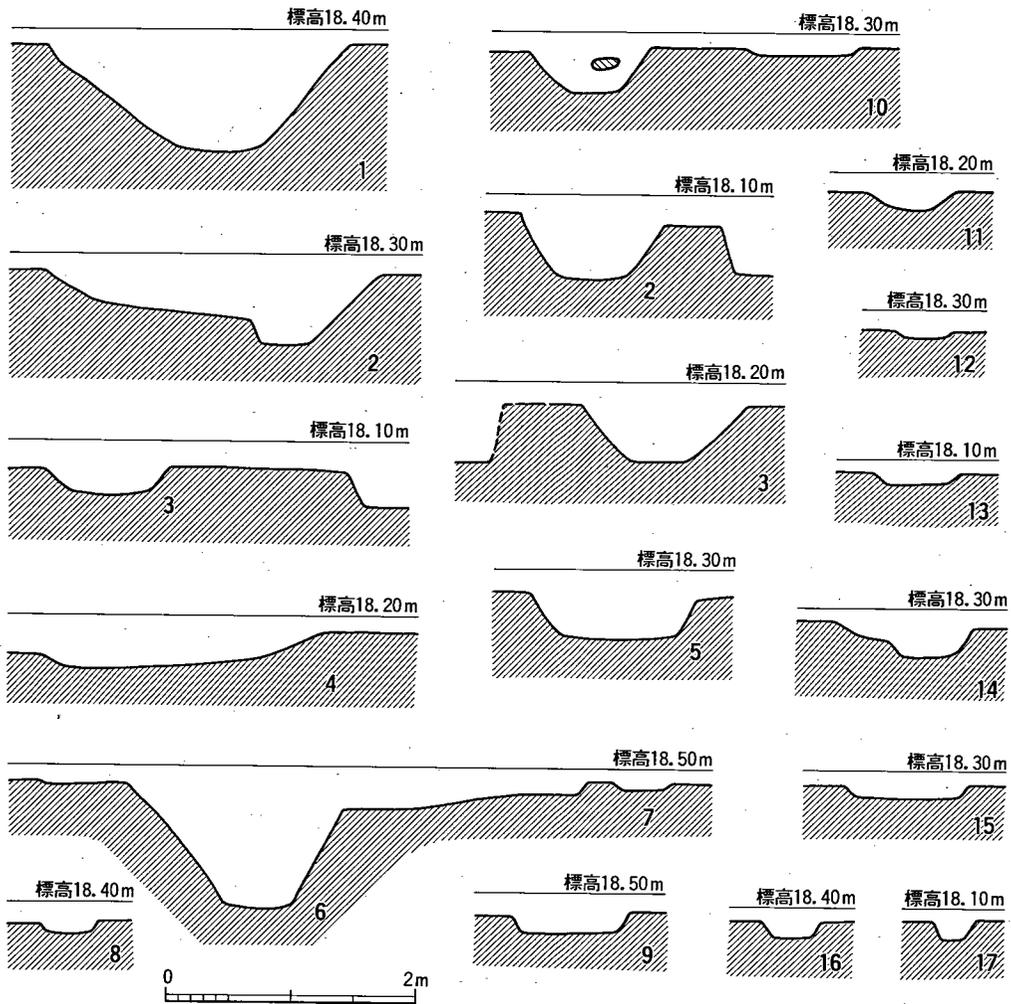
第143図 甕棺使用土器実測図（1/4）

から胴部に緩やかに膨れる肩部は、内外ともにハケ目が消える。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、橙褐色に焼成されている。

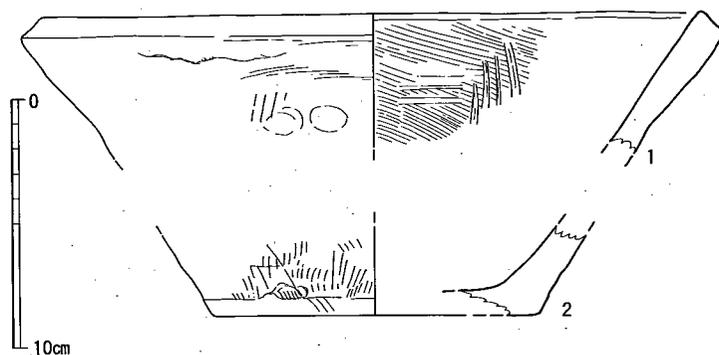
上下の甕は口縁部を欠くために、時期の特定に不確定要素はあるものの、弥生後期後半ないし末の時期であろう。

5. 溝状遺構

1号溝 (図版59, 第144図)



第144図 溝状遺構断面実測図 (1/60)



第145図 1号溝出土土器実測図 (1/3)

旧県道より東側の調査区である0地区の南部で発見された溝で、南西隅から北東側に流下し、右に曲がって東北東向きに下がる。0地区西部の遺構検出面は標高16.8m前後で、5m程東側辺りから傾斜がつき低くなっていくが、15m程東側の調査区東端では標高16.0m前後である。溝の頭部分は二股に分かれていて、西側流れは3mで0.3m下がる傾斜だが、東側流れは半分の距離の高低差が0.05m程である。合流した地点は上縁で幅2.3m、深さ0.6mと急に深くなるが、溝の断面形は逆台形である。東端までは約10mの距離だが、東端では上縁での幅2.4m、深さ0.8m、底面の幅0.7m程である。溝の縁は黄褐色の砂質粘土で、溝内には暗灰茶褐色の砂質土が主に堆積していて、下層ほど砂質が強い。溝内からは弥生後期土器片や古墳時代の須恵器・土師器片などが出土したが、最も新しい土器は中世頃の摺鉢片であった。

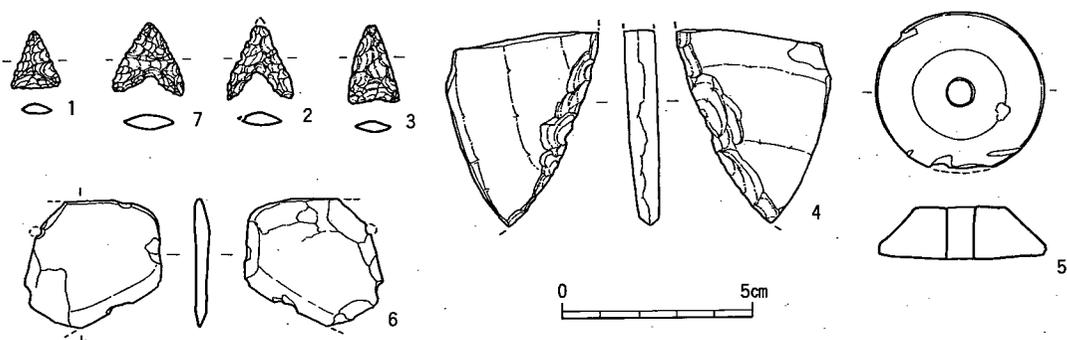
出土遺物 (第145・146図)

摺鉢 (1・2) 瓦質の口縁部片と底部片である。口縁部は復原口径28.0cmの大きさで、やや肥厚するが端部は面をなす。外面はハケ目が一部みられるも指頭圧痕の残るナデ調整、内面はハケ目の後に4条の櫛歯状の目が刻まれる。底部は復原底径13.0cmの大きさで、外面にハケ目がみられるものの内面は磨滅している。いずれも胎土に細砂粒と角閃石を若干含み、淡い明黄灰色に焼成されている。

石鏃 (第146図1) 姫島産黒曜石製の平基式石鏃で、全面に調整剥離が及ぶ。完形で、長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.5gを測る。弥生時代の所産であろう。

2号溝 (図版4-2、第144図)

Ⅲ区を南北に横切りⅣ区の東南部で屈曲する溝で、Ⅲ区では23号・24号住居跡と、Ⅳ区では36号・42号住居跡と重複するが、23号住居跡に切り込まれる他は住居跡より後出する。E24区では遺構検出面は標高18.0m弱だが上縁での幅0.9mで、深さは0.2m程にとどまる。これより北東方向 (N45°E) に15m程の処で南東方向に屈曲するが、G22区辺りでは上縁の幅は1.3



第146図 溝出土石器・石製品実測図 (1/2)

～1.6mで底面は標高17.5m前後を測り、断面逆台形に掘り込まれている。Ⅲ区との境ではN 65° W前後の方向をとり、F 19区辺りでN 25° W前後に向きを変える。E 18区付近では上縁の幅が3m前後あり、底面は標高17.5m前後、東側にやや浅いテラス状の部分を持ち、断面形はやや歪む逆台形を呈している。調査区南端のB 17区では上縁の標高18.2m弱で2.8m幅、床面の標高は17.6m程である。溝内堆積土は暗茶褐色の砂質土で、下部は砂質が強い。2号溝は総距離52m分を確認したことになる。

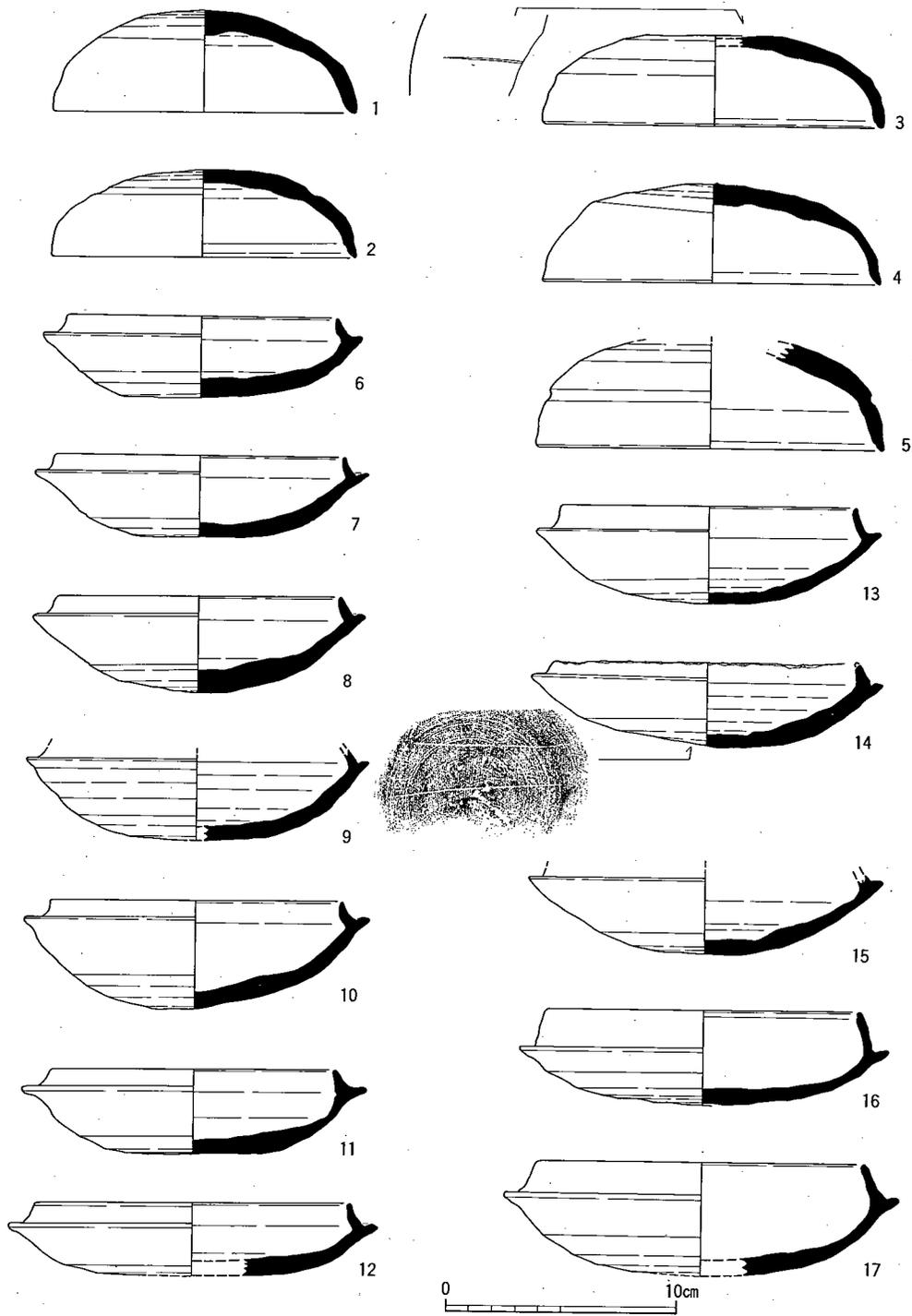
出土遺物 (図版62・63、第147～151図)

須恵器杯蓋(1～5) 身受けのかえりを有さない杯蓋で、外天井は回転ヘラ削りされる。口縁端部は1が厚めで丸味をもつが、他は薄めで2は内面に低い段をもつ。口径は順に13.0cm・13.2cm・14.5cm・14.4cm・15.0cm、器高は順に4.5cm・3.8cm・3.9cm、4.4cm・4.6cm程である。3の外天井には単直線のヘラ記号が描かれる。いずれも胎土に若干砂粒を含み、青灰色・明茶灰色・灰色などの色調に焼成されている。

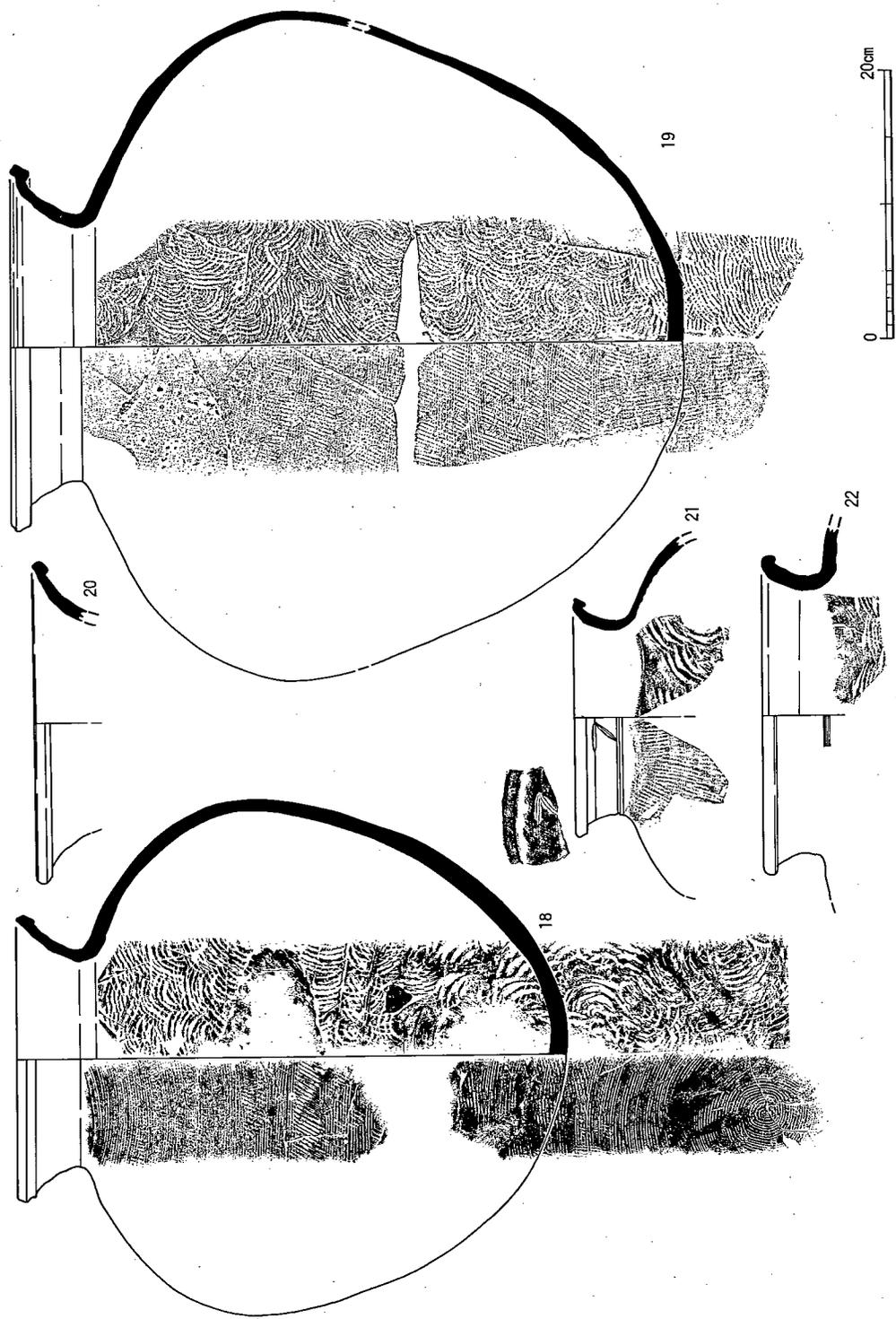
須恵器杯身(6～17) 6～15は蓋受けのかえりを持ち、口縁部の立ち上がりで反りながら短く内傾する杯身である。外径は順に13.8cm・14.4cm・14.4cm・14.9cm・15.0cm・15.0cm・16.0cm・14.8cm・15.0cm・15.2cm、器高では順に3.6cm・3.6cm・4.2cm・4.1+ α cm・4.8cm・3.8cm・3.2cm・4.3cm・3.6cm・3.5+ α cmの大きさで、浅い器形の例と深い例がある。外底面は回転ヘラ削りされるが、14には2条の直線のヘラ記号が描かれる。いずれも胎土に砂粒を含み、明茶灰色・暗灰色・紫灰色・明灰色などの色調に堅く焼成されている。

16・17は蓋受けのかえりを持ち、口縁部の立ち上がり内彎気味で長めの杯身である。外径は16.0cmと17.0cm、器高は4.1cmと4.9cmの大きさである。胎土に砂粒を若干含み灰色に焼成されている。

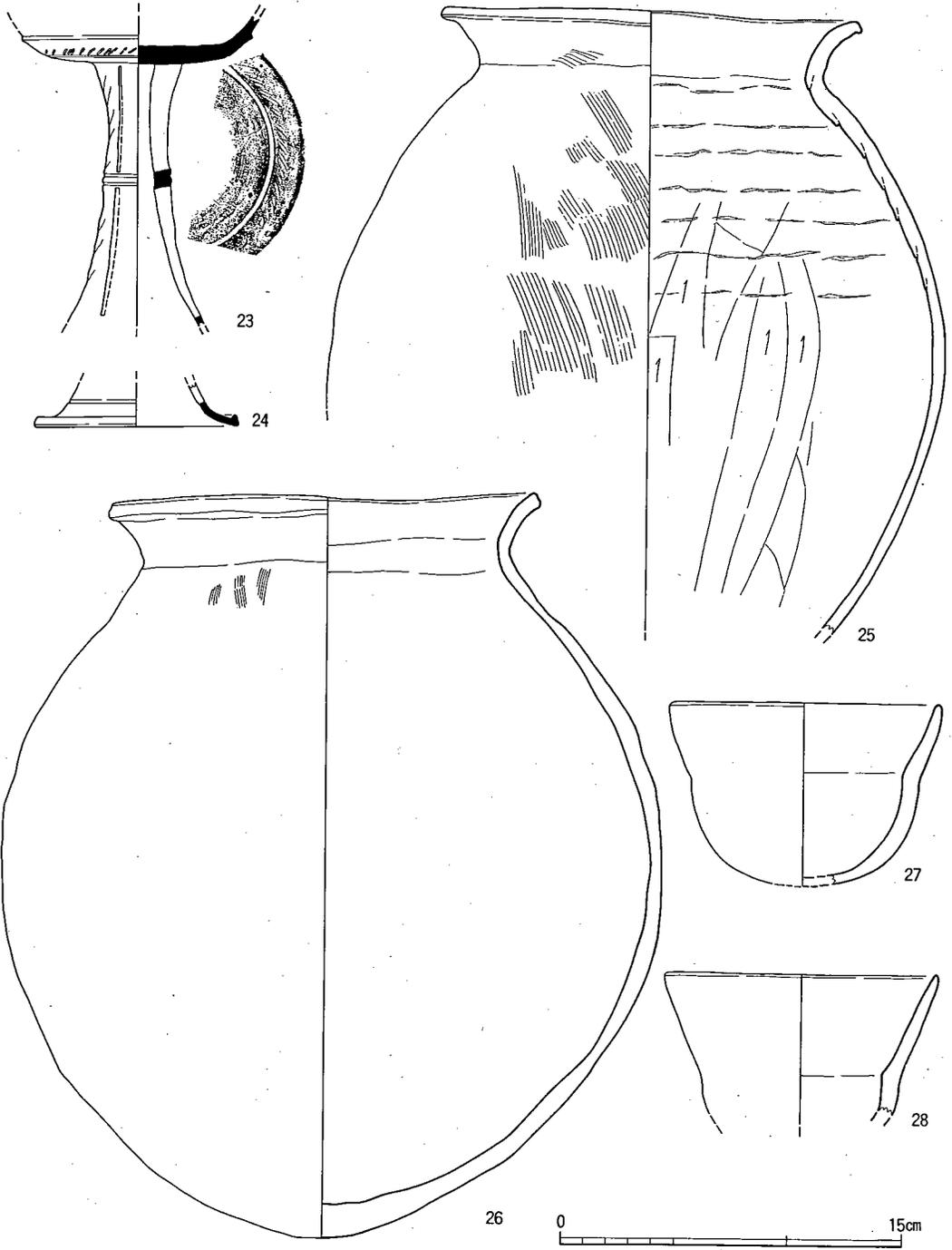
須恵器甕(18～22) 18は口径21.6cm、器高40.4cm、胴最大径38.5cmの大きさの甕で、口縁部は5.0cm程の高さで緩やかに外反し、端部外面にM字形凸帯をなしながら上に摘み上げてい



第147图 2号溝出土土器实测图1 (1/3)



第148图 2号沟出土土器实测图2 (1/5)



第149图 2号沟出土土器实测图3 (1/3)

る。胴部外面は平行叩き目とカキ目調整で、内面には同心円当て具痕が付く。堅めの焼成で淡い黄色味を帯びるが灰色を呈している。19は20の胴下半と同一個体のようなのだが上手く接合しない。19の口径27.6cm、残存器高24.8cm、胴最大径50.3cmで、20と合わせると器高は50.0cm前後の甕である。口縁部は5.0cm程の高さで、緩やかに外反して端部で強く反るが、複合口縁のように折り返して上面を平らに整えている。胴部外面は平行叩き目とカキ目調整で、内面には同心円当て具痕が付く。堅めの焼成で淡灰色ないし青灰色を呈している。

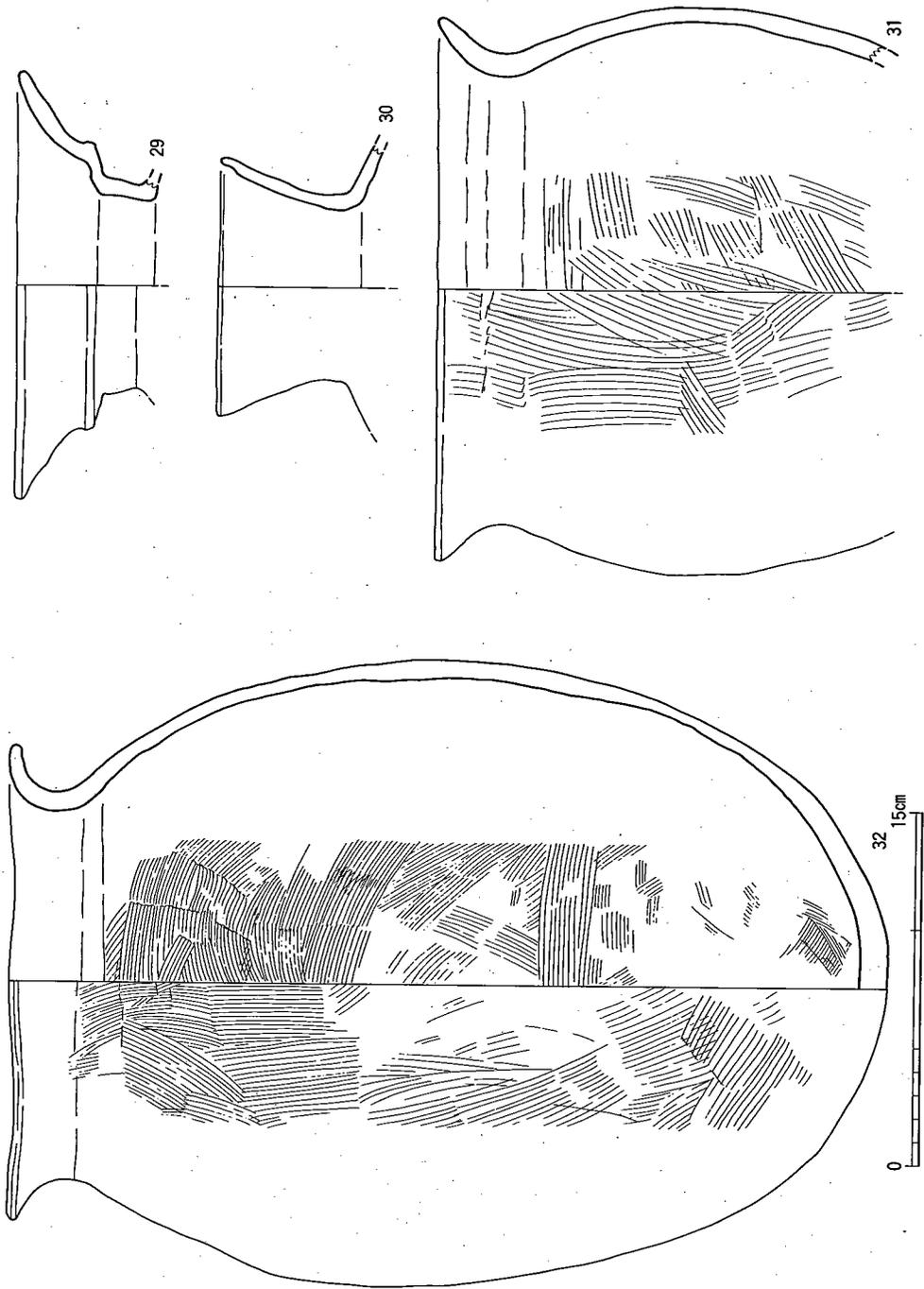
20~22は外反する口縁部破片で、端部の形状が異なる。20は四角く肥厚して内側が僅かに凹み、21は垂れ気味の三角凸帯状に折り返し、端を摘んだような形状、22は外方に垂れ気味に反るが、21・22は20に比して開きが少なく、胴部外面に平行叩き目とカキ目調整、内面は同心円当て具痕があり、21の回転ナデ調整される口縁下外面にV字形（あるいはN字形か？）のヘラ記号が描かれる。いずれも堅めの焼成で灰色・暗青灰色などの色調を呈している。

須恵器高杯 (23・24) 23は口縁部と裾部を失うが、残存器高13.7cmの大きさの高杯で、中空で絞り痕のみられる柱状部外面には沈線が2条巡って、沈線の上下2段にヘラ切りの透かし窓が3方に開けられている。杯底部は平らで、口縁部側に凸帯状の段が巡り、底部側に巡る沈線との間に板小口の連続刺突文様が配される。胎土に砂粒を若干含み、茶灰色に堅く焼成されている。

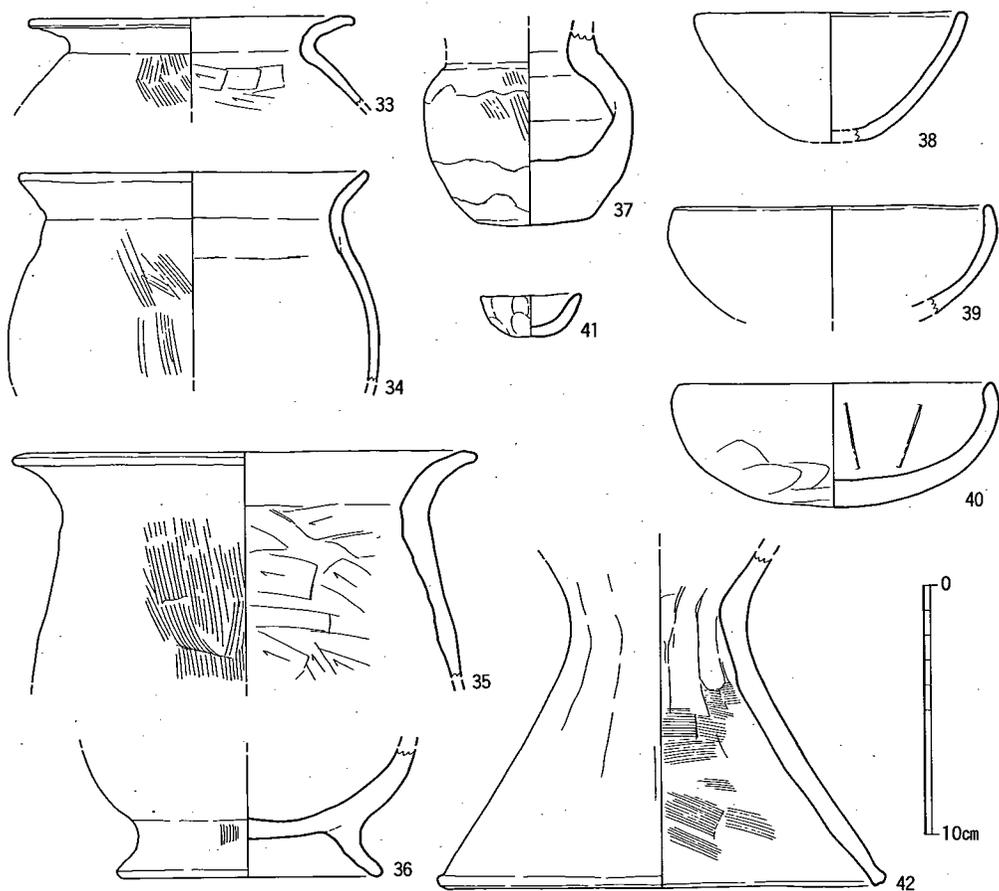
24は復原裾径9.0cmの脚裾部破片で、外反して開くが端部は上側に折り返されている。1条の沈線が巡り、柱状部側にヘラ切りの透かし窓が開けられる。胎土に細砂粒を若干含み、暗灰色に堅く焼成されている。

土師器甕 (25・26・31~35) 25・26は丸味の強い倒卵形の胴部に外反する口縁部が付く甕で、口縁端部は面をなす。口頸部が緩やかに彎曲するためかなで肩の感じが強い。26では尖り気味の丸底である。25は口径18.0cm、胴最大径27.0cm、残存器高27.5cmの大きさ。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りされるものの肩部内面はナデ調整で粘土継ぎ目が目立つ。胎土に細砂粒を含み、黄褐色に焼成されて、外面に煤が付着する。26は復原口径18.5cm、器高33.0cm、胴最大径29.0cmの大きさ。外面は磨滅するが頸部にハケ目が残り、内面はナデ調整される。34は復原口径14.0cmの外反する口縁部をもち胴部が膨らむ甕で、胴部外面をハケ目調整、内面をなで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、茶褐色・茶橙褐色に焼成されている。31は復原口径23.0cm、胴最大径24.0cm、残存器高18.8cmの大きさで、口縁部は緩やかに外反する。内外面はハケ目調整される。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

32は口径20.1cm、器高37.3cm、胴最大径26.5cmの大きさの丸底長胴甕で、口縁部は強く外反する。胴部内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成し、外面に煤が若干付着する。33は復原口径13.0cmの大きさで、口縁部は強く外反し、膨らむ胴部は外面をハケ目調整、内面を頸部下までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤



第150图 2号溝出土器実測図4 (1/3)



第151図 2号溝出土土器実測図5 (1/3)

褐色粒を含み、明褐色に焼成されている。35は復原口径18.8cmの大きさの、口縁部が強めに外反する甕で、胴部の膨らみはやや少ない。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部までヘラ削りされるが、頸部付近の器壁は厚い。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、暗褐色に焼成されている。

小形丸底壺(27・28) 27は復原口径12.0cm、器高8.0cm程の大きさで、半球形の胴部に僅かに内彎する口縁部が立ち上がる。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、明橙色に焼成される。28は口径14.0cmの大きさの破片で、口縁部は長めに直線的に開く。胎土に細砂粒を多く含み、暗茶褐色に焼成される。

複合口縁壺(29) 復原口径18.2cmの大きさで、直立気味の頸部から口縁部が開き、段をなして屈曲し、上部に大きく外反する口縁部が開く。全体にヨコナデ調整されるが、胎土に細砂粒を多く、角閃石・赤褐色粒も含み、淡茶橙色に焼成されている。

土師器壺(30・31) 30は長めに口縁部が立ち上がる直口壺で、口縁部は直線的に開いて端部

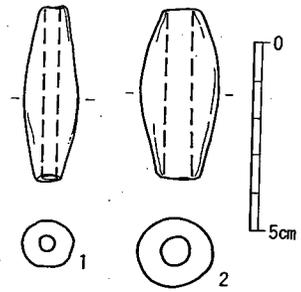
内面が僅かに凹む。復原口径11.0cmの大きさで、胴部以下を失う。31は台付きの底部破片で口縁部などの形状は不明だが、踏張り気味の裾をもち、体部底には丸味がある。ともに胎土は細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗橙色・灰橙色に焼成されている。

小形壺 (32) 口縁部を欠くが、残存器高7.7cm、胴最大径8.2cmの大きさのミニチュア壺で、厚い凸レンズ状の底部をもつ。口縁部はやや偏って立ち上がる可能性もある。胴部外面にハケ目がみられ、内面はナデ調整され、外底面には単直線のヘラ記号状の傷がある。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

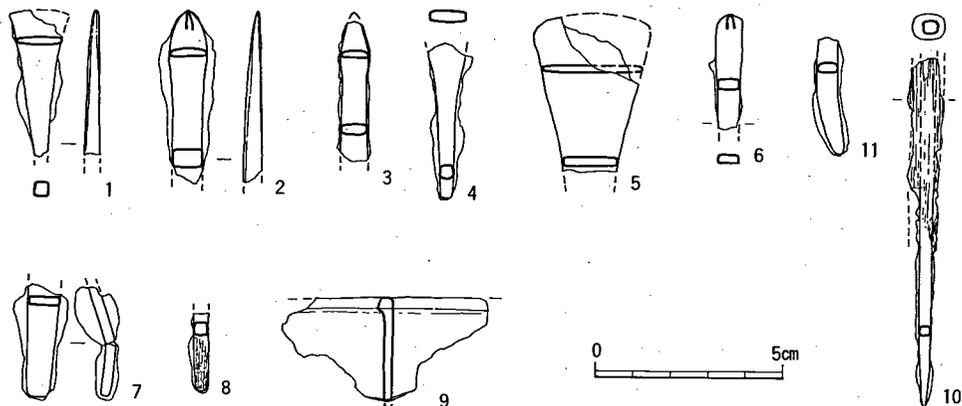
椀 (38~41) 38は口径11.0cm、器高5.2cmの大きさで、口縁部は内彎気味に開き、ナデ調整される。39・40は口縁部が内彎して立ち上がる椀で、器高に比して口径が大きい器形である。39は口径12.8cm、残存器高4.4cm、40は口径12.4cm、器高5.0cmの大きさ。40は内外面ともに板ナデ調整され、内面には板小口痕がみられる。41は復原口径4.0cm、器高1.8cmの大きさのミニチュアでナデ調整される。いずれも胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石などを含み、淡橙色の色調に焼成されている。

器台 (42) 口縁部を失うが、残存器高13.4cm、裾径17.8cmの大きさの器台。裾部はくびれ部から直線的に開く。外面は磨滅するがナデ調整、内面はハケ目調整され、くびれ部内面はナデられるが絞り痕・指頭痕が残る。胎土に細砂粒・角閃石を含み淡橙色に焼成されている。

土 錘 (第152図1) 管状土錘で、長さ4.7cm、外径1.4cm、孔径0.4cm、重量7.7gの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、ナデ調整されて、淡茶褐色に焼成されている。



第152図 溝出土土製品実測図 (1/2)



第153図 溝出土鉄製品実測図 (1/2)

石 鏃(第146図2・3) 安山岩製の全面に調整剥離の及ぶ打製石鏃で、2は凹基式、3は平基式。2は先端の一部を欠くが現存値で長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量0.8gを測り、3は長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量0.8gを測る。

打製石斧(第146図4) 緑泥片岩製の打製石斧の刃部付近の破片である。

鉄 鏃(第153図1～6) 1は方頭鏃で篋被部は分からないが、現存値で長さ3.9cm、幅1.4cm、厚さ0.2～0.4cmを測る。2・3は柳葉形の片丸造で基部側の太い鏃で、篋被部を欠く。現存値で長さ4.7cm・3.7cm、幅1.0cm・0.7cm、厚さ0.2～0.5cm・0.2～0.3cmを測る。4は方頭あるいは圭頭鏃であろう。5も方頭鏃か圭頭鏃の区別をしがたいが広根である。また6は細根の方頭鏃であろう。

不明鉄製品(第153図7～9) 7は扁平な板状をなすが、先端側を欠く。途中で折れるが残存長3.0cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。8は木質らしい錆着物がみられ、鏃基部の可能性もあろう。9は扁平な板状だが縁が折れて厚みをもつ。残存長5.5cm、幅2.7cm、厚さ0.4cmの大きさである。

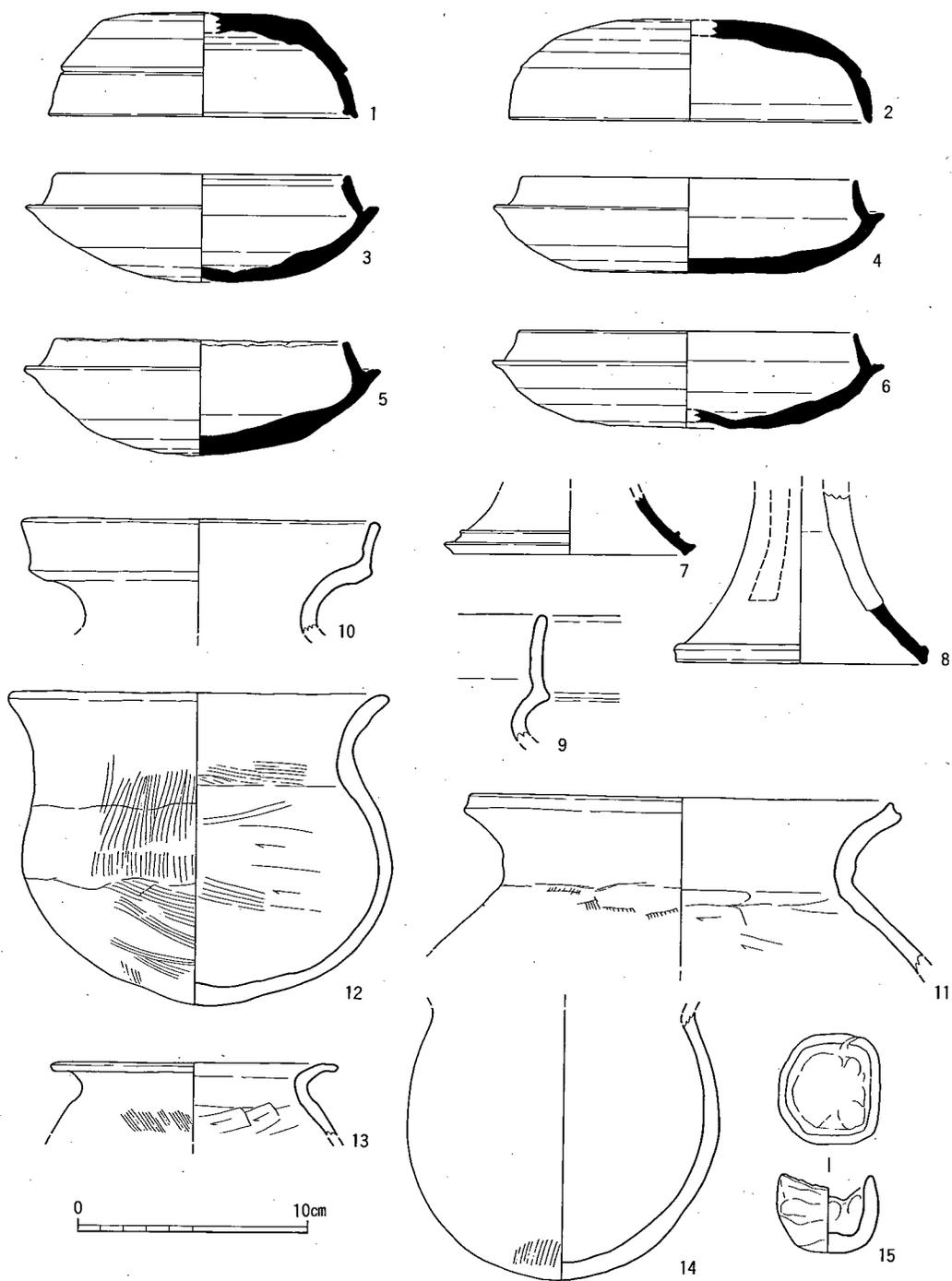
出土土器では、須恵器杯蓋・杯身の特徴で、6世紀前半と6世紀後半の例があり、圧倒的に後者が多い。また土師器甕のなかにも6世紀後半頃の例があり、この時期が中心であろう。なお、これ以前の弥生時代後期ないし古墳時代前・中期の遺物は、複合する住居跡などから招来したものと解しておきたい。

3号溝(図版4-2・60-2、第144図)

Ⅳ区を南北に横切り、Ⅲ区との境目で屈曲して、Ⅱ区の北東部に続く溝で、Ⅳ区では34号～37号住居跡と重複して住居跡より後出する。I 21区では遺構検出面は標高18.1m弱だが上縁での幅1.3mで、深さは0.4m程である。これより南東方向(N41°W)に17m程の処で東側に屈曲し加減だが、水路保全の非調査部分に潜り、30号住居跡との関係も不明である。G 19区辺りでは上縁での幅は1.3m前後、深さ0.5m程で床面は標高17.6m前後を測る。東側のⅡ区ではN45°E前後の方向をとり、H 16区辺りでは上縁の幅は0.9mで底面は標高17.6m前後を測り、断面逆台形に掘り込まれている。I 15区では上縁の幅が0.8m前後で、底面は標高17.6m前後である。Ⅱ区では10m分を確認したが、非調査区域での長さは約10mであろう。溝内堆積土は暗茶褐色の砂質土で、下部は砂質が強い。

出土遺物(図版63・64、第154～157図)

須恵器杯蓋(1・2) 1は復原口径13.4cm、器高4.5cmの大きさの杯蓋で、回転ヘラ削りされる天井部は平坦で、口縁部に外面にと口唇端部にシャープな段をもつ。2は復原口径15.6cm、器高4.4cmの大きさで、天井部に丸味があり口縁端部も丸くおさまる。いずれも胎土に砂粒を含み、灰色に堅く焼成されている。



第154图 3号沟出土土器实测图1 (1/3)

須恵器杯身(3~6) 蓋受けのかえりを有する杯身で、口縁部の立ち上がりは反り気味に内傾する。外径は順に15.2cm・16.8cm・15.4cm・17.0cm、器高は順に4.8cm・5.2cm・5.0cm・4.2cmの大きさ。いずれも胎土に砂粒を含み、灰色・茶灰色・暗灰色に堅く焼成されている。

須恵器高杯(7・8) 7は外反して開く裾部破片で、復原裾径10.8cmの大きさ。端部は外に跳ね気味に肥厚し、上側に低い三角凸帯が巡る。8は復原裾径11.0cmの裾部破片で、端部外面に三角凸帯が付く。柱状部は中空で3方に透かし窓が開けられる。いずれも胎土に砂粒を含み、黒灰色に焼成されている。

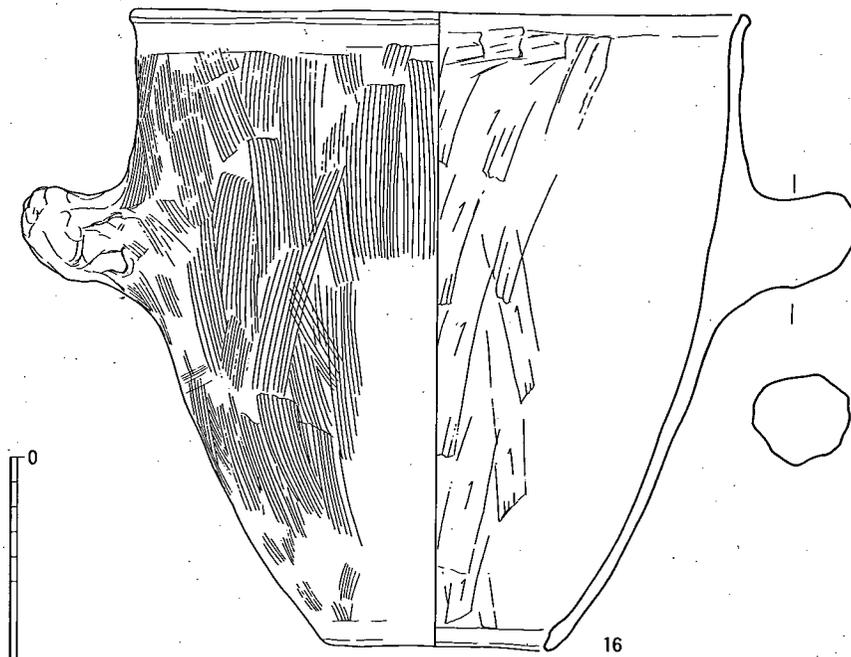
土師器壺(9・10・26・27) 9・10・27は複合口縁の破片である。9・10は屈曲部が凸帯状に飛出して、口縁部は僅かに外反気味に立ち上がるが、10は復原口径15.6cmの大きさ。27は外反する口縁部の内面に突出があり、外面には反転波状文が描かれる。いずれも胎土に細砂粒・赤褐色粒などを含み、淡橙色・赤橙色に焼成されている。

26は上手く接合しないが同一個体の丸底壺である。球形の胴部に直線的に立ち上がる口縁部が付く。復原胴最大径12.7cmの大きさ。外面は磨滅・風化剥落して調整は不明だが、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、赤褐色に焼成されている。

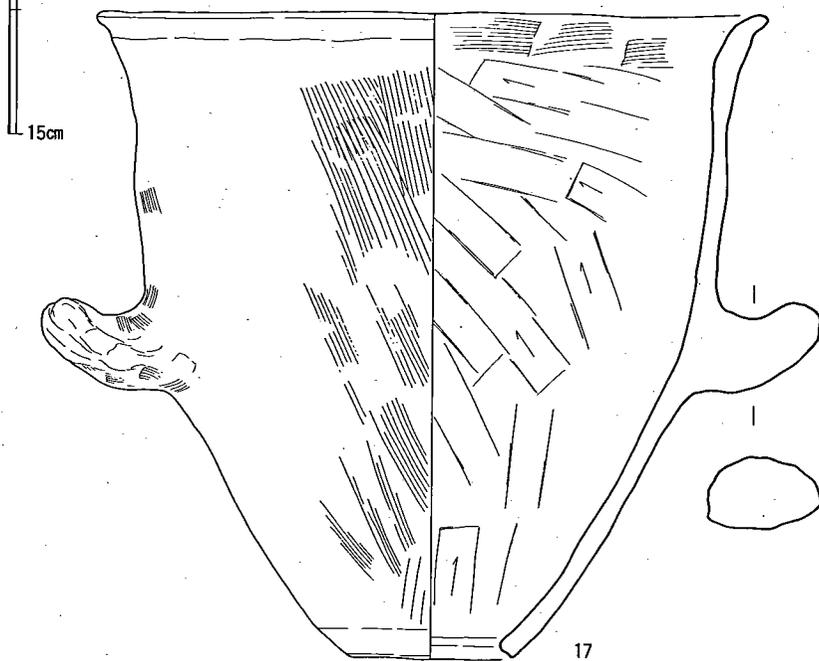
土師器甕(11~14・18~21) 11は外反する口縁部の端部が上方に摘み上げられる。口径18.3cmの大きさで、胴部外面にハケ目、内面の頸部までヘラ削りされる。13は復原口径12.6cmの大きさだが、これに比して口縁部の外反が強く、胴部内面のヘラ削りは頸部下までである。12は口径16.3cm、器高13.6cm、胴最大径15.5cmの大きさ。頸部のくびれが強く、口縁部は外反するが、端部は丸い。底部はやや尖る丸底で、胴部外面はハケ目調整、内面は板ナデないしヘラ削りされるが、頸部内面などにハケ目が残る。14は口縁部を失うが胴部は最大径13.2cm、胴部高11.7cmの大きさで、球形に近い。器壁が厚めで、外面に一部ハケ目がみられるもののナデ調整が目立つ。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒などを含み、明橙色・橙褐色・暗橙色に焼成されている。

18は丸く膨らむ胴部に牛角状の把手が付く甕で、口縁部は肥厚せずに緩やかに外反する。復原口径25.6cm、器高25.8cm、胴最大径26.8cmの大きさ。胴部外面はハケ目調整され、内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に細砂粒を多めに、赤褐色粒・角閃石も含み、橙褐色に焼成され、外面には煤が付着する。G19区の溝底から出土し、内部に焼土と灰が詰まっていた。

19・20は胎土・調整や色調が酷似していて、同一個体の可能性もあるが、両者ともに歪みがあり、図上でも合成し難い。19は復原口径13.0cm、胴最大径16.4cmの大きさで、口縁部は短く緩やかに外反して、なで肩をもつ。20は復原胴最大径16.3cmの大きさの倒卵形で、底部はやや尖る。胴部外面はハケ目原体による板ナデないしナデ消しで、内面は工具痕の残る板ナデ調整されるが肩部内面には粘土帯接合痕の残るナデ調整である。胎土に細砂粒を多く、赤褐色粒・角閃石を含み、赤褐色ないし暗灰褐色に焼成されているが、煤も付着する。

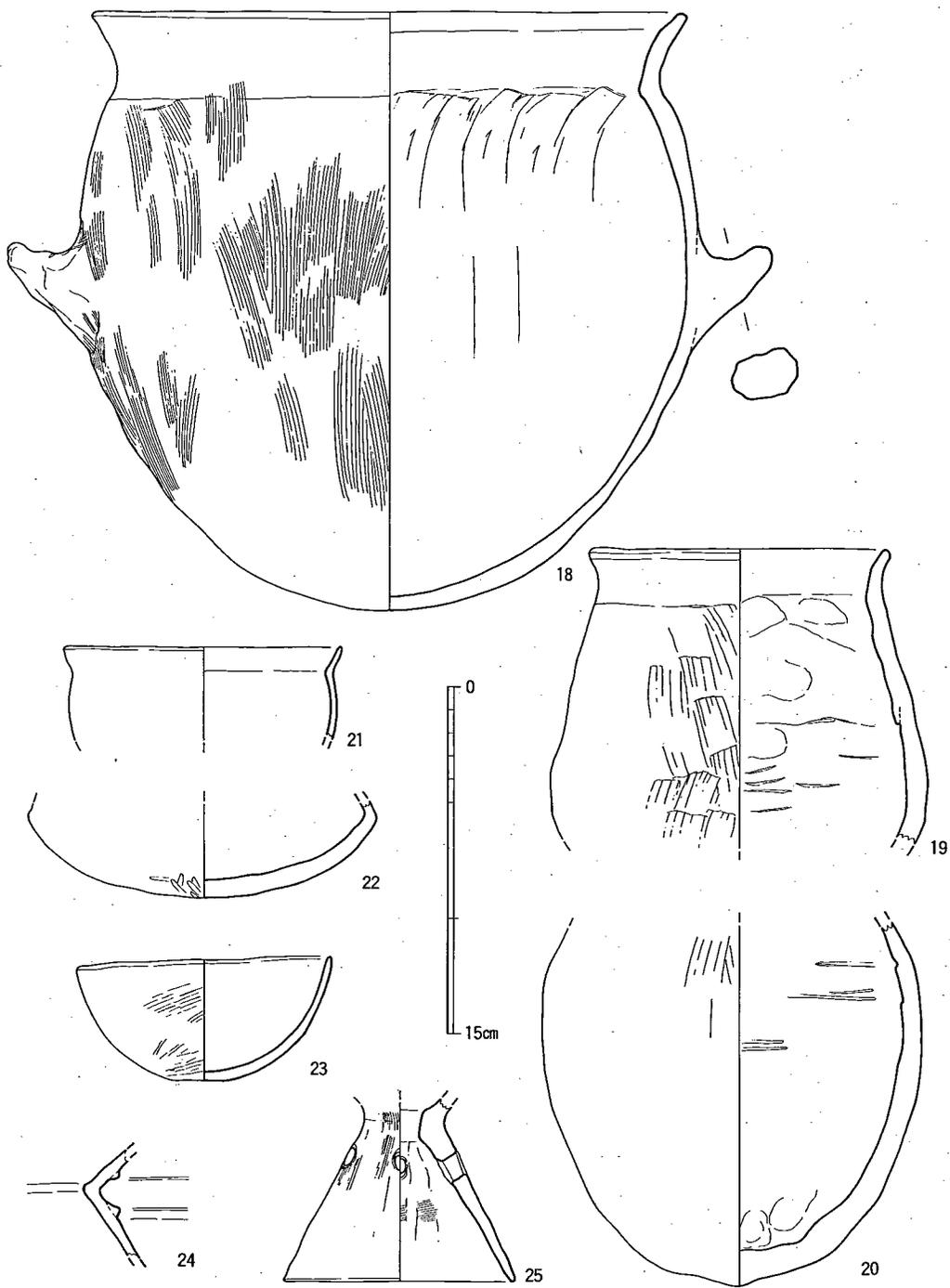


16



17

第155图 3号沟出土土器实测图2 (1/3)



第156图 3号沟出土土器实测图3 (1/3)

21は復原口径12.0cmの大きさと、鉢に近い器形で器壁は薄い。全体に磨滅が進み調整手法は不明で、細砂粒を若干含む胎土を淡茶褐色に焼成されるが、外面に煤が付着する。

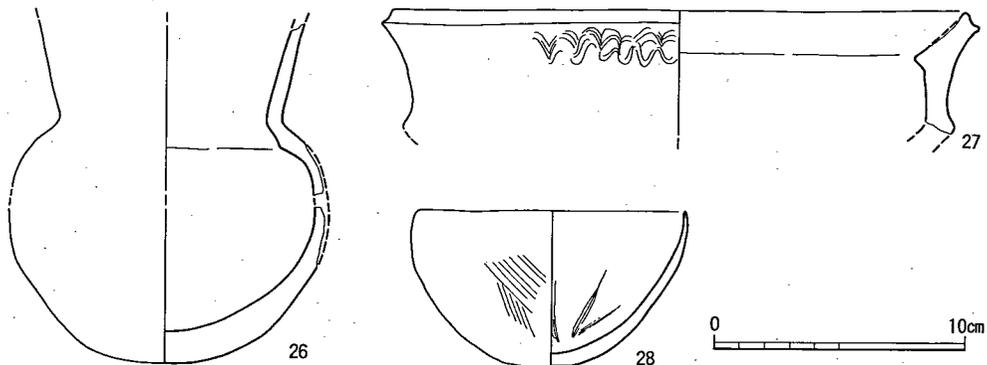
土師器甑(16・17) 16は復原口径25.0cm、器高25.3cm、底径9.6cmの大きさと、胴部のやや上側に飛び出し気味の牛角状把手が付く。薄めの器壁に整えられる底部から僅かに彎曲するものの直線的に口縁部へ開き、口縁端部は肥厚せず短く僅かに外反する。外面はハケ目調整、内面はヘラ削りされる。I 21区の溝内で出土した。17はG 19区の溝内から出土した甑片で、復原口径27.0cm、器高26.0cm、底径6.6cmの大きさと、胴部中途に牛角状の把手が付く。下端の器壁はやや厚めで、内彎しながら少し膨らんで口縁部へと開き、口縁部は肥厚して如意状に外反する。胴部外面と口縁部内面にハケ目がみられ、胴部内面はヘラ削りされる。いずれも胎土に細砂粒を多めに、角閃石・赤褐色粒などを含み、橙褐色・淡黄褐色に焼成されているが、16には大きな黒斑がみられる。

土師器杯(22) 内傾する口縁部を失うが、外径15.0cmの大きさの杯で、ヘラ磨きの痕跡が残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗茶褐色に焼成されている。

土師器椀(23・28) 23は口径11.0cm、器高5.2cm、28は口径10.8cm、器高6.2cmの大きさと、ともに内彎気味に口縁部が立ち上がり、僅かな底部をもつが、28の口縁部が薄めで内彎する。外面をハケ目調整、内面を板ナデないしナデ調整していて、28の内面に板の痕跡が残る。胎土に細砂・角閃石・赤褐色粒を含み、暗茶褐色・淡橙色に焼成されている。

土師器器台(24・25) 24は鼓形器台のくびれ部破片である。25は受け部を欠くが、残存器高7.8cm、裾径10.0cmの大きさ。裾部は直線的に開きくびれ部近くに円孔が4ヶ所穿孔される。くびれ部には受け部と裾部を繋ぐ円孔が上側から穿孔されている。内外面ともに僅かにハケ目が残っている。胎土に細砂粒・角閃石を含み、黄橙褐色に焼成されている。

手捏土器(15) 平面形が長さ4.9cm、幅3.9cmで、高さ3.3cmの四角っぽい椀形のミニチュ



第157図 3号溝出土土器実測図4 (1/3)

アである。細砂粒・角閃石を含む胎土で、淡黄橙色に焼成されている。

石製紡錘車(第146図5) 滑石製の截頭円錐形をなす紡錘車で、周縁の一部を欠損するが、外径4.5cm、厚さ1.4cm、孔径0.7cm、重量38.2gを測る。放射状に細かく削って整形される。

鉄 鏃(第153図10) 先端部を欠くが、篋被部の木質が残る基部で、残存長9.4cm、外径1.0cm、基部径0.3~0.4cmの大きさ。

不明鉄製品(第153図11) 断面形が0.2×0.6cmの楕円形になる棒状で、彎曲している。長さ3.2cmを測るが端部か否かも不明である。

出土土器では、一部古墳時代前期の例をみるが、須恵器杯蓋・杯身や土師器甕などの特徴からみて6世紀後半を前後する時期の資料が主体をなしていると言えよう。

4号溝(第144図)

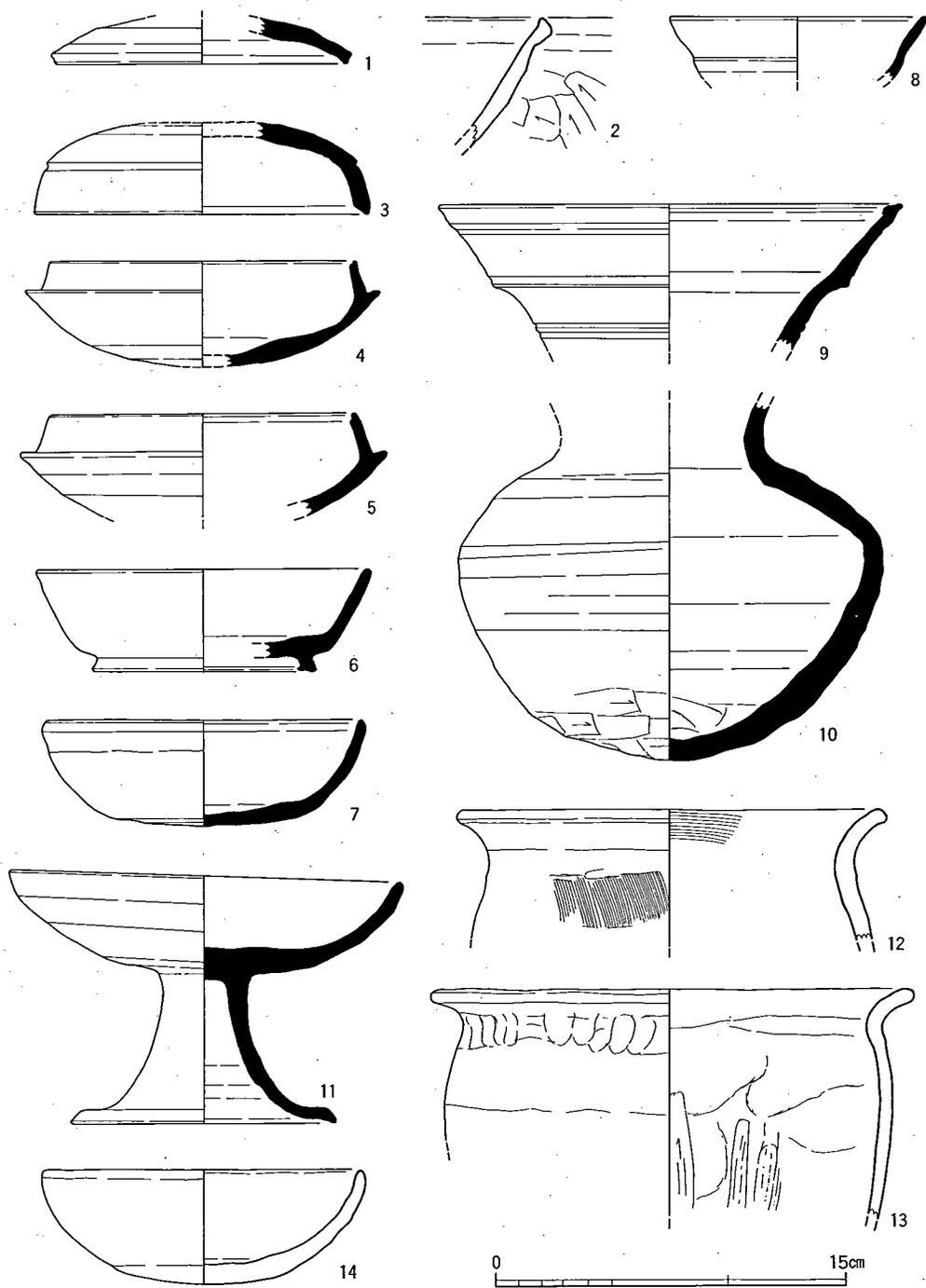
Ⅳ区西端を南北に横切る溝である。遺構検出面は標高18.1m前後で、西肩部が西側にある水路保全の非調査区域に潜るため、上縁の幅は不明確だが、現況で2.5m~4.0m幅あり、4.0mを上回るものと推察される。緩やかな逆台形断面の溝で、底面には砂利石が目立つが、底面の標高は、南端で17.8m、北端で17.7mを測り、深さは0.3m~0.4mである。調査区域では約20mの距離を掘り下げたが、N°1'E前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色の砂礫混じりの砂質土で、下部は砂質が強い。遺物では、須恵器片・土師器片が含まれていたが、破損面などの磨耗が進んでいる。中世の土師質土器片らしい破片もあるが、小破片で図示しえない。

なお、Ⅴ区東端部分は緩やかな傾斜ではあるが、東側が低くなっていて、東端の標高は17.8m前後である。この高さは4号溝の底面の標高と同じであり、Ⅴ区東端よりも東側に低くなるものと推察されるので、別に溝状部分が存在することになる。しかし農道と水路があって調査することはできなかった。西側の上縁部は標高18.1m前後であり、4号溝東側上縁からの幅は12m~15mの距離をもつことになり、その方向はN°2'W前後である。

5号溝(図版60-1・61-1、第144図)

Ⅵ区南西部を縦貫する溝で、N58区からS62区に向かってN45°Wの方向に30mの距離に亘って発見されたが、調査区端の畑地境界にもほぼ平行する。南東側での遺構検出面は標高18.2m前後で、上縁の幅は1.2m~1.5m。黄褐色粘土の地山を掘り込む逆台形断面の溝で、底面はほぼ平坦である。P60区では6号溝と交差して6号溝よりも後出する。交差部分を含めて10m余の部分は掘り下げなかったが、底面の標高は、南東端で17.8m強、北西端で17.7mを測り、深さは0.3m~0.4mである。溝内堆積土は暗灰茶褐色の砂礫混じり砂質土であり、須恵器片・土師器片や中世とみられる陶磁器片も混じっていたが、小破片で図示しえない。

出土遺物(第158図)



第158图 5·6号溝出土土器実測図 (1/3)

須恵器杯蓋(1) 復原口径13.0cmの大きさと、天井部を欠く。口縁端部に身受けのかえりを有するが、鳥嘴状の退化したもので、殆ど屈曲しない。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。

土師質鍋(2) 口縁部が僅かに外反して口唇端部をつまみ上げるように整える鍋である。胴部外面はヘラ削りされ、口縁部内外面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、淡黄橙色に焼成されている。

須恵器杯蓋は8世紀の可能性のあるものの、土師質鍋は13世紀後半から14世紀にかけてみられる鍋の口縁部に類似していて、この時期に近いとみておきたい。

6号溝(図版60-1・61-2、第144図)

Ⅵ区南西部から北東部に横切る溝で、5号・7号溝と重複・交差するが、両者より先行する。Q57区での遺構検出面は標高18.4m前後で、上縁の幅は2.0m～3.5m幅だが7号溝と交差するQ59区付近では幅2.0mである。一段低いP60区では遺構検出面は標高18.1m前後で、上縁幅は1.2mを有している。重複部分などを除いて部分的に掘り下げたが、やや鋭く掘り込まれる逆台形断面の溝で、底面は堅く平らである。底面の標高は、西端で17.5m強、東端で17.4mを測り、深さは1.0m前後を有することになる。調査区域では約18mの距離を確認したが、西側ではN55°E前後を向くが、中程で曲がり東側ではN87°E前後の方向をとる。溝内堆積土は茶褐色の砂質土で、下部は粘土質・砂質ともに強めて互層のように堆積する。遺物は、須恵器片・土師器片などが含まれていた。

出土遺物(図版64、第158図)

須恵器杯蓋(3) 身受けのかえりを有さない杯蓋で口縁部と天井部の境に段状の沈線がある。復原口径14.2cm、器高3.9cmの大きさと、胎土に砂粒を含み、淡茶灰色に焼成されている。堆積土下部で出土した。

須恵器杯身(4～8) 4は蓋受けのかえりを有する杯身で、口縁部は内傾する。復原口径13.2cm、外径15.3cm、器高4.5cmの大きさと、胎土に砂粒を含み、淡紫灰色ないし暗灰色に焼成されている。5は復原口径14.4cm、器高4.3cm、高台径9.6cmの大きさの、高台を有する杯身である。口縁部は直線的に開き、高台は踏ん張り気味である。細砂粒を含む胎土で、暗青灰色に焼成されている。5は堆積土上部で出土した。

6は復原口径13.2cm、器高3.5cm、7は復原口径14.0cm、器高4.5cmの大きさの杯で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。7の外底面はヘラ削りされた後にナデが加わる。胎土に細砂粒を含み、焼成があまく橙褐色・灰茶褐色を呈している。

8は復原口径11.0cmの大きさの杯で、口縁部は外反気味に開く。胎土に細砂粒を含み、灰色に焼成されている。

須恵器壺(9・10) 9は復原口径19.9cm、残存器高6.3cmの大きさの複合口縁で、甕であろうか。頸部から開いて屈曲するが口縁部は更に直線的に開き、端部はつまんで上面を平らに整えている。頸部に2条、屈曲部と口縁部に各1条の段状沈線が巡る。10は口縁部を失うが、残存器高15.5cm、復原胴最大径18.1cmの大きさの丸底壺であり、甕の可能性もある。やや肩の張る扁球形の胴部をもち、口縁部側は外反する。外底部はヘラ削りされるが、他は回転ナデないしナデ調整される。細砂粒を胎土に含み、灰色ないし黒灰色に焼成され、10の方がやや色調が淡い。

須恵器高杯(11) 復原口径16.9cm、器高10.4cm、裾径11.4cmの大きさの高杯で、杯部は内彎して立ち上がる。柱状部は中空で、裾に向かって外反し端部は鳥嘴状に折れる。杯部外底部に一部回転ヘラ削り痕をみるが、回転ナデ調整され、内底面は多方向にナデられる。胎土に細砂粒を含み、淡灰色ないし暗灰色に焼成されている。

土師器甕(12・13) 口縁部は肥厚せずに外反して、胴部はさほど膨らまない甕である。12は復原口径18.4cmの大きさで、胴部外面と口縁部内面にハケ目がみられる。13は復原口径20.4cmの大きさで、内外面ともに板ナデ痕の残るナデ調整で、頸部外面に指頸圧痕が目立つ。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡橙茶褐色・茶褐色に焼成されているが、13の胴部外面と口縁部内面に煤が付着する。12は堆積土下部で出土した。

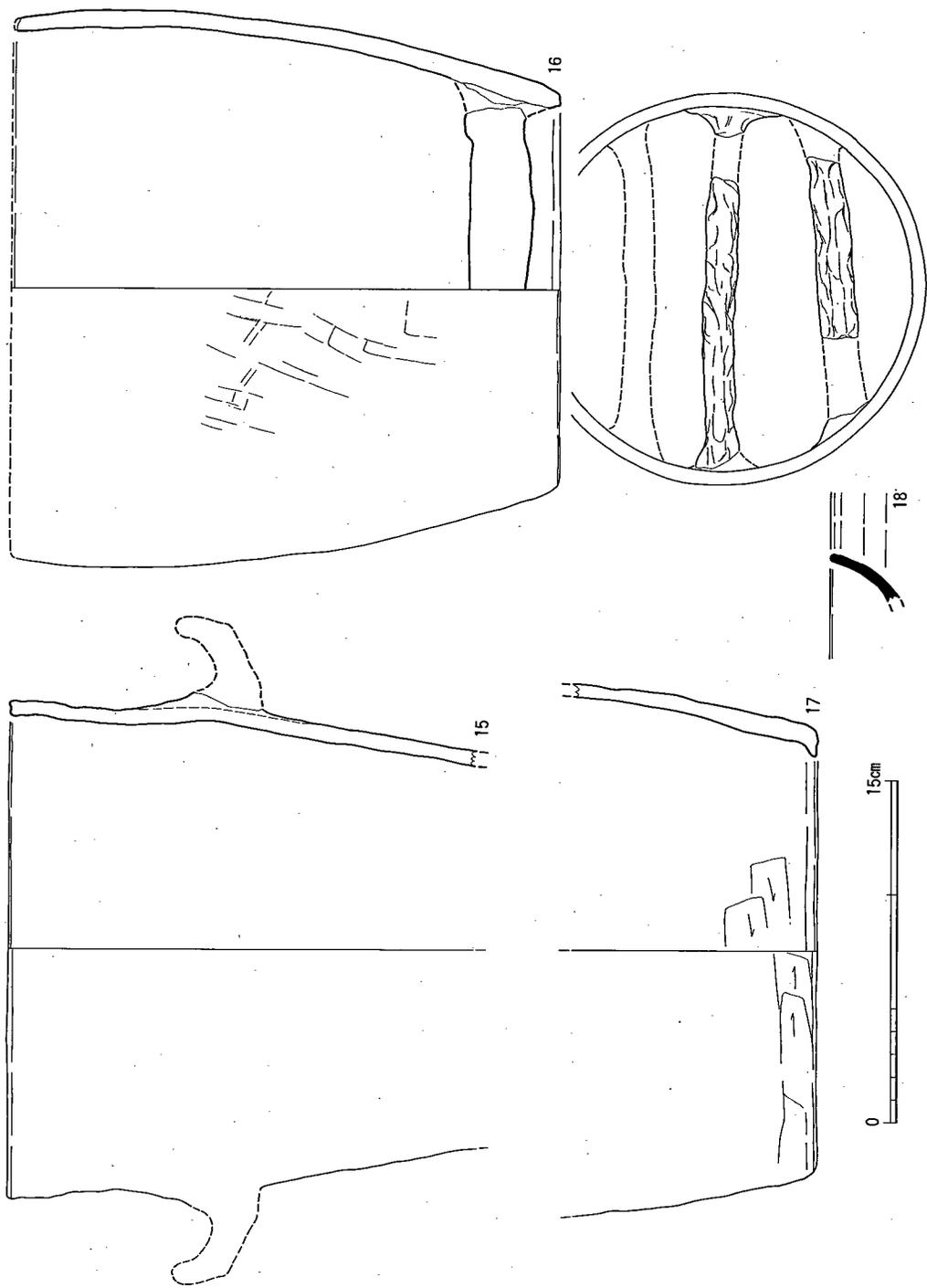
土師器杯(14) 口径13.7cm、器高4.9cmの大きさの杯で、口縁部は内彎して立ち上がる。内外面は板ナデないしナデ調整され、細砂粒・角閃石を含む胎土を赤茶褐色に焼成されている。

土師器甗(15~17) 15は把手部分が剥落するが、牛角状の把手が付くと思われる甗片で、復原口径22.0cmの大きさ。胴部は膨らまずに、口縁部はほぼ直線的に立ち上がって端部上面は平らに整えられる。全体にナデ調整されるが、胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒・雲母を含み、灰黄褐色に焼成されている。16は把手部分を失うが、復原口径23.8cm、器高23.9cm、底径17.3cmの大きさの甗で、口縁部・底部ともに内彎気味ながらも直線的に延びて、全体の器形は胴部が僅かに膨らむ樽形をなす。底部には径2×3cm程の楕円形断面の棒状の棧が渡されるが3本であろう。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み橙褐色に焼成されている。17は復原底径20.0cmの大きさで、底部は器壁が若干肥厚し、端部は内側に折れ曲がる。底部付近の内外面はヘラ削りされるが、殆ど膨らまない胴部の内外面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

土 錘(第152図2) 長さ4.6cm、外径1.9cm、孔径0.8cm、重量14gを測る、中膨らみの管状土錘で、細砂粒・角閃石を含む胎土を暗黄褐色に焼成している。

石 鏝(第146図7) 長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重量0.9gを測る、姫島産黒曜石製の凹基式打製石鏝で、全面に調整剥離が及んでいる。

出土土器では、6世紀後半頃の須恵器杯蓋・杯身もみられるが、高台を有する杯身は7世紀



第159图 6·7号沟出土土器实测图 (1/3)

後半ないしは末頃に属する。須恵器高杯や土師器甑もこの年代に含めても問題はなさそうであり、6世紀後半頃から一部埋まり、最終的には7世紀末に近い時期に埋没したことが考えられよう。

7号溝 (図版60-1、第144図)

Ⅵ区中央部に発見された溝で、6号溝と重複・交差するが、これより後出する。Q59区での遺構検出面は標高18.4m前後で、西側は段落ちで失われる。上縁は0.5m～0.6m幅で、浅い逆台形断面をもち、平らな底面の標高は西端で18.3m強、東端で18.3mを測り、深さは0.1m前後である。調査区域では約10mの距離を確認したが、N52°E前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色の砂質土で、須恵器片・土師器片などが含まれていた。

出土遺物 (第159図)

須恵器椀? (18) 内彎する口縁部破片で、内外面ともに回転ナデ調整されるが、細砂粒を若干含み、ややあまい焼成で、暗黄灰色を呈している。

この土器片のみでは時期の特定は難しい。

8号溝 (図版60-1、第144図)

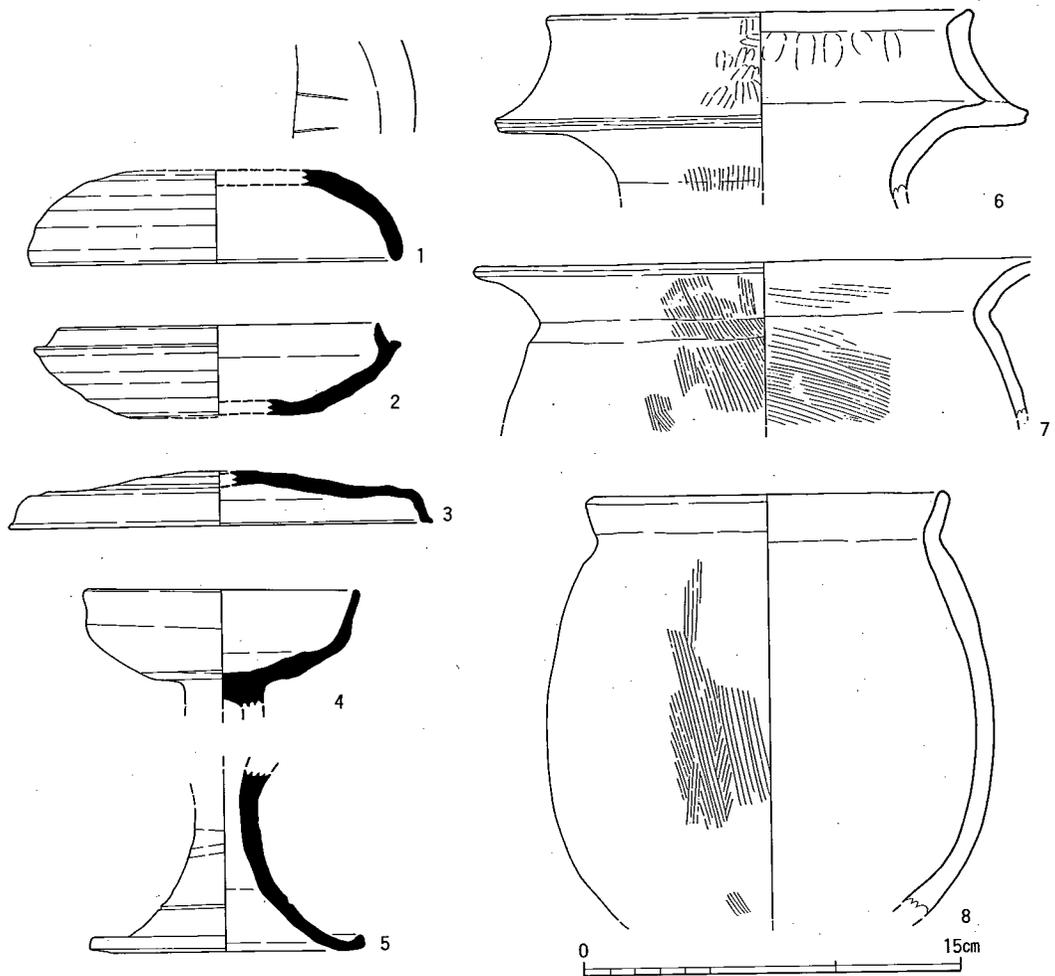
Ⅵ区南東部に発見された溝で、9号溝と交差するが、これより先行する。標高18.4m前後の処にある上縁の幅は0.3m～0.6mで、浅いU字形断面をもち、底面の標高は18.3m前後を測る。調査区域では約10mの距離を確認したが、N45°W前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色の砂質土で、土師器片が含まれているものの、小破片で図示しえない。

9号溝 (図版60-1、第144図)

Ⅵ区南東部に発見された溝で、8号溝・53号住居跡と交差するが、これより後出する。標高18.4m弱の処にある上縁の幅は0.9m～1.0mで、浅い逆台形断面をもち、底面の標高は18.2m前後を測る。調査区域では約8mの距離を確認したが、N12°E前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色の砂質土で、土師器片が含まれているものの、小破片で図示しえない。

10号溝 (図版61-3、第144図)

V区東部に発見された溝で、標高18.2m弱の処にある上縁の幅は南側で0.9m～1.0m、中程で0.7m～1.7mを有し、逆台形断面をなすが、底面の標高は17.8m前後を測る。調査区域では約20mの距離を確認したが、N°6'W前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色土で、下部はやや砂質が強い。中程の位置で僅かに東に振れるが、振れないで直線的に流れる支流もみられる。支流は約10m分を検出したが、床面が本流に対して約30cm程高く、北側に流下するが、



第160図 10・12・14号溝出土土器実測図 (1/3)

溝内堆積土は本流側と変わらない。本流内では、G32区にある、支流との分岐点付近で上縁の幅が広がり、下流寄りの床面より浮いた位置に、河原石が点在している。

出土遺物 (第160図)

須恵器杯蓋(1) 復原口径14.5cm、器高3.7cmの大きさの、身受けのかえりを有さない杯蓋で、口縁端部は厚めで丸味もっている。天井部を失うが、残された部分に直線2条?のヘラ記号がみられる。胎土に砂粒を含み、明茶灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身(2) 復原口径12.8cm、外径13.6cm、器高3.8cmの大きさの杯身で、口縁部の立ち上がりはやや短い。胎土に砂粒を含み、灰色に焼成されている。

須恵器蓋(3) 復原口径17.0cm、器高2.7cmの大きさの、屈曲した口縁部がやや深めの蓋で

ある。口縁端部は僅かに外へ出る。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。

これらの土器のうち1・2の杯蓋・身はやや古い様相をもつが、3の蓋は7世紀後半以降の特徴を示している。

11号溝 (図版4-2、第144図)

Ⅳ区南西部に発見された溝で、45号住居跡の南側から東側を通り、F28区で近接している。遺構検出面は標高18.2m弱で、上縁の幅は0.6m～0.9mあり、逆台形状の断面をなす。底面の標高は南西側で18.1m強、北東側で18.0m前後を測る。調査区域では約22mの距離を確認したが、N28°E前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶褐色土で、下部はやや砂質が強い。須恵器・土師器の細片が若干出土したのみである。

なお、約4m西側にはほぼ平行する溝状の遺構が発見されたが、最も深い南側で上面の幅0.6m、深さ10cm弱で、N18°E前後の方向を向く。

12号溝 (図版4-2、第144図)

Ⅲ区東部に発見された溝で、2号溝の3～4m東側にはほぼ平行する。南端は試掘トレンチで切れ、北端はF18区東南隅部で消滅している。遺構検出面は標高18.2m強であり、上縁の幅0.3m～0.6mの浅いU字形の断面をなし、底面の標高は18.2m弱である。約13mの距離を確認したが、N28°W前後の方向をとる。溝内堆積土は暗茶灰褐色土で、須恵器・土師器の細片が若干出土したのみである。

13号溝 (図版60-2、第144図)

12号溝の北側に相当するⅢ区北隅から北東側に発見された溝で、14号土壇、16号住居跡と一部重複するが、後出する。遺構検出面はF18区では標高18.1m強、I15区では標高17.9m強である。上縁の幅0.6m～0.7m前後の浅いU字形の断面をなすが、底面の標高は17.9mから18.0m強である。約23mの距離を確認したが、非調査範囲に一部潜る部分から東側はN63°E前後、西側はN45°Eの方向をとり、屈曲する。溝内堆積土は暗茶灰褐色土で、須恵器・土師器の細片が若干出土したのみである。

14号溝 (第144図)

Ⅲ区南東隅部に発見された溝で、20号～22住居跡と重複するが、後出する。遺構検出面はB15区では標高18.3m前後、C14区では標高18.3m弱であり、上縁の幅0.5m～0.6mの浅い逆台形状の断面をなし、底面の標高は18.2m前後である。約7mの距離を確認したが少し蛇行していて、南側は調査区域外、北側は非調査範囲に潜る。溝内に暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物 (第160図)

須恵器高杯(4・5) 4は杯部、5は脚裾部である。杯部は復原口径11.0cm、杯部高3.5cmの大きさで中空の柱状部が付く。口縁部は直線的に立ち上がるものの僅かに外反気味である。脚裾部破片は、中空の柱状部だが透かし窓はない。沈線が1条巡る裾部は外反して開き、裾端部は跳ね上がる。胎土に細砂粒を含み、暗灰色・橙褐色ないし黒灰色に焼成されている。

石包丁(第146図7) 硬質の砂岩製石包丁の端部破片で、片面剝落時の剝離面にも研磨痕がみられ、穿孔の一部も確認される。残存長3.7cm、幅3.4cm、厚み0.4cm、重量6.6gを測る。

出土土器では須恵器高杯のみで時期を決め難いが、6世紀末前後であろうか。

15号溝 (第144図)

I区北東隅部に発見された溝で、7号住居跡の東側に近接する。遺構検出面は標高18.2m前後で、約4.0mの長さに、北西側の上縁幅1.2m～1.6m、東端で3.2mに広がる。上部は浅い落ち込みのように逆台形状の断面をなすが、10cmほど下がった部分で幅0.6～0.9mの断面U字形の溝状をなし、底面の標高は17.8～18.0m弱である。北側は浅くなっているためI区側に続かず、旧県道を挟んだ0区では標高16.7m前後と低くなっていて、延長部分は発見されなかった。溝内には暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物 (第160図)

壺(6) 屈曲部が強く飛び出す複合口縁壺の口縁部破片で、復原口径17.0cmの大きさ。口縁部は反りながら内傾して立ち上がる。凸帯状になった屈曲部外面に沈線が1条巡り、口縁部外面にヘラ磨き痕、頸部外面にハケ目がみられ、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒を多めに、角閃石・赤褐色粒も含み、淡茶橙色に焼成されている。

甕(7・8) 7は復原口径23.0cmの大きさの、口縁部が肥厚せずに外反して、内外面をハケ目調整する甕である。胴部はあまり膨らまないが、おそらく長胴気味の甕であろう。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成され、外面に煤が付着している。8は復原口径14.4cm、胴最大径17.6cmの大きさの甕で、口縁部は短く僅かに開いて立ち上がる。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整される。胎土に角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

出土土器では弥生後期後半頃の複合口縁壺をみるが、8の甕は5世紀以降であろうか。

16号溝 (第144図)

I区北端のF8区で発見された溝で、1号建物跡の北西側、8号土壌の北東側に位置する。N29°E前後の方向に約4m分あるが、北東側は水路保全の非調査部分に潜る。標高18.0m位の上縁で幅0.4～0.8m、深さ10cm余りの断面逆台形状を呈する。縄文土器片と土師器甕小破片が出土したが、土師器片は図示しえない。

17号溝 (図版60-2、第144図)

Ⅳ区東部に発見された溝で、31号・32号住居跡の間であって両者より後出し、北側は調査区域外、南側はⅢ区との間の非調査部分に潜るが、Ⅲ区での延長部分は検出できない。遺構検出面は標高18.0m前後で、N25°W前後の方向に約11.5mの長さを確認した。上縁の幅0.4~0.5mの断面逆台形状の溝で、底面の標高は南側で17.9m、北側で17.8m前後である。溝内には暗茶褐色土と茶褐色砂質土が堆積し、土師器小破片などが含まれるものの、図示しうる例はない。

6. その他の遺構と遺物

柱穴状ピット出土遺物 (図版65-2、第161図)

柱穴状ピットから出土した遺物のうち、比較的器形が明確な例を若干紹介しておきたい。

土師器甕 (1・2) ともに25号住居跡の南側1.5mに位置するピットから出土した。1は口径15.7cm、器高29.0cm、胴最大径24.1cmの大きさの甕で、やや尖る丸底、倒卵形の体部をもち、口縁部は僅かに外反するが直線的に開く。胴部内外面は磨滅して調整手法は不明だが、口縁部はヨコナデないしナデ調整される。2は復原口径17.4cm、残存器高18.1cmの大きさの器壁の薄い甕で、口縁部は外反する。胴部外面はハケ目、内面は頸部までヘラ削りされる。ともに細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含んだ胎土を、茶褐色ないし明橙褐色に焼成され、外面に煤が付着する。庄内式甕の影響を受けた甕であろう。

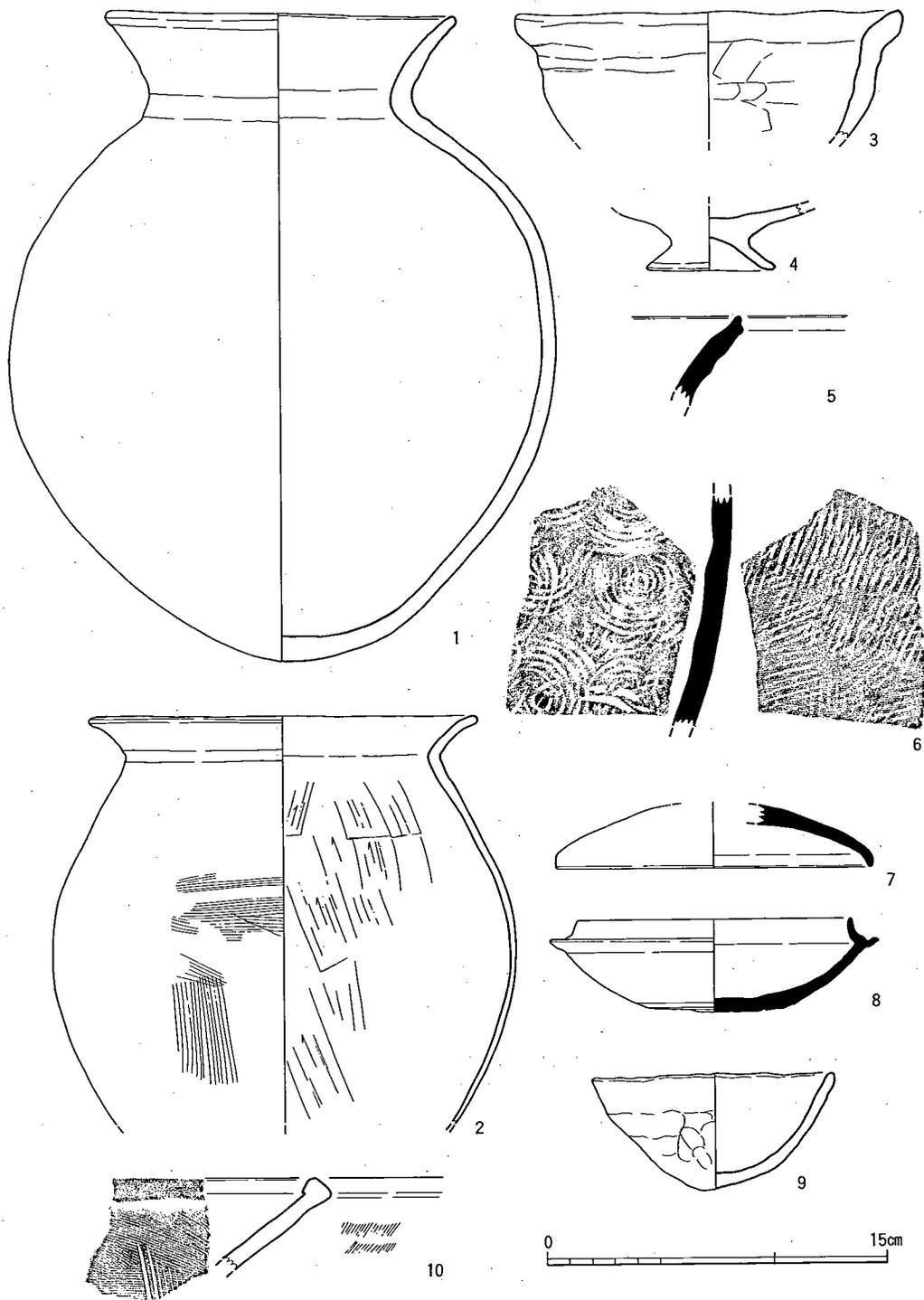
土師器鉢 (3) Ⅳ区北部のⅠ20区で3号溝の北西側、34号住居跡の北側にあるピットから出土した。器壁が厚く、復原口径16.6cmの大きさの如意状に外反する鉢の口縁部である。体部は窄まり、外面はナデ、内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土師器脚台 (4) 15号住居跡と10号土壌の間に位置するピットから出土した、裾径5.6cmの大きさの円錐形に開く脚台で、体部は底部が広がるものの全体の形は不明。内外面ともにナデ調整され、細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土を、淡茶褐色に焼成され、煤が付着する。

須恵器甕 (5・6) Ⅴ区のH41区西端のピットから出土した。5は口縁端部が上につまみ上げられる。6は外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕のある胴部破片である。胎土に砂粒を含み、淡灰色・青灰色に焼成されている。

須恵器杯蓋 (7) 51号住居跡のカマド部分出土の口縁部破片である。復原口径14.0cm、残存器高2.9cmの大きさで、外面には灰の自然釉がかかる。胎土に細砂粒を含み、青灰色に焼成されている。

須恵器杯身 (8) 16号土壌から出土した、蓋受けのかえりをもつ杯身である。復原口径



第161図 柱穴状ピット出土土器実測図 (1/3)

12.0cm、器高4.2cm、外径14.4cmの大きさで、口縁部は内傾して反る。外底面はヘラ切り離しのままである。細砂粒を含み青灰色に焼成されている。

土師器碗(9) H43区中央部南寄りのやや広いピットから出土した、復原口径10.7cm、器高5.2cmの大きさの碗で、内外面ともにナデ調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されるが、口縁部外面に煤が付着する。

瓦質土器摺鉢(10) 54号住居跡の南西外側のピットから出土した。直線的に開く口縁部をもち、端部は内側に肥厚するが、外面はハケ目が一部残るナデ、内面はハケ目の後に7条単位と思われる櫛歯状の目が刻まれる。胎土に細砂粒を若干含み、外面が淡灰色、内面が黒灰色に焼成されている。15・16世紀頃の所産であろう。

1号土器溜り(図版66-1)

IV区東南部のF21区で発見されたが、2号溝の南西側に接し一部溝に削られる。

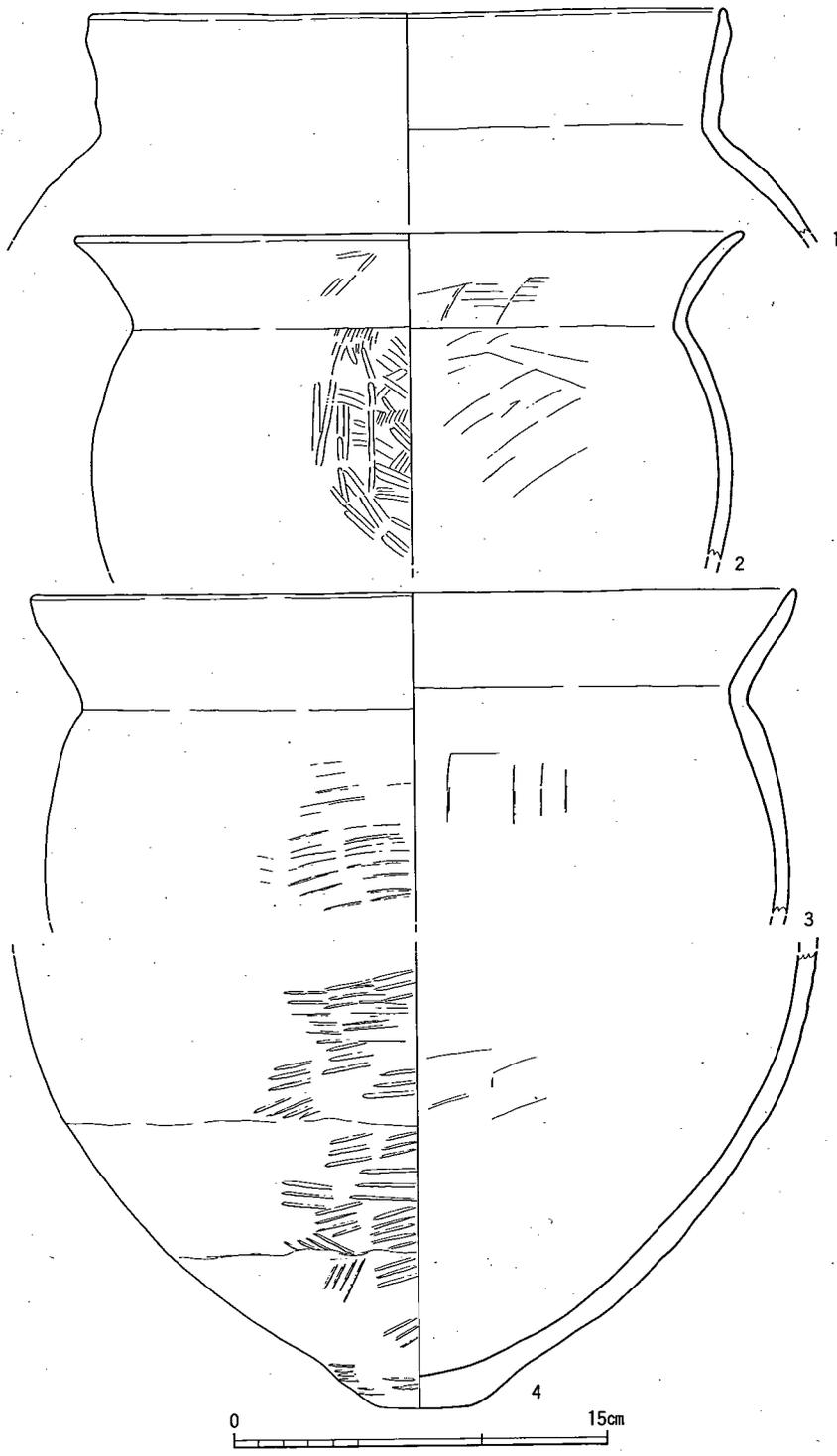
出土遺物(図版67・68、第162~164図)

甕(1~14) 1は直立気味に口縁部は立ち上がるが、胴部外面に煤の付着する甕で、復原口径26.0cmの大きさ。器面は磨滅する。2は口縁部が緩やかに外反して胴部が膨らむ甕で、復原口径27.0cmの大きさ。外面はハケ目調整の後にヘラ磨き痕がみられ、内面は板ナデ調整される。13も口縁部が外反する甕で、復原口径17.0cmの大きさ。胴部外面と口縁部内面にハケ目がみられ、胴部内面は板ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色ないし茶褐色に焼成されている。

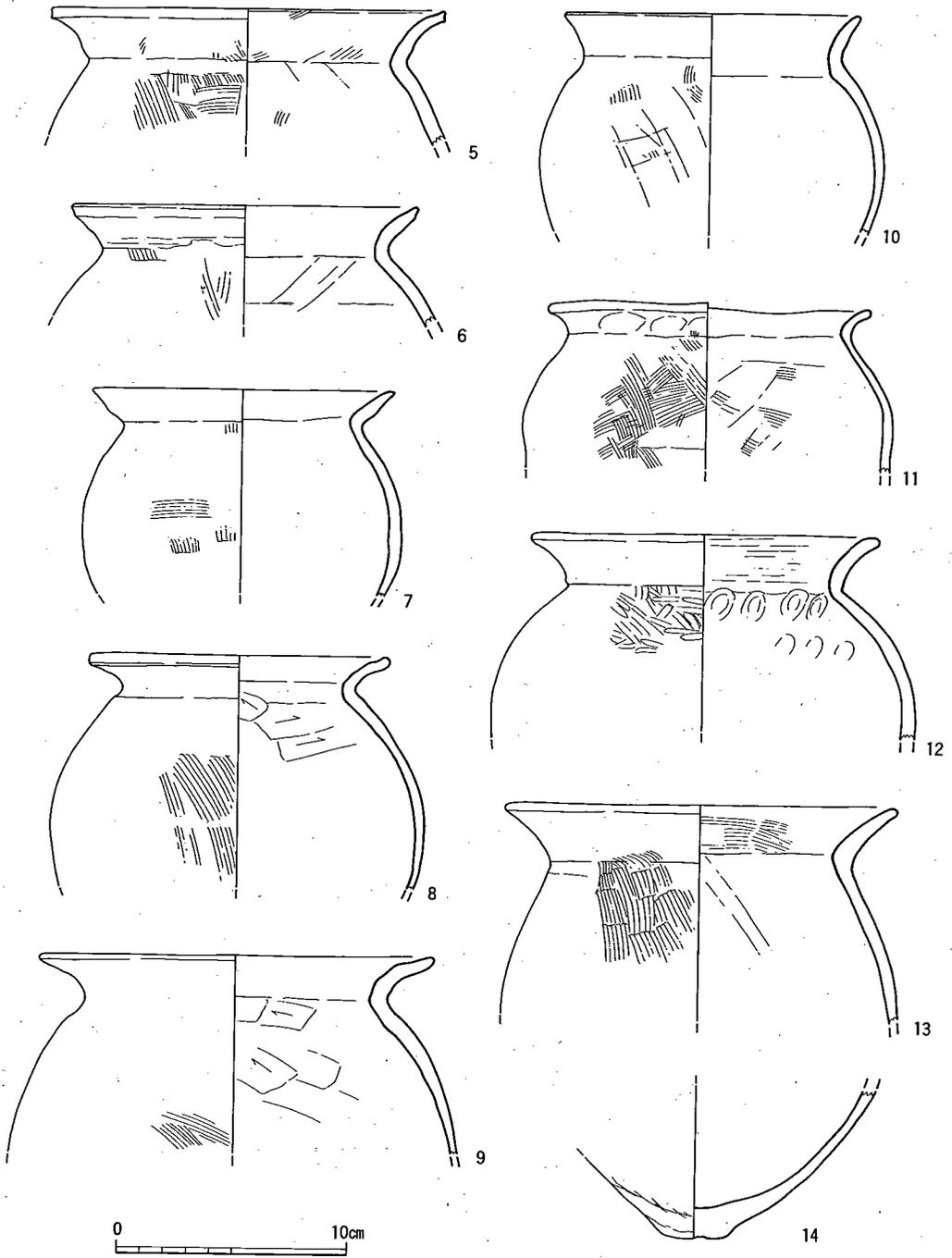
3は復原口径31.0cmの大きさの口縁部が外反する甕で、胴部外面に平行叩き目がみられ、内面は板ナデ調整される。4は胴部外面に平行叩き目のみられる胴下半部で、底部は小さく飛び出る平底。内面は磨滅するが板ナデ調整される。14も底部が飛び出し気味の小さな平底の甕底部破片で、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色ないし橙褐色に焼成され、外面に煤が付着する。5は復原口径17.2cmの大きさの、口縁部が外反して端部が更に外開きになって上方に摘み上げられる。内外面ともにハケ目調整の後にナデ消されるものの胴外面に残る。6は復原口径15.0cmの大きさで、口縁部は外反して端部は摘まれる。胴部外面はハケ目の残るナデ、内面は粘土帯接合痕の残る板ナデで調整される。

7~9は復原口径が13.0cm、13.0cm、17.0cmの大きさの甕で、なで肩の胴部とやや強く外反する口縁部をもち、口縁端部は僅かに摘み上げられる。胴部外面はハケ目、内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし橙褐色に焼成されて、外面の一部に煤が付着する。

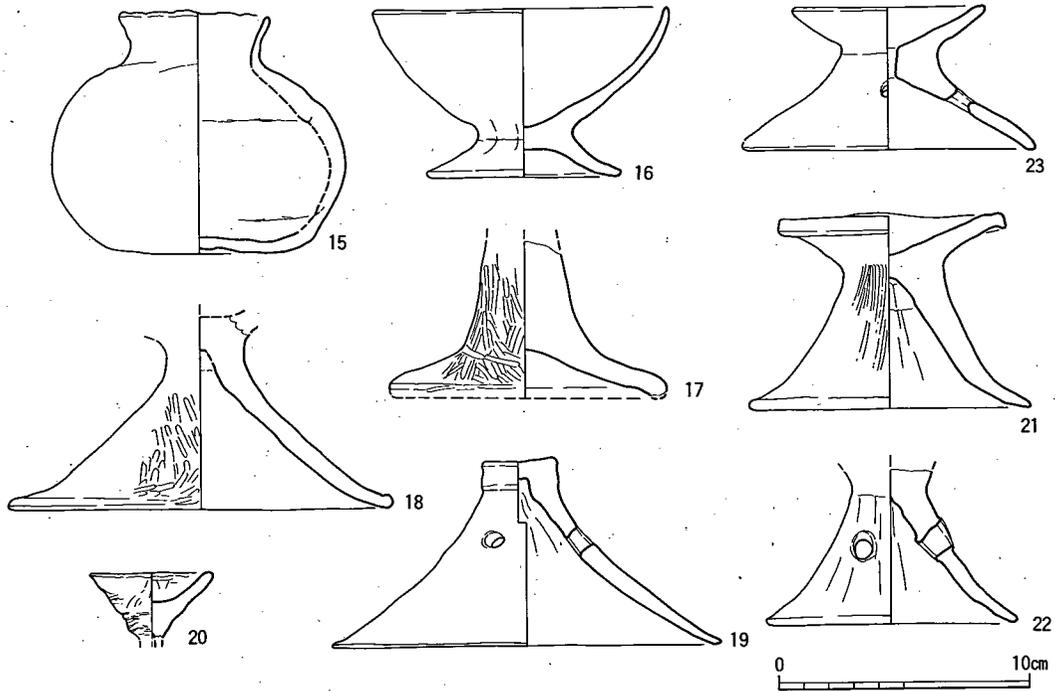
10~12は復原口径が17.5cm、14.0cm、15.0cmの大きさの甕で、丸く膨らんだ胴部をもち、口縁部は外反するが端部は丸い。胴部外面は10・11がハケ目で、12はヘラ磨きの加わるナデ調



第162図 1号土器溜り出土土器実測図1 (1/3)



第163図 1号土器溜り出土土器実測図2 (1/3)



第164図 1号土器溜り出土土器実測図3 (1/3)

整、胴部内面は板ナデ調整、12は粘土帯接合痕と指頭圧痕の残るナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰褐色ないし橙褐色に焼成されて、外面に煤が付着する。

壺(15) 口径6.0cm、器高9.7cm、胴最大径11.8cmの大きさの壺で、口頸部は短く立ち上がり、平底の底部はやや内に凹む。内外面ともにナデ調整されるが、板ナデも併用されたのか板小口圧痕が頸部外面にみられる。胎土に細砂粒を多めに、雲母・赤褐色粒・角閃石も含み、淡茶褐色に焼成されている。

高杯(16~22) 16は口径11.8cm、器高6.8cm、裾径7.6cmの大きさの、杯部が碗形で低く外反する脚部をもつ高杯で、台付碗とでも言うべき器形である。半球形の杯部では口縁部が内彎気味にたち上がり、器面は風化・磨滅するもののナデ調整であろう。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、赤橙色に焼成されている。

17~19・22は杯部を失った脚部で、17は外面をヘラ磨き調整される中実の柱状部と、大きく開く脚部をもつが、段を介して開くと思われる裾部も欠失する。18・19・22は柱状部が中空で杯底部から概ね円錐形状に脚裾部へ開き、裾端部は更に外反する。裾径と脚部高は、順に14.9cm・7.0cm、15.5cm・6.5cm、10.0cm・5.5cmの大きさ。19・22には柱状部との境に3ヶ所の円孔が穿孔される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色ないし淡茶褐色に焼

成されている。

21は口径8.9cm、器高6.9cm、裾径11.2cmの大きさの高杯。口縁端部外面を平らに整え、円錐形状の脚部は端部で更に外反する。杯部内面は磨滅するが、脚部外面をハケ目、内面をナデ調整される。胎土に細砂粒を含み、橙色に焼成されている。

20は杯部が椀形をなす手捏の高杯。復原口径5.0cm、残存器高2.6cmの大きさで、脚部を失う。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明黄灰褐色に焼成されている。

器台(23) 受け部片が上手く接合しないが、図上復原できる。復原口径7.6cm、器高5.8cm、裾径11.6cmの大きさで、受け部は浅い椀形、脚部は低い円錐形をなし、裾部はやや内彎する。受け部と脚部を繋ぐ円孔が上から穿孔され、脚部には4ヶ所に円孔が穿孔される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。

鉄鏃(第165図1・2) 1は片丸造柳葉形鏃で、先端と基部を欠き、現存長3.3cm、身部11幅1.6cm、厚さ0.4cm、篋被部側の幅0.8cm、厚さ0.5cmの大きさ。2は端刃造と推定されるが方頭の細根鏃で、基部側を欠く。現存長2.3cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmの大きさ。

出土土器は弥生時代後期末頃のものも含まれるが、7~9の甕や、高杯・器台の特徴などからみて庄内式土器の特徴に近く、3世紀末~4世紀前半頃の年代であろう。

2号土器溜り(図版66-2)

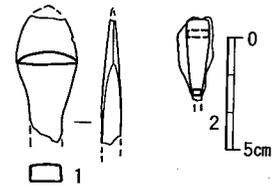
IV区北部のI22区で発見されたが、39号住居跡の南西側に近接して、一部切られている。

出土遺物(図版67・68、第166~168図)

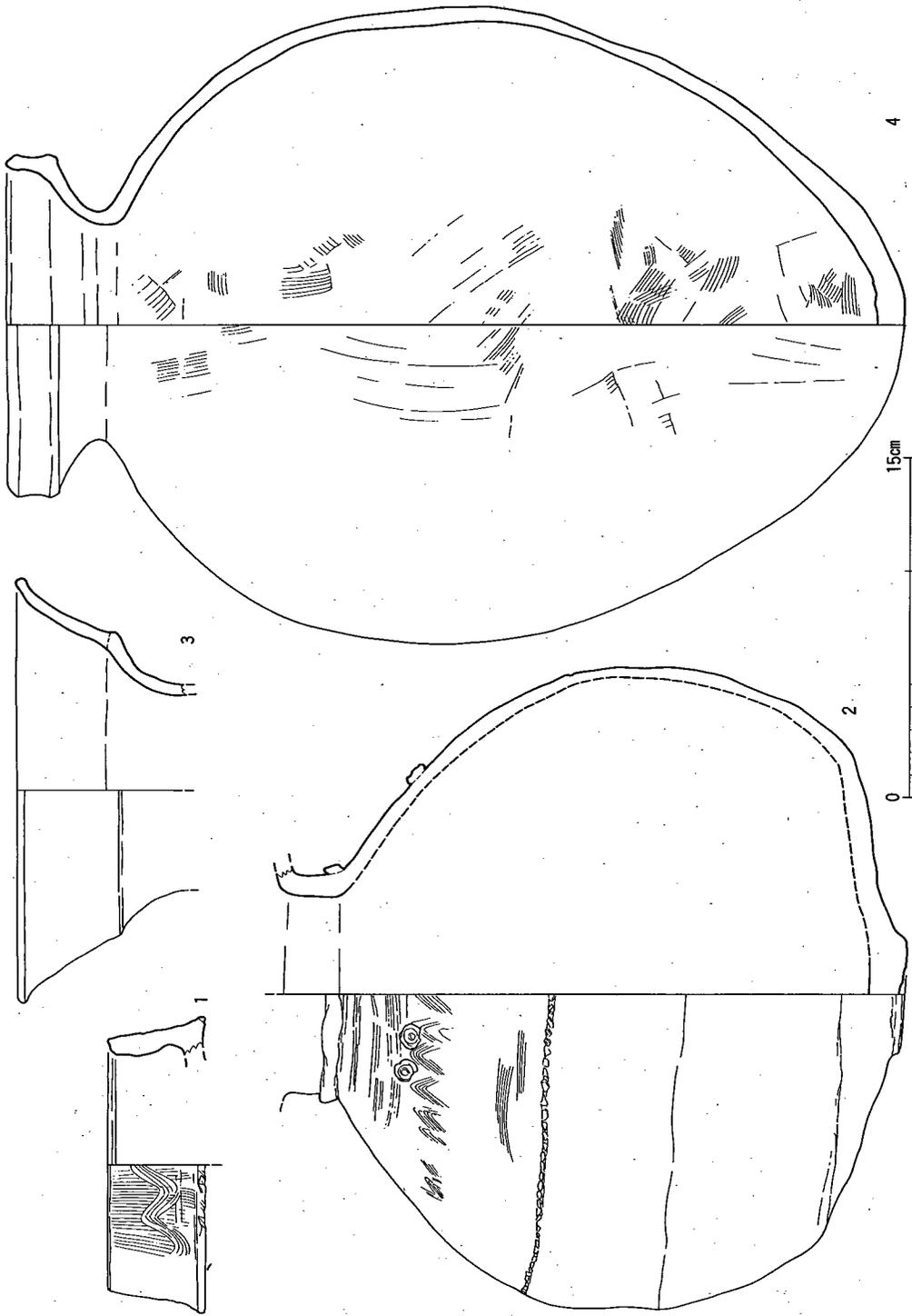
複合口縁壺(1~5) 1は復原口径11.2cmに内傾して立ち上がる口縁部片で、外面は縦方向のハケ目の上に波状文を描き、屈折部は突出して刻み目が施される。2は口縁部を欠くが、底部が僅かに凹む底径5.2cmの平底から胴下部は大きく開き、胴最大径28.5cmの大きさのなで肩下膨れの胴部をもつ。頸部は直立し、口縁部側に屈曲して開くが、1のような口縁部が続くのであろう。内外面ともにナデ調整されるが、胴部に巡らせた押し引き風の列点から上側は横方向に楕歯状のハケ目を巡らせて、中程に波状文を一周させている。また3ヶ所に2個単位の竹管文様のある鉤状の突起を貼り付け、胴部と頸部の境は紐状の凸帯が貼り付けられる。1・2ともに胎土に細砂粒・角閃石を含み、茶褐色ないし黄橙色に焼成されている。

3は口径18.8cm、残存器高7.5cmの大きさで、二重に外反して開く口縁部である。胎土・色調・頸部の形状などは、10号住居跡のP2出土の壺に酷似していて同一個体の可能性が高い。

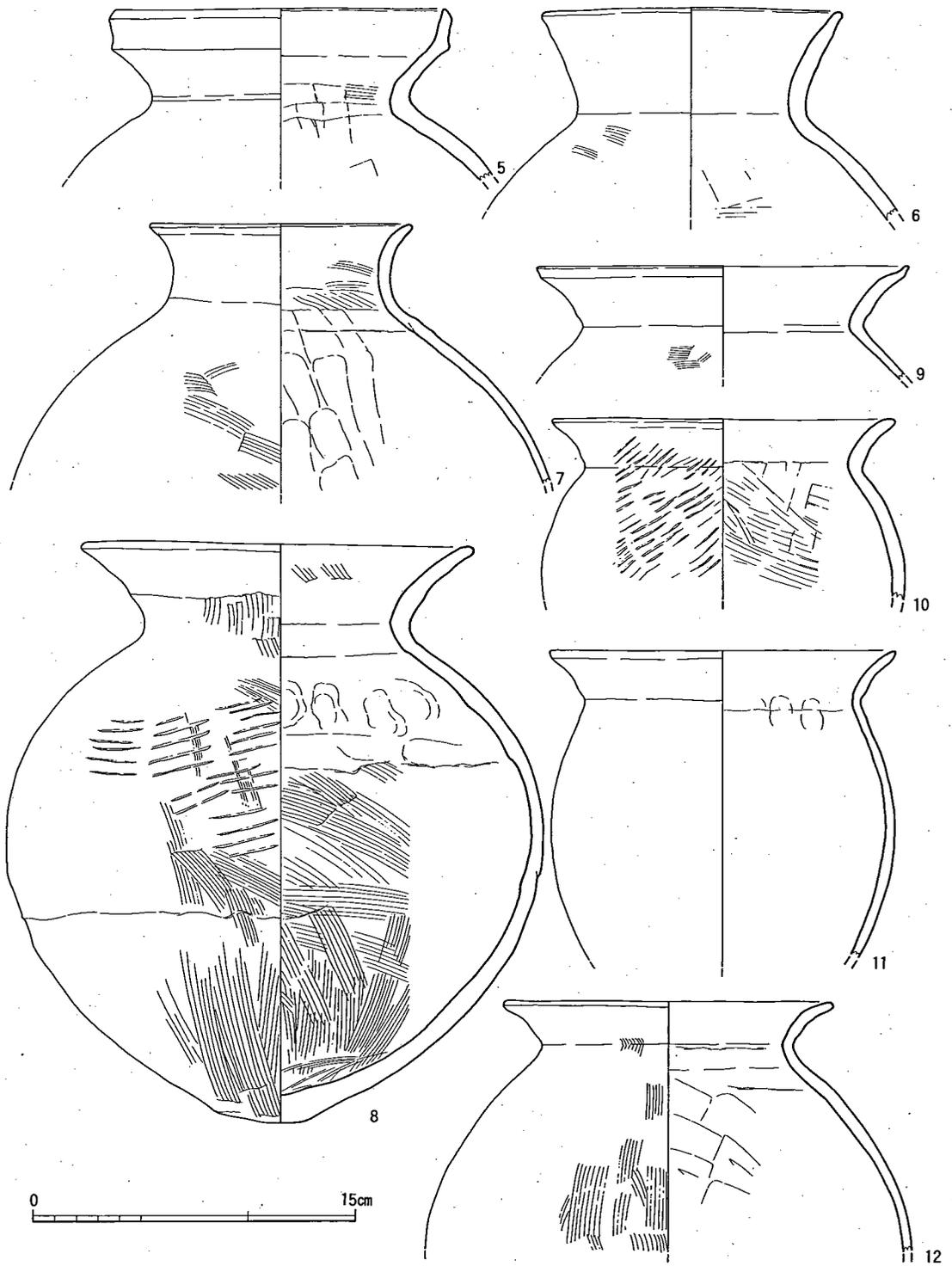
4・5は頸部から外反して開いた口縁部が、屈曲して直立気味に立ち上がるもので、復原口径は15.0cmと16.0cmの大きさである。完形に復原できる4では器高39.6cm、胴最大径28.0cm



第165図 土器溜り出土鉄製品実測図(1/2)



第166図 2号土器溜り出土土器実測図1 (1/3)



第167図 2号土器溜り出土土器実測図2 (1/3)

の大きさもち、底部が尖り気味の丸底で、長胴倒卵形の胴部である。胴部内外面はハケ目調整の後に板ナデないしナデを加えてハケ目をかなり消している。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色色粒を含み、橙茶褐色に焼成されるが、外面に煤が付着していて、むしろ甕であろう。

壺(6~8) いずれも口縁部は直線的あるいは外反して開き、胴部は大きく膨らむ。口径は順に14.0cm、12.2cm、18.2cmで、完形に復原できる8では器高26.8cm、胴最大径25.0cmの大きさで、凸レンズ状に膨らむ小さな底部をもつ。胴部外面はハケ目調整されるが平行叩き目が残る、内面は下半にハケ目がみられ肩部は指頭圧痕が残るナデで、口縁部内外はハケ目が残るナデ・ヨコナデで調整される。7の胴部外面はハケ目、内面は指頭痕の残るナデ調整で、頸部内面にハケ目がみられる。6~8ともに胎土に赤褐色色粒・角閃石・細砂粒を含み、橙褐色・黄褐色ないし明るい茶褐色の色調に焼成されている。

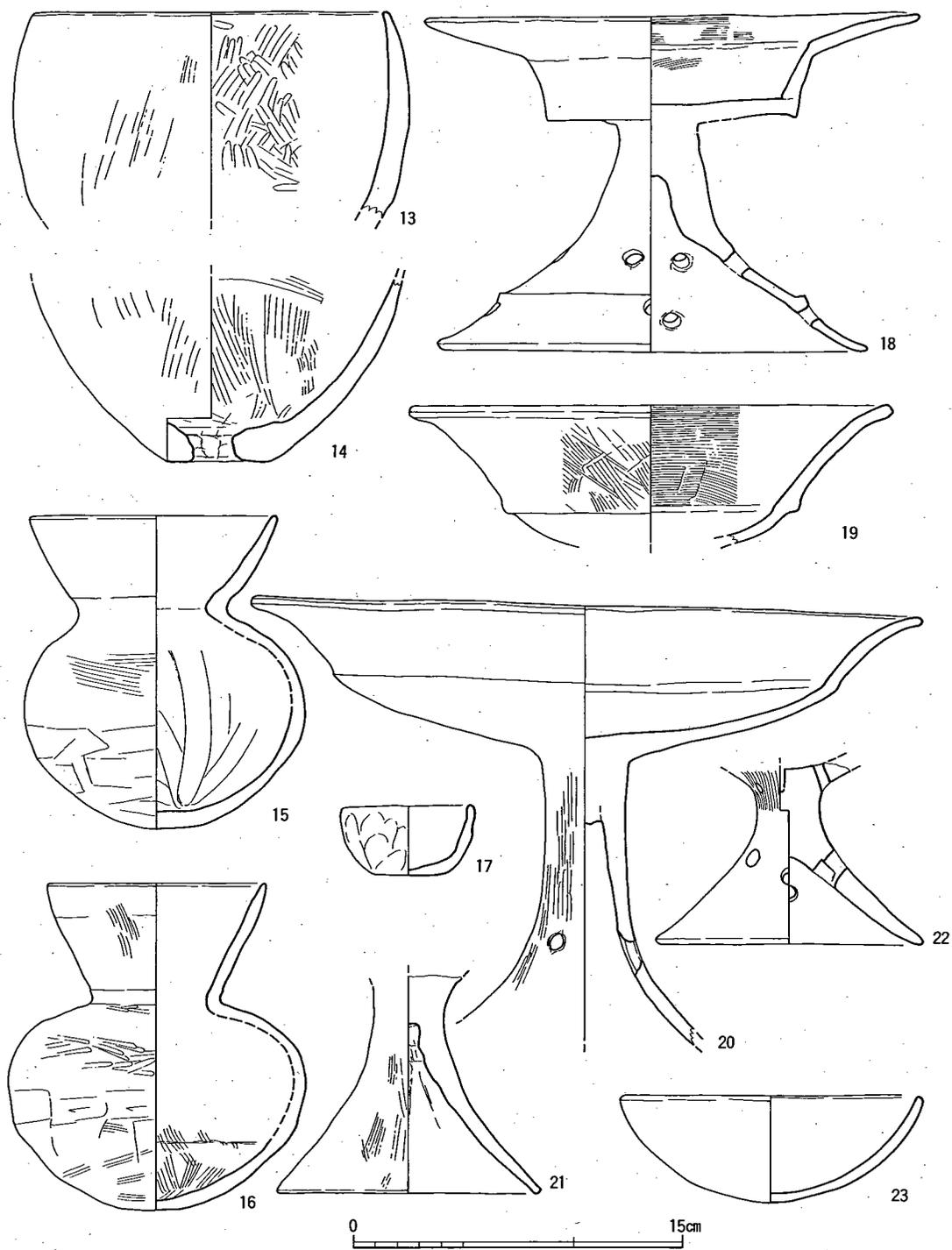
甕(9~12) 9は復原口径17.4cmの口縁部破片で、口縁端部は上方につまみ上げられる。内面は磨滅するが、胴部外面にはハケ目が残る。10~12の外反した口縁部は端部を丸く仕上げている。10は復原口径16.0cmの大きさで、胴部外面に平行叩き目、内面に粗いハケ目のようにみえる板ナデ痕がみられる。11は復原口径・胴最大径ともに16.0cmの大きさで、内外面ともに風化・磨滅している。12は口径15.4cm、胴最大径22.7cmと胴の張りがやや大きい。胴部外面はハケ目、内面は頸部下までヘラ削りされ、頸部下に粘土帯接合痕がみえる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色色粒を含み、橙褐色・淡茶褐色などの色調に焼成されて、外面に煤が付着している。

鉢(13) 復原口径16.3cmの大きさで、胴部側が膨らみ、口縁部は内彎する。内面はヘラ磨きされるが、外面は板ナデ調整であろう。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

甗(14) 底部側の破片で、口縁部側の形状は分からない。底径4.9cmのやや厚みのある底部の中央を穿孔した甗で、胴部は丸く膨らみ、内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

小形丸底壺(15・16) 15は口径11.3cm、器高14.3cm、胴最大径12.8cmの大きさで、扁球形の体部に内彎して開く口縁部が付く。胴部外面の下半はヘラ削り、上半はハケ目調整され、内面は指頭痕が明瞭に残るナデで調整される。16は復原口径9.8cm、器高15.0cm、胴最大径13.5cmの大きさで、扁球形の体部に直線的に開く口縁部が乗るものの開きは少なめ。胴部外面にヘラ削り痕、上半にヘラ磨き痕がみられ、ハケ目も残る。内面の底部付近はハケ目がみられるが、上部はナデ・ヨコナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色色粒を含み、淡黄橙色・明橙色に焼成されている。

手捏椀(17) 口径6.1cm、器高3.2cm、底径3.3cmの大きさのミニチュア椀で、胎土に角閃石・赤褐色色粒・雲母を含み、淡黄褐色に焼成されている。



第168図 2号土器溜り出土土器実測図3 (1/3)

高杯(18~21) 18は口径22.3cm、器高15.3cm、復原裾径19.4cmの大きさの鼓形に似た器形の高杯である。杯部は平らな底部からほぼ直に立ち上がり、口縁部が大きく開く。柱状部は半ば中実で、裾部は二重に外反して開き、4ヶ所上下2段に円孔が穿孔される。器面は風化・磨滅するが、口縁部内面にハケ目が残る。19は復原口径22.0cmの大きさの杯部破片で、杯下半部は丸味をもち、屈曲部は肥厚する段をなし、口縁部は外反して開く。口縁部内外面にはハケ目がみられ、外面に煤が付着する。

20・21は大きな杯部と細長い柱状部をもつ高杯で、20は脚裾部を欠き、21は杯部を欠く。20は口径30.6cm、残存器高20.2cm。杯部高は7.0cmを占め、口縁部は半分の高さで外反する。ヘラ磨きされる柱状部は細長く、裾部へ反って開く高さに3ヶ所の穿孔がある。21は20の柱状部に比して柱状部は短く、脚裾部は円錐状に開き、外面にハケ目と内面に絞り痕を残すが、ナデ調整される。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色・淡黄褐色に焼成されている。

器台(22) 受け部を欠くが、残存器高8.3cm、裾径12.2cmの大きさで、脚裾部は円錐形に開き、上部に円孔が内外から穿孔され、非貫通の孔もある。短い中実の柱状部を介して受け部は開くが、上側から円孔が穿孔され、中央部の孔は非貫通である。受け部側の外面にハケ目がみられるものの磨滅が進む。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗茶橙色に焼成されている。

椀(23) 復原口径13.8cm、器高4.9cmの大きさの椀で、口縁部は内彎気味に開く。全体に磨滅するが、ナデ調整であろう。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

これらの土器では、弥生後期後半頃の例もあるが、庄内式平行期頃の特徴を備えた例も多数みられるので、3世紀末前後が妥当であろう。

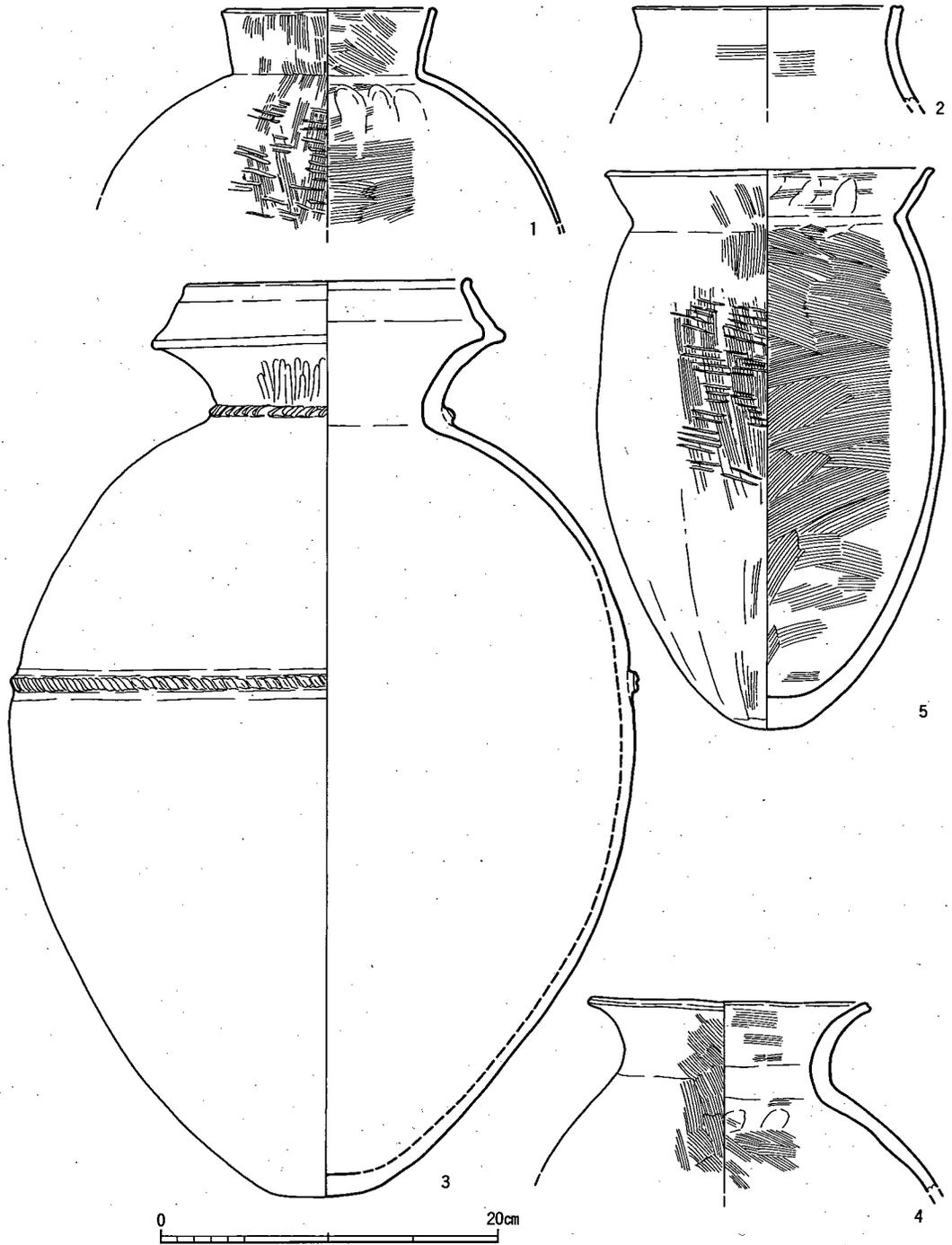
3号土器溜り(図版66-3・4)

Ⅳ区北部のH23区で発見されたが、41号住居跡の北側、2号土器溜りの南西側に近接して位置している。

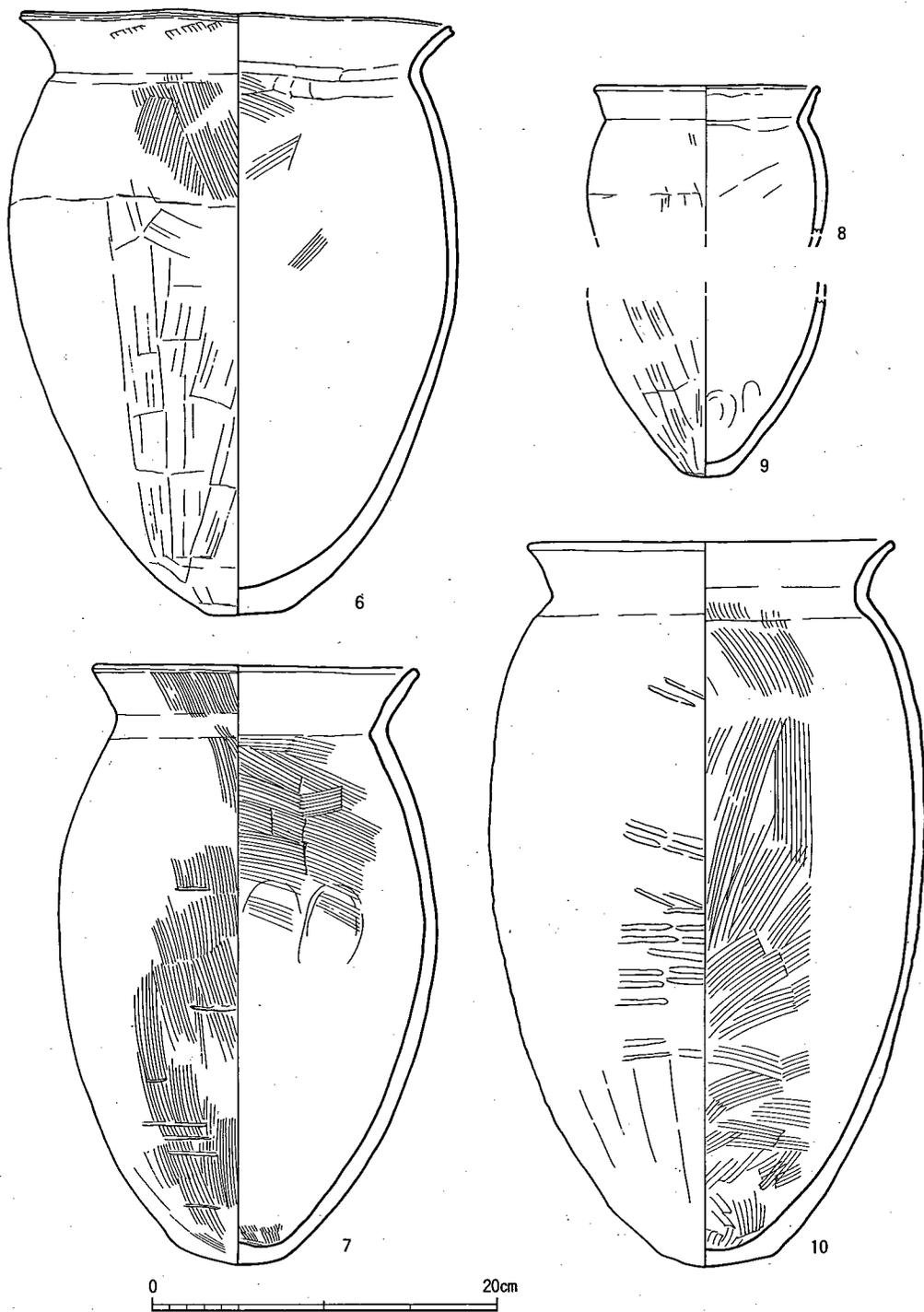
出土遺物(図版69、第169~171図)

壺(1・2・4) 1は丸く膨らんだ体部に口径12.8cmの直口縁が付く。内外面ともにハケ目調整されるが、肩部外面に平行叩き目、内面に指頭圧痕が残る。2は復原口径16.0cmの大きさの、緩やかに外反するが直口縁で、端部上面を整えている。内外面にハケ目が残るがヨコナデとナデで調整される。4は口径16.8cmで、口縁部が外反して、端部は四角く整えられる。内外面ともにハケ目調整されるが、内面の頸部下に指頭圧痕が残り、口頸部内面はナデが加わる。いずれも胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙色・橙褐色・暗茶黄色に焼成されている。

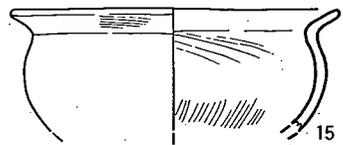
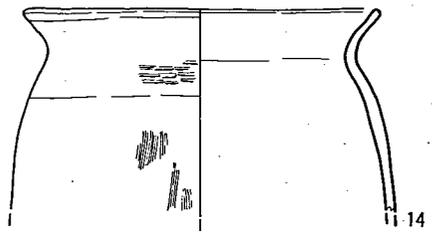
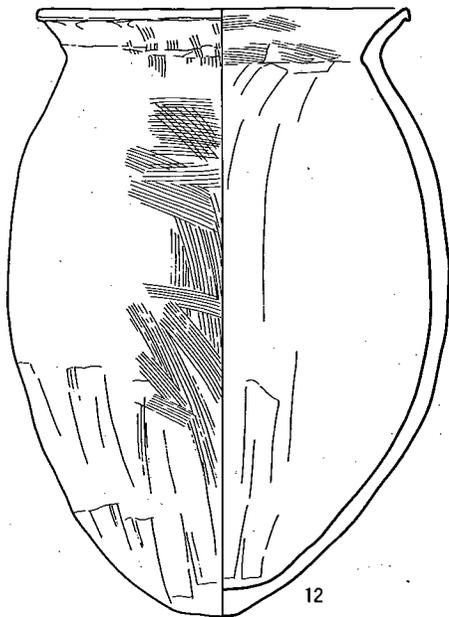
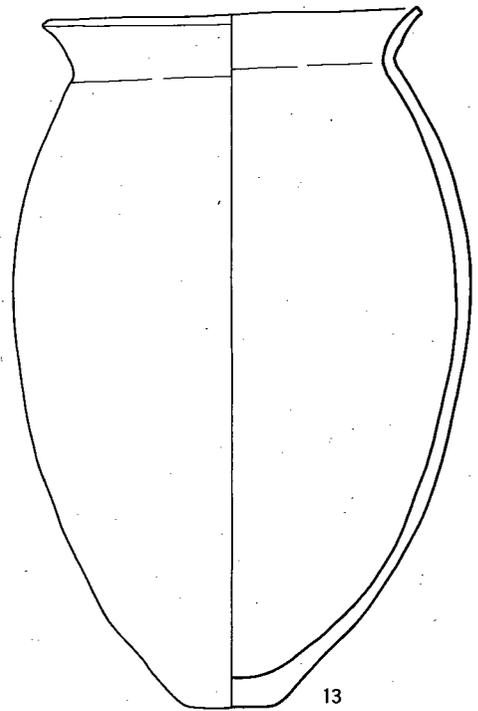
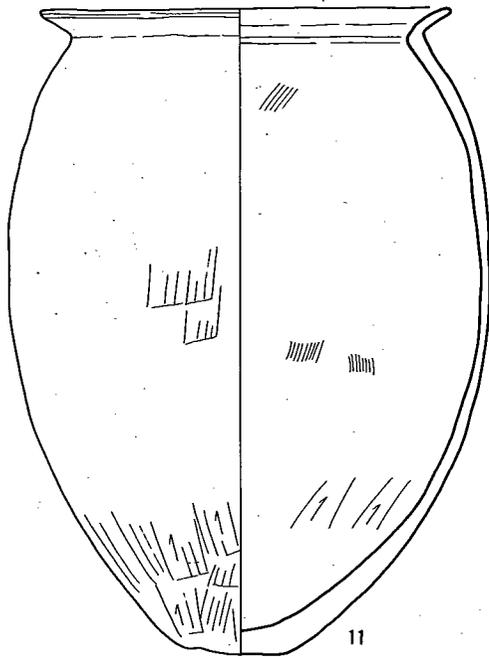
複合口縁甕(3) 口径16.6cm、器高54.8cm、胴最大径37.3cmの大きさの長胴甕で、外反し



第169図 3号土器溜り出土土器実測図1 (1/4)



第170図 3号土器溜り出土土器実測図2 (1/4)



第171図 3号土器溜り出土土器実測図3 (1/4)

て、突出気味に屈折して内傾する口縁部をもつ。体部は倒卵形で底部は凸レンズ状を呈するが、頸部と胴部に刻み目凸帯が巡る。肩部・胴部外面には平行叩き目がみられ、外面底部付近と内面はナデ調整され、頸部外面にはヘラ磨き痕がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色ないし黒褐色に焼成され、煤が付着する。

甕(5~14) 5・7・10は長胴甕で内外面ともにハケ目調整され、胴部外面に叩き目残り、下半はナデ消される。10の外面は磨滅が進む。底部は凸レンズ状で、胴部の膨らみは緩やかだが、口縁部は直線的に開く5の例と、緩やかに外反する10の例がある。口径と器高は順に19.2cm・33.4cm、18.8cm・36.2cm、21.2cm・42.2cmを測る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗橙色・暗茶褐色・淡橙色に焼成され、外面に煤が付着する。

6・10・11・14は長胴甕で内外面ともにハケ目調整されるが、外面の胴下半は板ナデで消され、内面もほとんどナデ消される。底部は平底ないし凸レンズ状で、胴部の膨らみは緩やかだが、口縁部は緩やかに外反する6の例と、強く外反する11の例、直線的に開く12の例、端部が内彎気味の14の例がある。口径と器高は順に25.0cm・35.2cm、22.3cm・34.7cm、19.7cm・32.7cm、19.0cm・10.7cm+ α を測る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗橙褐色・淡茶褐色・赤褐色・暗茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

8・9・13は長胴甕で、底部は平底ないし凸レンズ状で、胴部の膨らみは緩やか。8・9は内外面ともに板ナデ調整され、復原口径13.0cmの8の口縁部は直線的に開く。13は口径20.0cm、器高37.2cmの大きさで、器面が磨滅して調整手法は不明。口縁部は緩やかに外反して端部は面を整えられる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙色・淡茶褐色・橙褐色に焼成され、9・13の外面に煤が付着する。

鉢(15) 復原口径17.5cm、残存器高6.5cmの大きさで、膨らむ体部から強く外反する口縁部が開く。内外面ともに板ナデ調整され、口縁部外面にハケ目がみられる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、明橙褐色に焼成されている。

出土土器は概ね弥生後期末頃の特徴を有している。

7. 包含層出土の遺物 (図版70~72)

第4層出土弥生土器 (第172・173・177・178図)

複合口縁壺(1・11・20) 1は1号住居跡南側の遺構検出面から出土した。外反で垂れ気味に突出した口縁部が内傾して立ち上がり、突出部に細い沈線が5条巡る。外面にはヘラ磨きの痕跡がみられ、内面はヨコナデ調整されて、復原口径16.0cmの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。11は復原口径16.0cmの大きさの複合口縁で、口縁部は屈曲して内彎気味に立ち上がる。内外面はナデられるが、口縁内面にハケ目が残る。



第172图 包含層出土土器実測图1 (1/4)

胎土に角閃石を含み、暗黄茶色に焼成されている。20は甕か壺かの区別はし難いが、屈曲して外に開く口縁部破片で、暗橙色に焼成されている。ともに2号溝西側の遺構検出面で出土した。

甕(2~4・6・7・12~19) 2~4・7は6号土壙南側の遺構検出面から出土した。2・3は同一個体の確率が高いが、口縁部が緩やかに外反する長胴甕で口径20.8cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整され、細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、橙褐色に焼成されている。4・7も口縁部が外反する長胴甕で、器面の磨滅する4に比して7は反りが大きく、復原口径25.0cmの大きさ。2・3と同様な胎土で茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。6は口縁部の反りと胴部の膨らみが少ない甕で、復原口径が30cm前後とやや大きい。外面はナデ調整で、内面にハケ目がみられる。

12・13・16・18は胴が膨らみ、口縁部が外反する甕で、胴部内外面にハケ目調整がみられ、口縁部の反りが強い12では口縁部にもハケ目がみられる。12は復原口径15.0cmの大きさで、胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。13は器壁が薄めで、弥生土器よりむしろ古式土師器の範疇に含まれるであろうか。胎土に角閃石を含み、黄褐色に焼成されている。16は外面が磨滅するが、胴部内面にハケ目がみられる。2号溝西側から出土した。18は6号建物の南西側から出土したが、内外面に細かなハケ目がみられる。

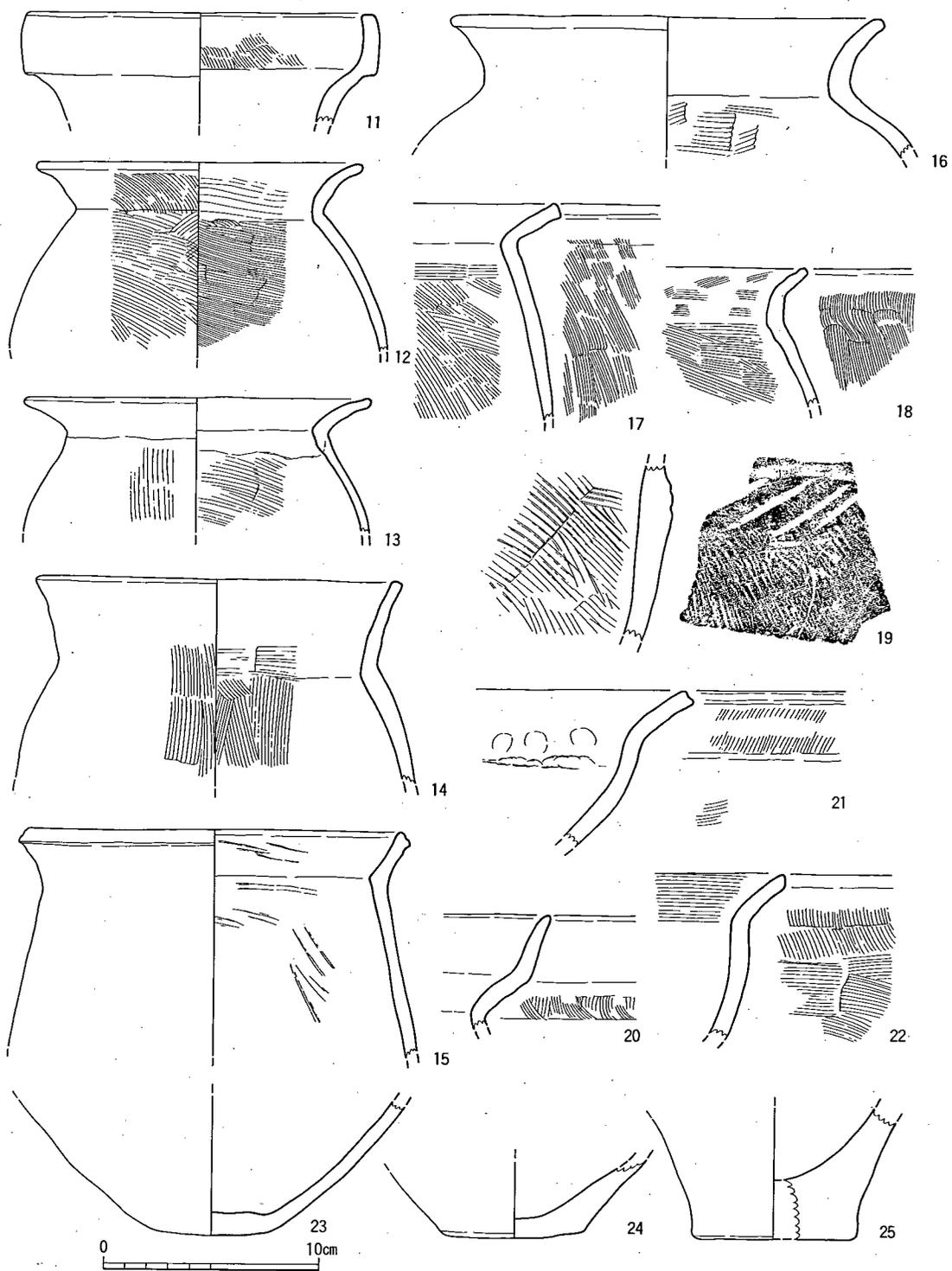
14・15は長胴でなで肩の甕だが、口縁部はやや開いて直線的に立ち上がる。14は胴部内外面にハケ目調整するが、15は板ナデとナデで調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙色ないし淡茶褐色に焼成されるが、煤が付着している。2号溝の西側と、8号住居跡の北東側から出土した。19は1号建物の南西側から出土したが、幅広の刻み目凸帯をもつ破片で粗いハケ目調整がみられる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

底部(5・9・23~25) 5は底面が突出した凸レンズ状をなすもので、外面は板ナデ調整、内面はハケ目が残る。9は平底で、胴部へ大きく膨れるが、これも外面は板ナデ調整、内面はハケ目調整される。細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、淡橙褐色に焼成されている。

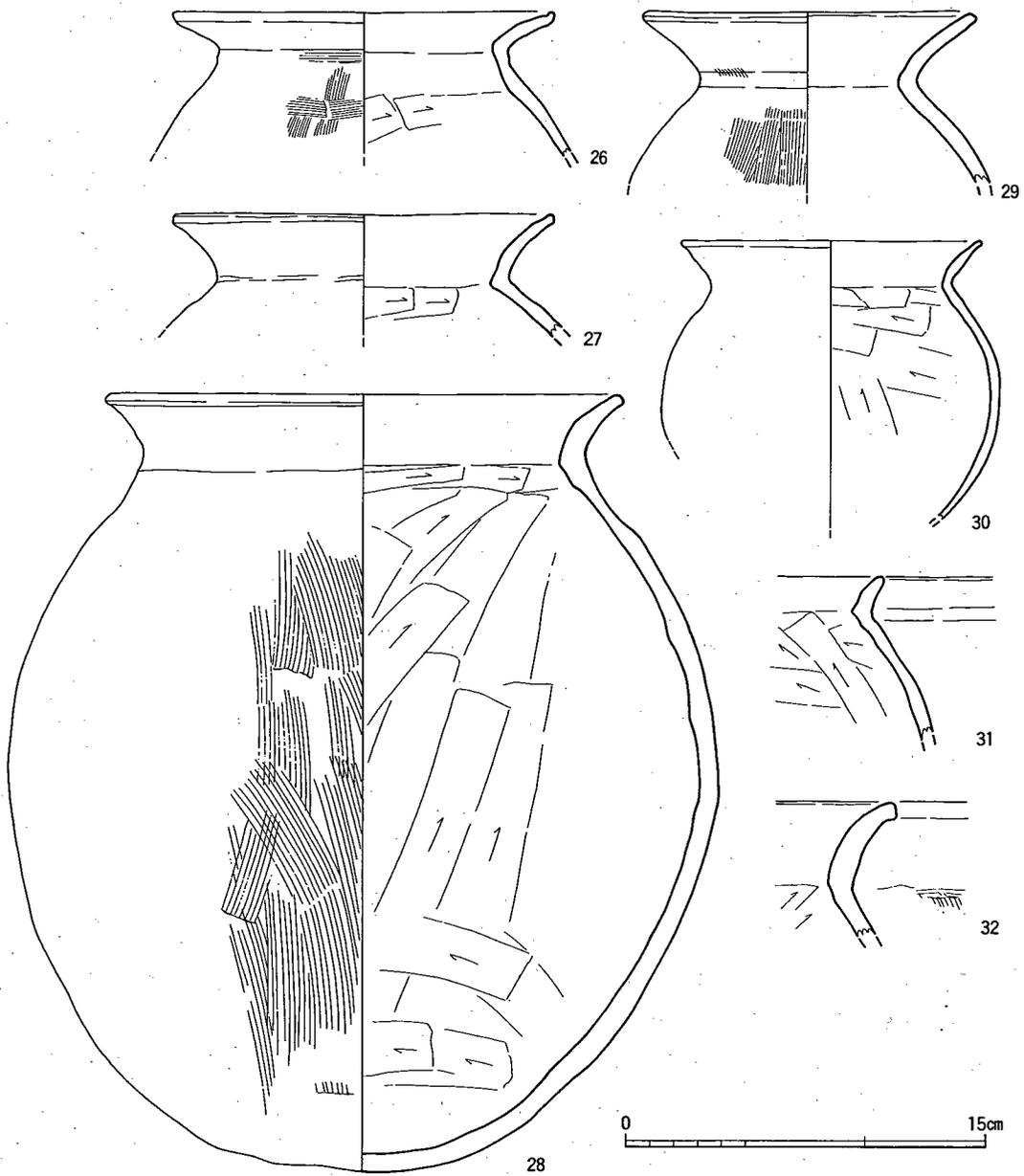
23・24は凸レンズ状をなすが、内外面ともに板ナデないしナデで調整される。胎土に角閃石を含み、茶褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

25は厚みのある平底で、内外面は磨滅するが、胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。Ⅳ区北側拡張時の遺構検出面から出土した。

鉢(8・10・21・22) 8・10は6号土壙南側の遺構検出面から出土した。8は復原口径27.0cm、器高21.6cmの大きさで、凸レンズ状の底部をもち、膨らむ胴部に緩く外反する口縁部が付く。内外面ともにハケ目調整され、胴部外面は板ナデでハケ目が消される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されるが、外面に煤が付着する。10は復原口径26.0cmの大きさで、口縁部は肥厚気味で如意状に外反する。胴部外面はナデ、内面はハケ目が残る。細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む胎土で、明灰褐色に焼成されている。21は1号建物



第173图 包含層出土土器実測图 2 (1/3)



第174図 包含層出土土器実測図3 (1/3)

の南側、22は4号建物の西側から出土した。胴部は丸味をもち、口縁部は外反する。21では外面はナデが加わってハケ目が消え、内面は粘土帯継ぎ目と指頭圧痕の残るナデで調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡灰黄色に焼成されるが、口縁部に煤が付着する。

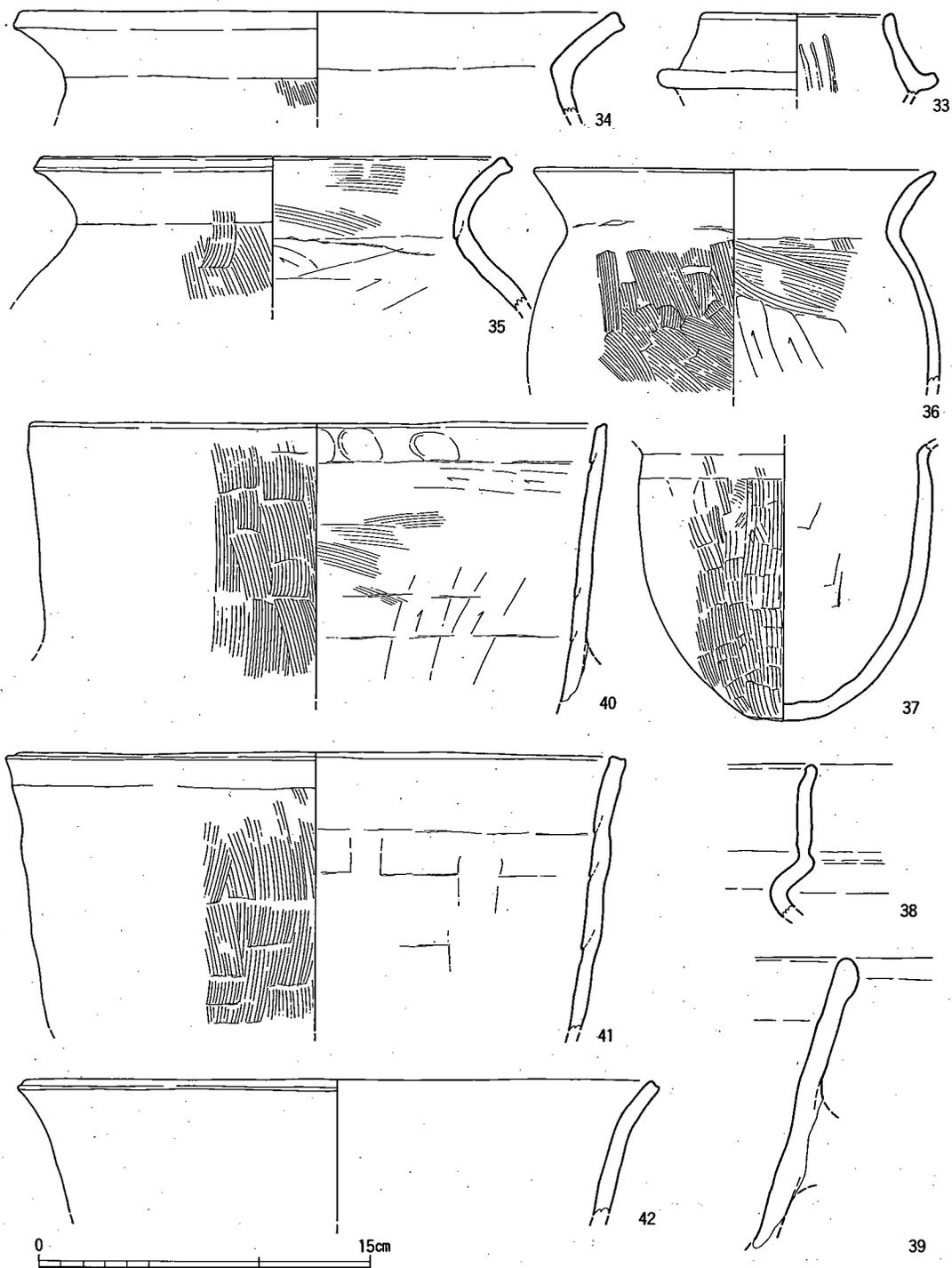
高杯(71・72・79) 71・72は13号住居跡の北西方から出土した。杯底部は直線的に開き、屈曲して口縁部が短く外反する器形の高杯で、復原口径は25.0cmと24.0cmを測る。杯底部は内外面ともにハケ目調整された後に外面を板ナデなどでナデ消して、口縁部はヨコナデ調整されるが、ともに杯内面にヘラ磨きないし板ナデらしい痕跡もみられる。79は4号住居跡周辺の遺構検出時に出土したが、杯底部が内彎気味に開き口縁部が短めに外反する器形で口径23.4cmの大きさ。外面は風化・磨滅してよく分らないが、内面の杯底部にはハケ目、口縁部にはヘラ磨きの痕跡がみられる。

器台(86) 受け部を欠くが、残存器高15.1cm、裾部径16.5cmの大きさ。くびれ部は器壁が厚く、裾に向かって緩やかに外反して、端部は内彎気味におさまる。外面は絞り気味にナデられ、裾部内面は板ナデ、受け部内面はナデ調整されるが、くびれ部内面は未調整である。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。

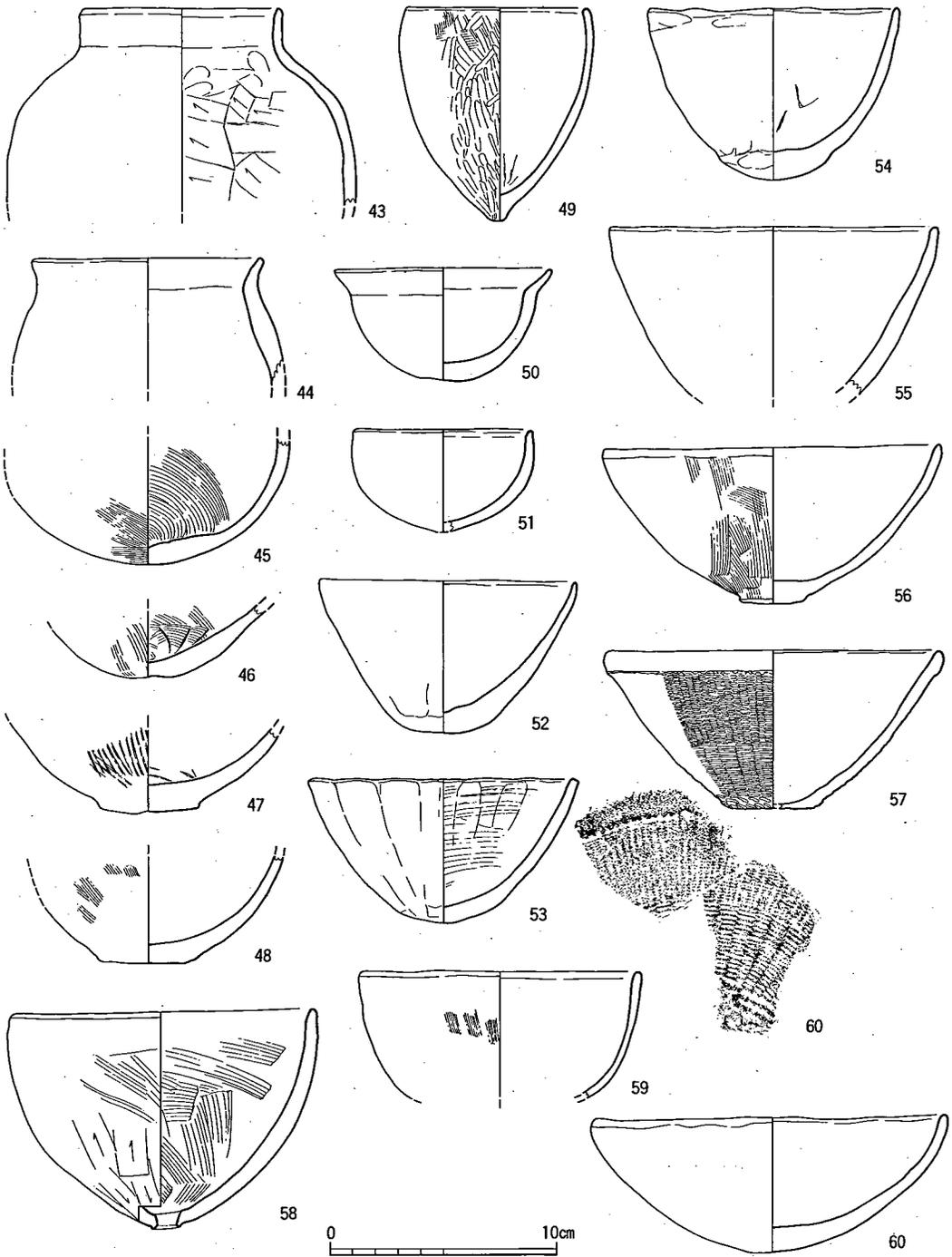
第4層等出土の古墳時代土器(第174~180図)

土師器甕(26~32・34~38) 胴部内面をヘラ削りされる甕で、38は複合口縁をもつ。26・27は復原口径15.8cm・16.0cmの大きさで、口縁端部は摘み上げられるが、胴部内面の削りは前者が頸部下まで、後者は頸部まで及ぶ。28は口径21.6cm、器高32.7cm、胴最大径29.5cmの大きさの甕で、丸底の底部から膨らんだ胴部に外反する口縁部が付き、端部は丸く整えられる。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み、明橙色に焼成されている。29は復原口径14.0cmの大きさで、口縁部がやや長めに外反する。30は口径12.5cm、胴最大径14.1cmの大きさ。胴部外面は磨滅するが内面は頸部までヘラ削りされる。31・32は胴部内面を頸部までヘラ削りする口縁部破片である。34・35は復原口径26.7cm・21.6cmの大きさで、外反する口縁端部は面取りされる。36は2号溝の屈曲部と38号住居跡付近の遺構検出時に出土した。復原口径18.0cm、胴最大径18.7cmの大きさの甕で、外反する口縁部は端部が丸く整えられるが、胴部内外面ともにハケ目調整され、内面の肩部付近までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。37は丸底で、胴部の膨らみが少ない甕で胴最大径13.2cmの大きさだが、口縁部は外反する。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りないし板ナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰茶褐色に焼成されている。8号住居跡北側の遺構検出面から出土した。

土師器甗(39~42) 完全な形の分かる例はないが、口縁部が直線的に開いて立ち上がるか、僅かに外反するものを甗の類に含めた。39は19号住居跡の西側から出土した。直線的に開いた口縁部は端部で僅かに肥厚し、内外面ともにナデ調整されるが、胴部に把手の剥落した痕跡がある。40は2号溝と12号溝の間、41は2号溝屈曲部付近で出土した。復原口径26.0cm・28.0cmの大きさで、口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は平らに整えられる。外面はハケ目



第175图 包含層出土土器実測图4 (1/3)



第176图 包含層出土土器実測图 5 (1/3)

調整され、40では把手の剝落した痕跡もみられる。40の内面はハケ目の後にヘラ削りが加わるが、41の内面は粘土帯接合痕の残るナデで調整される。42は復原口径29.0cmの口縁部が僅かに外反するが、器面は風化・磨滅し、内面の一部にヘラ削りの痕跡がみられる。9～11号住居跡の遺構検出時に出土した。

土師器壺(43・44) 43は1号住居跡の南側で出土した。復原口径9.0cm、胴最大径15.4cmの大きさの直口壺で、外面はナデ調整、胴部内面は肩部付近までヘラ削りされる。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成される。44は復原口径10.2cmの大きさで、2号溝付近から出土した。口縁部は短く外反し、内外面ともにナデ調整されるが、胴部の器壁はやや厚い。

底部(45～48) 45は内外面にハケ目のみられる丸底の底部片で、胴部も球形に膨らみ、外面には煤が付着する。46も内外面にハケ目のみられる底部片だが、丸底の中央部が僅かに凹み、胴部へはかなり開く。47・48は僅かに膨らみ気味だが平底の底部で、胴部へは丸味をもって膨らむ。47の胴部外面は粗いハケ目、48の胴部外面は細かなハケ目で調整されるが、胴部内面と外底面はともにナデられ、47の内面には板ナデの工具痕が残る。いずれも外面に煤が付着する。

尖底鉢(49) IV区F22で2号溝の南東側から出土した。口径8.2cm、器高9.3cmの大きさの、砲弾形の鉢で、器壁が薄く、外面はヘラ磨き、内面は丁寧にナデ調整される。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

鉢(50・52～57) 50は2号溝と8号住居跡の間で出土した。復原口径9.6cm、器高4.9cmの大きさで、半球形の体部から口縁部は内彎気味に開いて立ち上がる。器面は風化・磨滅するが、ナデないし板ナデ調整であろう。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙色に焼成されている。

52～55はそれぞれH16区・F8区・D7区・G22区から出土した。凸レンズ状あるいはそれに類した丸味のある底部を有する鉢で、口径が器高の倍以下と、やや深さのある碗形の器形を呈する。口径・器高は順に11.3cm・6.7cm、12.0cm・6.4cm、10.8cm・7.6cm、14.3cm・7.3cm+ α を測る。口縁部は内彎気味に立ち上がり、内外面は板ナデとナデで調整されるが、53の内面にはハケ目がみられる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、橙色ないし淡茶褐色などの色調に焼成されている。

56は甕棺墓の近くで出土した。復原口径14.7cm、器高6.9cm、底径2.8cmの大きさの鉢で、口縁部は内彎気味に開く。外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒を多くと角閃石を含み、橙褐色に焼成されている。

57は復原口径15.0cm、器高7.1cm、底辺約3.7cmの大きさの、口縁部が玉縁状に肥厚する鉢で、底部から胴部にかけて四隅をもつ器形である。底部と胴部の外面には網籠の圧痕が明瞭に残り、内面はナデ調整される。網籠は下半分の18段程は目がやや粗く、上半分の23段前後は縦

方向に竹ヒゴを2本増した編み方になっていて、縁は外側に巻かれているようである。細砂粒・赤褐色粒・角閃石を胎土に含み、籠に押しつけて整形したものであろう。D19区で出土した。

鉢形甌(58) 35号住居跡付近の上部で出土した。口径13.6cm、器高9.5cmの大きさで砲弾形の器形をなす。外面は板ナデとヘラ削り、内面はハケ目と板ナデ調整されて、底部に直径1.0cm弱の円孔が内側から穿孔されている。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されるが、内外面に煤やお焦げの痕跡を確認できない。

椀(51・59~70) 51・59は23号住居跡と2号溝・12号溝の間で出土した、深めの椀である。復原口径と器高は7.8cm・4.5cm、12.4cm・5.5cm+ α を測る。内彎気味に立ち上がり、内外面ともにナデ調整されるが、59の外面にはハケ目がみられる。

60はD9区出土の、復原口径15.7cm、器高6.0cmの大きさの椀だが、内彎気味に立ち上がり、底部は器壁がやや厚く丸底。内外面ともにナデ調整されている。

61・62はF6区・E9区で出土した。口縁部は内彎気味に立ち上がり内外面ともにナデ調整される。いずれも胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

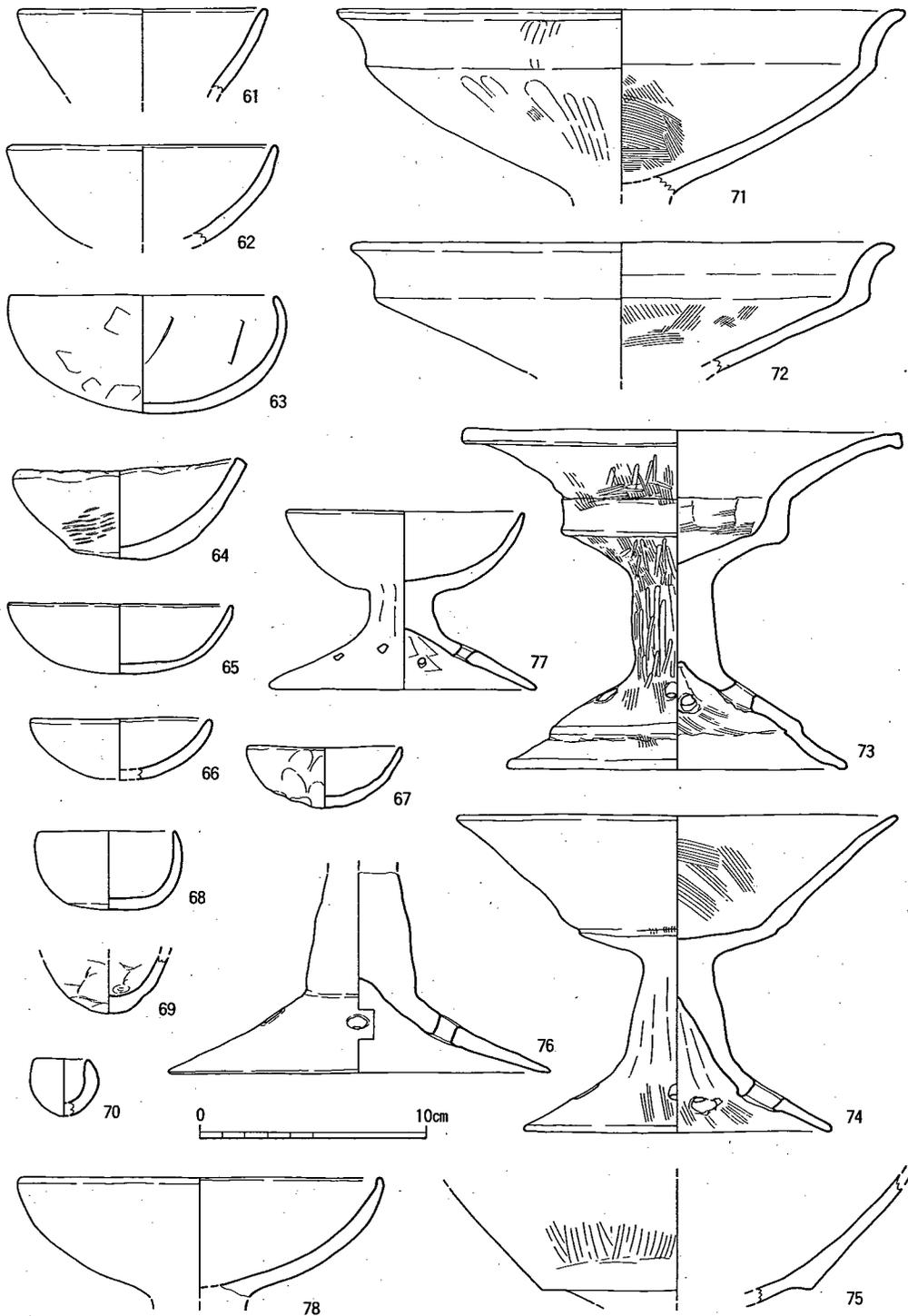
63はB9区の遺構検出時に出土したが、4号住居跡に伴う可能性がある。復原口径11.8cm、器高5.2cmの大きさで、口縁部は内彎し、内外面は板ナデとナデで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

64は復原口径10.4cm、器高4.5cmの大きさで、径4.3cm程の丸味をもった底部をもつ。外面の下部に叩き目らしい痕跡がみられるが、内外面ともナデ調整され、やや器壁は厚い。I20区で出土した。

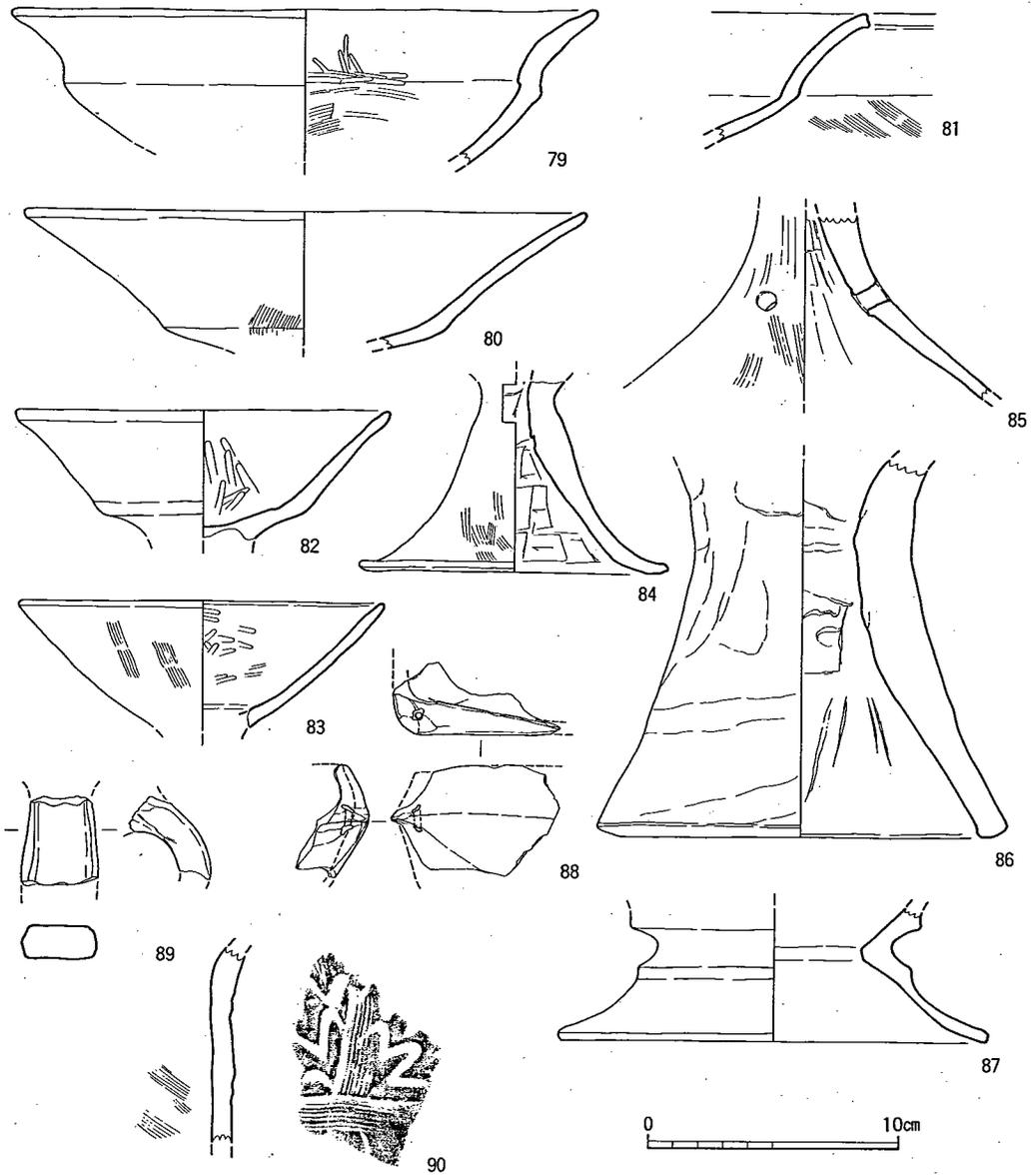
65~67は、口径が器高の3倍程の大きさの椀だが、比較的口径の小さい例である。口径と器高は順に、10.0cm・3.1cm、8.0cm・2.7cm、6.9cm・2.8cmを測る。内外面ともにナデ調整され、淡橙色ないし暗黄褐色に焼成されている。

68~70は手捏ねのミニチュア土器である。68は口径6.1cm、器高3.5cm、底径4.2cmの大きさで口縁部は内彎する。60は口縁部を失うが丸底でやや深さのある器形であらう。61は胴最大径3.1cm、器高2.5cmの大きさの球形に近い器形にナデ調整される。

高杯(73~78・80~85) 73・74はII区とIV区の境辺りで上層除去時に出土した。73は口径19.4cm、器高14.9cm、裾部径15.0cmの大きさの、鼓形に近い器形の高杯である。杯部は外反して開くが途中で明瞭に段をなして屈曲し、中実の柱状部を介する裾部も同様に開くものの、裾部側は丸味を帯びて、端部も丸い。柱状部と裾屈曲部との中間に4ヶ所円孔が穿孔される。器面はハケ目調整の後にヘラ磨き加わるが、口縁部・裾部端はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶橙色に焼成されている。74は口径19.4cm、器高13.9cm、裾部径13.6cmの大きさ。平らな杯底部から口縁部が長めに外反する杯部をもち、中空の柱状部を介して裾部が開き、裾部4ヶ所に円孔が穿孔される。外面は器面が風化・磨滅す



第177图 包含層出土土器実測图 6 (1/3)



第178図 包含層出土土器実測図7 (1/3)

るが、内面にはハケ目がみられる。柱状部はナデ調整されるが絞り痕が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、赤橙色に焼成されている。

75は7号建物跡付近から出土したが、凸帯状に突出する杯屈曲部破片で、直線的に開く口縁部の外面にハケ目がみられる。80は6号土壙の南側から出土した杯部破片である。復原口径

22.0cmの大きさに口縁部が緩やかに外反し、外面にハケ目が残る。81は口縁部が短めに外反する杯部破片で、外面にハケ目がみられる。27号住居跡周辺の遺構検出時に出土した。82は2号溝の西側から出土した。杯底部から屈曲して、口径15.0cmの大きさに口縁部は緩やかに外反し、内面にヘラ磨きの痕跡がみられる。83は杯底部からそのまま直線的に口縁部が開くが、復原口径14.6cm、杯部高4.8cmの大きさに、外面にハケ目、内面にヘラ磨き痕がみられる。25号住居跡付近で出土した。

77・78は椀形の杯部をもつ高杯で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。7号建物跡付近から出土した77は復原口径10.6cm、器高7.8cm、裾部径11.7cmの大きさに、短い柱状部を介して裾部が直線的に開き、6ヶ所に円孔が穿孔される。裾部内面にヘラ削り痕がみられるものの全体にナデ調整されるようである。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み、淡橙色に焼成されている。D8区で出土した78は復原口径16.0cm、杯部高5.1cmの大きさに、内外面ともにナデ調整される。

76は中実の柱状部から外反して脚裾部が開き4ヶ所に円孔が穿孔される。84・85は柱状部が中実の脚部破片で、85には3ヶ所円孔が穿孔される。84は脚端部が外反し、杯部がソケット状に挿入されるが、外面はハケ目、内面はヘラ削りされる。

器台(87) 復原裾部径が17.0cmの大きさの鼓形器台で、30号住居跡と13号溝の付近で出土した。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、明橙褐色に焼成されている。

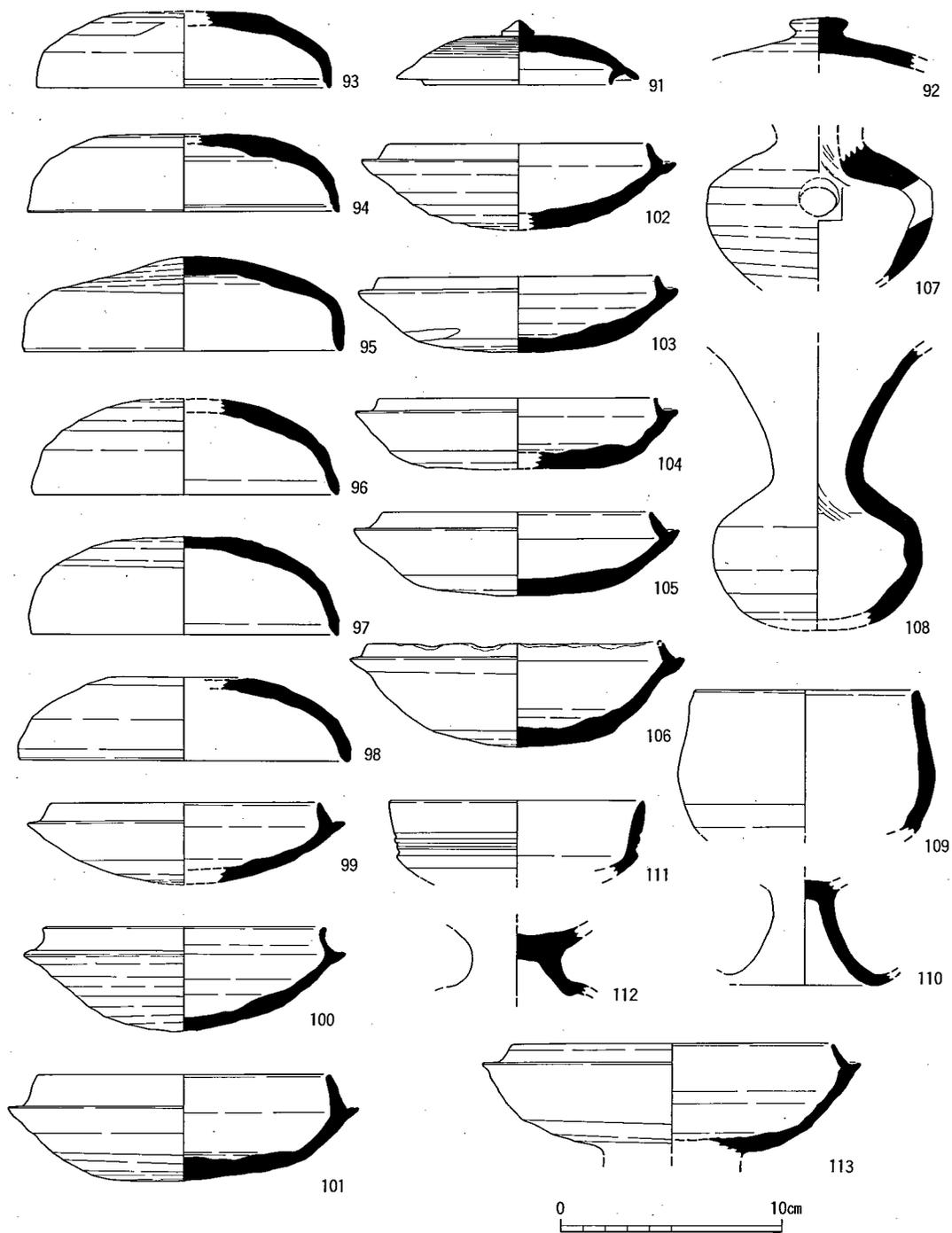
土師器片(90) 2号住居跡周辺の遺構検出時に出土した。頸部から胴部にかけての破片らしいが、内面はハケ目とナデ調整され、外面にはハケ目原体で十字と波状文様を描いている。胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。

須恵器杯蓋(91~98) 91・92は天井部につまみを有する杯蓋で、91は14号土壇付近、92は35号住居跡付近で出土した。91は身受けのかえりが断面Y字形に付き、外天井をカキ目調整されるが、復原外径10.8cm、器高2.9cmの大きさ。硬めに焼成されている。

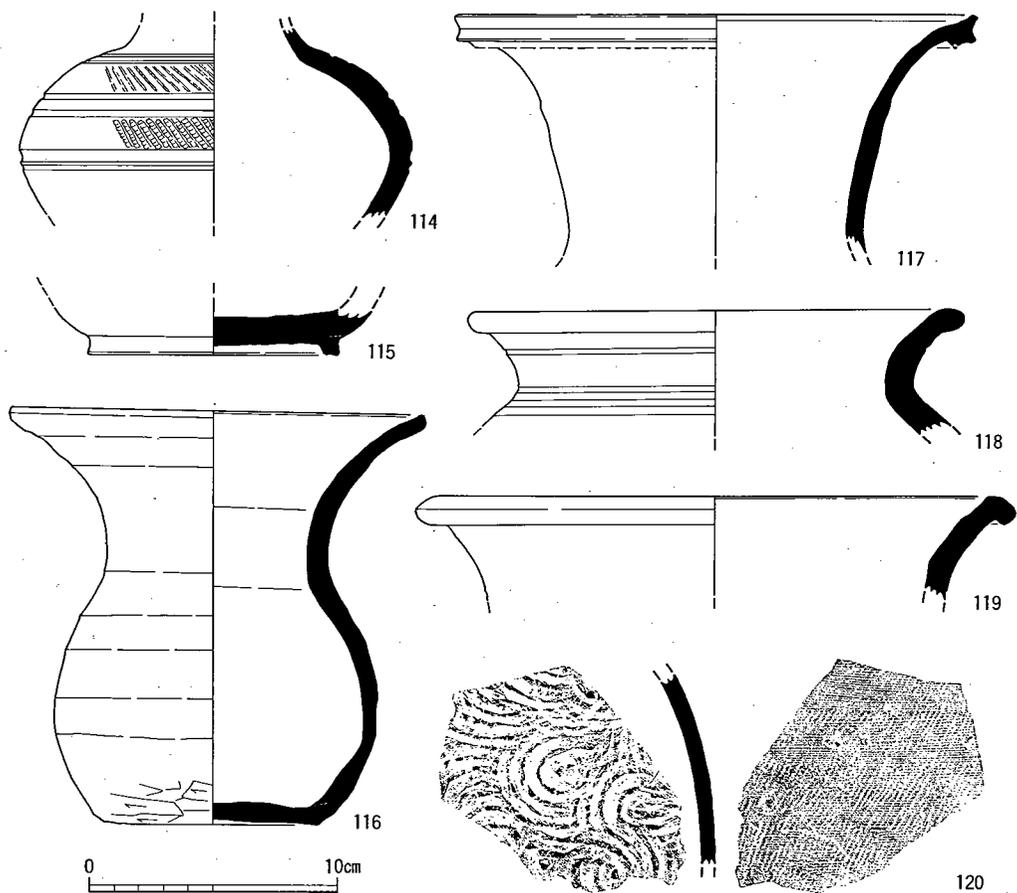
93~98は身受けのかえりを有さない杯蓋で、外天井は回転ヘラ削りされ、98以外の口縁部は直口縁に近い。口縁端部では93・94が小さな段を有すが、他は丸味をもつ。93~95が35号住居跡付近、96~98は2号溝付近から出土した。復原口径と器高は順に、13.4cm・3.4cm、14.0cm・3.5cm、14.6cm・4.2cm、13.8cm・4.3cm、13.8cm・3.9cm、15.1cm・3.7cmを測る。

須恵器杯身(99~106) 99・103~105が35号住居跡周辺、100・106が2号溝付近、101・102が7号建物跡付近から出土した。いずれも蓋受けのかえりを有する杯身で、外底部は回転ヘラ削りされる。100・101の口縁部がやや長めに立ち上がるものの、他の口縁部は短く内傾する。外径と器高は順に、14.4cm・3.7cm、14.6cm・4.7cm、15.8cm・4.8cm、14.2cm・3.8cm、14.3cm・3.4cm、14.4cm・3.2cm、14.6cm・3.7cm、15.0cm・4.7cmを測る。

須恵器臬(107・108) 2号溝付近で出土した。107は口頸部と底部を失うが、やや肩の張る



第179图 包含層出土土器实测图8 (1/3)



第180図 包含層出土土器実測図9 (1/3)

扁球形の体部をもち、下半部は回転ヘラ削りされる。胴最大径10.2cmの位置に円孔が外側へ斜め上りに穿たれる。108は口縁端部を失うが、残存器高12.8cm、胴最大径9.3cmの大きさで、扁球形の体部に、緩やかに外反する口縁部が付く。底部は回転ヘラ削りされ、上部は回転ナデ調整され、頸部内面に絞り痕がみられる。残された部分では穿孔を確認できない。

須恵器高杯(109~113) 109は深い杯部破片で、杯底部を欠くが、復原口径10.2cm、残存器高6.4cmの大きさ。口縁部は僅かに内傾する。2号溝の屈曲部周辺から出土した。110は2号住居跡付近の上面から出土した脚部破片で、裾部は跳ねる様に外反するが、端部を欠く。111~113は35号住居跡周辺から出土した。111は杯部破片で杯底部を欠く。復原口径11.4cmの大きさで、直に近く立ち上がる口縁部と底部の境付近に沈線が3条巡る。113は蓋受けのかえりをもつ杯部破片で、脚部を失うが、外径17.1cm、杯部高4.8cmの大きさ。口縁部は短めに内傾する。柱状部剝離面の径は6.3cmを測る。112の脚部破片は裾部が外反して、端部が踏ん張り

気味である。

須恵器壺(114~117) 114・115はⅣ区とⅢ区の上層除去時に出土した。114は口縁部と底部を失うが、胴部は扁球形に膨らむ。2条単位の沈線が3段巡り、沈線間に板小口の連続刺突文が充填されるが、上部には灰が被り分かりにくく、別個体の破片も附着している。115は高台を有する底部破片で、杯に比して器壁が厚い。

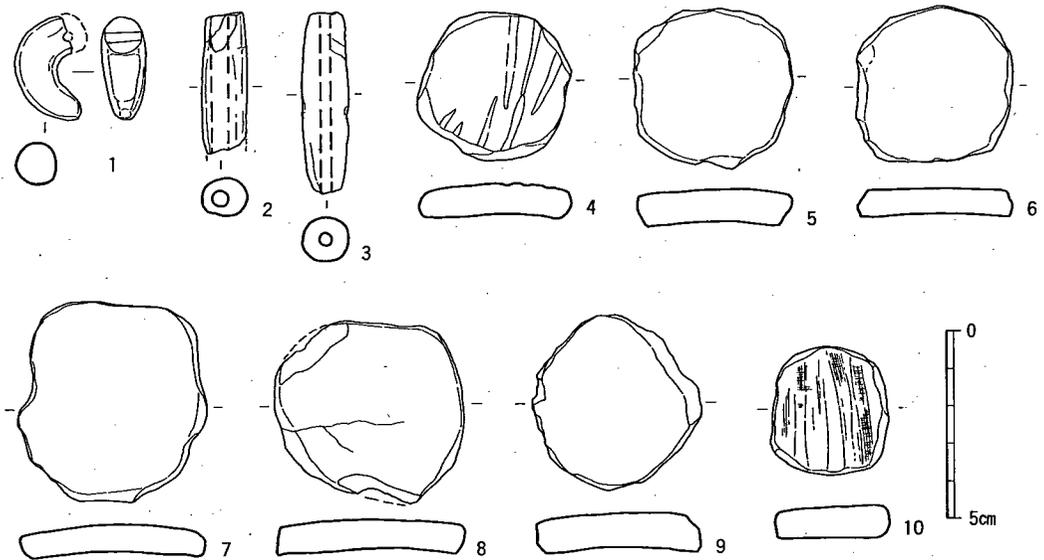
116は21号住居跡の西側から出土した。口径16.8cm、器高16.5cm、底径8.8cmの大きさ。平底で、最大径は13.1cmの胴部に膨らみ、緩やかなS字状にくびれて口縁部が外反する。胴部は静止ヘラ削りされた後にナデ消されるが、底部付近にヘラ削り痕が残る。

117は21号住居跡北側の上層から出土した。外反する口縁部破片で、復原口径21.0cmの大きさ。端部は外面に断面M字形の凸帯が付き、外上側に摘み上げたような形状である。

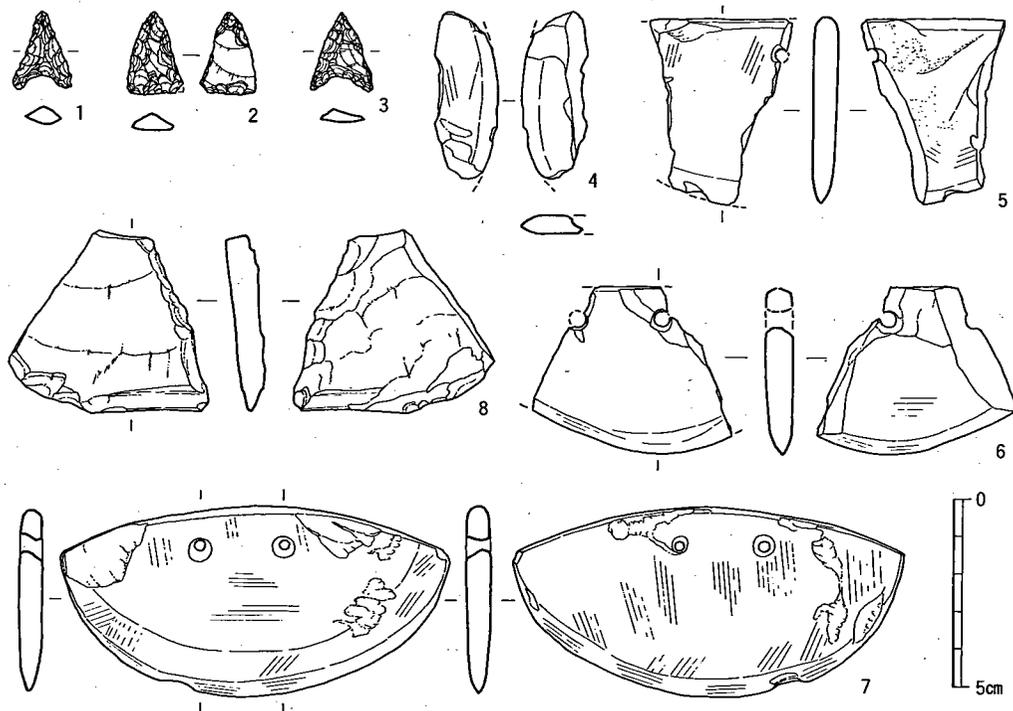
須恵器甕(118~120) 118・119は2号溝周辺出土の口縁部破片である。外反する口縁部で、118は端部が丸く肥厚し、119は外側に四角い凸帯を付けたような形状だが垂れ気味である。また120は35号住居跡周辺出土の胴部破片で、外面に平行叩き痕とカキ目、内面に同心円当て具痕がみられる。

土製品 (図版72、第181図)

勾玉(1) 20号住居跡の東南側から出土した。頭部を欠損するが、残存長2.8cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm、重量4.3gを測る。頭部には径2mm強の孔が穿孔され、尾部は細くなる。細砂



第181図 包含層出土土製品実測図 (1/2)



第182図 包含層出土石器実測図1 (1/2)

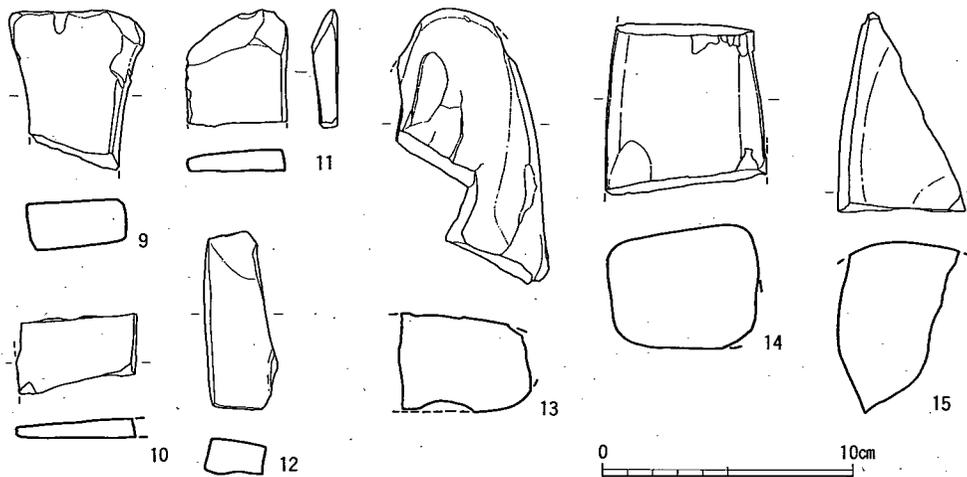
粒・角閃石・赤褐色粒を胎土に含み、堅めに焼成され、赤褐色ないし明褐色を呈する。

管状土鏃(2・3) III区・IV区の上層で出土した。2は残存長3.8cm、外径1.2cm、孔径0.4cm、重量4.5g、3は長さ4.9cm、外径1.3cm、孔径0.3cm、重量7.3gを測る。細砂粒・角閃石を胎土に含み、暗黄褐色・灰褐色に焼成されている。

土器片円盤(4~10) 4は2号土器溜り付近、5はD8区で出土したが、他の5点は3号溝の東北側で出土した資料である。土器片を円形に打ち欠き調整するが、周縁はやや磨耗する。4は外面に沈線文様の残る破片、10は内外面にヘナタリ条痕を残す破片を使用しているが、他は内外面ともにナデ調整される破片を使用している。

石器 (図版72、第182・183図)

石鏃(1~3) 1は1号土器溜り部分から出土した、姫島産黒曜石製の凹基式の打製石鏃で、全面に調整剝離が及ぶ。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量0.8gを測る。2は主要剝離面を残して調整剝離される、姫島産黒曜石製の平基式の鏃だが、剝片の打瘤部を石鏃の先端部になっている。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量1.3gを測る。3は27号住居跡の北東側にあるピットから出土したが、姫島産黒曜石製の凹基式石鏃で、全面に調整剝離が及ぶ。長さ



第183図 包含層出土石器実測図2 (1/3)

2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量1.0gを測る。

石包丁(4~7) 4と6は2号溝と30号住居跡の間で出土した。4は砂岩製石包丁の刃部破片であろう。6は小豆色を呈する輝緑凝灰岩製石包丁の破片で、幅4.5cm、厚さ0.7cmを測るが、双孔の部分で両端側を欠損している。5はⅣ区から出土した、灰褐色を呈する砂岩製の石包丁片で、孔の部分で欠損するが、幅5.0cmを有する。7は43号住居跡と45号住居跡の間で出土した。小豆色を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁で、長さ10.3cm、幅5.1cm、厚さ0.6cm、重量48.8gを測る。刃部・背部ともに彎曲する。

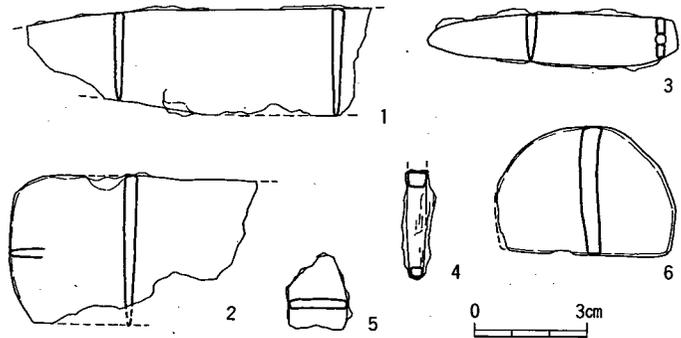
擦り切り石器(8) 10・11号住居跡部分の上層から出土した。凝灰質安山岩製で、扁平な剝片を両面から調整剝離して、刃部を形成するが、刃部を軸に前後させて擦った痕跡が両面に残る。石器素材の切断に使用されたのであろう。長さ4.9cm、幅5.3cm、厚さ1.0cm、重量26.1gを測る。

砥石(9~15) 9は27号住居跡付近から出土した。砂岩製の肌理の細かめな砥石で、4面とも使用される。現存長6.4cm、幅5.4cm、厚さ2.0cm、重量76.2gを測る。10は17号住居跡付近の遺構検出時に出土した、凝灰質安山岩製の扁平な砥石片で、両面と縁が磨耗する。11は12号住居跡の南東縁部で出土した、肌理の細かな粘板岩製の砥石。現存長4.7cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmの大きさ。12は7号住居跡の南側部分から出土した、粘板岩製の砥石で4面とも使用される。長さ7.2cm、幅2.7cm、厚さ1.5cmの大きさ。13はC16区で出土した安山岩質石材の砥石で、石皿片の転用かと思われる。上下両面が使用されていて、現存長11.0cm、幅5.6cm、厚さ3.9cm、重量303gを測る。14・15は安山岩質の砥石片で、14は現存長6.8cm、幅6.5cm、厚さ5.0cm、15は現存長8.0cm、幅5.0cm、厚さ7.0cmの大きさ。15は10号土壌の上層から出土

し、これも石皿片転用の可能性が高い。

鉄製品 (図版72、第184図)

鉄刀(1) 19号住居跡付近から出土した。先端部付近の破片で、残存長さ9.1cm、幅2.9cm、厚さ0.3cmを測る。



第184図 包含層出土鉄製品実測図 (1/2)

刀子(2) I区の上層から出土した。長さ6.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る大きさに、先端は尖るが、基部側は幅が狭まり、径2mmの円孔が穿孔される。

用途不明鉄製品(3~6) 3は7号建物跡付近、4は9号建物跡付近、6は1号建物跡付近から出土し、5は2号溝付近から出土した。3は扁平な板状で縁の一方は刃部らしく薄くなる。4は鉄鏃の茎部の可能性のある破片、5は扁平な小破片である。6は半月形の扁平な板状で彎曲する縁が僅かに厚い。長さ4.8cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmを測る。

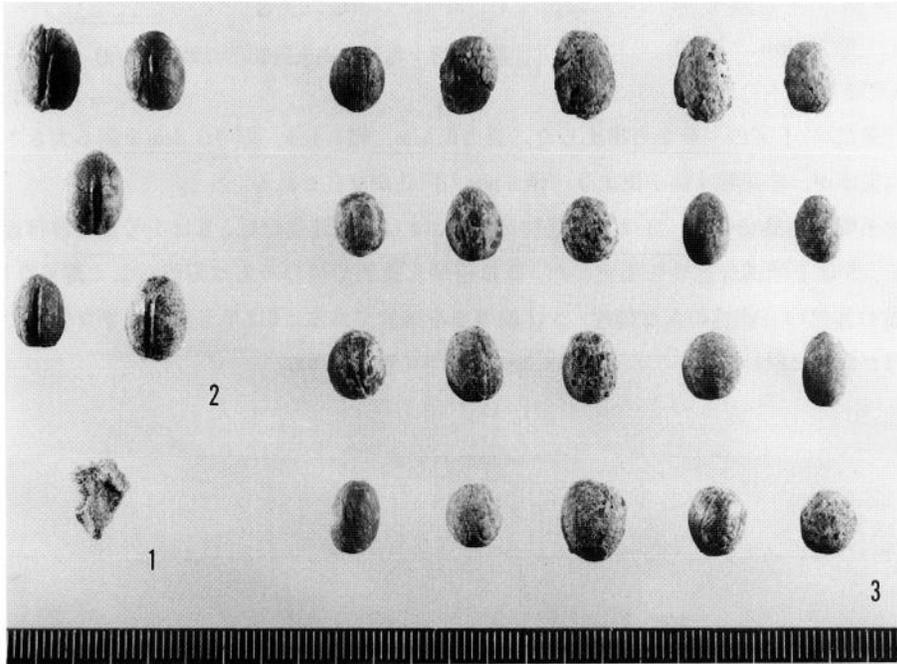


写真1 植物遺体(実大)

1:オニグルミ 2:イチイガシ 3:コナラ属

IV 福岡県大平村上唐原遺跡出土の植物遺体

名古屋大学文学部

渡 辺 誠

1) はじめに

このたび福岡県文化課より調査の機会を与えられた植物遺体は、同県築上郡大平村上唐原遺跡よりの出土資料である。資料は2群あり、I区包含層（暗茶褐色砂層下層）とVI区貯蔵穴（19号土壙）出土資料である。その所属時期は、後者は弥生時代後期とみられ、前者は縄文時代後期中葉の可能性がある。

2) 植物遺体のリスト

検出された植物遺体は、次の3種である。

1. クルミ科オニグルミ *Juglans mandshurica* MAXIM. subsp. *Sieboldiana* KITAMURA.
2. ブナ科コナラ属イチイガシ *Quercus gilva* BLUME
3. ブナ科コナラ属の1種 *Quercus* sp.

I区における出土量は少なく、種もコナラ属の1種にほぼ限定される。

3) 若干の考察

3-1) オニグルミ（写真1-1）

VI区貯蔵穴より殻の細片1点（0.27g）のみ出土。落葉高木で、その種子は脂肪に富み美味である。縄文時代の草創期より食べられており、縄文時代以来もっとも出土率の高い食料の一つである。

3-2) イチイガシ（同2）

ブナ科コナラ属アカガシ亜属し、カシ類の1種である。カシ類の中では唯一アク抜きのない種類である。I区では細片0.20gのみ出土、VI区貯蔵穴では9点出土している。

3-3) コナラ属の1種（同3）

いわゆるドングリ類であるが、種の同定は不可能である。しかしその側面形態は丸みの強い楕円形を呈しており、長幅示数はI区資料では1.25、VI区貯蔵穴資料では1.26であり（第2表）、B類またはC類のドングリである。出土数量は143点で、他に細片がI区で6.14g、VI区貯蔵穴で11.63g出土している。

筆者はドングリ類を第1表のように分類している。このうちA～C類はアク抜きを必要とする。そしてそれらは製粉さえすればすべて水さらしのみでアク抜きができる。ドングリ類のA

クの水溶性のタンニンである。しかし粒のままの状態ではC類は水さらしのみでよいが、A・B類はこれに加えてきつい煮沸作業を必要とする。また側面形態はA類は丸く、B・C類は楕円形を呈す。本遺跡例がB・C類のいずれであるかは不明であるが、アク抜きを必要とすることでは同じである。

またそれらの数量をVI区貯蔵穴資料でみてみると137点であり、イチイガシは9点である。アク抜き不要の后者は6%にすぎず、それを必要とする種類を主体に採集・貯蔵していたことがわかる。

ドングリ類は、縄文時代以来の重要な食料資源であるが、稲作の始まった弥生時代以降にあっても、救済食料として近代に至るまで重要な役割を果たしてきた。本遺跡資料はそのことをよく示していて重要である。

謝 辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった福岡県教育委員会文化課の小池史哲氏、資料整理にご協力下さった名古屋大学大学院学生の丹下昌之・川添和暁氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。

第1表 ドングリ類の分類

民俗分類	属		種 (出土例のみ)	森林帯
A. クヌギ類 製粉または加熱処理+水さらし	コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 (東北日本) (韓国)
B. ナラ類 製粉または加熱処理+水さらし			ミズナラ コナラ	
C. カシ類 水さらしのみ		アカガシ亜属	アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 (西南日本) (韓国南海岸)
D. シイ類など	シイノキ属		イチイガシ ツブラジイ・スダジイ	
		マテバシイ属	マテバシイ	

第2表 ドングリ類計測値一覧表 (単位: cm・g)

種名	出土地区	双半	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅
イチイガシ	Ⅵ区	双	1.12	0.79	0.88	0.43	1.42
		〃	1.11	0.80	0.76	0.39	1.39
		〃	1.03	0.78	0.78	0.39	1.32
		〃	0.95	0.68	0.68	0.27	1.40
		〃	0.91	0.73	0.68	0.26	1.25
		〃	0.80	0.60	0.59	0.19	1.33
		半	1.17	0.85	0.43	0.28	1.38
		〃	1.00	0.76	0.41	0.22	1.32
		〃	0.89	0.77	0.44	0.18	1.16
計			8.98	6.76	—	—	—
平均			1.00	0.75	—	0.36	1.33
コナラ属	Ⅰ区	双	1.12	0.86	0.95	0.34	1.30
		〃	1.00	0.68	0.71	0.29	1.47
		〃	0.91	0.81	0.80	0.30	1.12
		〃	0.85	0.76	0.73	0.24	1.12
		半	1.17	0.93	0.48	0.15	1.26
		〃	0.82	0.68	0.49	0.15	1.21
計			5.87	4.72	—	—	—
平均			0.98	0.79	—	0.30	1.25
コナラ属	Ⅵ区	双	1.14	0.86	0.81	0.39	1.33
		〃	1.07	0.81	0.78	0.34	1.32
		〃	1.07	0.76	0.75	0.33	1.41
		〃	1.07	0.74	0.76	0.26	1.45
		〃	1.06	0.80	0.83	0.34	1.33
		〃	1.06	0.77	0.80	0.27	1.38
		〃	1.06	0.69	0.68	0.27	1.54
		〃	1.00	0.81	0.78	0.32	1.23
		〃	1.00	0.78	0.82	0.34	1.28
		〃	0.98	0.82	0.82	0.31	1.20
		〃	0.98	0.80	0.79	0.29	1.23
		〃	0.98	0.79	0.85	0.29	1.24
		〃	0.98	0.70	0.71	0.30	1.40
		〃	0.96	0.78	0.82	0.29	1.23
		〃	0.96	0.72	0.70	0.28	1.33
		〃	0.93	0.85	0.84	0.41	1.09
		〃	0.93	0.79	0.74	0.27	1.18
		〃	0.91	0.81	0.85	0.26	1.12
		〃	0.90	0.73	0.76	0.26	1.23
		〃	0.87	0.85	0.88	0.34	1.02
		〃	0.82	0.73	0.73	0.30	1.12

種 名	出土地区	双半	長 さ	幅	厚 さ	重 量	長 / 幅
コナラ属	Ⅵ 区	双	0.77	0.78	0.78	0.26	0.98
		〃	0.74	0.69	0.70	0.17	1.07
		半	1.31	0.83	0.43	0.19	1.58
		〃	1.20	0.73	0.45	0.20	1.64
		〃	1.17	0.79	0.41	0.21	1.48
		〃	1.14	0.79	0.46	0.20	1.44
		〃	1.14	0.69	0.38	0.15	1.65
		〃	1.13	0.84	0.43	0.19	1.35
		〃	1.11	0.77	0.54	0.25	1.44
		〃	1.11	0.69	0.36	0.15	1.61
		〃	1.09	0.80	0.39	0.19	1.36
		〃	1.09	0.78	0.47	0.14	1.40
		〃	1.09	0.77	0.38	0.17	1.42
		〃	1.07	0.79	0.41	0.15	1.35
		〃	1.07	0.68	0.37	0.14	1.57
		〃	1.06	0.78	0.40	0.15	1.36
		〃	1.06	0.64	0.38	0.12	1.66
		〃	1.05	0.65	0.37	0.13	1.62
		〃	1.05	0.64	0.38	0.13	1.64
		〃	1.04	0.81	0.49	0.21	1.28
		〃	1.04	0.80	0.45	0.22	1.30
		〃	1.04	0.79	0.48	0.13	1.32
		〃	1.03	0.80	0.42	0.20	1.29
		〃	1.02	0.89	0.56	0.20	1.15
		〃	1.02	0.71	0.33	0.16	1.44
		〃	1.01	0.82	0.44	0.21	1.23
		〃	1.01	0.80	0.43	0.17	1.26
		〃	1.01	0.74	0.40	0.18	1.36
		〃	1.00	0.84	0.50	0.22	1.19
		〃	1.00	0.73	0.37	0.17	1.37
		〃	1.00	0.61	0.33	0.10	1.64
		〃	0.99	0.96	0.52	0.19	1.03
		〃	0.99	0.74	0.38	0.15	1.34
		〃	0.99	0.65	0.36	0.09	1.52
		〃	0.98	0.73	0.39	0.17	1.34
		〃	0.98	0.69	0.46	0.19	1.42
		〃	0.96	0.73	0.39	0.17	1.32
		〃	0.96	0.65	0.33	0.14	1.48
		〃	0.96	0.63	0.31	0.09	1.52
		〃	0.95	0.78	0.40	0.18	1.22
		〃	0.94	0.80	0.46	0.18	1.18

種 名	出土地区	双半	長 さ	幅	厚 さ	重 量	長 / 幅
コナラ属	Ⅵ 区	半	0.94	0.78	0.45	0.15	1.21
		〃	0.94	0.74	0.42	0.16	1.27
		〃	0.93	0.81	0.44	0.16	1.15
		〃	0.93	0.80	0.47	0.16	1.16
		〃	0.93	0.57	0.43	0.13	1.63
		〃	0.92	0.86	0.39	0.12	1.07
		〃	0.92	0.78	0.43	0.19	1.18
		〃	0.92	0.77	0.43	0.18	1.19
		〃	0.91	0.78	0.43	0.20	1.17
		〃	0.91	0.76	0.40	0.14	1.20
		〃	0.91	0.76	0.36	0.14	1.20
		〃	0.91	0.71	0.39	0.16	1.28
		〃	0.91	0.67	0.41	0.16	1.36
		〃	0.91	0.63	0.37	0.11	1.44
		〃	0.90	0.88	0.51	0.17	1.02
		〃	0.90	0.76	0.46	0.21	1.18
		〃	0.90	0.75	0.36	0.16	1.20
		〃	0.90	0.74	0.37	0.15	1.22
		〃	0.90	0.73	0.39	0.14	1.23
		〃	0.90	0.72	0.37	0.16	1.25
		〃	0.89	0.85	0.52	0.24	1.05
		〃	0.89	0.75	0.45	0.17	1.19
		〃	0.89	0.75	0.42	0.14	1.19
		〃	0.89	0.68	0.44	0.10	1.31
		〃	0.89	0.67	0.36	0.12	1.33
		〃	0.88	0.85	0.57	0.23	1.04
		〃	0.88	0.83	0.48	0.20	1.06
		〃	0.88	0.70	0.38	0.12	1.26
		〃	0.88	0.69	0.36	0.14	1.28
		〃	0.88	0.68	0.36	0.13	1.29
		〃	0.88	0.65	0.35	0.10	1.35
		〃	0.88	0.65	0.33	0.10	1.35
		〃	0.88	0.58	0.28	0.09	1.52
		〃	0.87	0.83	0.50	0.24	1.05
		〃	0.87	0.81	0.35	0.13	1.07
		〃	0.87	0.78	0.43	0.14	1.12
		〃	0.87	0.78	0.39	0.13	1.12
		〃	0.87	0.74	0.43	0.14	1.18
		〃	0.87	0.73	0.51	0.16	1.19
		〃	0.87	0.69	0.40	0.13	1.26
		〃	0.86	0.83	0.45	0.15	1.04

種名	出土地区	双半	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅
コナラ属	Ⅵ区	半	0.86	0.73	0.42	0.15	1.18
		◇	0.86	0.73	0.42	0.14	1.18
		◇	0.86	0.63	0.37	0.12	1.37
		◇	0.86	0.63	0.30	0.11	1.37
		◇	0.86	0.61	0.34	0.11	1.41
		◇	0.86	0.58	0.32	0.08	1.48
		◇	0.85	0.93	0.58	0.21	0.91
		◇	0.85	0.81	0.34	0.13	1.05
		◇	0.85	0.78	0.42	0.12	1.09
		◇	0.85	0.75	0.46	0.16	1.13
		◇	0.85	0.73	0.37	0.17	1.16
		◇	0.85	0.66	0.40	0.11	1.29
		◇	0.84	0.83	0.52	0.18	1.01
		◇	0.84	0.75	0.42	0.13	1.12
		◇	0.83	0.84	0.48	0.22	0.99
		◇	0.83	0.76	0.50	0.19	1.09
		◇	0.83	0.62	0.31	0.09	1.34
		◇	0.82	0.80	0.51	0.18	1.03
		◇	0.82	0.78	0.37	0.14	1.05
		◇	0.82	0.75	0.34	0.13	1.09
		◇	0.81	0.74	0.46	0.14	1.09
		◇	0.80	0.82	0.36	0.13	0.98
		◇	0.80	0.80	0.49	0.19	1.00
		◇	0.80	0.70	0.43	0.16	1.23
		◇	0.80	0.65	0.41	0.10	1.23
		◇	0.79	0.76	0.38	0.13	1.04
		◇	0.79	0.74	0.47	0.12	1.07
		◇	0.78	0.66	0.44	0.10	1.18
		◇	0.78	0.65	0.33	0.10	1.20
		◇	0.78	0.64	0.36	0.10	1.22
		◇	0.77	0.69	0.42	0.15	1.12
		◇	0.76	0.79	0.36	0.11	0.96
		◇	0.75	0.77	0.49	0.22	0.97
		◇	0.68	0.62	0.34	0.09	1.10
計			127.61	102.47	—	—	—
平均			0.93	0.75	—	0.31	1.26

V おわりに

豊前バイパス建設に伴う発掘調査による、上唐原遺跡の遺構遺物のうち、今回は弥生時代以降に限って報告した。この遺跡では縄文時代後期の住居跡が発見され、縄文土器・石器など多数の遺物も出土したが、縄文時代関係を含めたまとめは次回に譲り、ここでは上唐原遺跡で調査された弥生時代以降の遺構について、時期別に概観してみよう。

弥生時代の遺物は後期以降のものが出土し、後期後半ないし末頃の土器は5・10(22)・11・12・14・15・18・19・34～36・42号住居跡、18号土壇・甕棺墓、3号土器溜りなどにみられる。住居跡の重複関係などからでは、10・11・19号や34～36号住居跡に切り合い関係があるので、例えば10(22)号よりも19号が先行し、35号が34・36号より先行するはずである。しかし個々の住居跡出土土器をみると必ずしも先後関係がスムーズには進まない。一括資料としては、住居跡出土資料は混入品も含まれていて、必ずしも良好とは言えない。むしろ18号土壇・甕棺墓・3号土器溜りの資料が一時埋納的な性格を有している。

古墳時代の遺構では、3世紀末ないし4世紀のいわゆる古式土師器を伴う遺構と、6世紀後半期の須恵器を伴う遺構に大別され、中間の5世紀代の遺構も若干みられる。古式土師器を伴う遺構には4・6・8・13・21・24～30・34・36・39・40・42号住居跡、5・9～11・13号土壇、1・2号土器溜りなどがある。5世紀代では37・45号住居跡がある。そして6世紀後半頃の例には1～3・7・9・23・33・38・41・43・44・47・48・51・52・53号住居跡、2・4・16号土壇、2・3号溝などの遺構があげられる。このなかで、21号住居跡には多量の土器や鉄製品類が出土していて注目される。

古代の遺構では、出土遺物があまり顕著ではないが、7世紀代の遺物を含む住居跡に46・55号住居跡がある。46号住居跡は北辺に、両袖に柱状の石が据えられタイプの、カマドが付設されている。また55号住居跡は小形長方形プランで2本柱だが、隅を利用したカマドが付設されている。掘立柱建物跡は時期を明確にし得ないが、住居跡などとの重複から古代に含まれる例も多いと推定される。溝状遺構では10号溝に若干8世紀頃の遺物が出土している。幹線溝と枝溝からなり、水田への導水のための堰があった可能性が高い。

中世の遺物は1号溝や5号溝にみられ、9号掘立柱建物跡も中世以降であろう。9号建物は1×10間の建物で、旧畑地区画にはほぼ平行するが、旧県道を挟んで東側に延長した位置が1号溝の軸線である点も興味深い。9号建物のような例は厩施設の可能性もあり、旧県道の起源は未確認ではあるが、古くからの道に沿っていることを考慮すれば推定し易い。

上唐原遺跡の消長をみると、弥生時代後期後半頃の住居跡などが東半部に構築され、甕棺墓も1基ながらも存在する。西半部には19号土壇以外明確な遺構はみられない。西半部の地形をみると字田法寺・塚畑分は現在殆ど平坦地になっているが、水路と農道が碁盤の目のような畑

地区画と異なり舟形に曲がることからみて、かつての微高地全体が削平されて失われた可能性が高い。明治39年版5万分の1地形図には微高地がみえるので、新県道付設時頃に削られたのであろう。Ⅵ区調査区が辛うじて微高地を留めていたことになり、土壌は微高地縁辺部であったために偶然残されたのであろう。

古式土師器の時期の遺構は、弥生後期の遺構などと重複しながらも引き続き東半部に占地する。弥生後期の土器などを一括投棄したとみられる土器溜りは住居跡の周辺部に位置していて、いつの時期かは特定し難いが、何らかの整理行為が行われたものと思われる。

5世紀の37・45号住居跡は東半部でも西寄りに位置する。西半部では辛うじて6世紀後半頃から7世紀の住居跡が床面付近まで削られて残るが、6世紀後半の遺構は東半部・西半部にも構築され、人為的に掘削された2・3・6号溝などが埋没化する。2・3号溝はそれぞれ鉤形に曲がる溝であるが、調査区域内でみるかぎり溝で囲まれる範囲内に6世紀後半の住居跡は発見されずに、何故か解放された側に構築されている。このため区画溝は方形周溝を伴った墓などの施設であった可能性もないではなく、その性格を考えるためには調査区域外の発掘調査の機会を待たざるを得ない。

7世紀以降は竪穴住居跡が減少し、掘立柱建物中心になるものと推定されるが、耕地の整備も進められたであろう。この遺跡付近には山国川からの水害も幾たびとなく被ったことも想像されるが、災害を克服して、耕地の整備と溝状遺構など水路の整備も日々進められて今日に至っているであろう。

圖 版



上唐原遺跡周辺航空写真（国土地理院提供、KU-92-2XC5-11）



上唐原遺跡全景空中写真（東上空から）



上唐原遺跡全景空中写真（西上空から）

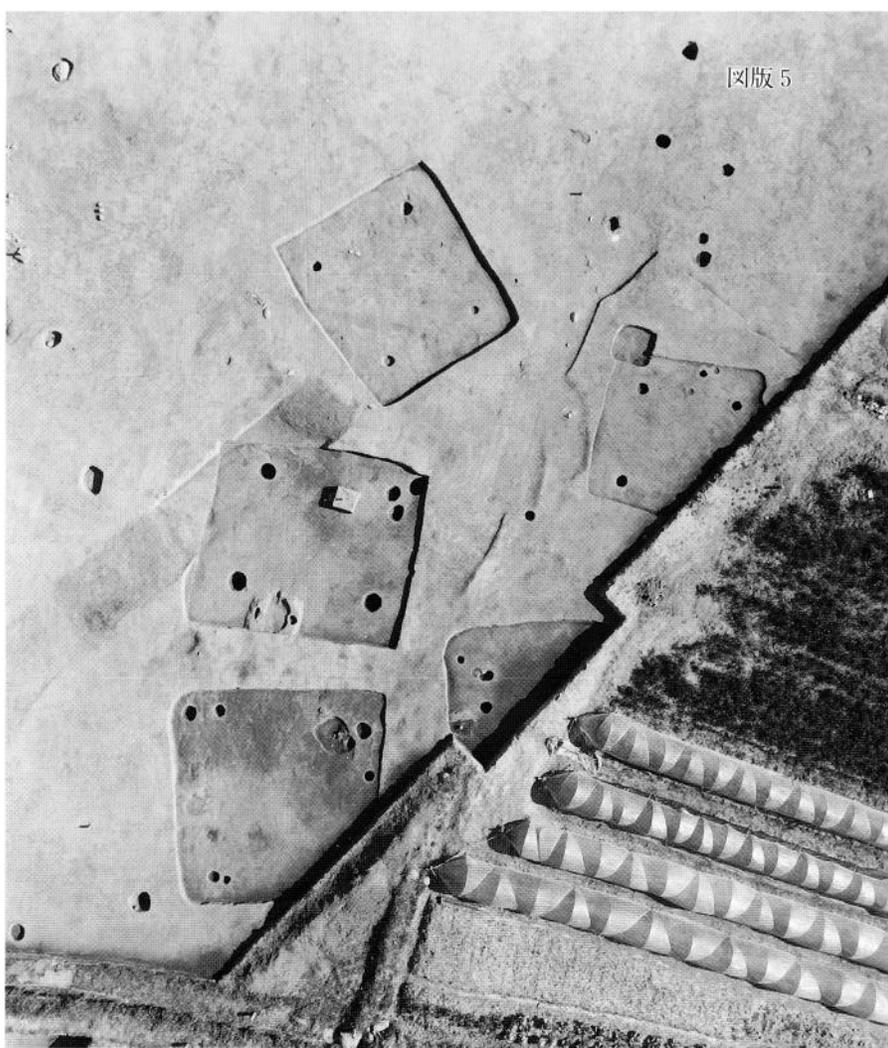


1

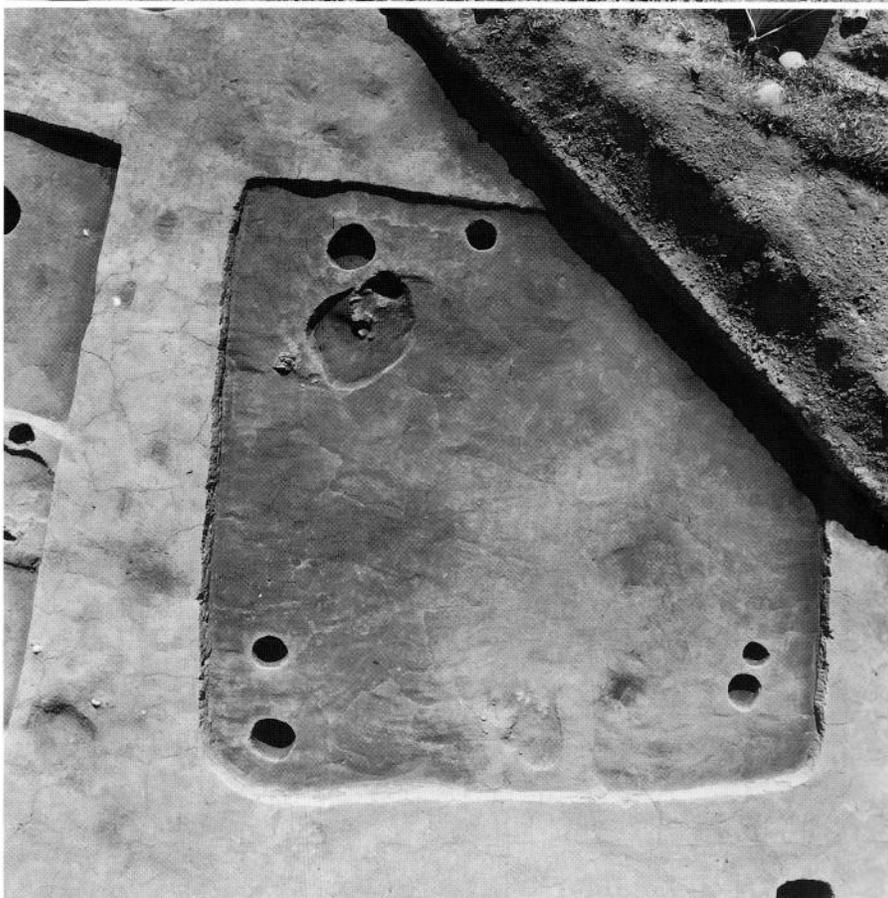


2

1 上唐原遺跡東半部全景空中写真（西上空から） 2 東半部全景（南上空から）



1



2

- 1 1～4・8号住居跡
(上空から)
- 2 1号住居跡
(上空から)

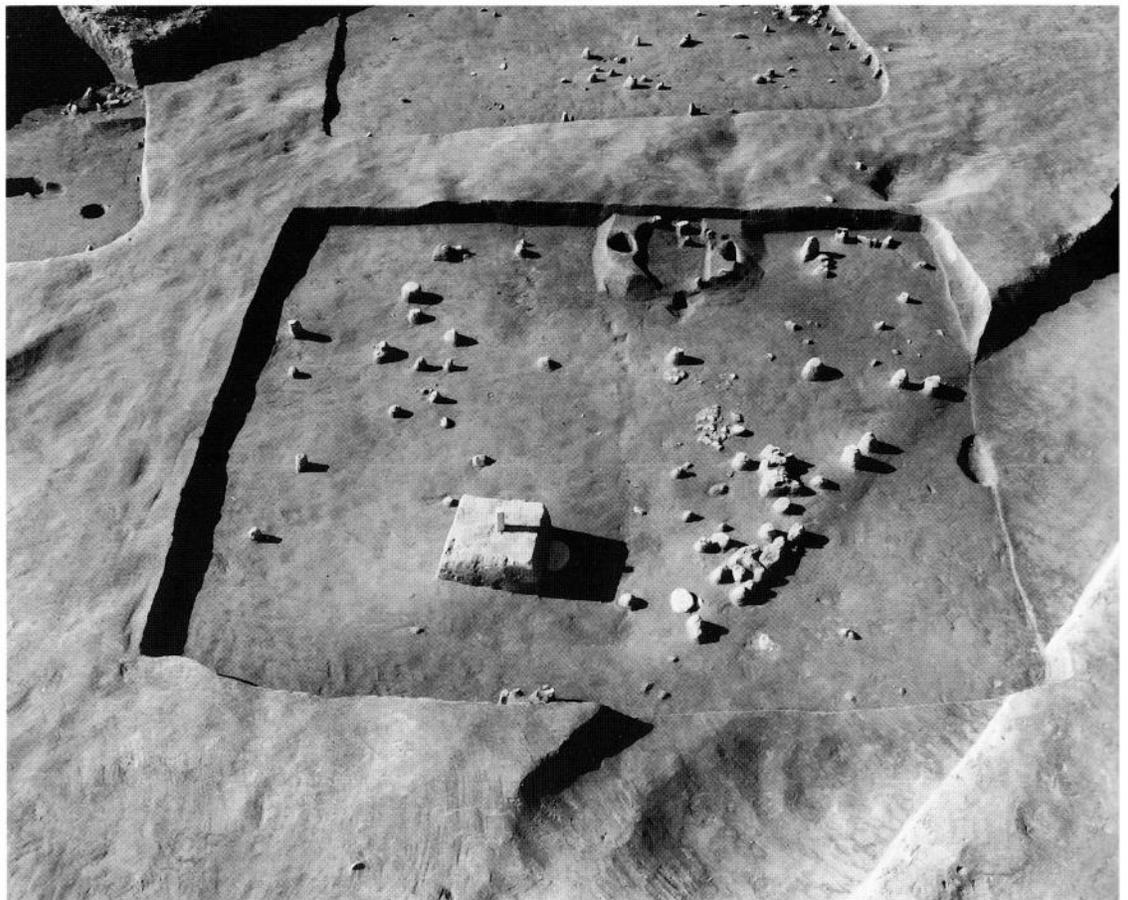
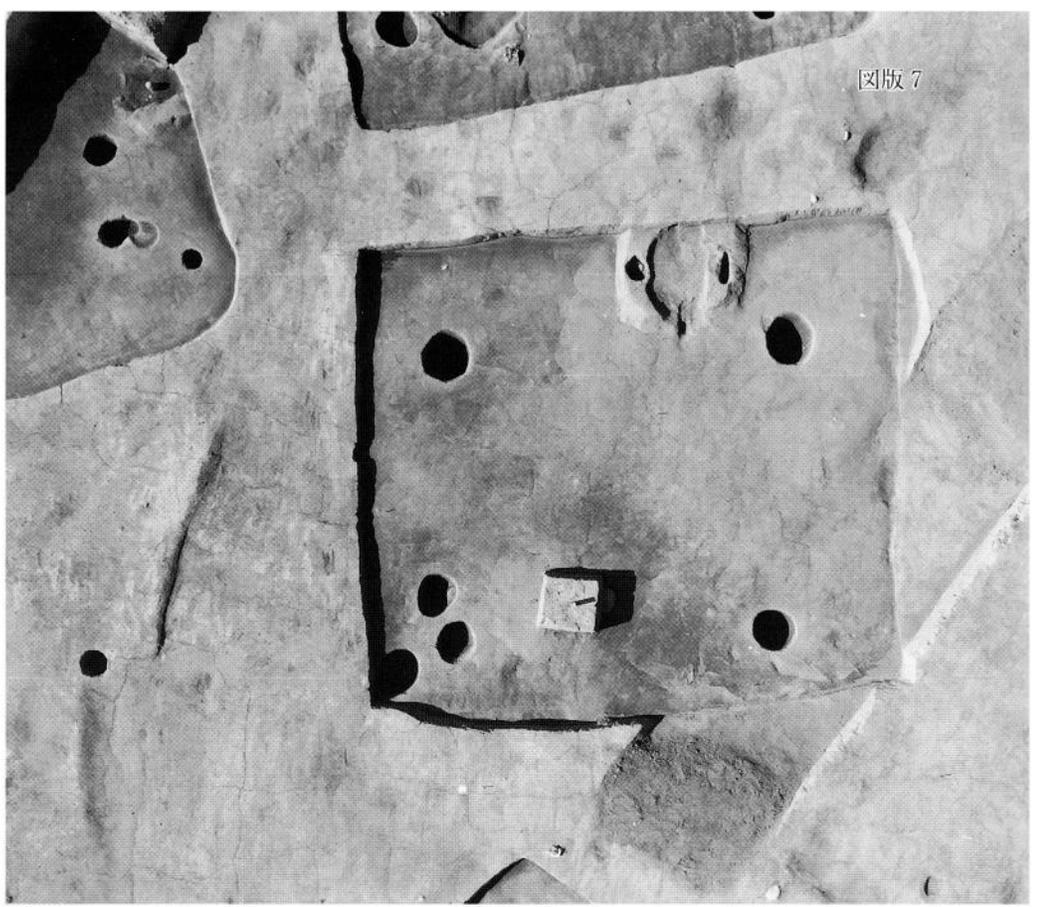


1



2

1 1号住居跡（北西から） 2 1号住居跡遺物出土状況



1 2号住居跡（上空から）

2 2号住居跡遺物出土状況



1



2

1 完掘後の2号住居跡（北東から） 2 3号住居跡（北東から）

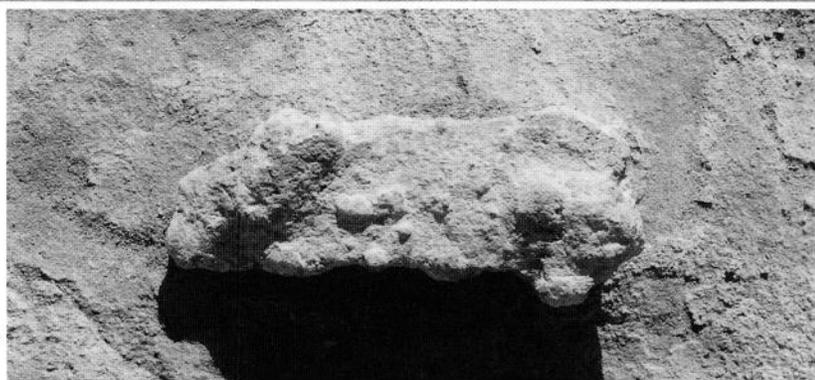


1

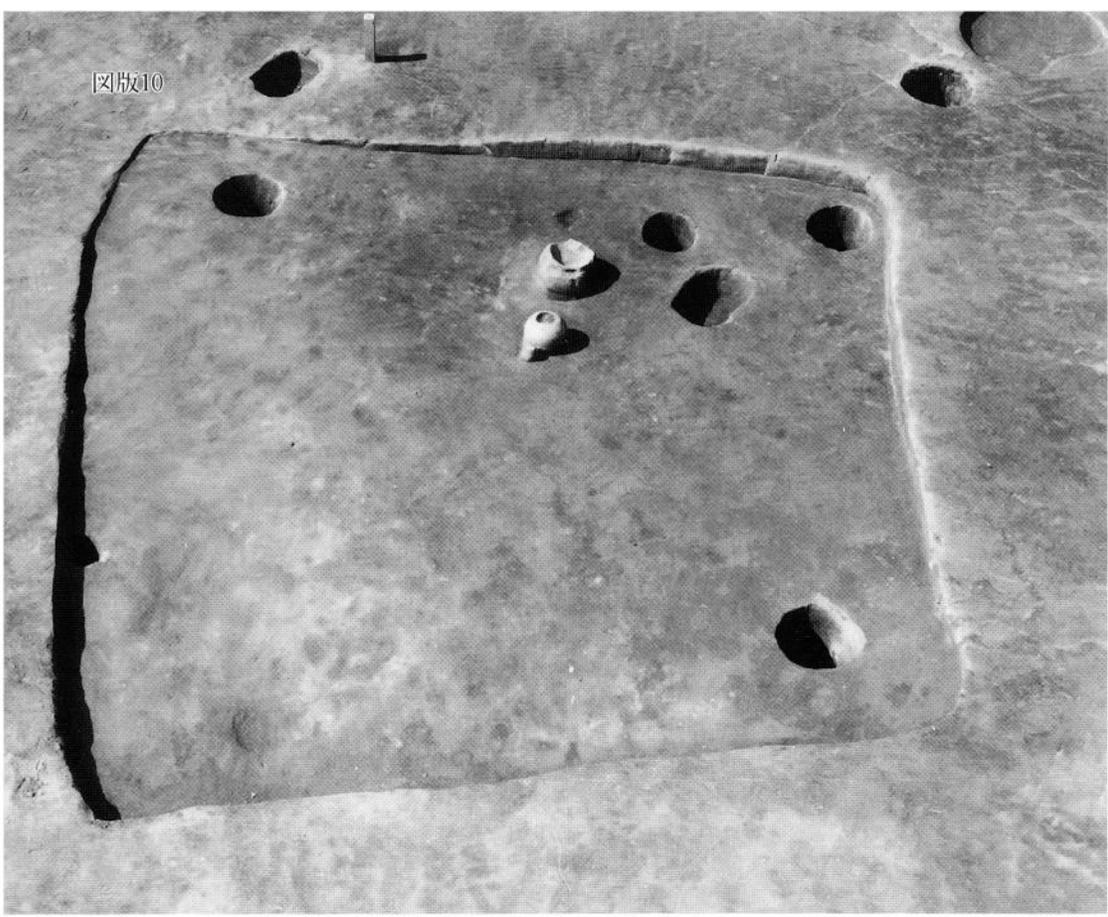


2

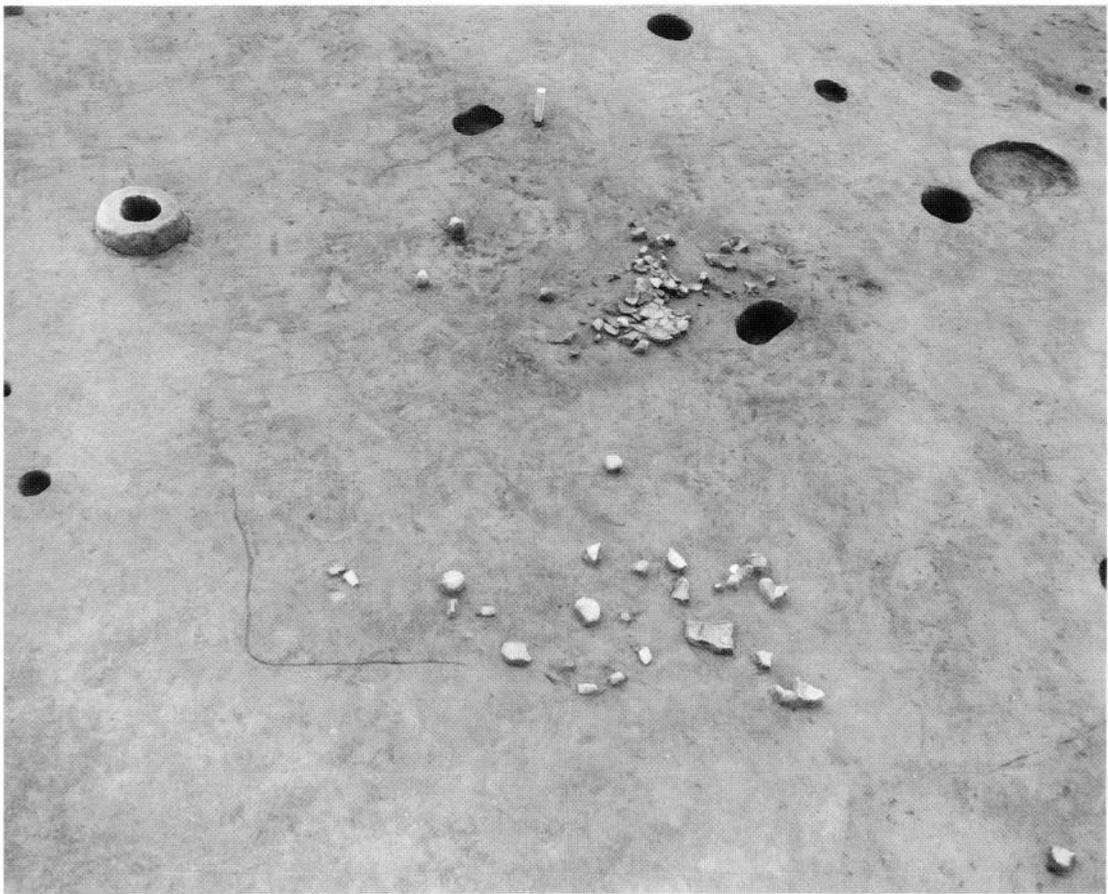
- 1 4号住居跡（北から）
- 2 4号住居跡遺物出土状況
- 3 4号住居跡鉄製品出土状況



3



1



2

1 5号住居跡（南東から） 2 5号住居跡遺物出土状況

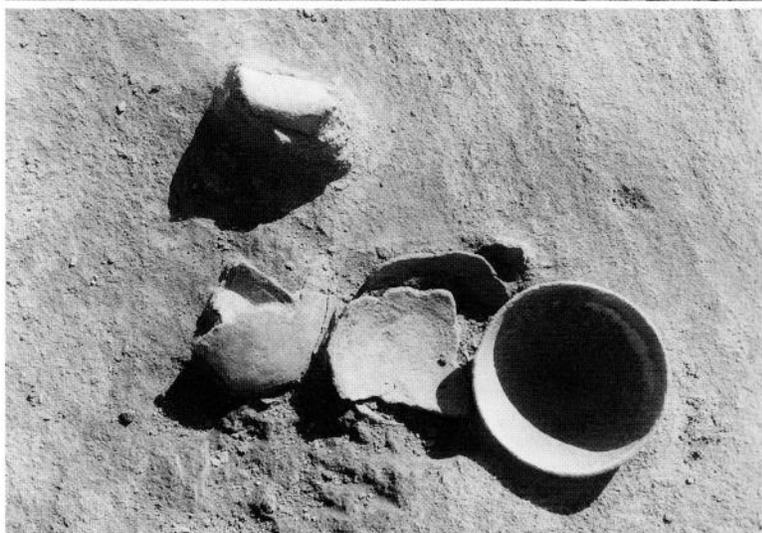
1



2



3



- 1 6号住居跡（南から）
- 2 6号住居跡遺物出土状況
- 3 6号住居跡遺物出土状況

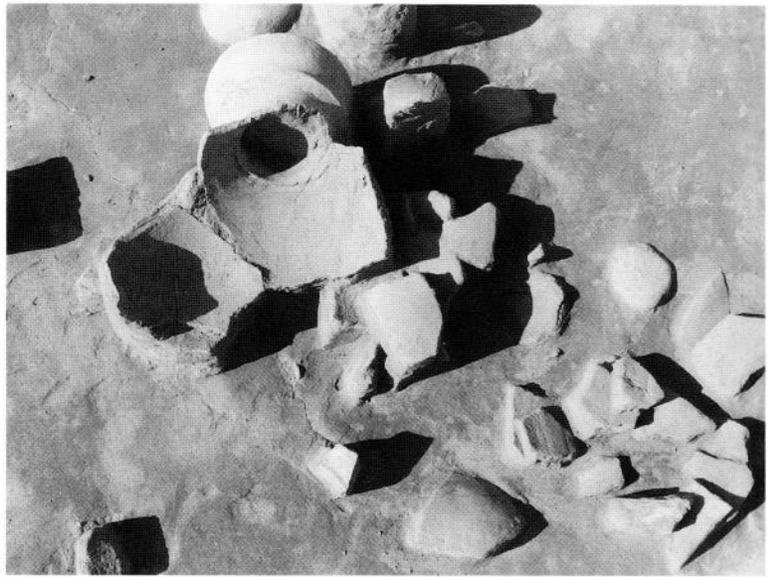
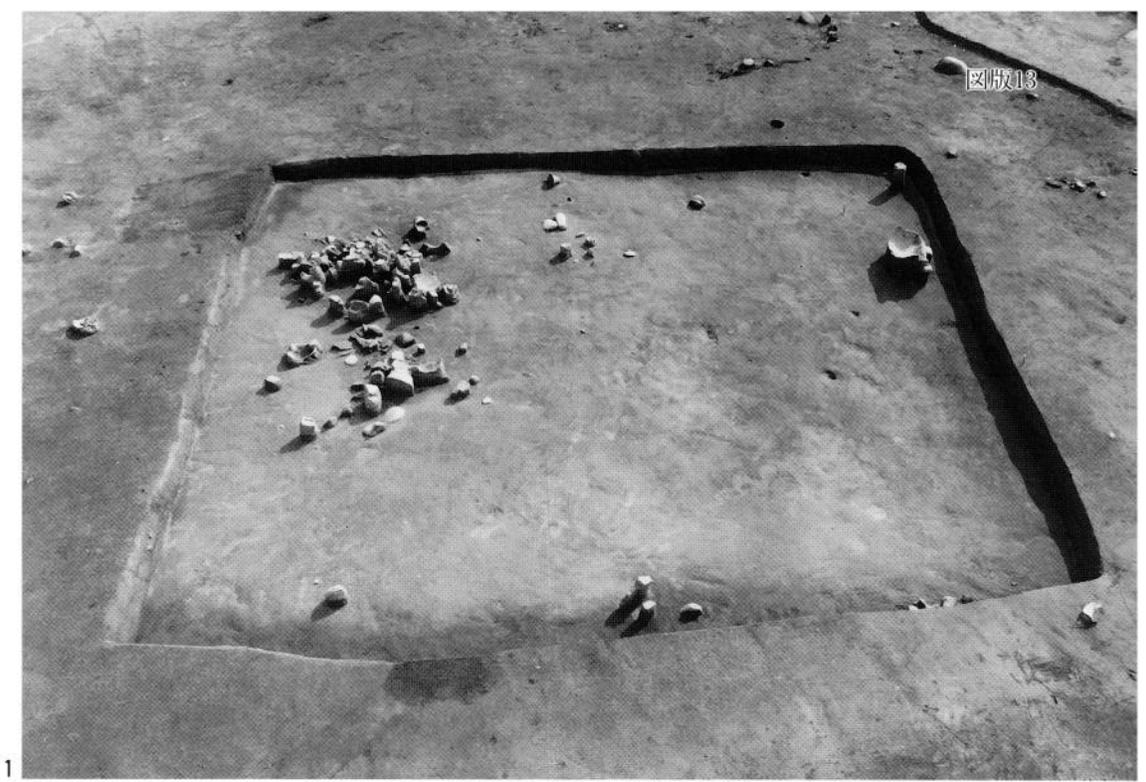


1



2

1 7号住居跡 (南から) 2 8号住居跡 (東から)



1 8号住居跡（北西から）

2 8号住居跡遺物出土状況

3 8号住居跡遺物出土状況





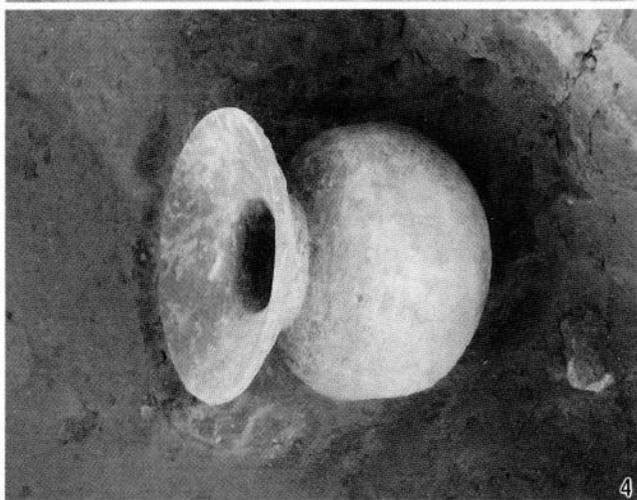
1



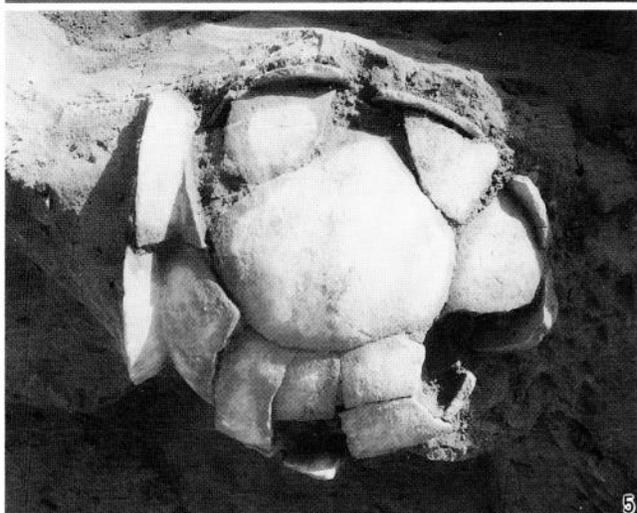
3



2



4



5

1 9～12・19～22号住居跡（上空から）

2 10号住居跡ピット内遺物出土状況

3 22号住居跡ピット内遺物出土状況

4・5 22号住居跡遺物出土状況



1

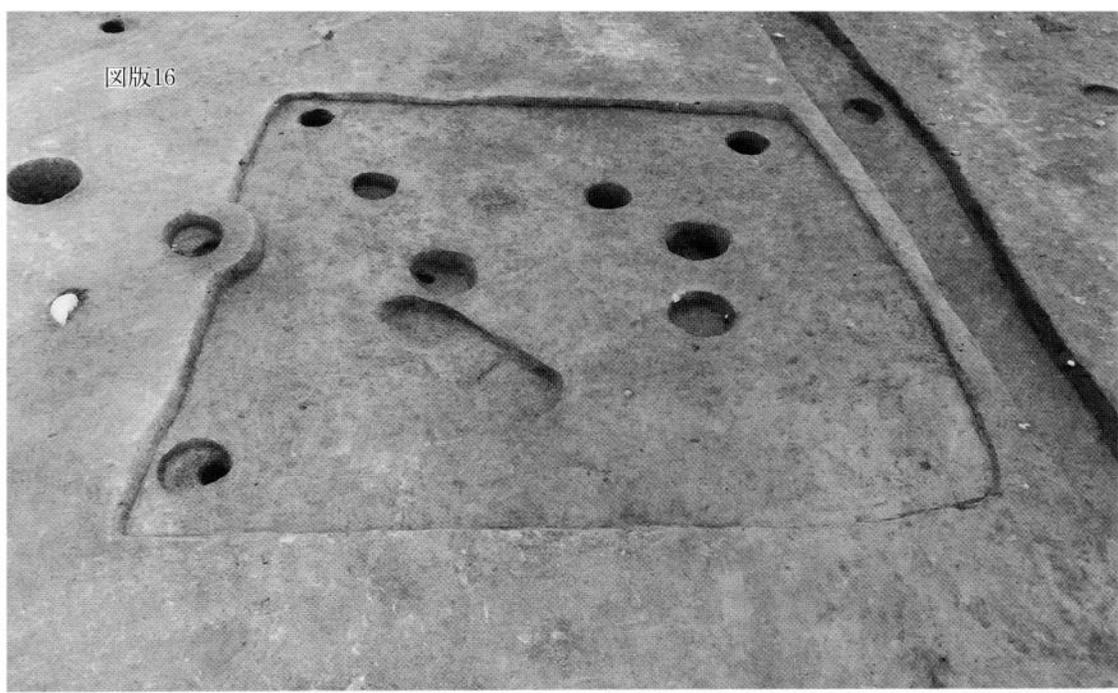


- 1 13号住居跡（北西から）
- 2 13号住居跡遺物出土状況
- 3 14号住居跡（南東から）

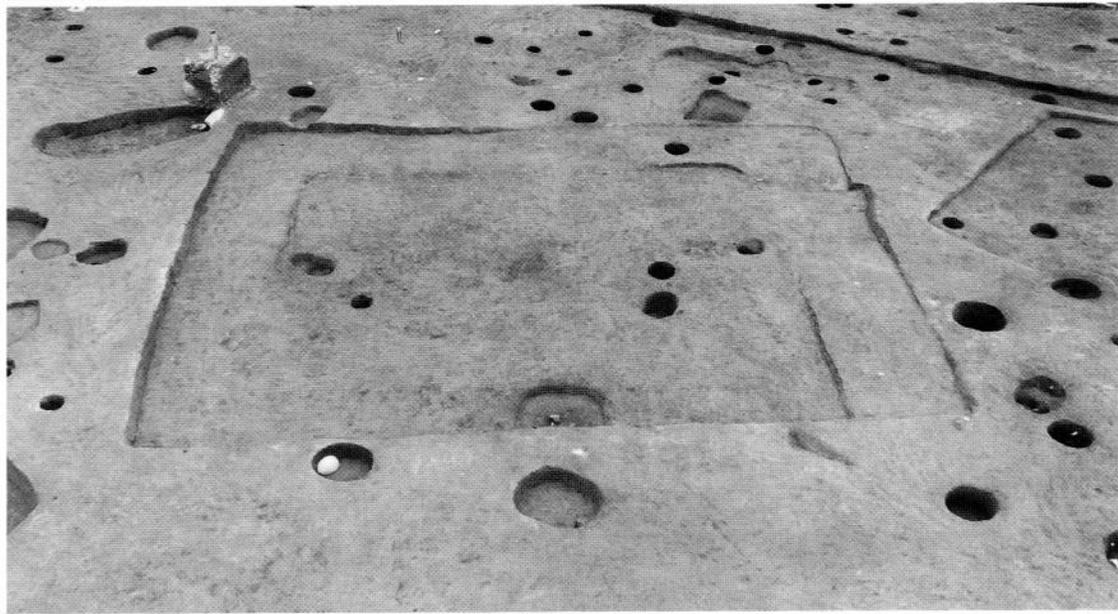
2



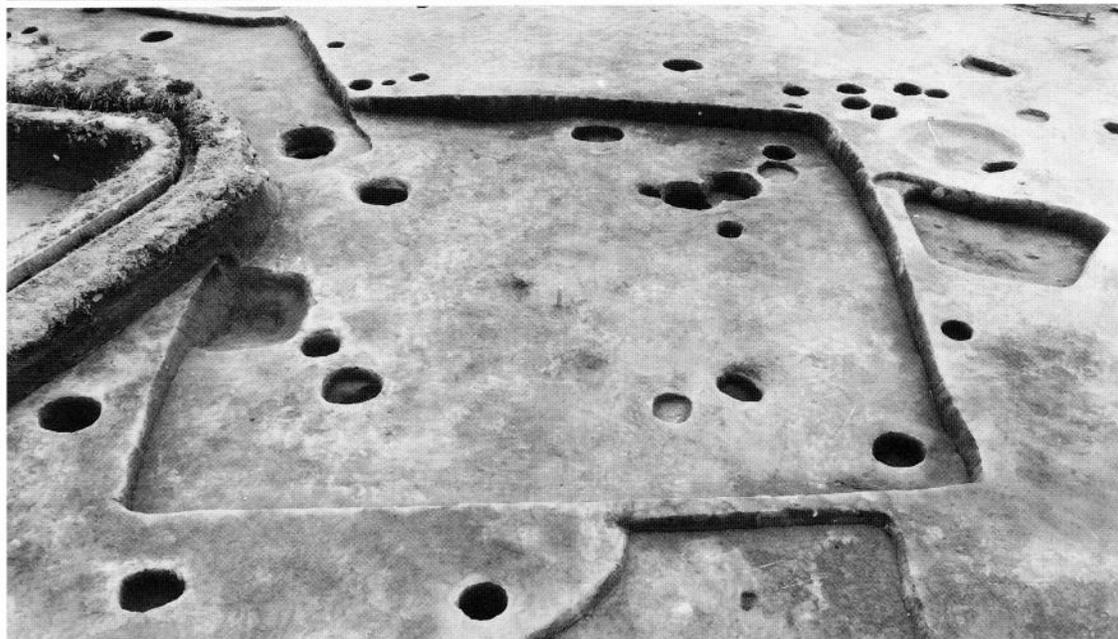
3



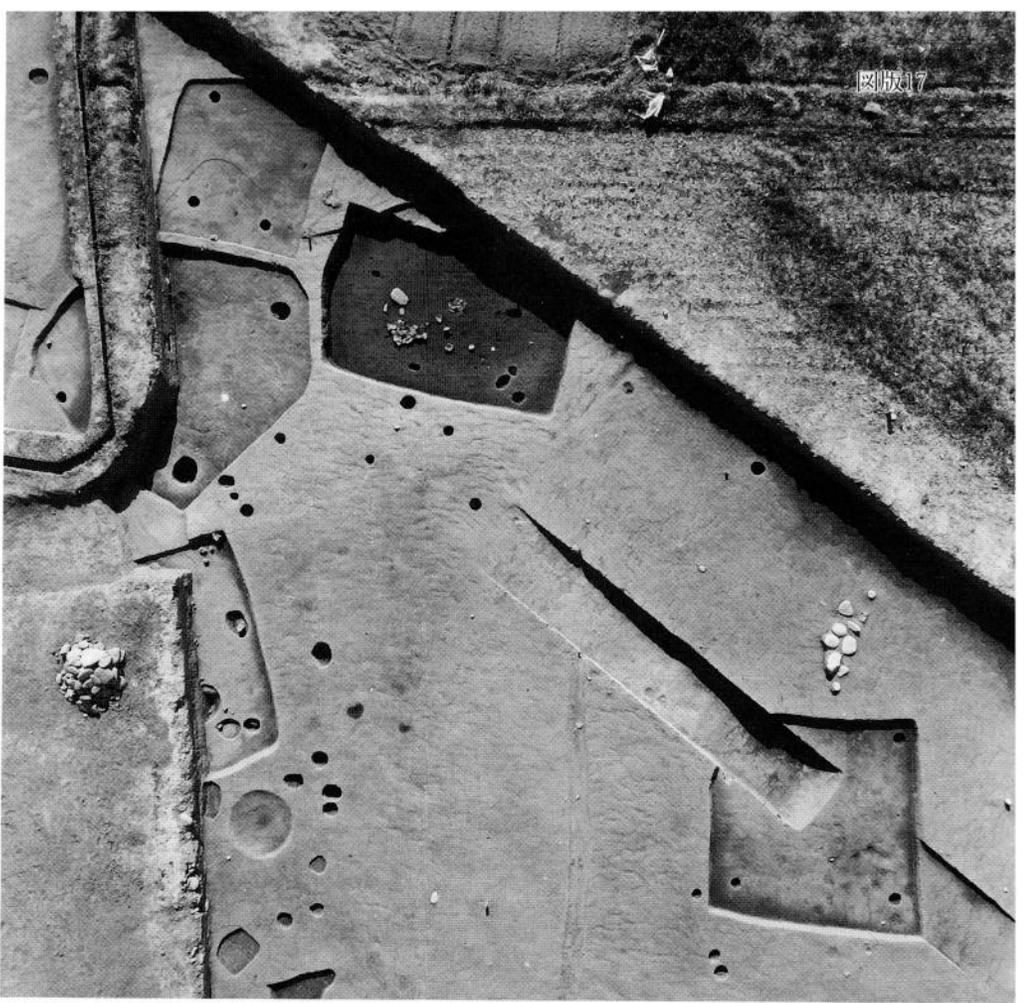
1
16号住居跡（東から）



2
18号住居跡（南東から）



3
19号住居跡（北東から）

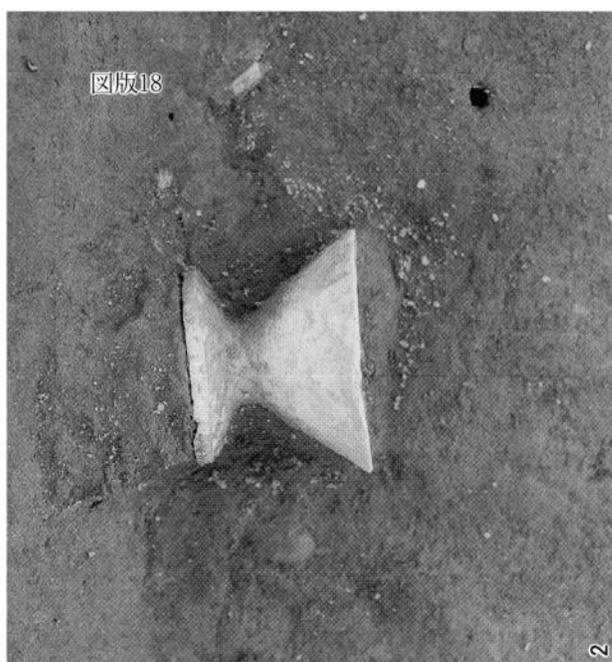


1

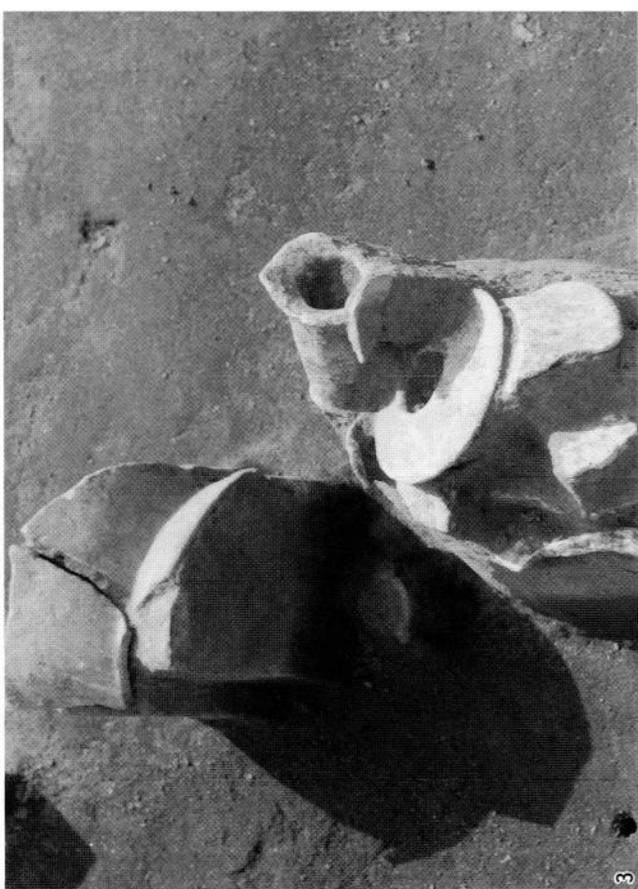


2

1 20~23号住居跡（上空から） 2 21号住居跡（北西から）



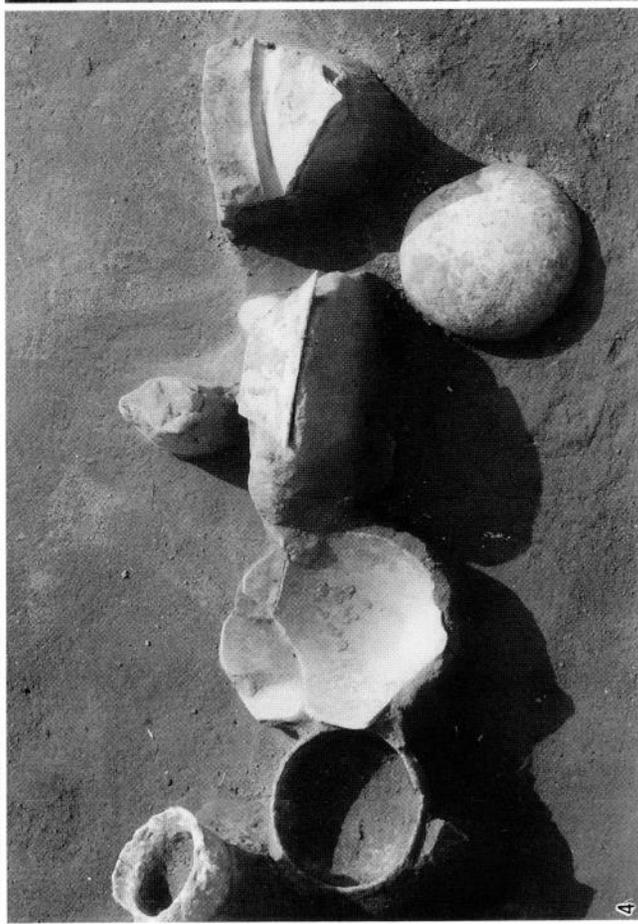
2



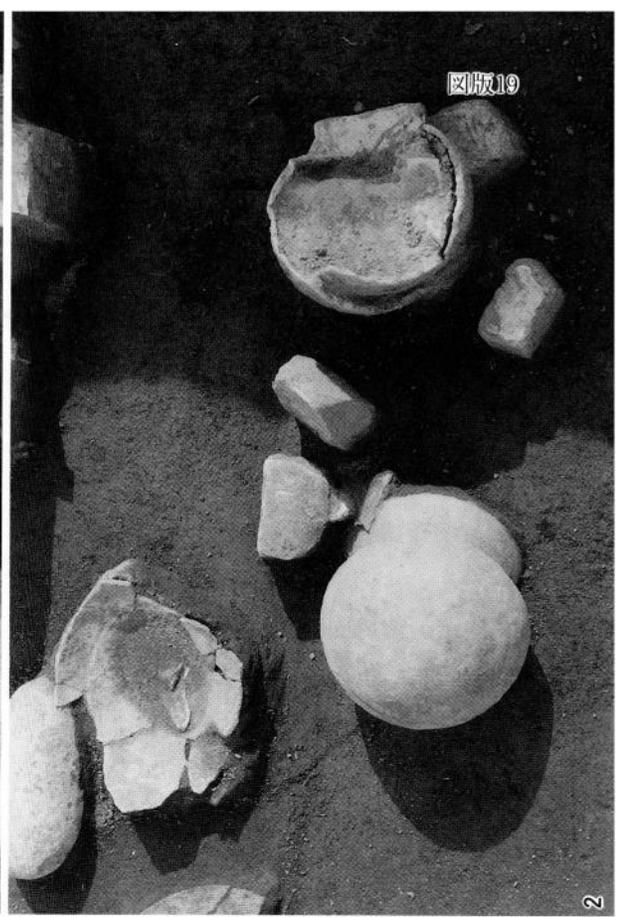
3



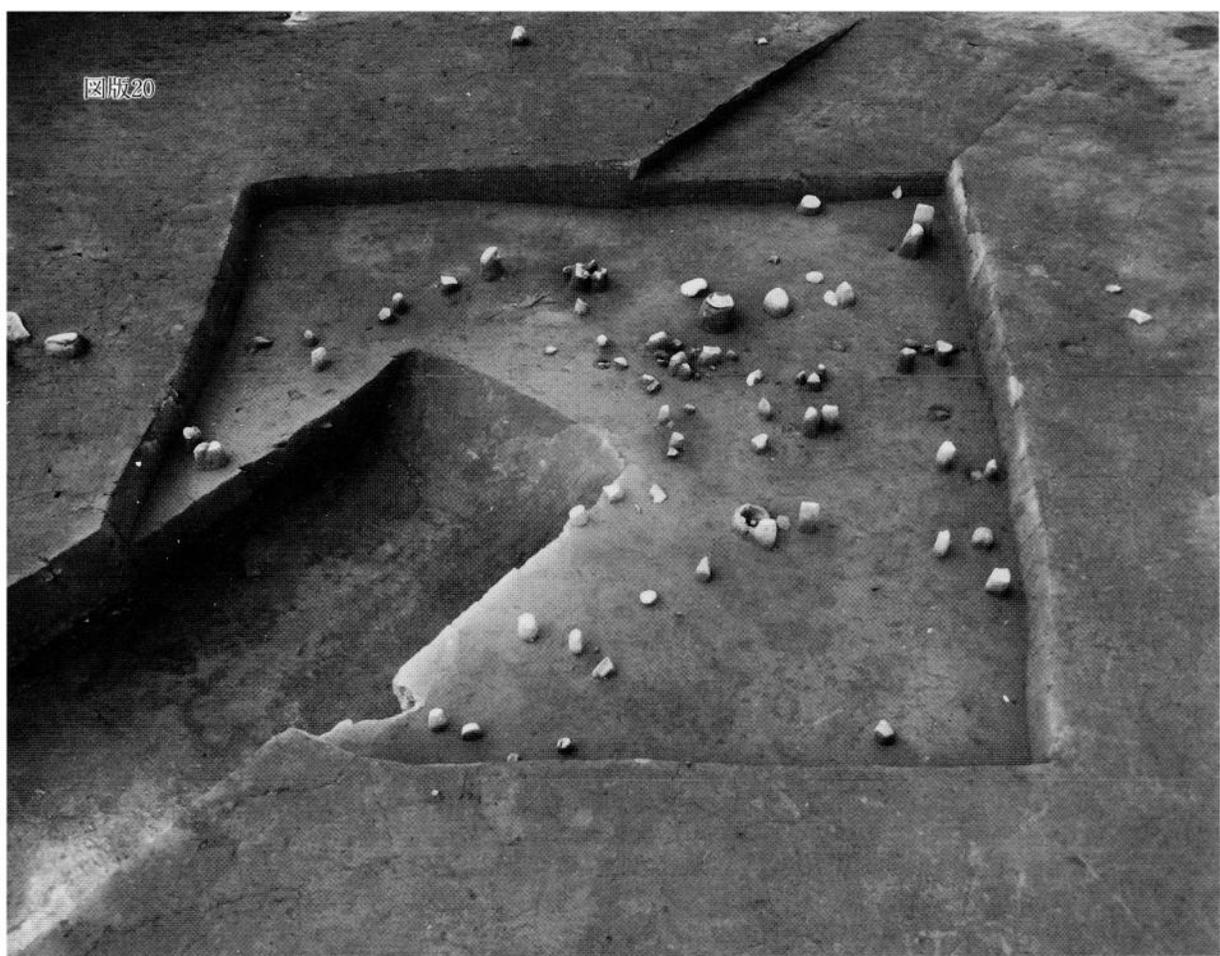
1



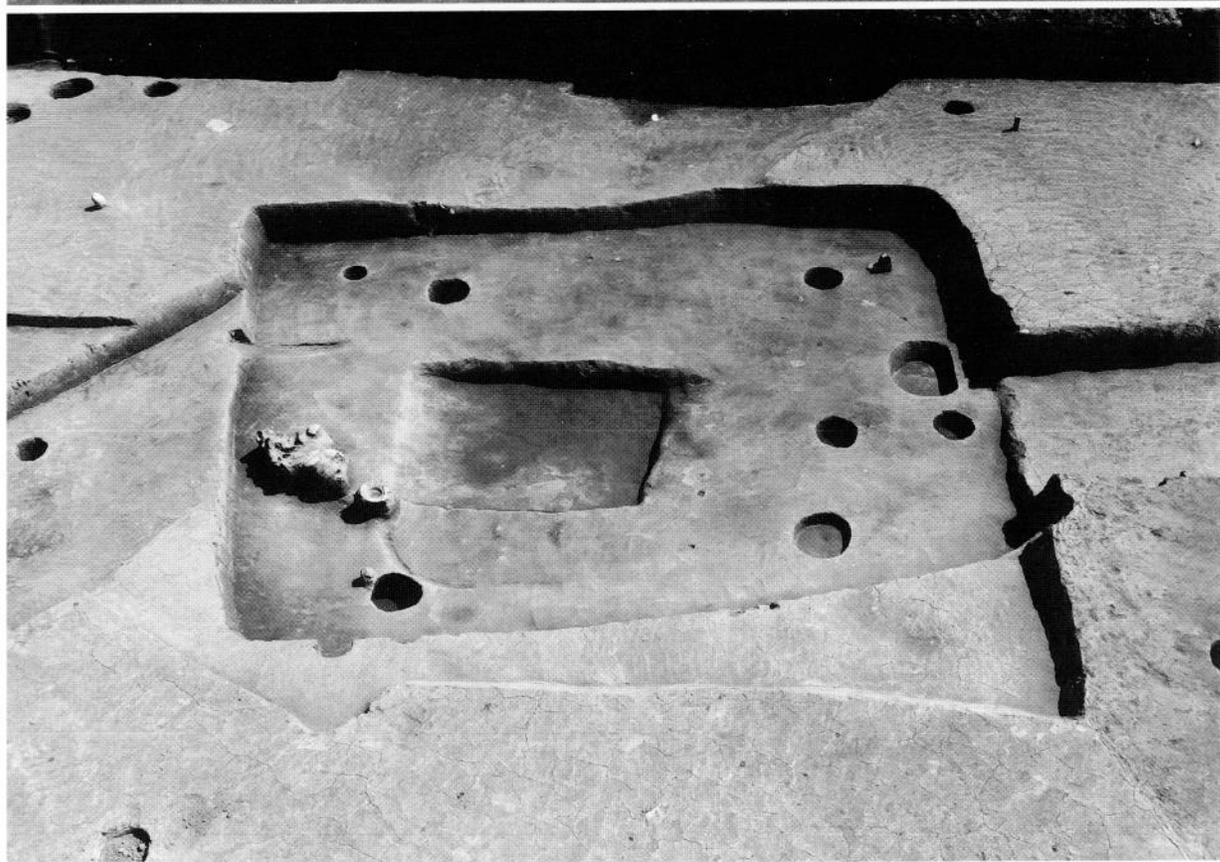
4



1 3 4 21号住居跡遺物出土状況

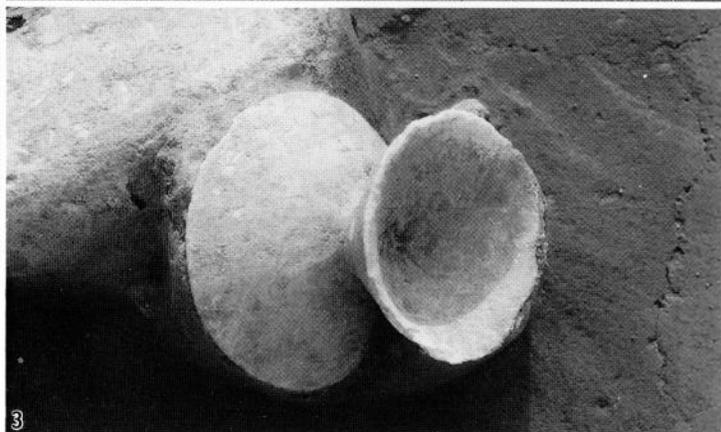
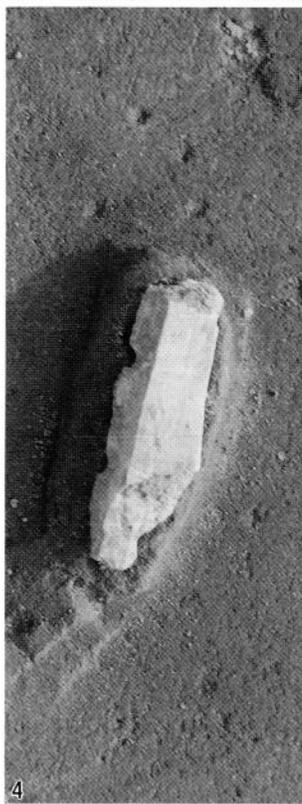
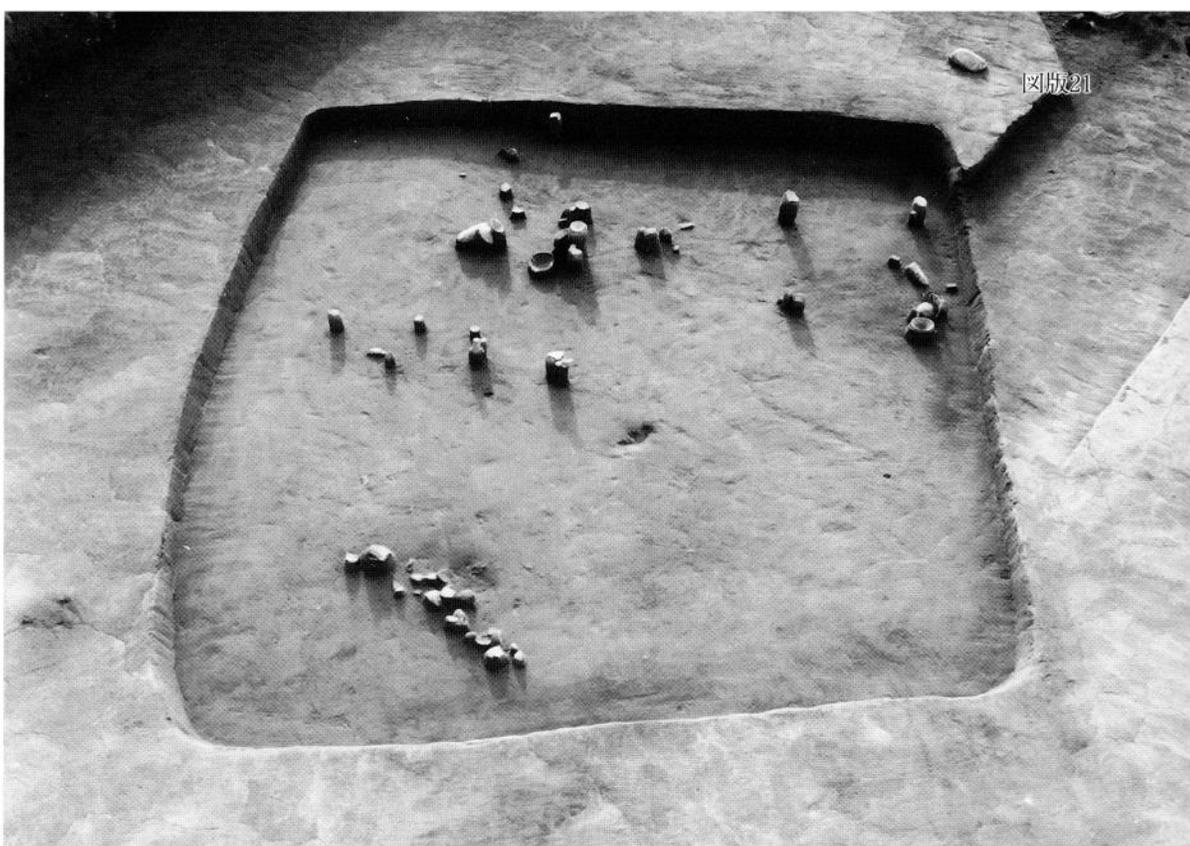


1

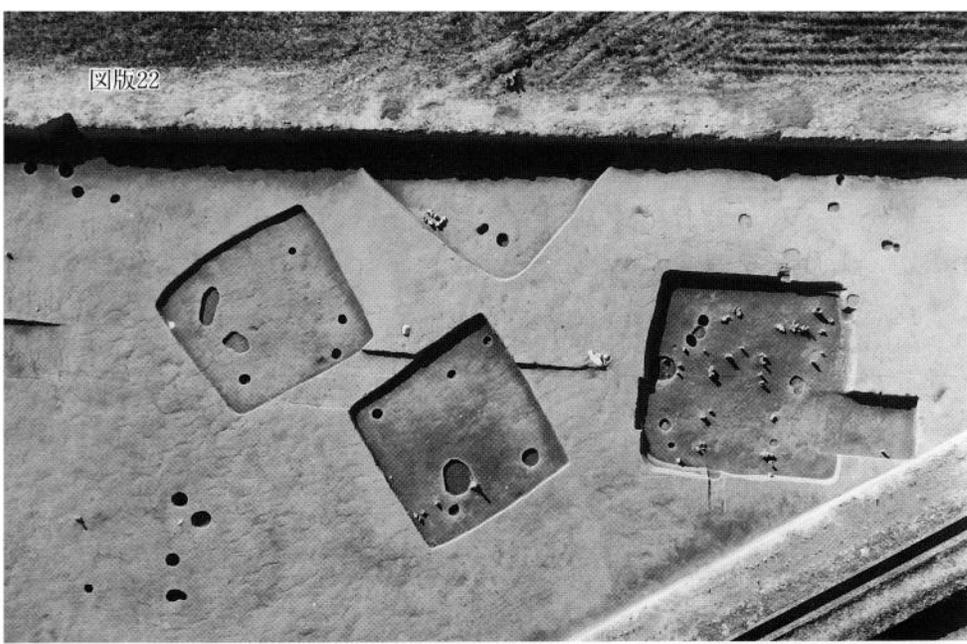


2

1 23号住居跡（北東から） 2 24号住居跡（北から）



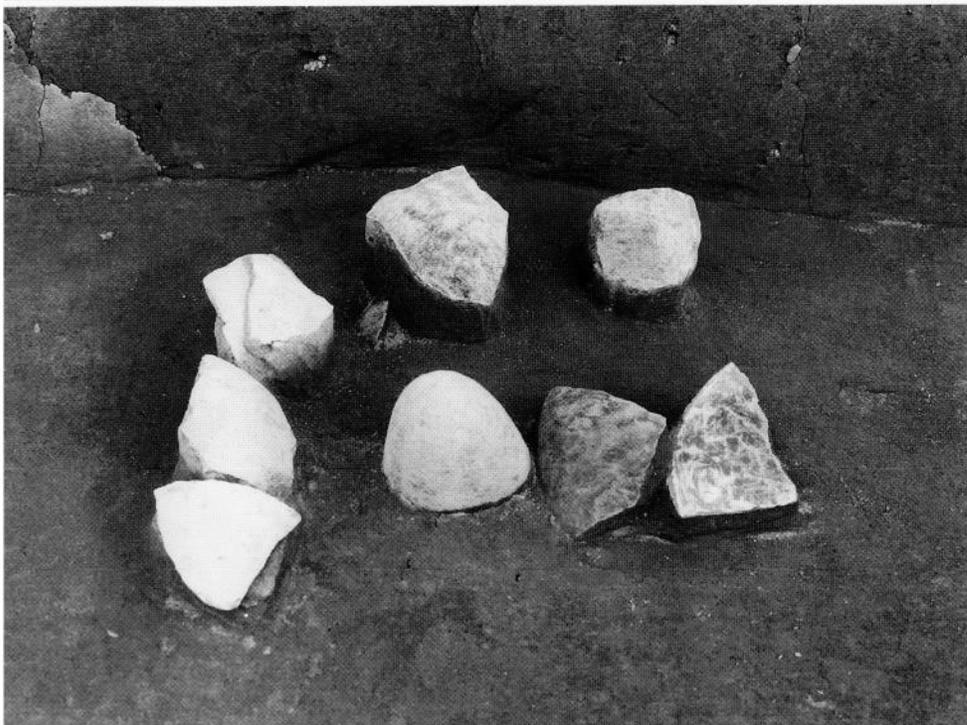
1 25号住居跡（北東から） 2～4 25号住居跡遺物出土状況



1 25ノ28号住居跡(上空から)



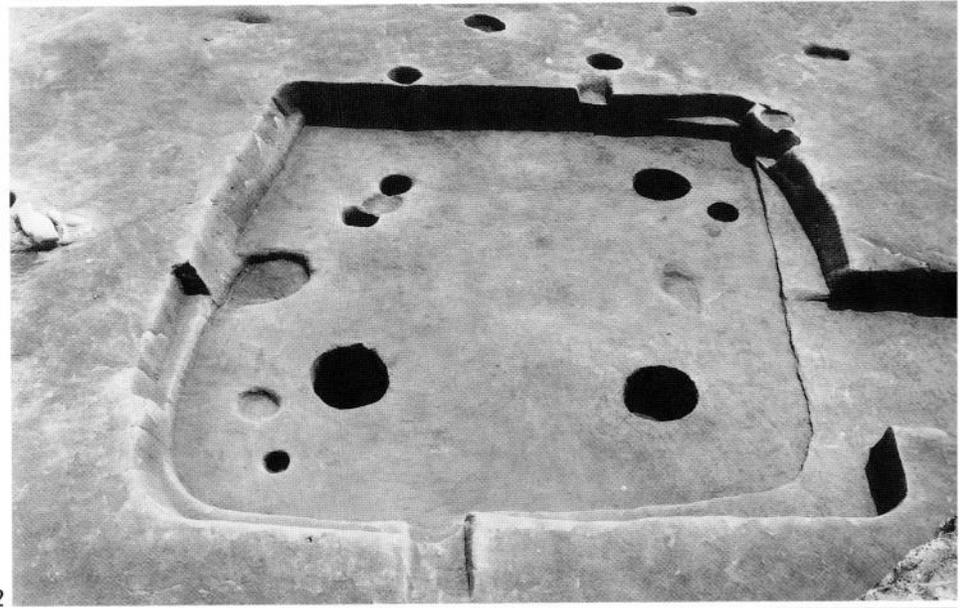
2 26号住居跡(北東から)



3 26号住居跡カマド(南西から)



1



2

- 1 27号住居跡
(北東から)
- 2 28号住居跡
(北から)
- 3 28号住居跡遺
物出土状況



3



1

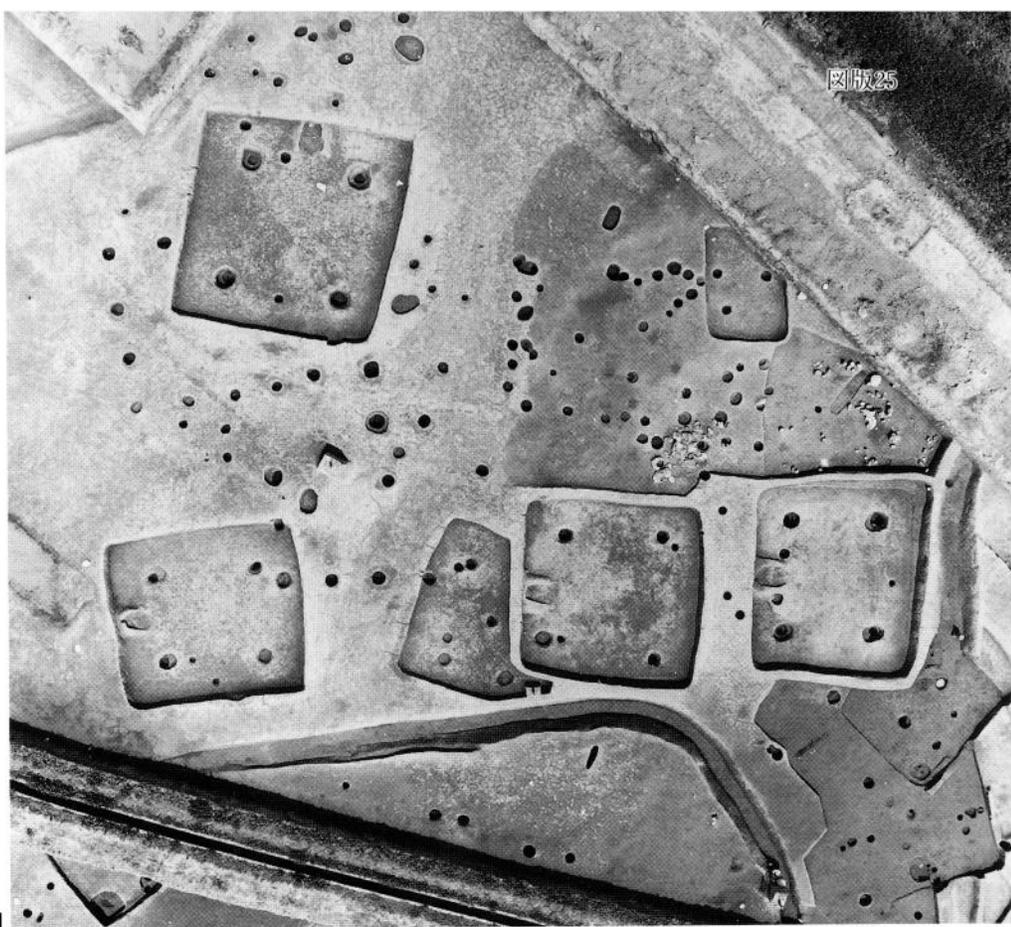


2

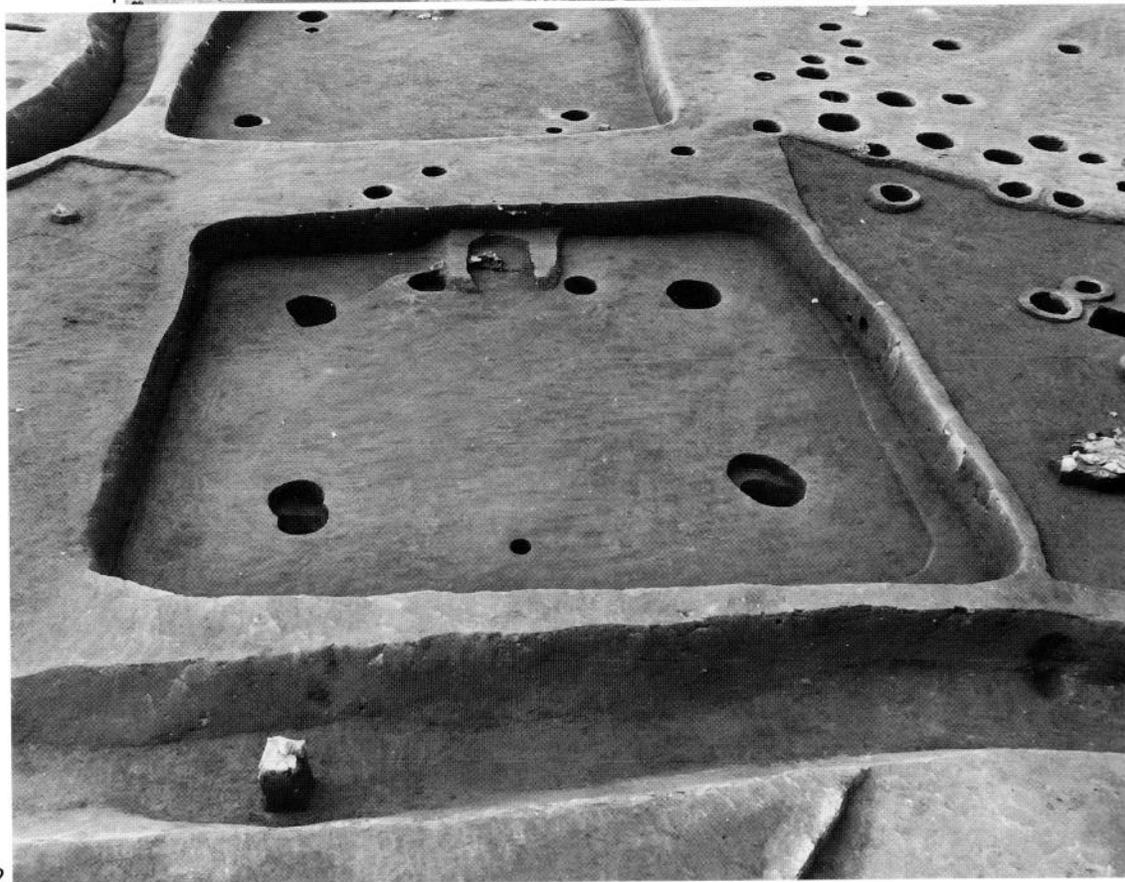


3

- 1 29号住居跡
(南から)
- 2 29号住居跡
遺物出土状況
- 3 31号住居跡
(南東から)

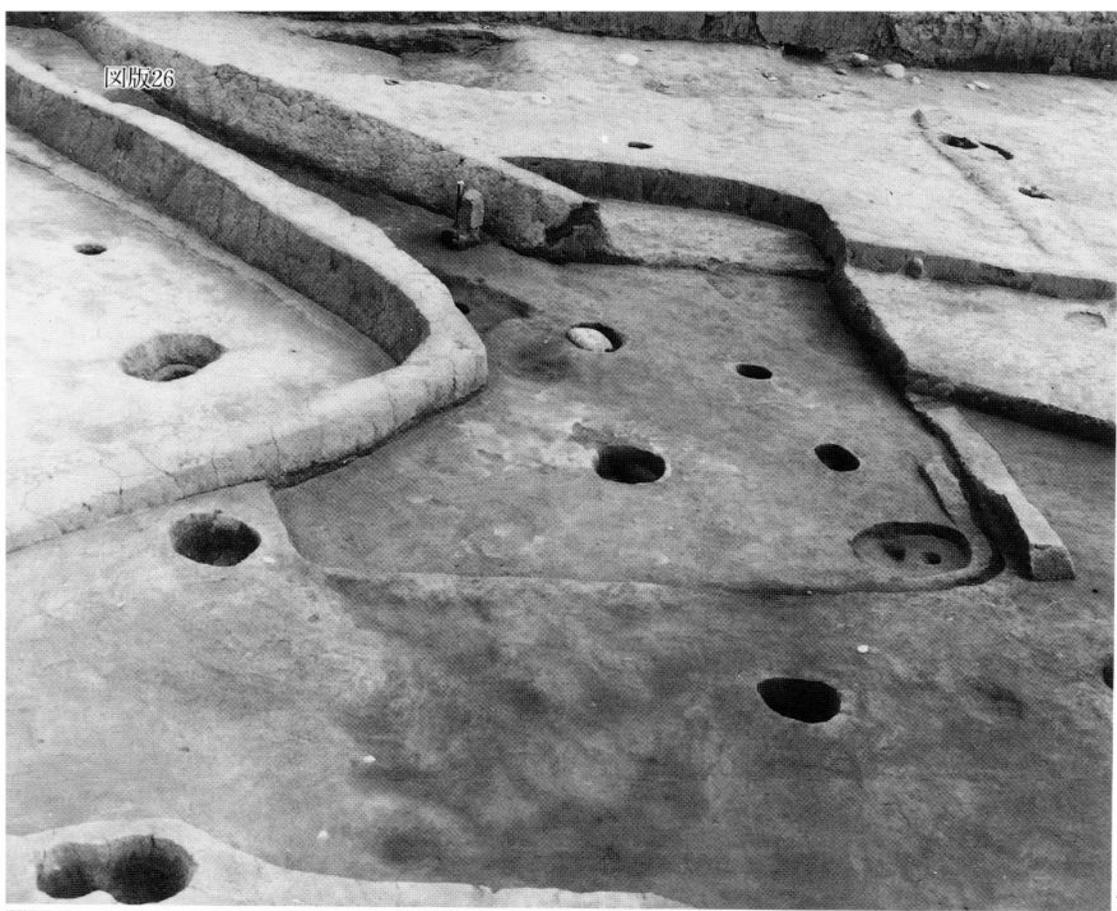


1

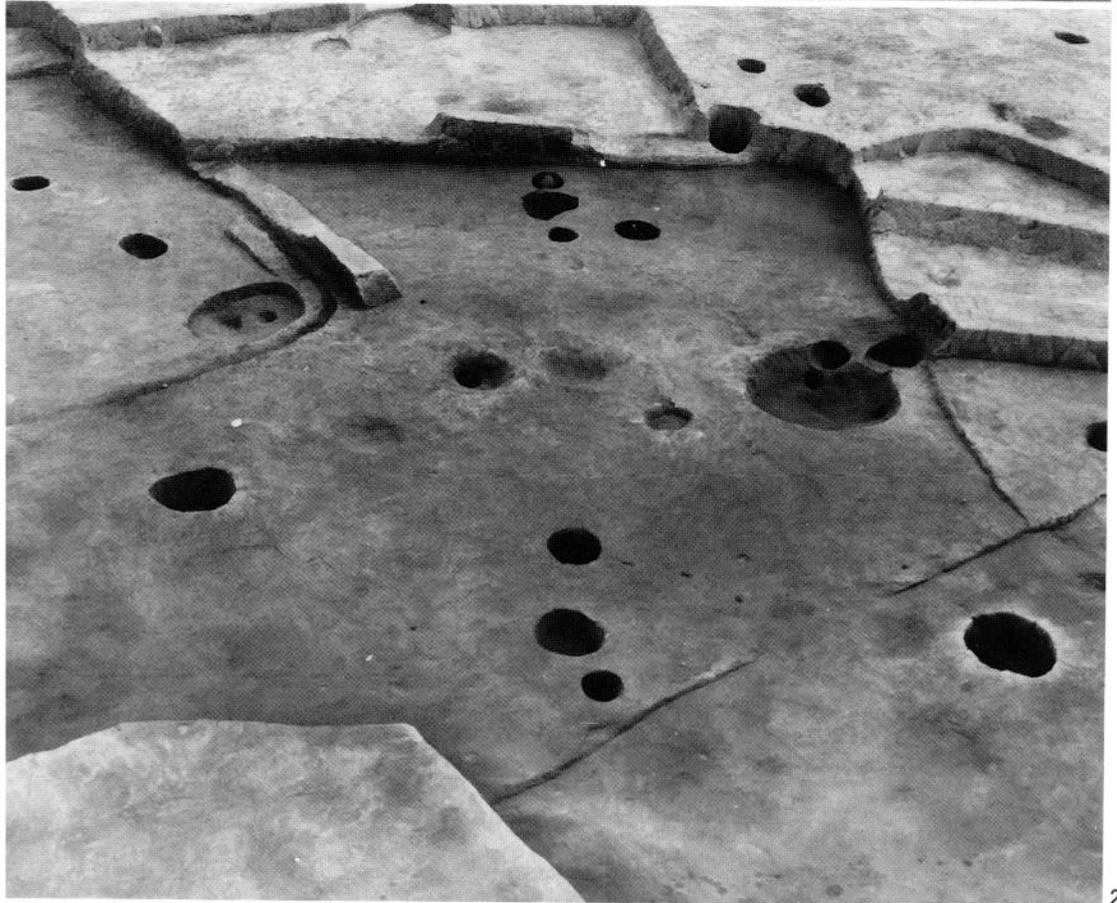


2

1 33~44号住居跡（上空から） 2 33号住居跡（北東から）



1



2

1 34号住居跡 (南から) 2 35号住居跡 (南西から)



1



2



3

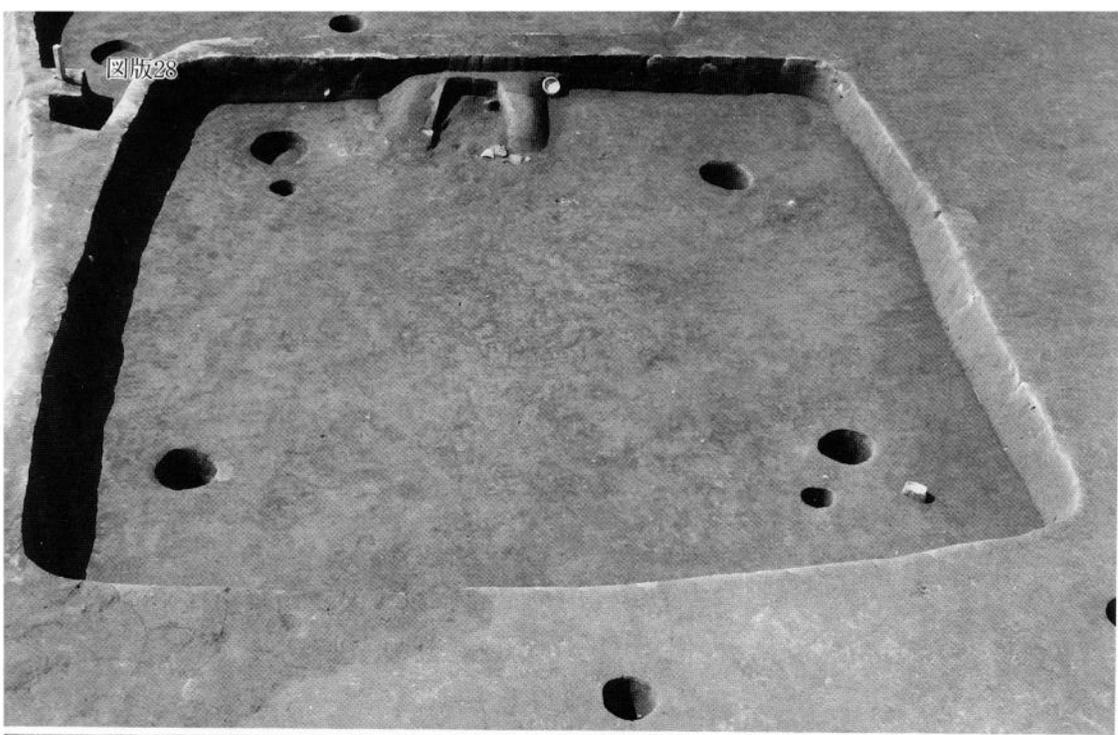


4



5

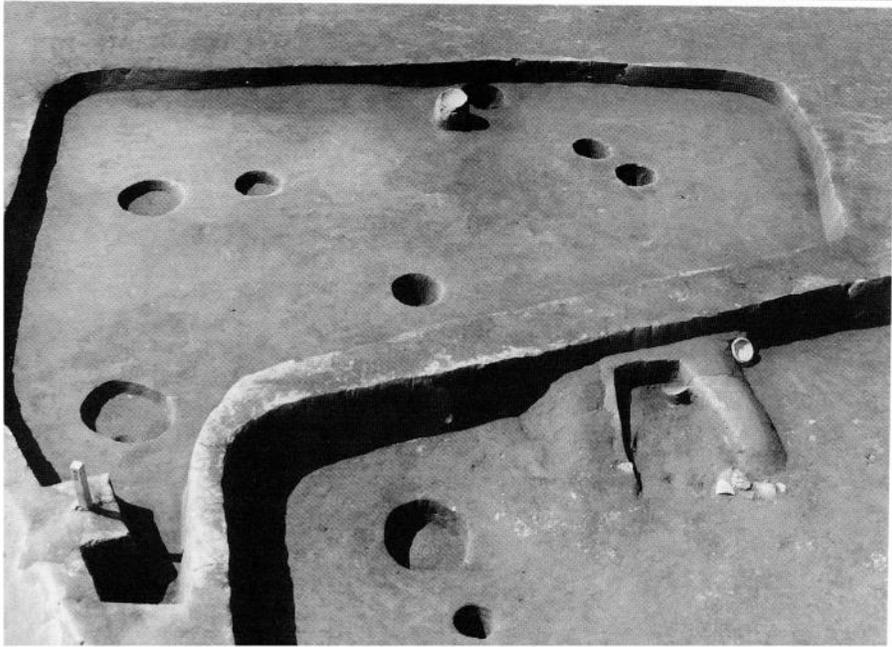
1 36号住居跡遺物出土状況
 2 } 4 34号住居跡遺物出土状況
 5 40号住居跡(南西から)



1



2



3

- 1 41号住居跡
(北東から)
- 2 41号住居跡カマド
(北東から)
- 3 42号住居跡
(北東から)



1



2

1 43号住居跡（北東から） 2 43号住居跡カマド（北東から）



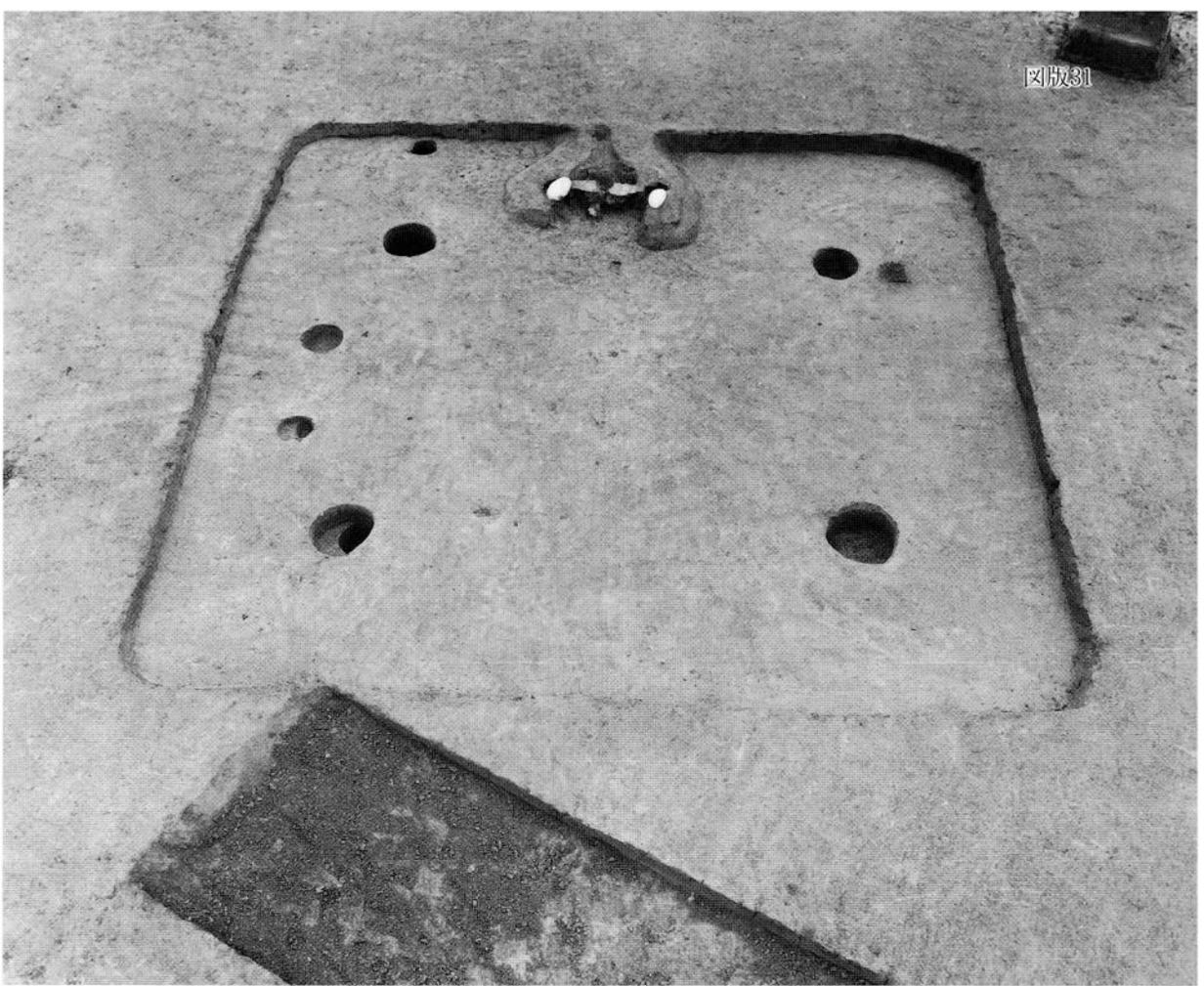
1



2

1 44号住居跡（南南東から） 2 44号住居跡カマド（南南東から）

1



2



1 45号住居跡（南南東から） 2 45号住居跡カマド（南南東から）

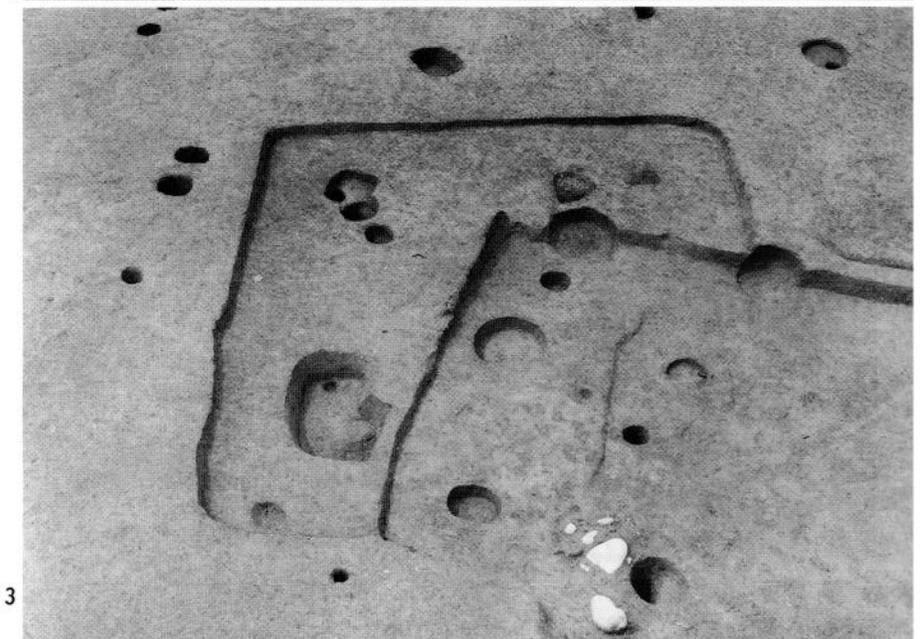
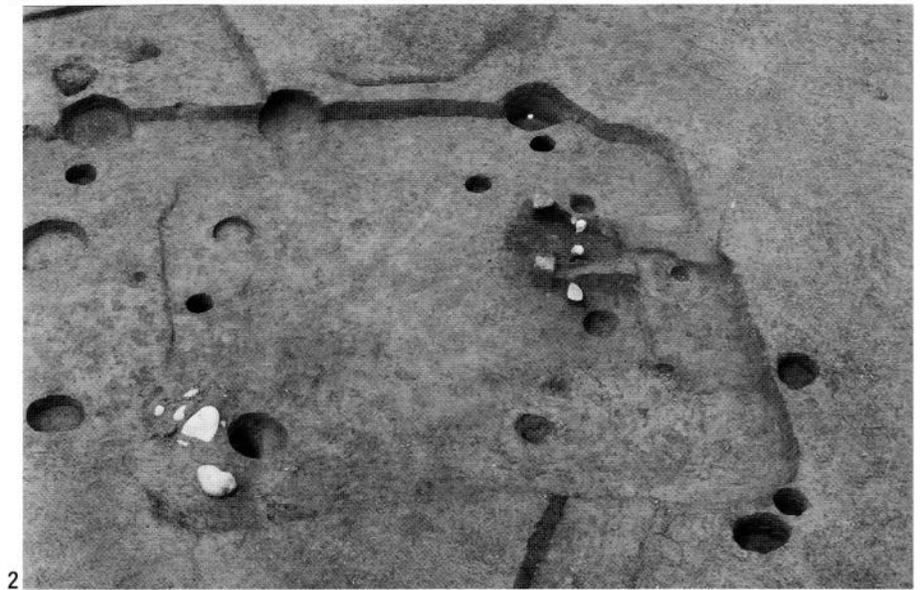


1



2

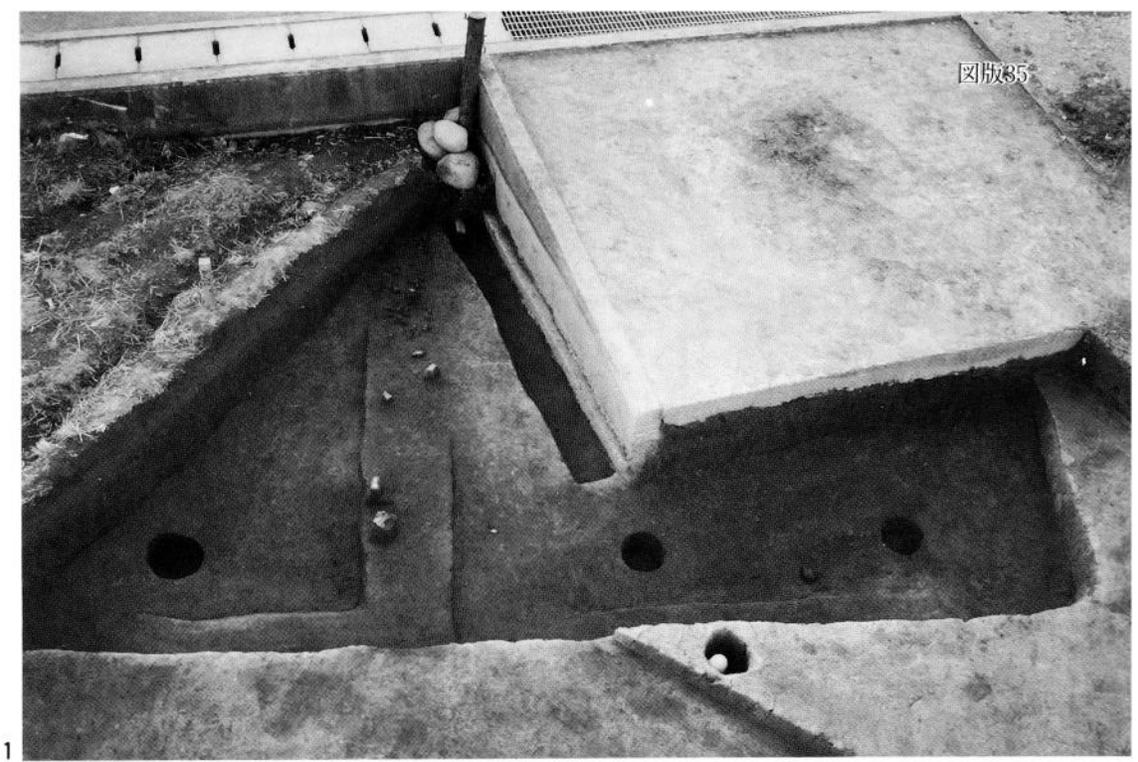
1 46~48号住居跡（東から） 2 46号住居跡（東から）



- 1 46号住居跡カマド
(南から)
- 2 47号住居跡 (東から)
- 3 48号住居跡 (東から)



- 1 51号住居跡
(東北東から)
- 2 51号住居跡
(北から)
- 3 51号住居跡カマド
(南から)

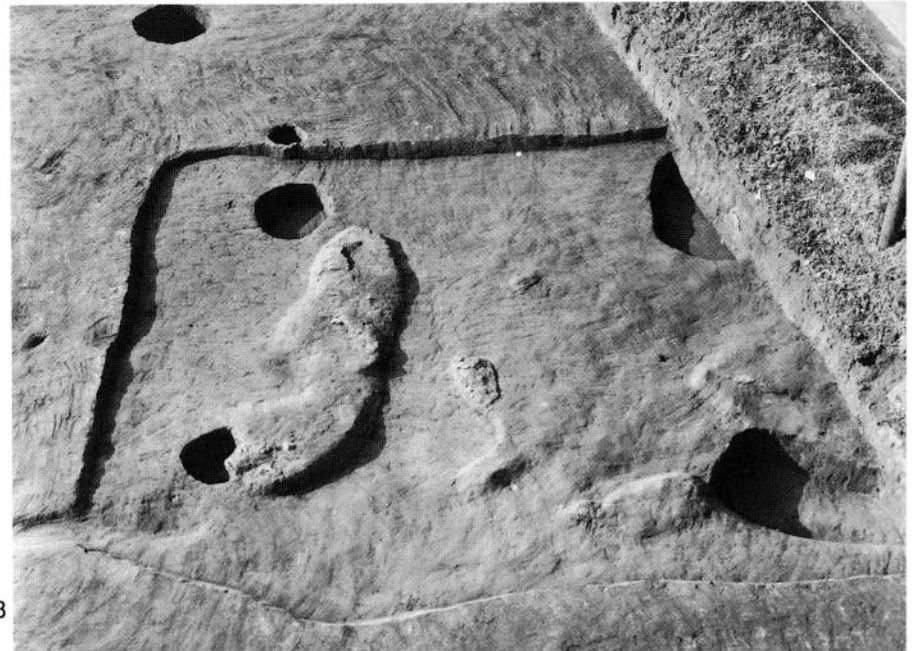


1

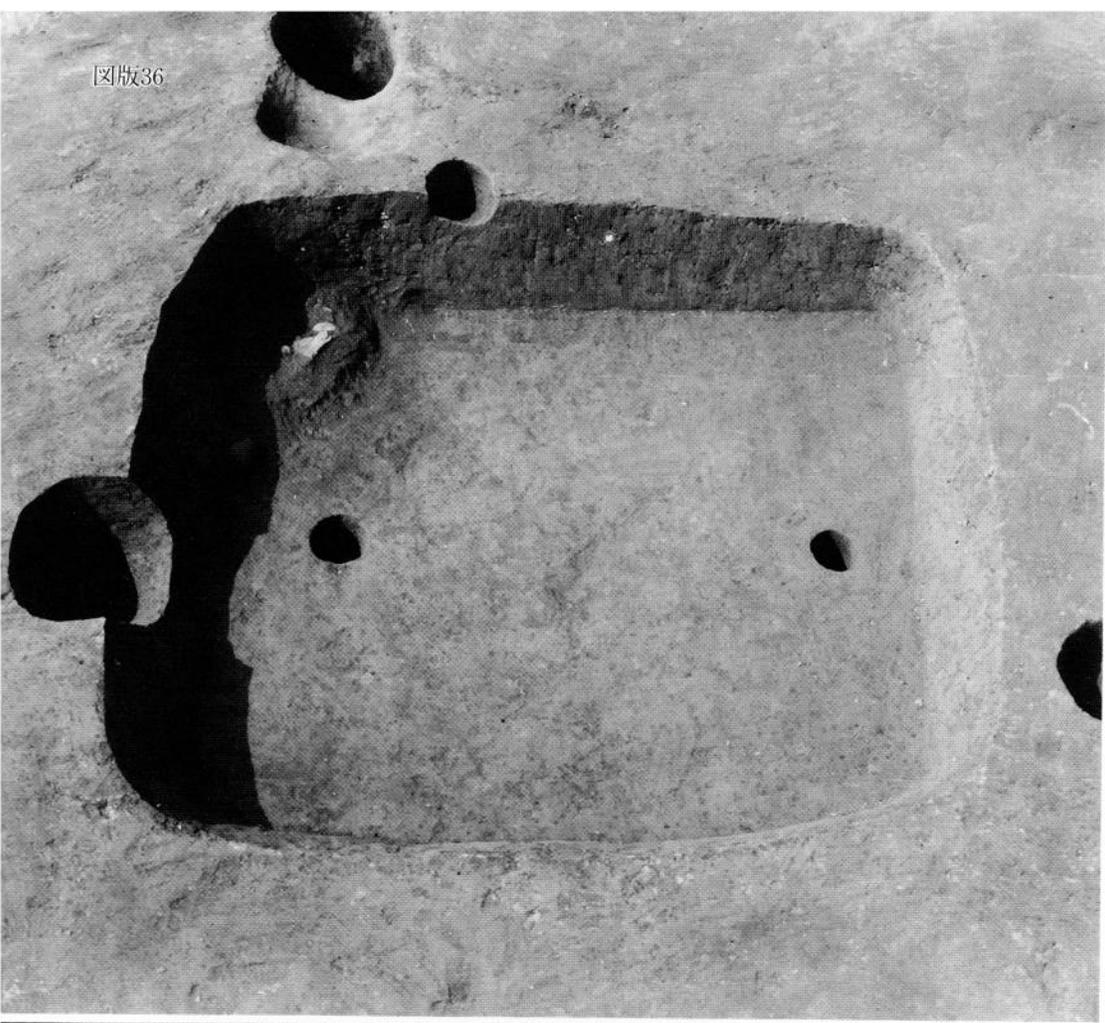


2

- 1 52号住居跡
(北東から)
- 2 53号住居跡
(南から)
- 3 54号住居跡
(南から)



3

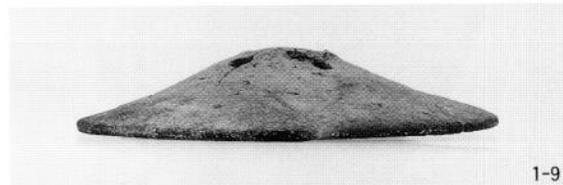
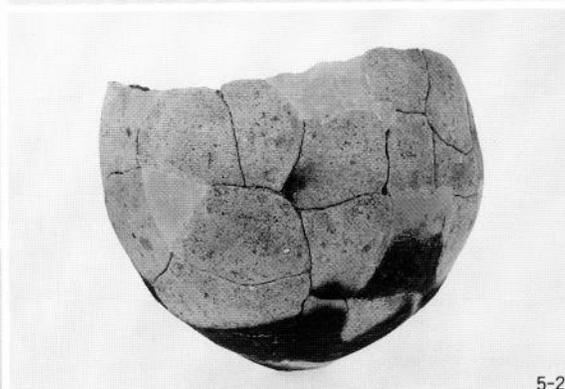
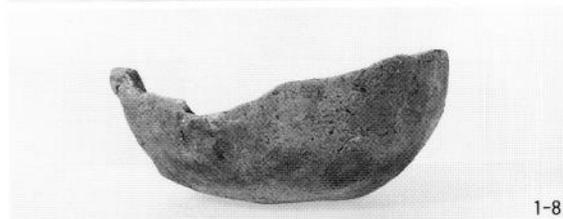


1



2

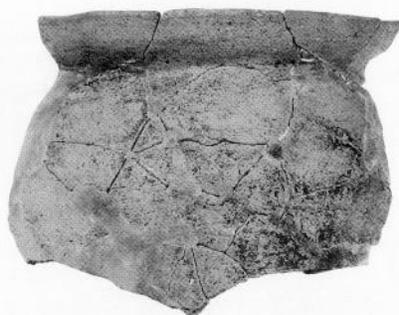
1 55号住居跡（南から） 2 55号住居跡カマド部遺物出土状況



住居跡出土土器 1



5-5



6-7



5-6



7-1



5-11



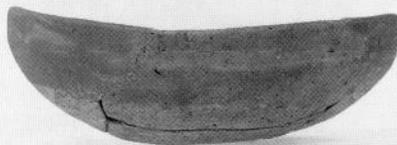
6-1



7-7



6-4



7-12



7-13



8-11



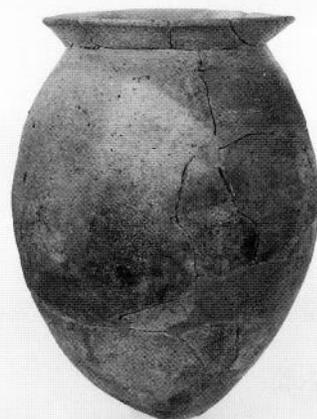
8-1



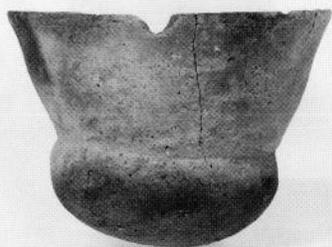
8-12



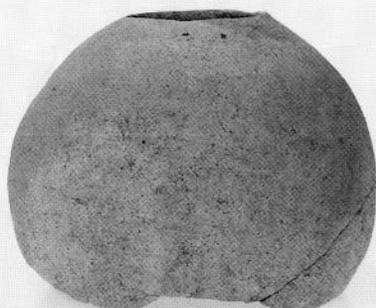
8-2



10-6



8-3



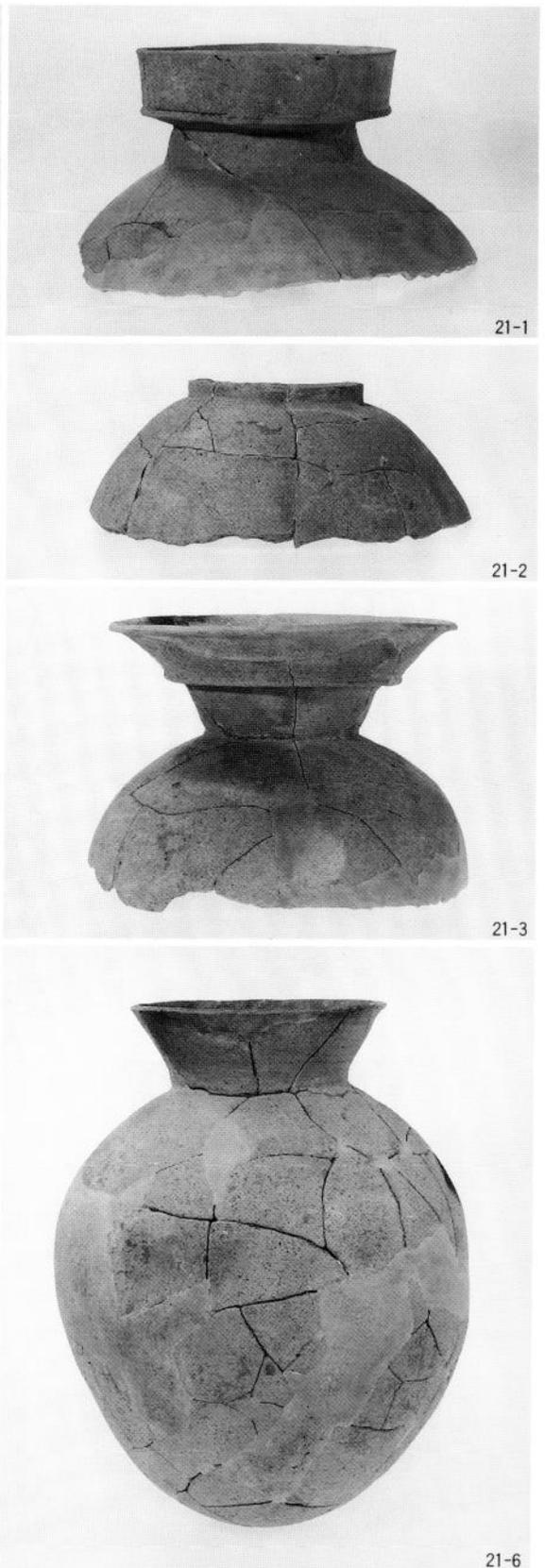
10-7



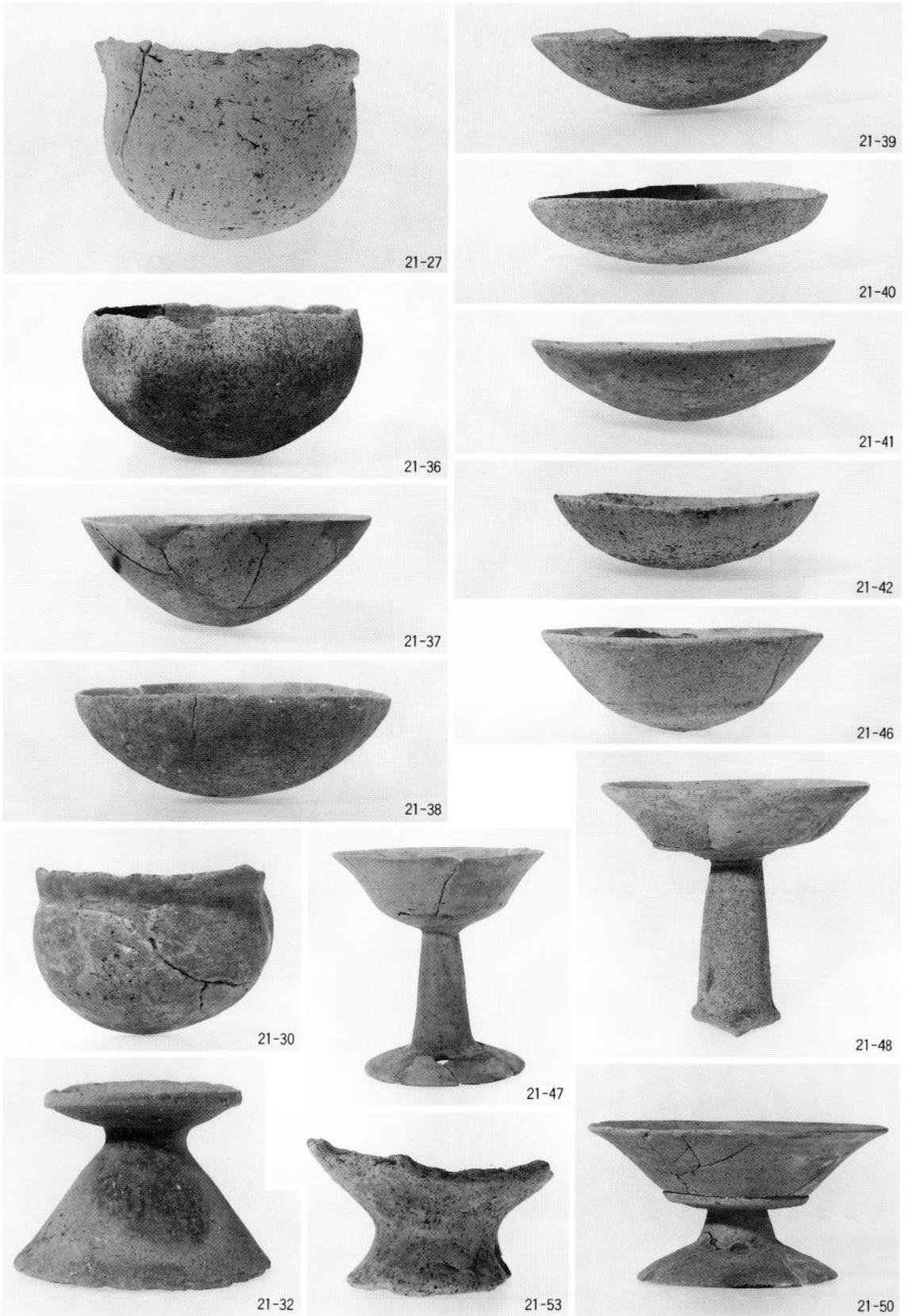
8-8



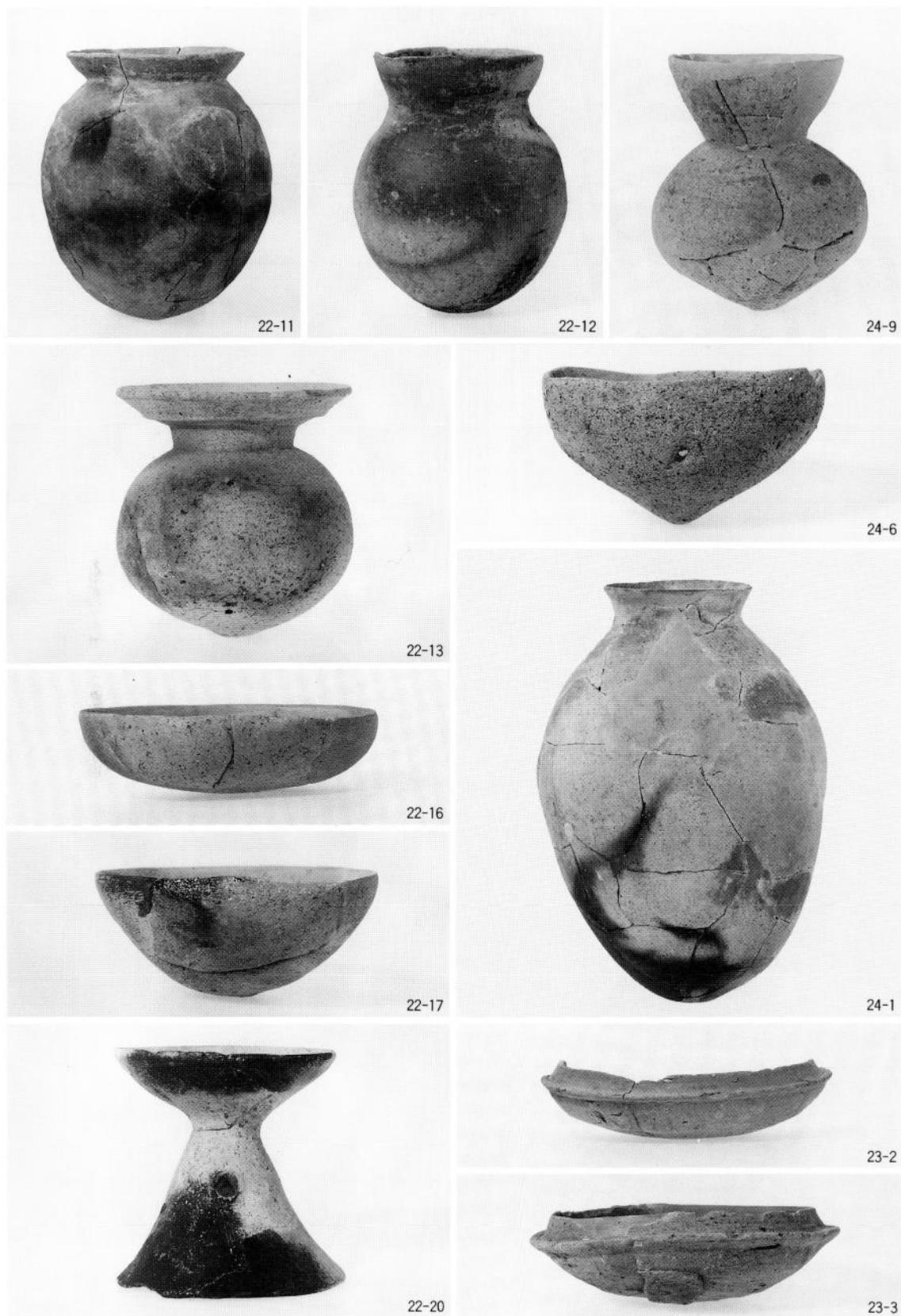
10-11



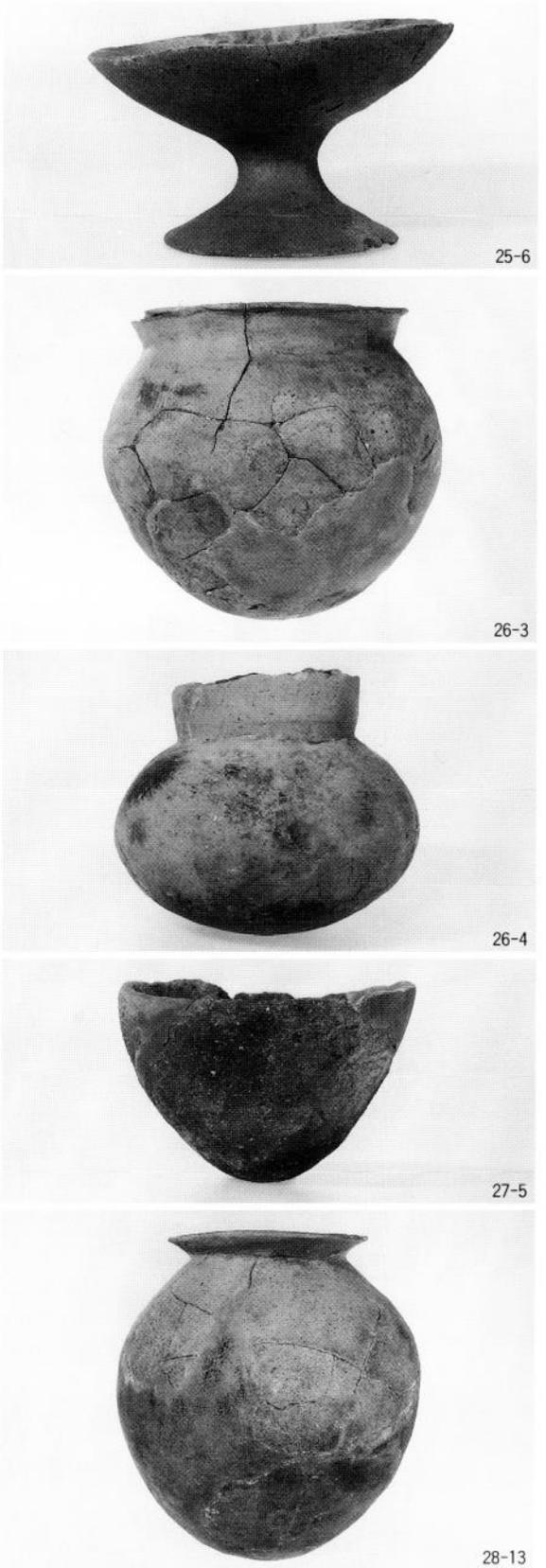
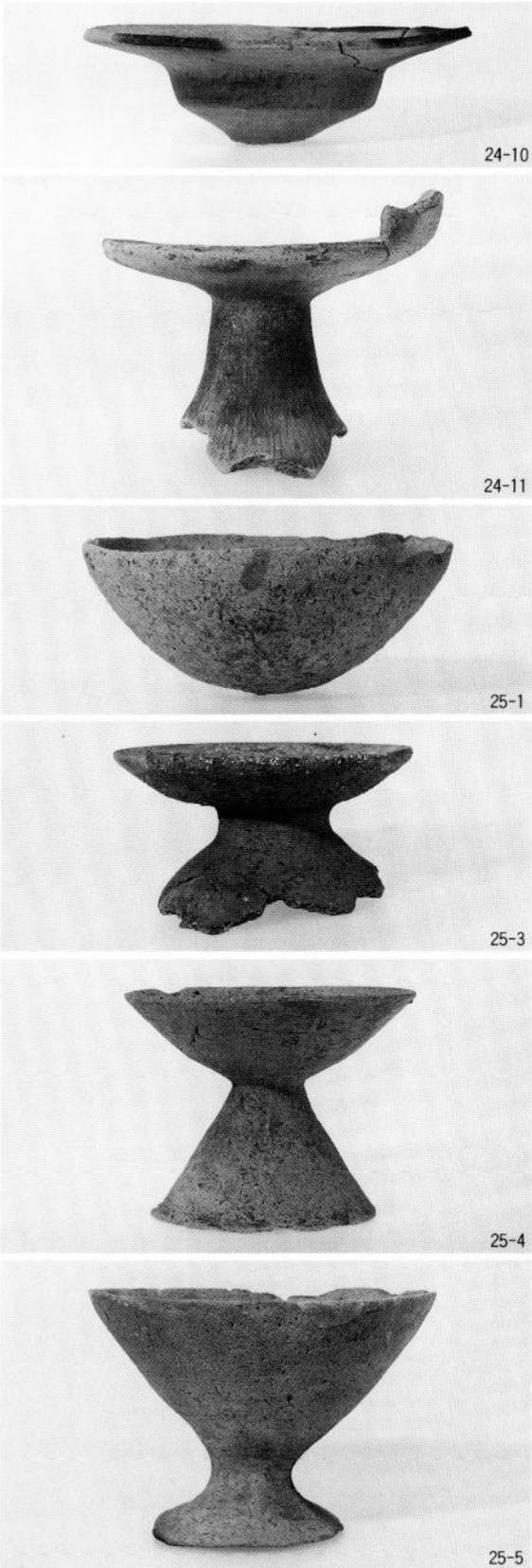


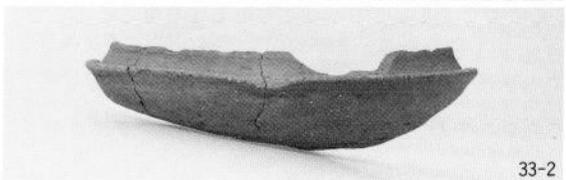
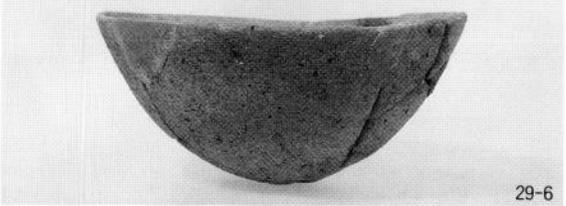
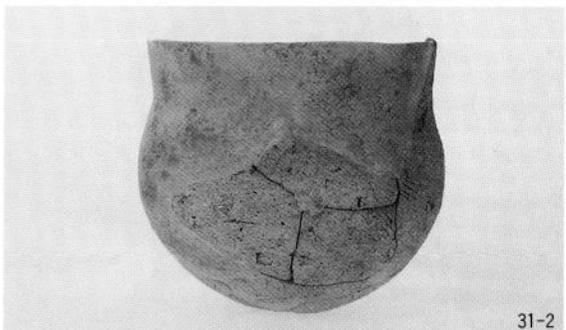
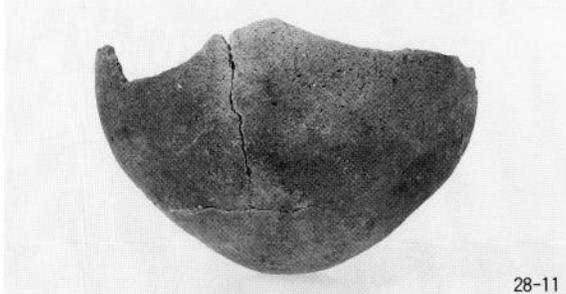
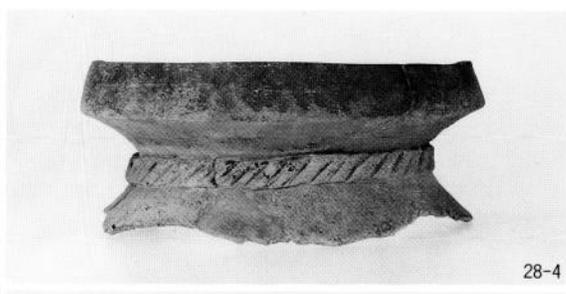


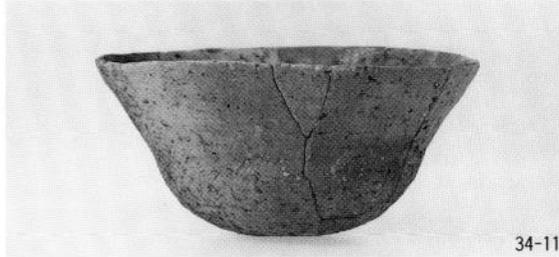
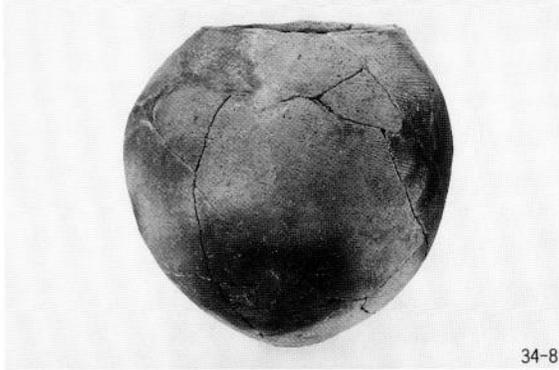
住居跡出土土器 6



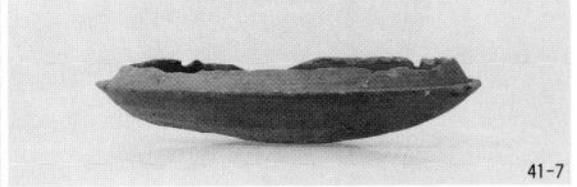
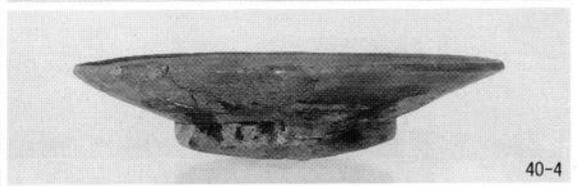
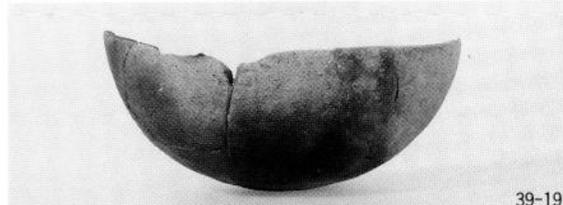
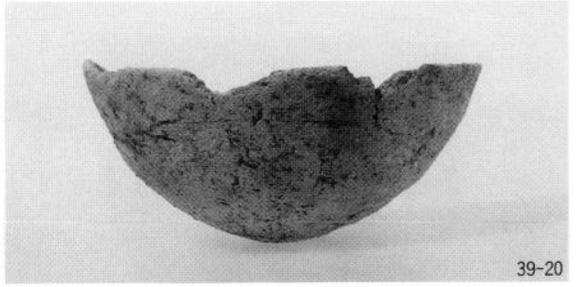
住居跡出土土器 7



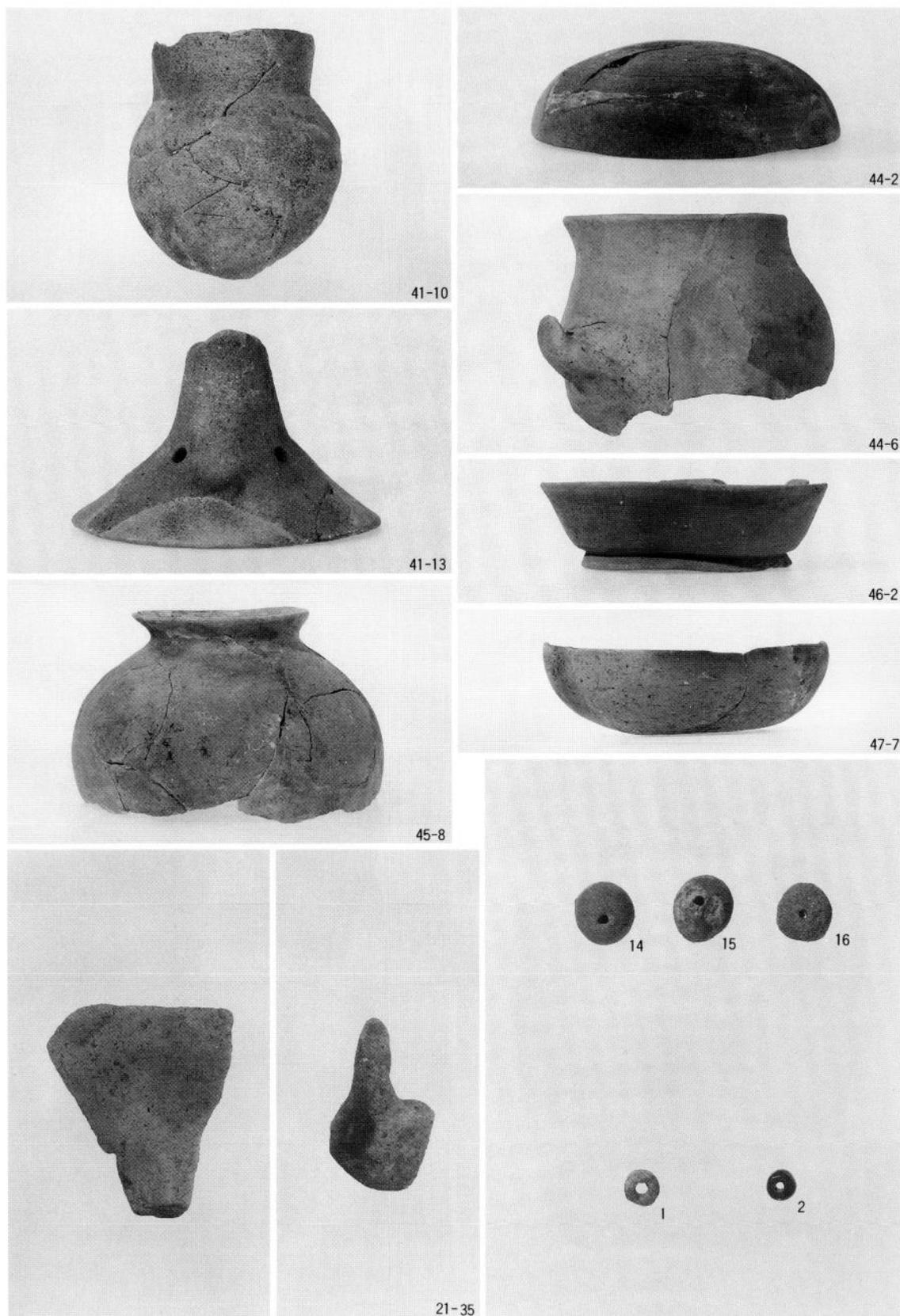




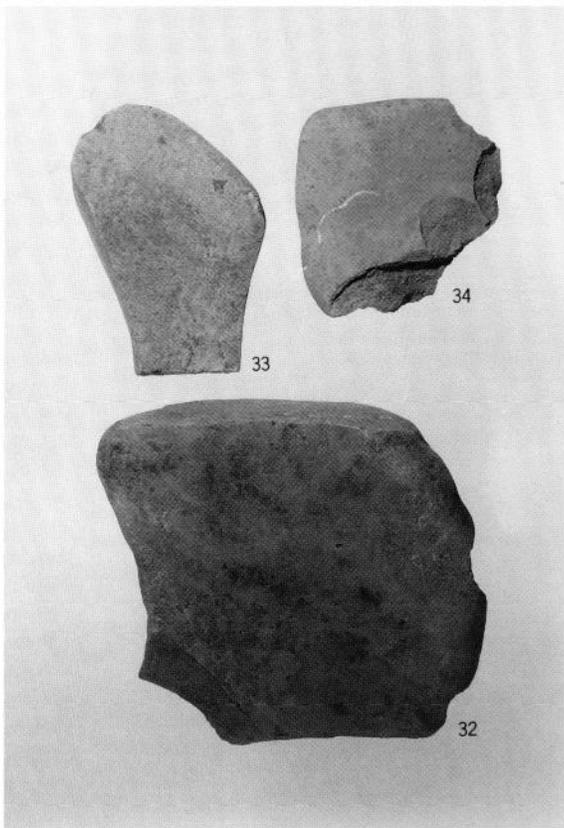
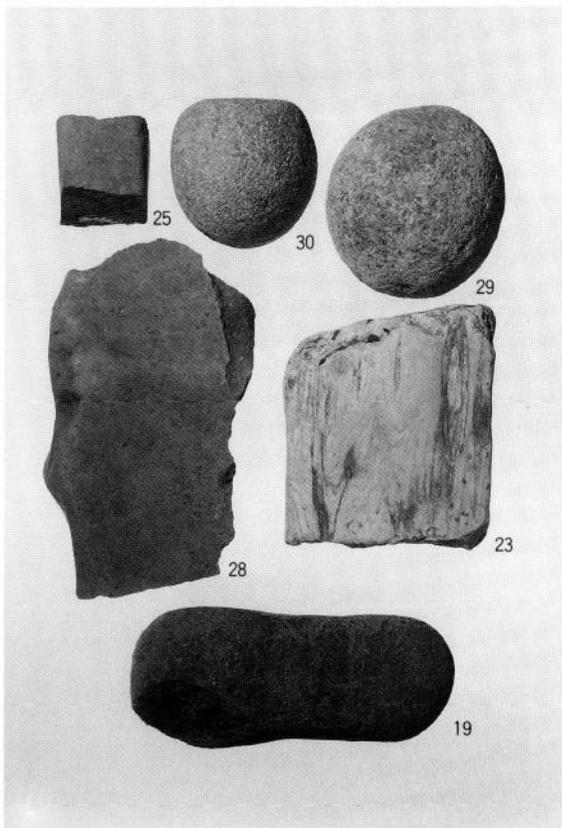
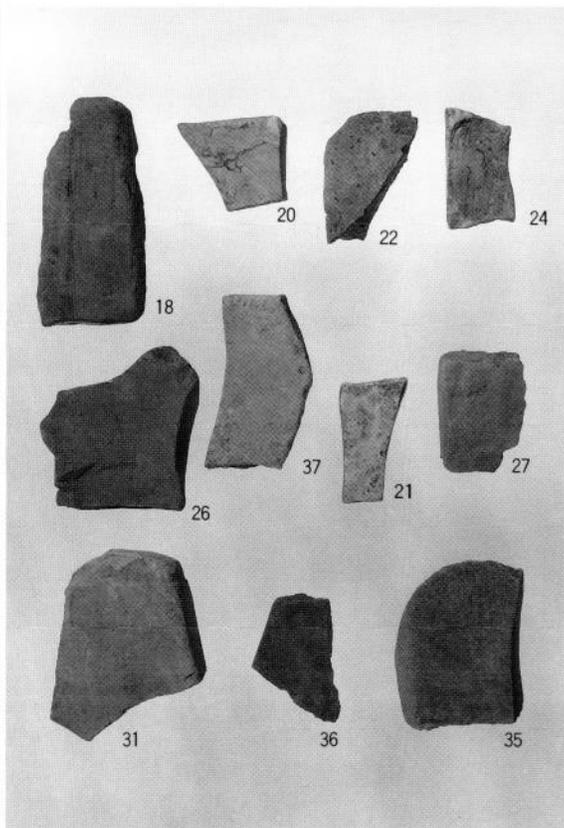
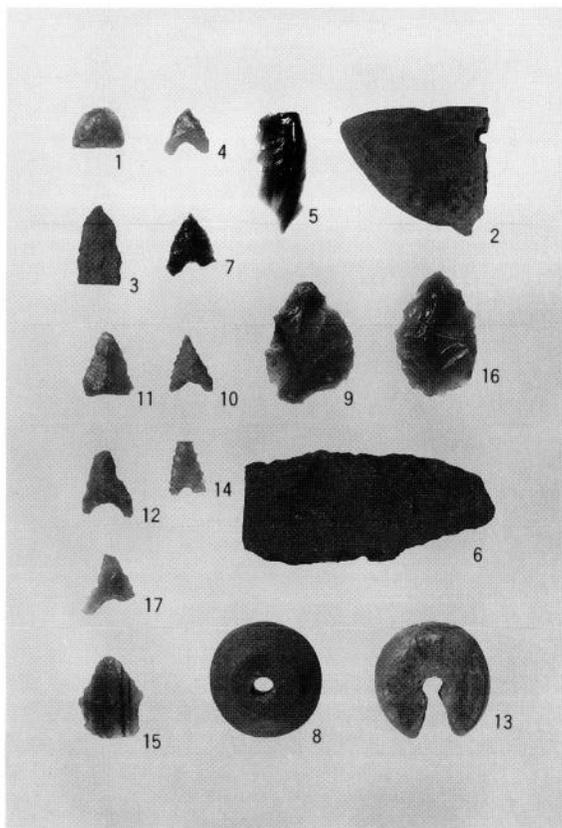


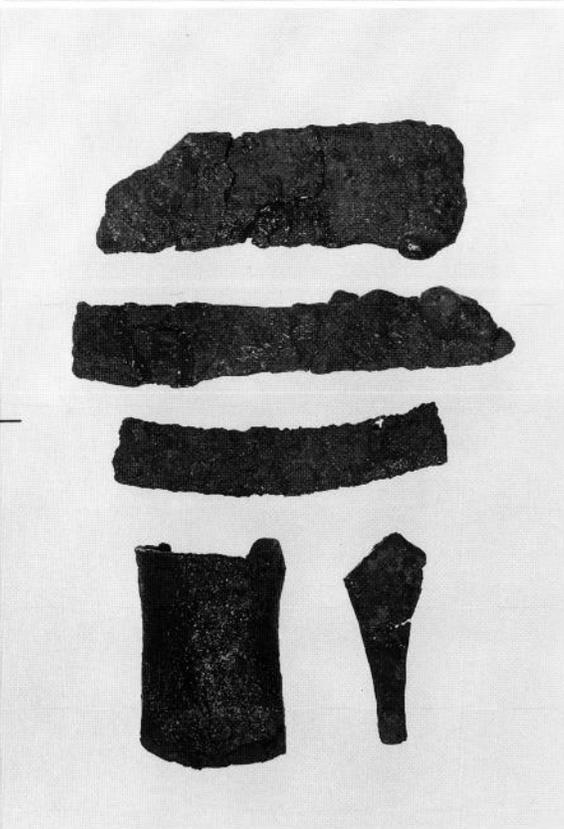
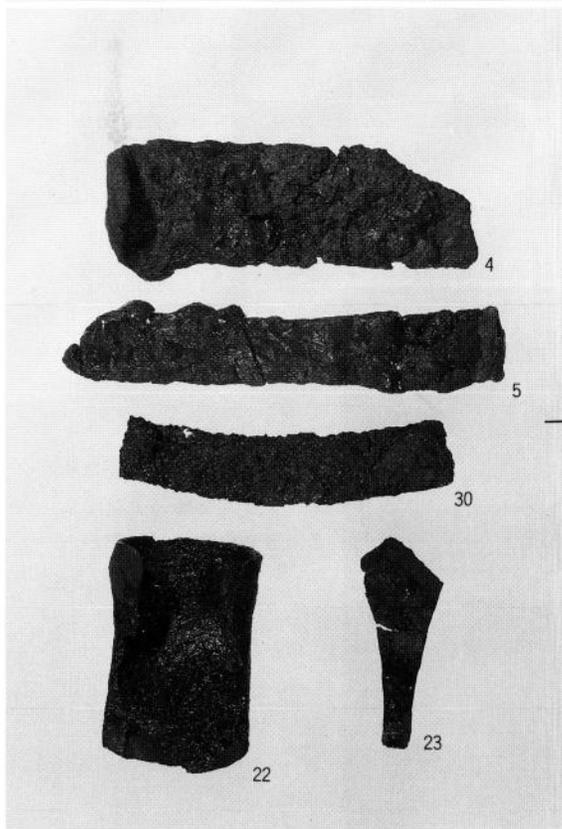
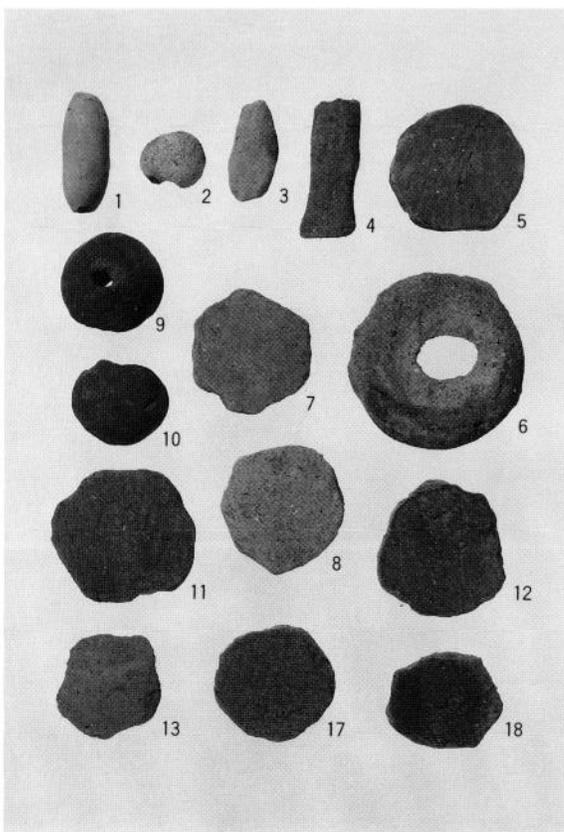
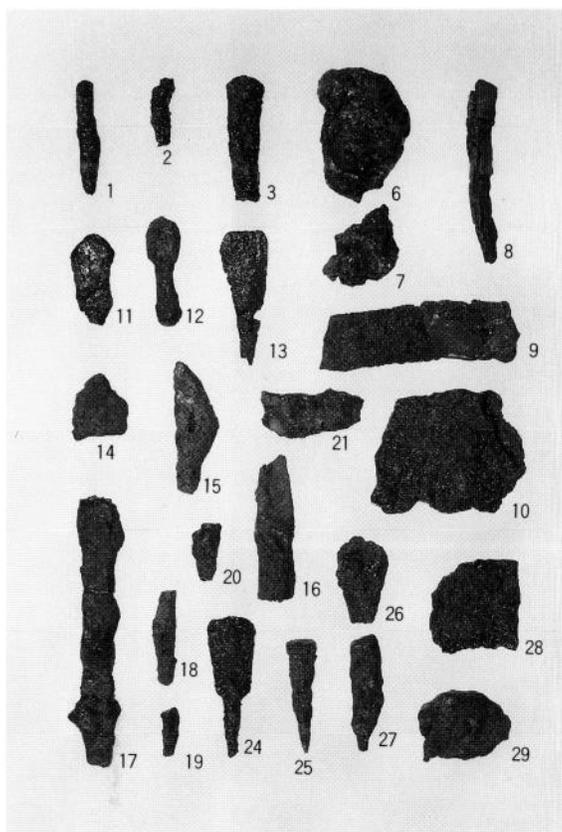


住居跡出土土器12

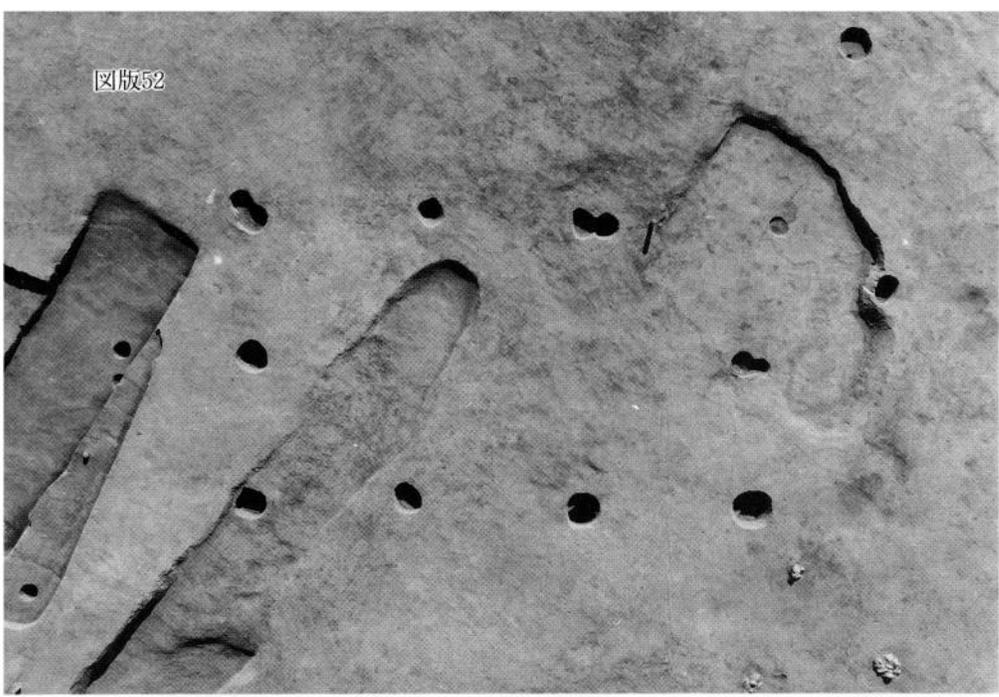


住居跡出土土器13・土製品・玉類

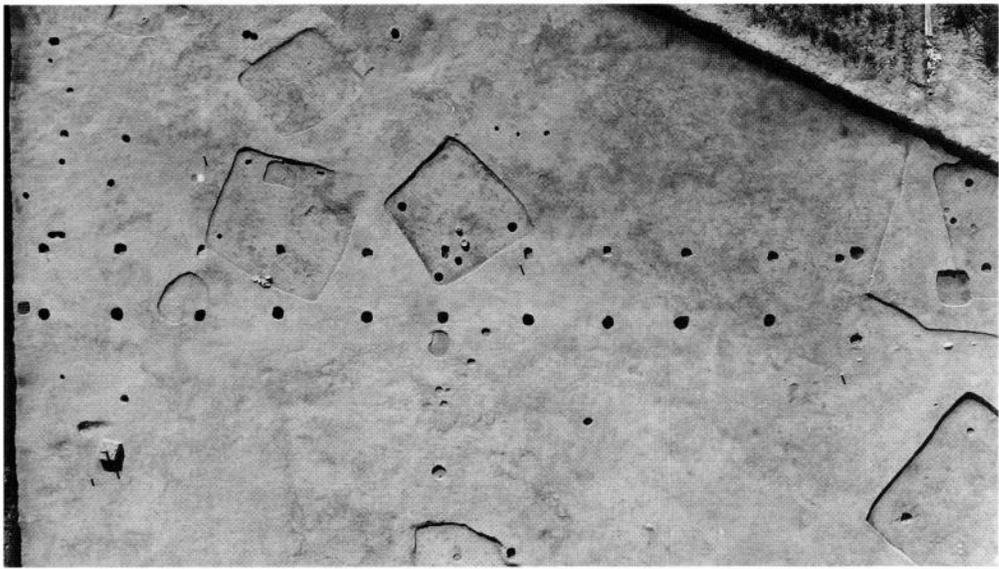




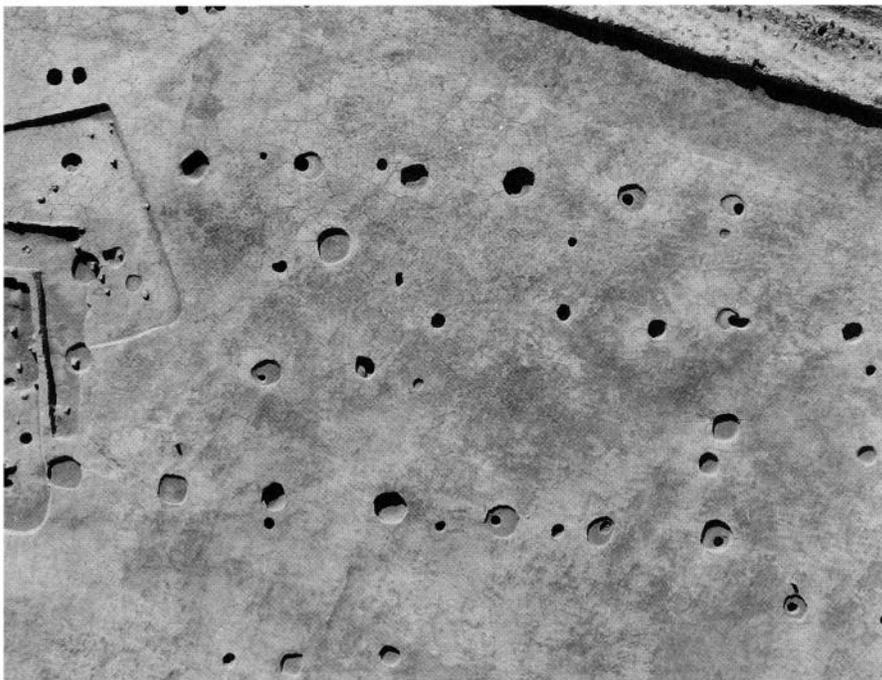
住居跡出土鉄製品・土製品



1



2



3

- 1 1号建物跡 (上空から)
- 2 9号建物跡 (上空から)
- 3 8号建物跡 (上空から)



1

- 1 11号土壙 (東から)
- 2 13号土壙 (北から)



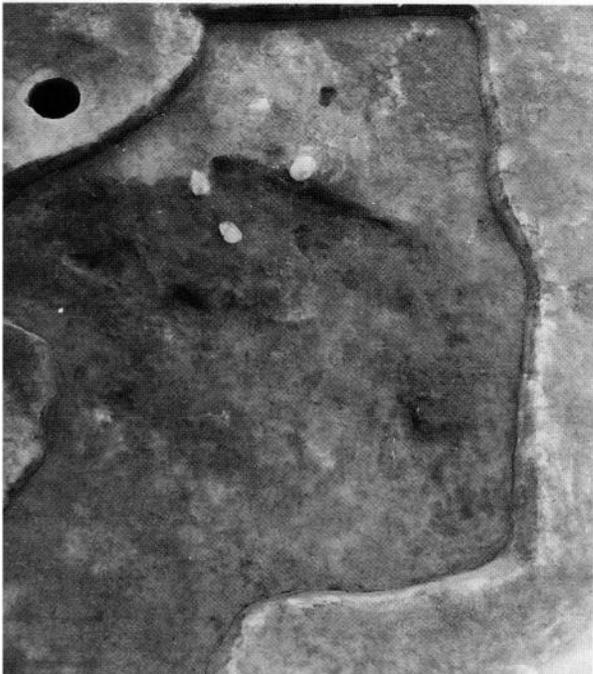
2



1



2



3

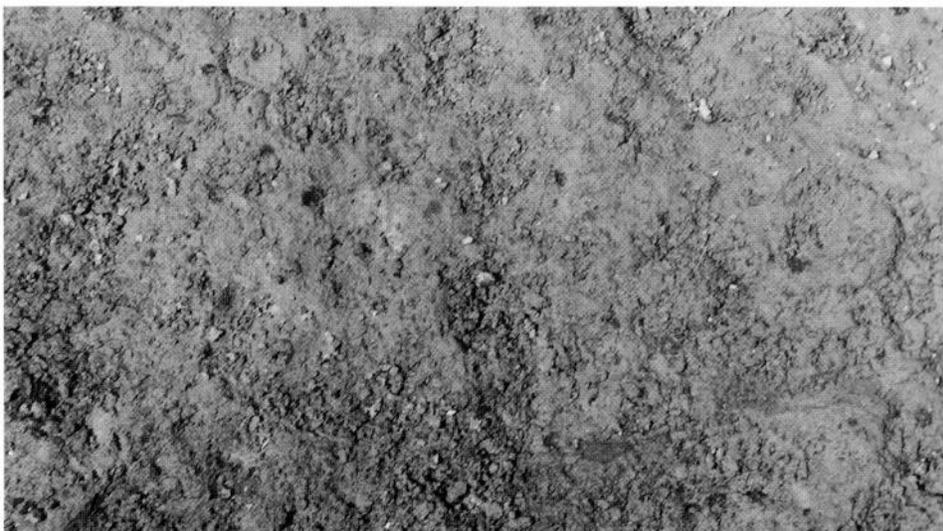
- 1 18号土壙（北西から）
- 2 18号土壙遺物出土状況
- 3 10号土壙（北東から）



1

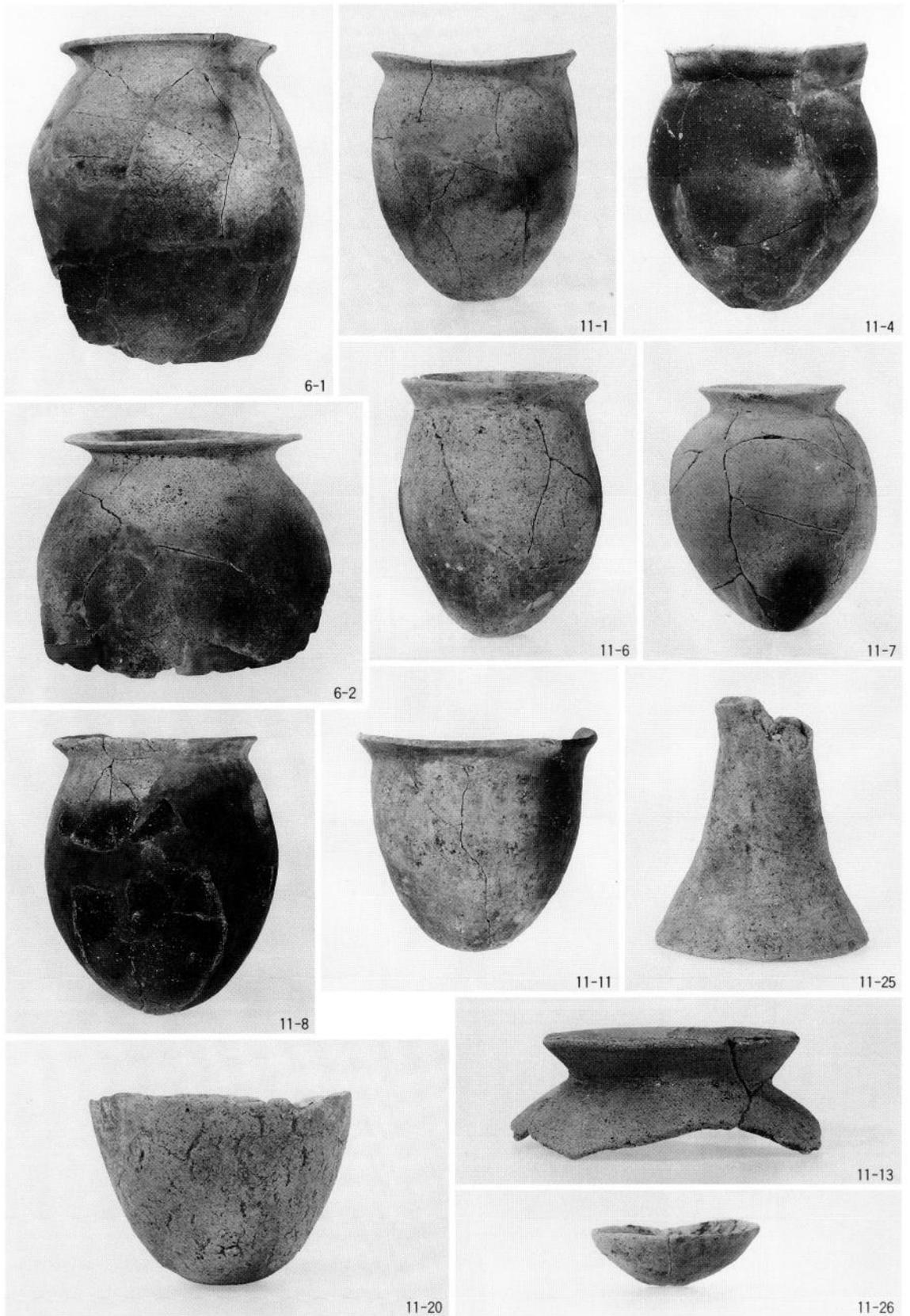


2

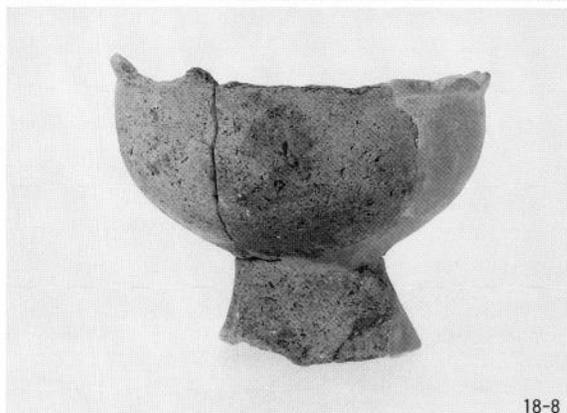
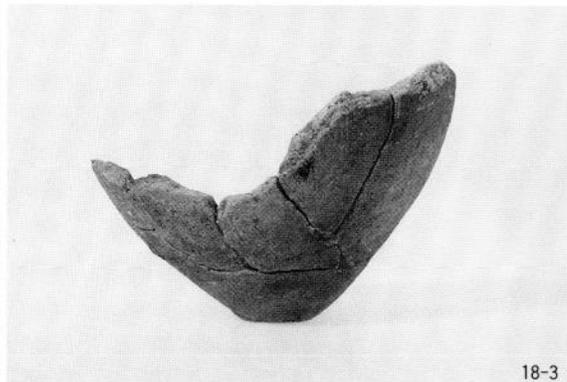
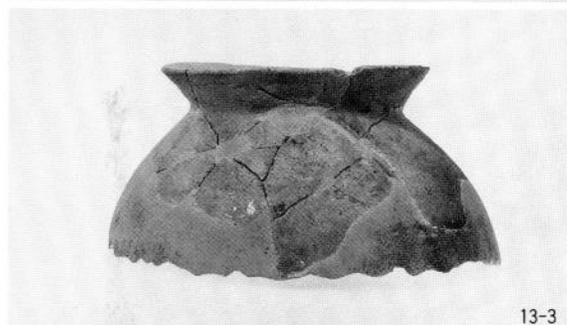
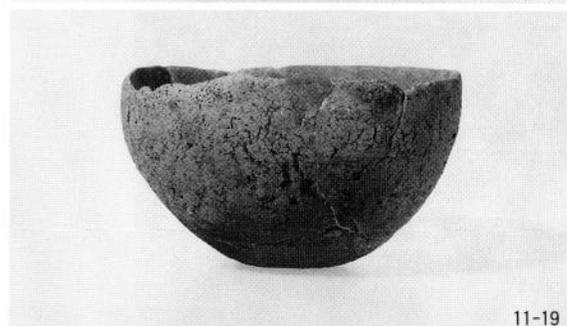
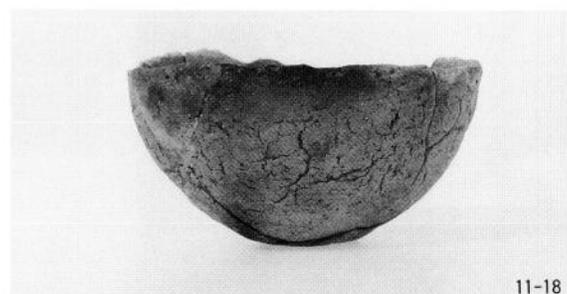


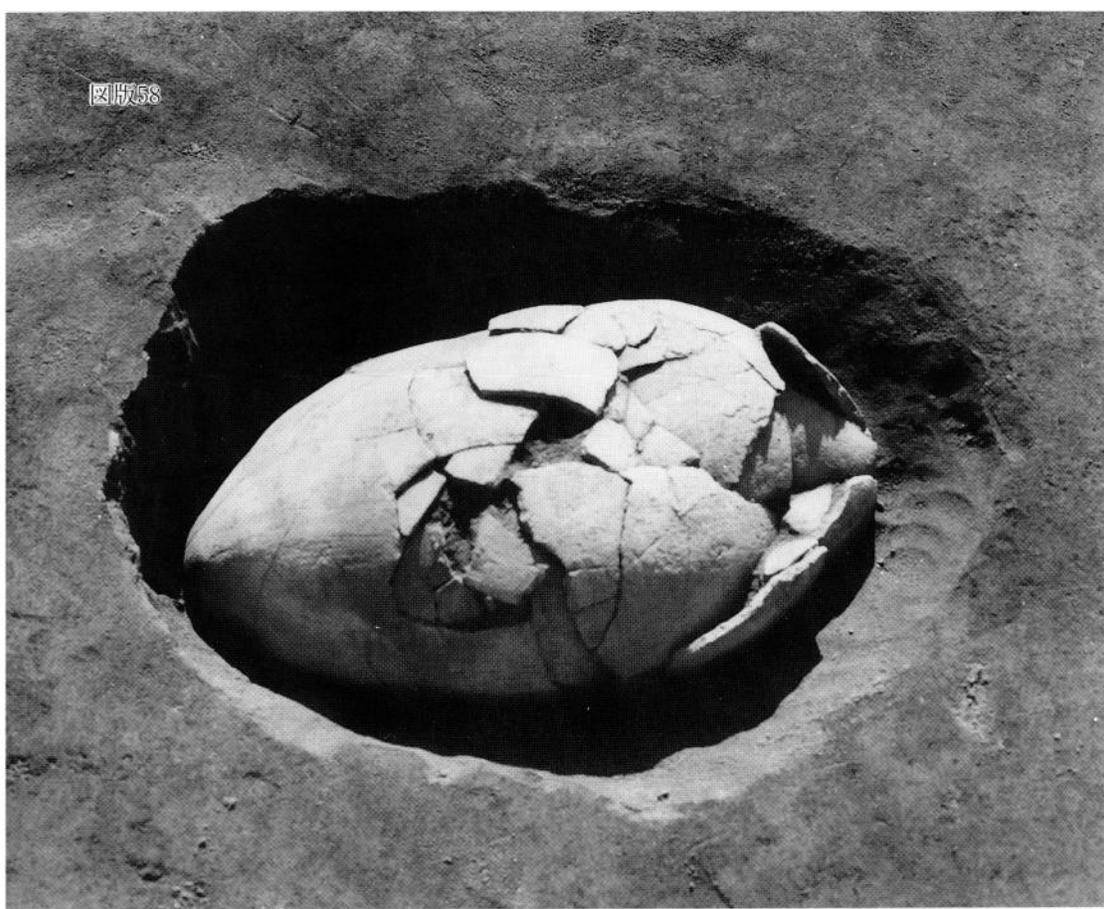
3

- 1 19号土壙 (西から)
- 2 完掘後の19号土壙 (北東から)
- 3 19号土壙
堅果類種子出土状況

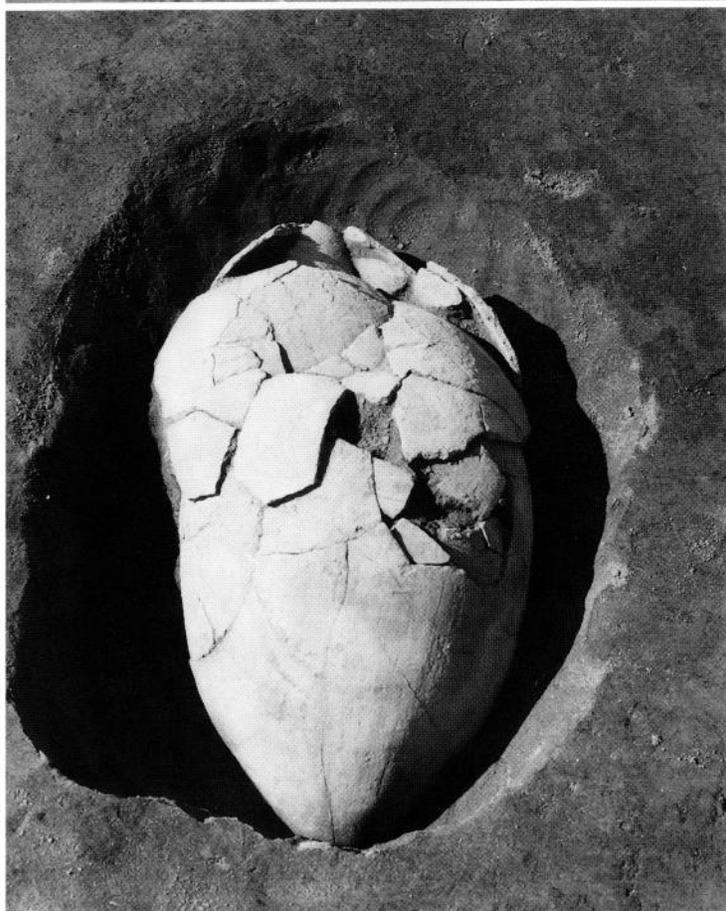


土城出土土器 1

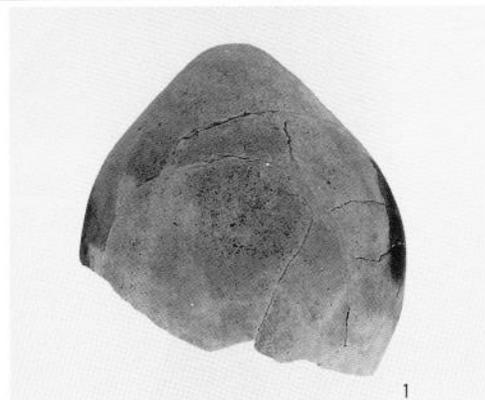




1



2



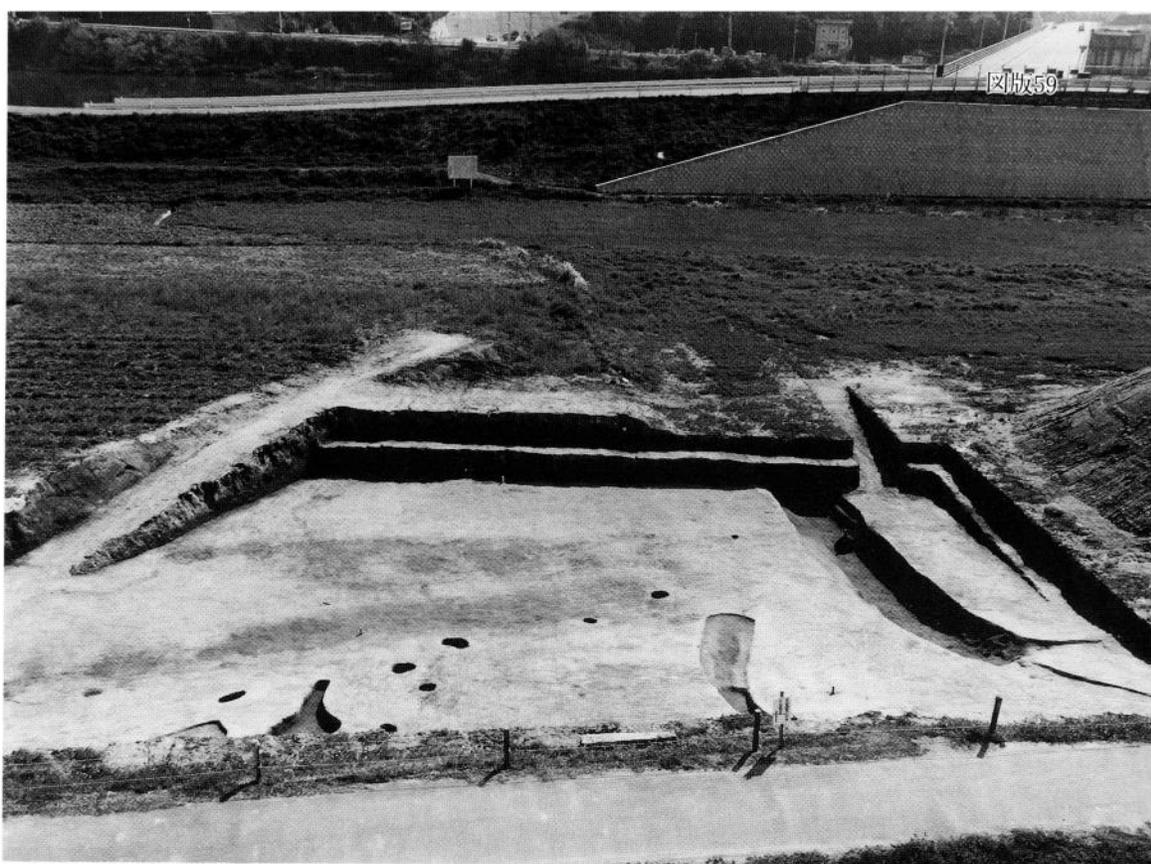
1



2

3

1 甕棺墓（北から） 2 甕棺墓（東から） 3 甕棺使用土器

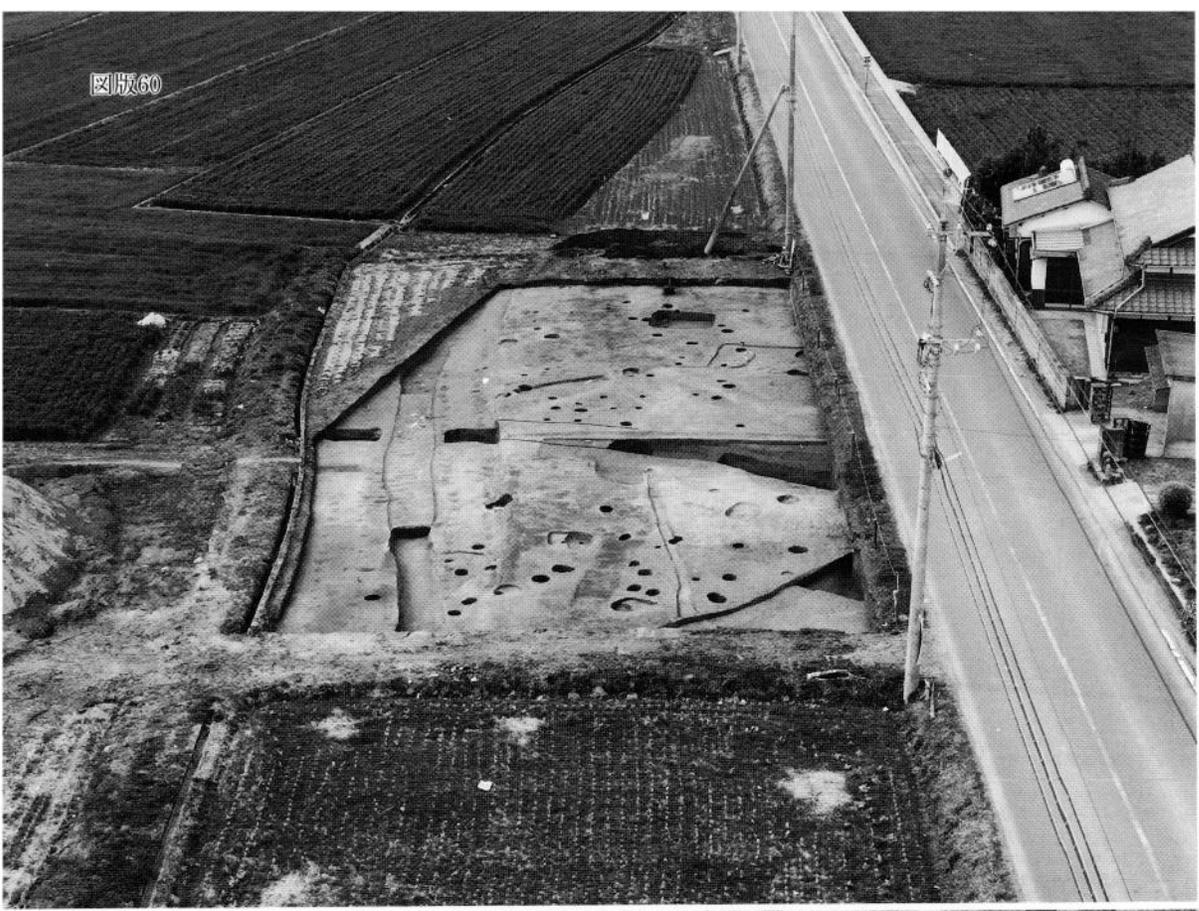


1



2

1 0区全景（西から） 2 0区全景と1号溝（南から）



1

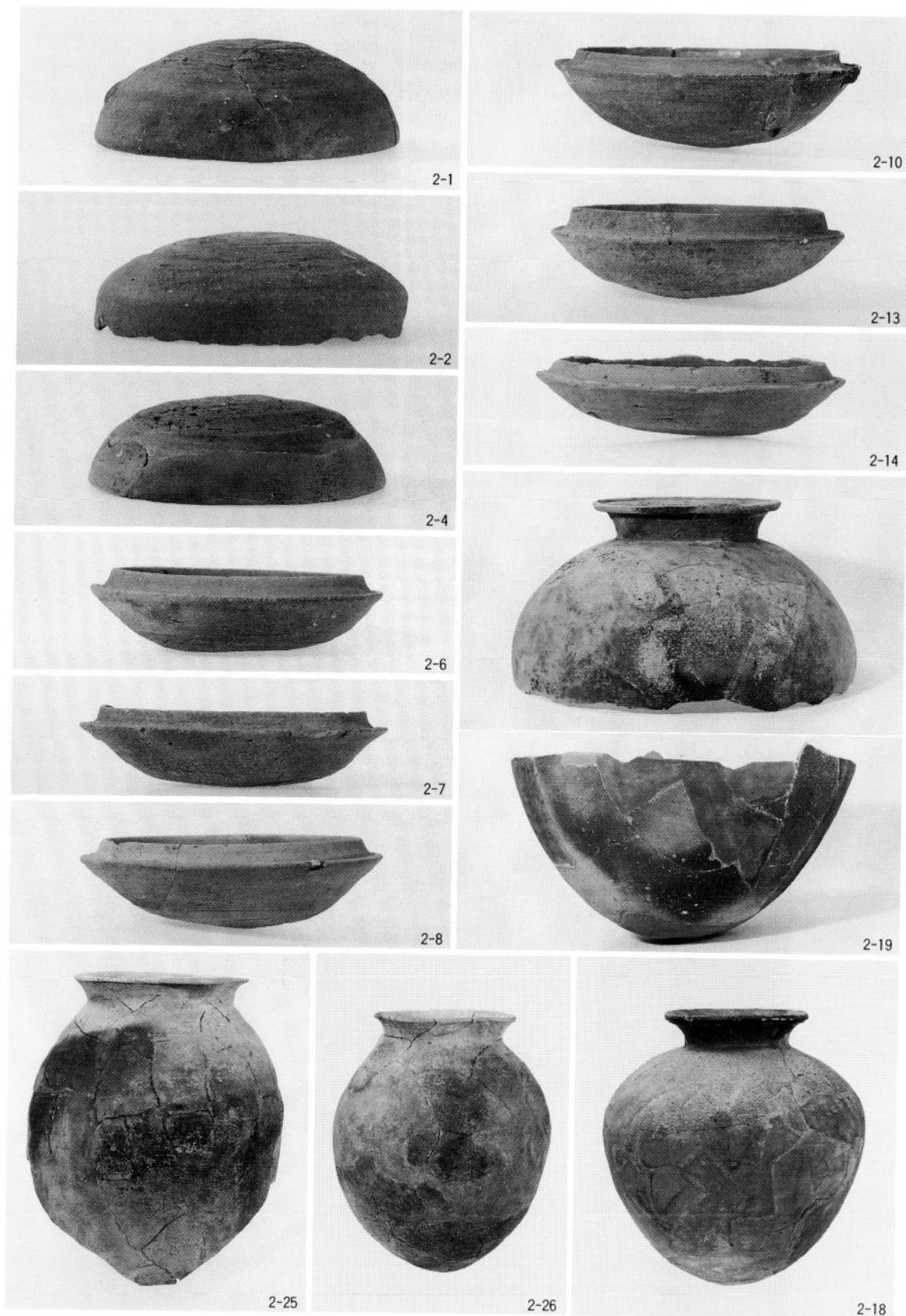


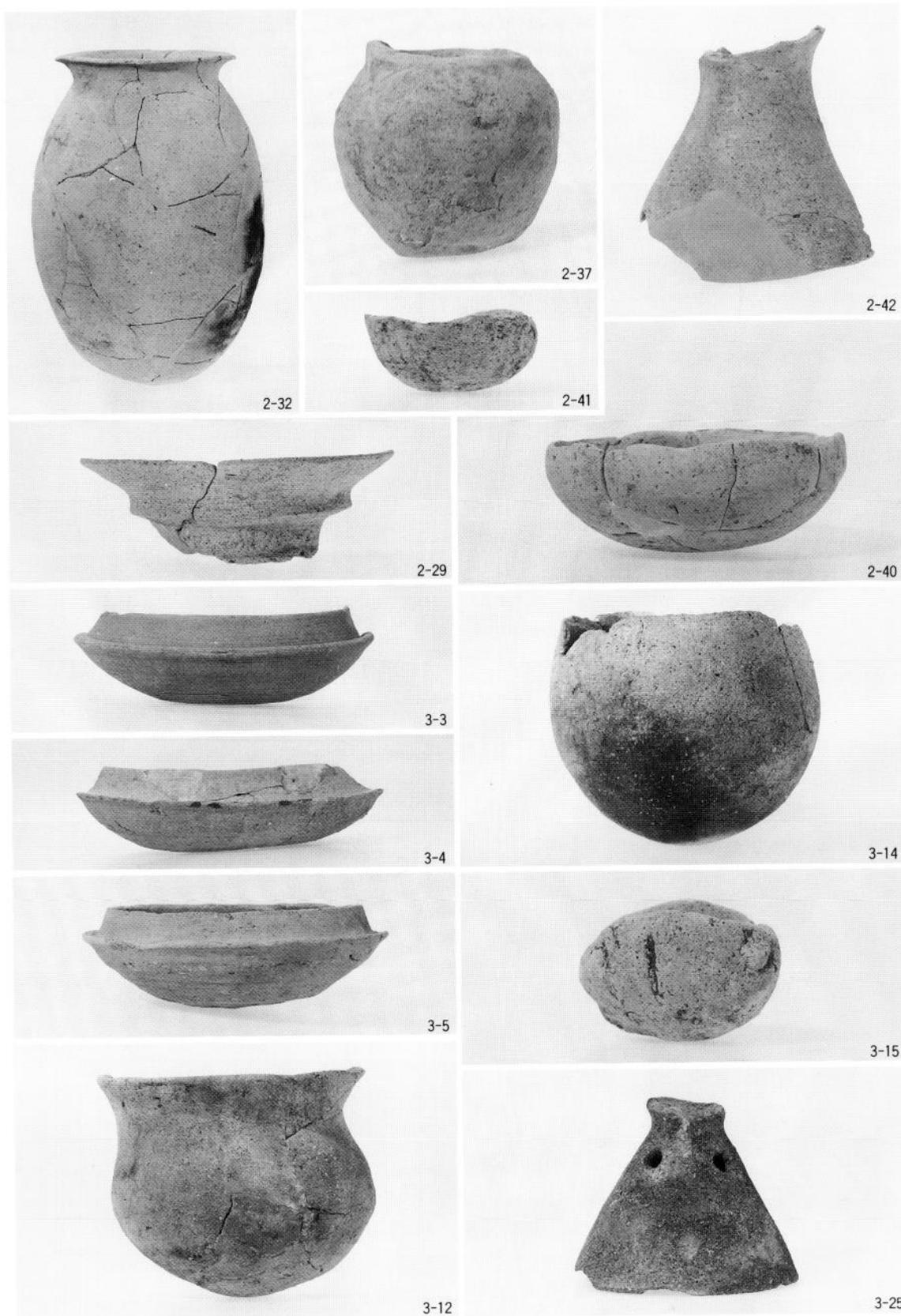
2

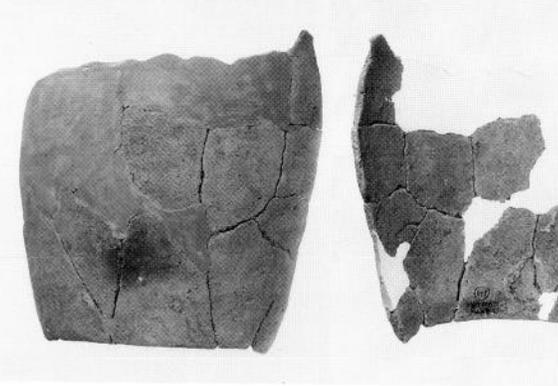
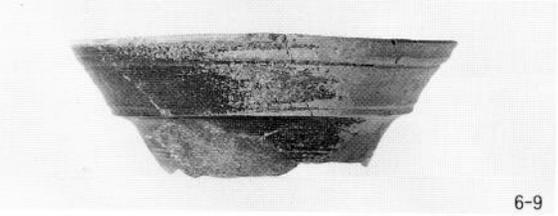
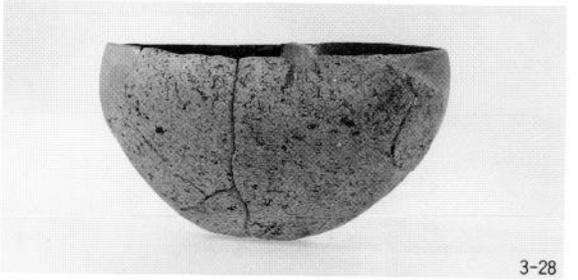
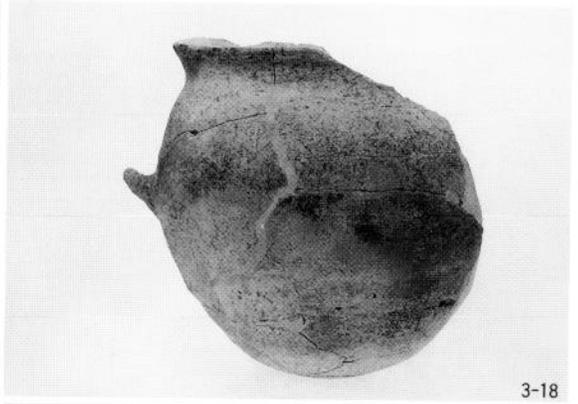
1 VI区全景と5～9号溝（南から） 2 3・13・17号溝（上空から）

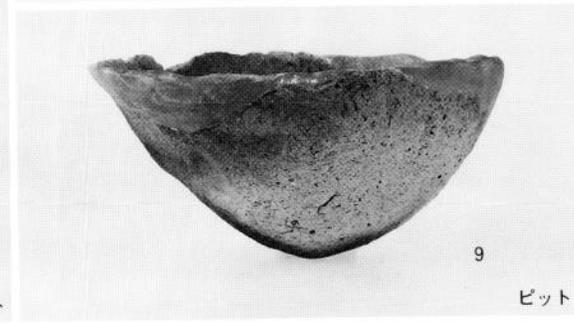
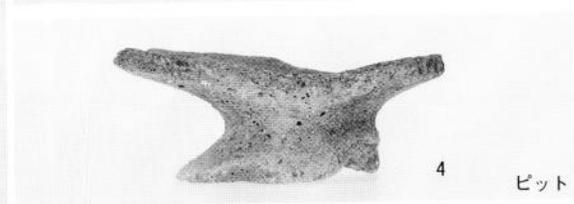
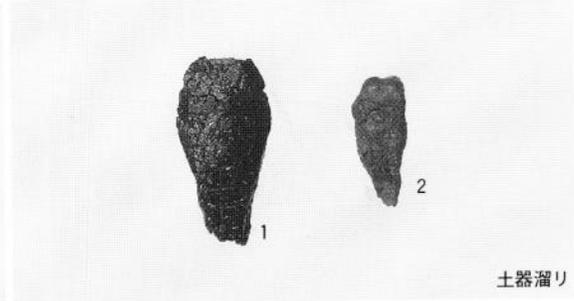
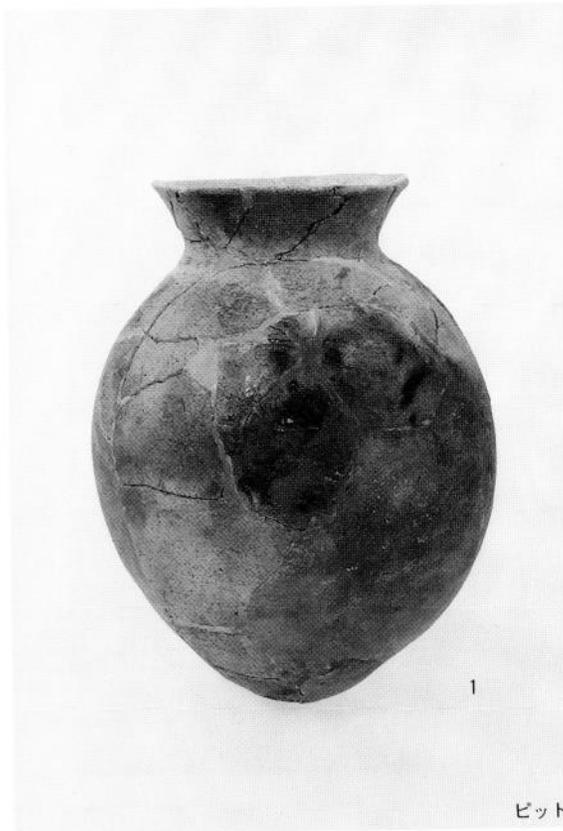
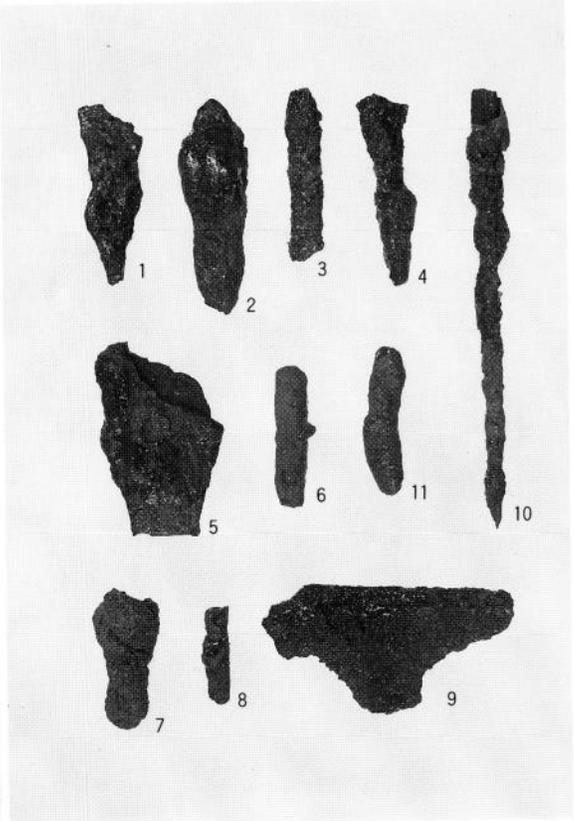
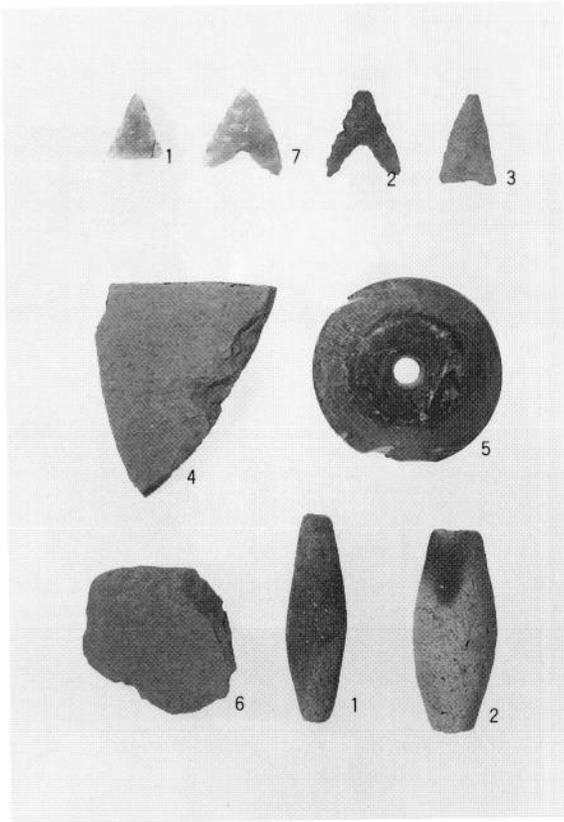


1 5号溝 (北西から) 2 6号溝 (西から) 3 10号溝 (北から)









1 溝出土石器・鉄製品・土製品、土器溜り出土鉄製品
 2 ピット出土土器



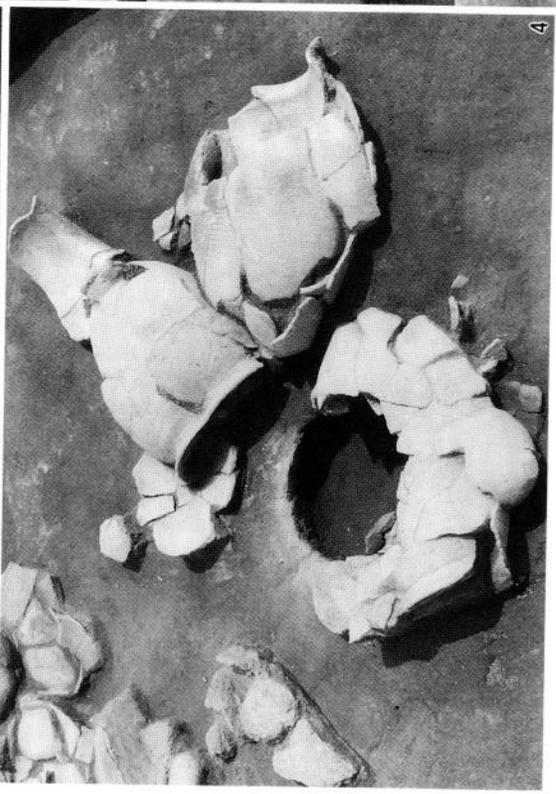
2



3

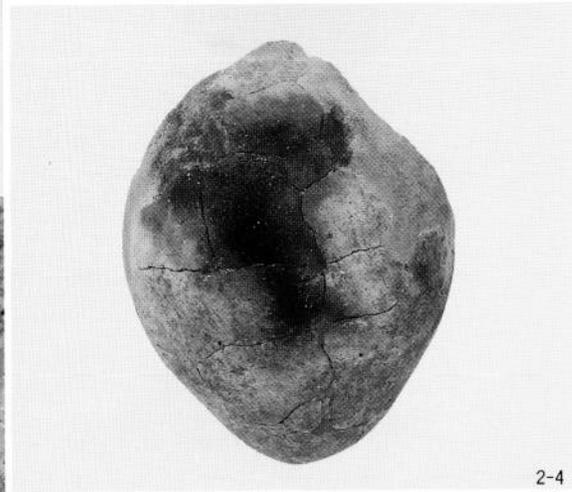
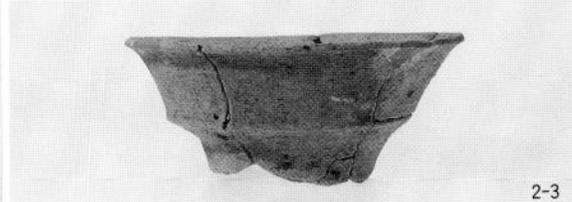
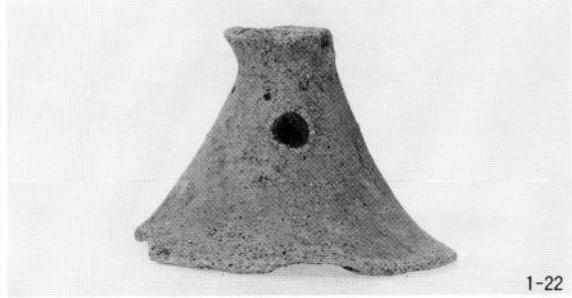


1



4

1 1号土器碎片 2 2号土器碎片
3 3号土器碎片 4 3号土器碎片遺物出土状況



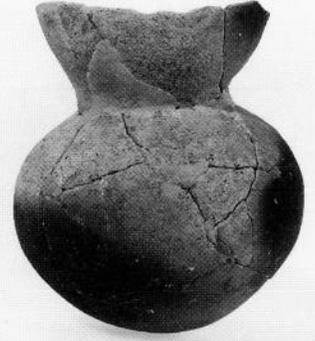
土器溜り出土土器1



2-5



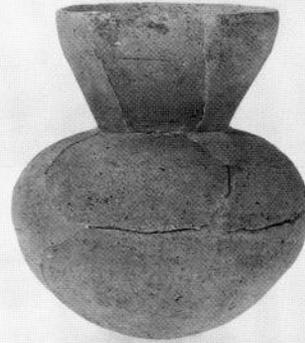
2-17



2-15



2-7



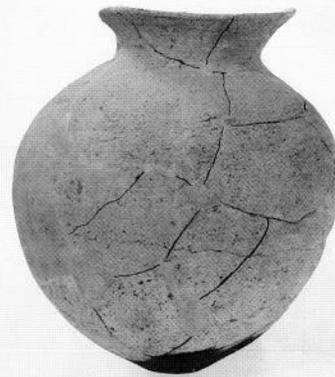
2-16



2-12



2-14



2-8



2-18



2-20



3-1



3-4



3-3



3-5



3-6



3-7



3-10



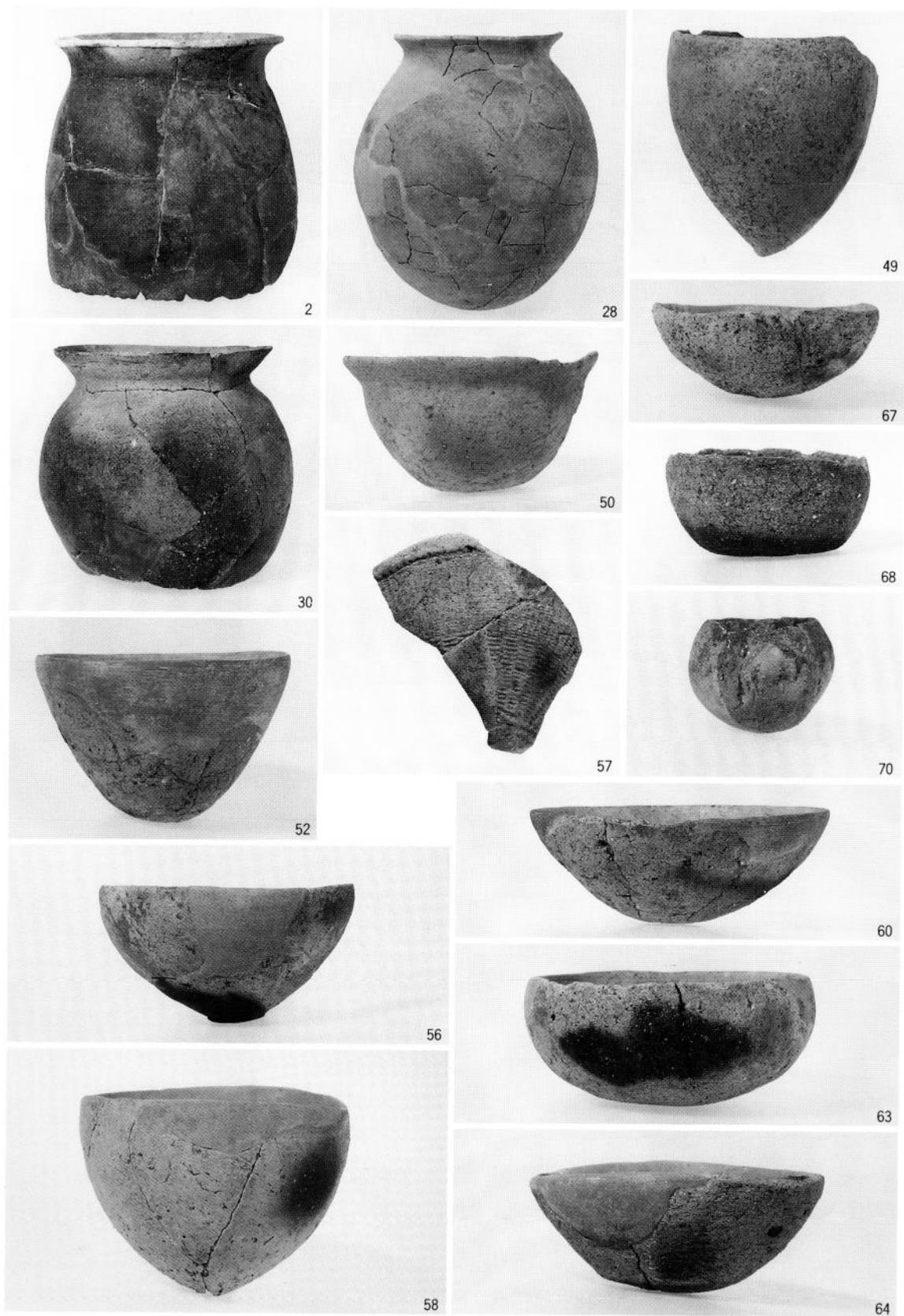
3-11



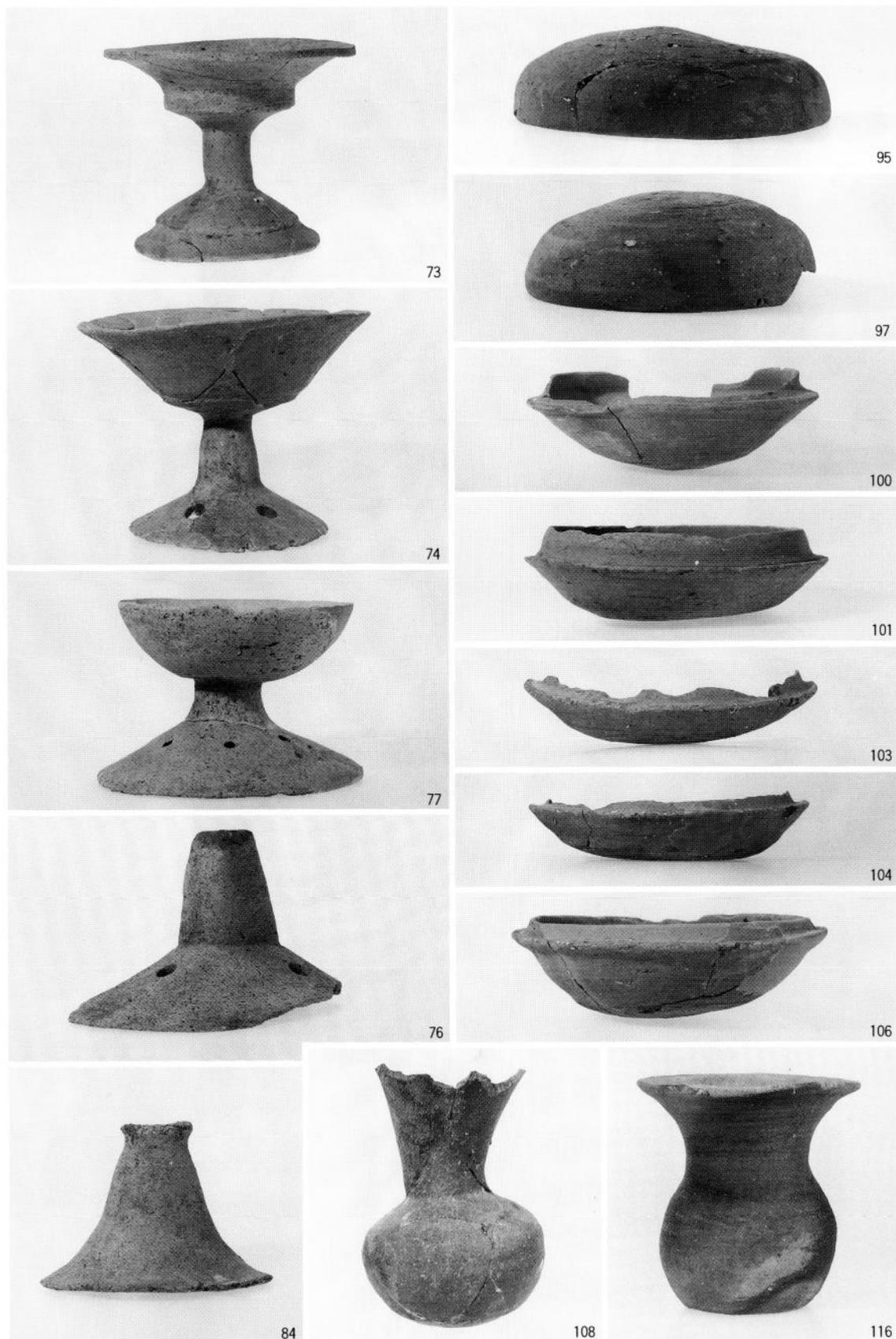
3-12



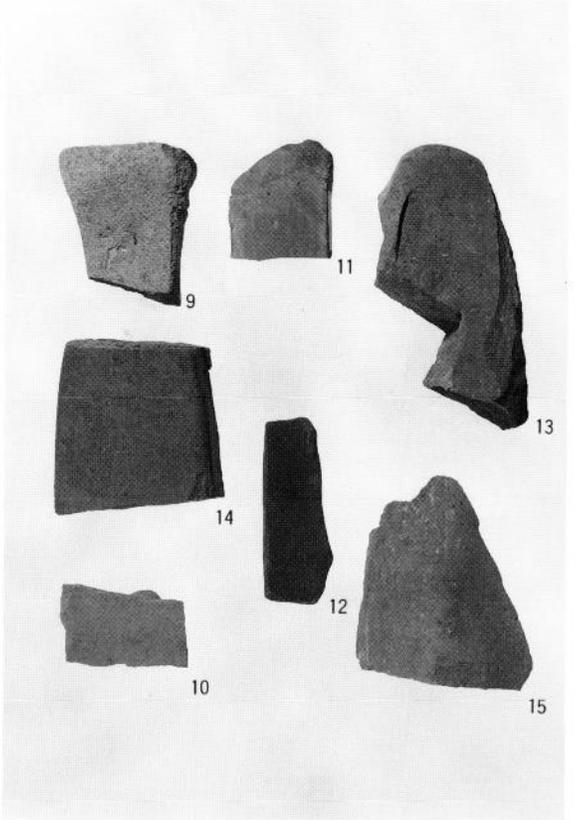
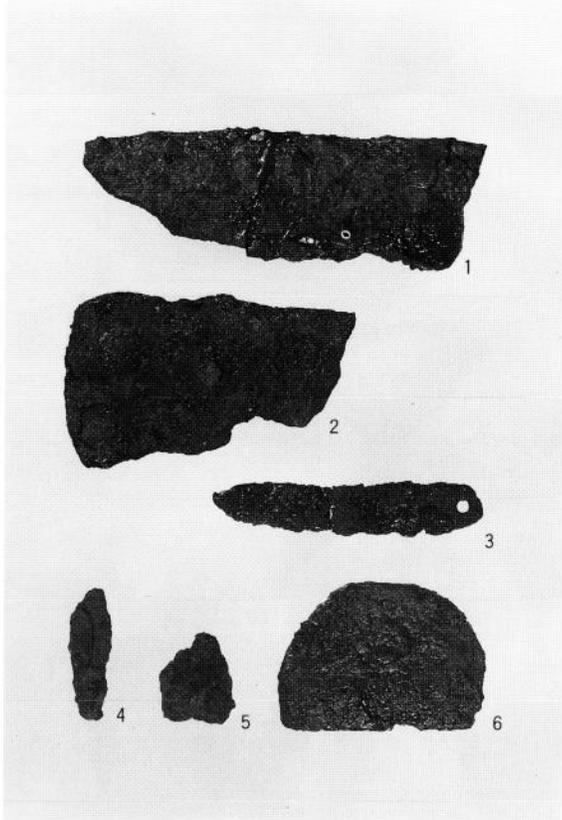
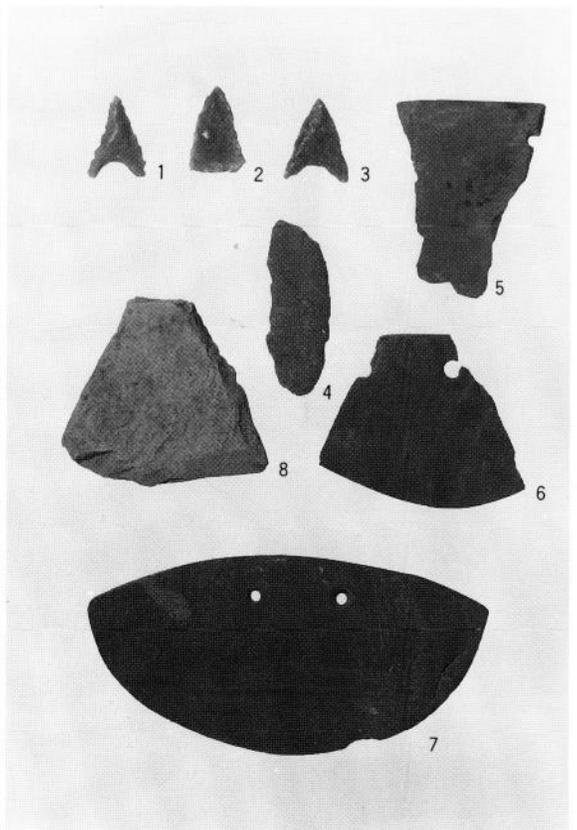
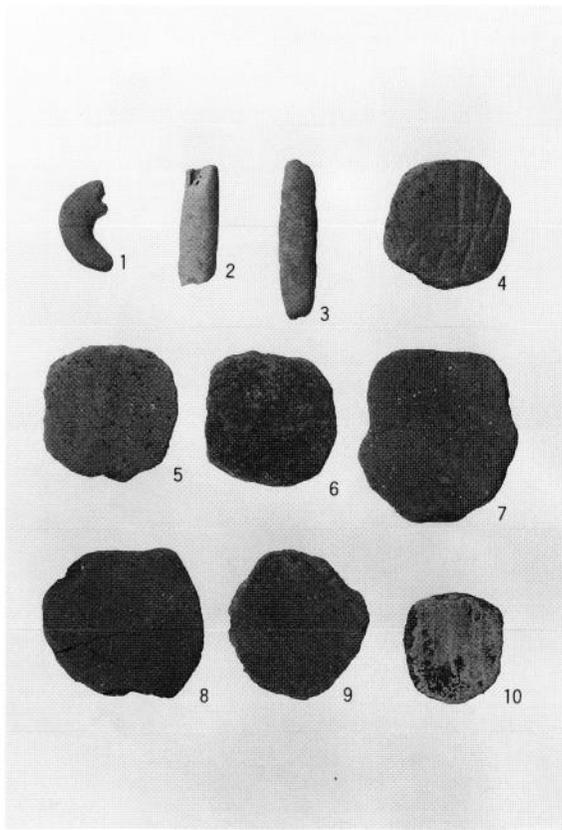
3-13



包含層出土土器 1



包含層出土土器 2



報 告 書 抄 録

フリガナ	カミトウバルイセキ								
書名	上唐原遺跡								
副書名	福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査								
巻次	I								
シリーズ名	一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第2集								
編集者名	小池史哲								
編集機関	福岡県教育委員会								
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7-7								
発行年月日	西暦 1995年3月31日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
			市町村	遺跡番号					
カミトウバル 上唐原	フクオカケンチクジョウケン 福岡県築上郡 タイヘイムラオオアザカミ 大平村大字上 トウバル 唐原 アザツカハタ タフジ 字塚畑・田法寺 コイシハラ シモカワラ 小石原・下川原		406457	960179	33°33' 30"	131°11' 22"	19871201 19880506	12000	豊前バイ パス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項		
上唐原		弥生後期 古墳時代 奈良時代 中世	住居跡(弥~古) 55 掘立柱建物跡 9 土城 22 甕棺墓(弥生) 1 溝 17 土器溜り 3		弥生土器 土師器 須恵器 石器 土製品 鉄製品 玉類				

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 6	登録番号 11

上唐原遺跡 I

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 2 集

1995年（平成7年）3月31日発行

発 行 福岡県教育委員会

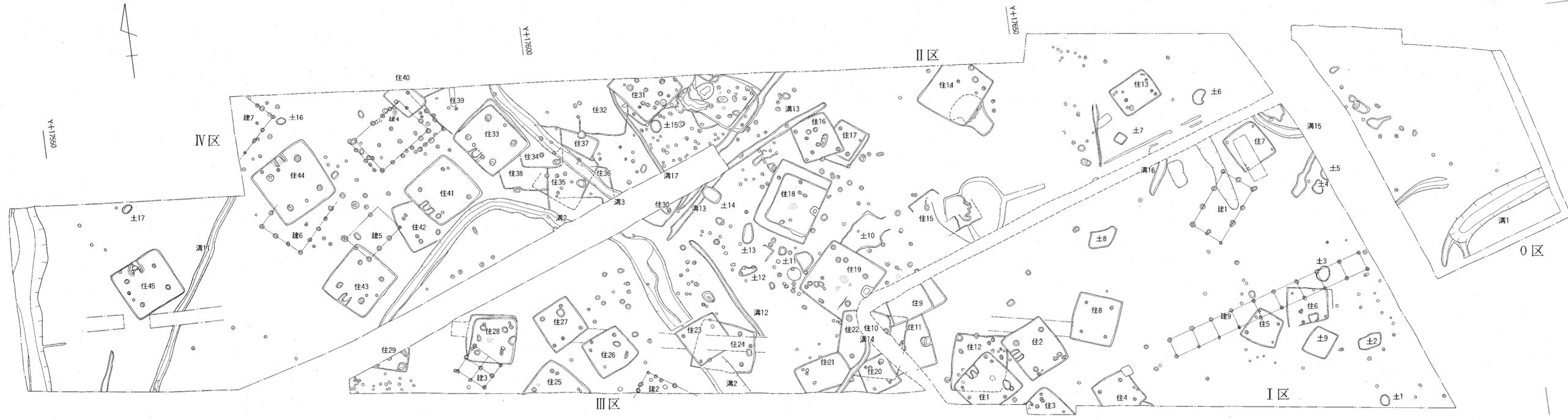
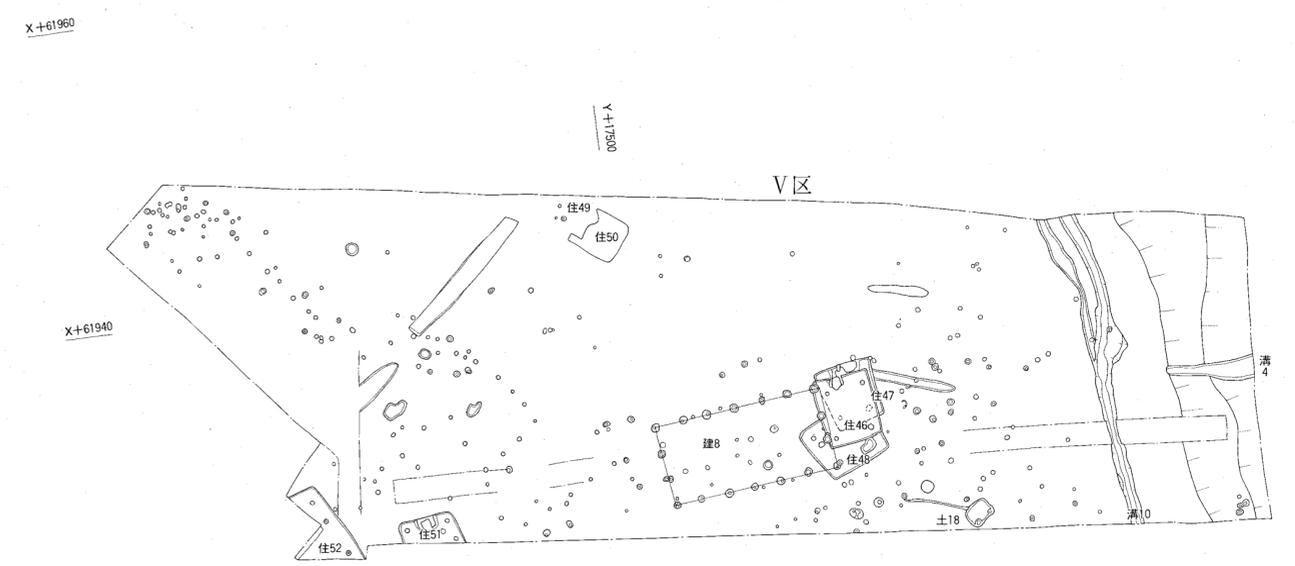
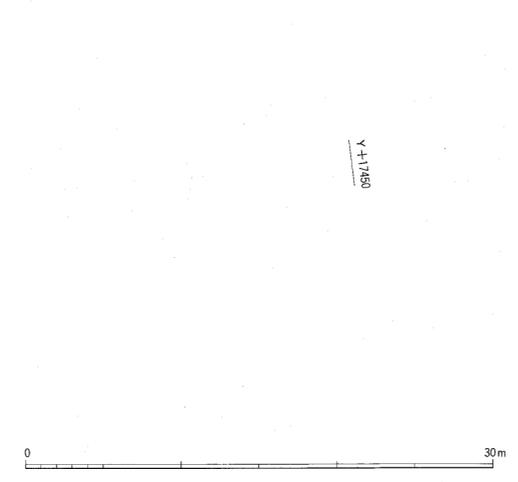
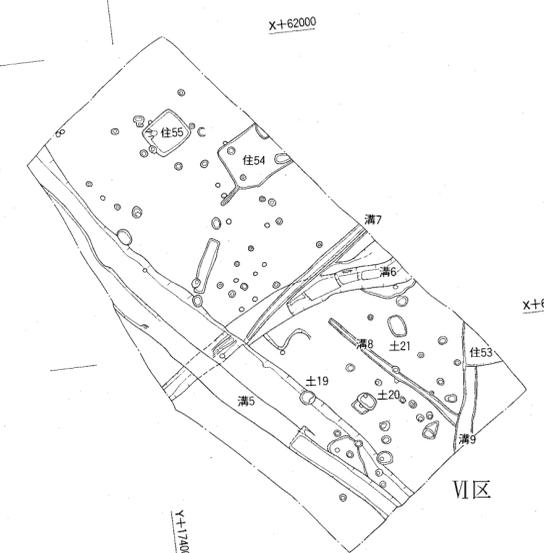
812 福岡市博多区東公園7-7

電話 (092) 651-1111

印 刷 福岡印刷株式会社

812 福岡市博多区東那珂1丁目10-15

電話 (092) 451-0027



付圖 上唐原遺跡遺構配置圖 (1/300)